

相先の碁を大學と言つたが、大學のことでも判り易く通俗に説けば、小供にも判る。

黒七で(い)だと、白七、黒(ろ)、白(は)、黒(に)迄の定石となる。黒(に)迄の定石に、更に(い)と行くことは黒(い)が位低くもあり、又(に)の方へ大して地も増さない。ツマリ黒七で(い)は、白先きに七黒(ろ)、白(は)黒(に)と有る時黒は(い)と行つたことになる、黒(に)と行くより、其れに物等優る所は他に多い、といふ事に當る。

是れは定石に關して、布石の初歩である。

白八は黒七があるから、黒に(い)と來られることが面白くないからである。

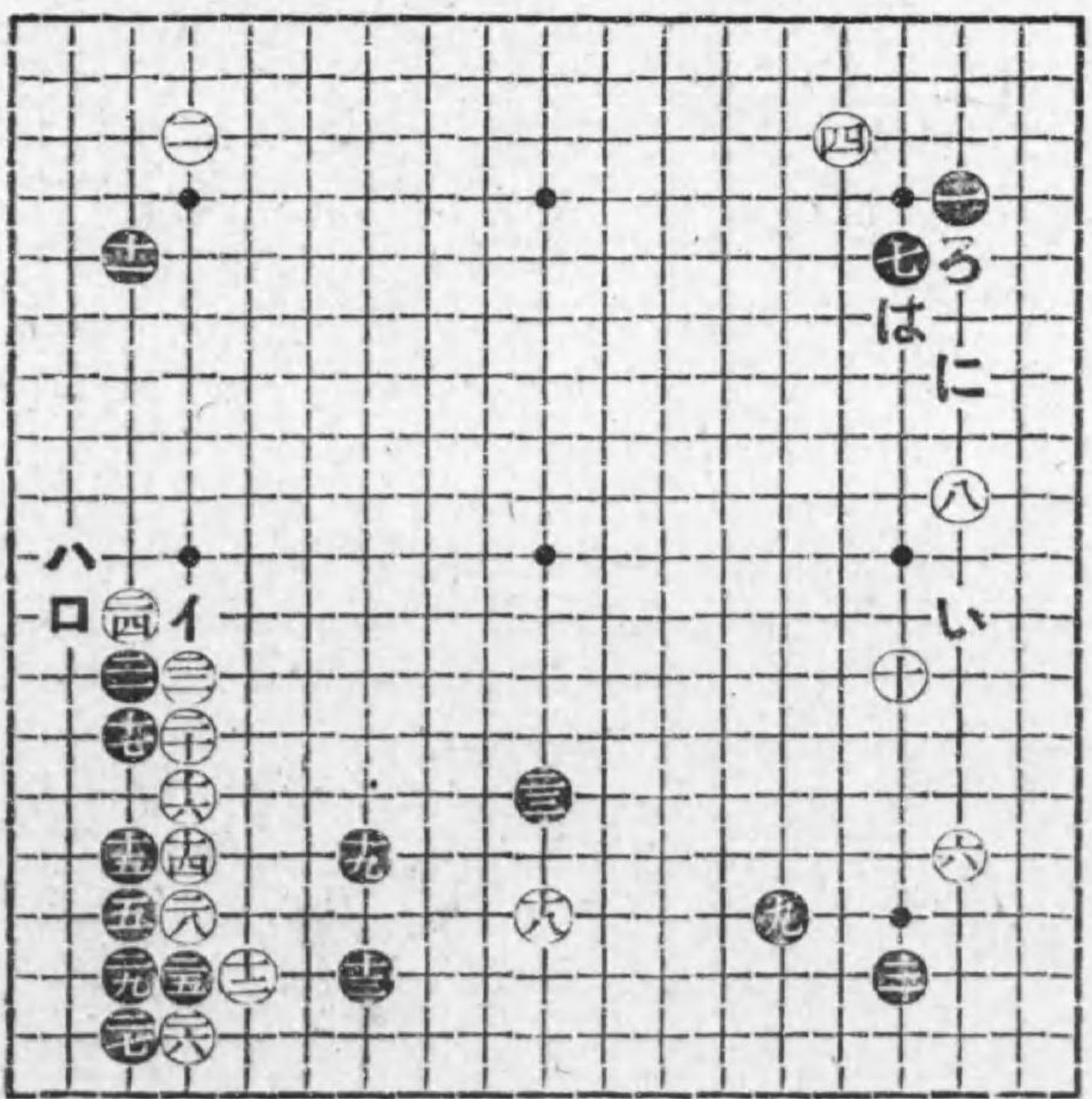
白十は異に(い)と打込まれる備へで、定石である。

黒二十三を此際(イ)の定石は悪い。

黒二十五で(ロ)だと、白に(ハ)と來られて悪い。

黒(ロ)は悪手の標本である。

ツソレタヨカヲナルメリチトヘホニハロイ



黒前譜二十三で本譜一だと、白十二となつて、八、九の交換は白の爲に好く、又十二は「ワの十五」以下黒二子の脅威となつてゐる。尙ほ黒三は征に取られる事が残つてゐる。等々で黒へは、白を調子づけて悪いといふのである。

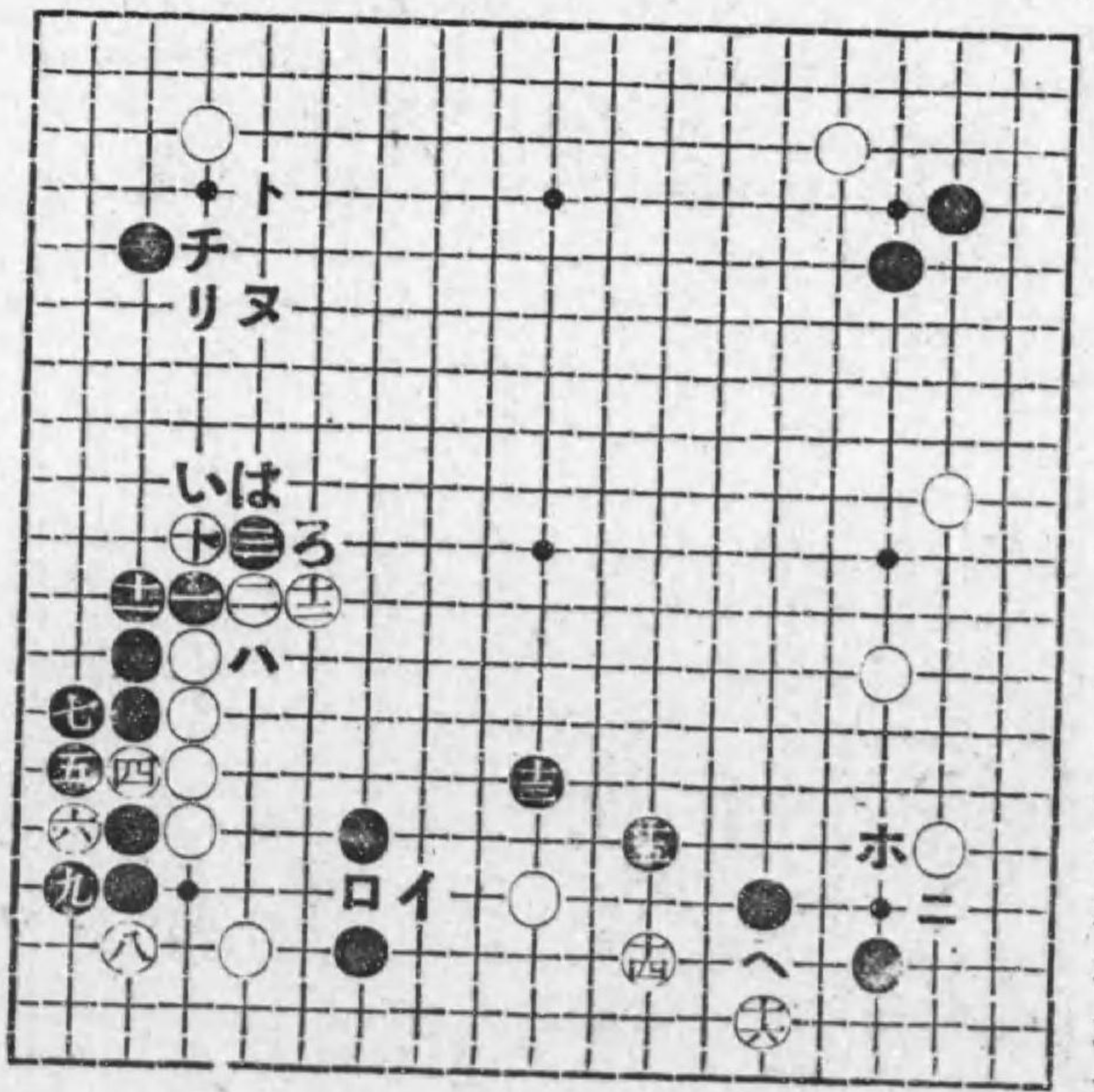
白十二となつては、黒は十三と行く外ない。十三で(い)などは殊に悪い、即ち白(ろ)、黒(は)、續いて白(イ)、黒(ロ)、白「ルの十四」となつて――

白十二となるより黒九で十二、白九、黒(ハ)と白二子を取りの方が、黒は良いであらう。

すると斯様な形勢にもなつて、白は順調になる、即ち以下のこと。黒(ハ)となつて、白(イ)、黒(ロ)、白十四黒(ニ)、白(ホ)、黒(ヘ)、白は轉じて(ト)。

白(ト)は素人の考へだ。道碩先生の碁を見給へ白(ト)で白(チ)、黒(リ)、白(ヌ)とヤツテゐるから。其碁は(ハ)と抜いた本譜と似てゐる。

ツソレタヨカヲナルメリチトヘホニハロイ



本譜も前々譜白十四を本譜一からの變化である。

白一、三の定石に出ると黒八迄となる。黒八は「リの十七」が定石であるが、黒「への十六」と在る關係上、黒は斯う八の方が、堂々の構へで見榮えがある。

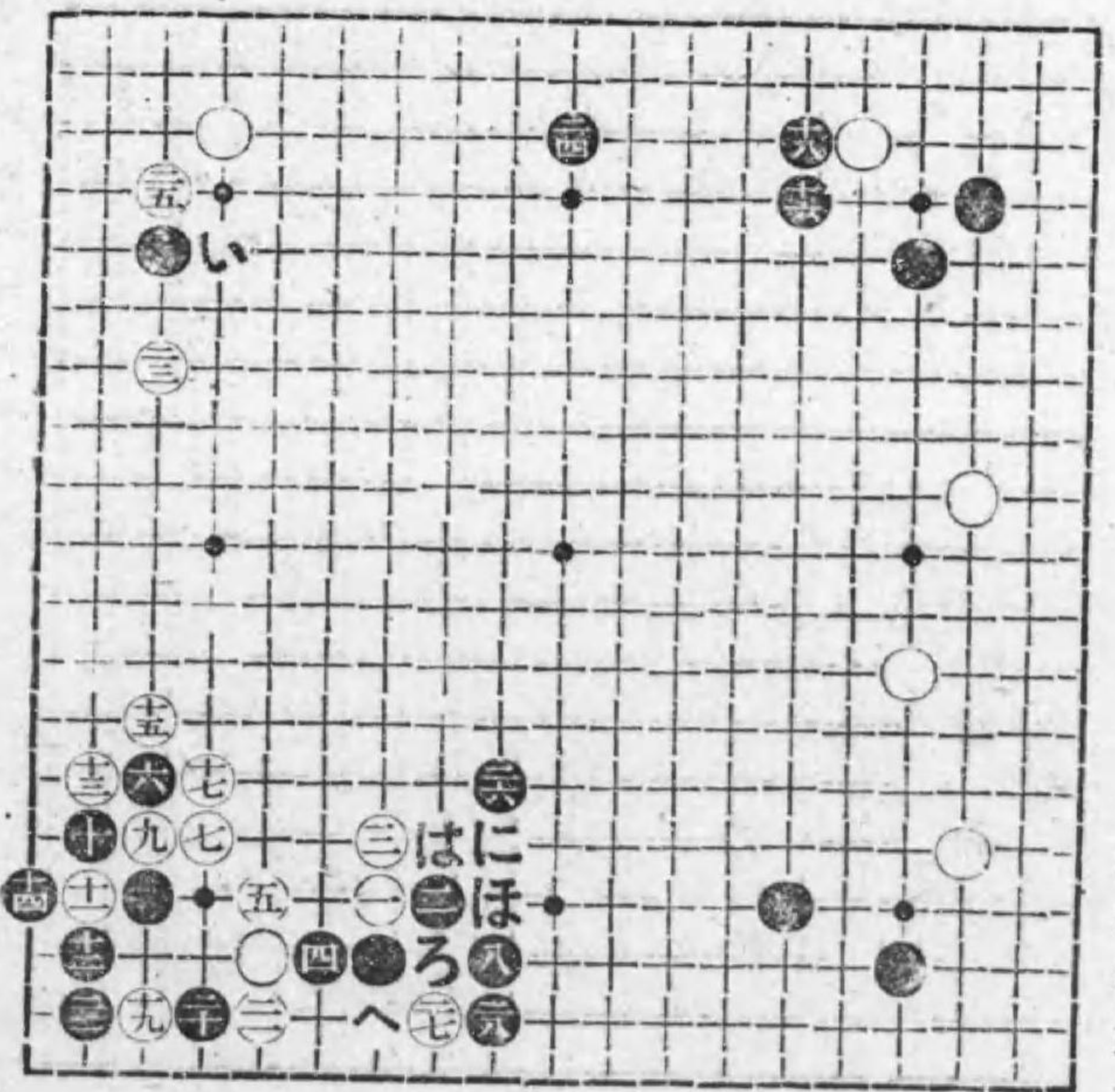
黒十六、十八と征の當りを利かした、斯様な場合は十六で十九に備へが定石である。即ち白十九黒、二十一の黒に損を避けて。

黒二十四は尙ほ餘勢ある白「ホの三」の、動きを制したものである。

黒二十六で「い」と出ること、悪くはないが、白の調子に乗るものである。二十六は好點である。

黒二十八を「ろ」だと、白に「リの十七」と打込みを聞える。白「は」、黒「に」、白「ろ」、黒「ほ」、白「へ」は黒は四以下二子を捨て、悔む否、歓迎である。

イロハニホヘトチリヌエヲカヨレ



一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

前譜白十一本譜白三と切つた、以下變化である。

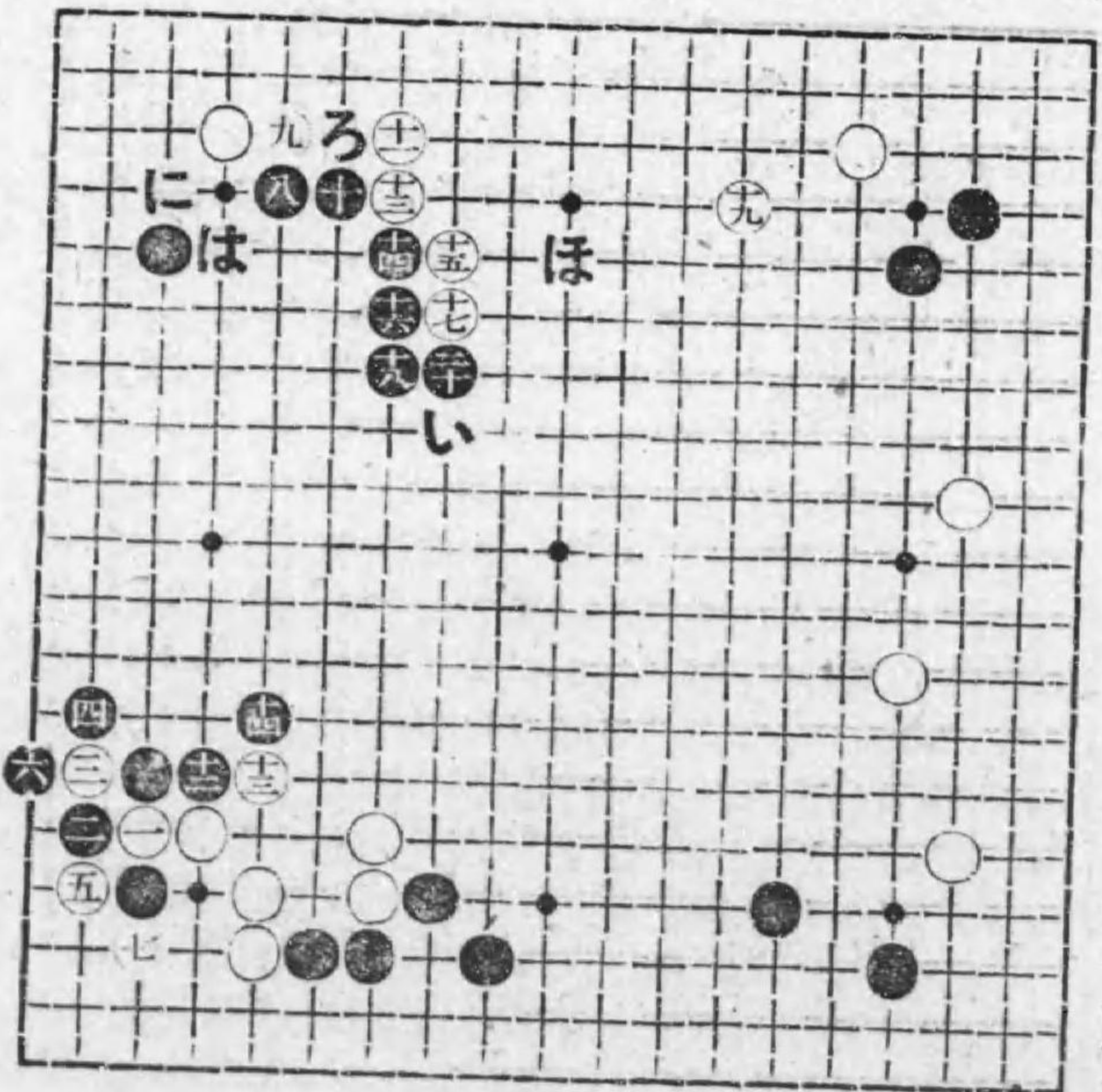
白一から七迄は定石となつてゐる。此の定石について解説をする。

「カの十七」に在る黒を入れ右黒四子白二子を取除け最一ツ「ヨの十七」に在る白一子を除けると、白「ヨの十六」の高目に黒「レの十六」と入つて、白七迄、黒六迄となつた定石とならう。

其の定石へ黒「ワの十七」と行つたら、白は其れに構はないのが好いのである、のに取除けた白三子黒四子の應接と、なつたに當り、では定石の意義とならない白の大悪。といふことをも知つて欲しい。

黒二十は絶好な點、白十九で二十なら、黒は鋭意「い」と捲つて戦つて良い。黒二十となつて白「ろ」なら、黒は白の「は」を防いで「た」が良い。そして見られよ尙ほ黒は「ほ」と打込む筋がある。

イロハニホヘトチリヌエヲカヨレ



一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

黒九に對しては白十と受けるのが、定石である。
 黒十九だと、二十五迄となることを覺悟しなくてはならない。是れが嫌なら十九は(イ)。

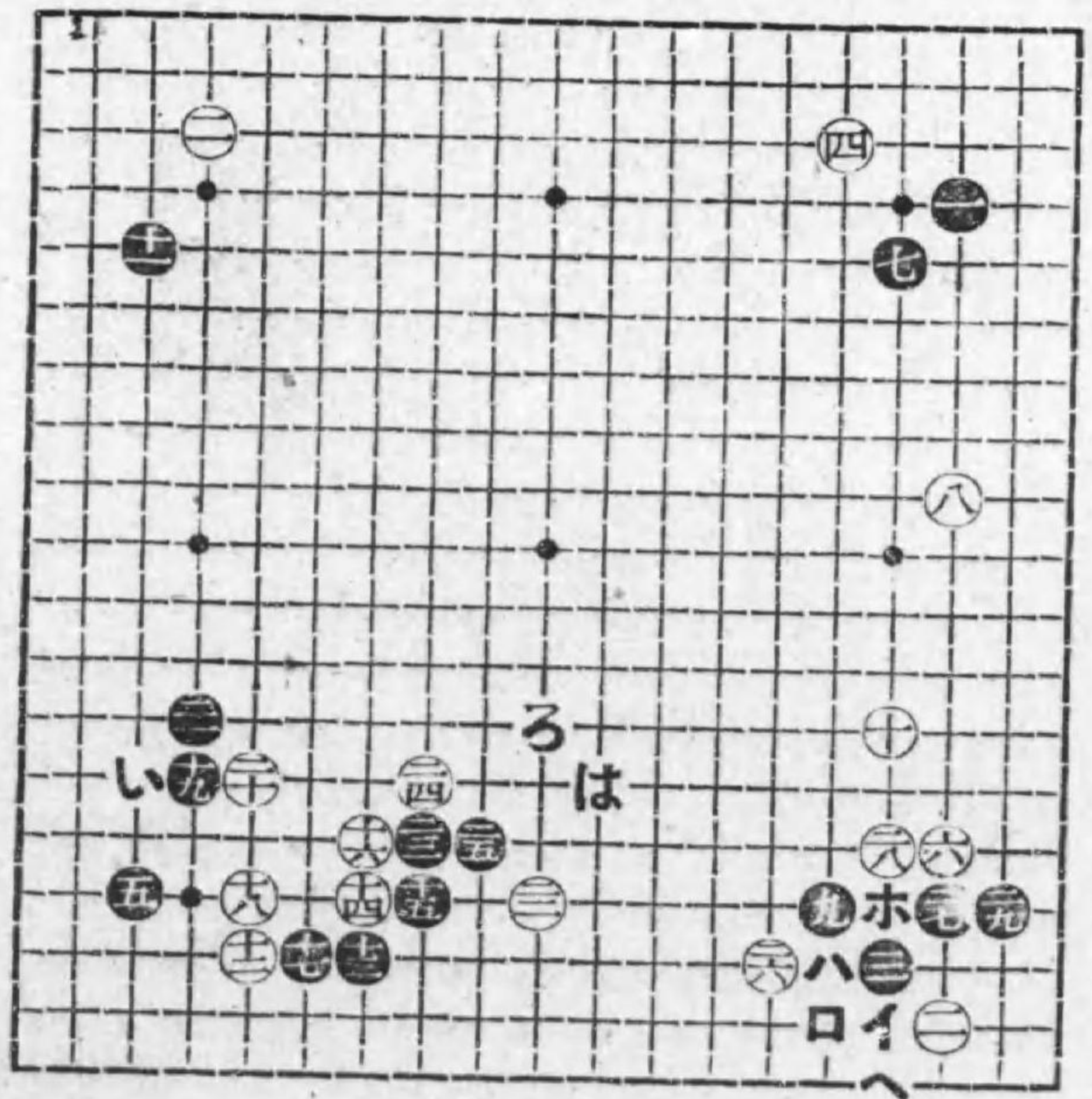
黒二十五となつたのを悪いといふのではない。二十五迄も定石である。

黒二十七で「への十六」、白「トの十七」は、二十二と二十六の白を調えさして悪い。

黒二十七、二十九と治まつたのは、二十五の方が治まらないから、白に「ロの十七」と來られる事を防いで、白が(ろ)又は(は)の何れからでも攻め來たら、其一方を専心凌げば良いといふ意である。

白(イ)、黒(ロ)、白(ハ)、黒(ニ)、白(ホ)、黒(ヘ)と白切つても、黒から「トの十七」があつて面白くない。黒は九を捨て、良いのである。

ツソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



白十四黒十五となつた定石は、白は十六と打込む爲めである。十六を(い)だと、黒に(ろ)と圍はれ、是れは布石に於て、白が悪い。即ち白十四で黒に十五と、地を取らしたのは、何んの爲めかと云ふことになる。

黒十七は白に其處へ來られるから。

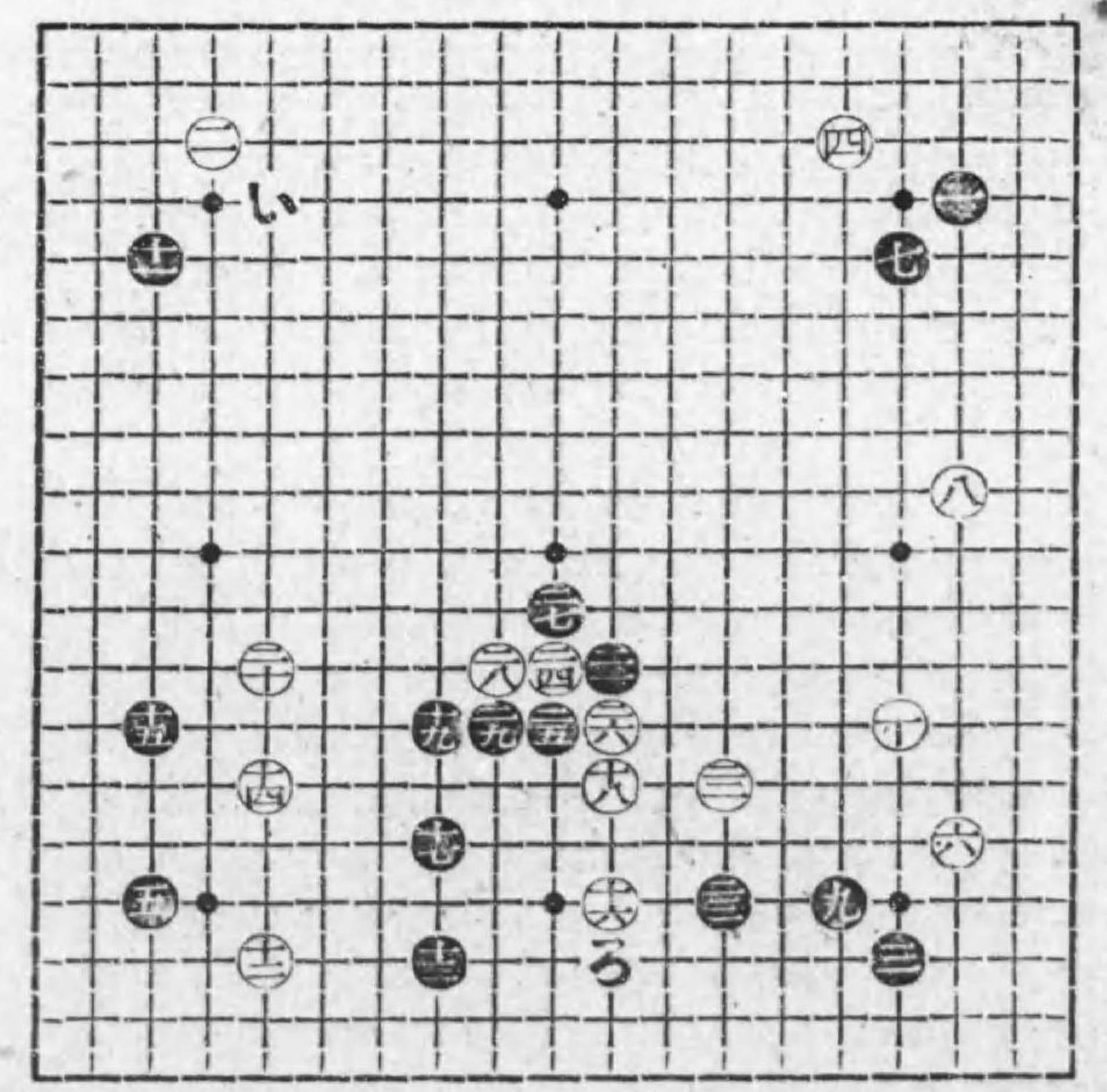
白十八は黒に其處へ來られるから。

黒十九は白に其處へ來られるから。
 白二十は黒に其處へ來られるではないが、黒十九との釣合からである。

白が二十と備へた事。黒が二十一白と十八に冠した、好手を得た事より推して、黒十九は左右へ響く良手である事が判らう。

黒二十七、二十九の好調子は定石である。二十七を二十八の如きは、黒最も劣手である。

ツソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



前譜黒十九は本譜二十へ飛んだ、斯う十九で白に二十と冠さして、黒はどんな形勢を招来するかといふのが、本譜の興味である。

黒は二十一と落付いてゐるのが好い。二十一で(ハ)だの(ろ)だのと、外へのみ専ら出を求めろのは、白二十が待つてゐる所で、得たりと白に様々の手段をせられる。黒二十一の態度には、白は一寸拍子抜けの態。

白二十二、二十四で黒二十一の方を脅かしたが、黒はハイハイと二十三、二十五と受け驚かない。最一ツ白二十六で脅したが、ハイと受けられ、白は弱つた。白は仕方かな から己己の爲め、二十八と治まつた。

黒二十九は二十一以下の爲めになる。黒三十一も少しく二十一以下を助けてゐると、左側への地取り。

非にも度胸が必要だ、危ない石が有つても知らん顔でゐると、相手が取損じて其爲め勝つ例が多い。

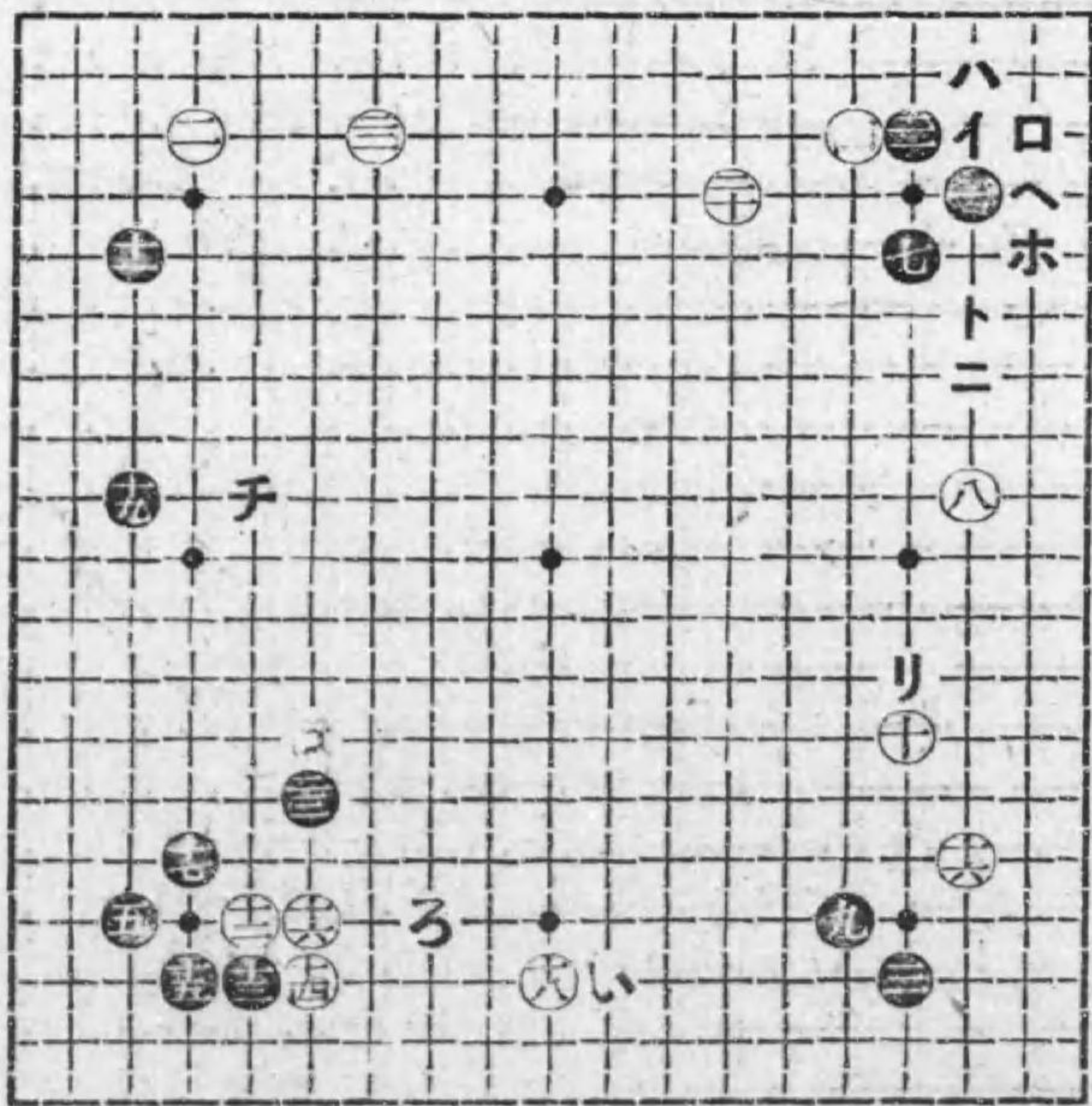
白十八を一路廣く(い)なら、黒は直に二十三が十七となつた定石、十八となつた定石の關係上宜いのである。

白十八を(い)、黒二十三は黒は(ろ)の打込みを含む。白(い)に黒十九だと、白は二十三又は(は)と進んで其の一手で中央に足場が出来る。

白二十で二十三又は(は)は十八が狭い。即ち其れと釣合はぬといふ事。二十は(イ)、黒(ロ)、白(ハ)を次ぎに含む。白(ハ)に、黒(ニ)、白(ホ)、黒(ヘ)、白(ト)、となつては黒の大悪。で黒は二十一。

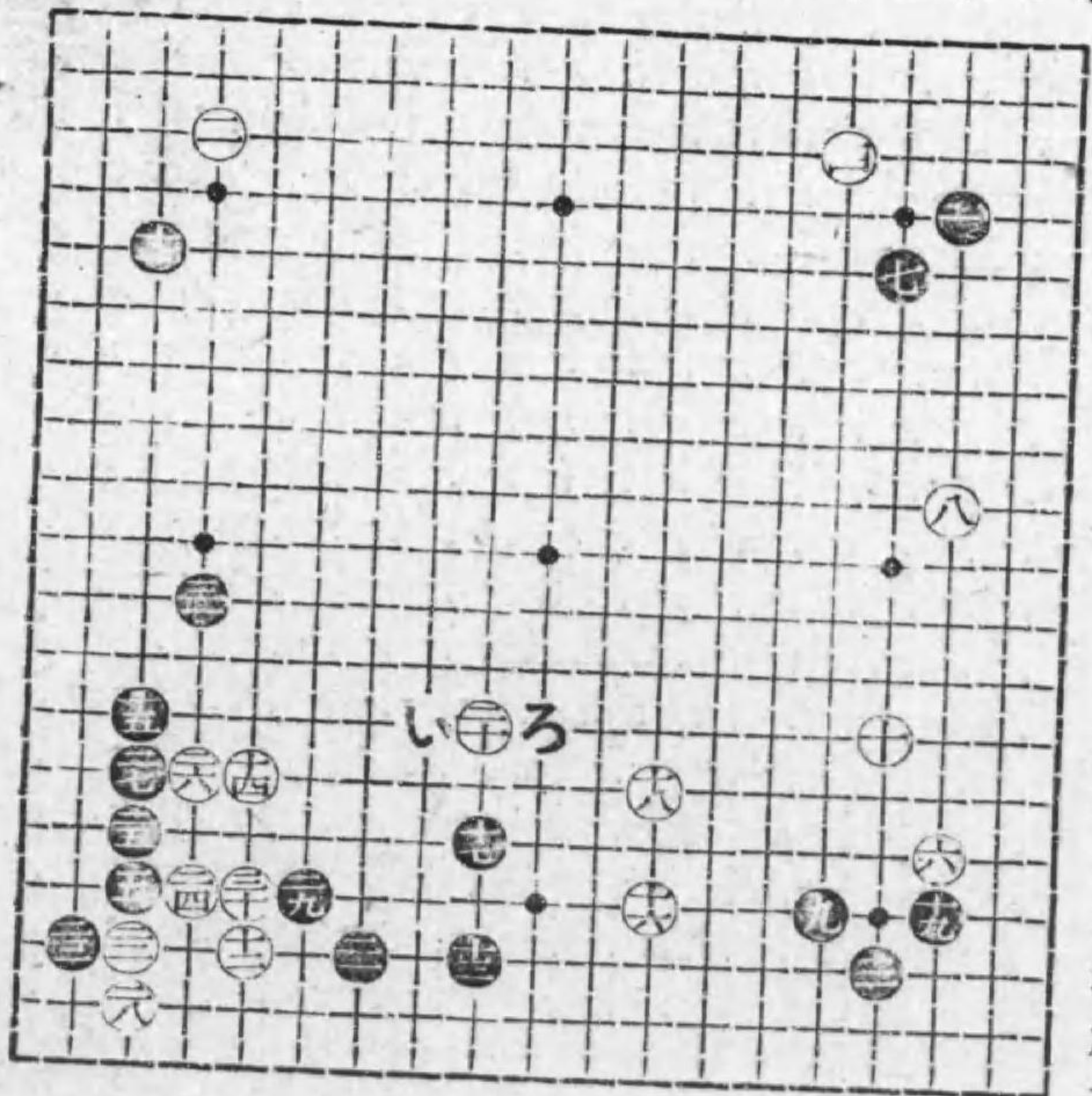
白二十三は「レの七」へ打込みをさむ。其れを防いだのが黒二十三である。黒二十三の時白「レの七」なら、黒は(チ)。黒(チ)は先づ二十三と共に好い構へであつて十一の黒を援けてゐる。其時白「タの六」なら、黒「レの三」白「レの二」、黒「タの四」、白「ヨの三」をして黒「ソの二」「白「ソの三」、黒「ソの四」と黒は強く劫争。黒劫立ては(ウ)が良い。

ウ ソ レ タ ヨ カ ワ ナ ル ヌ リ チ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ



一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

ウ ソ レ タ ヨ カ ワ ナ ル ヌ リ チ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ



一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九

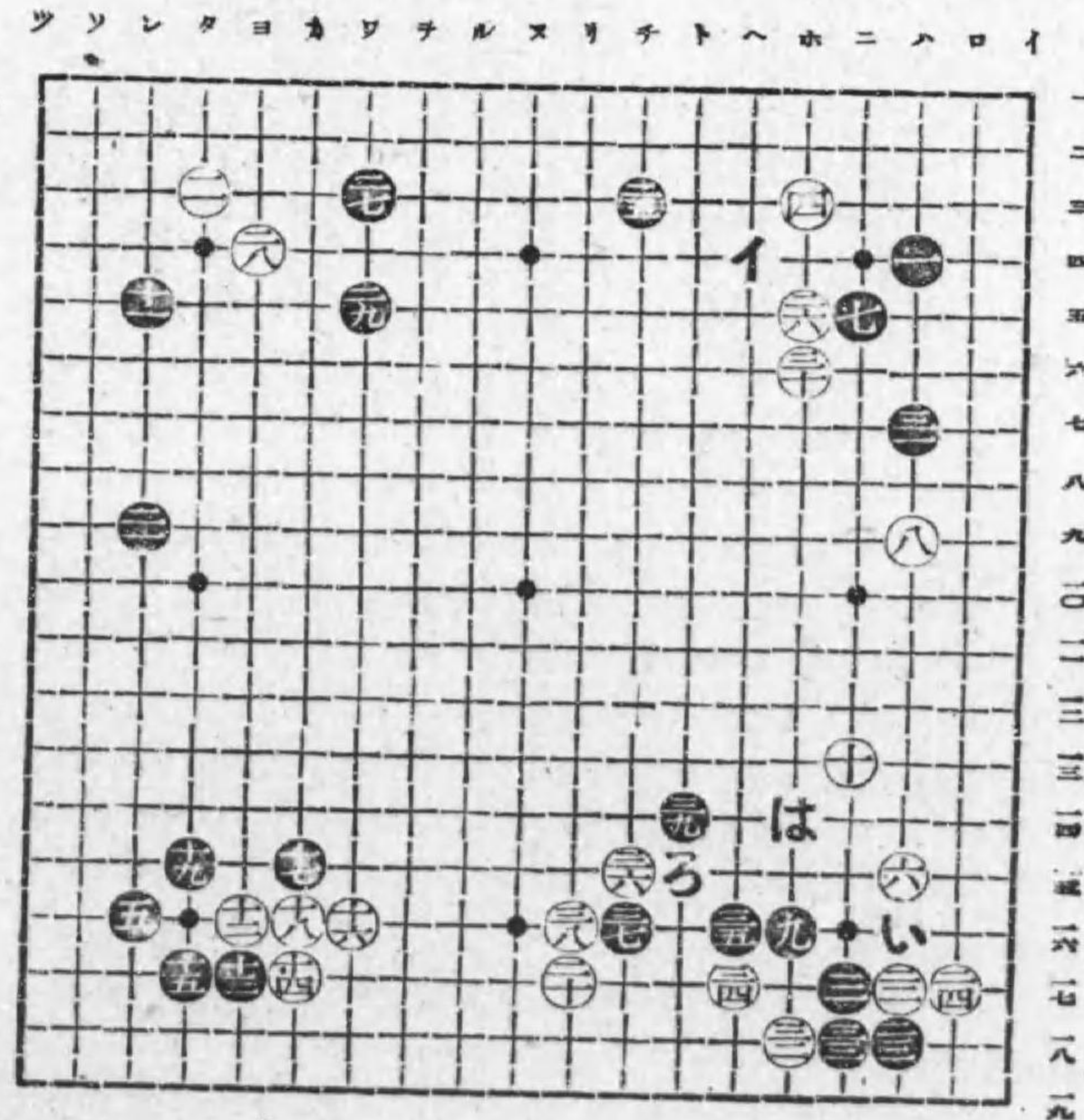
前譜白十八の定石では黒九の方へ、響かないと、本譜二十迄の定石なら、黒二十一で(イ)でも好いが、扱て其處だ、黒二十一を(イ)だと、白は二十一と來ることが明瞭である、すると黒は十一の治まり、それが延いて上邊に白はどんな形勢を造るか、など、黒は様々に前途の事を考へなくてはならぬ。

黒二十一は、白が二十二、二十四と來ることを知る。又た手を抜いてヤレと二十五より二十九迄。

白二十六を二十八、黒(イ)は白四が活は遣つても、活きの爲め黒の外部が厚装となり、此の布石は白が悪い。

黒二十一となつて其方で得たことは、更に白三十二と來て、三十六となつた得よりも大きい。

黒二十一で(イ)は定石だが、手抜の後は斯様で良いと二十一の考へにある。
三十九となつて白(ろ)は、黒(は)で好い。



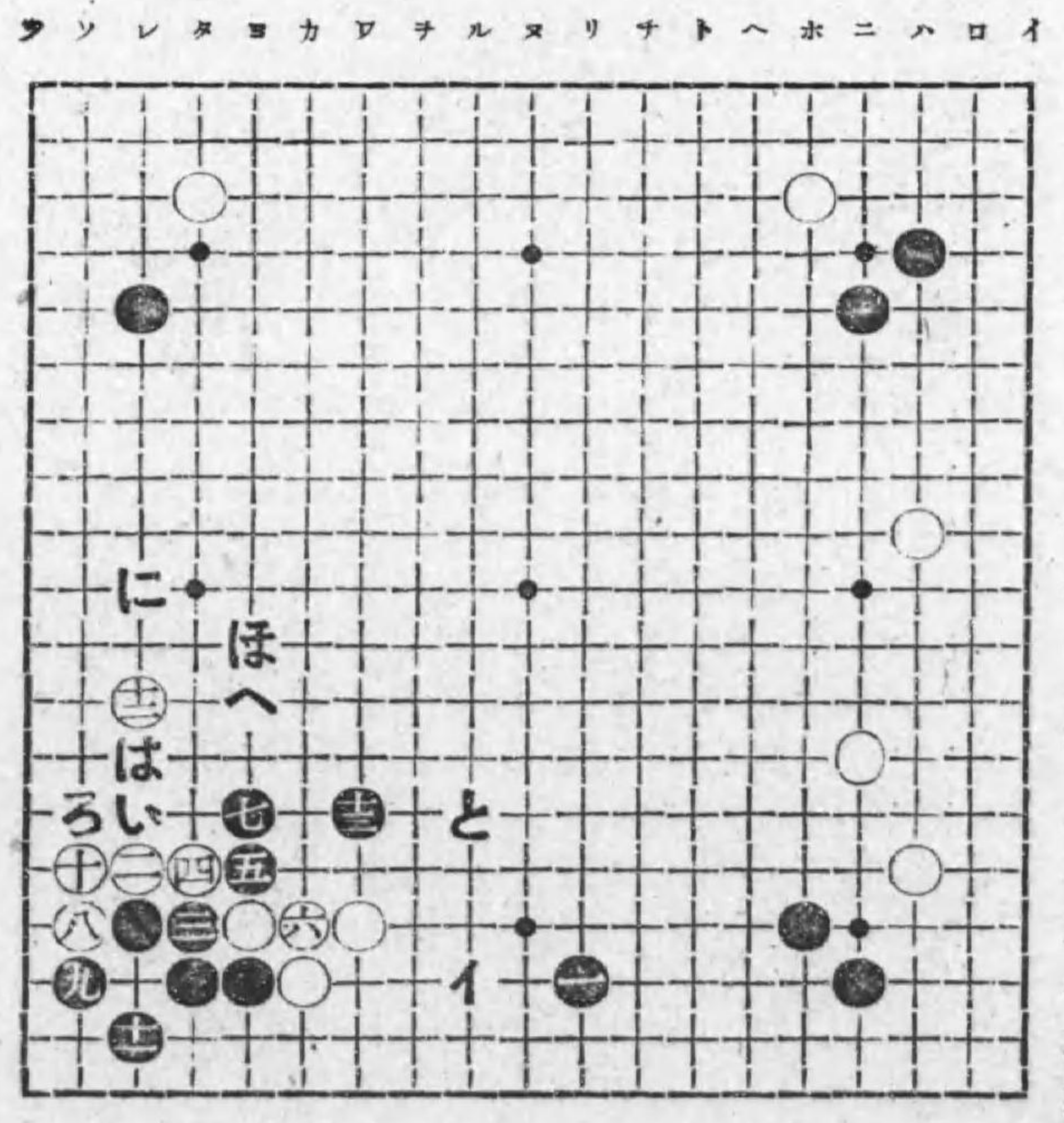
一九四

前譜白二十となる事を、黒は望まなく、本譜一と占める布石も、第一白の裏を行き、第二地の関係も大きい。

黒一なら白二と行くのは定石である。白二に對して黒三を十、白三、黒九、白(イ)、黒(ろ)、白(は)となることも、黒の應手として定石ではあるが、是れは「レの五」に在る黒にも悪影響だし、第一白(は)迄は厚装無比だ。其れは不可と黒は一の時の考へにある。

黒一は十三迄となる事を豫期してゐる。十三で(に)だと白十三で黒が立場は、違つて來る。即ち黒十三は六以下白四子を攻めてる立場にある。黒(に)、白十三だと、五と七の黒二子は白に攻められる立場となる。

黒十三となつて、白(イ)なら、黒は(に)で良い。黒(に)は次ぎに(ほ)だから、白(は)を防ぎ(へ)なら、黒(と)で黒は好い。



九五

黒十三で十九なら前譜の如き定石となる。それを違えてと望むのが十三の目的。

白十四では十七と「レの十七」に行く二途がある。十四と白出れば二十三迄ともなる。二十三迄は黒十三の目的にある。

黒十五で十九だと、白(い)、黒二十、白(ろ)、黒(は)是れは黒が良いから。白(ろ)は二十一、黒二十、白(は)黒(に)、白(ほ)、黒(へ)となる。そして白は釣合上(ち)是れは黒十三が悪くなつて、黒が悪い結果。十五で黒は十九と行く手はない。

黒十九で(り)の切りはある。すると白(ぬ)、黒(る)、白(を)、黒(わ)、白二十一となる。黒は悪くはないが、かなりゴタクをする。

白二十四は十八となつた方、二十二となつた方、の釣合である。黒が(イ)と来れば(ロ)と換つて良い。

白十二の定石は、黒に十六と受けさせ、「チの十七」迄黒九の方へ迫つて、次ぎは(い)をも含む目的にある。其の好都合は御免といふのが、黒の十三。

白十四より十八。黒十五より十九。共に定石である。扱て此の定石となつて、白二十で二十三と打込む事も悪くはない。二十、二十二は黒に二十三迄で、其方に地は興えるが、其の換りは中央で得やうの考へ。

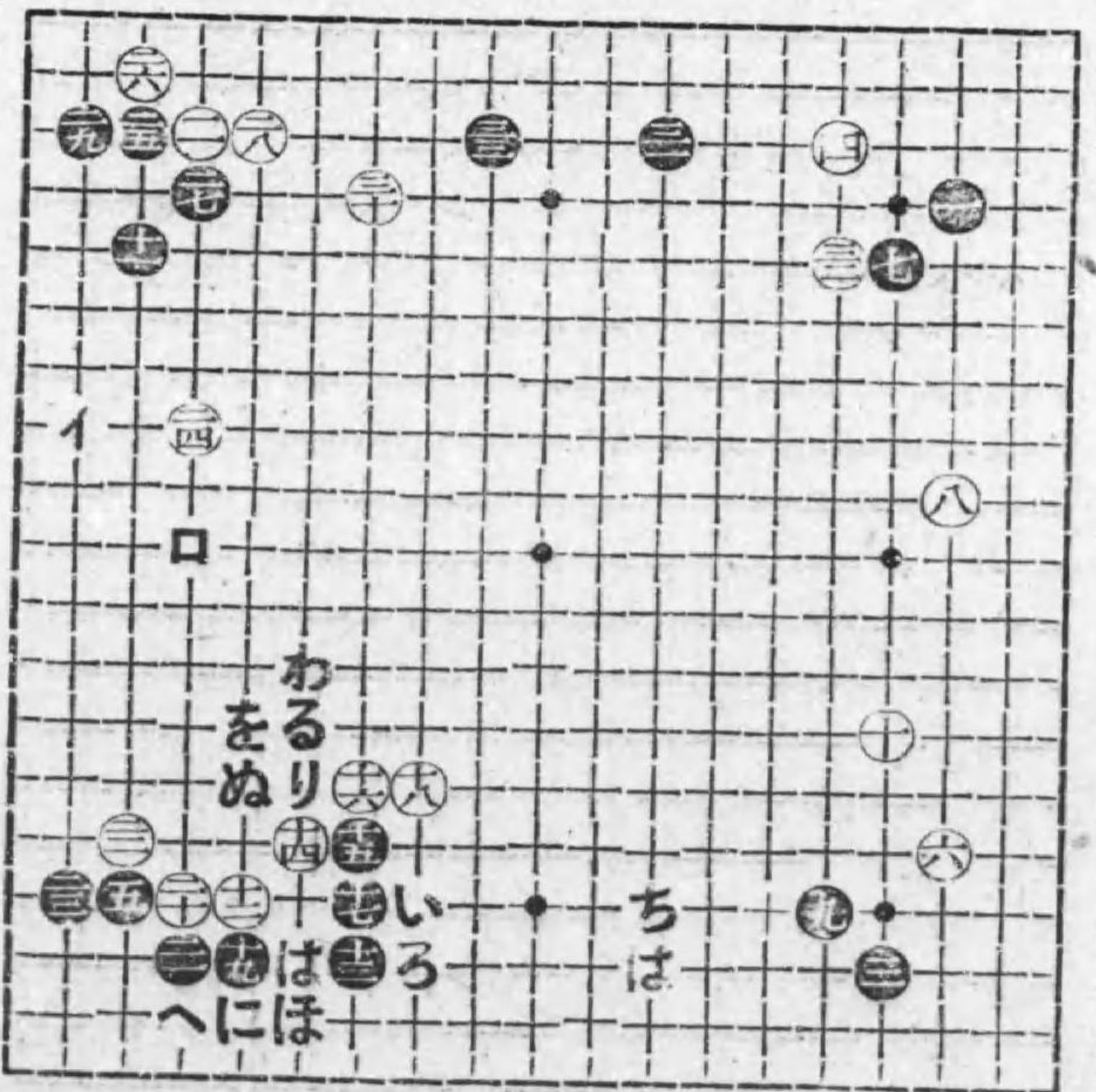
二十で二十三の打込みは、黒に(ろ)の走りがあつて面白くないといふ意は勿論ある。

白二十四で「イロハ」の何れの黒十一の攻めは十九が有つて面白くない「イロハ」の定石は此際白に不適である。

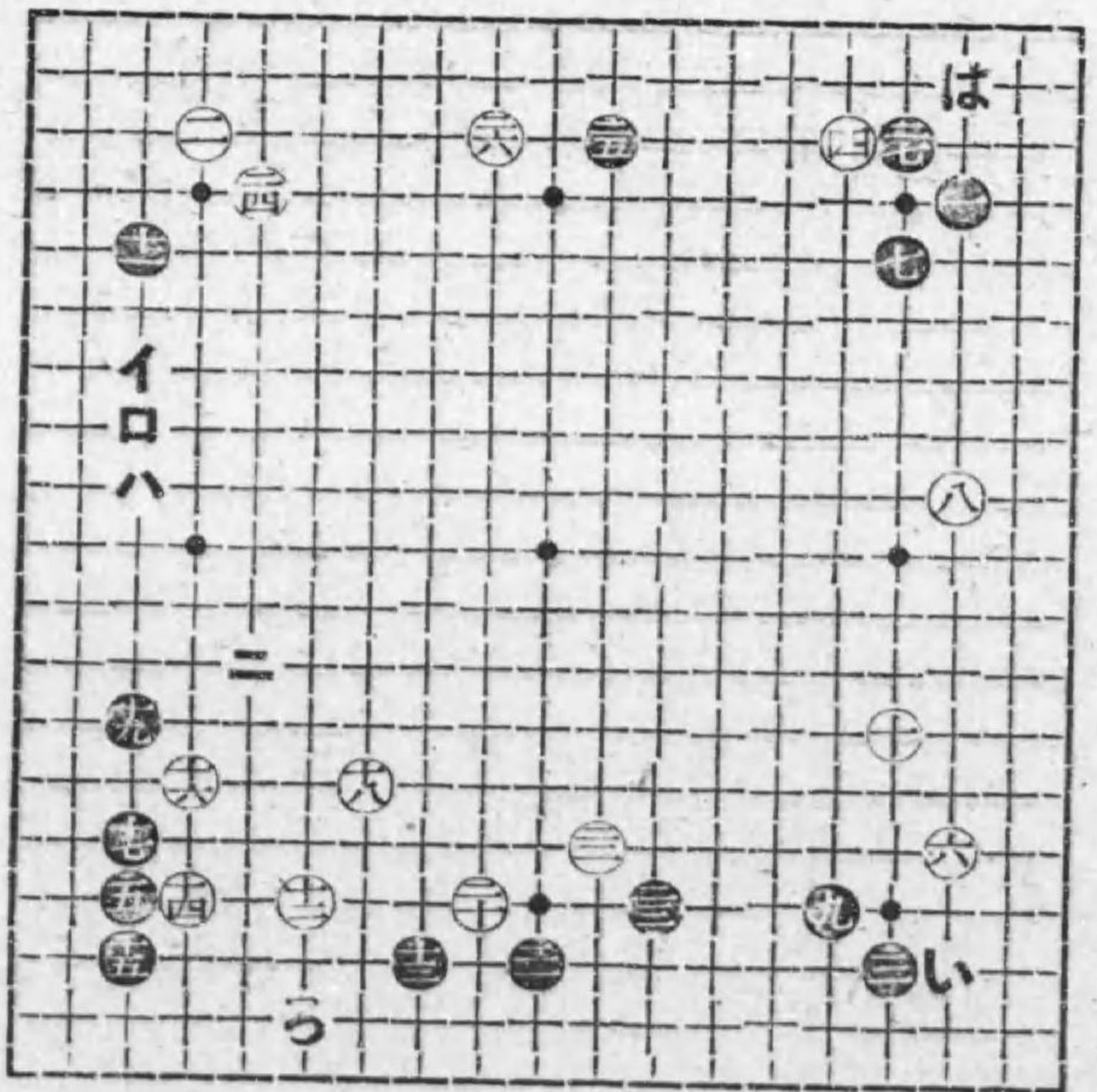
黒二十五で「タの七」だと、白に(ニ)と中央経路に飛ぶられる。

白二十六で(は)な、黒は「アの三」で良い。黒二十七となつては地勢は黒が優る。

ツ ヌ レ タ ヨ カ フ ナ ル ヌ リ ナ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ



ツ ヌ レ タ ヨ カ フ ナ ル ヌ リ ナ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ



白十二は十四と行きたい爲。それは黒九の方の發展を制したいことにある。

黒十三の受けは定石である。が十三で(イ)、白(ろ)黒(は)、白(に)といふことに依り、白を十四と來させぬ方法も黒は定石である。

白に十四と構へさせれば問題の中心は上邊と左邊とに移つた。

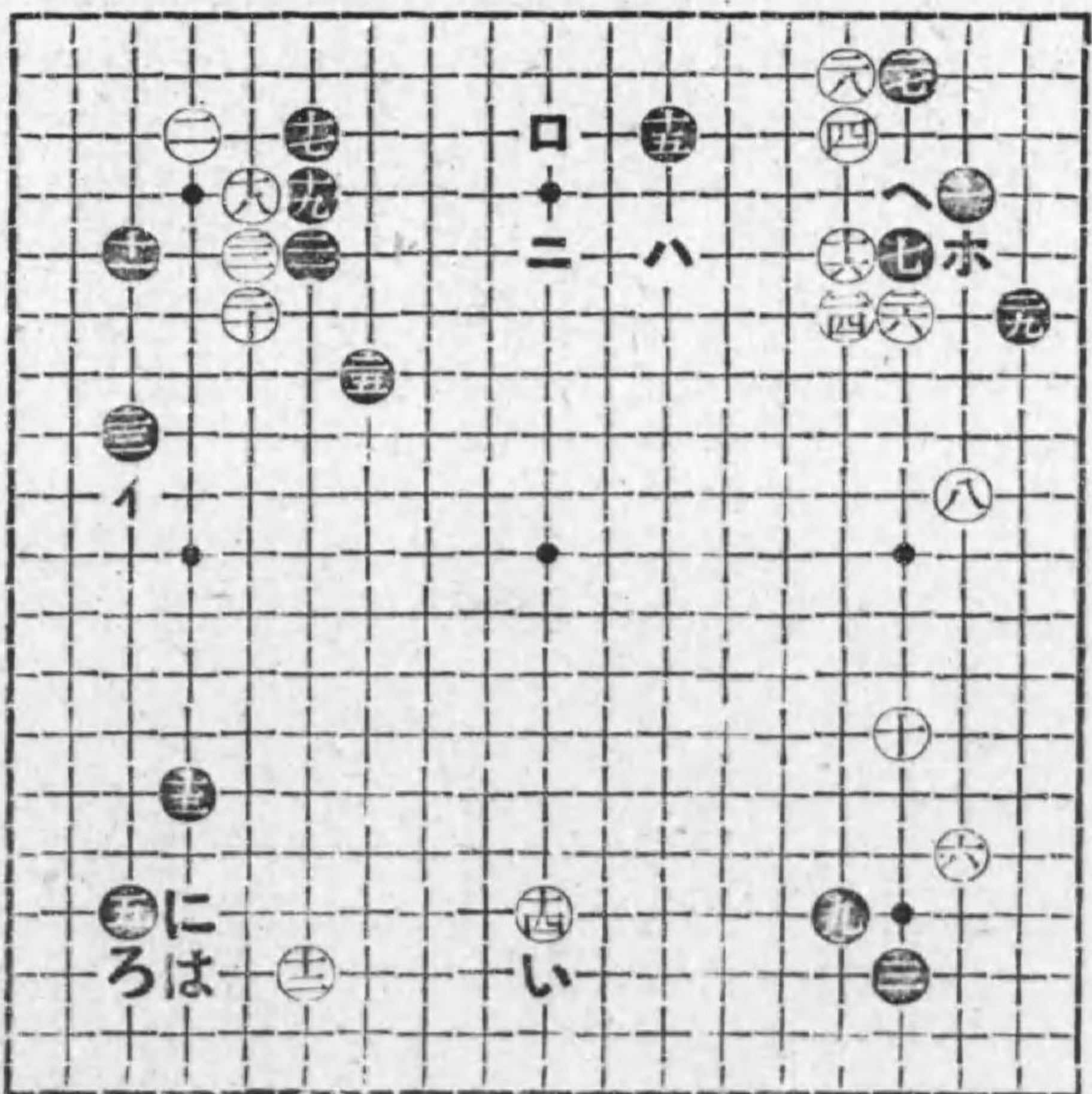
黒十五の時には様々の趣向がある。十五で(イ)は穩かまた十五で十九は戰爭を求めぬ。

黒十五より二十三迄の運びは定石である。

白二十四で(ロ)の打込みは、黒に(ハ)と飛ばれて、二十四に來られること。(ニ)と來られること。白は其れがいけない。

二十九となつた方の黒は、形を損じたが、二十五と好點を占めた爲め致方がない。白(ホ)は、黒は(ヘ)。

イロハニホヘトチリヌルヲカヨレツ



前譜黒十三を本譜十三だと、二十七迄となる。

黒十五で十八だと、白十五、黒二十二、の時白二十、黒(イ)、白(ろ)、黒(は)、白二十三、黒(に)、白(ほ)、黒(へ)と白に運ばれ、そして尙ほ白(と)。

白(と)迄となる事は、黒は左邊が薄く、白は中央に向つて如何にも厚い。

要するに黒十五で十八は悪手。

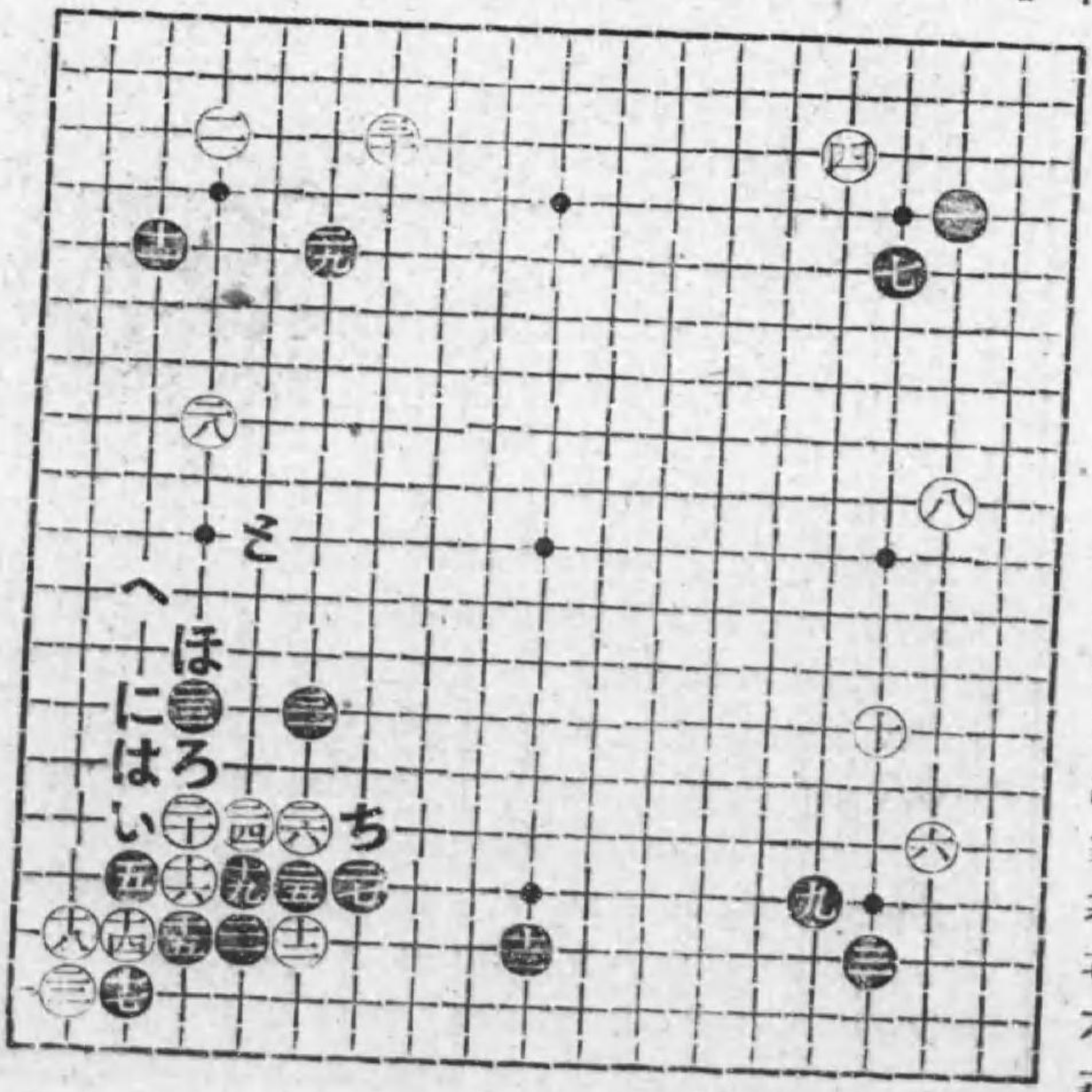
黒二十七となつて黒の心配は、白に二十八と打込まれることであらう。

白二十八に對しては黒二十九、三十一で困らない。黒三十一となつて、白(ち)なら、黒は「レ」の十二で良い。

白(ち)を(へ)なら、黒は(ち)で良い。

其時白(に)なら、黒は(は)、白(ろ)、黒(い)で白は此の一舉で大敗を招く。

イロハニホヘトチリヌルヲカヨレツ



黒十一となつて黒の悪い事は前譜で言つたが、白に十二と打込まれてはどうか、問題の興味である。

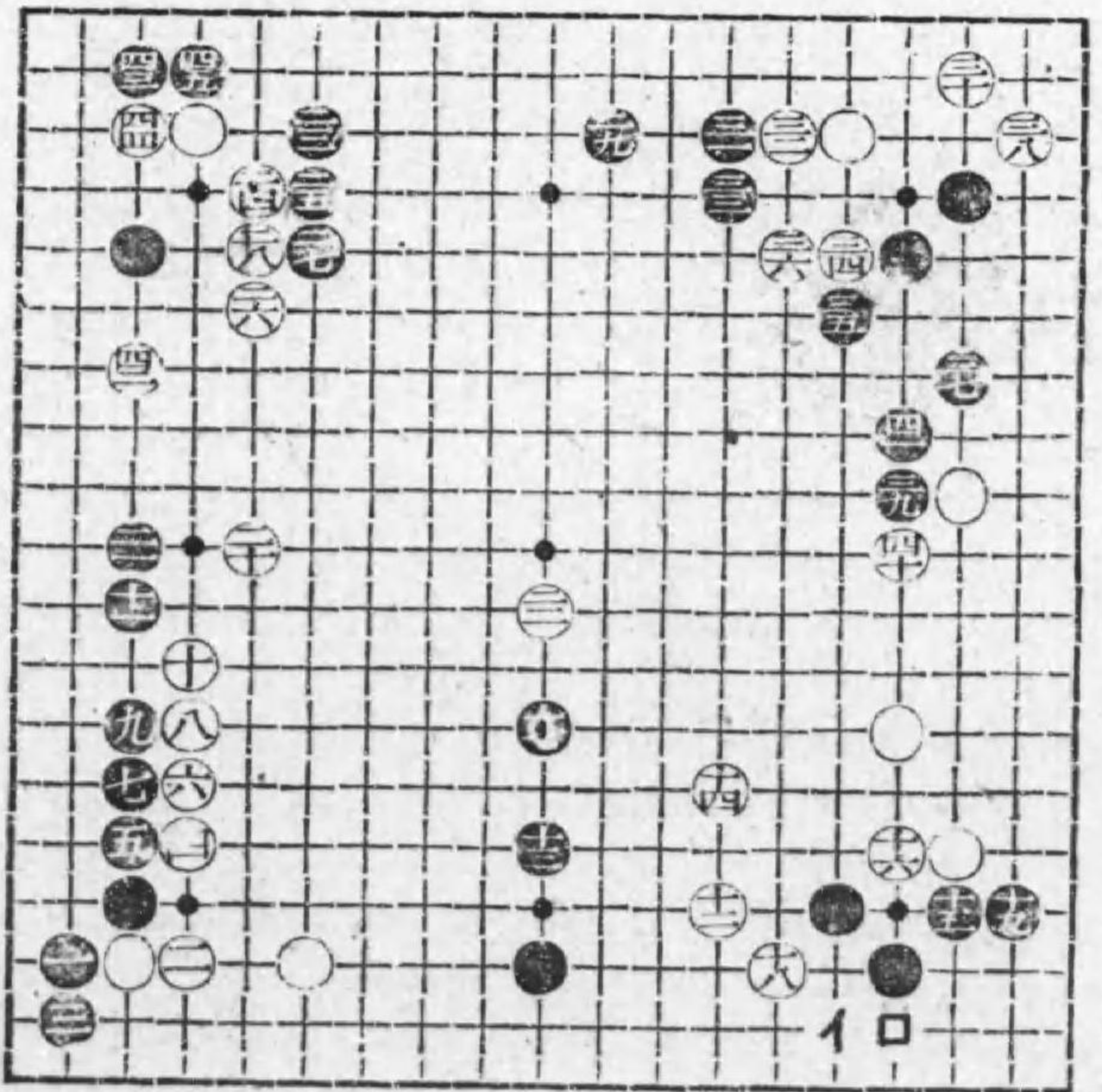
白十六で十七なら黒は度胸を定め、十三以下二子を取つて見ると、十六へ行き其處で十三の黒に幾分、援ける態度が良い。此邊が碁の魄である。

黒十九で手抜きだと、白(イ)、黒(ロ)、白十九で黒に活きなし。

黒二十一には白に其處へ來られて面白くない故。
白二十二は氣力に任せて見當で打つが、實は脅し半分で黒に手抜きされ、失まつたの嘆聲も出る。

黒二十三から活々形勢を盛り返した。
白二十二で二十、黒二十一そして白「ワの三」に構へてゐれば、地勢は白が優つて、それに黒は慌て出し、終いには無理手段に出て大敗を招くことにもなる。

アソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



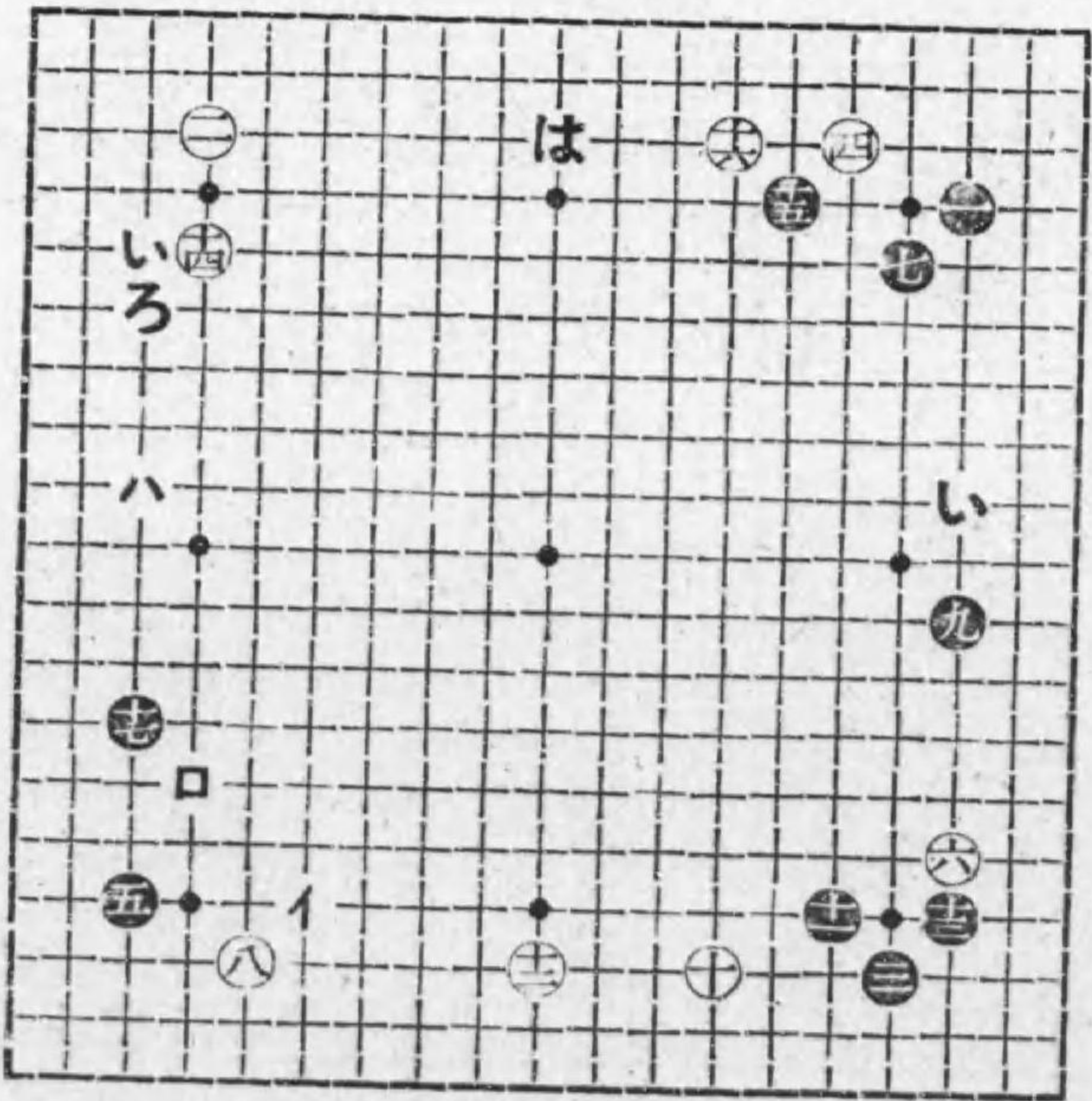
白八を擇めば、黒九と行く事が定石である。白八で(シ)のみが好いのではない。白八で(イ)、黒(ロ)そして白は(ス)とか又は九、「ハの十」の點に據ることも定石であつて、其の白九、又は「ハの十」に黒十一なら、白は十二又は「リ」の十七の布石に出て、黒の動向を見る。

白十四を(い)でも(ろ)でも宜いが、それは十四より後の布石が違ふ。

黒十五は定石である。十五、十六の意は、十五を無くして、黒十七なら、白は(は)に來ることがあまりにも明瞭。白(は)となつて、黒十五だと、白は十六に受けずして「への三」に受ける。

白十六となつて白は一寸(は)とは行き兼ねる。其の意は十六と照らして弛みが見えぬ。

フソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



黒十三を(い)でないと、直に白に十四と來られる。
 白十八で(ろ)、黒は(は)、白(に)、黒十九、白(ほ)、黒
 (へ)迄の白の運びは定石であるが、是れは黒一と七があ
 つて、黒(へ)となると、七と(へ)の間は確實の大地とな
 る。で白は十八。

黒十九を(に)だと、白は(ほ)。すると黒には十九に切
 れ味があつて、面白くないで、黒は十九。

白二十二となると黒は、七と九の間に大地を造つて、
 白地に對抗の爲め黒は(イ)であらう。黒(イ)に白(ロ)の
 受けが定石であるが、次いで黒(ハ)、白(ニ)、黒(ホ)と
 なることが、黒(イ)の意中であるから、白は此際(ロ)で
 無く、(へ)が良し。

白(へ)に黒(と)、白(ち)となると、白は(へ)と(ち)で
 又た其處に地が出来る。といつた工合で黒は白に十四と
 來させぬやう、十三で(い)。

白十より十四と運び、そして十六の出は定石である。
 十四となつた好形にて、十八の愚筋を辿る。
 碁でも兩方好い事はない。

黒二十五となつて七と九の間は確實の地となつた。

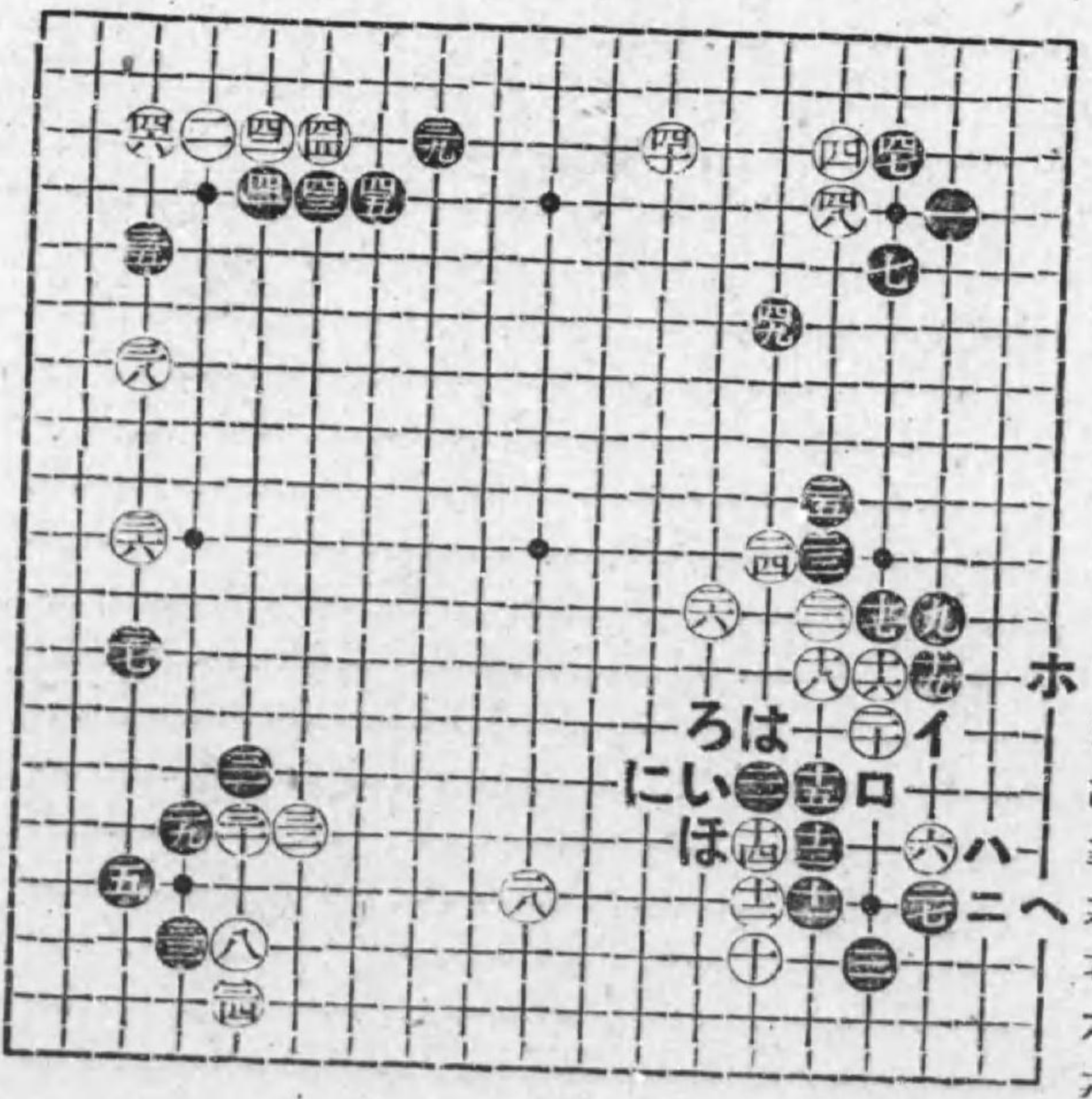
白二十六で(い)、黒(ろ)、白は(だ)と、黒(に)、白
 (ほ)黒二十七となつて、黒は兩斷されるが悪くはない。

黒二十七で(イ)、白(ロ)、黒二十七だと、白(へ)、黒
 (ニ)となつて將來、白に(ホ)と侵入を受け。のはまだ
 しも白(へ)と行く關係で(ホ)より一步深入を受けやう。
 新様な所にも勝敗の因を遺す。

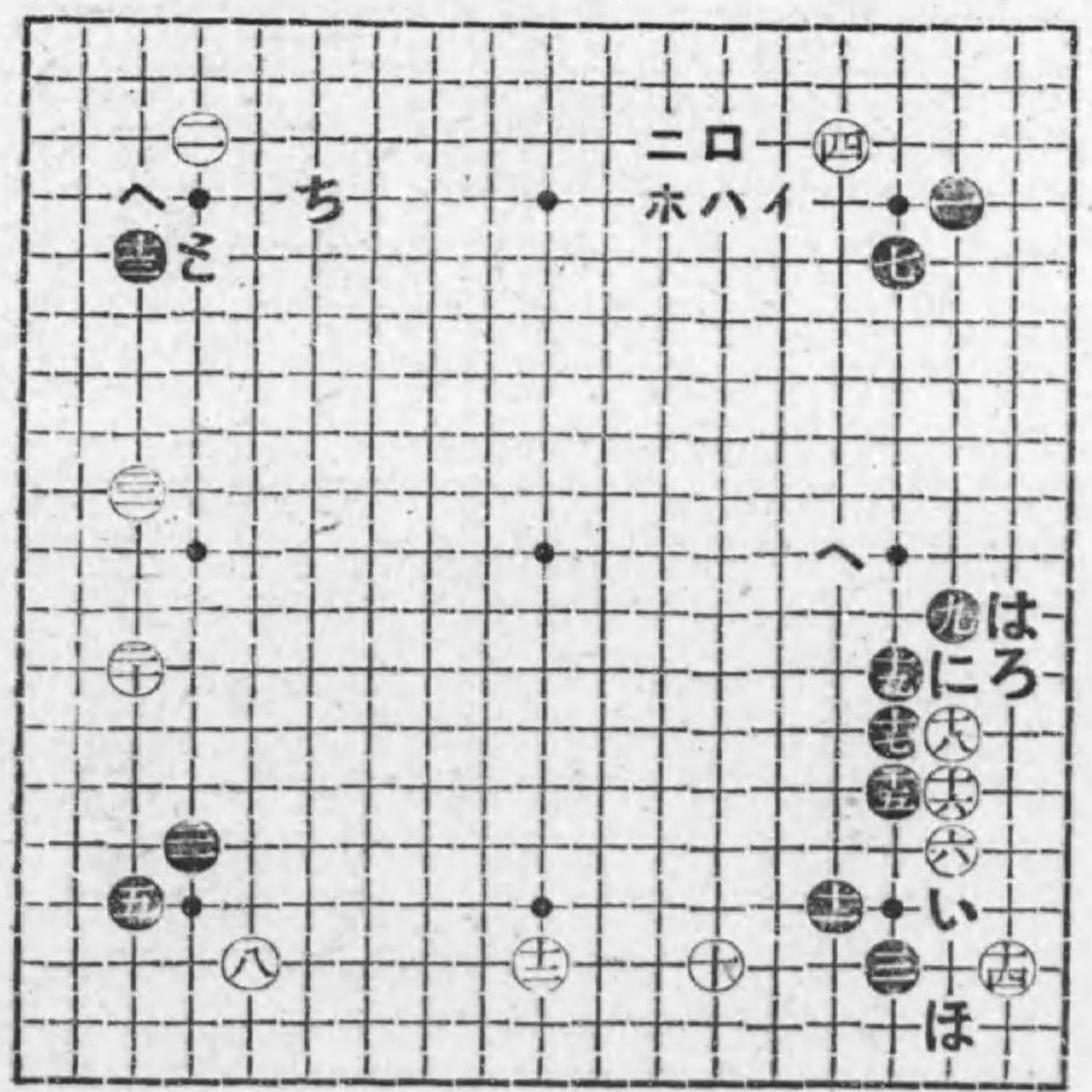
白三十六で「レの九」の定石だと、黒に「レの十一」
 と來られる事があるにも明瞭。三十六は形勢を見ての
 敏感だ。

黒四十九となつて、本局は細碁の争をひ。

イ ロ ハ ニ ホ ニ ハ ロ イ



イ ロ ハ ニ ホ ニ ハ ロ イ



白八は黒九で二十一なら、八の方は手抜きで(い)。
 即ち其時黒(ろ)の打込みは、八の方は十五へ行く寛ぎが
 あるから、「ホの十五」と飛びつけ早くも戦ひとはなるが
 白は決して不利を辿らない。で黒九の締りは順序好い布
 石である。

白十の時には大場が二ヶ所ある。十の外は即ち(は)で
 ある。

白十で(は)だと、黒二十七、白(に)、黒十となつて黒
 は左邊に形勢を占める。左様なつても兩者悪くはない。

白十六は次ぎに(い)である。で、黒は十七。

白十八に對して黒十九、二十一は定石である。二十一
 で「への十五」だと、白「ホの十七」、黒「ニの十六」とな
 る定石を辿る。

白二十四は黒に其處へ來られることが苦痛である。

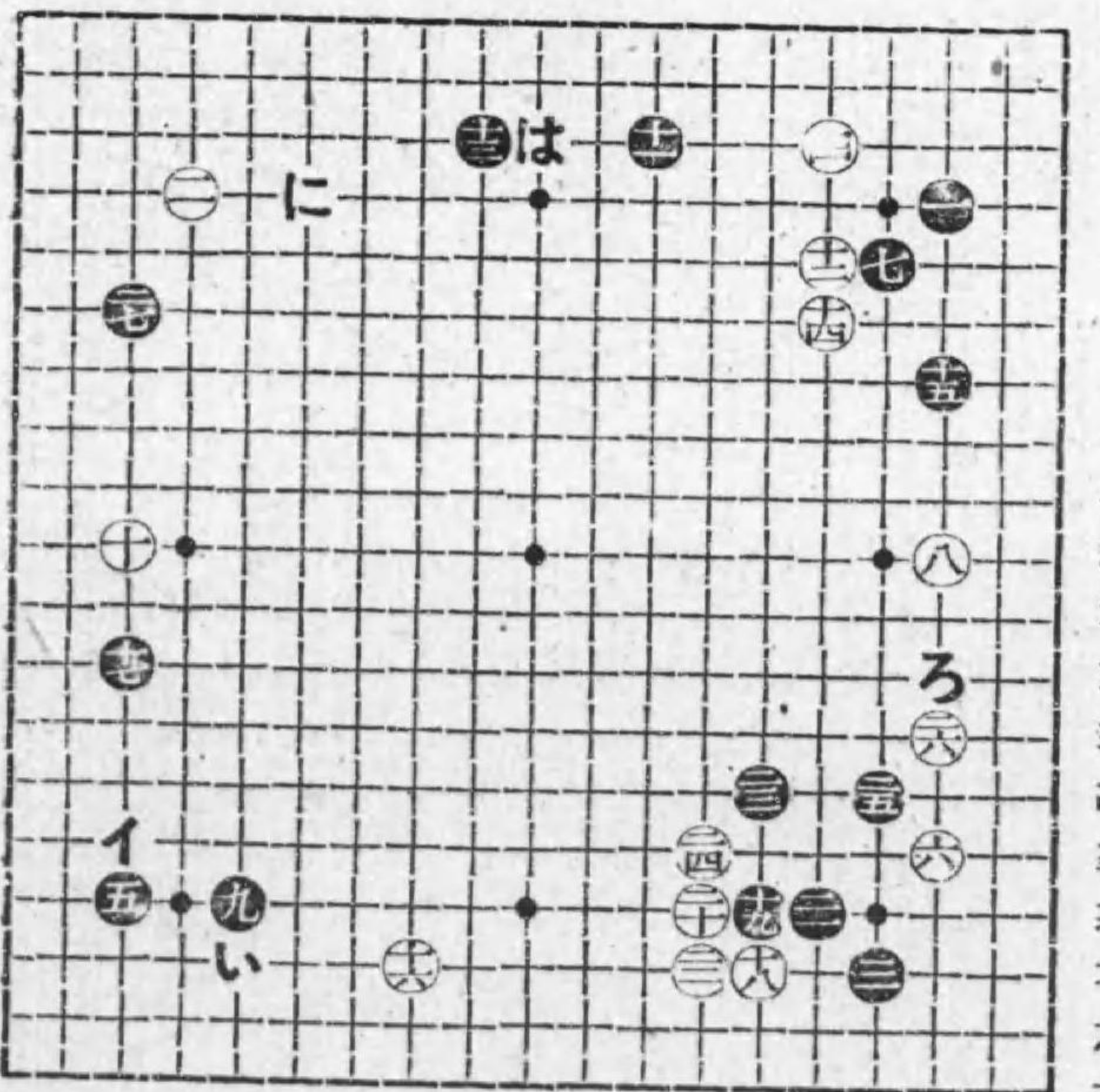
前譜黒十七を本譜一だと、白二より十二迄となつて、
 黒は地を失ひ茲に地域の釣合が破れる。是れで敗因の側
 は頗る多い。

黒七で(い)だと、六迄となつた白は「レの十」との間
 を先手で好くして、黒から來る好點の「レの十二」をも
 解消する。

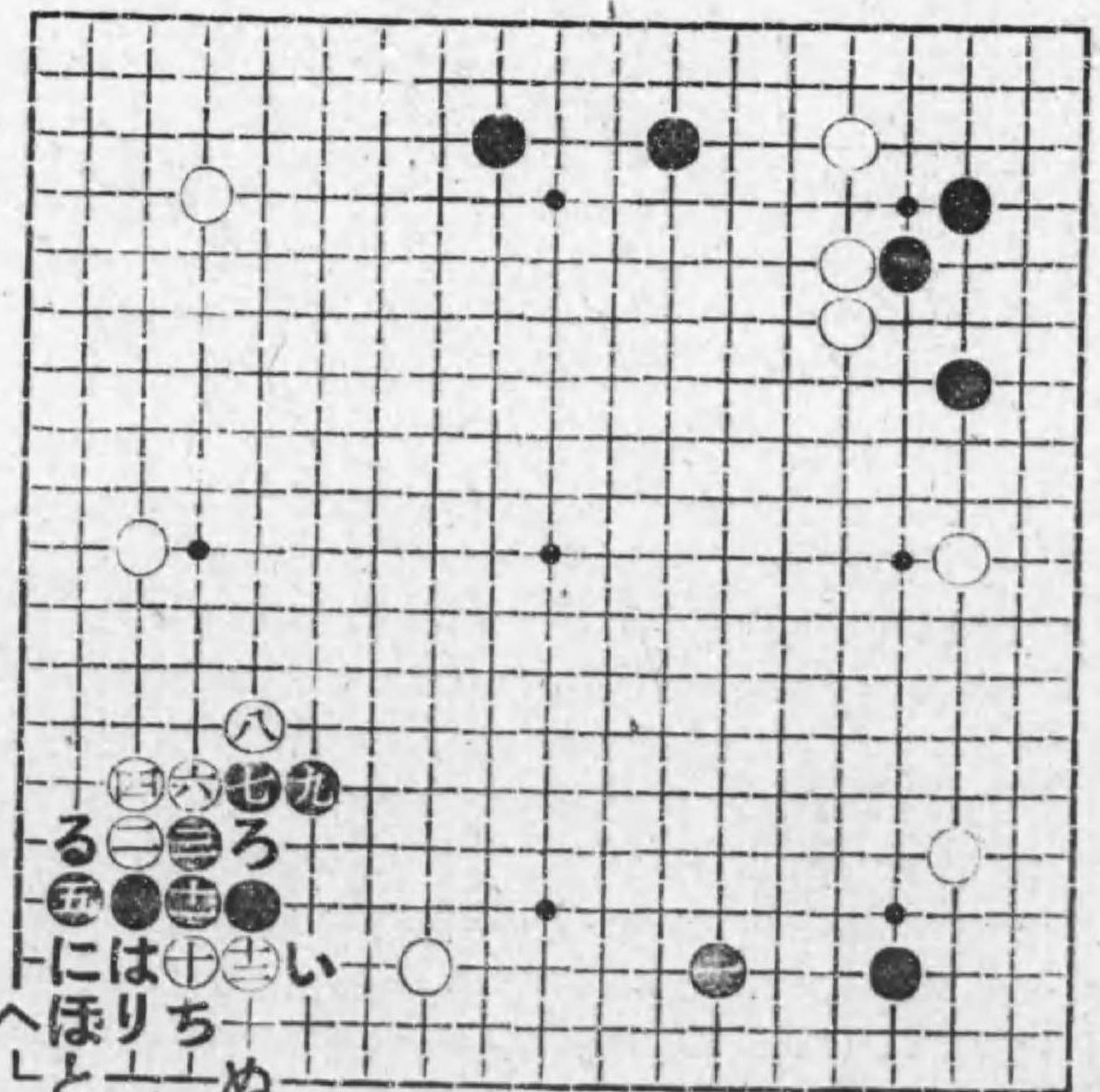
白十二となることが悪いとすれば、黒は五で十に備へ
 る外ないが、左様なる事は一と三で縮つた盛容が僅かの
 地を持つことに制限され、これ又た大局上より見て、一
 と行つた得位ひでは追付かない。

初心者の爲めに一言するが、黒十一で十二だと、白十
 一に切り、黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)、黒(へ)、
 白(と)、黒(ち)、白(り)、黒(ぬ)、白(る)となつて黒は
 「レの十九」と劫に行く事は、白に「ヨの十八」に打抜
 かれる大を思つて、容易に實行し難い。

ツソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



白二十四、黒二十五迄となることは共に定石であつて、延いて黒三十五迄の布石は、名人上手の碁にも出て、是れまでを模範の型と言つても宜い。

黒二十七で二十九だと、白は二十七と其筋を一直線に適度まで押上げ、二十との間に大地を拓する。尤も黒にも右邊に大地は出来るが、白は六を徒死はさせない。黒二十七、二十九は一路でも白地を狭めやうの考へ。

黒三十一より三十五迄は、先づ自己を堅固にして、後ち白六を攻めやうの事と、征の當りが黒に出来たら、黒は(い)。又白(ろ)と侵入を防げば、黒は即ち(は)は。征の當りといふのは黒(は)を、白に(ほ)で征に取られない事である。

白三十を三十一又は三十二なら、黒(イ)、白三十黒(ロ)で、黒が良いのである。

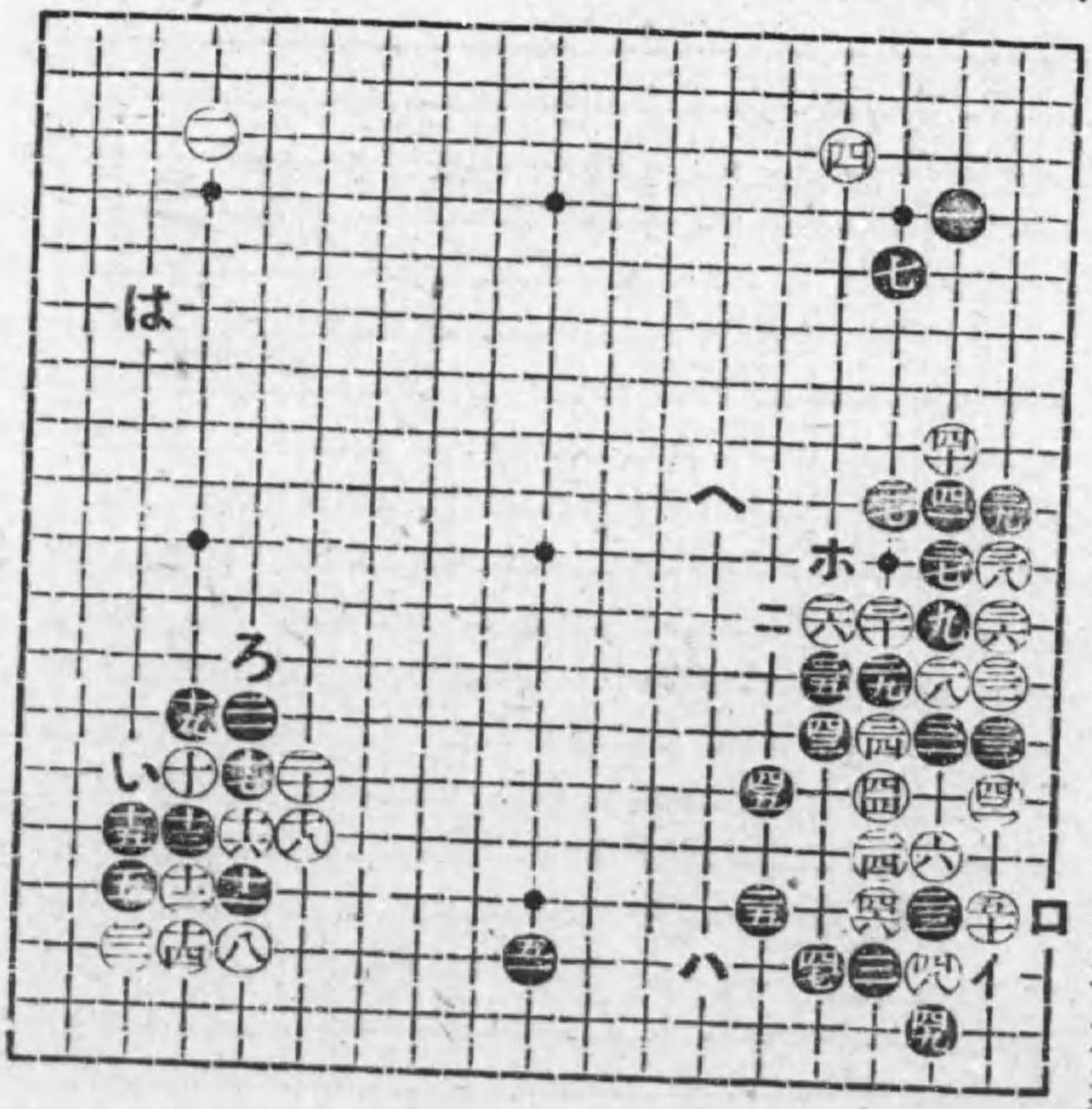
白十八より二十二迄も定石である。白十八に對しては黒十九、二十一が定石である。二十一を(い)だと、白(ろ)と掛けられる。白(ろ)となつた關係は、白は中央に模様が出来、(ろ)の方の黒は位が低く。

黒二十三より二十七迄、白二十四より二十六迄は共に定石である。白は二十六迄で其方から手を抜き、黒二十一となつた關係上、(は)の締りも定石である。白二十八も定石である。白二十八と行けば其處に白五十迄の運びを見る。

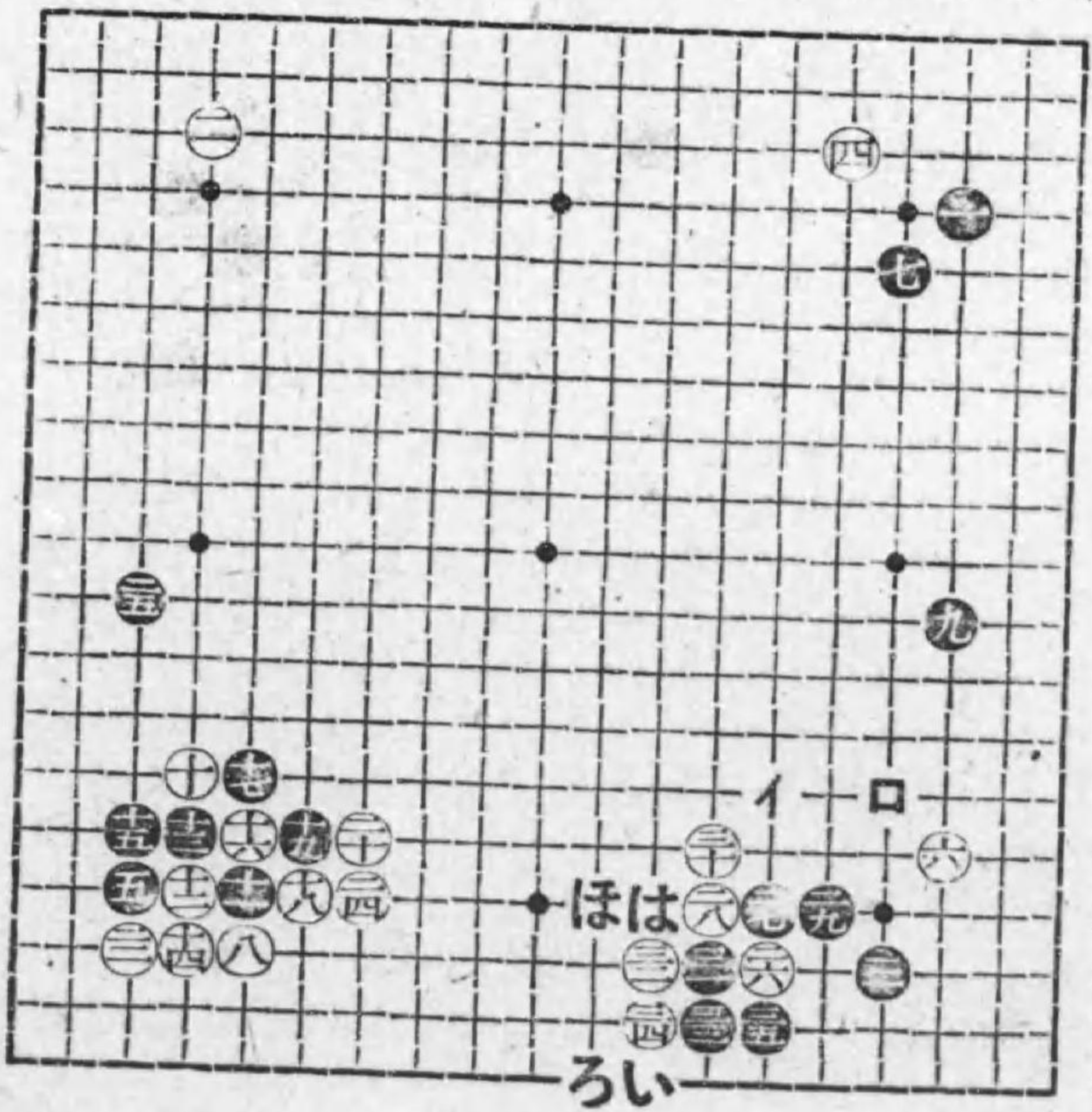
黒四十七で四十八だと、白五十、黒(イ)、白(ロ)、黒(ハ)となる。是れも定石である。

黒四十七と引き白に五十と、二十三の一子を捨てるのは、先手を取る爲めの掛であつて、即ち白二十となつた關係上五十一と行くか、でなくば(イ)と其の白一子を取るかある。黒(ニ)に白(ホ)は黒は(ハ)。

ツソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



白四と其方へ行くのは、先きに黒五、白四となると、黒に(い)と挟まれて面白くないからである。黒五、白四、黒(い)の定石は、此際黒に一、三の構へがあつて、(い)と其間が広く黒に拓されるからである。で白は黒一、三の締りが在るので四と急ぐ譯。

黒十一と九の間を広く構へたのは定石である。其の黒の意は、白(い)の打込には十一の方は三と工合好く、また九の方は黒(ろ)、白(は)、黒(に)で獨立が出来からである。

黒十七は定石である。是れは黒五と十三の關係上。即ち白二十二となつても十三が在つて、片側を造つたに過ぎない。

黒二十三となつては「レの十五」と來られる。其の備へが白二十四である。二十五で黒は優勢。

黒七より十一迄は、白六との關係上左右兩好の定石である。

白十二は「リ」の十七の打込みを見て、トとなつた堅きを利用し、右側深く二十六迄をも進展の定石である。

黒十三で十七だと、白は黒に十三より十五と來られないうやう、白「レ」の十三、黒「タ」の十五、白「レ」の十と左側に二の方にも好都合の構へをする。

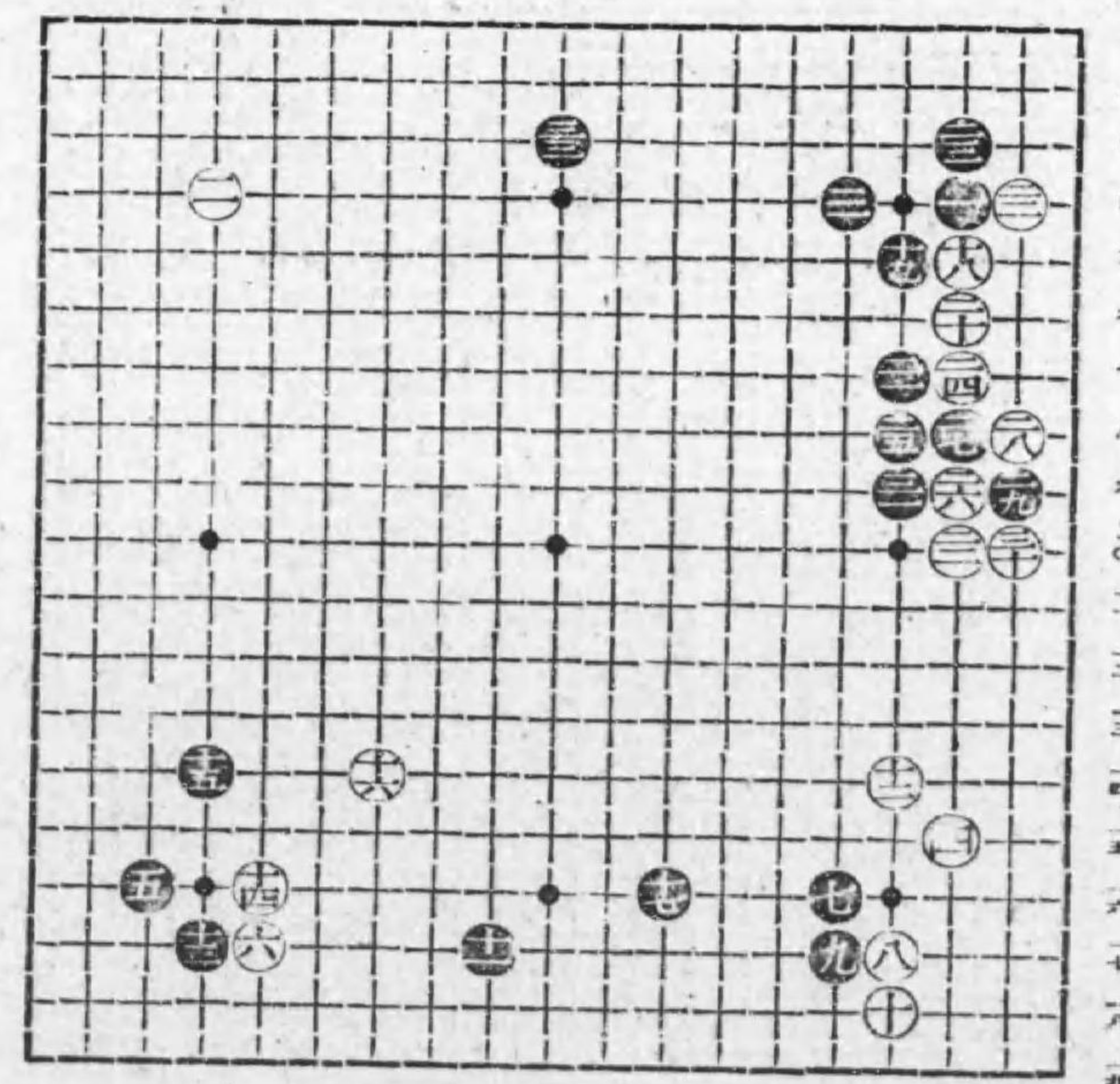
黒十三、十五と先づ定石に出て、白十六の備へを待つて、十七と守つたのは、働らきの運びである。

白十八は進み過ぎ。是れが爲め果然三十三と黒に形勢を與えた。

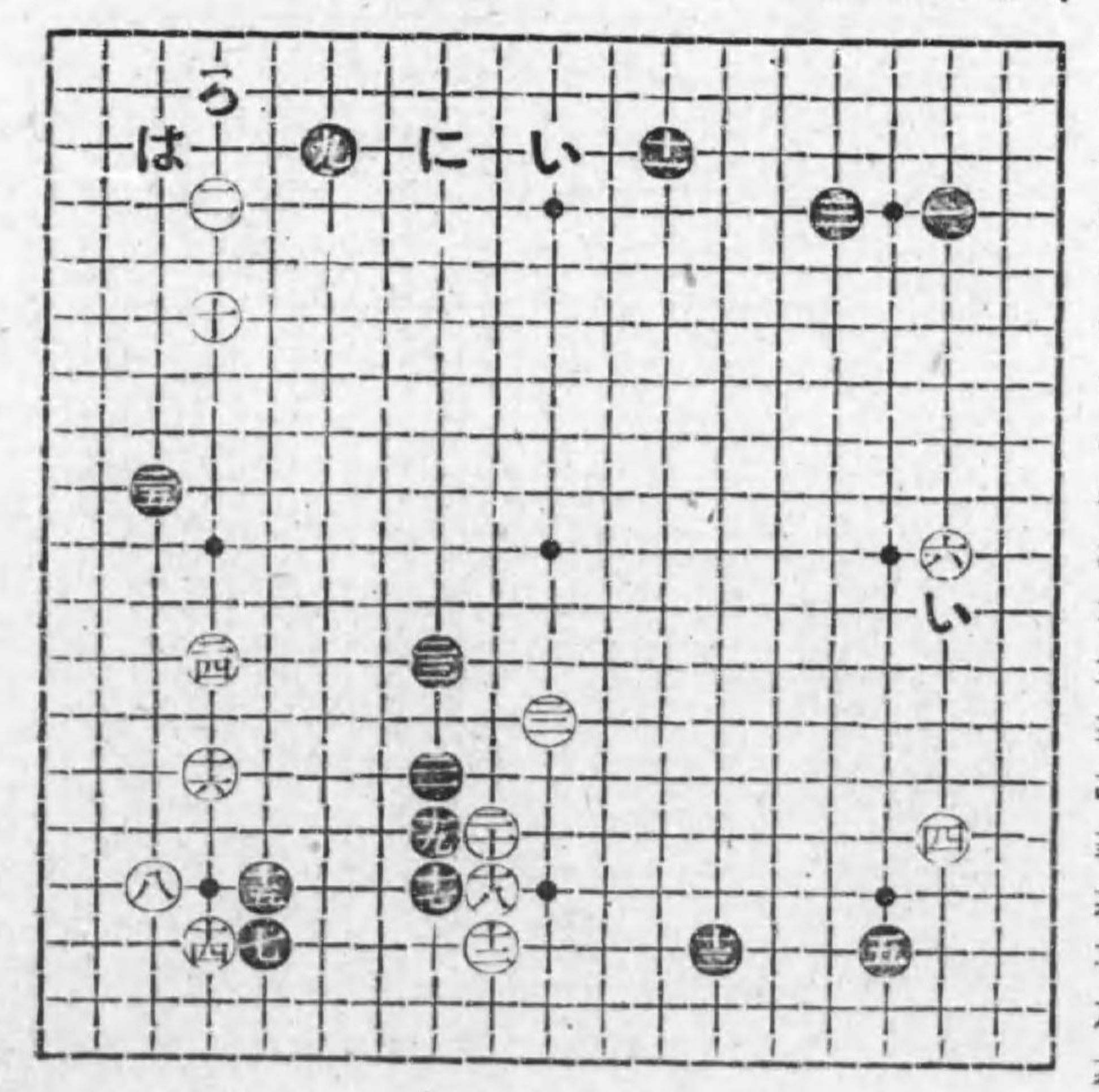
黒二十一で二十二だと、白「ニ」の六で白は十八の目的は達しられる。黒二十一はその白の裏に行く。

されば白十八は二十六が良い事になる。是れは白十八より、黒三十三迄は白が、悪い例。

イロハニホトチリヌルヲカヨメタラシ



イロハニホトチリヌルヲカヨメタラシ



黒三と締る定石は滋味な打方である。三と締つた関係は三の方が門戸を閉ざしてゐるから、白黒共に上邊より右邊が大切と知る可し。

白四と八の關係も同じ。で、黒は白八の締りに直に九と打つた。

黒九と七の構へは、専ら白二を制する定石である。七を(い)だと、白は七。

白十は黒に(ろ)と來させぬ爲で、黒に(ろ)と來られると、忽ち四の腹即ち「ハの十七」へ響く。

白十となると問題は上邊と下邊とである。

黒十一で「レの六」だと、白は三との關係上「ワの三」か又は「ルの三」。

白十四は十八の打込みを含むが、黒に十五と盛空を張られると、其方は一寸侵入し難い。十四は十五が宜い。白に十六と來られても、黒は十八の打込は——。

前譜黒は十八の打込みは——は驚かない事。
前譜白十八は本譜白一である。

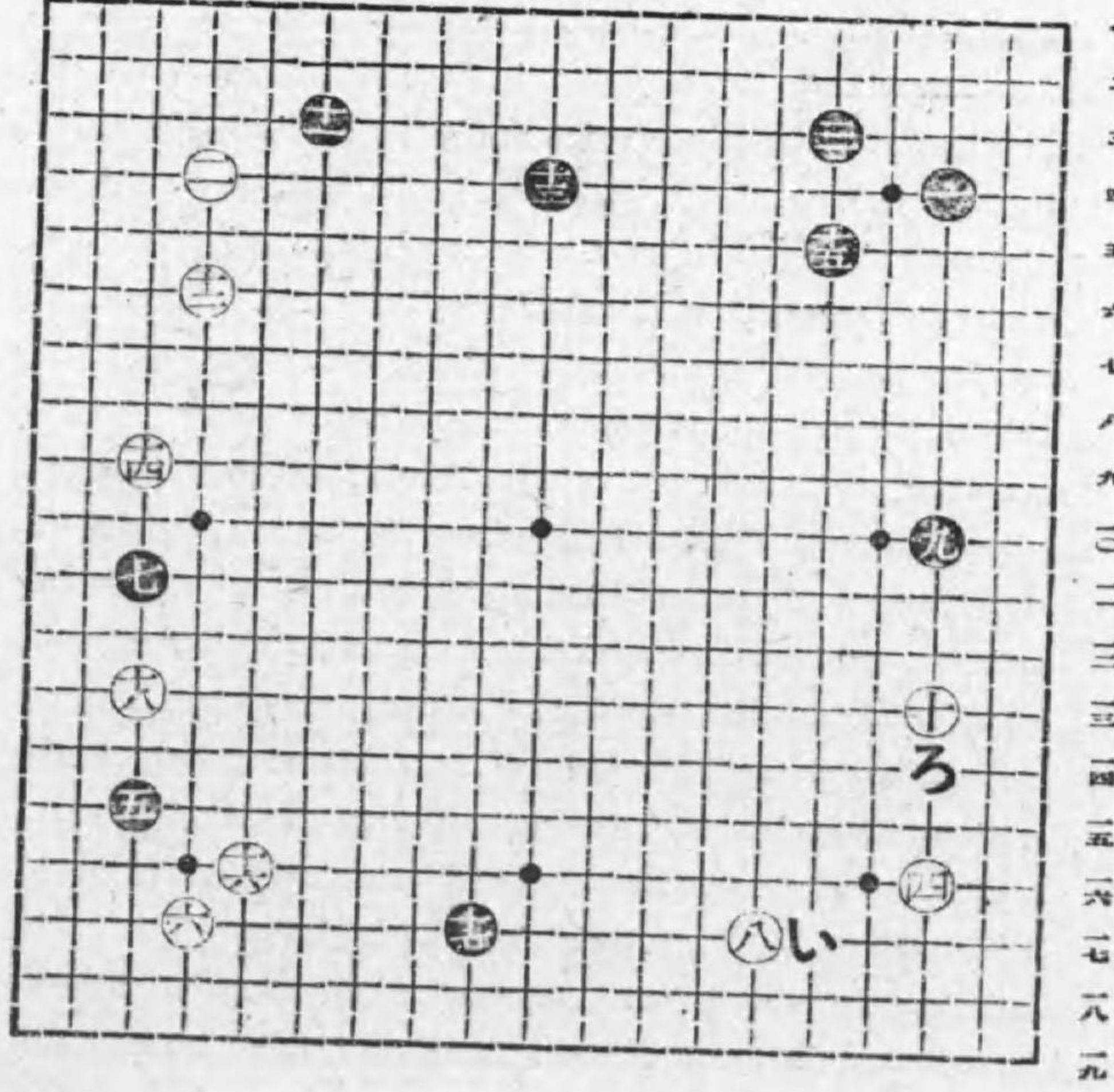
白十七となつて黒は三子にして取られたが、「レの九」の白へは、大悪影響を及ぼしてゐる。それで差引勘定は合つてゐる。

黒「ツの十二」、白「ツの十一」、黒「ツの十」となる事は白は考への内に入れなくてはならぬ。

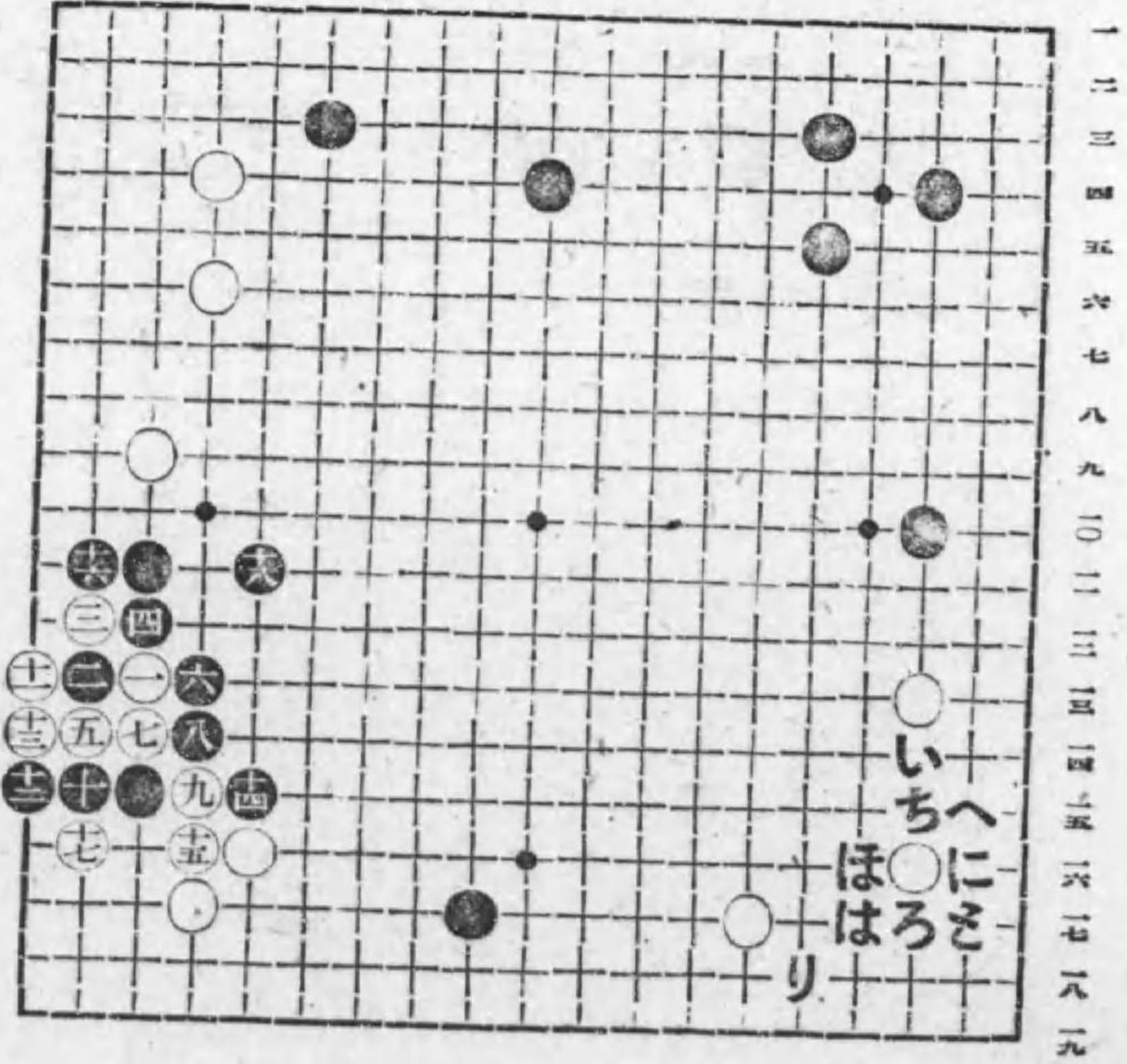
白三で五だと、黒七、白三、黒六、白四、黒「タの十」白十六、黒十となる。となつても、白は左下隅が悪く、黒は悪くないのである。

白「ハの十三」が無くして、黒(い)が有るとして。
黒(ろ)に、白(は)だと、黒は(に)、白(は)を(ほ)なら
黒(に)、白(へ)、黒(と)、白(ち)、黒(り)。
是れが前譜白四の腹に響くと言つたのである。

ツソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



黒七より十一迄は定石である。白十二を「ルの十七」は是れまた、六より十迄に伴ふ定石である。が此際斯の定石は、黒に(い)と來られ白は黒(い)の攻めに(ろ)とは行きかねる。即ち前の「ルの十七」が、堅固に過ぎ不慮の備へになることにより。

白十二の意を黒十三で(い)に來させ、白は得たりと十三と見てはいけない。十二は黒十三、十五となるのを知つて、十六の大場に就きたい爲めである。

黒二十一は十九の方を厚くする事にある。二十一で「イ」だと、白に二十一と飛ばれ十九の方を薄くする。

黒二十三、二十五の要領は定石である。二十三は十三十五の方の援けに關係あり、二十五は時機を見て(は)と行く、足場になつてゐる。

白三十四の飛びは、黒(ロ)には(ハ)と受けの定石である。三十四で(ロ)と好形を守るのみが定石ではない。

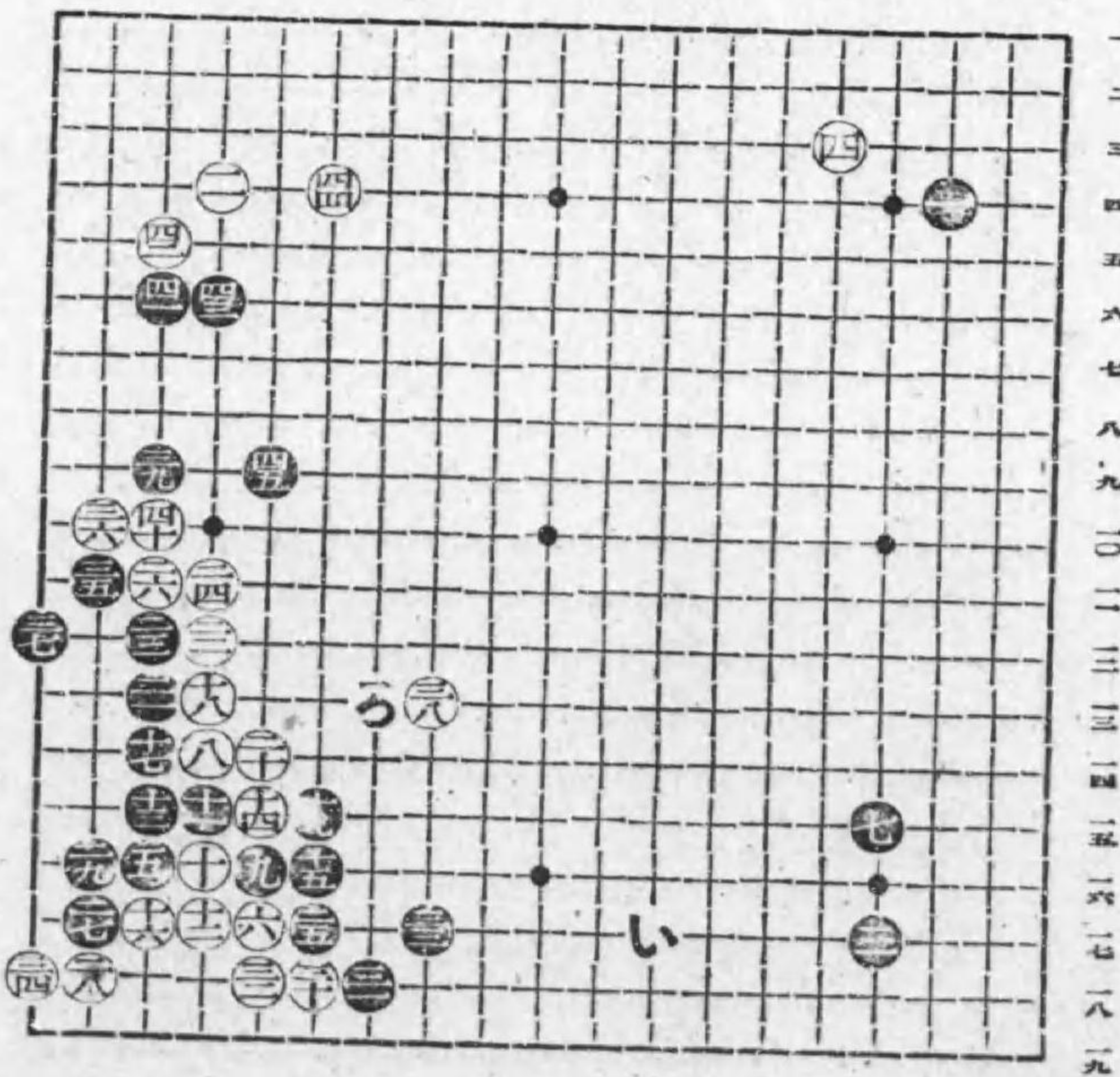
黒七で「ルの十七」だと、白「ニの十四」、黒「への十六」となる。是れも定石である。が白「ニの十四」に有る關係は一方に響き、一方の布石は多少の不利を受ける。

白八の大斜は、百七十五頁左側に現はれてゐる。白二十四迄黒二十五迄を望む。即ち白は先手を取つて(ス)。白(ス)となると三と七の締りの側面は、大體解消した。

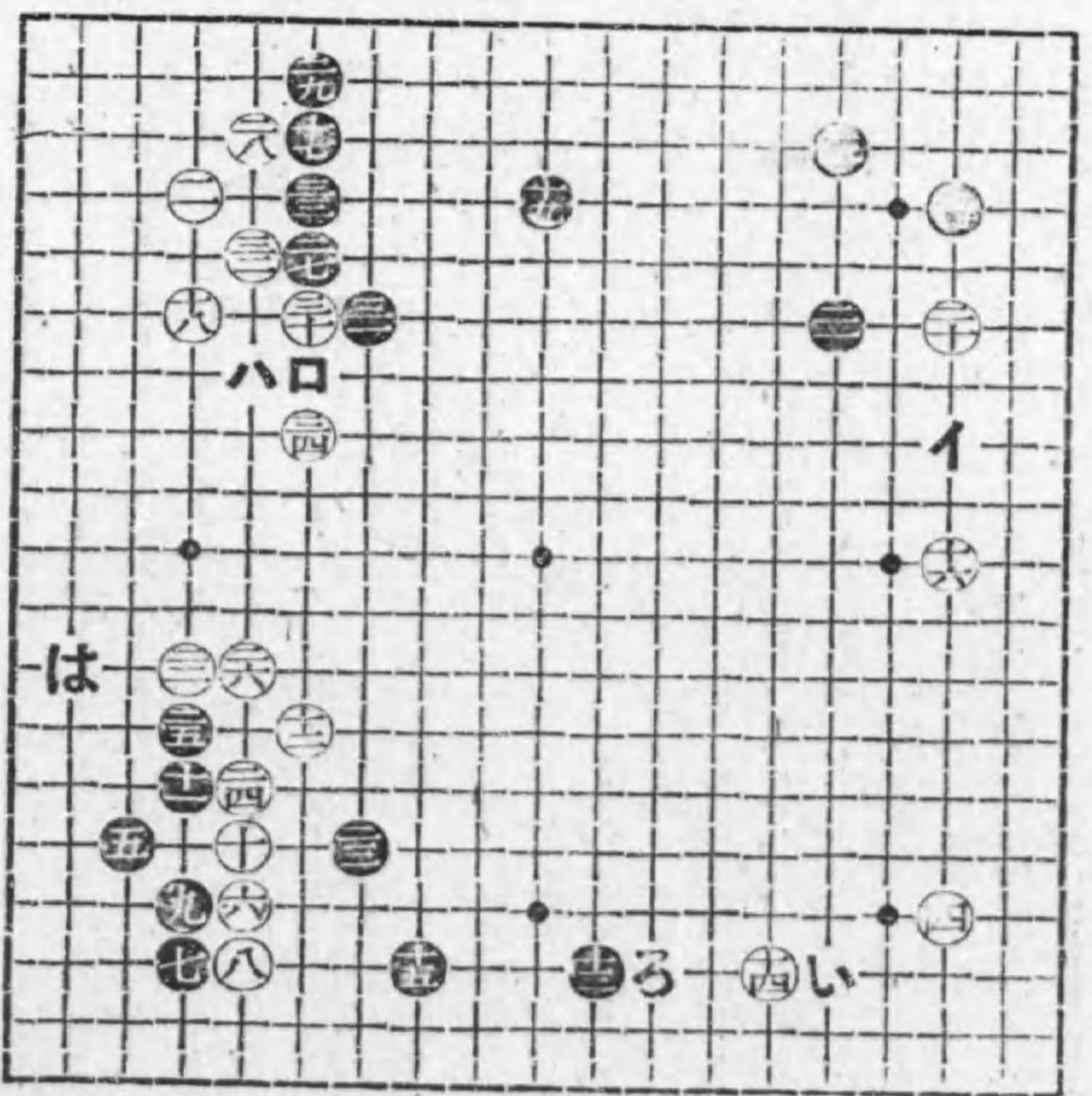
黒三十七迄の双方の運びは共に定石である。黒三十三で三十四には、白は「アの十八」の付けが定石で其外には無い。黒三十三で三十四と行かないのは、黒に「アの十八」と來られては、第一白を取れもしないし、第二には其方面の地筋を失ふからである。

白三十八で三十九は二と照らして好點だ。だと、黒は言ふ迄も無く(ろ)。(ろ)は三十三と右下隅自己に照らして好點だ。讀む人合點だ——笑つてはいけない。

ツソレタヨカワヲルヌリナトヘホニハロイ



ツソレタヨカワヲルヌリナトヘホニハロイ



黒九は又たかと、前譜三十三の雄大を期待する——其の顔をチラリと相手が見る——其の現はれが黒の期待を裏切つた、白十四迄の定石。併し黒十五迄も定石。顔つきで判断をする外交は、碁でも却々有効である。
嬉しい時笑ひが包みきれないなら、笑ひながらも「ヤ」と一撃出すと好い。相手が其の「チャー」を失つた事かとも解するから。

白十六で(シ)だと、黒は白四を攻めに十九、又は三十五の點。(シ)の方は地勢に關した事。上邊の方は攻守に關係がある。

黒十七は無論白が十八と來ることを推してゐる。それは白十八で(イ)なら、黒は十八の點を換えて良く、又た白(シ)を三十二などの守りなら、是れ又た十八で前より其の換りは大いに優る。黒十九と打込み二十七は二十に粘ぎ、其處に三十一迄の變化は、黒十七の考へにある。

白二の高目でも、黒は一、三、五の運びで好い。黒七は九には限らない。七の定石も前途の布石に好いだが七を九と斯う七とは、六との關係で白に右側へ多様な趣向を與える。

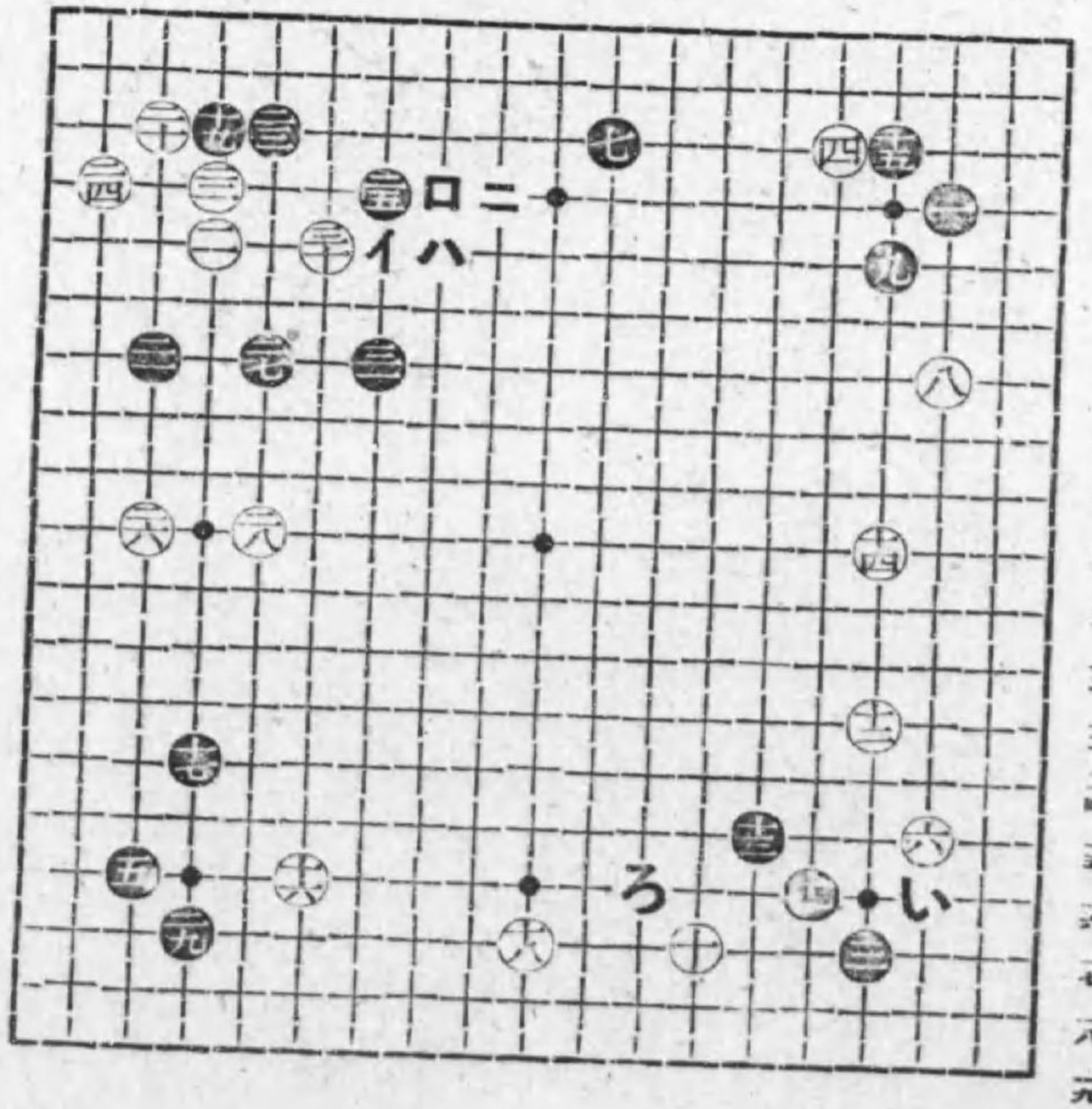
黒十三で十四、白十三、黒(イ)は十四と打込んだ方に戰爭は起るが、黒の不利とはならない。

黒十七で(ろ)だと、白「レの十七」、黒十八、白「タの十六」と勢ひ變化が起きやう。是れも黒は悪くはない。白の欲するまゝに十八と構へさせたのは、十九と黒は大きな點に入れるからである。

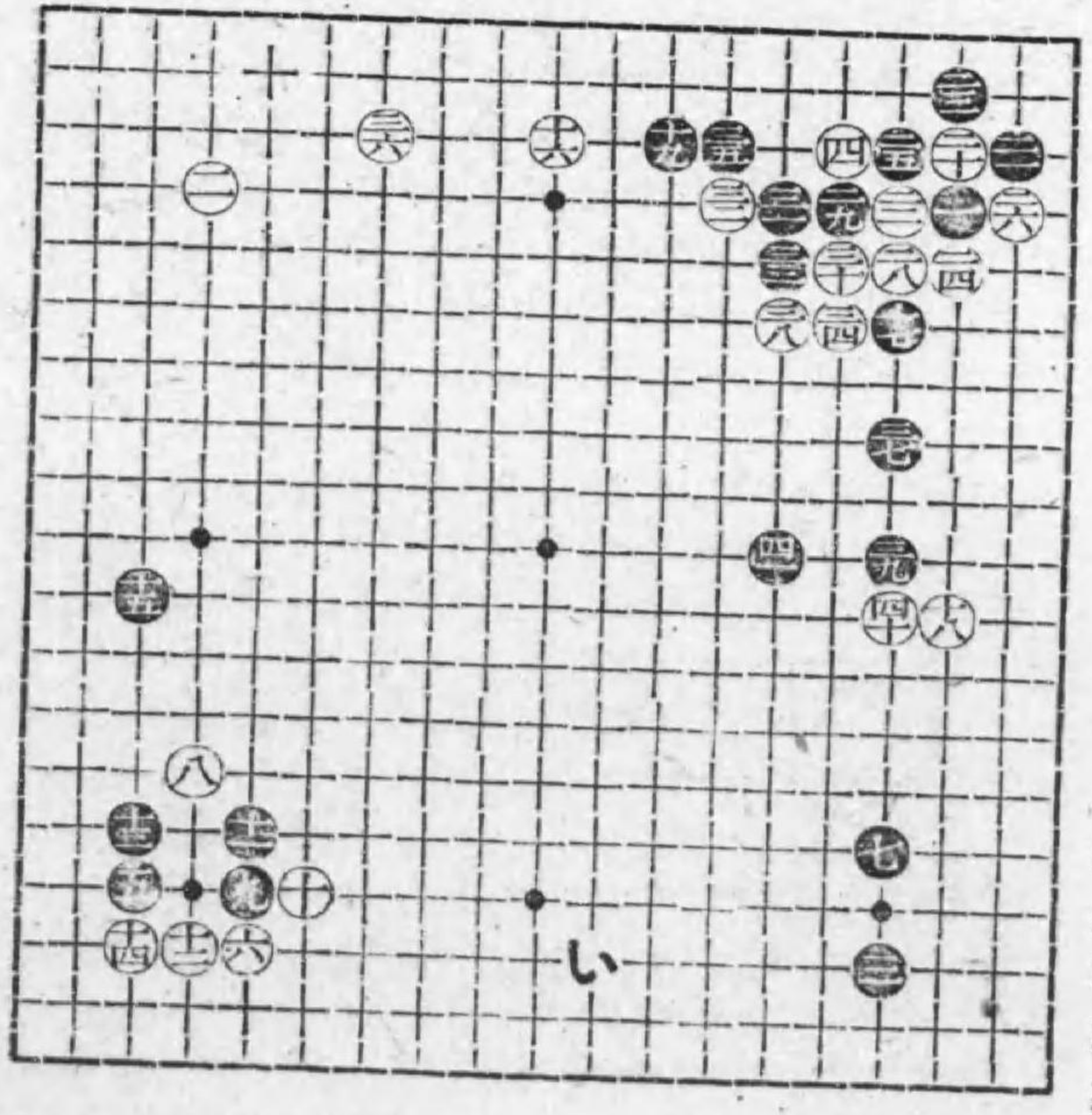
黒二十九で三十一の飛びは、七の方との關係が其の一手で甚だ厚い。併し二十九は變化を避けた健實の布石である。

黒三十一は、白(イ)、黒(ロ)、白(ハ)、黒(ニ)と白に其様押して下さいの、誘ひの手。

イロハニホヘトチリヌルヲカヨシクニ



イロハニホヘトチリヌルヲカヨシクニ



前譜黒二十九で三十一だと、白に本譜一と來られる。黒二で「ソの十七」、白二、黒十だと、白十一を「レの十六」に粘ぎ十五迄となつた、變化は避けられる。が左様なる事は、黒は丈夫は丈夫だが地は薄くなり、白は二の引きで地が増し、全局地勢の關係に悪い。

白は十三と切られては、黒は其一を捨てる結果にならう。即ち黒(い)、白(ろ)、黒(は)、白(に)で。となつても黒の負けといふのではない、前途に力戦となつて、黒は大困難を極めるであらう。といふことである。

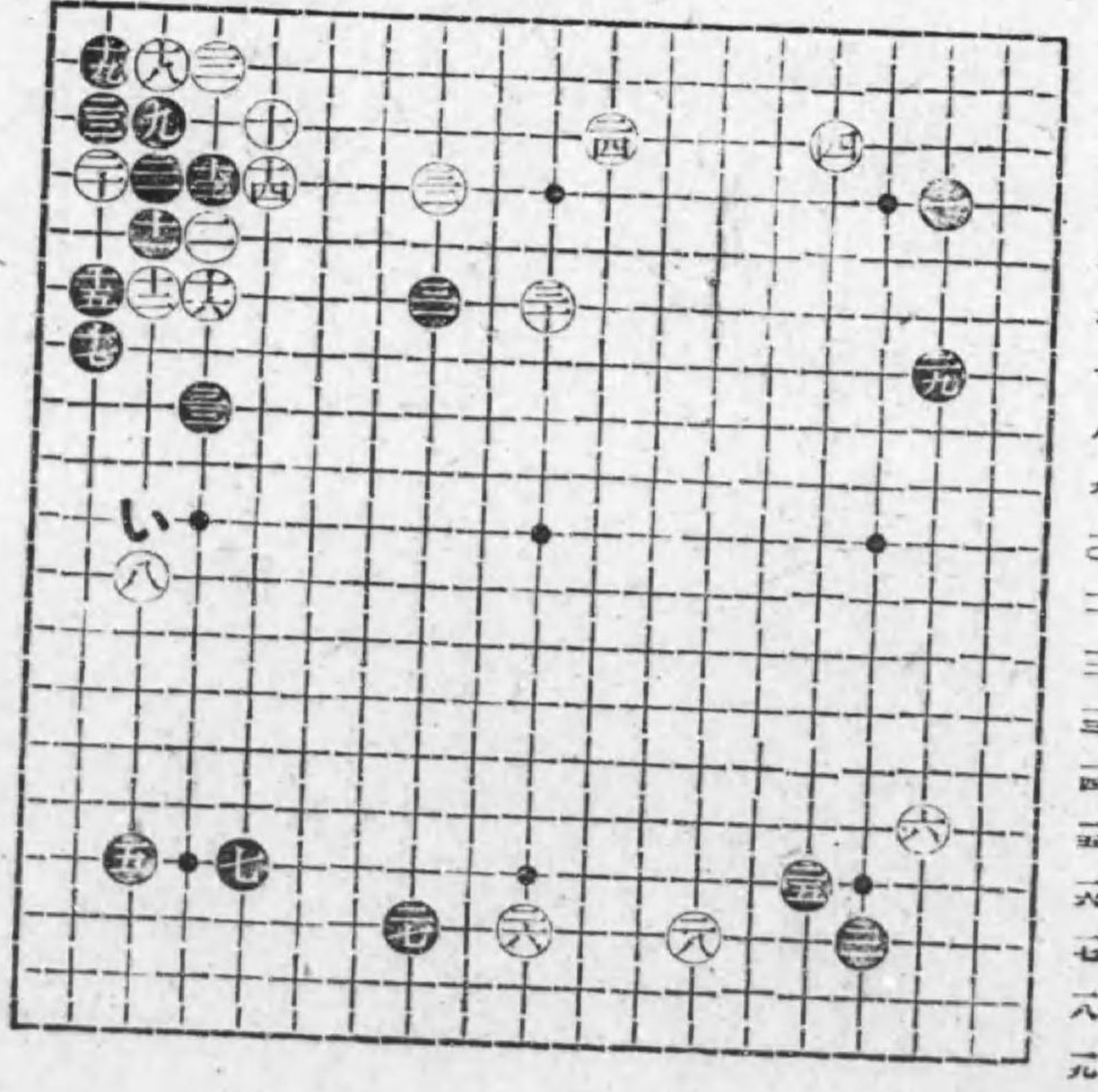
黒十四で十五に白十四、黒(ぼ)、白(へ)、黒(と)、白(ち)に切り、黒(り)、白(ぬ)、黒(る)となれば、黒は見直す。で、白其の十四の切りを(と)、黒十四、白(を)、黒(わ)、白(か)、黒(よ)、白(い)となつて攻合いはどうなるか。是れが大問題だ、力量か養生にヤツテ見たまへ大いに得る所があらう。

本因坊秀和、其の跡目安田秀策の兩人は、前者は八段後者は七段で終つたが、共に名人の域に達した人。本譜は此の兩人の打碁に現はれたるもの。

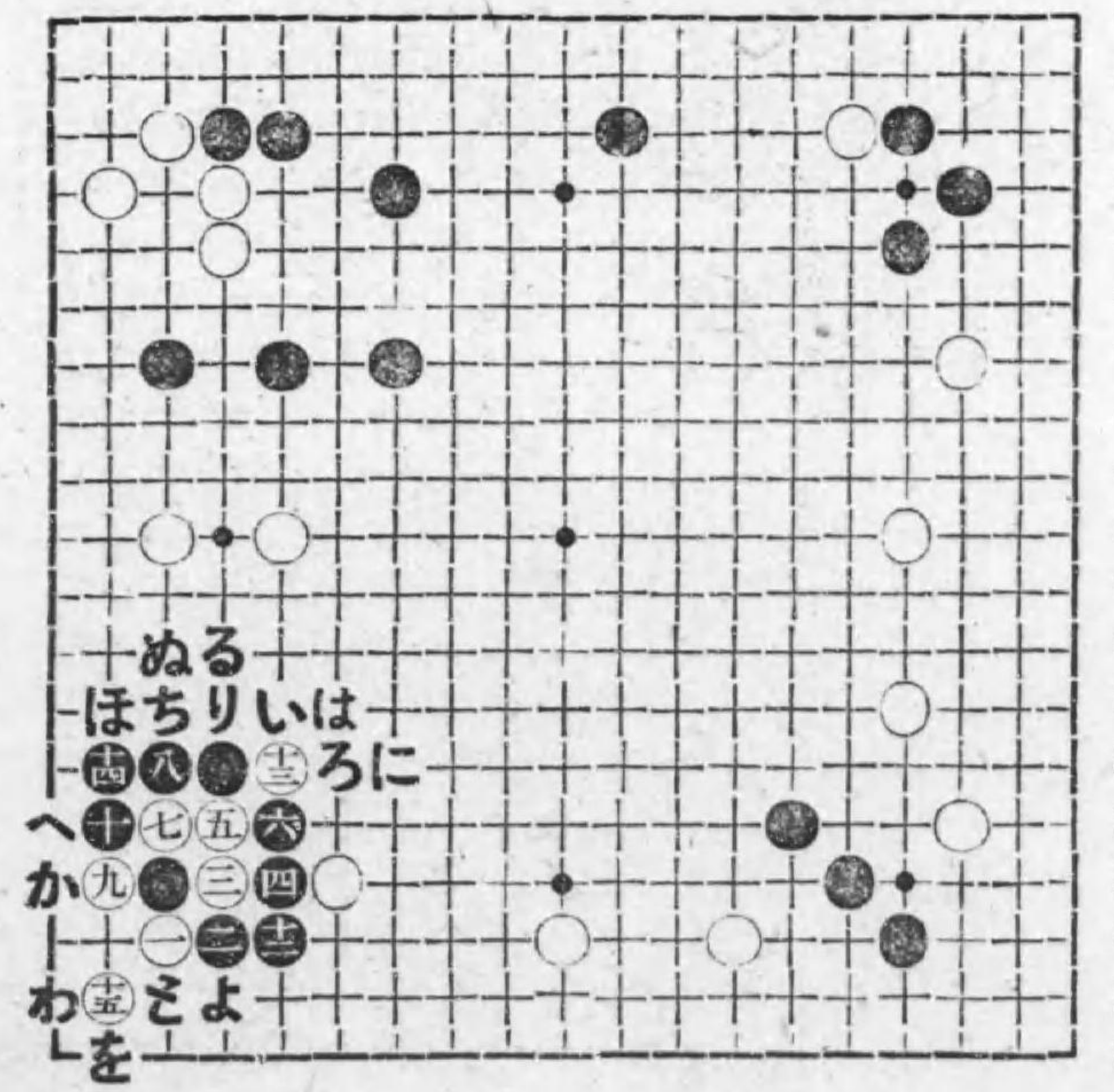
白八で「タの三」の締りだと、黒に(い)と展開される。其れは黒に大地を持たれる。白八は即ち五と七の黒の構へに、少しく地を加えたものに制限しやうの考へ。

白二と八となつた布石に、黒九と入ることは定石である。九を「タの三」白九、黒十八、白二十一、黒「ヨの二」の定石は、假りに白三十三の圍いとなつても、白八迄は地が大きい。が第一其の白三十三の圍いで、「カの三」、黒十四、白「ワの四」、黒「ヨの五」、白「タの七」と黒は攻められながら、白に圍はれることが、白に良い定石である。要するに黒九で白二、八の如き際には「タの三」の入りは大いに考へもの。白二十四迄は、白八の時計つた現はれである。

イロハニホヘトチリヌルヲセタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



イロハニホヘトチリヌルヲセタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



白八に對しても、黒九と入ることが定石である。
 白十、十二は定石である。延いて黒十三となつた十三の走りは定石である。

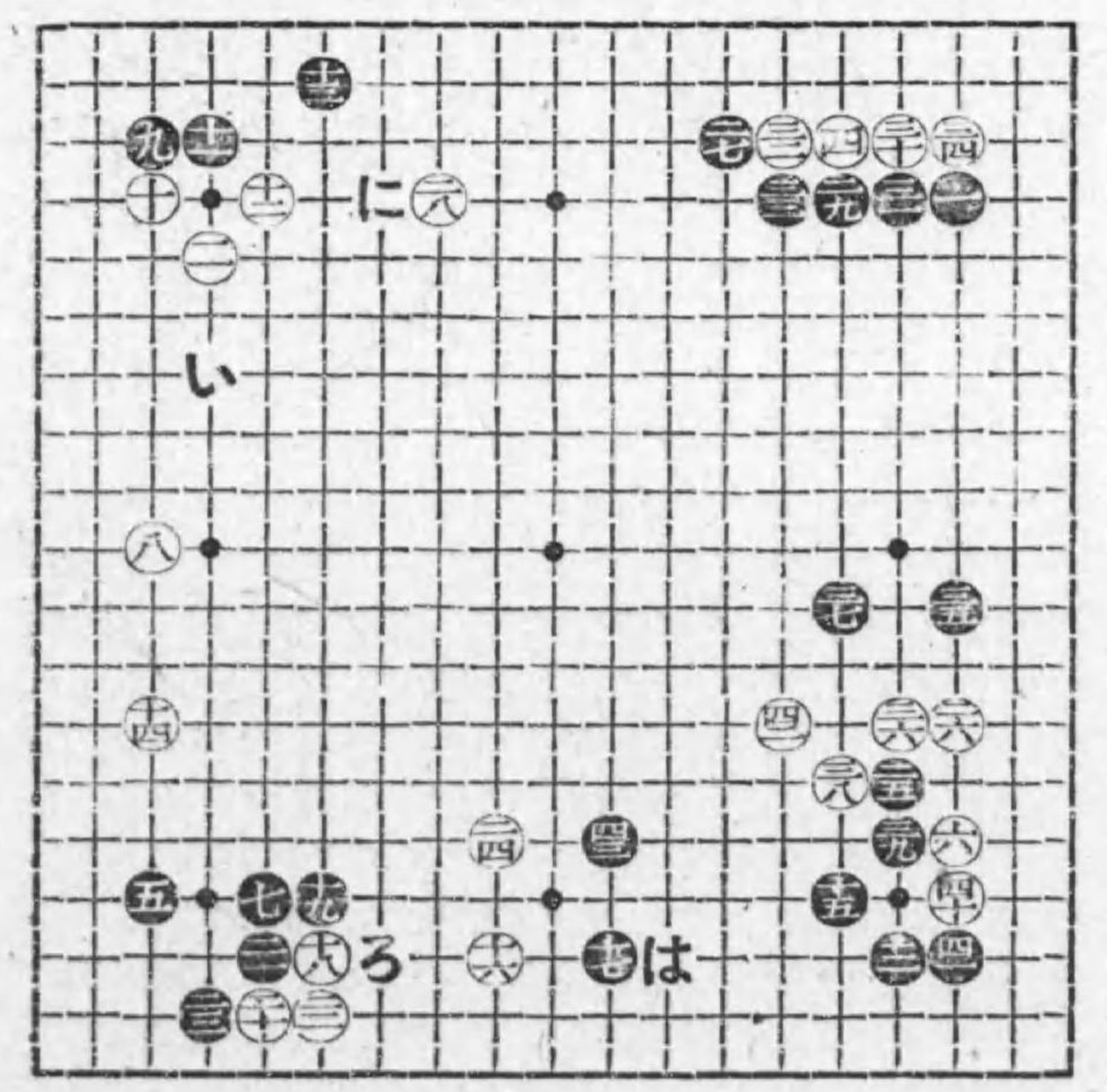
黒十三を「ヨの三」、白「カの四」、そして黒「カの三」は十三より、少しく地は大きいが、「カの四」となつた白は八の方に厚くして、其利不利は、白の利が優る。

白十四は黒に(い)と打込まれた時の控えである。
 白十八より二十二迄は定石である。

黒十七で(ろ)だと、白(は)となつて此の布石は黒が面白くない。即ち黒(ろ)は狭く、白(は)は黒十五の方へ好き迫りとなつてゐる。

白二十四は黒に其處へ來られる事が面白くない。
 白二十八は黒に(に)と來られると、忽ち(い)の打込みは生じるし、又た二十七との釣合が好いから。

イロハニホトヘチリヌルヲカヨレツ



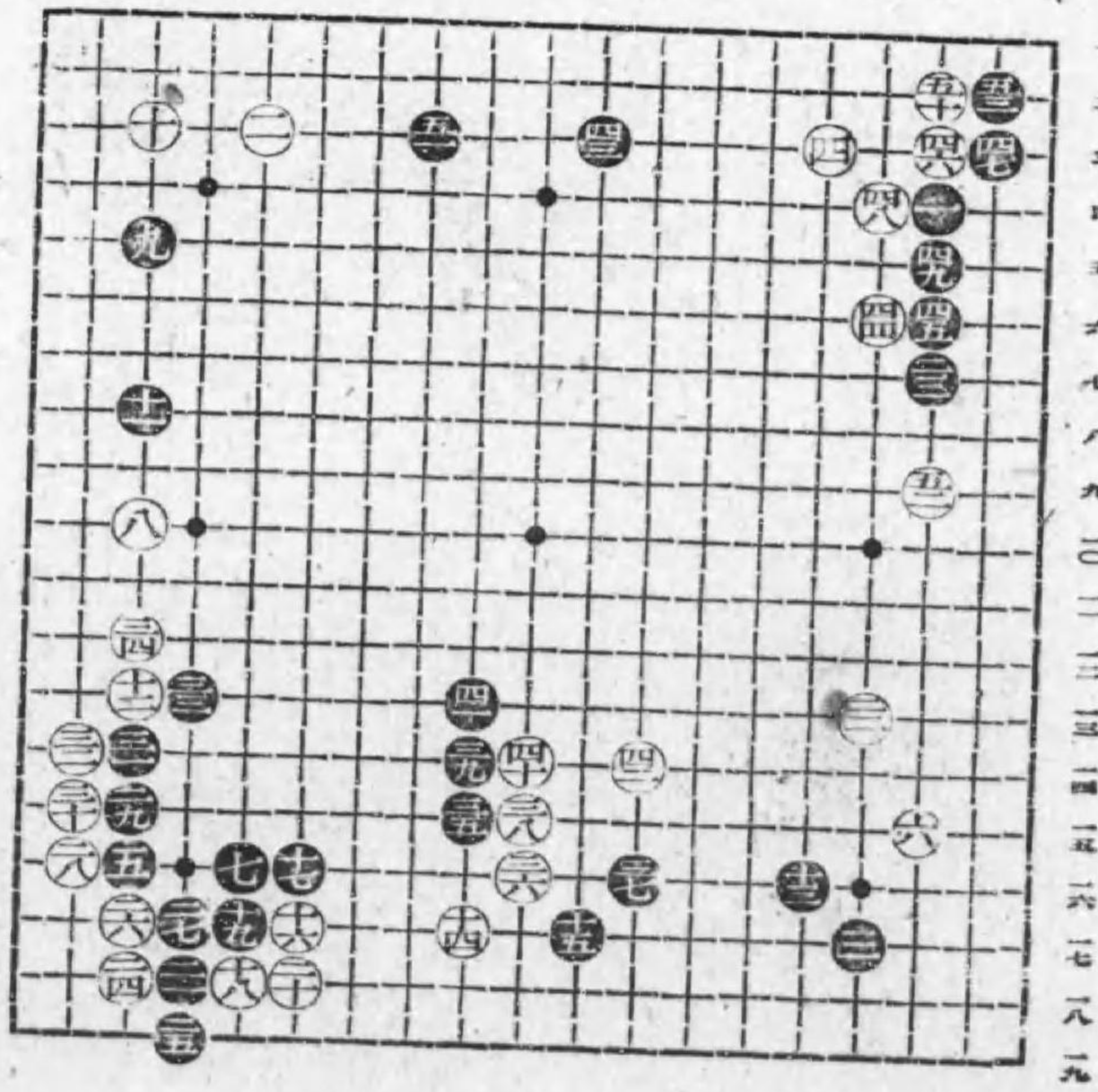
白八を「レの四」だと、黒は八。別に悪くはないが白八は其れを推ふ。
 黒九で「レの四」なら、白は直に「レの六」と行き、其の黒を攻め八の方にも好い構へをし、又た二の方も治まる。これは黒が白八の術中に入る事。

黒九、十一は白二と八の關係を以ての定石。
 白十二は八の時左様運ばれる布石を豫期しての事。

白十四を「メの三」なら黒十五は「ヲの三」の方を擇ぶ。
 白二十二は定石である。二十二は遠く十四の方を援けてゐる。

白が二十二と備へたから、黒は二十三。黒二十三は、白に其處又は一步進めて四十五と來られる手段を防ぐ。
 二十三の時には白二十四と來ることは考へてゐる。
 白十二が三十一に在れば、白二十四より二十八となつて黒が悪く。

イロハニホトヘチリヌルヲカヨレツ



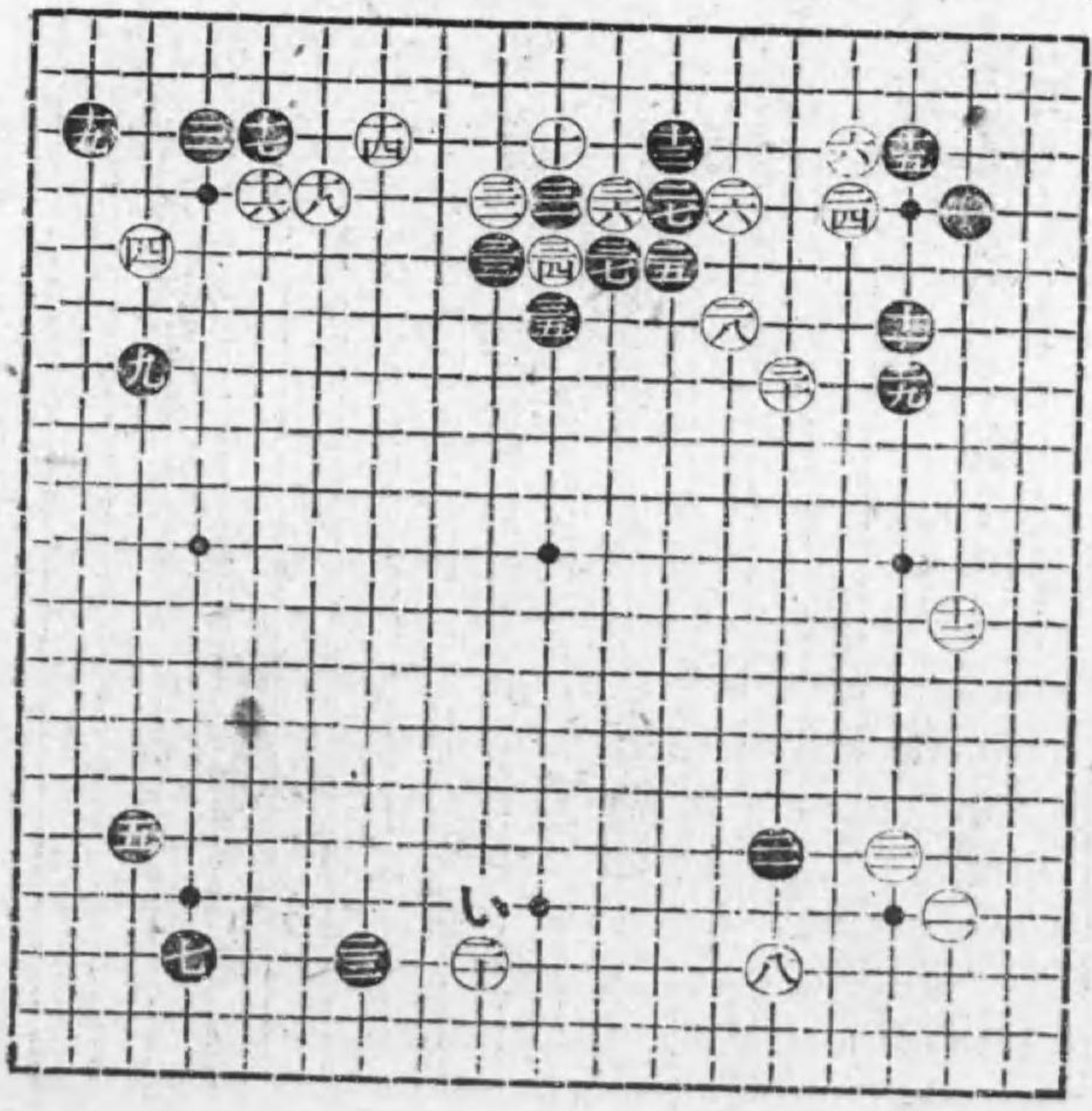
白が二の方を擇べば、黒は三と據る事が定石である。白四を假りに九だと、黒は四の縮り。そして白は更に黒を六、二十四「への三」の何れへでも縮らせては、黒が二ヶ所縮りが出来、黒は前途賸易くなり、白は局面の變化を計ることが、狭められるから、黒四の縮りに直に六だと、黒は「リの三」。黒「リの三」は左右に倒らく。で白は四。

白十の在る時白十四に對して、黒十五は十六と應じる要は無い。即ち十八となつて白十が狭くして働きに乏し。

白二十は當面第一の大場である。二十を二十一だと、黒は其の釣合上(い)が恰好である。

黒二十一で二十三だと、白は二十一の飛び。其の飛びは、十二と二十の兩方を好くする。其れを見て黒先づ二十と、白八に冠したのは定石である。黒二十一の一手で白の大規模は多少解消した。

ツソレヌヨカヲラルヌキチトヘホニハロイ



白八迄の兩者兩縮り、黒五、白六となつてゐる所に變化はあるが、は其れ迄同じ歩みで、黒が必勝と言ふのは名人同士の對局である。段以上五六段の技量では必勝とは言ひ難い。それが段以下となつては、投機の如しだ。

白八となつて第一の好點は九と十にある。黒十なら白は九。

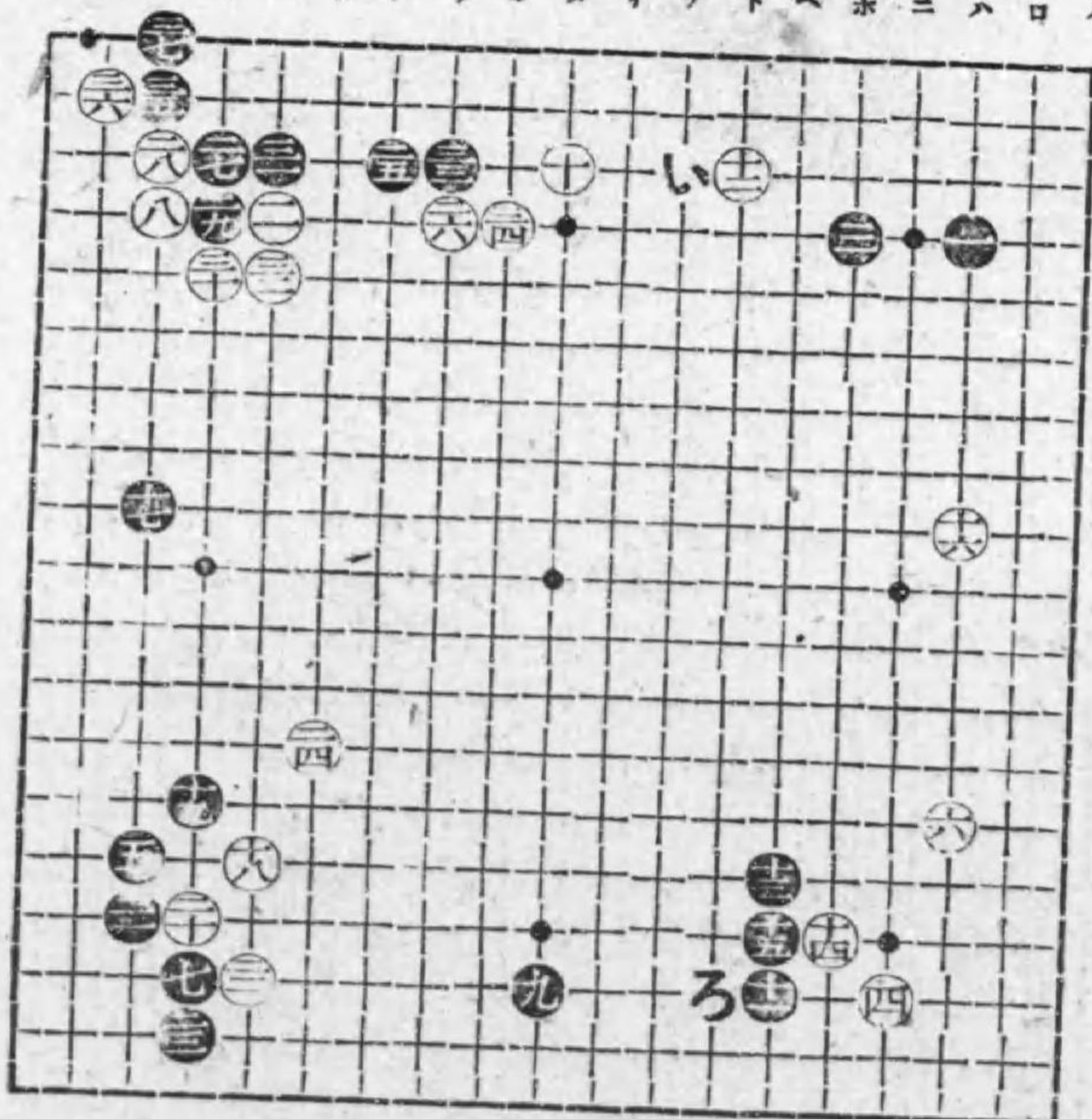
白十となつて第一の好點は十一と十二。黒十一を(い)なら、白は(ろ)。

黒十五となつて第二の所は十六と十七。白十六を十七なら、黒は十六。

白十八より二十四迄は定石である。黒十九より二十三迄の受けは定石であ。

黒二十五より三十七迄、活きは定石である。白其れに對して三十六迄、受けは定石である。

ツソレヌヨカヲラルヌキチトヘホニハロイ



白十となれば、黒十一の點が當面第一の所である。
 白十二を三十と迫るのは、黒五が「レ」の十四に在れば
 の時。斯う五では十二で三十に迫つても、黒は平氣の平
 方である。

白十二と其の方を擇んだのは、四と六を中心にして十
 と十二と、左右に張ることが右上好いからである。
 黒に十二と來られることも、同じ意味。

白三十の打込みは定石である。白四十と出を取る爲め
 三十六、三十八と運んだのも定石である。

黒三十九の取りは定石である。白三十八に對しては其
 外ない。白(い)なら、黒は(ろ)。

前譜本譜の如き形勢となつて、黒が必勝だと言ふ人は
 容易ならぬ達人である。

と言つたり地より白は黒に兩締りをさせても、あるい
 は一層興味深く打たれるかも知れない。

黒五と縮ることは定石である。黒七となつて見ると、
 五は七の釣合上厚く見える。が白(い)と打込まれ、黒
 (ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)と白に活きられる一害は
 ある。

白二十二黒二十三迄は共に定石である。

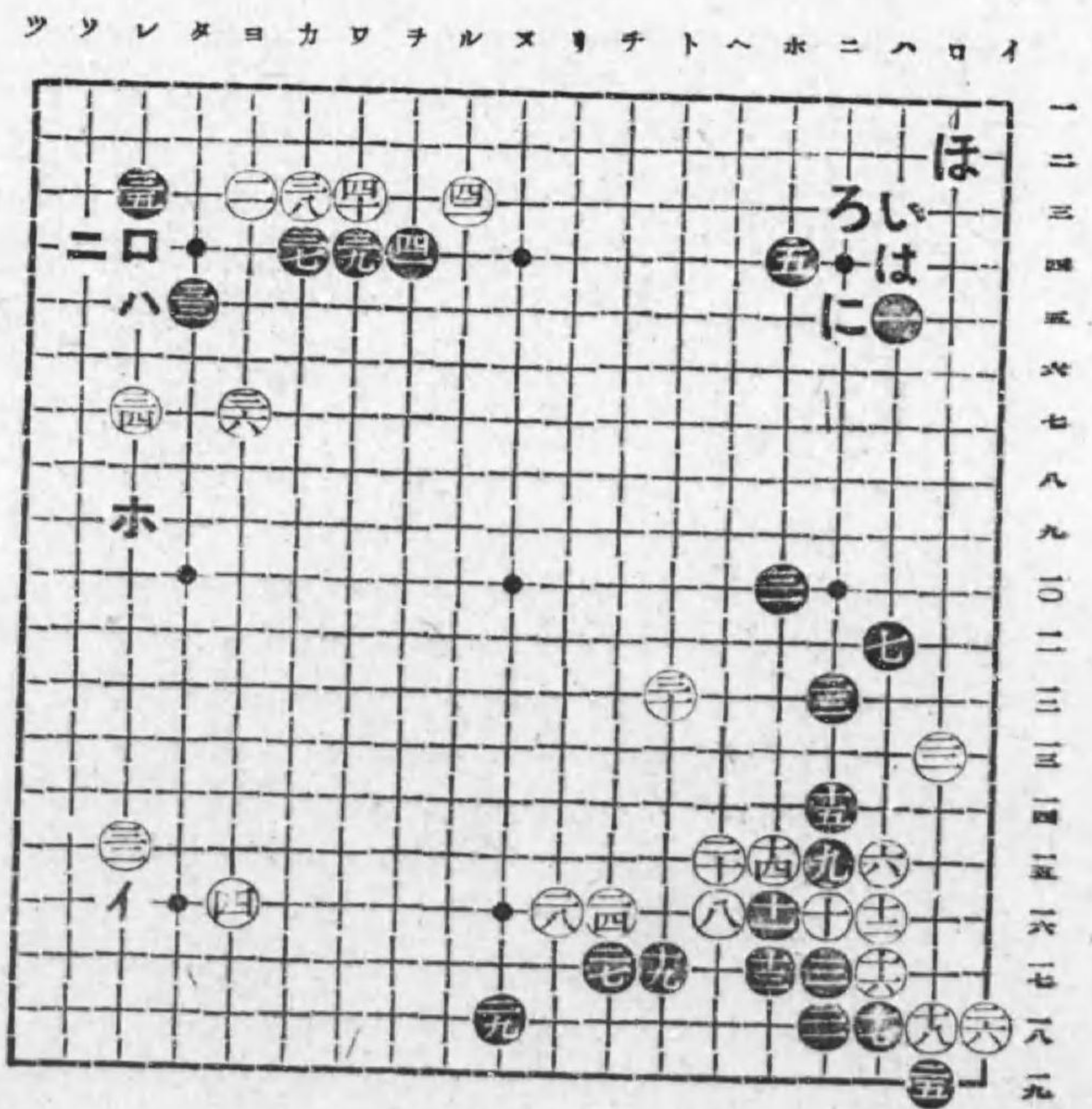
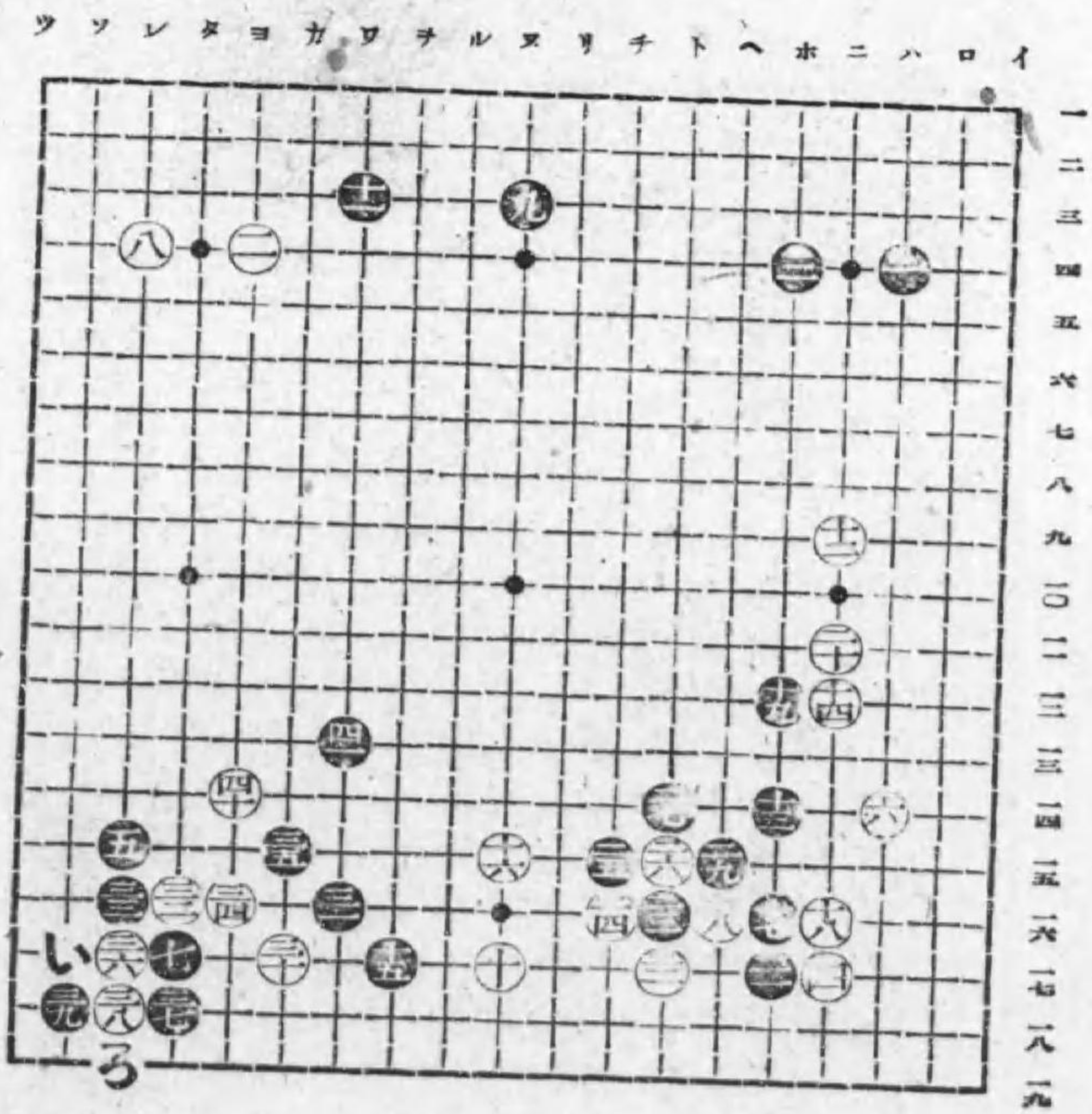
白二十四の時には、白に様々の打方がある。白二十四
 より三十迄は定石である。

黒二十九も三十一も定石である。

黒二十九となつて見ると、白三十二で(イ)と縮りたく
 はない。其れは黒二十九の尖端が、左下隅へ嫌に響いて
 あるから。

黒三十三に白(ロ)、黒(ハ)、白(ニ)、黒(ホ)となるこ
 とは定石であつて、黒二十三の望む所。

白三十四で黒に三十五と三十三の要地を與え、事は平
 常でない。が三十二の關係上三十四は時機に適する。



白八より十六迄の定石は、先づ自己は其處に地を取り
 黒三の左側の勢力は半ば消し、此處で黒がどんな布石の
 計に出るかを見る。

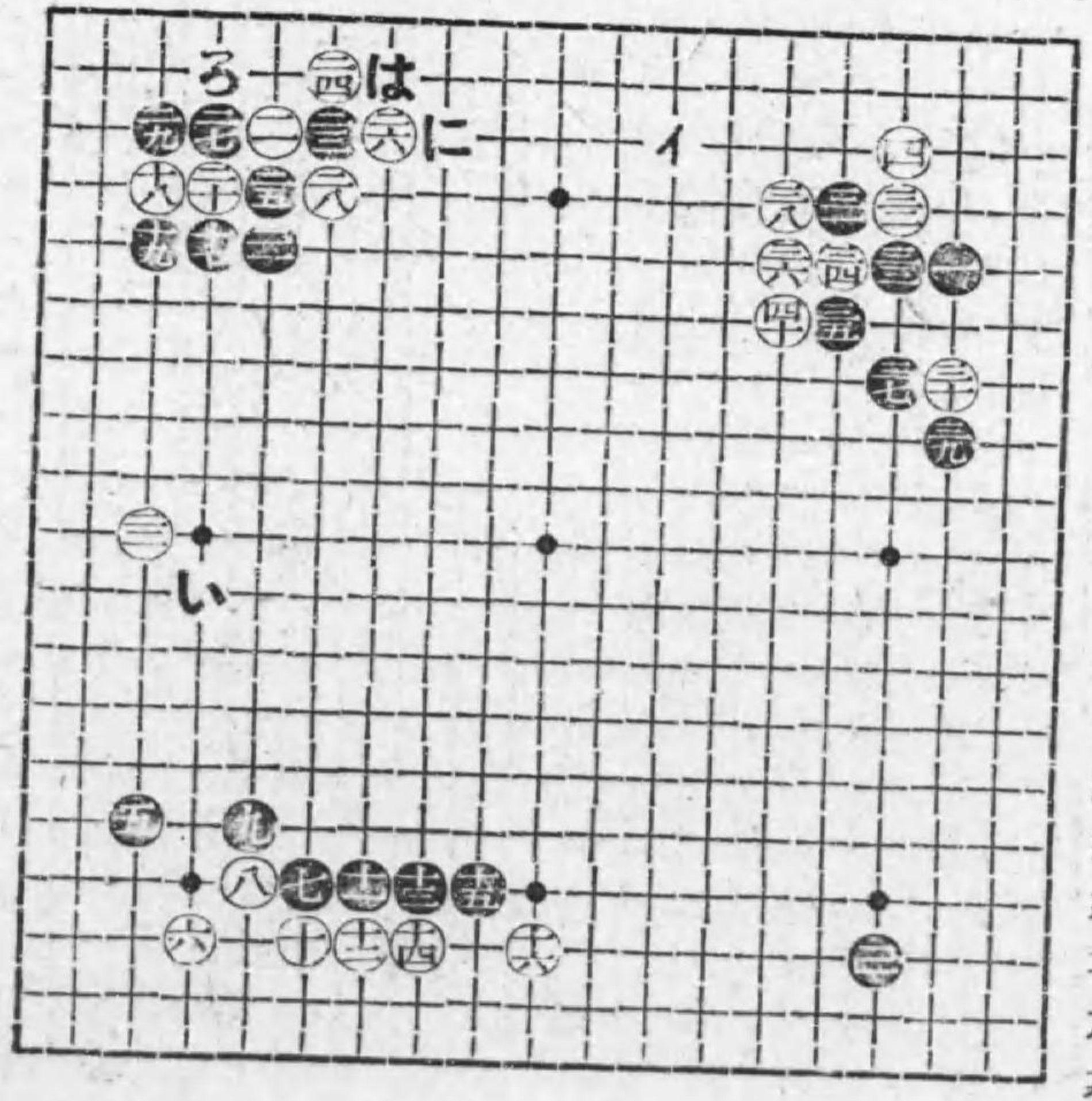
黒十七で二十二だと、白に十八或は十七と締られ、後
 ち(い)と肩を衝かれ、十五となつた模様を消されること
 が遺る。

黒十七の意は二十一となつて、白に二十八と受けさせ
 黒上下中央の「タの十」を占めることにある。では黒の目
 的通りと白は二十二。

□ 二十三は定石である。

白二十六で(ろ)、黒二十六、白は(い)、黒(に)となるこ
 とは共に定石である。ところで白二十、二十八で黒に
 二十九と、白二子を取らせ(ろ)のは平常は白の損。
 だが白は三十と轉じることにより、四十迄となつて其の
 損は取戻した。
 といふ見地より黒三十一は(い)の點。

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



黒九に對して白十なら、白十二迄黒十三迄は共に定石
 である。黒九で十二だと、白(い)、黒十一、白(ろ)とな
 つて、黒は好結果が得られない。

□ 黒十五で十七だと、白(れ)の十一で黒は面白くないか
 ら十九と中央に據る。

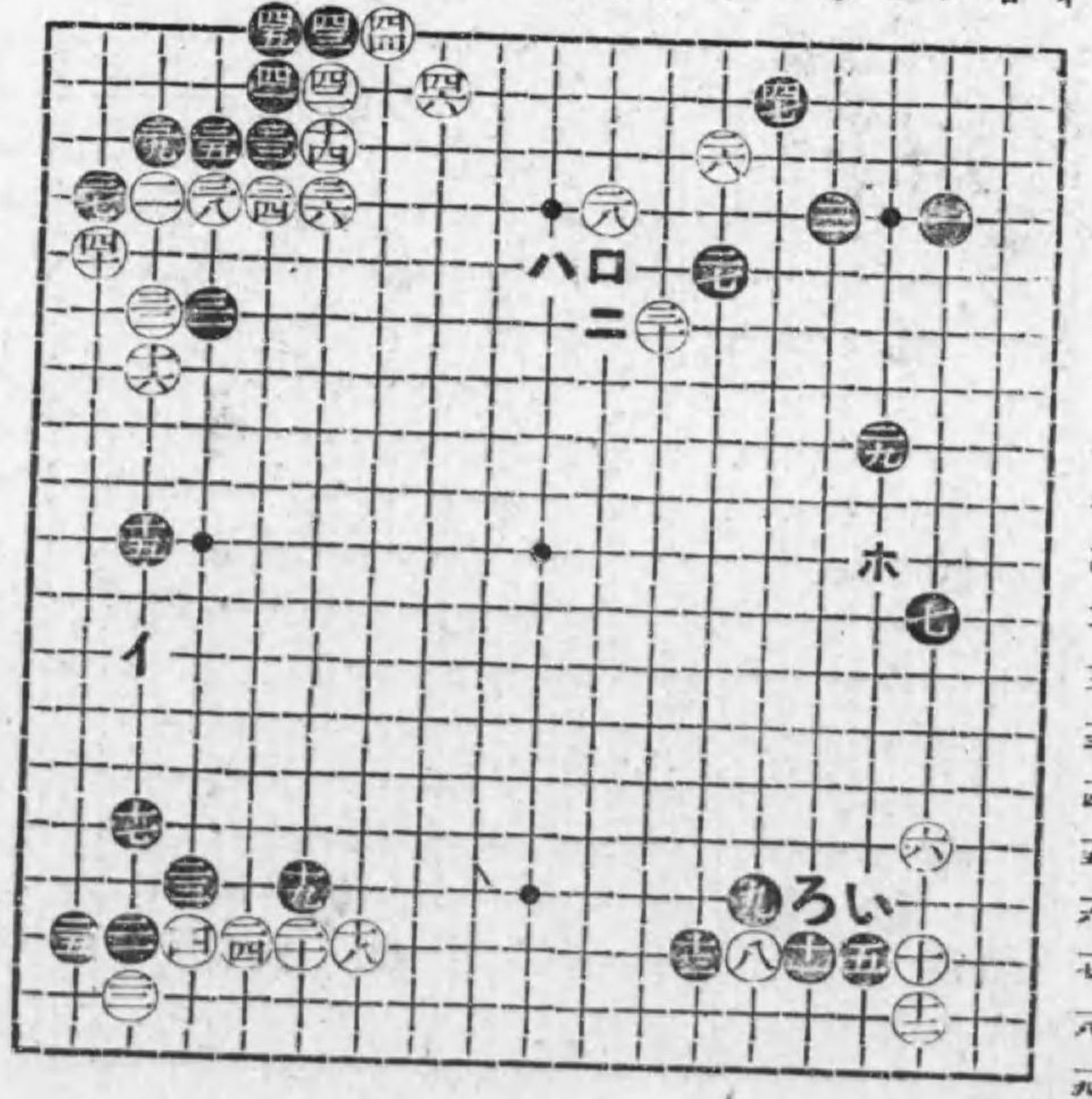
白十六を「レ」の十四の締りは、黒は三十二。白十六は
 黒に十七と來させ、十八で黒十三の強さの左邊を制限し
 た。のと次ぎに(い)の打込み。で黒は十九より二十五迄
 で白(い)を防いだ。といふ譯。

□ 黒二十七で「リ」の三二の打込みは、白に二十七と飛ばれ
 黒は左邊を薄くする。

黒二十九で(ロ)、白(ハ)、黒(ニ)だと、白に(ホ)と七
 の肩を衝かれて、黒(ニ)迄は馬鹿を見る。

□ 黒三十七は定石である。白三十八を三十九だと、黒は
 「タの五」。

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



前譜黒四十一で(シ)の活きだと、白(ハ)と来られる
 ことが大きい。前譜黒四十一より四五迄の先手は、前
 譜黒四十七即ち本譜「への二」と行きたい爲めである。
 が黒は手抜きの上隅が、白に先手で来られたら、どう
 するかといふ解決は持たなければならぬ。

□
 白(シ)と来るとは黒が活きで問題はない。問題は白
 (ハ)、黒(シ)、白(ハ)、黒(ハ)、白(ハ)である。

□
 白(ハ)に、黒(ト)だと、反つて白(チ)と劫の促進を
 與える。黒(ト)は手抜きで(リ)が大きい。

□
 左上隅は白も手を抜くより外ない。然し何れかは打つ
 ことになる。假りに黒「ツの三」、そして白は外部の駄目
 を詰め、それから白は劫に勝ち黒を打上げる迄には、一
 人で打つても三手は要する。それには白は黒から劫立て
 のないやうにして置かなければならない。第一黒(リ)で
 黒は問題の方の約半分は得てゐる。一寸こんなもの。

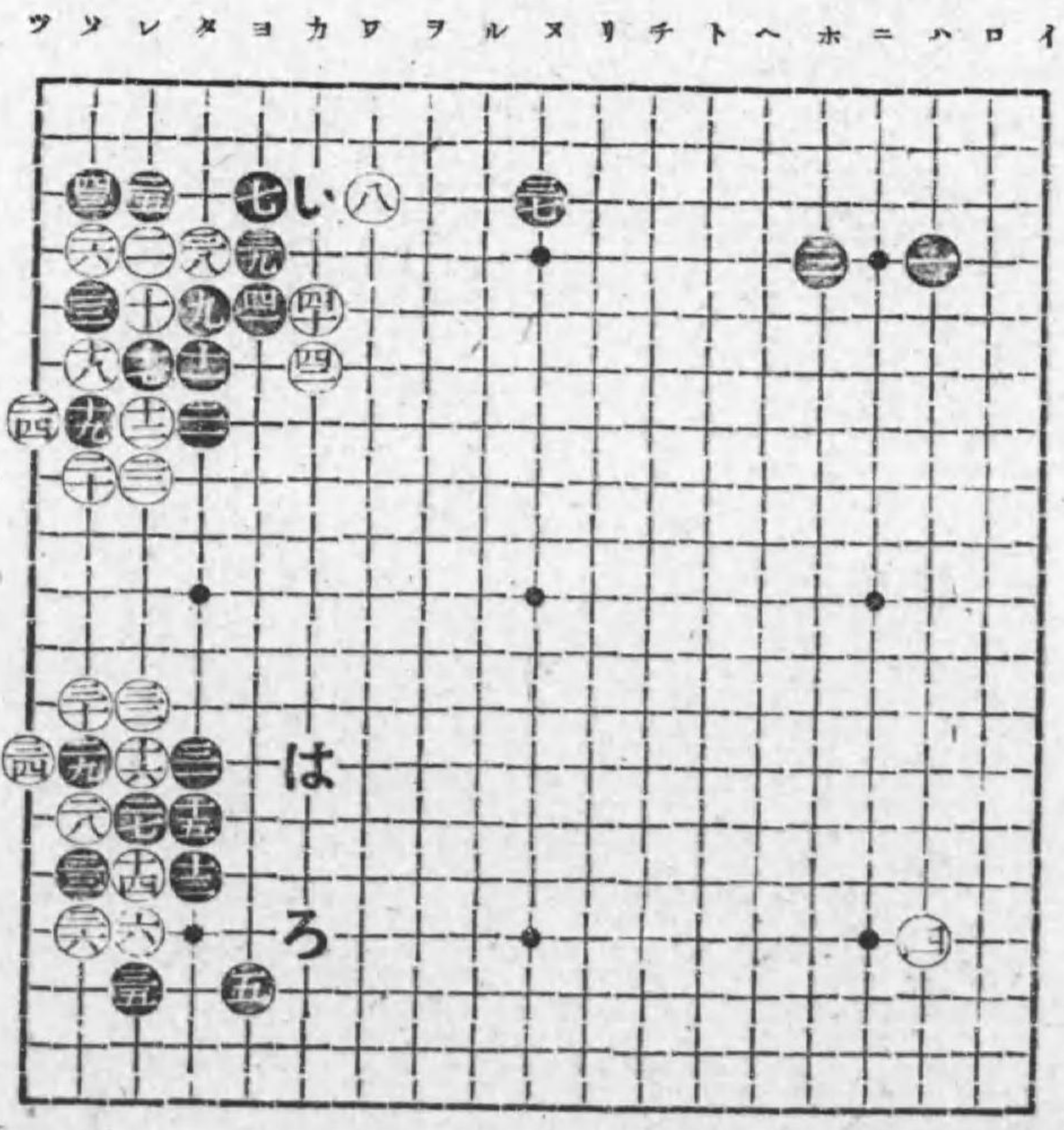
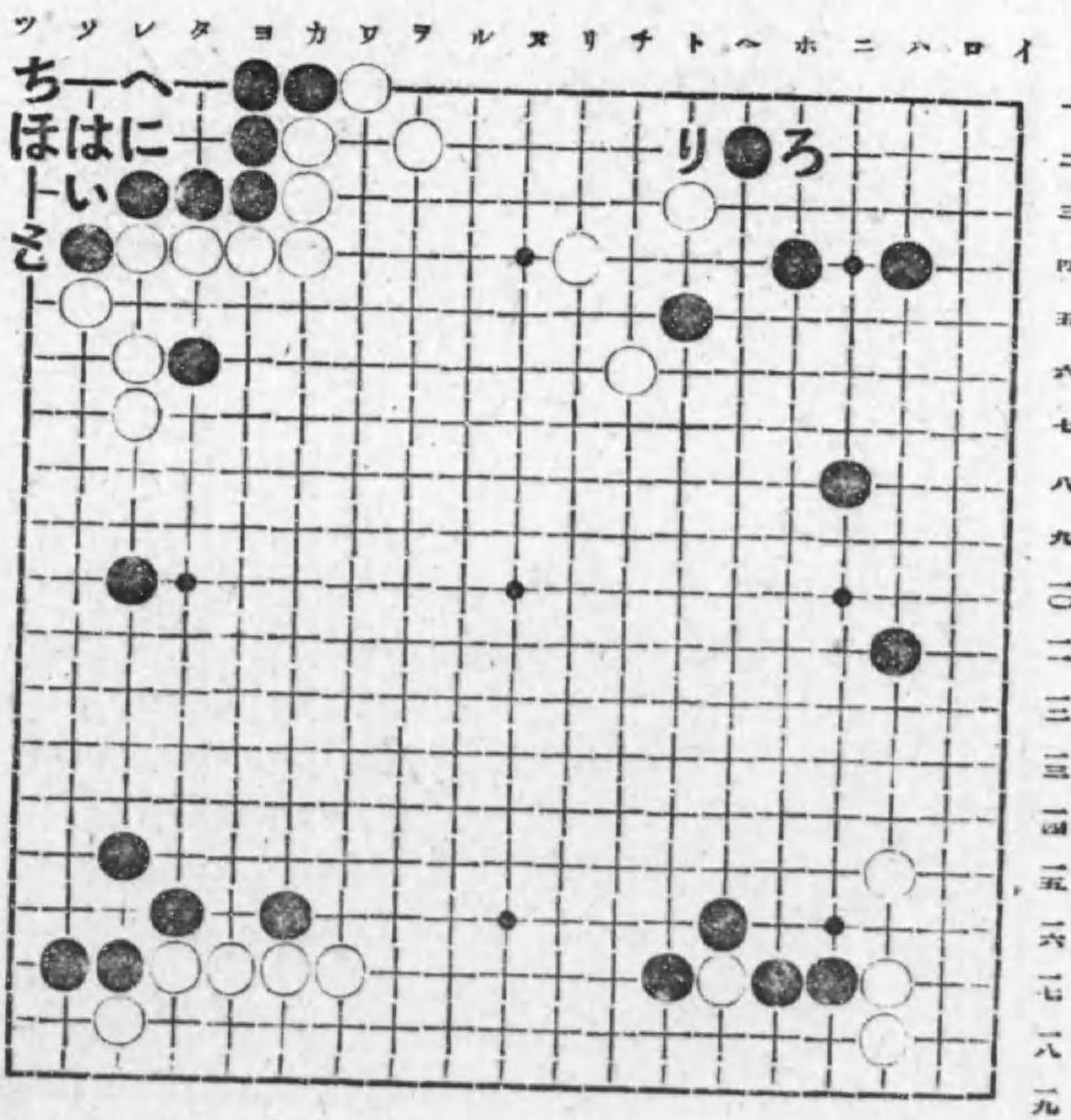
白二十六迄の定石。白三十六迄の定石。是れシ白は二
 ケ所圖の如くの方角で重ぬると、白は其れが敗局である
 其の理は、白二十、二十二の面は下の方へ少なくとも五
 六歩先きは自己の支配下と見られる。
 又た三十、三十二の面は同じく上の方へ五六歩先きは
 自己の支配下である。といふ事は恰かも、汽脚車と汽脚
 車とがガチャン——で大破の様。

□
 是れを避ける好い布石がある。

白六で十三、黒六、白十四、黒三十六そして白は(ハ)
 に大桂馬縮り。の時黒「レの十一」なら、白は「レの九」。
 の時黒(ハ)なら、白は(ハ)の定石で良い。

□
 尙ほ避ける方法がある。

白十で三十八、黒三十九、白四十一に切り、黒四十、
 白「ヨの六」、黒「ワの四」、白十一と黒九を抱え迄の定石
 である。の時黒「ヲの三」なら、白は十六の折きで可。



黒一と大斜の定石で、白十二と黒一を打抜き先手となる定石は、實戦に用ひて、其の爲め勝局となる例甚だ多
 50。

黒左下隅の如き構へのあるのに、如何に實戦に効果があるとして、左下隅の如き方向では、反つて敗局になる。即ち白(い)と行き其の効果を擧げることに出れば、黒は先づ(ろ)と飛び、左下隅を厚くする。の時白(は)なら黒(に)と飛込まれる事あつて、地にはならない。白(は)を(ほ)なら、黒(は)、白(へ)となつて地にはなるが、其の地域は次いで黒(と)となる中央への模様と比較にならない交換である。

是れは定石の運用を誤る例だが、定石定石と言つても、實際の効果は疑はれるものも数が多い。本篇も將に終る、の際斯の言を足して定石研究家の注意を穿む。

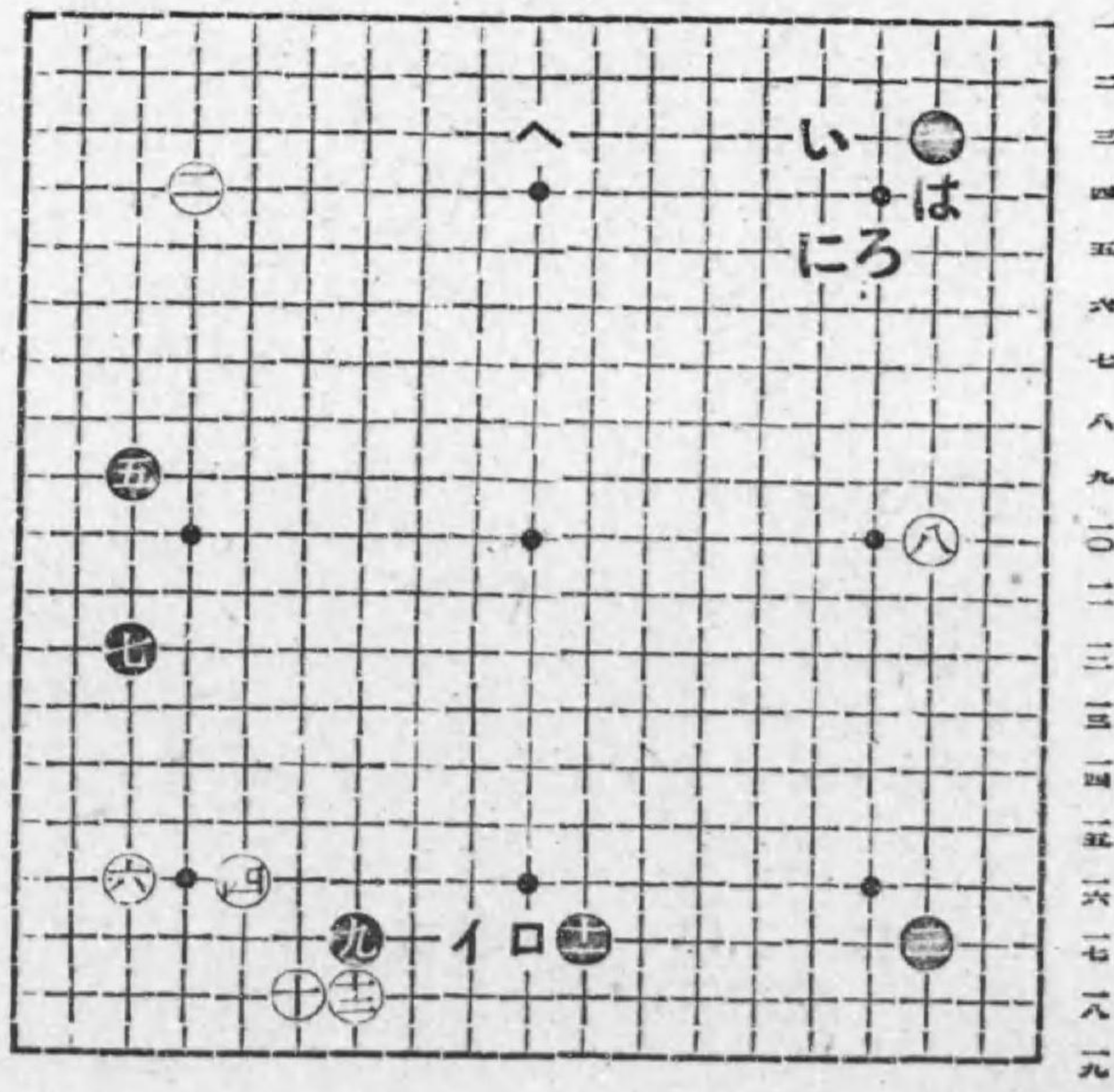
本譜は某高段同士の對局に現はれたもの。

黒一に白(い)、黒(ろ)となれば、黒が好い。其通り。即ち黒一が無く、白(い)、黒(ろ)には白(は)と必らず應じるのが定石。但し(に)と應ずる場合もあるが、それを白(は)と受けず、手抜きで黒一と行かした悪いことに當る。といふことが黒一の意に第一あるが、白は一に急に寄る要はない。すると一は手持ち無沙汰で低い地位に暫時は其態。

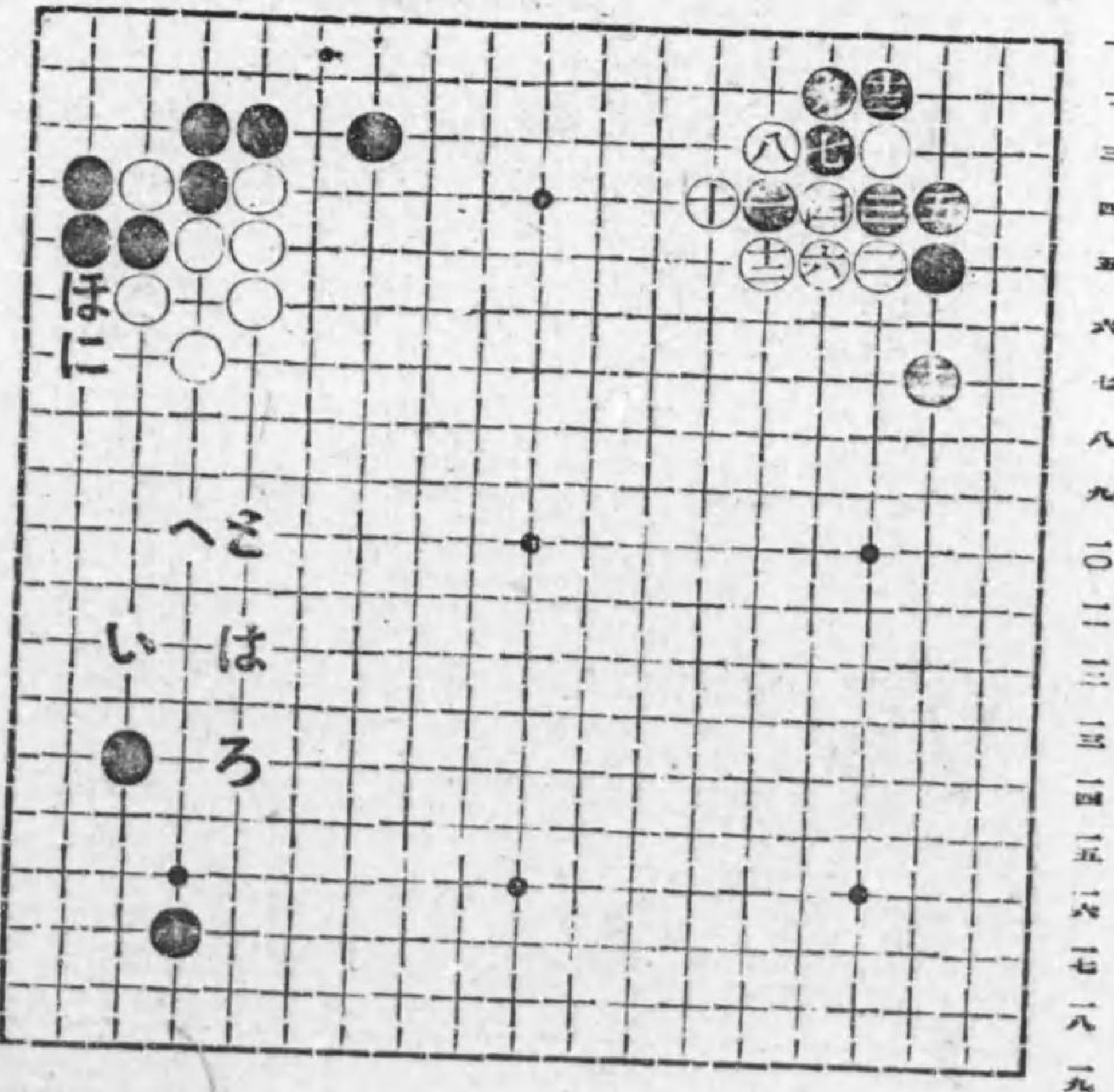
黒五で白に六と縮らせる法はない、五、七で勝てるものなら碁道は簡單で、五目並べに近い。

白八は黒に其處へ來られては悪いの意であらう、が八で(イ)又は(ロ)の方が優る。黒が其時八と占めても、一と三とに照らして位ひが低い。黒八には白は更に(へ)と大場に就いて好い。黒一は(は)の定石に如かず、黒五は六に入る定石に如かず。

フソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



フソレタヨカワナルヌリチトヘホニハロイ



白十、十二は大局に後れの布石を迫つて大いに悪い。黒九、十一、白十、十二の利害を簡単に言へば、黒九で十一と行つた時、白は解するに苦しむ、十の所で受けたことに當る。が其時黒九、白十二の交換となる譯けだが其れは前者の大不利とは比較にならない、些少の不利。

黒九に對して白十と九に弛んだ應答は、それが因で敗局になつた例は、數限りがない。黒八の意にして見れば白十の受けは先づ利であつたの嬉びは、包み切れまい。

白十では(イ)、黒(ろ)、白(は)が好い。白(は)は黒九と(ろ)の攻めをも含み、又た三の方との調にもなつてゐる

白(ス)、黒(ろ)、白(は)となつて、黒(に)なら、白(ほ)が定石であつて、黒は(に)を根據として差當り其處に好手段は無し。

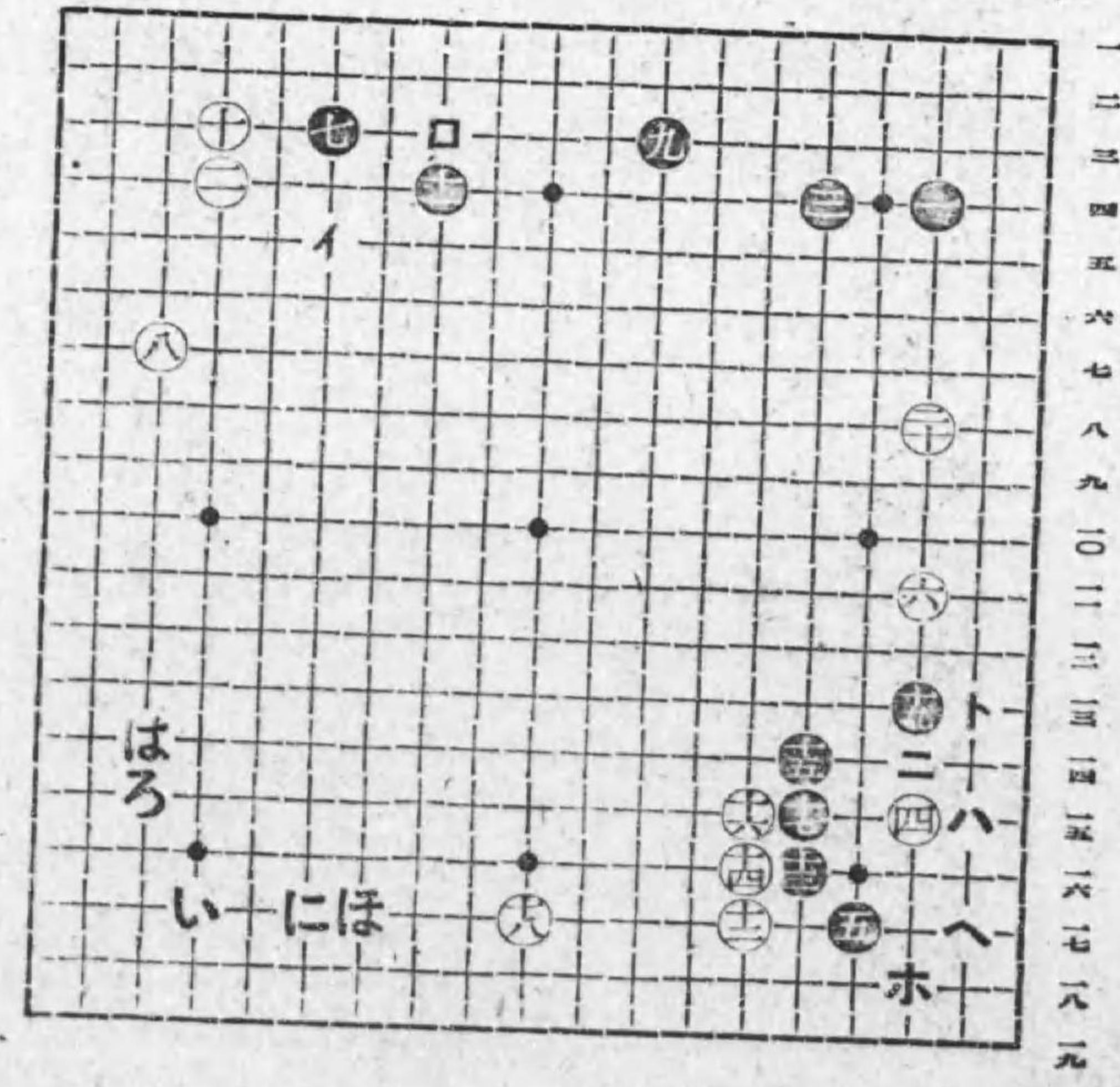
白十二は(イ)が良い。の時黒十二なら、白は更に手抜きで(ロ)。布石は斯様に運びたい。

黒前前譜一の如き着手は絶対ないかといふに、又た其れに限るといふ場合もある。即ち白八と十八のある如き際、黒左下隅を選定するに當つて、(ス)だと、白(ろ)で黒(ス)は治まらぬに、白(ろ)は八の方に廣くして好く、其他等々、黒に都合が悪いといふ際、黒は位が低いが「レの十七」に據ることは、先づ自己の治まりで、白は其れに一寸旨く寄り付けまい。といつた時である。

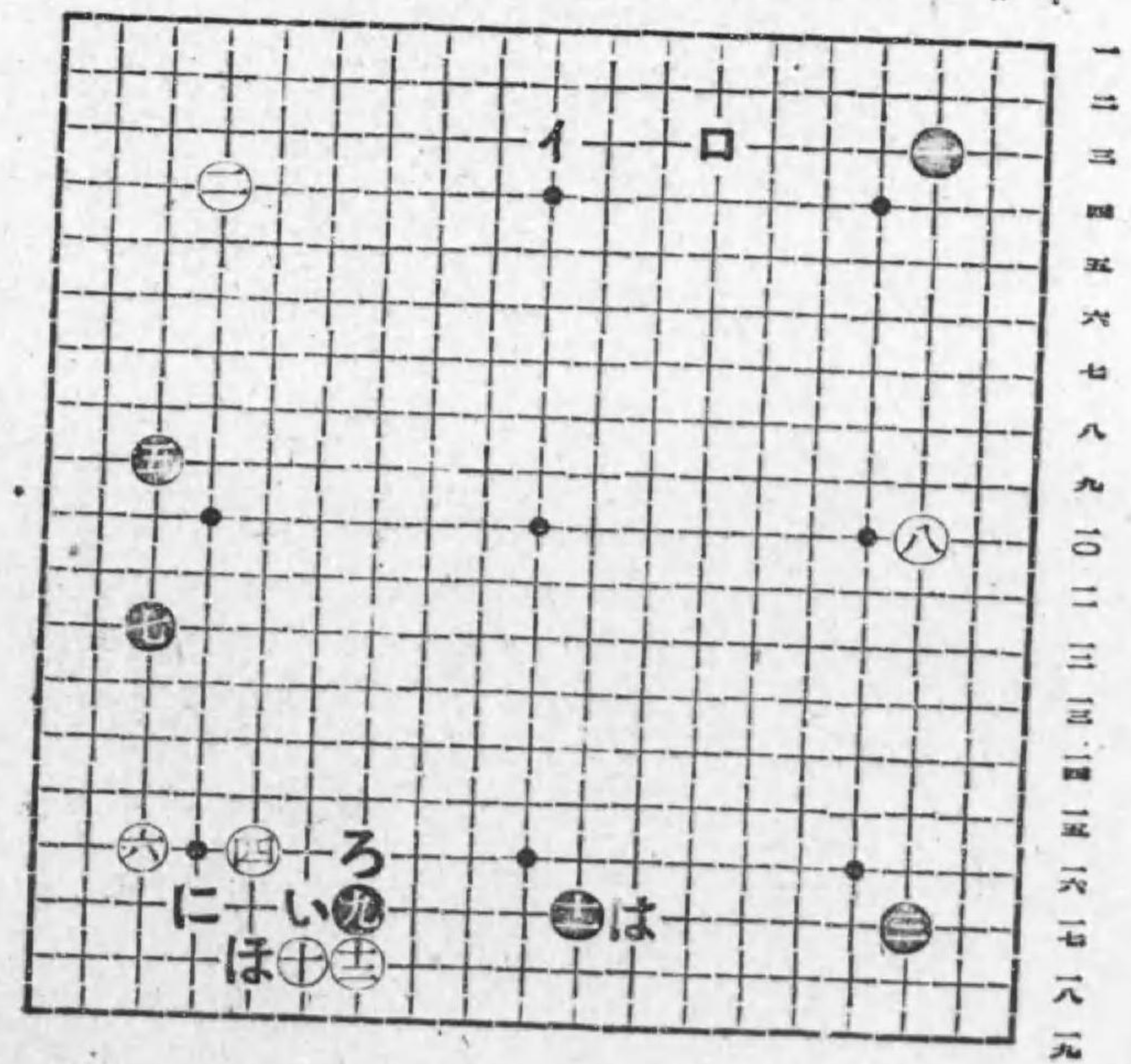
黒「レの十七」に白(ろ)は黒「ヨの十六」の有利で好いから、白(ろ)を一步退きは(は)なら、(に)が假りに黒(ス)、白(ろ)、黒(ほ)となつたより、前者は黒が三三の要地に在つて、後者(い)、(ほ)よりは優る。

黒十一は七と九との間を守る定石である。十一を(イ)だと、白に直に(ロ)と打込れて悪い。又た一方白四は白(ハ)、黒(ニ)、白(ホ)。黒(ニ)を(へ)なら白(ト)などで白四には手段が遺つてゐる。

ツソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



ツソレタヨカヲナルヌリチトヘホニハロイ



侵
分
篇

侵分が如何に大切な事であつても、時機を得ない目前の収益は、反對に相手を利して、其爲あ敗を招く例は甚だ多い。本篇は侵分早尙に因る害と其他、侵分に關した要領を説く。

右上隅、黒一より十一迄ほ置碁に於てよく現はれる黒の六悪状態である。

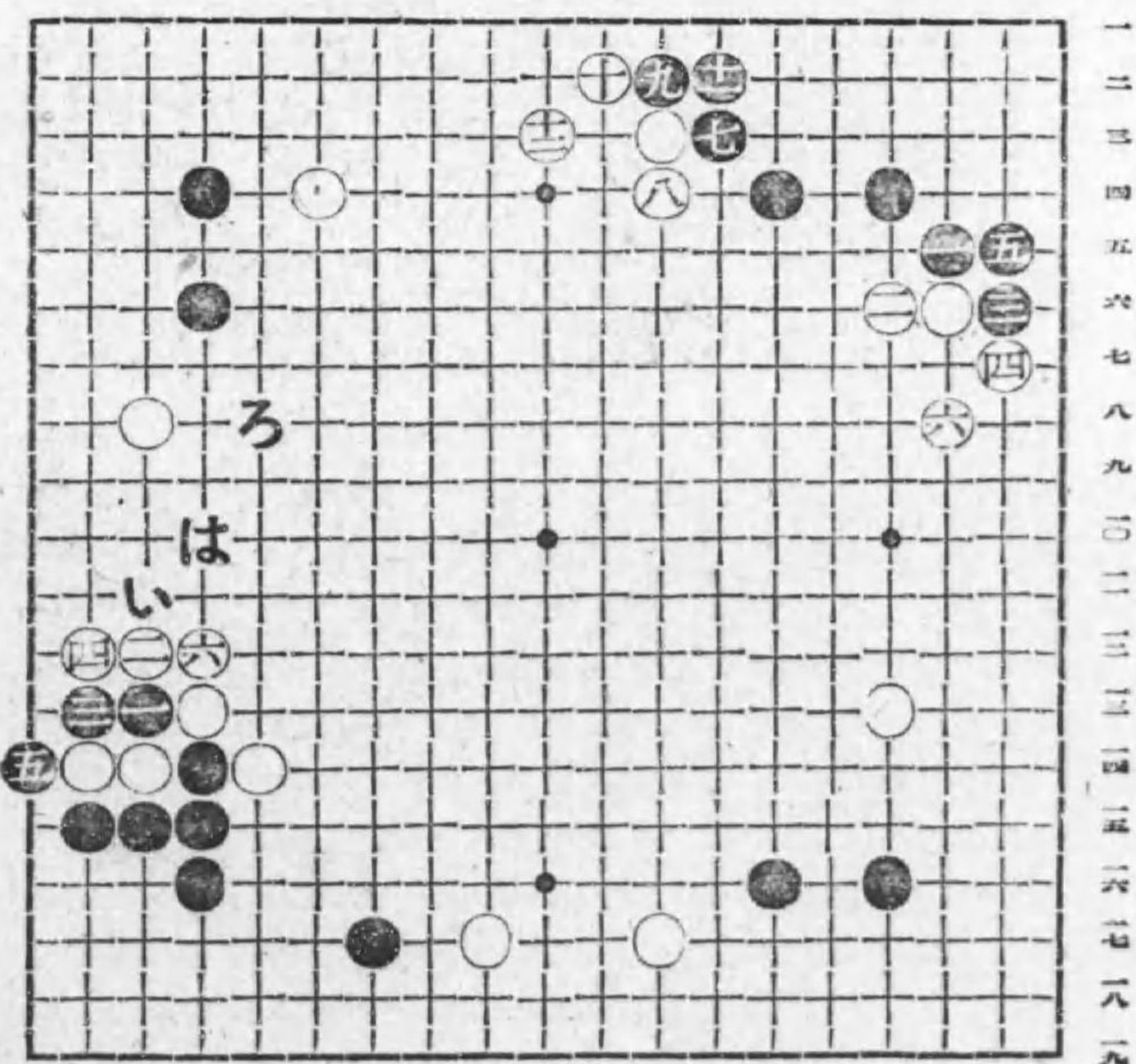
白に十二迄と受けさせた黒の心裡は、白に何んとか攻められは、しないかの怖れもあるが、先づ其處に二十幾目かの地を作して、得だつたの考へが大半であらう。

白に六迄また一方十二迄と好形を與へた事は、今目數には現はれてはゐないが、白の大有利であつて、四子位ひの碁では、黒の敗局と見てよい位ひだ。

左下隅、黒一より五迄の得も、白に六と整備させて大いに悪い。即ち(い)の打込みを失つて。

一と切るなら黒(ろ)、白(は)そしてる事、即ち白六となつて、黒(ろ)には最早白(は)とは受けない。

ツソレタヨカヲナルスリテトヘホニハロイ



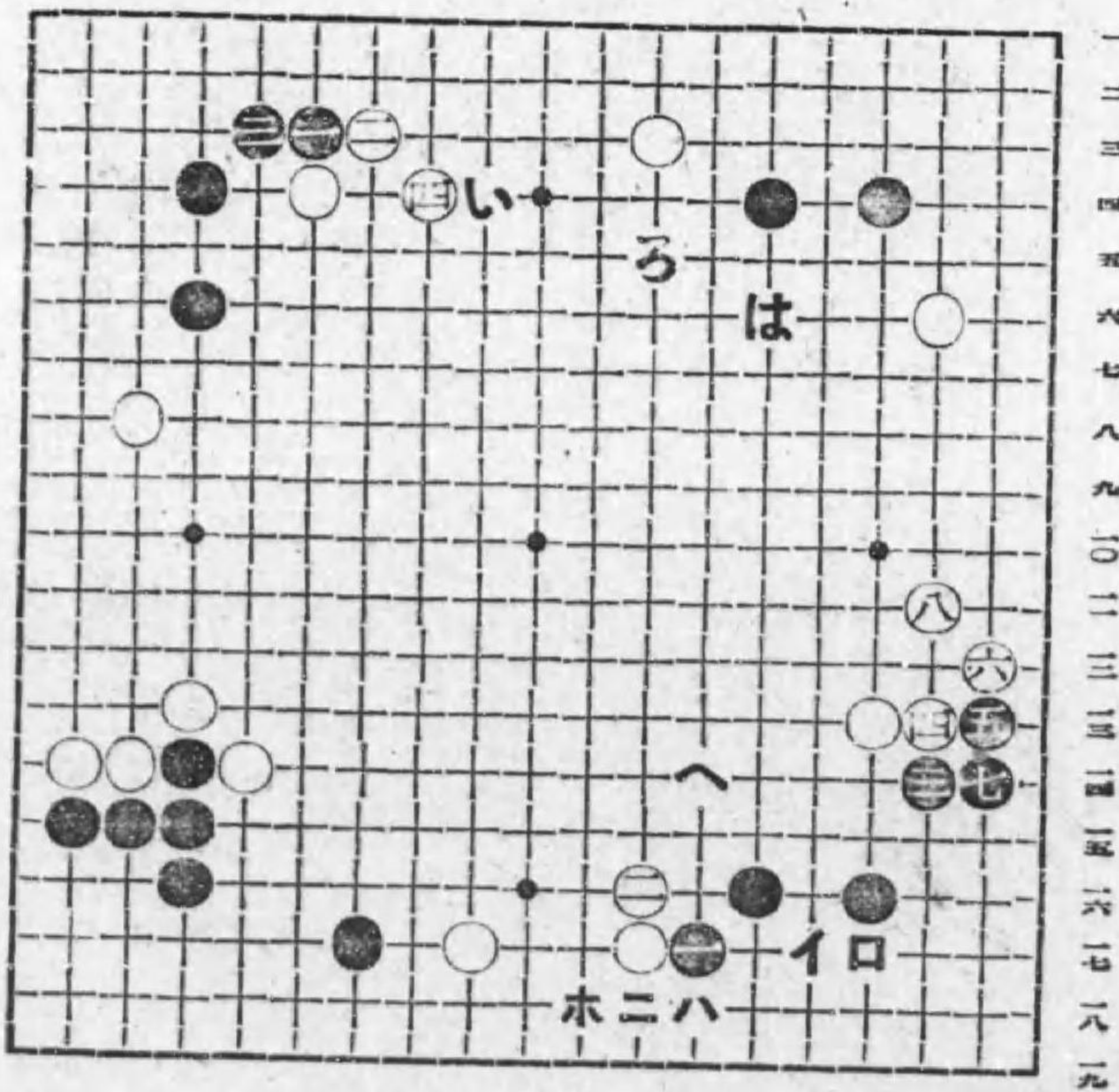
左上隅、黒一三は白を四と固めさせて悪い。其處は黒(ス)、白(ろ)、黒(は)と黒は打込みか良いのである。

黒一三の得は、白が(い)と圍つての後ちである。其れなら白(い)と圍ふ前、白「タの三」、黒「レの三」、白三、黒「ソの四」、迄の白が得はといふに、黒「ソの四」、となつて白は「レの五」、からの侵入を失なひ、白の得とはならない。

右下隅、黒一は一寸よくやる手だ。一は白を二と立たせ、白を厚くして損である。即ち黒次ぎの三より七迄をやらないで、其態にして置くと、白(イ)、黒(ロ)白「ハの十五」、黒「ロの十六」、白「ハ」と白に縮小せら、れ黒は一が無くともそれ位ひの地味は有る處。

黒七迄は一とやるからの事で、白に八と備へさせた交換は、悪いと悟られよ。尙ほ白に(イ)と入られる。で、黒(ニ)、白(ホ)、黒(ハ)の後手は白に(へ)と出を止めれば、黒はなんだか隅が不安で、氣持ちは悪るからう。

フソレタヨカヲナルスリテトヘホニハロイ



右上隅、黒一の得は白に二と受けさせて悪い。即ち、黒(S)、白二、黒(ろ)と黒が攻入る手段を失ふ。假りに白一、黒「ロの四」となつたとしても、黒(は)と行く手段がある所。黒(は)に白「ロのハ」は黒は(ろ)。また白「ロのハ」を上から「ニの八」なら、黒は是れまた(ろ)で結果が良S。

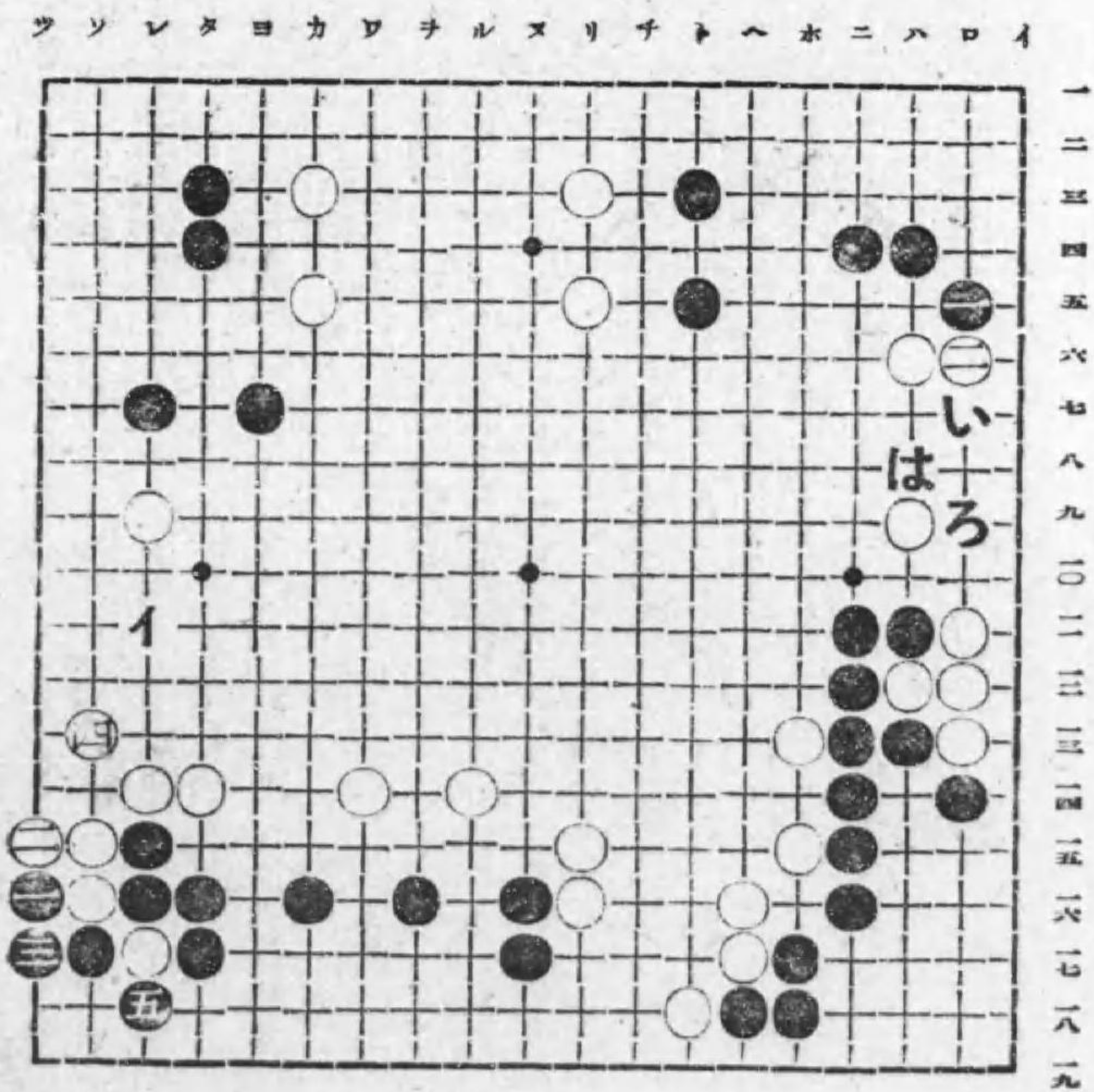
X X

左下隅、黒一は白「ソの十八」、黒五、白三と白に侵せられるのを、防ぎ白に「ソの十四」と受けさせる意。是れは無理もない黒の考えた、が白に二と應じられる妙手を知らない爲。

X X

白二は妙手である。三となつては、黒は(イ)の打込みを失ふ。

黒三で「リの十八」、白四と黒は先手取はあるが、それは(イ)の打込み其他何事もない、其處が白地となつての後ちである。



右下隅、黒二三の得は、單に得であつて右下隅の如き堅固な所へは無意味である。次頁續行

X X

白四となつては(い)と黒は受け、白(い)又は(ろ)の侵入を防ぐ外ない。黒(い)を(は)、白(に)、黒(は)と黒の受けは、白に「リの十九」と粘がれ、黒は一方「トの十九」に下がる事と、(い)に切られる事とを如何せんやである。次頁續行

X X

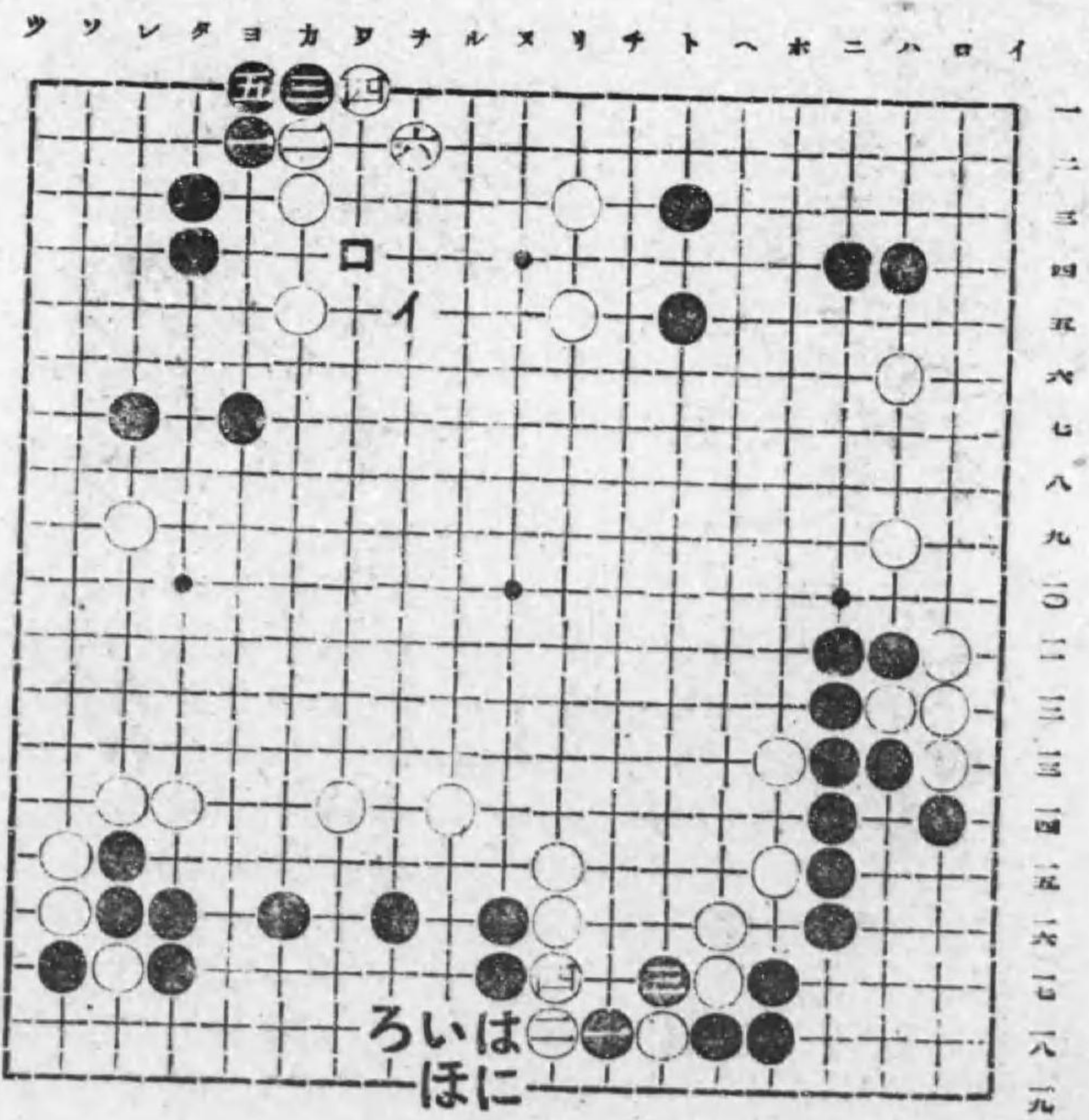
黒一は二が良い。其の次ぎは黒「チの十七」白三黒「トの十五」といふ事を白防いで黒一を二に、白一なら、黒は四。また白其の一を四なら、黒は一。

此の白後者は白が悪い。

X X

左上隅、黒一より五迄の得は、白に六と固めさせて悪い。是れは白が假りに(イ)とでも圍つての後ち。

黒一で「ヲの三」に打込みがある。其時白(イ)なら黒は二。また、白(イ)を(ロ)なら、黒は「ルの五」。



右上隅、黒一と三は白が將に(イ)と打込む防ぎであつて、時機早尙でなく、時機に適つてゐる。但し白より打込む(イ)を怖れないなら別の事。
 一を三だと、白に一と受けられ「への一」と白より走られる大が残つて黒の損。

左上隅、黒一と三は時機早尙である、一の前黒(イ)、白(ロ)の交換が、黒は必要だ。

白四となつて黒(イ)だと、白は(ハ)。に黒(ロ)は白に「レの十一」と切られて、黒(ロ)は出られない。

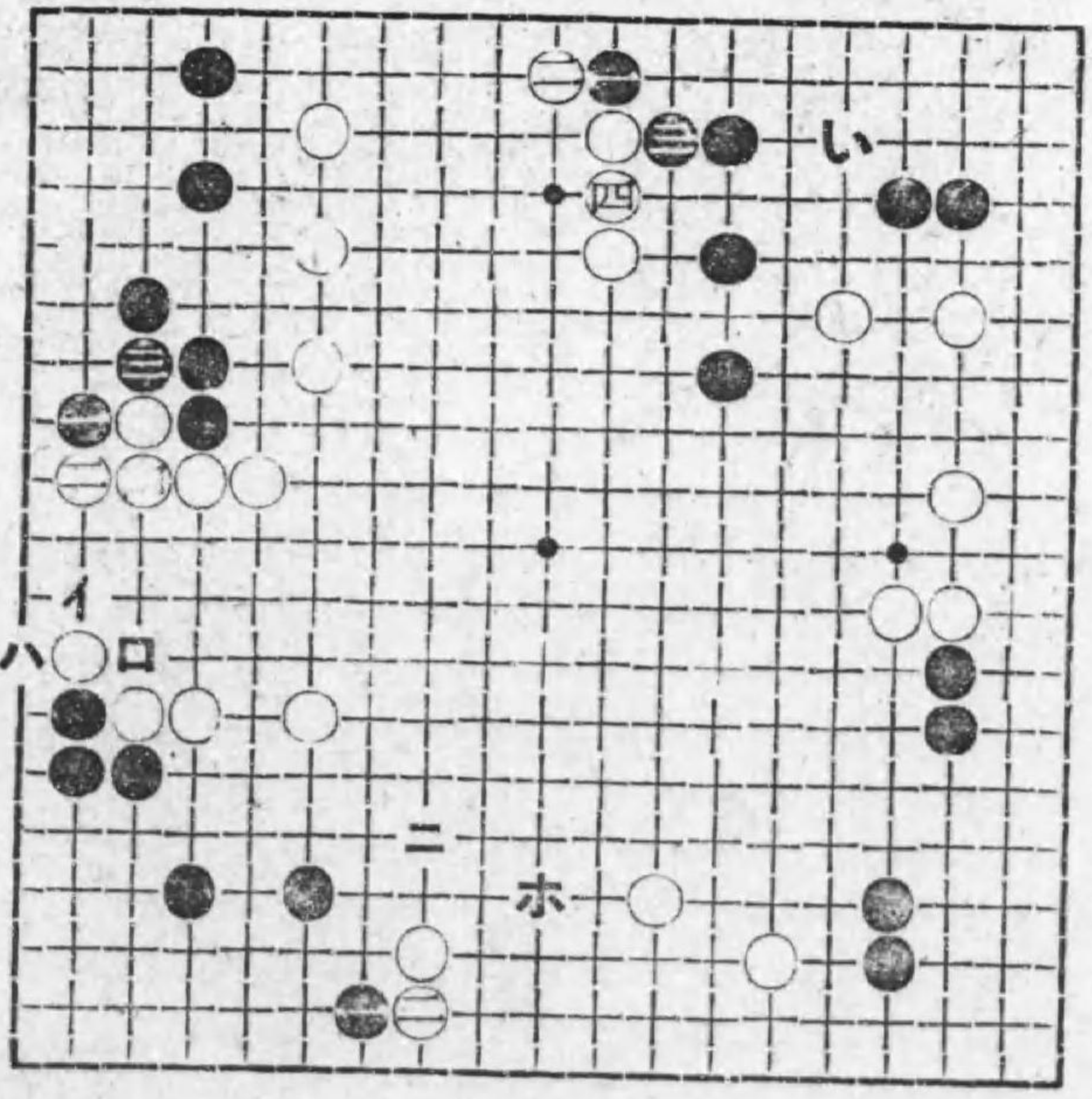


左下隅、黒一で白に二と受けさせた事は黒が悪い。黒一の如きは間間無意識に打つこと多し、其の爲「ヌの十七」の打込みを失ふ。「ヌの十七」に打込む意が無くば、黒先づ(ニ)、白(ホ)の交換をして、黒は一が良いのである。

白二となつて黒(ニ)には、白(ホ)とは受けない。

黒一白二が無く黒ヌの十七の變化は次譜。

イ ロ ハ ニ ホ ヌ ヲ カ チ ル ヌ リ ナ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ

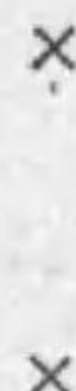


下邊、黒は一より十一迄で完全な活。

白四を七なら黒は「トの十七」。又か白四を「トの十七」なら黒は七。そして白(イ)なら黒は八。白(イ)を「チの十八」なら、黒(イ)、白(リ)の十七、黒十一に當て、白三に粘ぎ、黒九に粘ぎで白は兩斷され甚だ悪い。



黒一より十一迄で活られることを、一で(ろ)、白(は)に依つて失ふ、事の如何に悪いかは判つたであらう。新様な事にて黒は一局の敗を招くのである。



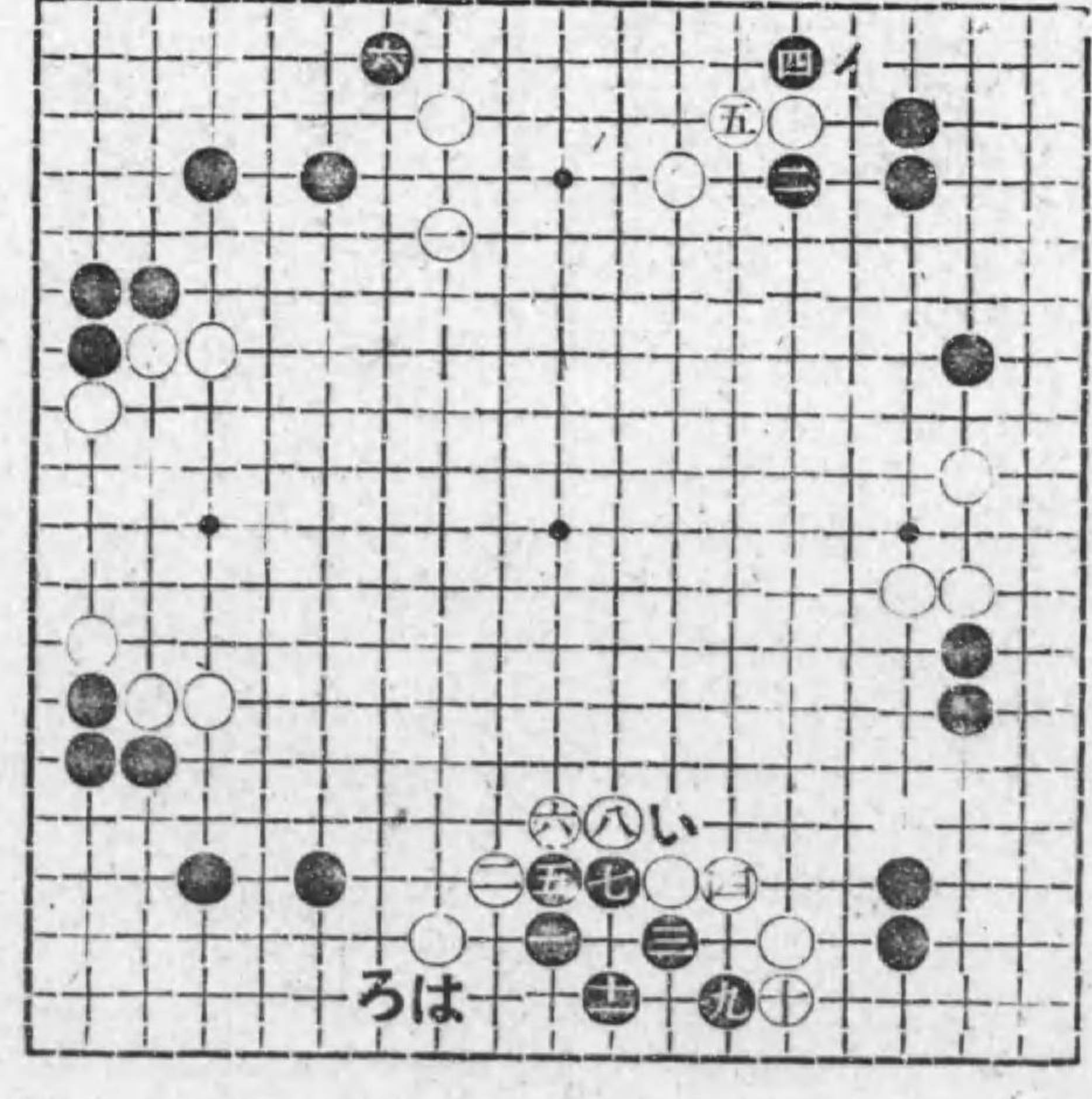
上邊、白が一と備へてから、黒は二より六迄の運びが良い。是れが侵分の本格である。

白三で(イ)だと、黒に「ヌの三」と打込まれて、困る。即ち其時白「ヌの四」は、黒は五。

白三で五なら、黒二は右上隅の爲めに、大なる働らきをしてゐる。

白五を「トの二」なら、黒は直に「ホの三」と當てるのである。これを怠つて白に(イ)と來られては黒二は悪化。

イ ロ ハ ニ ホ ヌ ヲ カ チ ル ヌ リ ナ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ



上變、黒一で白に二と受けさせる得は、終局優分に入つて、四五目時代の事。今黒一、白二の優分は黒が悪い即ち黒(イ)、白(ろ)、黒(は)、白(に)となれば黒は一で二に行く、大なる得が生じるからである。
まゝ黒(チ)の四、白(ヲ)の三、黒(ル)の四、となつて、白手抜きだと、黒は二と行く手が是れまた生じてゐる。

X X

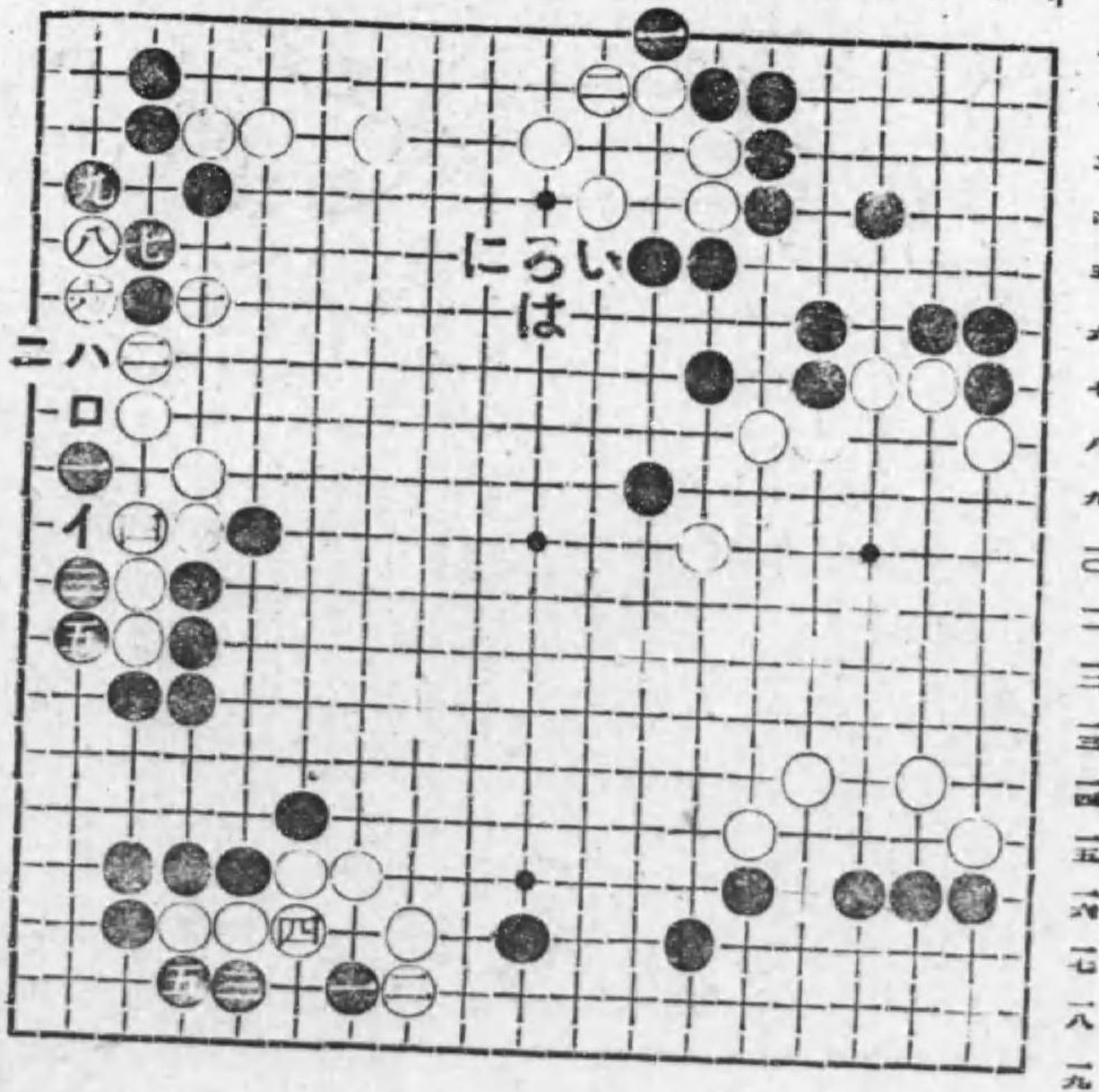
左下隅、黒一より五迄は、本格の優分でもあり、また白を攻立てゐる。が注意を要することは、右下隅の如き黒の隅が撃ければ良。が。

X X

左邊、黒一より五迄の得は、白に十迄と運ばれて、反つて黒が活きを計る事となつて悪い。是れは時機の問題ではなく、周囲の關係である。

黒三で六、白(イ)、そして黒一を(ロ)、白(ハ)、黒(ニ)と渡る如きは、地が付かず損である。黒一は(ハ)、白(ロ)、黒(ソ)の十三と白を攻める優分が良。

ツソレタヨカヲナルヌチトヘホニハロイ



黒一より白八迄の優分は本格である。三の切りは妙手である。即ち三の爲めに黒(イ)、白(ろ)となる得が二目に當る。

X X

黒三が妙手であるといふのは、三で五より白八迄となつては、其時黒三に白は四と應ぜず(ろ)。

黒三に對して白四を(ろ)だと黒は八。

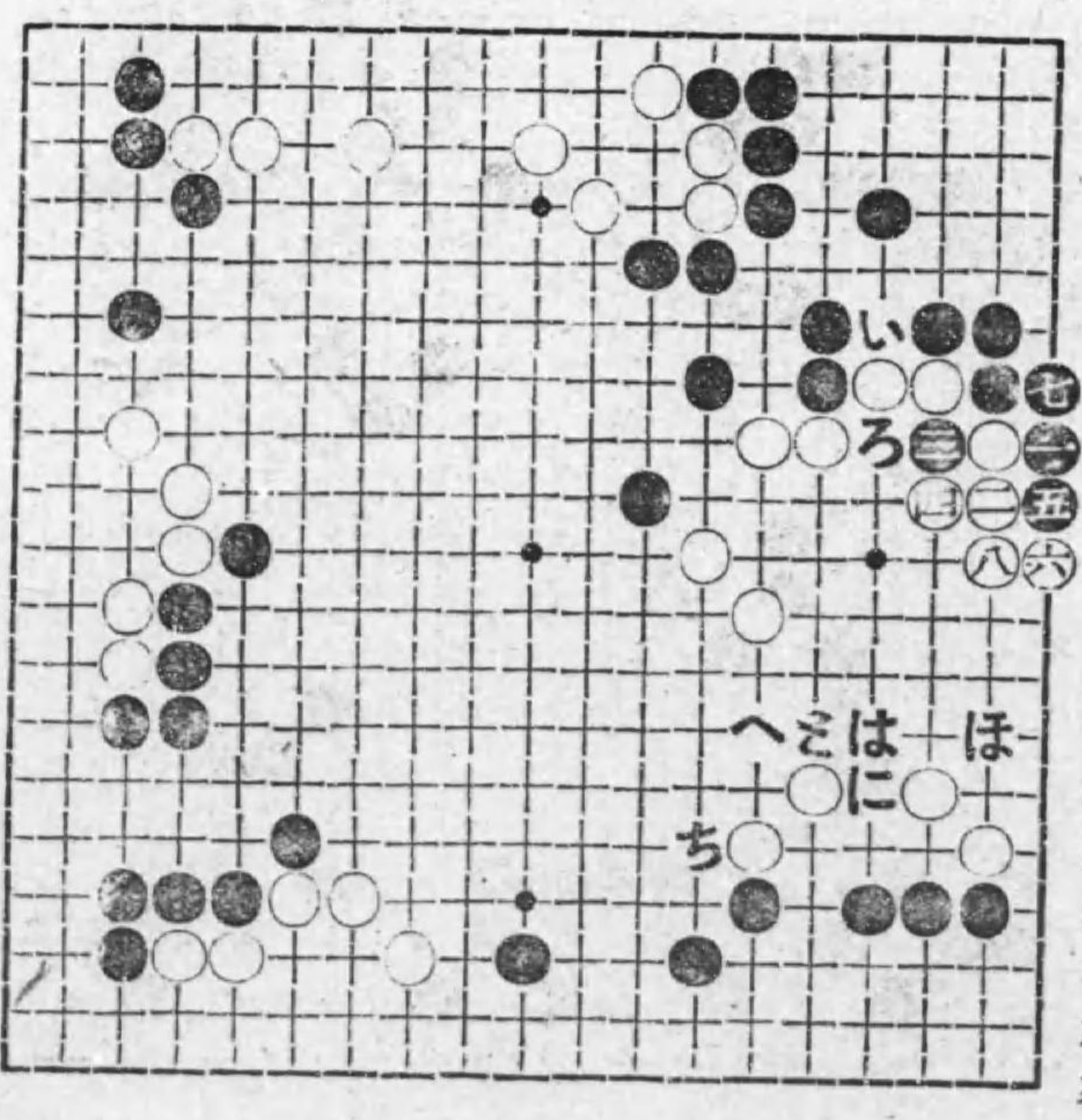
X X

しかし本譜の如き場合にあつては、時機早尙にして甚だ悪い。其れは黒一で二、白一、黒四、白三、黒「ニの九」白(ろ)、黒(は)、白(に)、黒(ほ)などの手段を黒は無くす。黒は「ホの十」も先手で利く。

X X

黒一より白八迄の優分は、黒(ハ)、白(と)、黒(ち)となつて後ちで宜い。黒(ち)と打つてゐる時代に、白が一と下がつてゐるなどは、黒に他を打たれて損と見て宜い。従つて一より八迄は、黒の欲する時代に黒が運ばれる。

ツソレタヨカヲナルヌチトヘホニハロイ



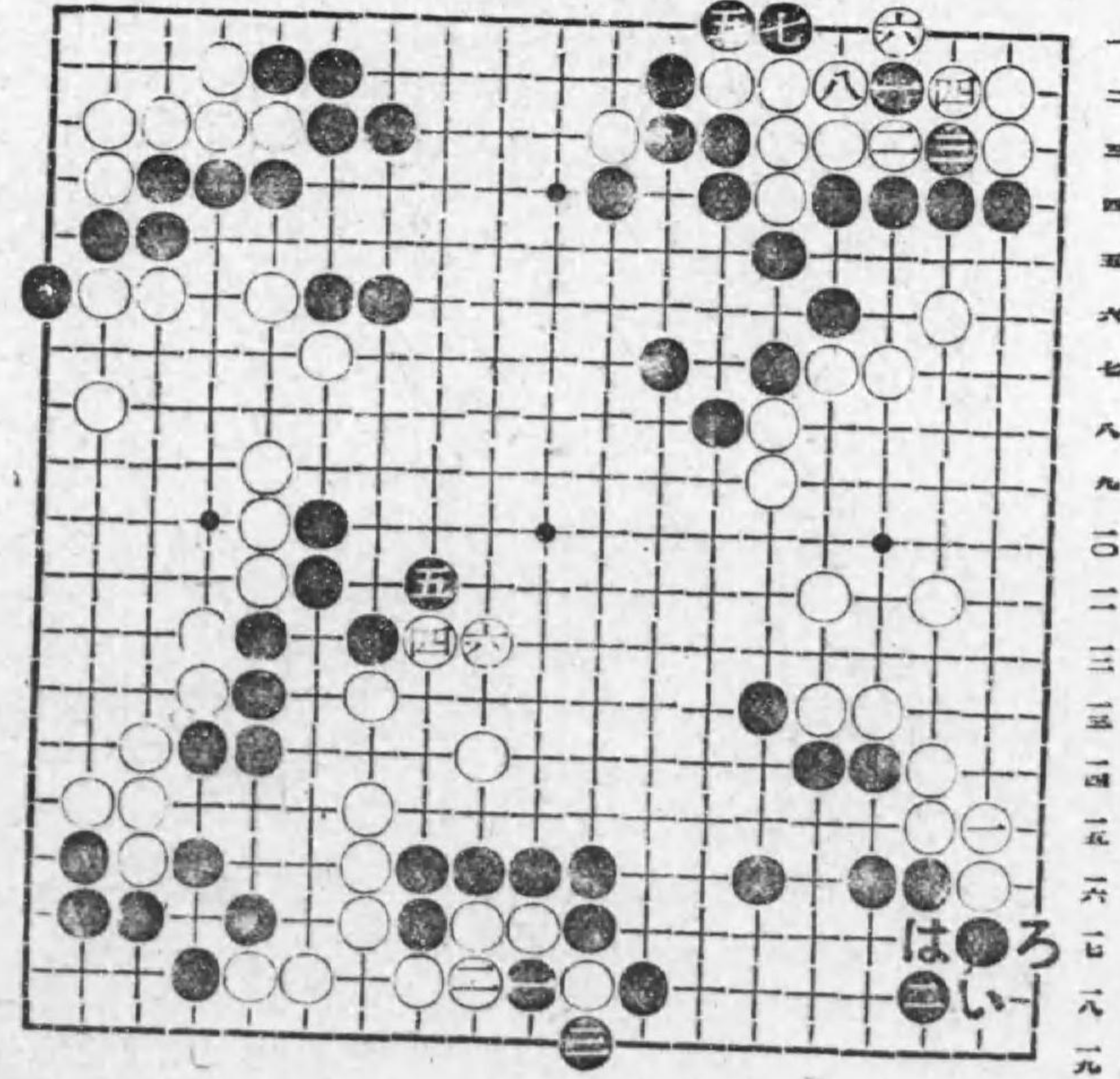
右下隅、白一の粘ぎは十五目以上に當る、それに對して黒二と直に應じることは、よく見る下手の心理だが、其處へ御出でなさいと白に命ぜられて、居る如くだ。

黒二は六目に當る即ち、白(シ)、黒二、白(ろ)、黒(は)となると見て。但し二一備へなければ、其の隅が危いといふ場合は別。要は白が十五目以上やつてゐるのに六目の手をやつてゐてはいけない、其の以上が他にあらうといふ事にある。

下邊、黒一で三と行く手もある、其時白四より六迄なら、黒は二で三となるより大得。但し黒一を三の時白一「ヌ」の十九、白二となつて、其の一團の白を大いに攻められないでは、不可の事。

右上隅、黒一より七迄の侵分は、其外に意味が無ければ、それ以上の運びはない。が本圖の如き右邊白地の關係にあつては、早尙で黒が大損。

ツソレタヨカヲアルヌリチトヘホニハロイ



右上隅、黒一より五迄の手段は、右上隅の白を利用し得る事である。斯様な手段がある故、前番黒一より七迄の侵分は悪いと言つた。

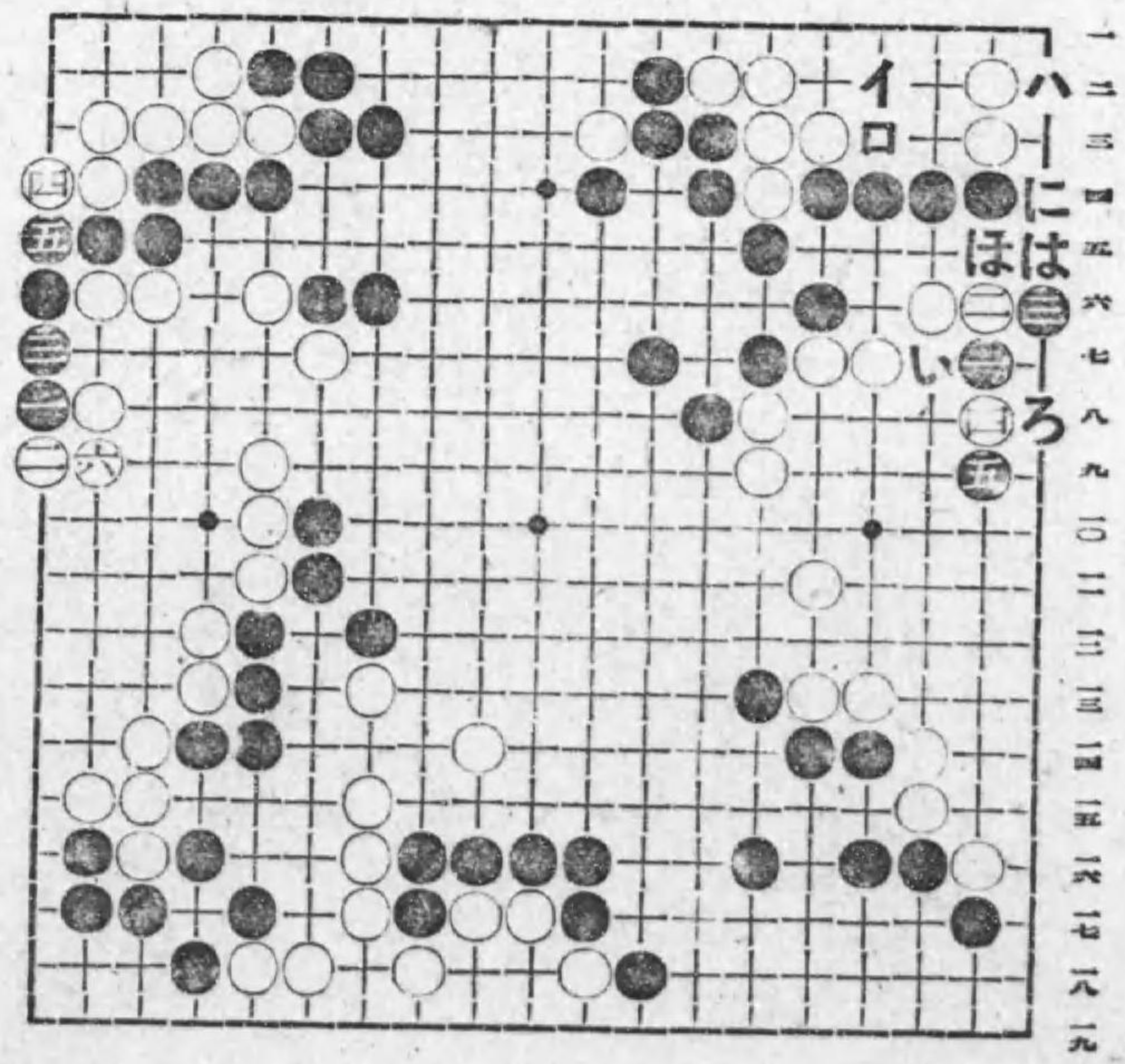
即ち黒九となつて白(い)だと、黒は(ろ)。是れが煩はしと白(シ)で(は)、黒(に)、白(ほ)は黒(イ)、白(ロ)黒(ハ)となつて、白の大損。黒(ハ)に白(イ)の三は黒は「ハの三」。要するに黒(ハ)となつては白に活きなし。

黒五となる事が煩はしく、また隅の白を捨てる變化は無論大損だから、どうしたものかと白思つたら、四で五に受けである。

左上隅、黒一より白六迄は、侵分のみ考へであつて黒が悪い。

黒一で四だと、白「ツ」の三、黒「タ」の一、白五に劫を取りで劫争がある。但し劫争で隅の白を取るとか、又は他に劫替りの好い所がなければ不可の事。

ツソレタヨカヲアルヌリチトヘホニハロイ



右上隅、白一三の侵分は、現圖に於ては早尙にして悪
 5。白一で(5)、黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)、な
 どの手段で境界が定まり、其處には一三の外何んの意味
 が無いといふ、時に限るのである。

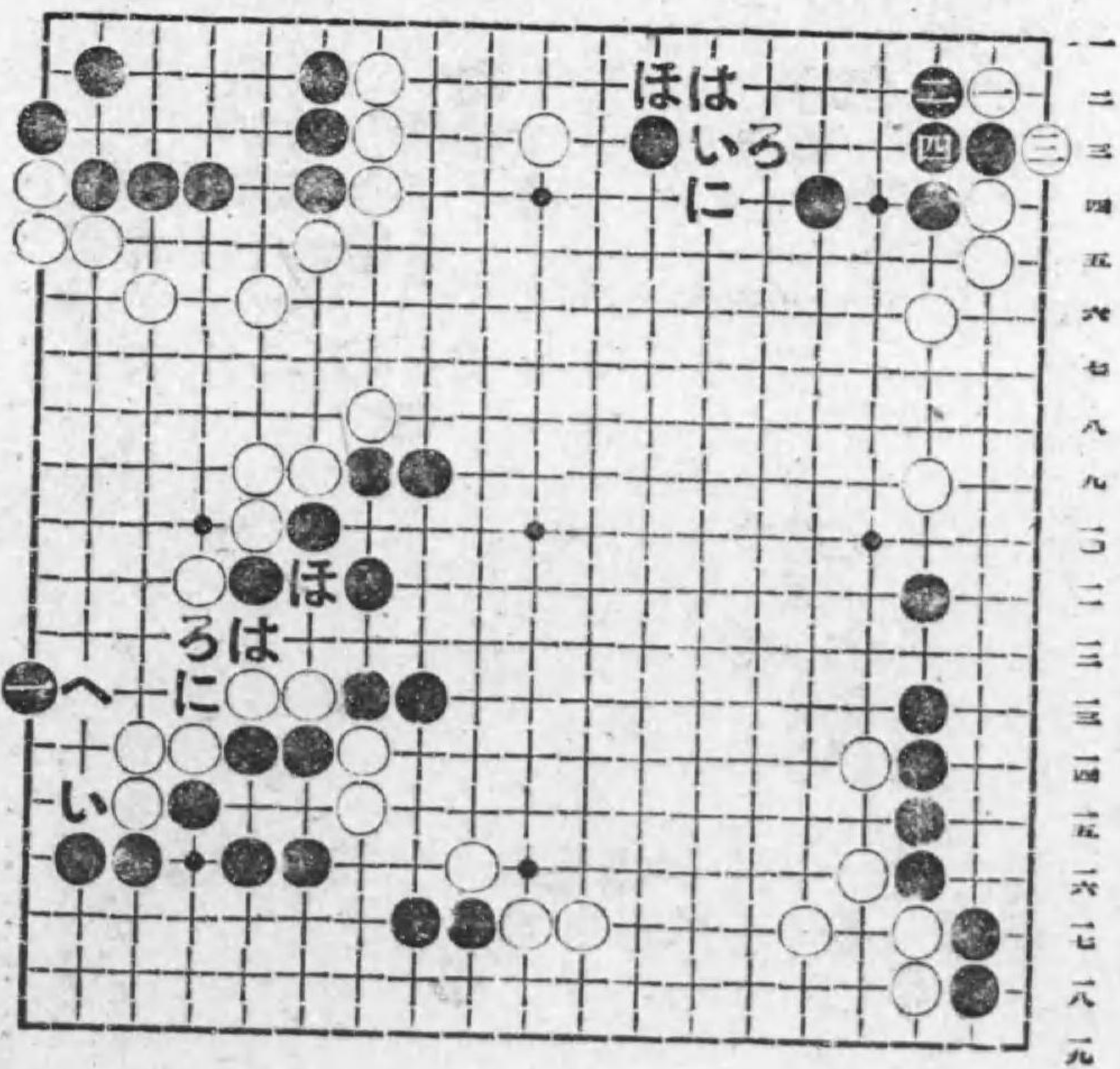
X X

左下隅、黒一の走りは大きい所。白に(い)と一を防が
 れる機会を與えてはいけない。他に十目位ひの有る際
 は無論必要だ。併し現圖の如く、白左側が大地でなく半
 分即ち十線位ひの小地では、一に次ぐ前途の侵入が小だ
 から、の見分は必要。

X X

尙ほ黒一の時現圖に於ては、他に考案がある、即ち黒
 (ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)、黒(へ)。また其の白
 (は)を「レ」の十二なら、黒(に)、白「レ」の十三、黒(は)
 斯の何れでも黒が良いといふ所。
 黒一の侵入に對しては、白は(へ)。たいてい白は(へ)
 の止めが宜い。

ワソレタヨカヲラルヌリチトヘホニハロイ



右下隅、黒一三の侵分は、白四となつて悪い。黒一は
 先(ろ)、白(ろ)、黒(は)、白(に)、黒(ほ)と利かせて
 の後、併し夫れも急ぐ要はない、黒が一三より白四迄と
 運ぶのは、白が三に來たと見て六目に當るから、其の時
 代に入つての事。

X X

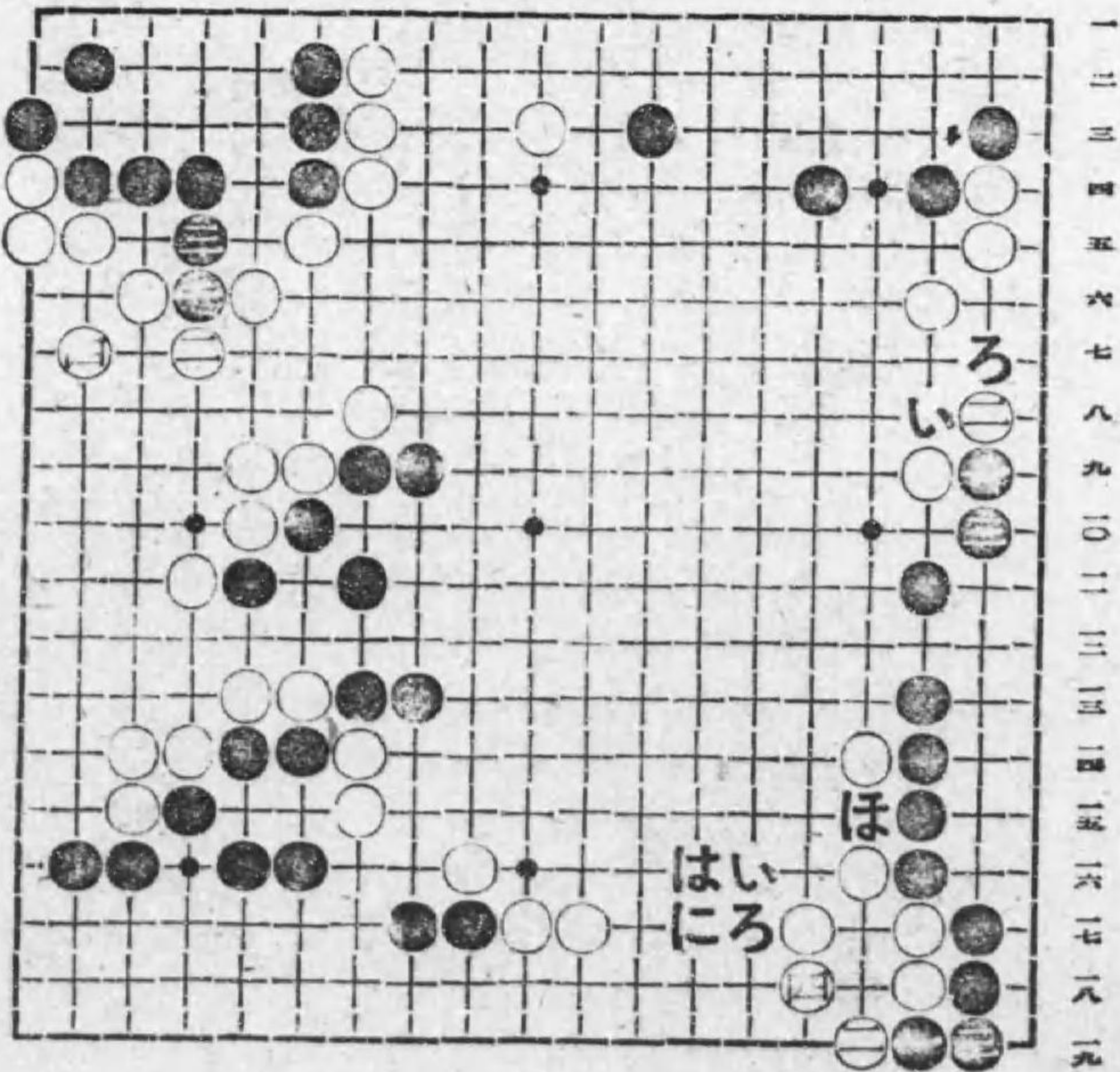
左下隅、黒一三で白に四と受けさせることは、本格的
 侵分である。黒一で「レ」の五に當て、白四とすることを
 下手がよくやうが、細碁では其の關係にて一局の敗を招
 く、事度々見る所である。

X X

右邊、黒一三は良い侵分である。但し氣をつける事は
 白二を三に抱えられて、黒(い)、白二、黒(ろ)となつて
 それから劫争が起きる、夫れが「ハ」の十一の方へ大悪影
 響の事だ。

斯う白二となれば、黒は「ニ」の七へ行く筋で白を攻立
 る手段あり、また(い)と切る得もある。

ワソレタヨカヲラルヌリチトヘホニハロイ



右上隅、白一は早い。白は(い)、黒(ろ)を利かせる意味を失ふ。二となつては黒(ろ)とは受けない。黒(ろ)、白(は)と打つても、白二の手段が残つてゐる。白一の得は黒が(は)にあつて、最早二の意味が失せてからの事である。

X X

左上隅、黒一は早い。白二となつて白を安心させた。黒に二と置かれることが、白は心配なのでは是れなどは黒が悪い侵分の第一に数えられる。

X X

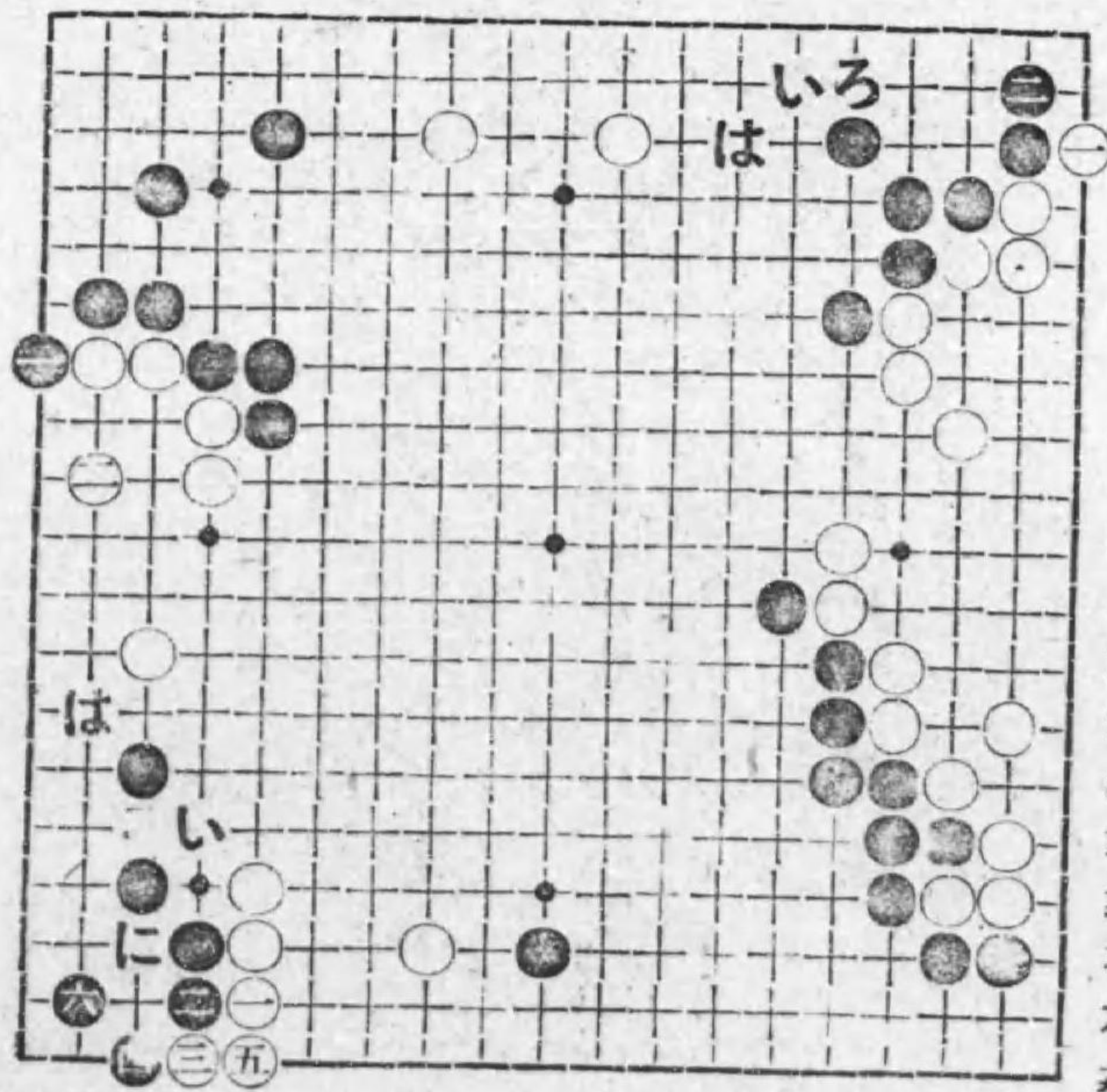
左下隅、白一より黒六迄の白の得は、白一で(S)、黒(ろ)を先きにするが好い。白(い)、黒(ろ)は白の得。黒六となつて、白(い)だと、黒は(ろ)に應じなく、(は)。

X X

右下隅、黒一は現圖にあつては悪手と化す。

白一で(ろ)に、黒(は)だと、白(に)の手段あつて、黒味が悪S。

ワ ツ レ タ ヨ カ フ ナ ル ス リ ナ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ



白に十四と活きられると、黒一は馬鹿らしいであらう。故に黒一を前譜に於て悪手に化すと言つた。

X X

黒一が無く白十四迄と活きれば、黒は其の失なつた代償に(い)で取返す。即ち外部の厚味と、アの十七以下の白三子の攻めで。

X X

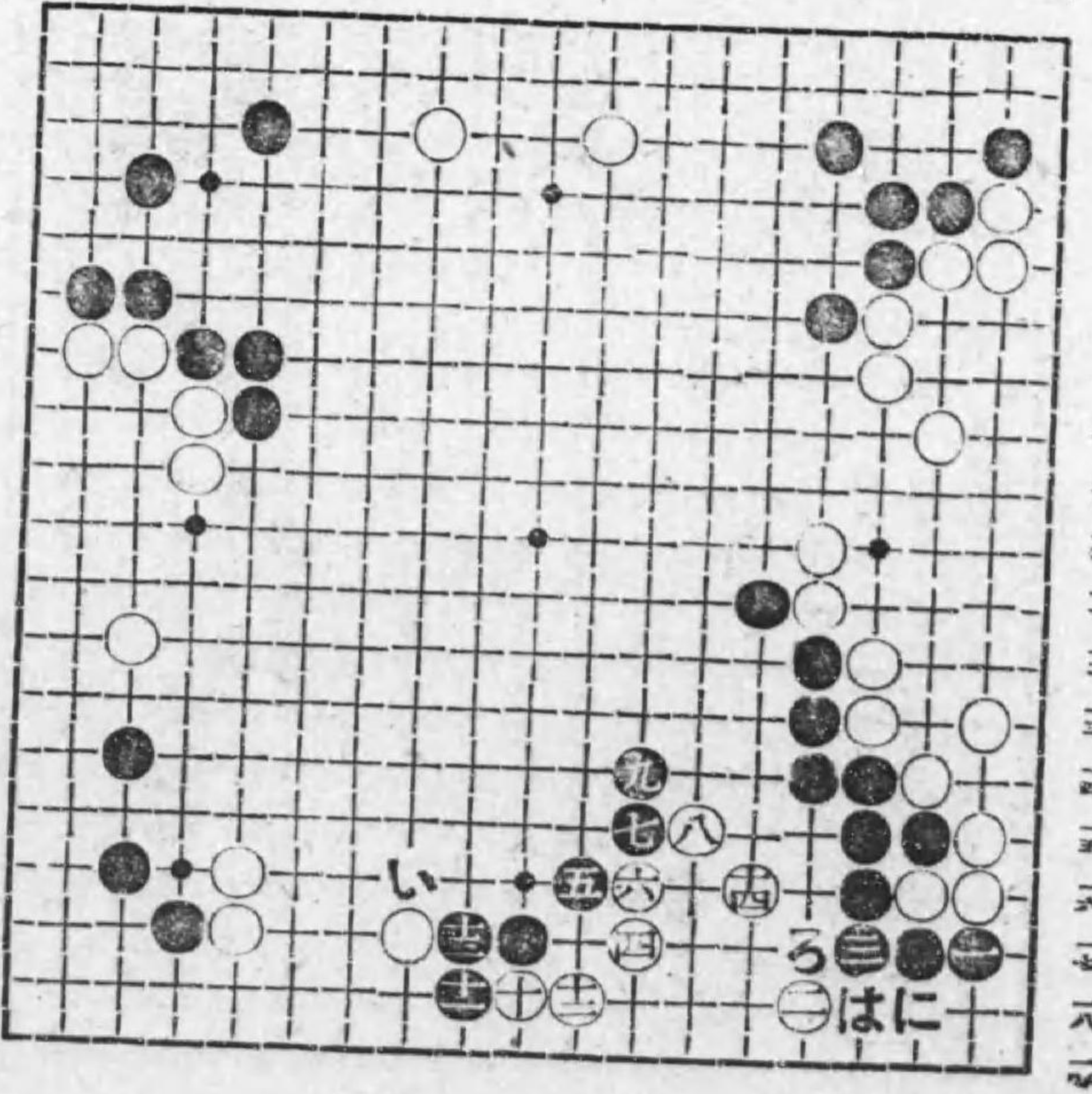
下邊一帯現圖の關係に於ては、黒一で十三、白(い)、黒(ろ)の十五と強く白を攻めながら、圍ふか又は弛めて其の、アの十五を、アの十五と右邊を大地に圍ふが、先決問題である。

X X

其時白三に切り、黒(ろ)、白(は)、黒二、白(に)と白が「ハの十七」の一子を取る事は、二十目強に當るが、黒は確實の地となつて、先手が黒に移り、決して黒の損ではない。

黒一の如き著想で一局の敗を招く例甚だ多い。

ワ ツ レ タ ヨ カ フ ナ ル ス リ ナ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ

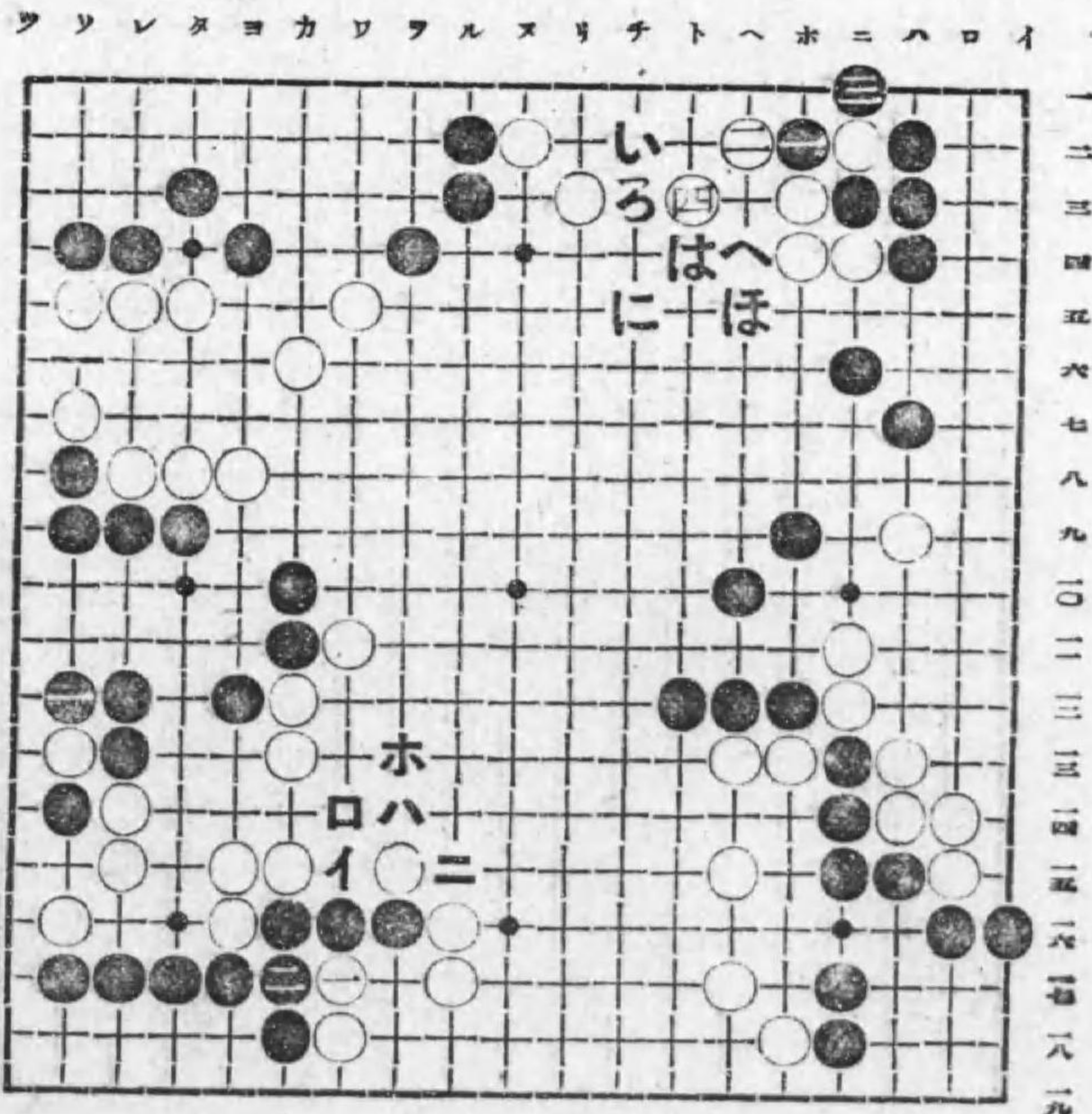


右上隅、黒一三の侵分は早尙である。一三は白に四と備へさせて損である。即ち一で(シ)だと、白は(ろ)に受けの外ない。すると黒四、白(は)、黒二となつて白は地を失ひ、そして白(に)の備へなら、黒(ほ)、白(へ)で白は活形を失ふ。

左下隅、白一は見合すが好い。夫れは黒(イ)、白(ロ)黒(ハ)、白(ニ)、黒(ホ)と黒が切つて来る事を思つて。左様なれば白一は「ヲ」の十七、黒二と受けさせるが、白の得であるからである。

斯う白一、黒二は黒「ワ」の十九、白「ヲ」の十八の侵分が黒にあるからである。其の優劣を見られよ。

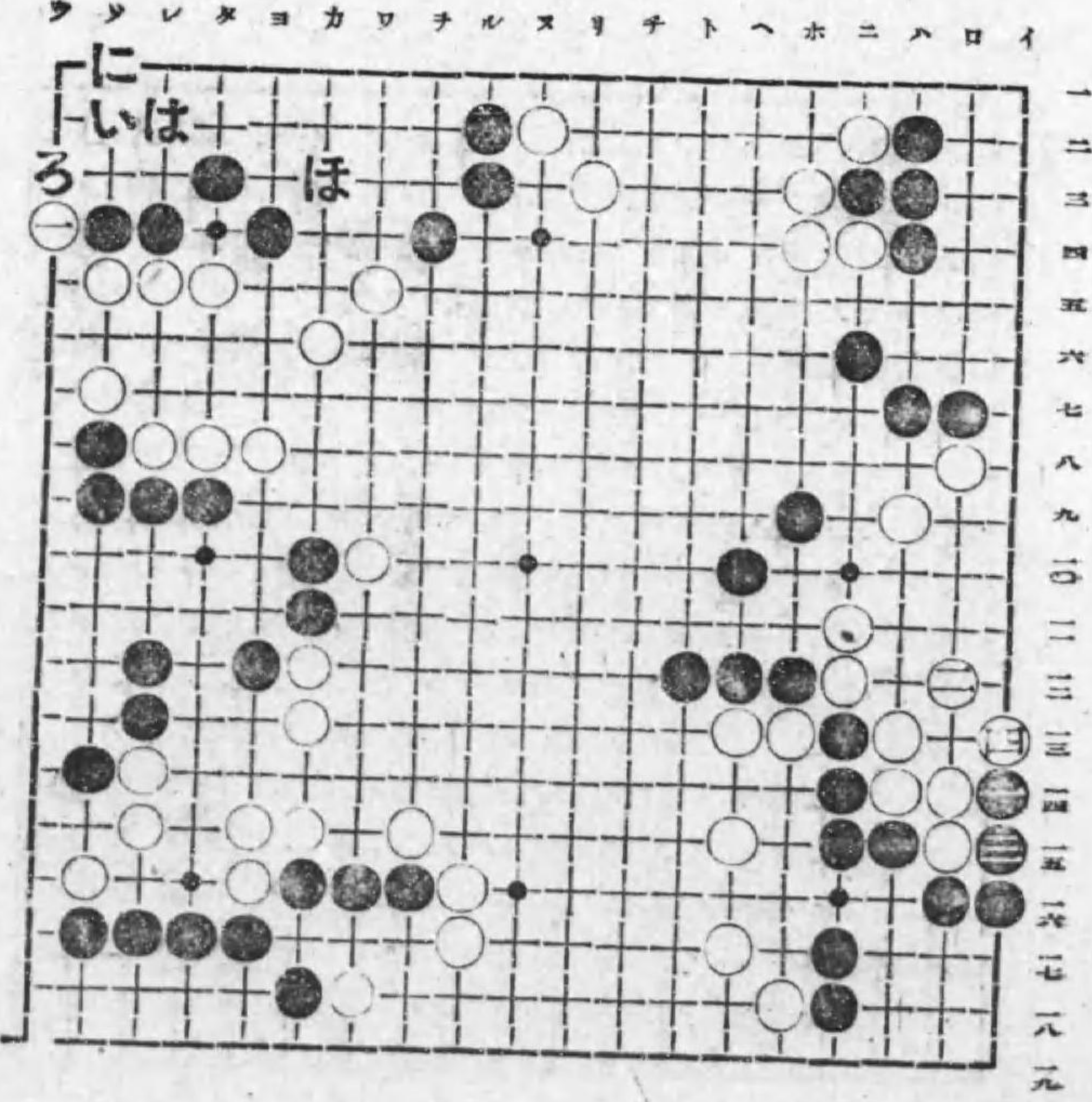
左邊、黒一は白に手段を残す。即ち白「ツ」の十七、黒「ツ」の十八、白「ツ」の十五を。で、黒一は「ツ」の十三から取るのが、後に何等の損を遺さなす。



左上隅、白一には黒は注意を要する。無論黒は(イ)と應ずる外ない。黒(シ)を(ろ)だと、白は「タ」の四。サア黒は大變だなぜなら其時黒「ヨ」の三だと、白は「ツ」の三の切りは勿論だが、劫争に勝てれば「レ」の三、黒「ソ」の三、白「は」になり、黒(シ)、白(に)。

また「タ」の四の突込みに、黒「レ」の三だと、是れは兩斷される。即ち白は(ほ)。

右下隅、黒一三は其の意味の侵分が、他に無くば本格にして、先手三目得である。夫れは白に三と防がれたと口で。が現圖にあつては、黒一で「ロ」の十、白「ロ」の九、黒二、白「ハ」の十二、黒「ロ」の十一に粘きで、其の黒三子を白に打上げさせるが、黒は周圍に得をなし、また斯う四となるより、白地は少ない。第一白が生死のほども疑はれぬ。

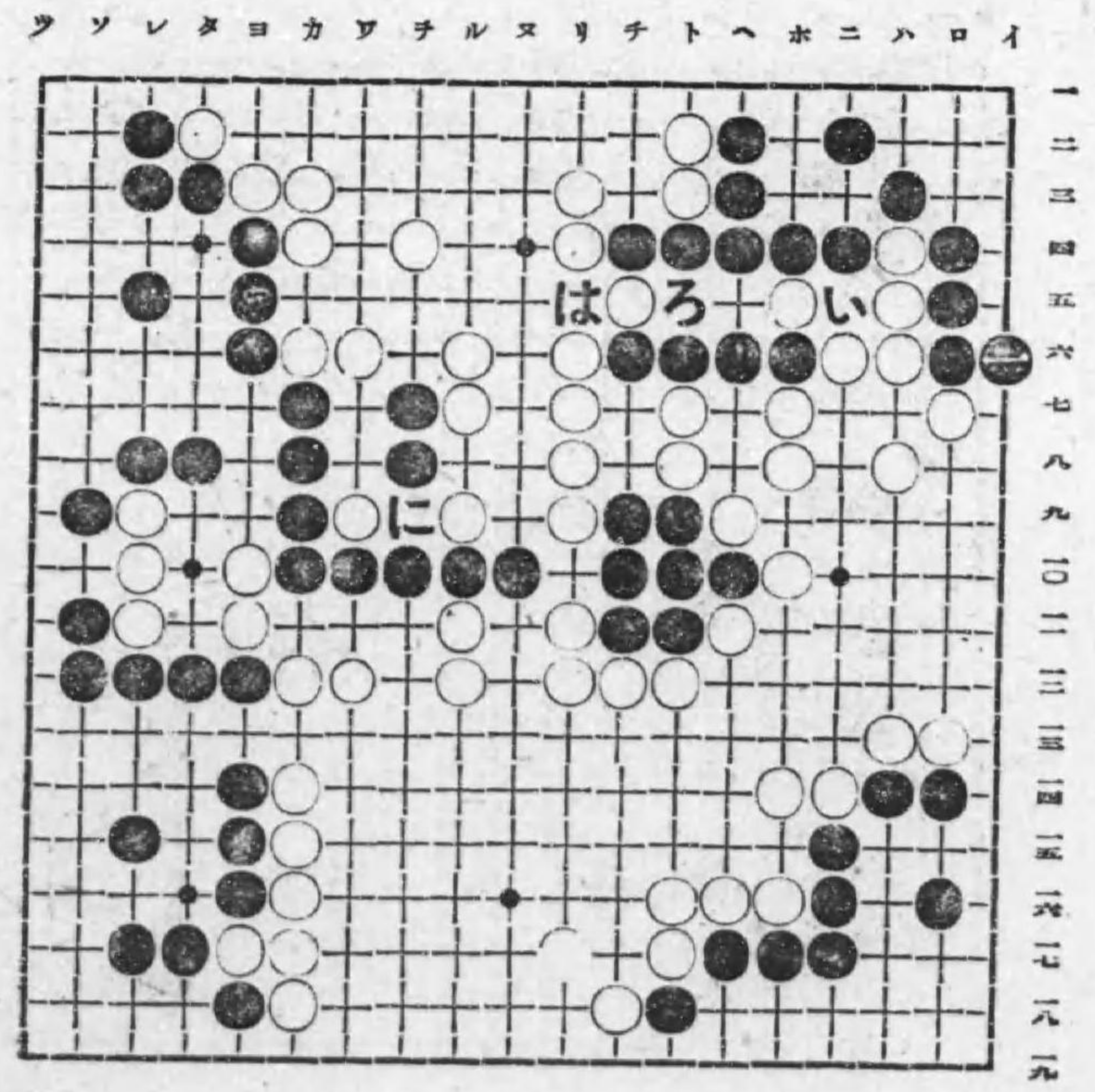


右上隅、黒一は四目に當る。其れは白が一に行くとき黒地ヲ斯う一より三目失せるのと、黒斯う一には「イの七」白「イの八」となる事が伴ふ、其の白地一目減が無くなる合せての計算である。

黒「トの一」、白「チの二」が其處を侵分の、黒の本手である。黒「チの二」と行く黒後手取りの侵分は、大損であつて、それで敗局になる例は甚だ多い。が周囲の關係で絶対にないとは言はない。

黒(イ)と白の一子取りは三目に當る。即ち黒(ろ)、白(は)となる事に依つて。

黒(カ)と白の一子取りは二目に當る。黒が「カの十三」白が「ヨの十三」何れから行つても、其處は二目の手であるから(カ)の如き二目とは、見合つて、白黒共に急ぐ要のない所である。

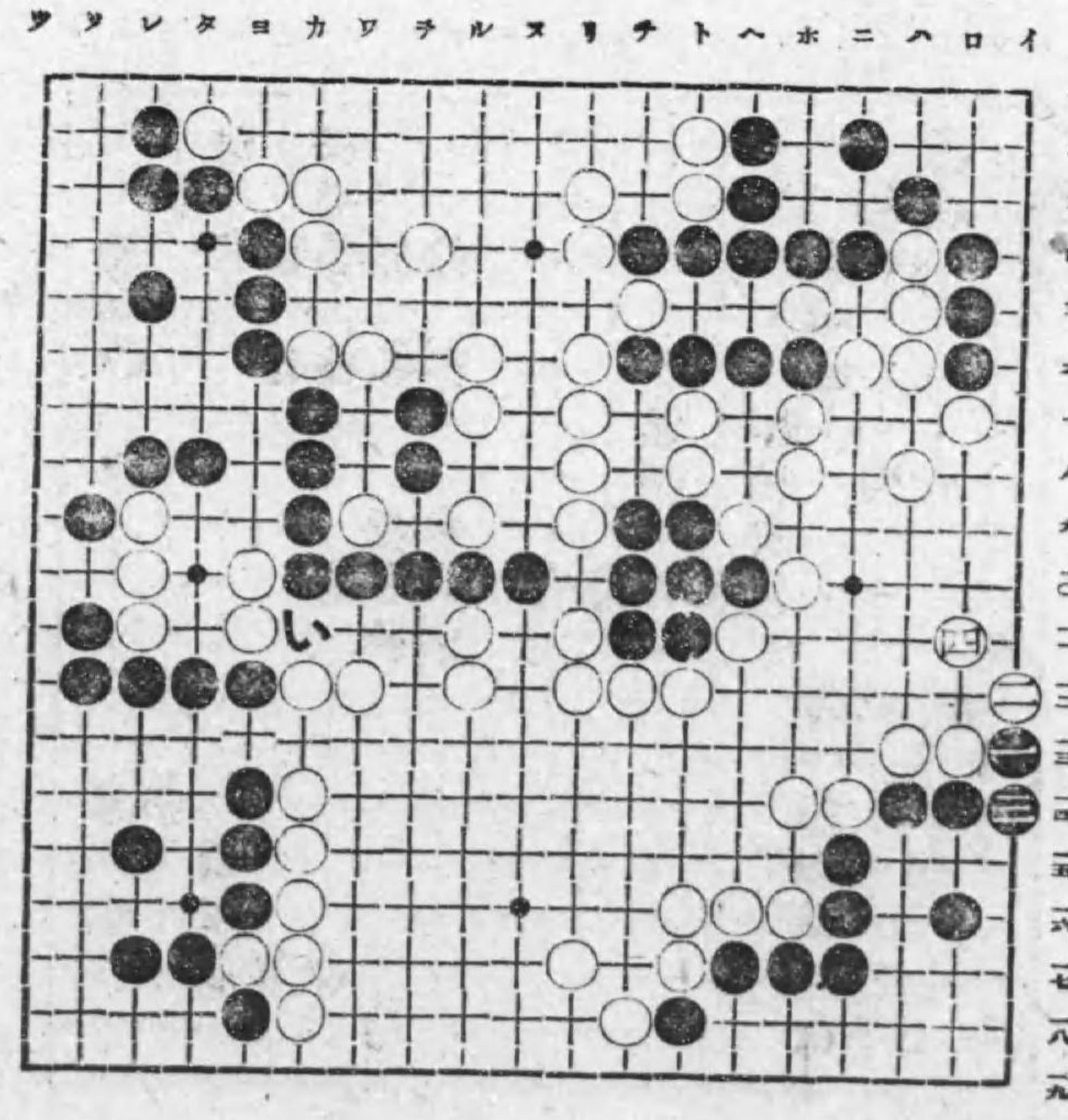


右邊、黒一三の侵分は先手三目に當る。即ち二と四とで、白地二目減と、白三、黒イの十五、白一となると斯う一三より黒地一目減との計算に依つて。

一局の目算に當つては黒より一三と運ぶ事は、決定的で、白は左様見て目算をするのである。白より三と來られる機会を與え、事は、黒が侵分の失敗である。

即ち右上隅黒「イの六」と後手四目に就く際、先づ一三を収めるのが手順。でなく黒「イの六」だと、白に三と來られて、黒は損な侵分。

(S)は十七目に當る。即ち白五子が十目と、申「ソの十」黒「ツの十」、白「ヨの九」、黒「ヨの八」となる四目と、他に駄目三を合せて。



中央、黒が(い)と切る事、白が(い)と粘る事、共に十四に當る。石数の多はのを見て(イ)より(い)を採るのは何れから行つても三目損である。

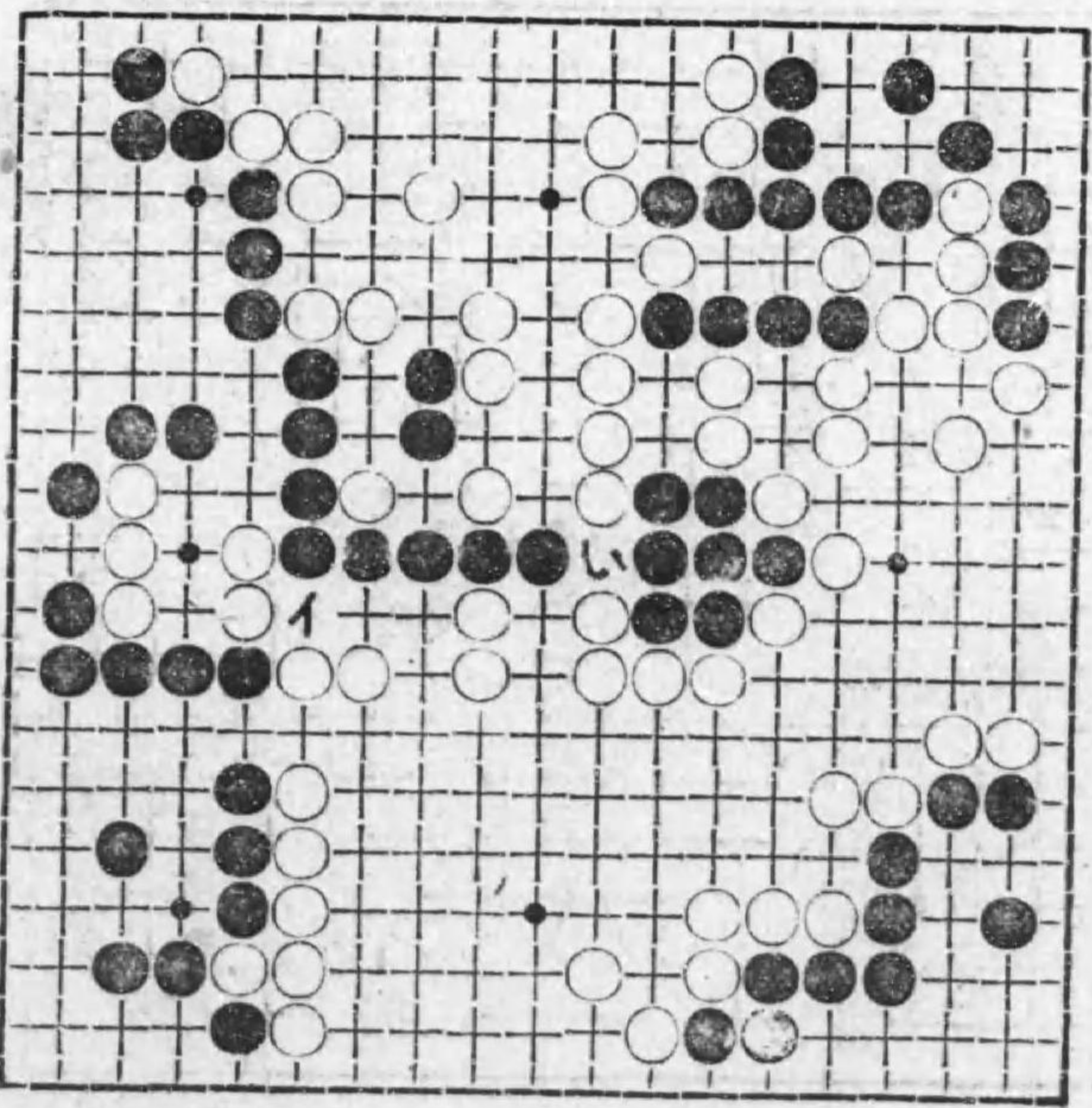
右下隅、黒一は六目に當る。白から一と切る手も六目得はいふ迄もない。其の計算は一に何れから行つても、三目の増減に依るものである。

續行、黒一の侵分に當つては、先づ「イの十三」から運ぶ必要がある。黒一は後手である。「イの十三」の方は先手である。黒後手の方を前にすると、白に「イの十四」と其處を収められる恐れがある。此邊に巧拙がある。

黒「イの十三」を前にしたら、續いて「トの一」、白「チの二」も必要である。

白が「チの三」と打つてゐる事は、先手三目に當るからである。

フソレタヨカヲテルヌリチトヘホニハロイ



左上隅、黒一三の切取りは十目に當る。其の計算は黒(い)、白(ろ)、黒(は)、白(に)となる事と、白が先きに一と粘いで、白「レの一」、黒「ソの一」、白三、黒「ソの二」となる事の白地黒地五目宛ての増減に因つて。

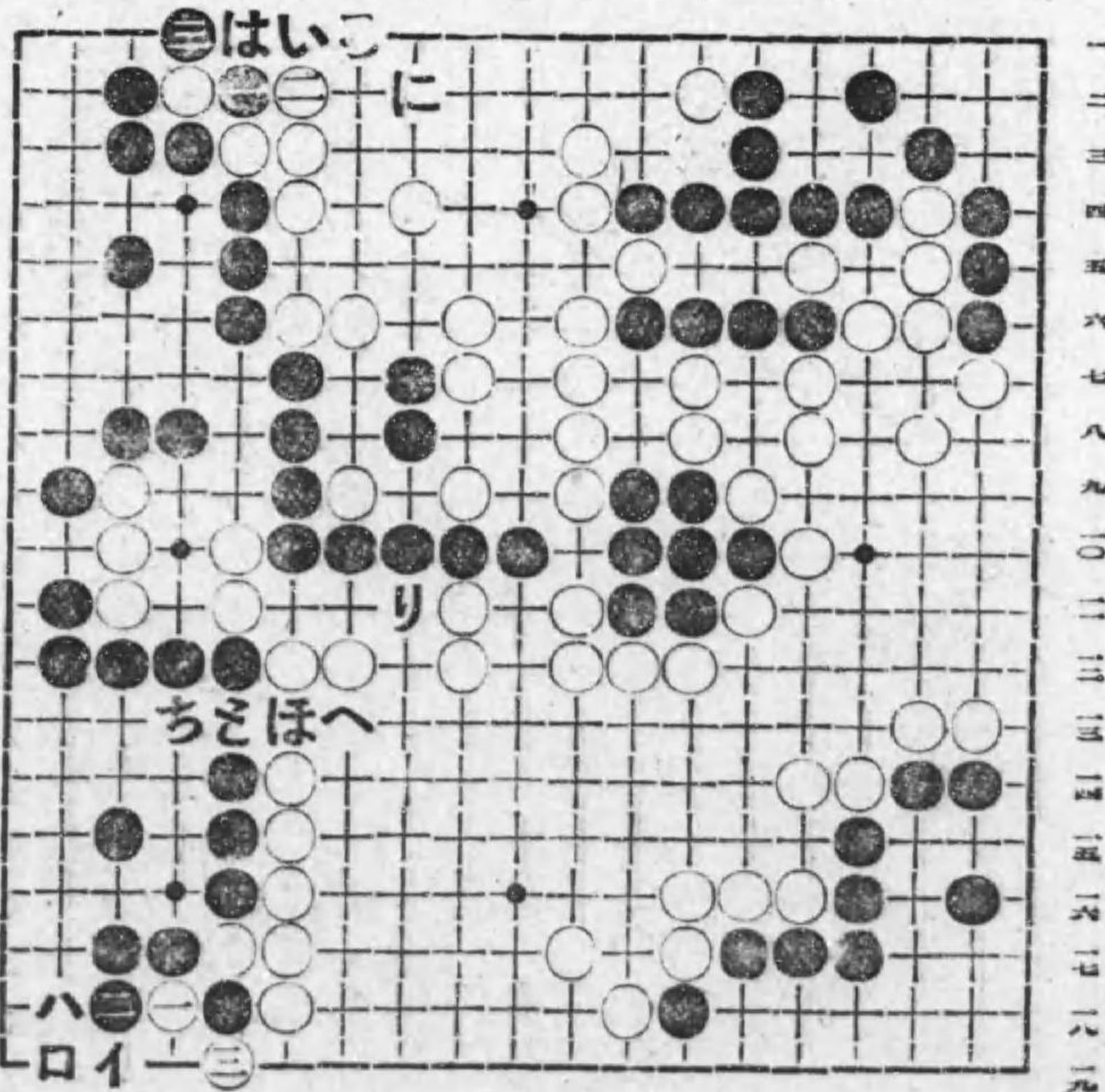
左下隅、白一三の切取りも十目である。其の計算は前頁と同じ意味。だが左上隅を採るか、左下隅を採るかといへば周囲の關係上左上隅が左下隅より優る。

即ち左上隅黒(い)に白(ろ)、黒「ソの二」の劫争は白が劫敗は、大きい問題。

白(イ)、黒(ロ)、白(ハ)の劫争は、黒が敗けても左上隅の成敗とは、事が小さい。

黒(ほ)、白(へ)、黒(と)、白(と)、黒(ち)、白(ほ)。此の何れも後手二目である。黒(ほ)は侵分と(り)の侵分とは同じ意味である。

フソレタヨカヲテルヌリチトヘホニハロイ



右隅、黒一三の侵分は手順が悪い。

黒一で「ニの二」、白「ハの二」、そして黒は一三の運びが二目の得である。

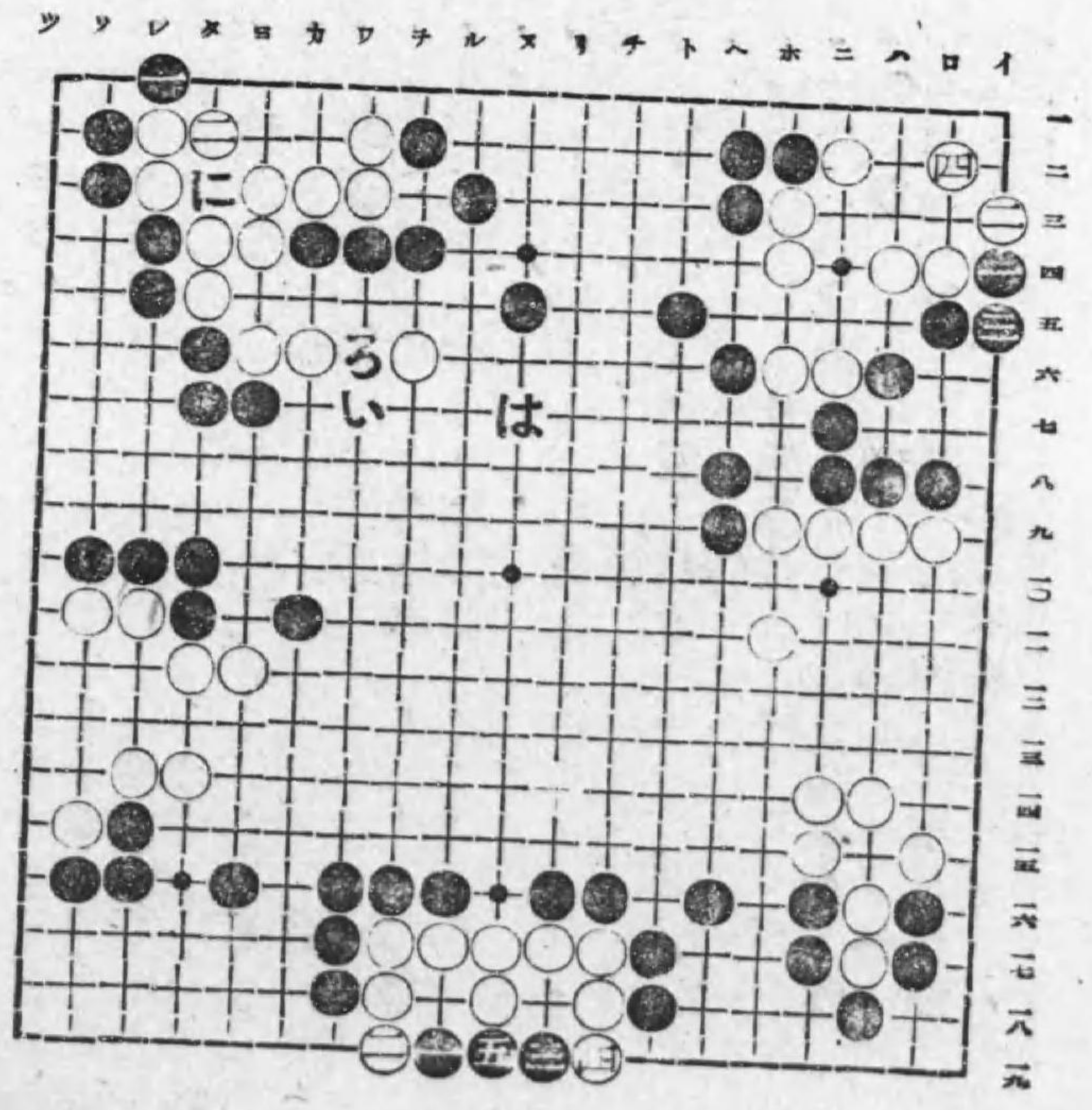


左上隅、黒の得は見合すが好い。黒は二と白の眼を缺いて行く事がある。また黒一で(い)、白(ろ)、黒(は)と上の方で得する事は、白に「ソの一」と来られる損よりは大きい。

黒一で二と白の眼を缺く事には種々の意味がある。即ち黒一を二に白(ハ)になり、黒(イ)、白(ろ)、黒(は)、其白は完全の活きは「ヨの二」「ソの一」の得は出来な。但し黒一を二、白一、黒「ヨの二」、白(ハ)となつて其の白の一團を、大いに攻立てる事が出来ない場合は、一を二と黒が行くことは損故考へもの。



下邊、黒一より五迄の白地を無くすことは、白に左方へ侵入されて、其の得位ひは取戻されるから、黒は何んにもならない事を、やつてゐるに等しい。



右下隅、黒一三の侵分は本格である。黒は三に取りたいが後手は引きたくない、いふ時に用ひる手。

白二で三の粘ぎは、黒二の出で白の損。細碁の際には斯様な手が、勝敗を左右する。



左下隅、黒一三の得は約八目に當るが、現圖であつては、白が治らない關係にあつて一考を要する。

白二となつては、白を治らせし事になつて、一三の黒得は得でない事になる。

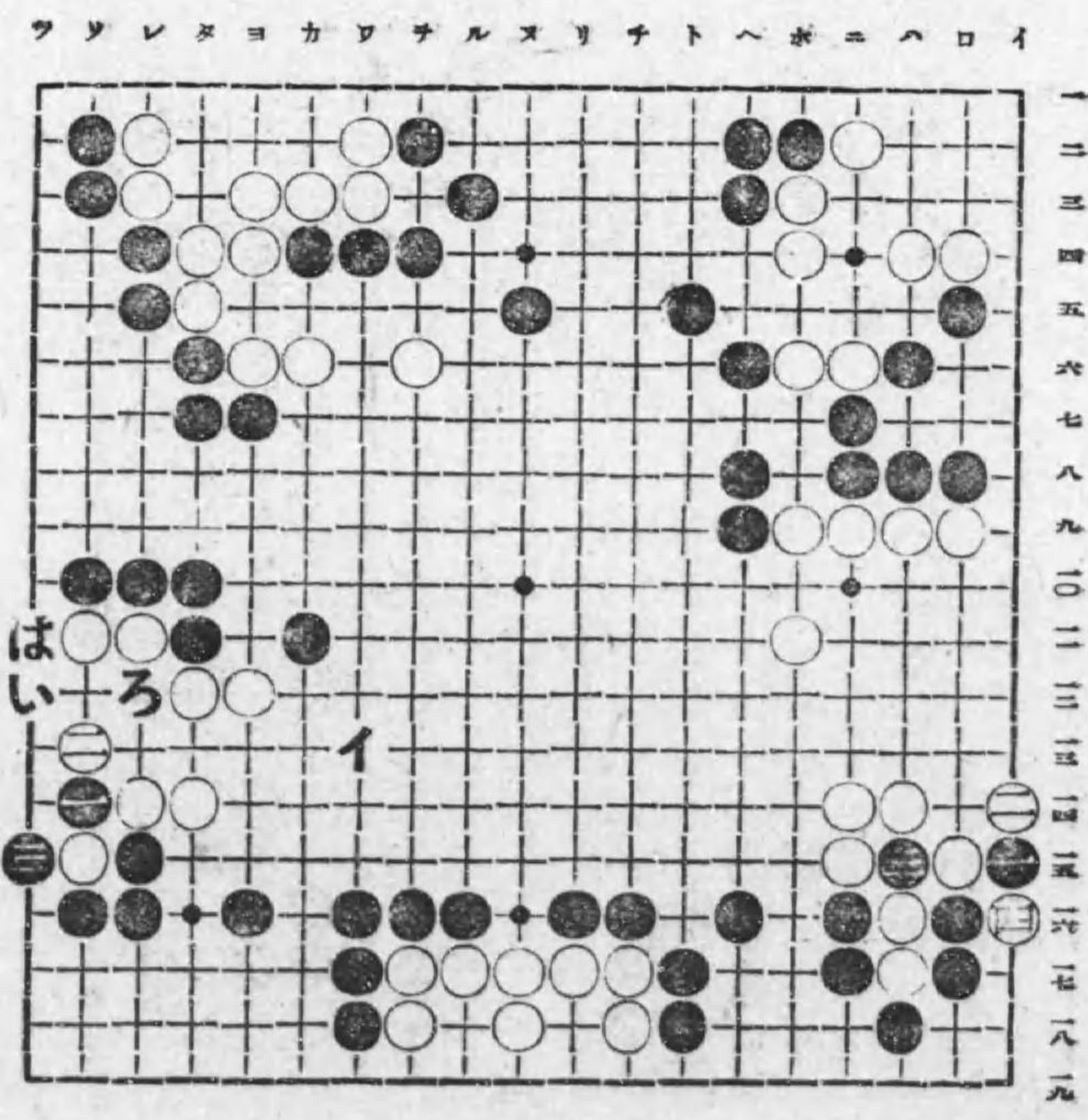


續行、即ち黒一で二だと、白一、黒(い)、白(ろ)、黒(は)で白に眼形は無く、斯う一三より地も無くなる。

白(ろ)を(は)は黒に(ろ)と切られて白は大損。



續行、黒一で二より(は)迄の渡りだと、白は(イ)と走路を取る。それが黒面白くないなら、一で(イ)、白二、黒三が黒は好い。



右上隅、白一三の侵分は損である。白一では(シ)、黒(ろ)、白(は)、黒(に)、そして更に白は一より黒四迄の運びが、本格の順序である。

黒(に)で四の兼粘ぎだと、白(への二)、黒(ホの白(に)、黒(ニの二)、白(ほ)、黒(ハの二)、の時白は(へ)と打込まれて、黒は大敗を招く。

左下隅、黒一で白に二と受けさせた事は悪い。黒一で二だと、白(イ)、黒一となつて次いで、白(ロ)、黒(ハ)の時白は「ワの十八」と粘げない。

斯く黒の侵分は白の活形を取る事にも用ひられる。即ち黒一を二と置く事。

黒「ソの十六」、白「ソの十七」、黒「ツの十六」、白「ツの十七」、黒「ツの十五」となるとは、白それを防いで「ツの十五」、黒「レの十五」、白「ソの十六」となると見て、黒は六目得である。

左上隅、白一より黒六迄の侵分は、白に何等の妙味がない。

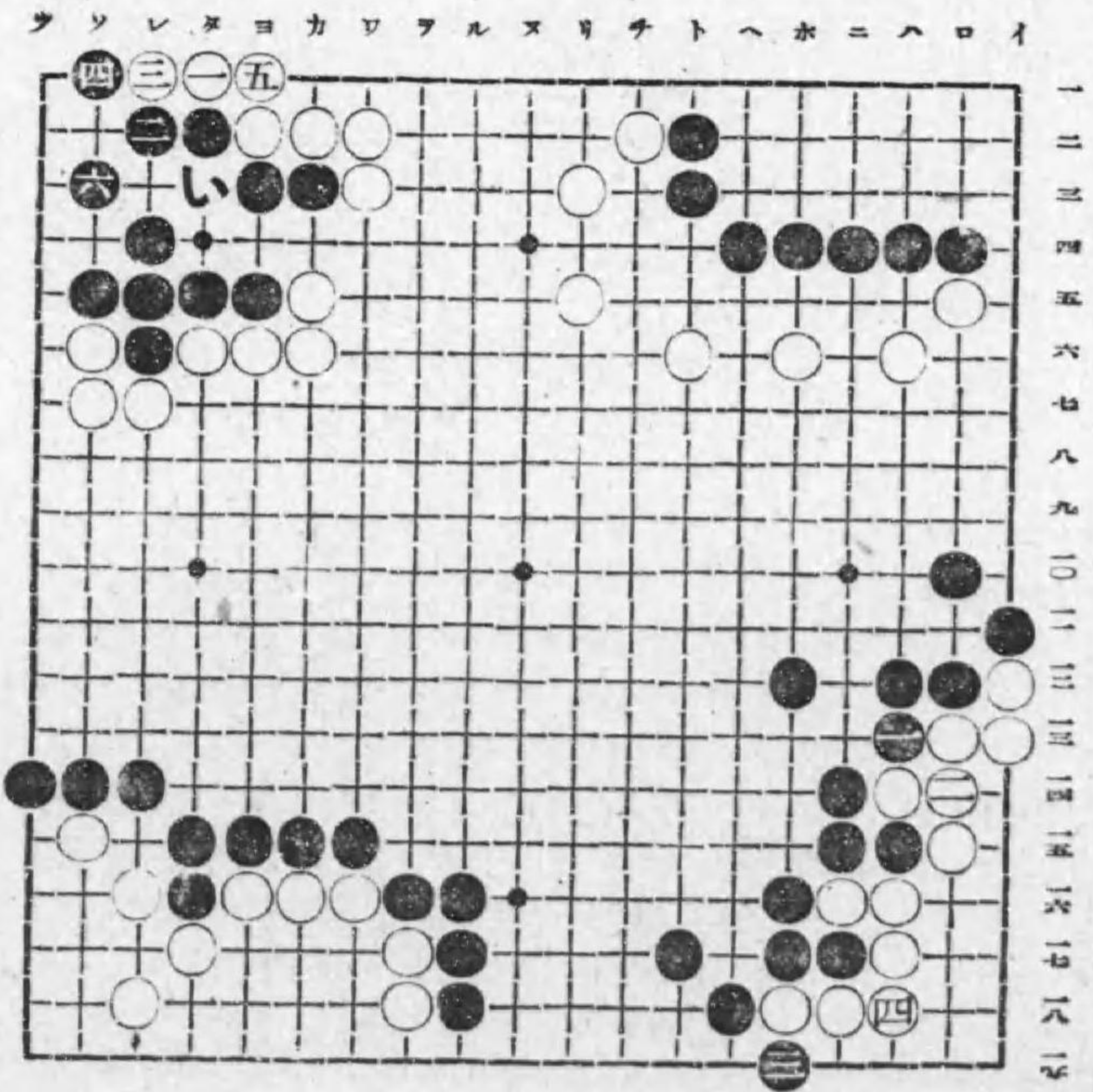
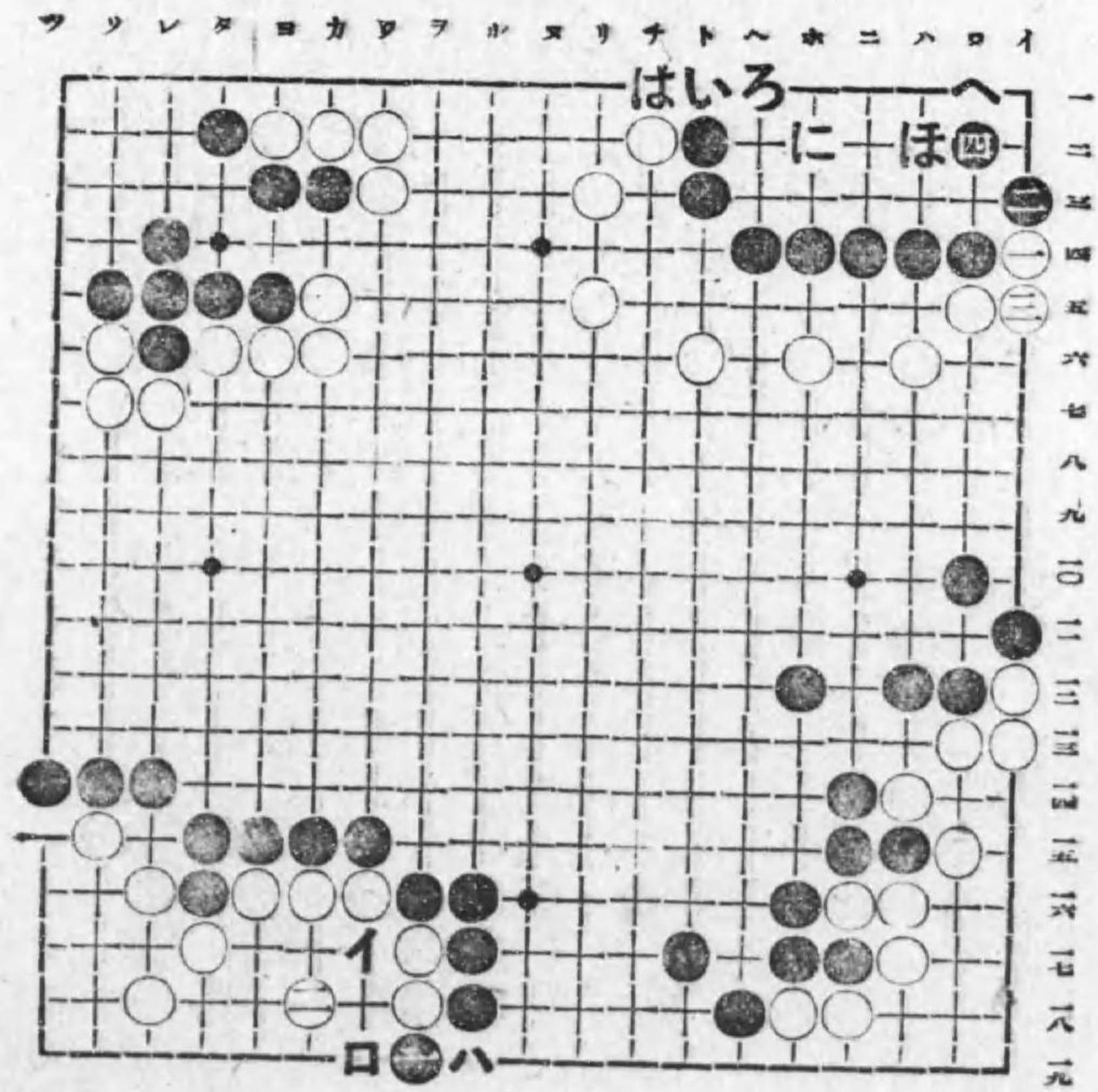
白一で(シ)、黒「レの三」、そして白は一より黒六迄の運びが、巧い手順である。即ち白に「ヨの四」が残つて。斯う一より六迄だと、自然黒に「カの四」の得を、先手で收められる。

右下隅、黒氣輕に二三と了してしまふ事は、よく下手に見る所。

黒一は甚だしい悪手、上手は其處に氣懸りの所。即ち黒一で「ロの十六」に切り、白「ロの十七」、黒二に打込み、白「イの十四」に取り、の時黒一に當てが巧い侵分である。

斯様な所は一局の内によく出る。

本篇は小頁数だが、收むるところは多種にして、應用の範圍はかなり廣い。



妙
傳
篇

右上隅 白は一より五まで、劫で活を圖るより外はない。白一を四だと、黒は三で、白に活なし。

黒四を「イの六」なら、白四、黒一、白「ニの三」で白は問題なく活き。白三が妙。

「への四」「への五」にある白の二子は逃げることは出来ない。即ち、白いなら黒は。また白はなら黒はに。

左上隅 黒一を五だと、白一、黒い、白ろ、黒は、白にで、黒は活なし。

白四を「ソの二」は、黒五、白「ツの二」「黒レの二」白四を七、黒五、白「レの二」は、黒は「ソの二」。

左下隅 白二を六、黒四だと、黒地は六目出来る。黒い、白ろ、黒はで、その白に活なし。黒いをはだと、白は。

白六に對して、黒四に粘ると、即ち、

右下隅 の如く白にいと來られて、黒は取られる。黒イなら白ロ。黒ロなら、白イ。

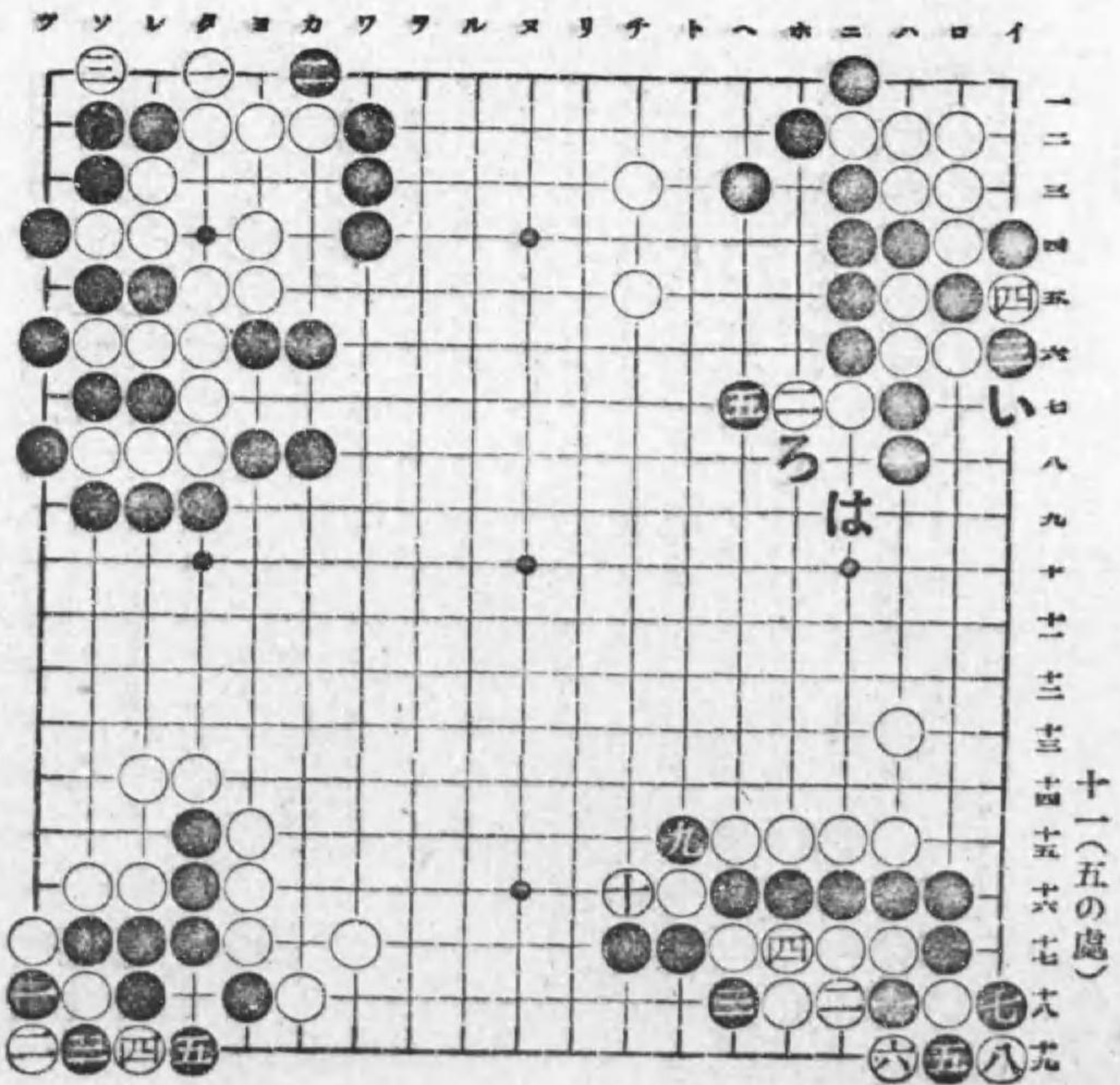
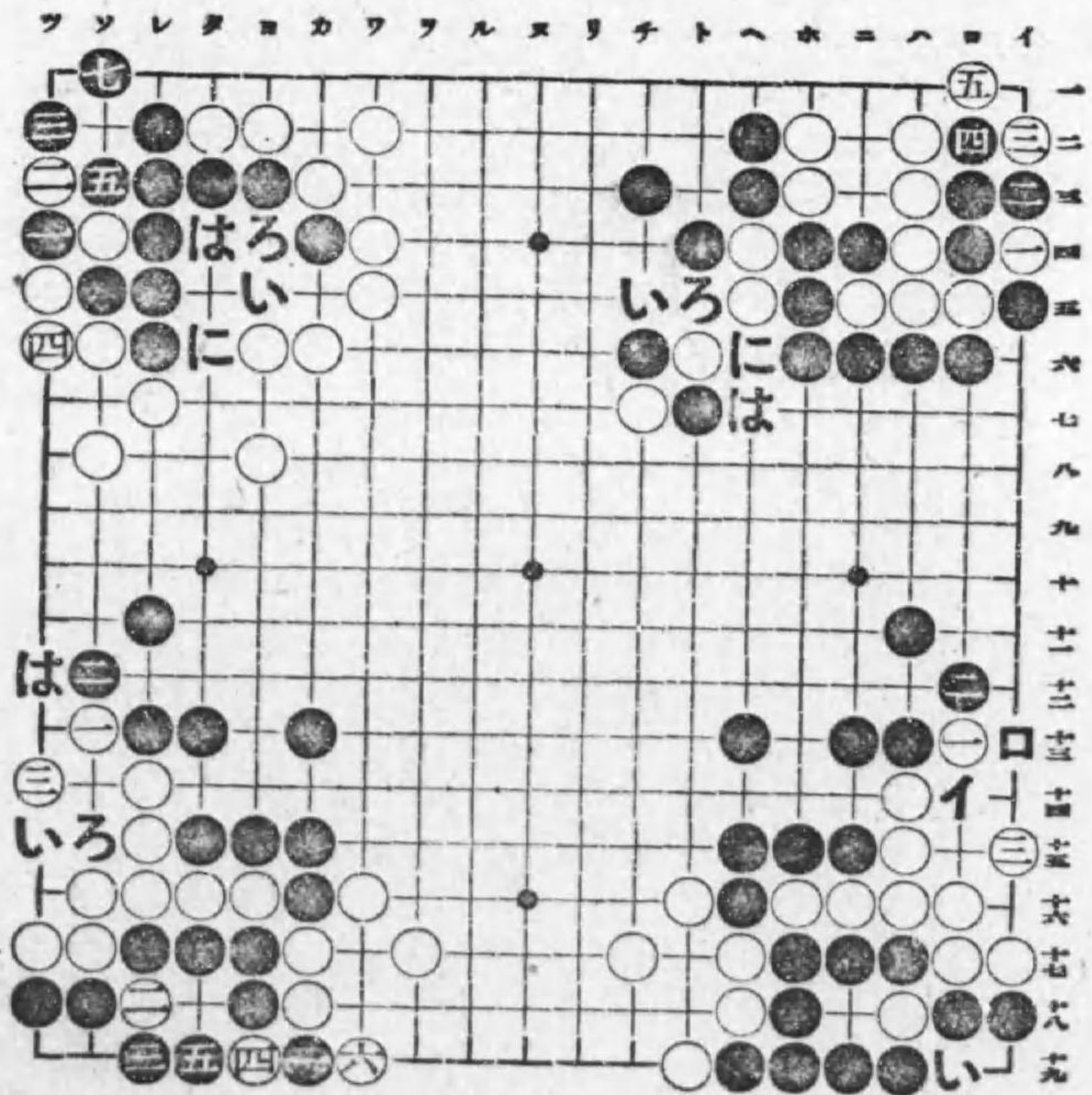
右上隅 「ハの七」の黒を取られないのは、即ち黒一の

工夫。五となつて、白いなら黒はろで、白の二子は逃げられない。また、白いをはなら、黒「ロの五」、白「ロの七」、黒「ロの八」、白四に劫提り。のとき、黒は「ニの八」。

右下隅 黒は六子を取られないため、一が妙手。十となつて、黒は五に劫を提る。のとき、白「トの十八」は、黒はまた一に劫を提る。またその白「トの十八」を一に粘れば、黒「ホの十九」、白八、黒「リの十六」。

左上隅 白はかう一より外に活はない。白三のとき黒「レの二」は、白は「ツの二」。またその黒「レの二」を「ツの三」、白「レの二」、黒「ツの七」は、白は「ツの二」。

左下隅 黒七子を活きるには、かう一より五までと劫手段の外はない。黒三を四、白「ソの十三」、黒三は、白一、黒「ツの十六」、白一で、黒は取られる。



右上隅 黒一、三が妙。白二をいなら、黒は二。白四をろなら黒はい。黒一をいは、黒が悪い。

右下隅 白三で「ロの十五」、黒「ロの十三」、そして白三だと、黒は「ロの十八」で、白は活きられない。三のとき、黒「ロの十六」、白「ロの十五」、黒「ロの十八」は、白は「ロの十三」。また、三のとき黒「ハの十八」も、白は「ロの十三」。白三が妙。

左上隅 黒五で七なら、白五、黒十一、白八、黒十二、白「ヨの四」で黒に手はないと白が思つてゐた處、黒に五の妙手があつて、かう十三まで劫となつた。白八で十三、黒十二、白八だと、黒は「ヨの一」。

左下隅 黒一で十三だと、白三で黒は活きられない。また、黒一で十二だと、白八で、これも黒は活きられない。

一譜七題

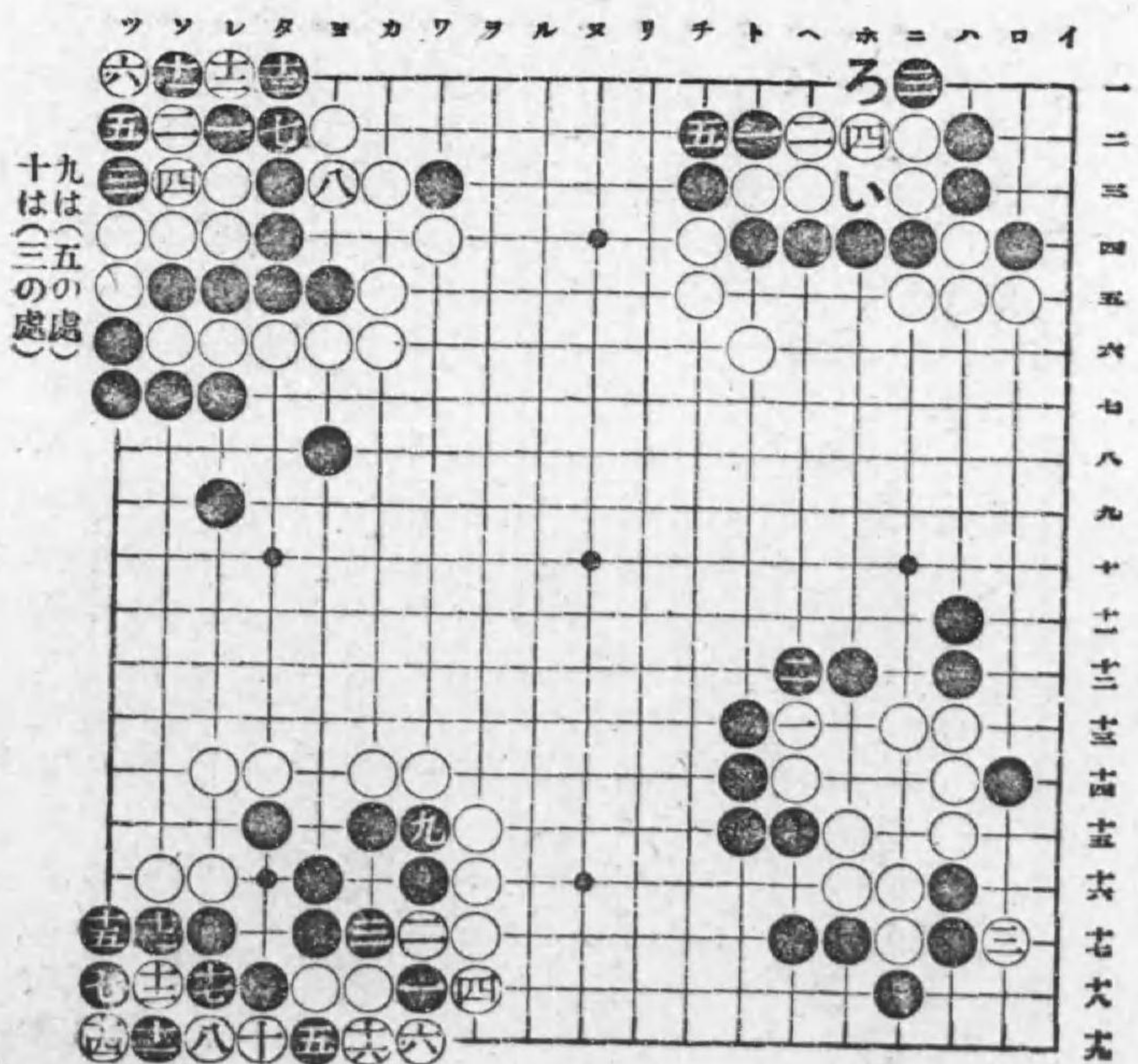
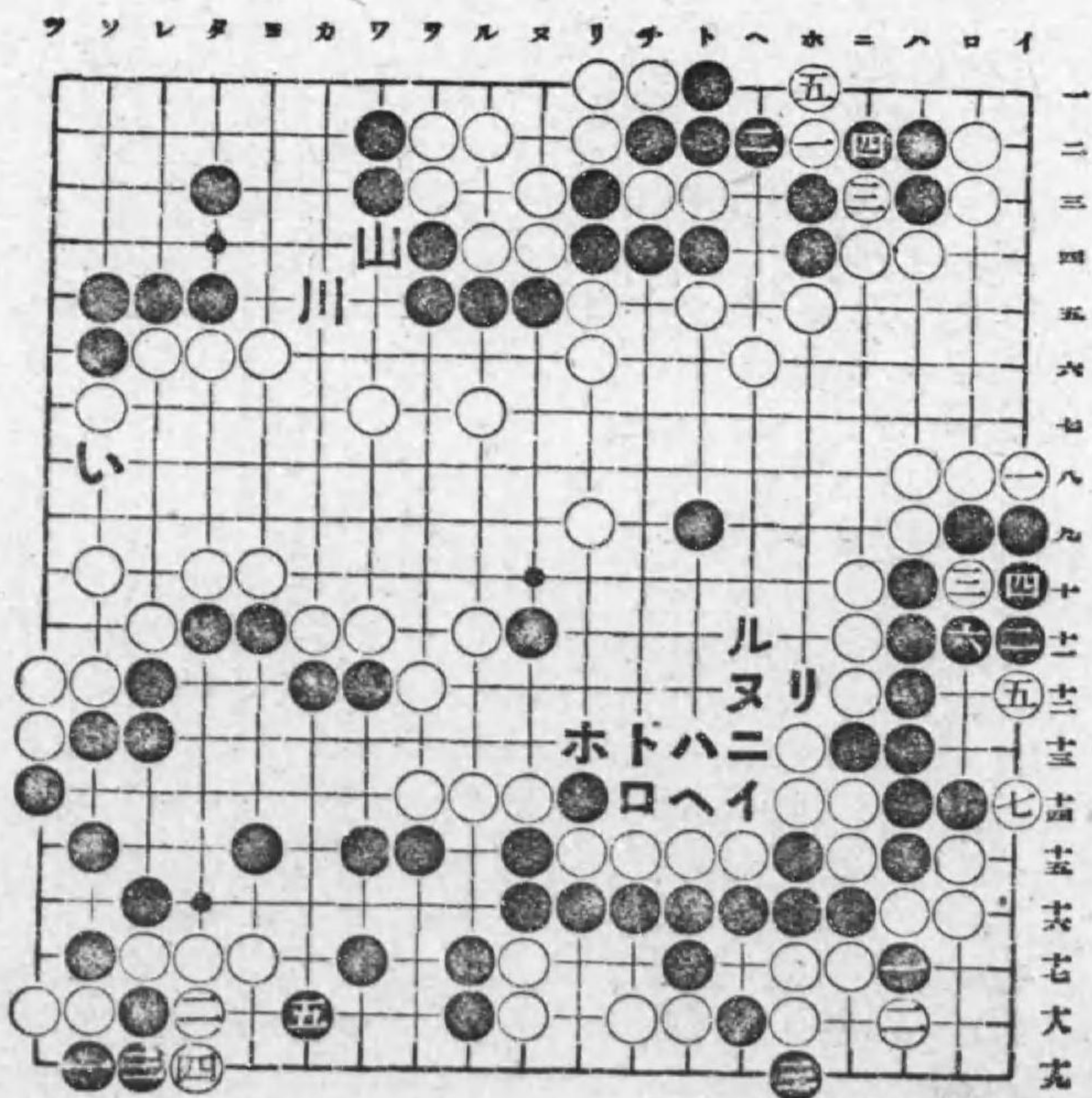
右上隅 黒二を四または五でも、白は「への三」。黒は白一を「ハの一」と、黒五で、黒は活き位に思つてゐたのであらう。白一が妙。

右邊 七迄で取られた黒は、黒二を六だと取られない。即ち、黒二を六に白五なら、黒は「イの十三」。また、その白五を「イの十三」は、黒は五。

右下隅 黒三がうまい。
左下隅 黒一を五だと、白は二で活。一から三までは實際に多く現はれる所。

左邊 黒いに、白「ツの七」と、黒は「レの九」。

中央 黒イ、白ロ、のとき、黒はハがうまい。即ち白二、黒ホ、白へ、黒ト、白イに粘ぎ、黒リ、白ヌ、黒ル。それからやつて見給へ、白は大變。



右上隅 白十一は悪い。十一は十二。二十となつて、白「イの三」は、黒は「ニの二」。これと同じやうなことが、

右下隅 に現はれた。黒一は妙。黒一で二だと、白一で、黒の三子との攻合は、白が勝。念のためいふが、白八のとき、黒一、白五、黒「ホの十九」を、黒は忘れてはいけない。

□

左上隅 黒「ツの二」と、白の六子を打上けても、白は「ソの二」。これを俗に花六はなむすといつて、黒は活きない。それで黒は、一より五まで。次に、白「ワの一」は、黒は「ヲの三」。またその白「ワの一」を「ヲの二」は、黒は「ヨの五」黒一を「ヲの三」だと、白は「二」がよい。

□

左下隅 五となつて、白「ヨの十九」だと、黒は手抜きで、白を取れてる。これが左上隅と同じ花六はなむす。といふことは、白「ヨの十九」、白「ヨの十八」、白「ソの十八」、黒三、白五、黒「ソの十八」。

白は悉く失敗

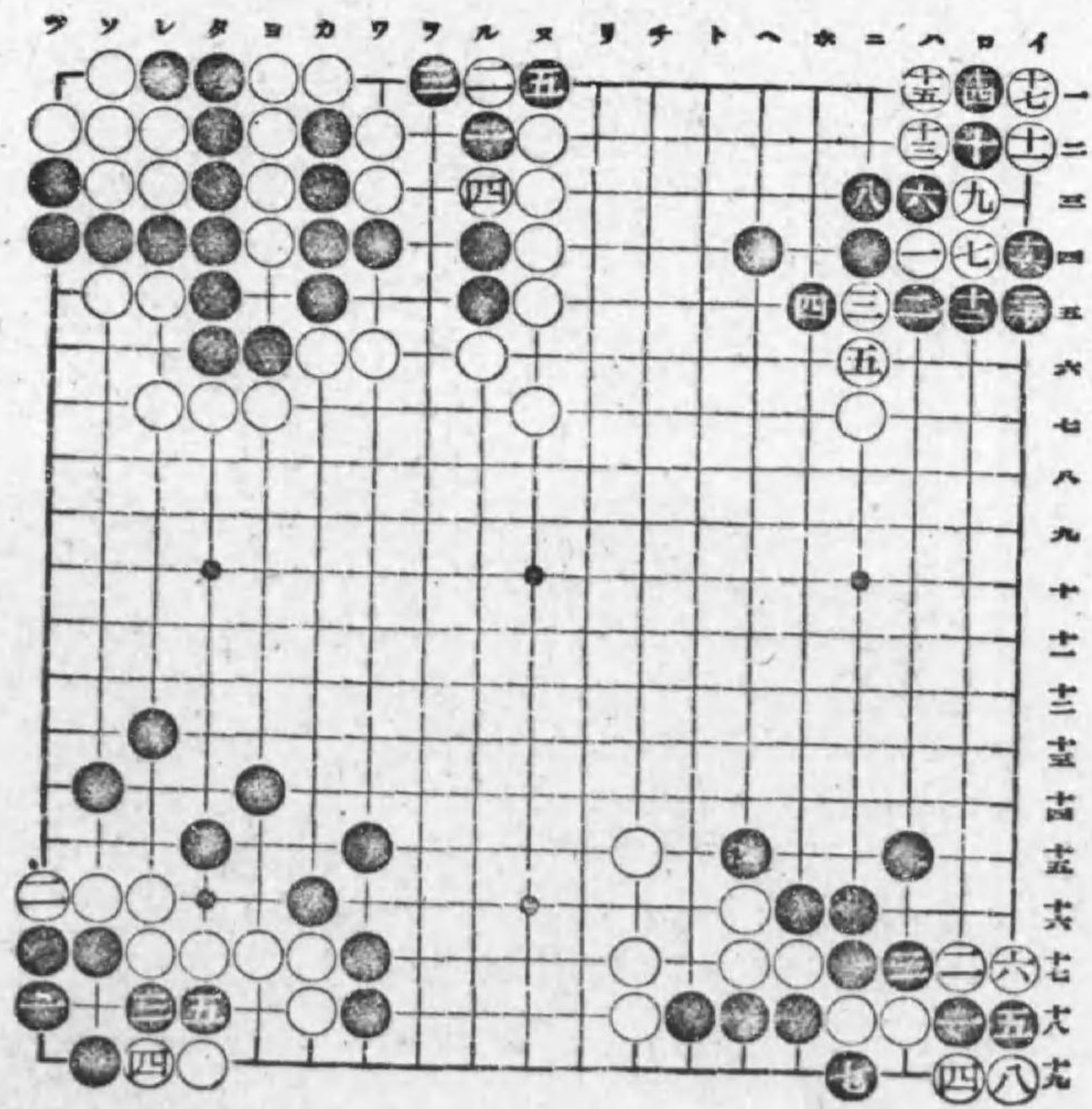
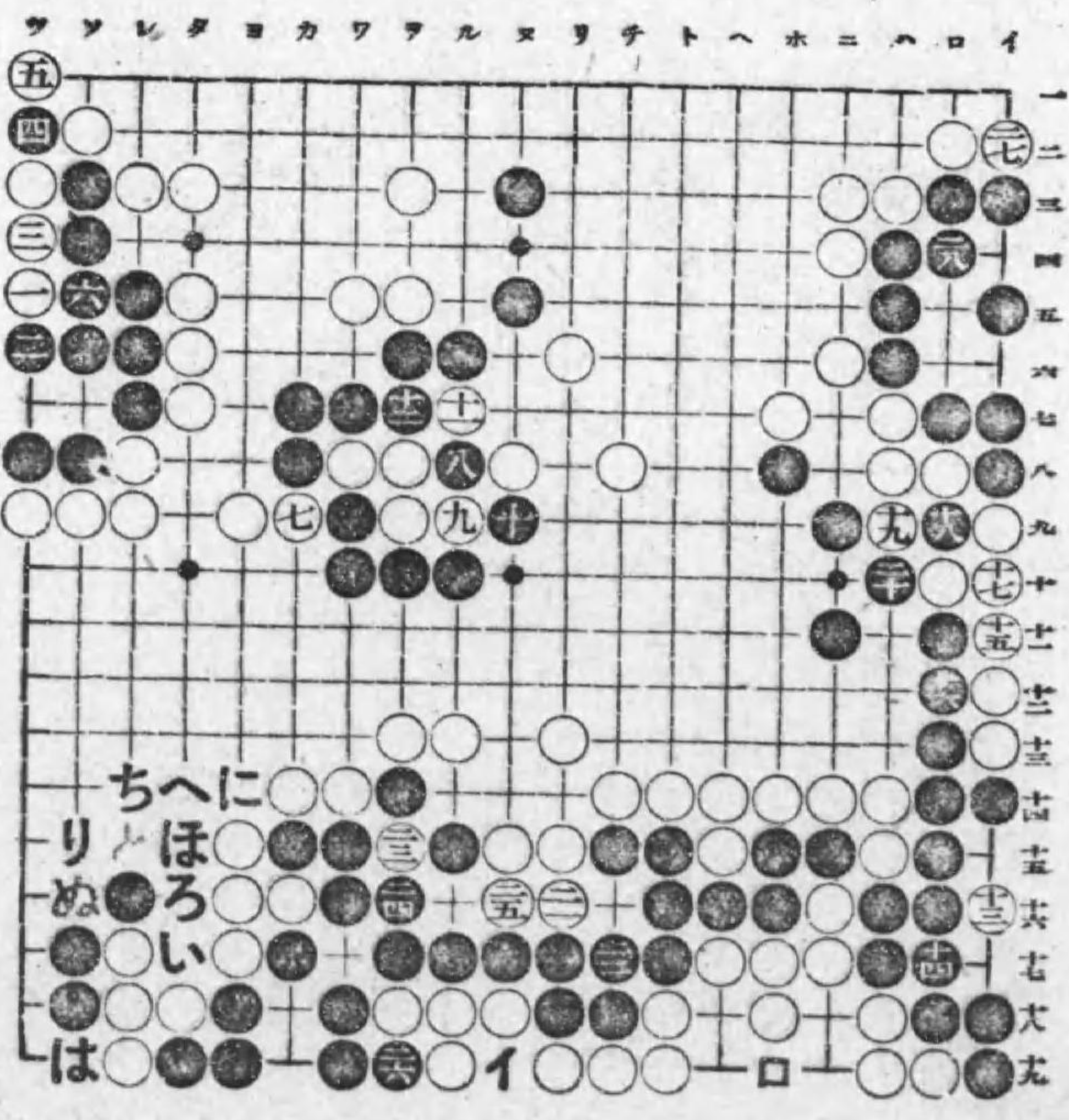
黒二を三だと、白二で、黒は取られる。黒二と受けたのは、四の打込みが判つたからである。

黒が白に七と切られても善いと考へてゐたのは、即ち十二となつて白八に粘れば、黒「リ」の八、白「ヌ」の七、黒「リ」の七、白「ヌ」の六、黒「チ」の六で、その白は、黒は征に追つて、最終黒「ホの二」でよいといふことを見るからである。

白十三と、黒の眼を先手に缺いたのはよい。だが、二十となつて、白は十八には粘けない。十三を「イの十七」、黒十四、白十三は、白は後手の眼缺き。

白二三と打込み、二五と黒の眼を缺いたのはうまい。が、黒二六のとき、白イに粘ると、黒はロ。

黒二八を手抜きだと、白「ロ」の六、黒「イ」の六、白二八。白は、黒い、白ろ、黒は、白いに粘ぎ、黒に、白ほ、黒へ、白と、黒ち、白り、黒ぬとなる、自分の缺陷を知らなかつた。



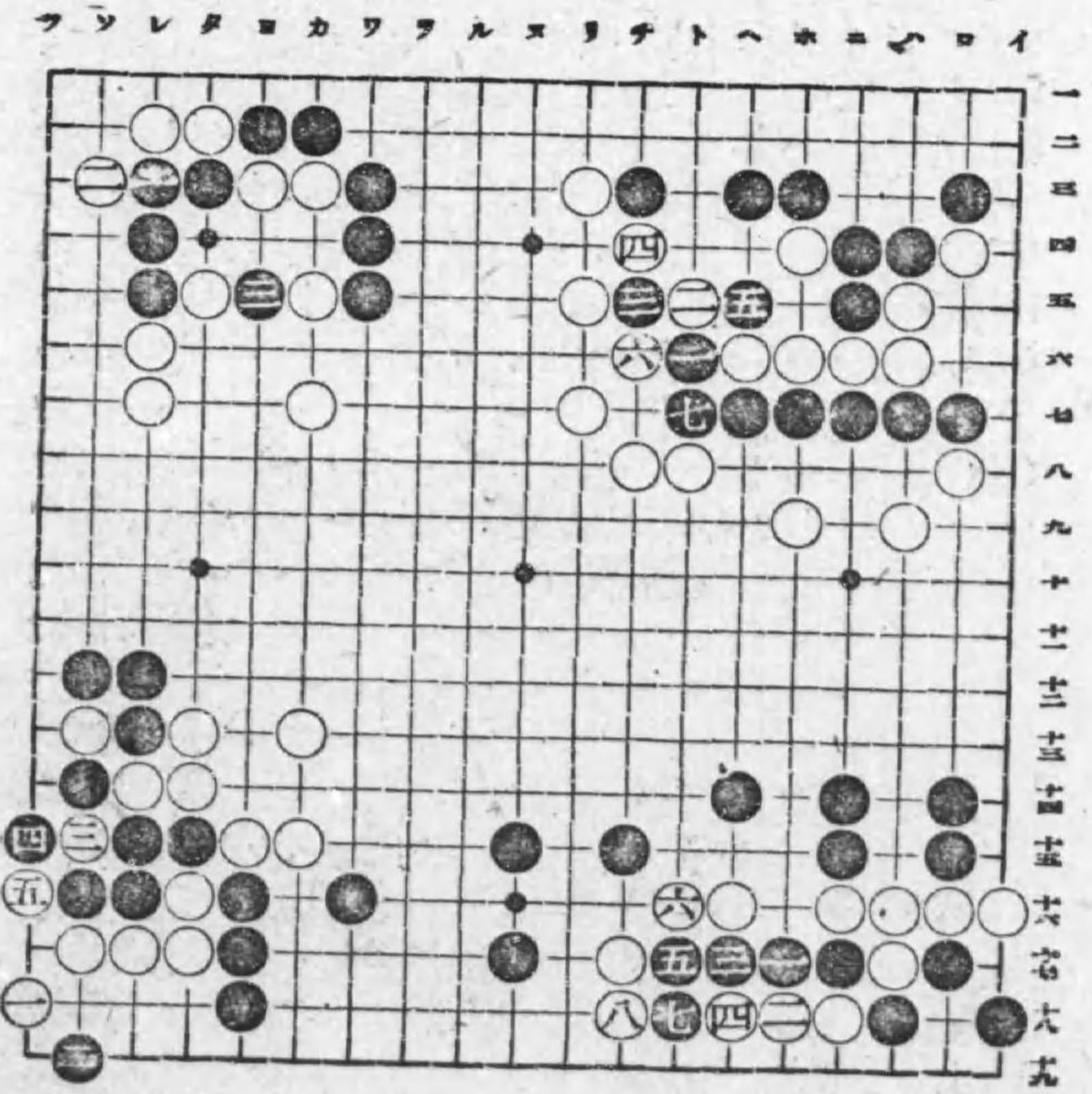
十八(十の處)
十九(十四の處)

右上隅 包圍された黒五子を活きるには、三が妙手。三を七だと、白は「への四」。

右下隅 黒一と出ても、八まで、取られた。一と出る前黒「ロの十九」、白「イの十七」、そして黒一と出てもかう八までと同じ結果。白四、八の要領は、實際に多く現はれる。

左上隅 黒三が妙手で、黒の四子は逃れた。三のとき、白「ヨの六」は、黒は「ヨの四」。また白「ヨの四」は、黒は「ヨの六」。

左下隅 白一を「タの十八」だと、黒三、白「ソの十八」、黒「レの十九」、白「タの十九」、黒「ツの十七」、白一、黒二で、白は取られる。白四子を活きるには、一の妙手で、かう五までと劫にする外はない。黒二を五だと、白は二で括。

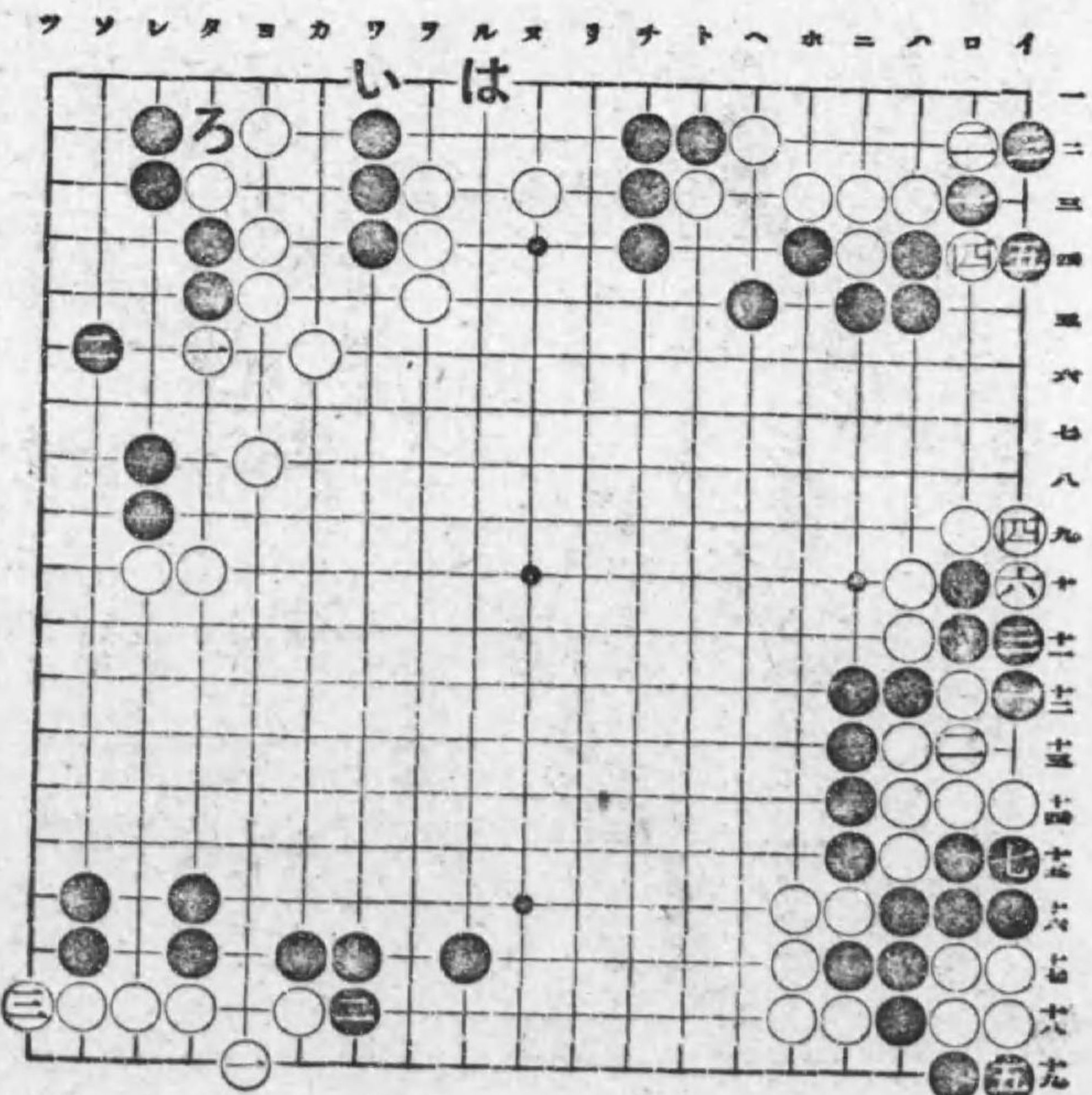


右上隅 黒一より五までと、かう劫手段に出ることは、無論、黒は劫立ての多いとき。黒五のとき、白「イの三」、黒は他に劫立て、それに白は應じて黒一、そして白「ロの二」に、黒「ロの五」、白「への一」と活かしても黒は得だが、黒に劫立て多くば黒「ロの五」を「への一」と、白を取りに行くのである。

右下隅 黒七に、白「イの十三」と、黒の四子を取れば、黒は「ロの十一」。これを「石の下」といつて、餘り多く現はれないことだが、對局中複雑な關係が起れば念としなければならぬこと。

左上隅 黒二を「レの六」だと、白「レの五」、黒「レの四」、白「レの七」、黒二、白「ソの七」、黒「タの七」、白「ヨの七」と、白に手段される。黒は「レの八」と「レの九」の二子とを損なく連絡するには、白一に對しかう二がよい。尙ほ、黒い、白、黒はで、黒の三子を渡られる。

左下隅 白一がよい。この外に白の活きる手はない。



一 講 八 題

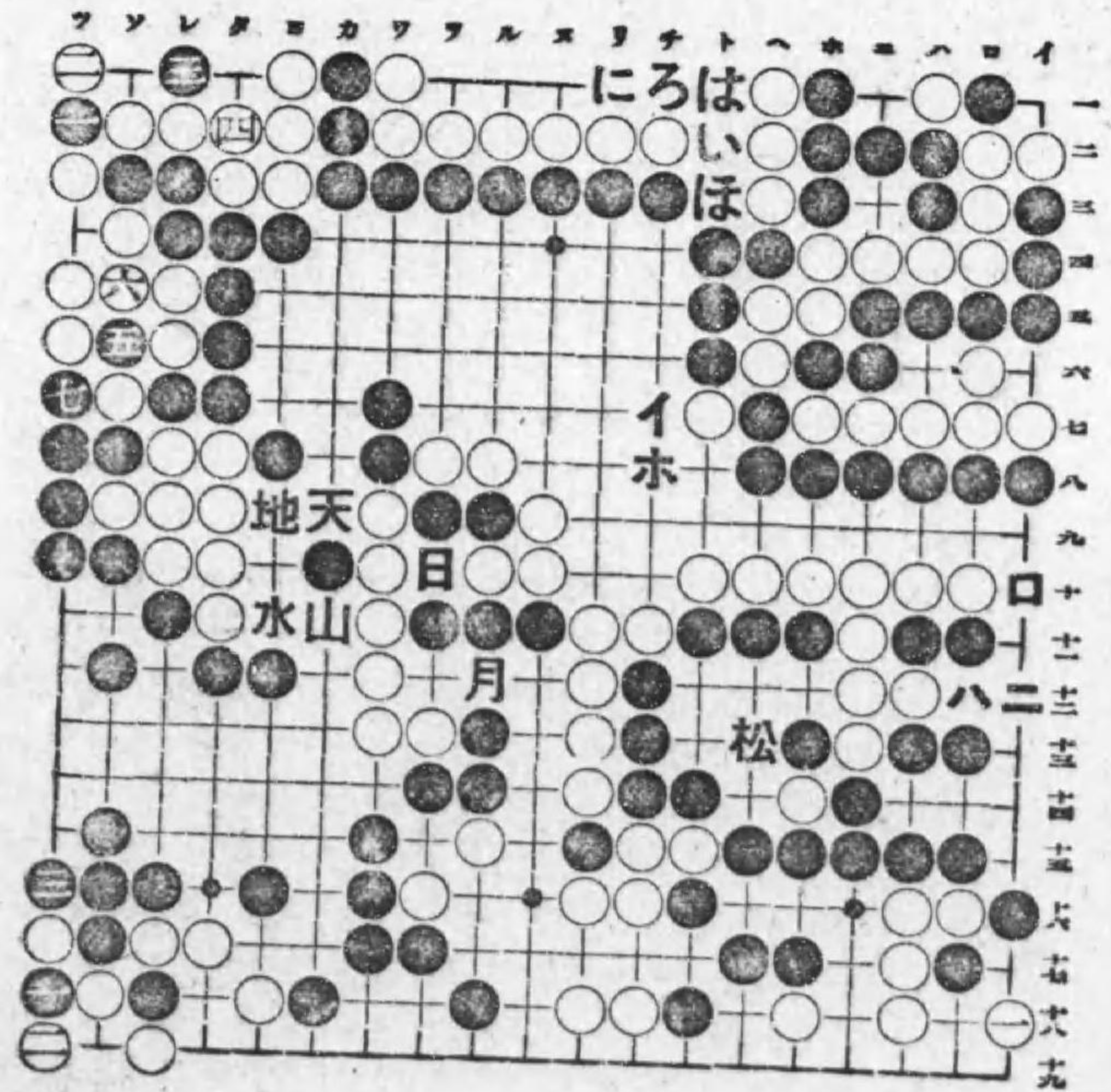
右上隅 は、持であつて、白黒いづれも身動きも出来ない。白イなら、黒ロ、白ハ、黒ニ。白イをハなら、黒はホ。黒は「イの八」から「への八」までの七子を取られると、持が破れる。

黒いに對しては白はろがよいので。白がろをはと受けると、黒ろ、白に、黒ほで、白は「への一」から「への三」までの三子は取られてこれまた持が破れる。

右下隅 白一がこの隅の白を活きる妙法。一を「ロの十八」だと、黒一で劫になる。

左上隅 黒七まで、白は全部取られた。白二を「タの一」だと、黒「ソの一」、白二で劫になる。要するにこの隅は、白二を七と受けて、黒「ソの四」といふ劫と、前述の劫との外はないが、同じ劫でも白は前述の方が得。

左下隅 黒一、三で、劫。白天、黒地、白山でも、黒は水で、白の八子は取れる。黒日だと、白は月で、黒は六子になつて取られる。尙ほ、白には松といふ手もある。

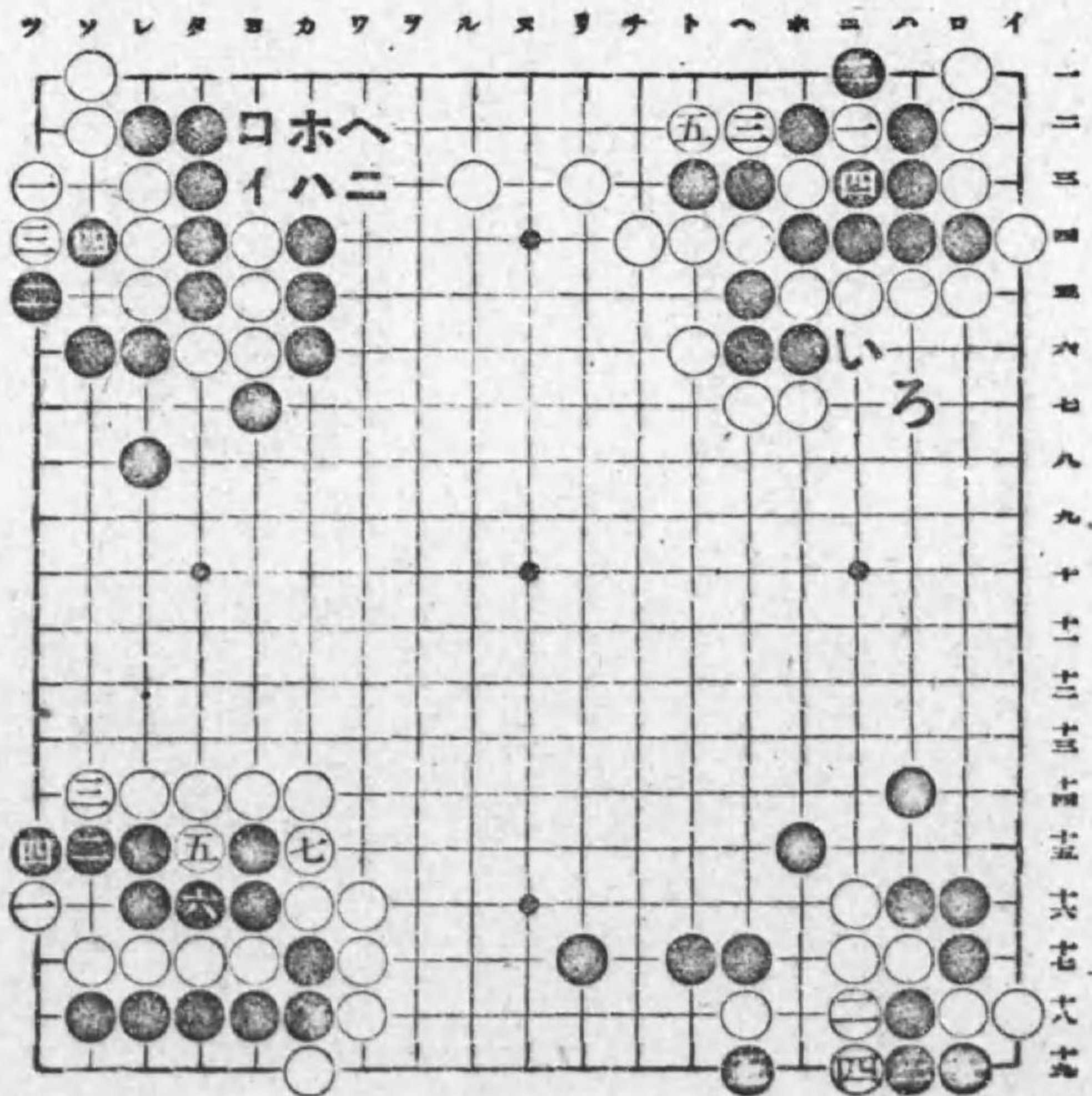


右上隅 白一が妙手、黒二を四だと、白は二。黒いは白はろと取るのがよい。

右下隅 黒五を「トの十八」だと、白五で、白は活。黒五に白「トの十八」、黒「チの十八」、白「トの十九」は、黒は「ホの十八」。その白「トの十九」を「ホの十九」は、黒「ホの十七」、黒「ホの十八」、黒「トの十九」、白「チの十九」。のとき、黒は「トの十九」。黒五は妙。だが、周囲の關係に注意が肝要。

左上隅 かう四となつては、白は取られた。白一を三に、黒「ソの五」、白四。又、其黒「ソの五」を一は、白は「ソの五」。即ち白一を三だと、白は活きる。白イは、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホ、黒へで、白四子は逃げられない。

左下隅 白「ヨの十七」より「ソの十七」までの四子を取けるには、かう一の妙手で七まで。白一を二、または「ソの十六」などの俗手では、不可。



右上隅 黒二を三だと、白は二で、俗にこれを構形といひ、完全な活。即ち、黒二を三、白二、のとき、黒四は白五。またその黒四を五は、白は四。それで黒は二より八まで、劫。黒八を「ハの一」、白八だと、持。白イと出れば、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ロに粘ぎ、黒ホ、白へ、黒ト、白チ、黒リで、白は逃げられない。その白チをリだと、黒は又、さうなる黒トがよい手。

左上隅 白一を、右上隅一と換へて見れば、即ち黒四までとなつて、白「カの一」は、黒は「レの二」。また、白三を四も、黒は「レの二」。白い、黒ろ、白は、黒に、白ほ黒へ、白と、黒ちで、白の五子は逃げられない。

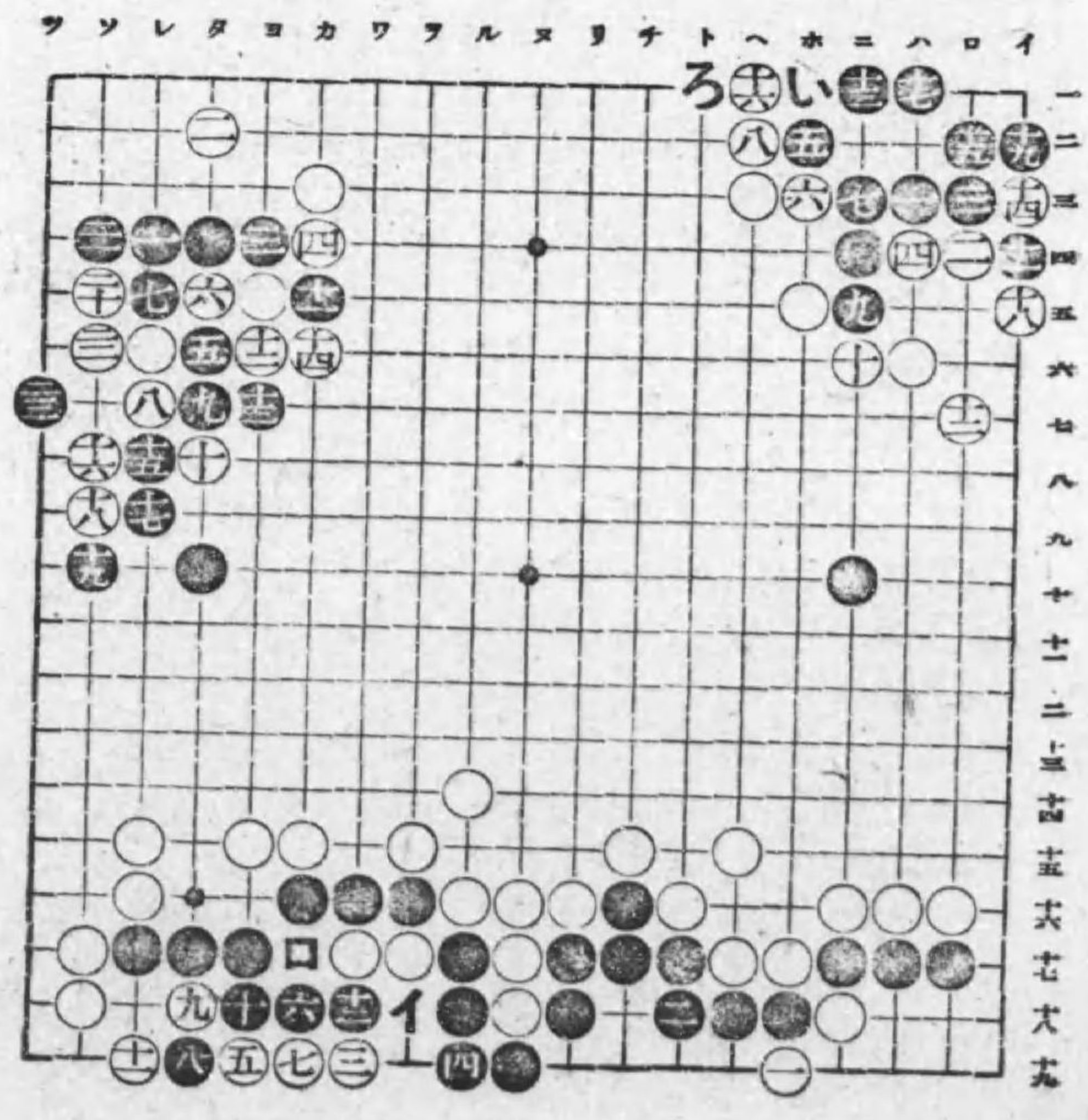
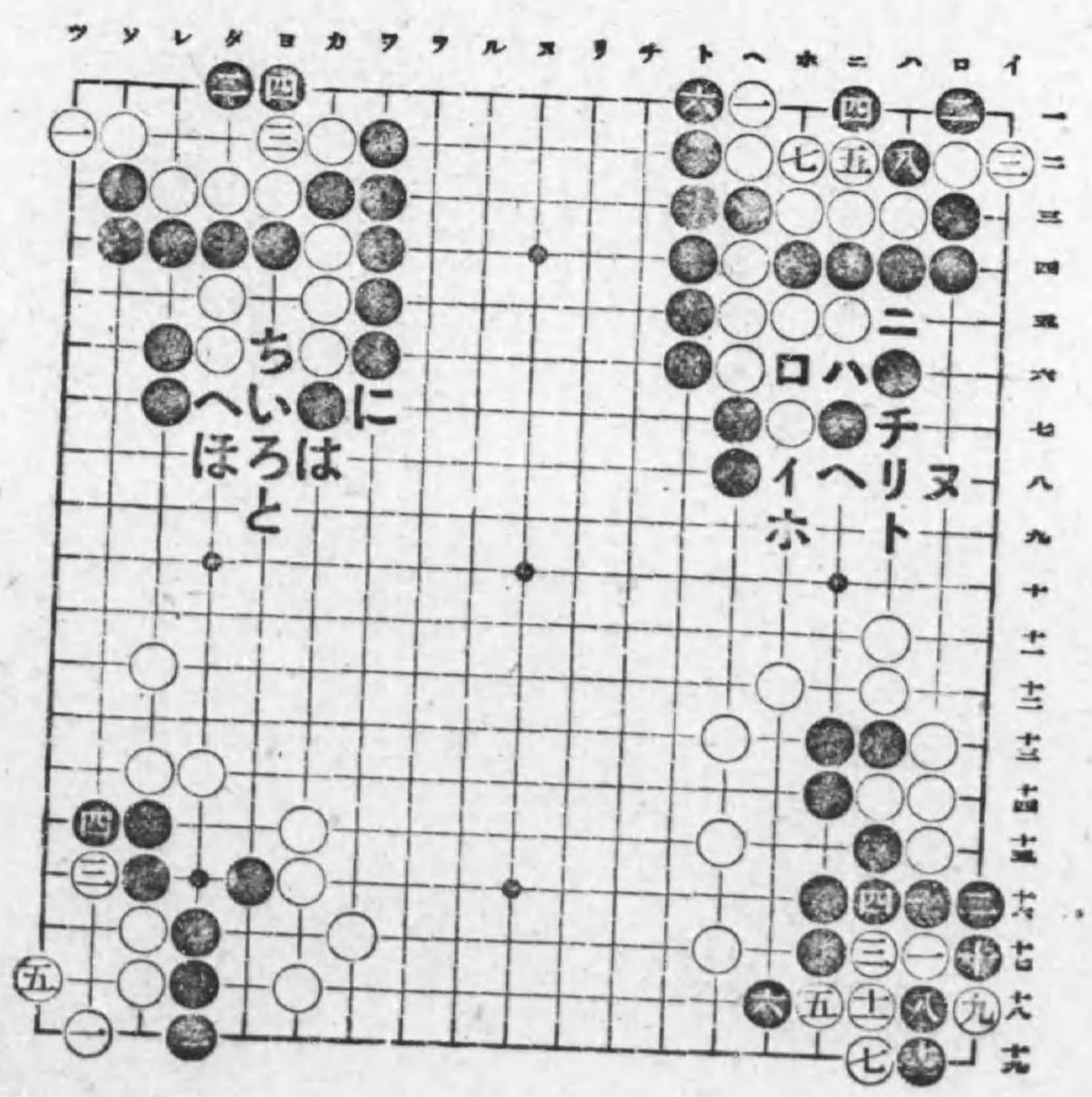
右下隅 白七を八だと、黒七、白「ニの十九」、黒十で、黒がよい。また白七を「ニの十九」は、黒は「ホの十九」。

左下隅 かう五となつては、黒は取られた。黒二を「ソの十七」、白「ソの十八」、黒三、白二、黒「ヨの十九」と黒は劫の外はない。

右上隅 は、黒「ニの四」に對し、白「ハの六」、白「ホの五」、白「ヘの三」と、俗にいふ三手抜き。に、黒一よりかう十九までと活きすることは、黒は悪い。黒は假に六子を布いた碁なら、「ニの十」に黒の一子があるから、

左上隅 の如く、がよい。白二を十四なら、黒は二で完全な活。さう活きすることは、右上隅のやう十九までと黒が小さく活き、外部の白を厚くさせるより黒のよいこととは、一見判らう。尙ほ右上隅白十六で、黒十六、白ろと、白は左方へ一步の利用が出来る。この三手抜きの問題は、四子又は五子を布いた碁では、「タの十」の黒がないから、左上隅の如くにはならない。

下邊 黒四を六だと、白は四。白は五で「ソの十八」の方へ渡つて黒の六子を取つた心算の處、黒に八のうまい手に出られ十二までとなつて、白は目的を達しなかつた。即ち、白イは、黒はロ。だが、白「ロの十八」、黒「ハの十八」、白「ハの十九」の劫手段は遺つてゐる。



右上隅 白は九子を活きるには、一が妙。黒二を五で、白二、黒いだど、白はる。

右下隅 白一は、用意周到。白一を三、黒イ、白ロだと、黒ハ、白ニ、黒ホ、白ハ、黒一で、黒が活きる。が、其白ハを二、黒一、白へ、黒ハと、白は劫にはしやう。

左邊 黒三がよい活。三を五だと、白三、黒ツの十、白ツの八で、黒は取られる。白二を五だと、黒は「ソの四」で眼を持つかまたは左上隅へ渡る。

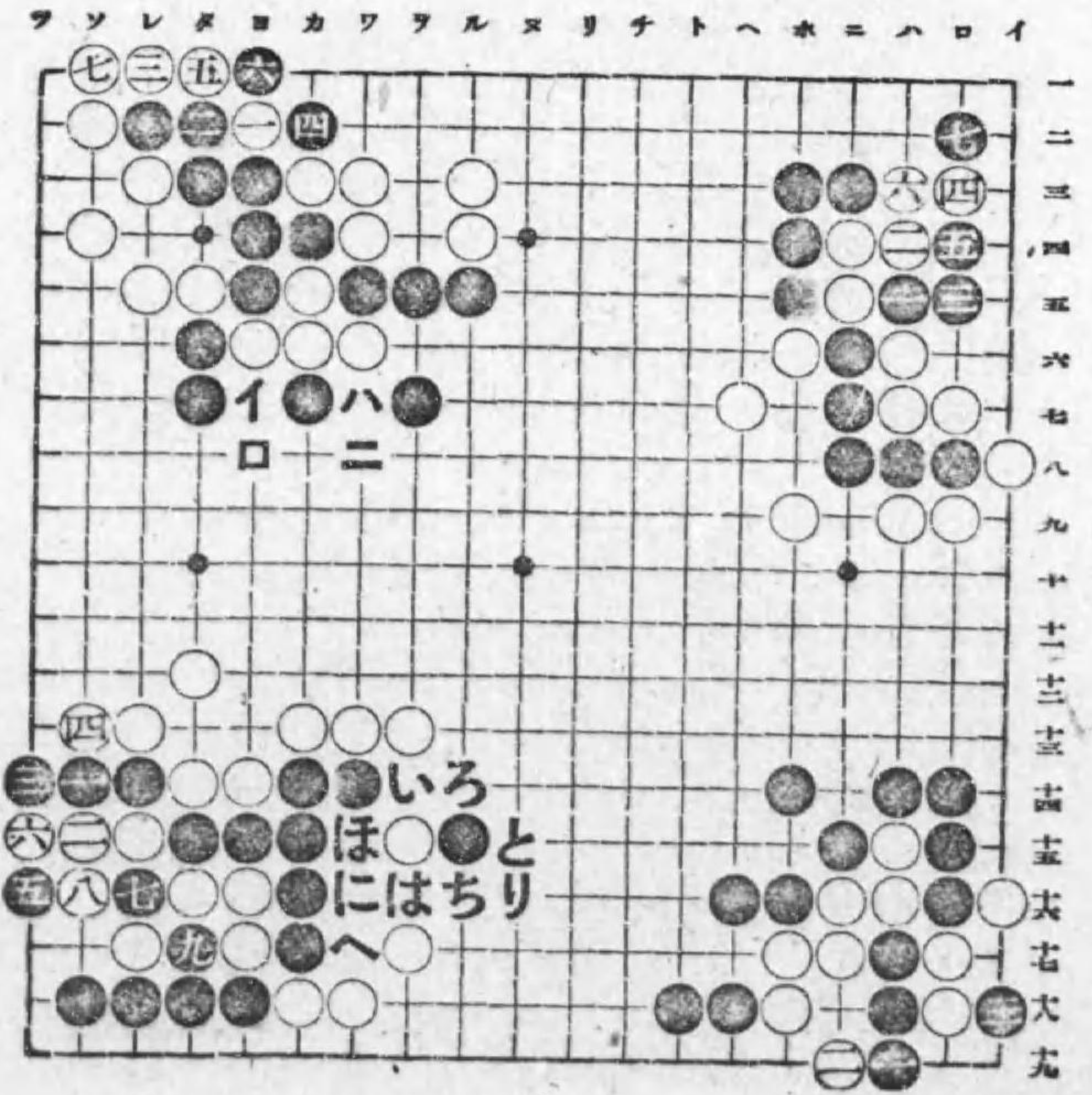
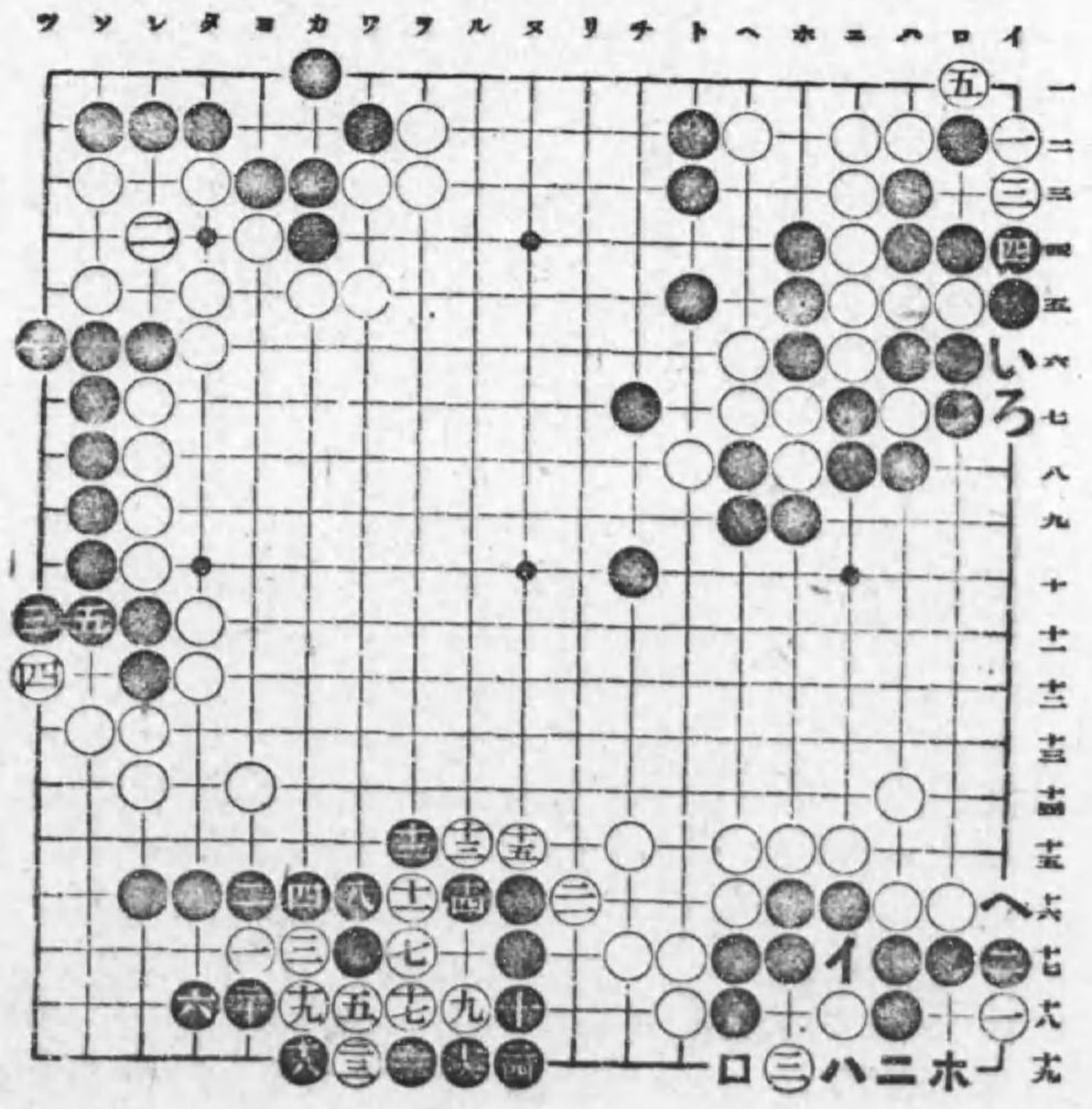
左下隅 黒丸五手は、八九子の盤碁によく現はれて、白に一と打込まれ、黒はゴマカされる所。白五を「レの十八」なら、黒は五がよい。そして、白ソの十七、黒「ソの十六」、白「ヨの十九」又は十八も、黒は六。又其白「ヨの十九」を二十、黒「ヨの十九」、白「タの十九」、黒「タの十七」、白六は、黒は「ソの十九」。倍、二四となつて、白「リ」の十八は、黒は「タの十七」。

右上隅 黒は五子を助けるには、かう一の外はない。七となつて、白「ハの二」は、黒は「イの三」。白四を五だと、黒「イの六」、白「イの七」、黒四。また白四を六は、黒は「ハの二」。

右下隅 白を取るには、黒は一が妙。白二を「ロの十九」は、黒は三。黒一を三だと、白一、黒「イの十五」、白「ニの十八」で、白は活きる。かう三となつては、白「イの十七」、黒「ロの十九」、白「イの十九」の劫の外はない。

左上隅 白イ、黒ロ、白ハ、黒ニで、白はいけないから、白は一及び三が妙。

左下隅 黒い、白る、黒は、白に、黒ほ、白へ、黒ヲの十五」に粘ぎだと、白と、黒ち、白リで征。黒三が妙。白四を七は、黒六、白五、黒ツの十七」、白「ソの十七」と劫になる。



右上隅 黒は「トの五」より「ハの四」までの七子を助け出すには、かう七までの外はない。七となつて、白い、黒る、白は、黒に、白ほは、黒へ、白と、黒ちで、黒は攻合勝。その白ほをちは、黒はり。また、黒七のとき、白ろは黒い、白ぬ、黒へとなつて、白は大いに悪い。

右下隅 白を取るには、黒は一、三の外はない。三となつて白「イの十七」は、黒は「ハの十七」。またその白「イの十七」を「ニの十六」は、黒は「ロの十七」。

左上隅 白を取るには、黒一、三が妙。七となつて、白「ツの四」は、黒は「ツの二」。白四を「レの二」は、黒は「レの二」。黒一を「ヨの二」と、白は一で活。

左下隅 白二でイは、黒ロ、白ハ、黒二で、黒は活。その黒ロを二だと、白ニ、黒ホ、白へ。その黒ホをトは、白はチ。倍、五となつて、白イは、黒はり。また、白イをリは、黒ヌ、白ル、黒ヲ、白イ、黒ワで劫になる。

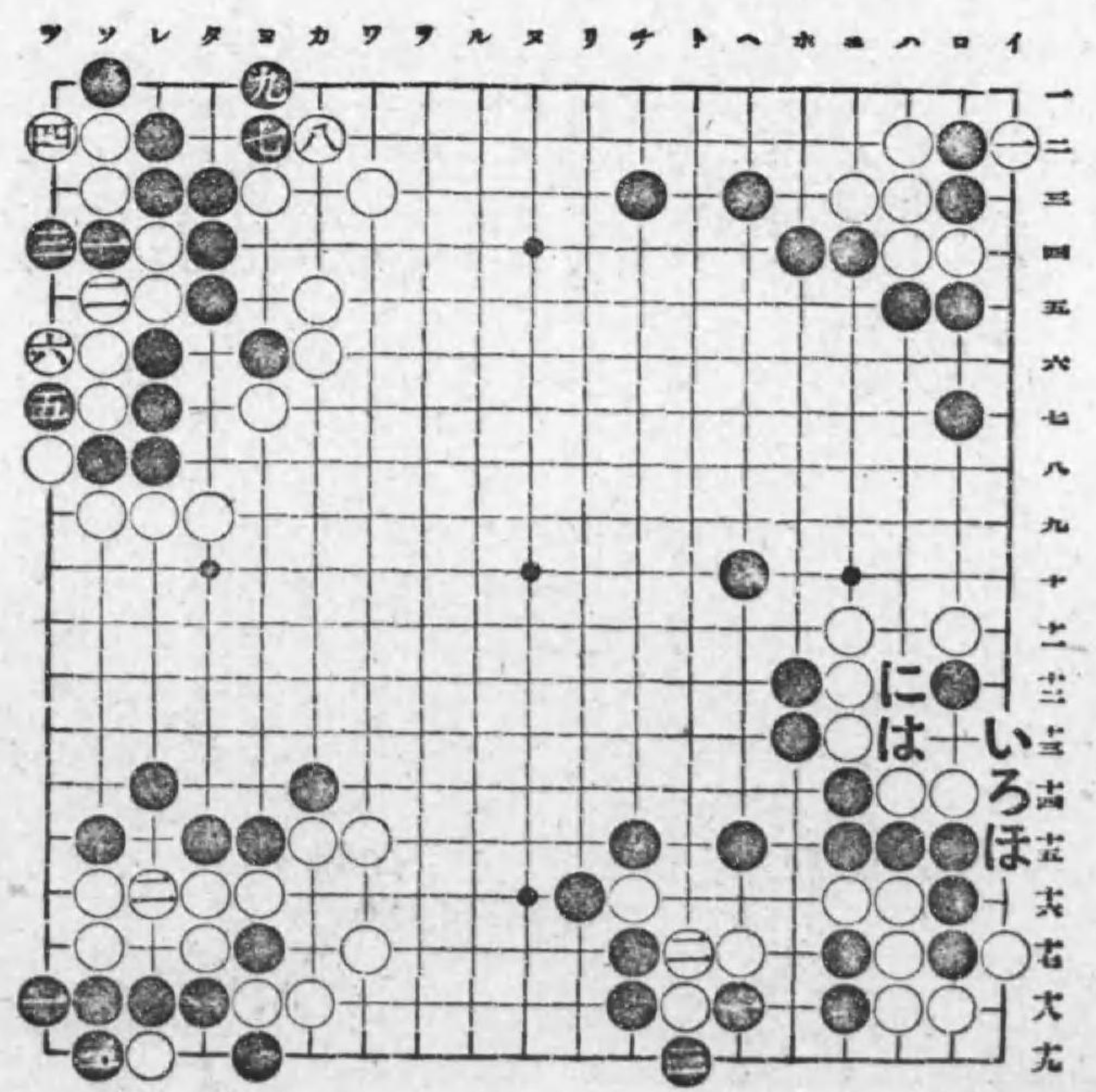
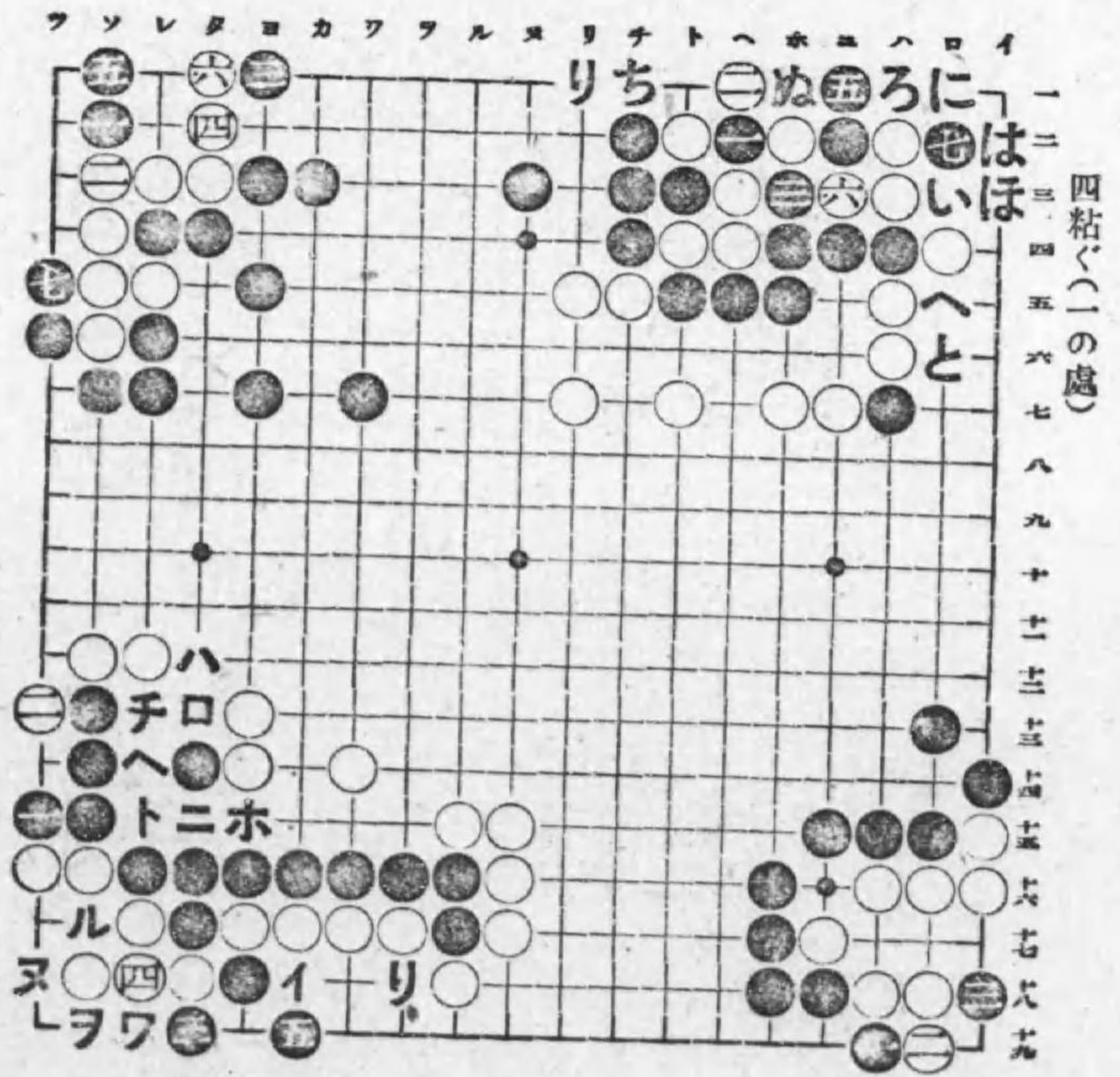
右上隅 白一が妙。一を「ロの二」は、黒二で白に活なし。白一に黒「ロの二」は、白「ホの二」、黒「イの四」、白「イの三」、黒「イの二」、白「イの三」、黒「イの五」、白「ハの二」。白七子の活を圍るには一の外はない。

右下隅 黒一と三が妙。白二を「ホの十八」は、黒は「ホの十七」。黒一で「ホの十七」、白「ホの十六」、黒一、白二、黒三だと、白は「ニの十九」で活。かう三となつては白に活きる途なし。

黒いが、この白六子を攻めるよい手。白ろだと、黒は、白に、黒ほで、白は取られる。

左上隅 黒十一子を活きるには、一、三の外はない。白四で「ツの五」だと、黒五、白「ツの三」、黒「ツの九」で、白が大いに悪い。黒五で七、白八、黒九だと、白五で黒は取られる。

左下隅 黒四子を活きるには、一、三の外はない。白二を三だと、黒は「ツの十六」と渡る。



右上隅 黒がこの隅につき安心してゐたら、白に一と
 來られ、五まで取られた。黒二を五は、白「ロの三」、
 黒二、白四。黒二を「ロの三」でも、白は三。五となつて、
 黒「ハの二」は、白は「ロの二」。黒イだと、白はロ。

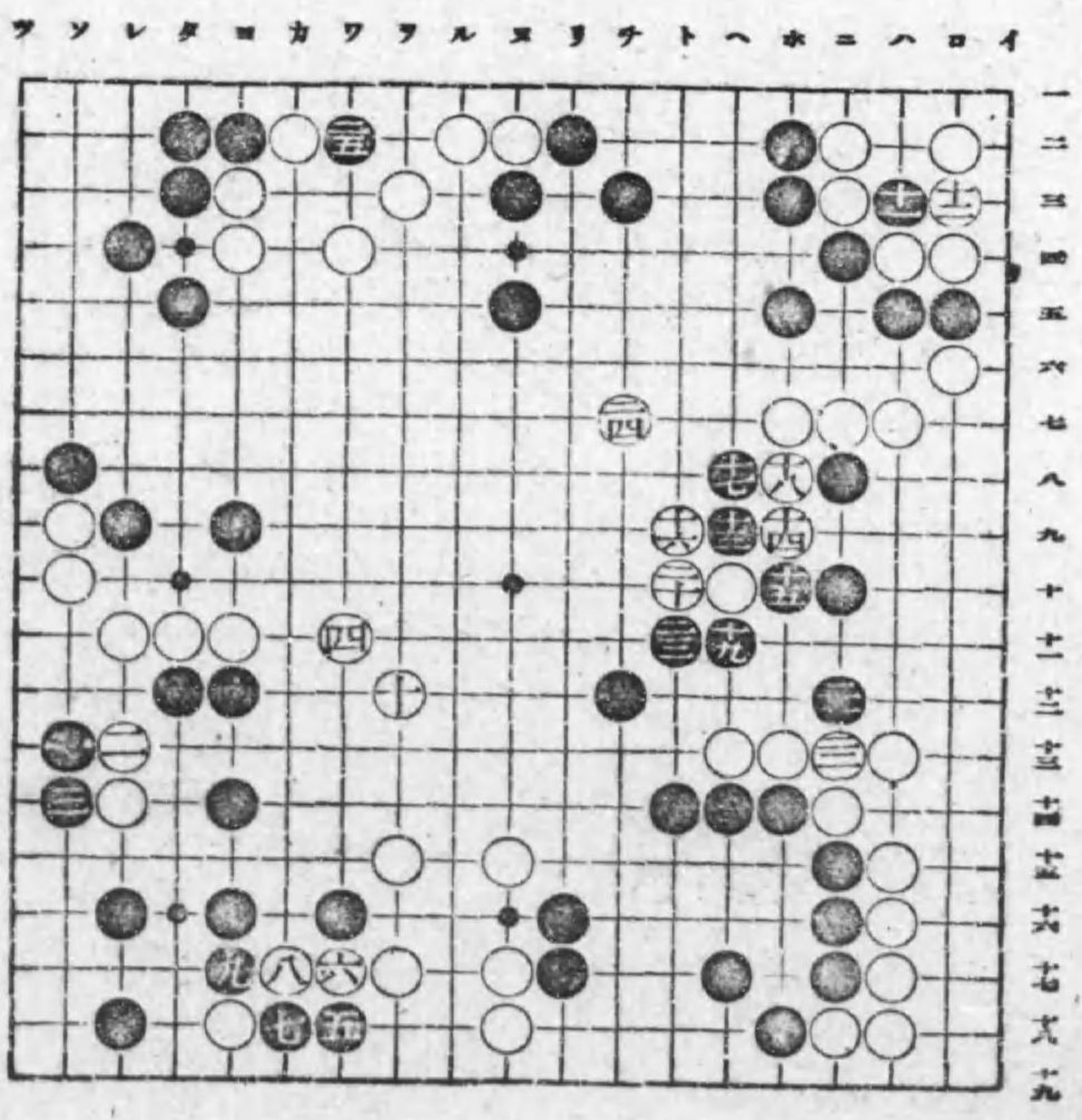
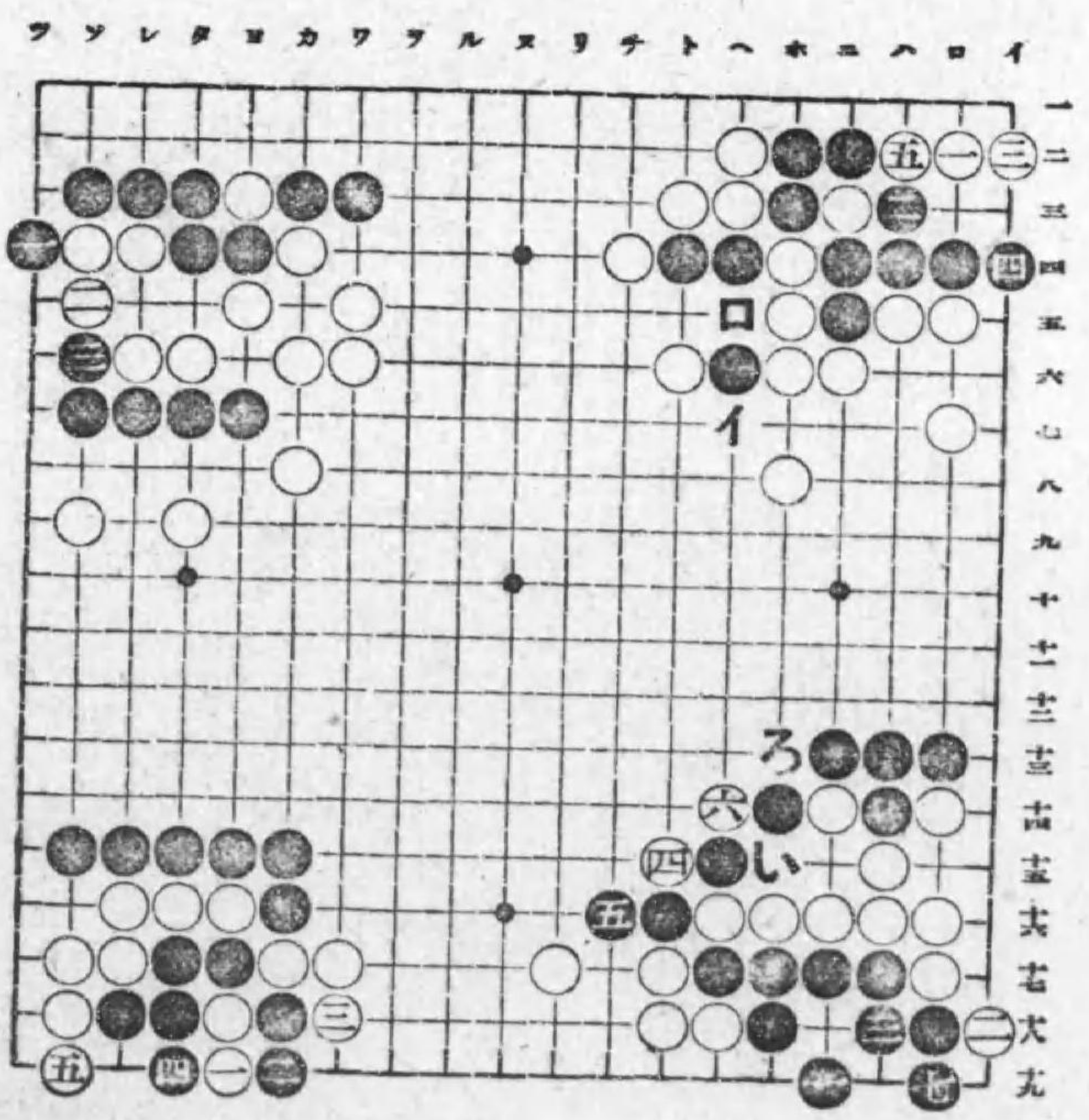
右下隅 黒一でいだと、白一、黒三、白二、黒「ホの
 十九」、白七で、結果は白が善い。それで七まで、白黒
 共に活。黒いだと、白はろ。黒一を二が、同じ活き活き
 となつても損得が違ふといふことに氣附かば、それは上
 達の現はれ。

左上隅 黒四子を逃れるには、かう一と三の外はな
 い。黒一で三だと、白は「レの五」。三となつて、白「ツの
 五」は、黒は「タの五」。

左下隅 白一がよい手。一を「レの十九」、黒一、白三
 だと、黒五、白「ツの十九」、黒「ツの十七」で、白は取ら
 れる。さうなる白三を五だと、黒は三。

黒の終末

黒一と三がよい。三を「レの十二」、白「ツの十二」だ
 と、黒一は取られる。
 黒五、七は、これまた一、三と同じく大いに得。
 白十は、黒「カの十二」、白「カの十一」、黒「ナの十三」
 と、黒に兩斷されるから。
 黒十一は、白に「イの五」に渡られた後、十一だと、白
 は「ハの二」。
 白十二を「ハの二」だと、黒は「イの四」。かう十一、十
 二となつては、黒「ニの二」、白「ハの二」と、黒に先手得
 される。十一の一手は、初段近くでないかと打てぬといふ
 が、憶えれば何でもない要領。
 白十四、十六は、黒十三に對する要領。
 黒二五に白「カの一」だと、黒「カの三」、白「カの四」、黒
 「ツの一」、白「ツの三」、黒「ヨの一」と、白は眼を缺かれ、
 そして白「カの三」に粘ると、黒は「ヲの五」と白を取り
 に行く。
 白「レの八」に切らば、黒「タの八」、白「レの七」、黒「ソ
 の七」で、黒がよい。



右邊 かう三までとなつては、白は全部取られた。白二を「ロの七」、黒二、白「イの八」、黒「イの九」、白「ロの九」と一子を取り返してゐれば、白は損だが全部活きてゐる。

左上隅 「ソの二」以下白八子を逃れるには、一が妙。白一をい、黒一だと、白は取られる。白一に黒ろ、白は黒い、白に、黒ほだと、白へで、黒は「カの三」に入ると、白に一と黒は取られてしまふ。白一が妙。

黒イだと、白はロ。

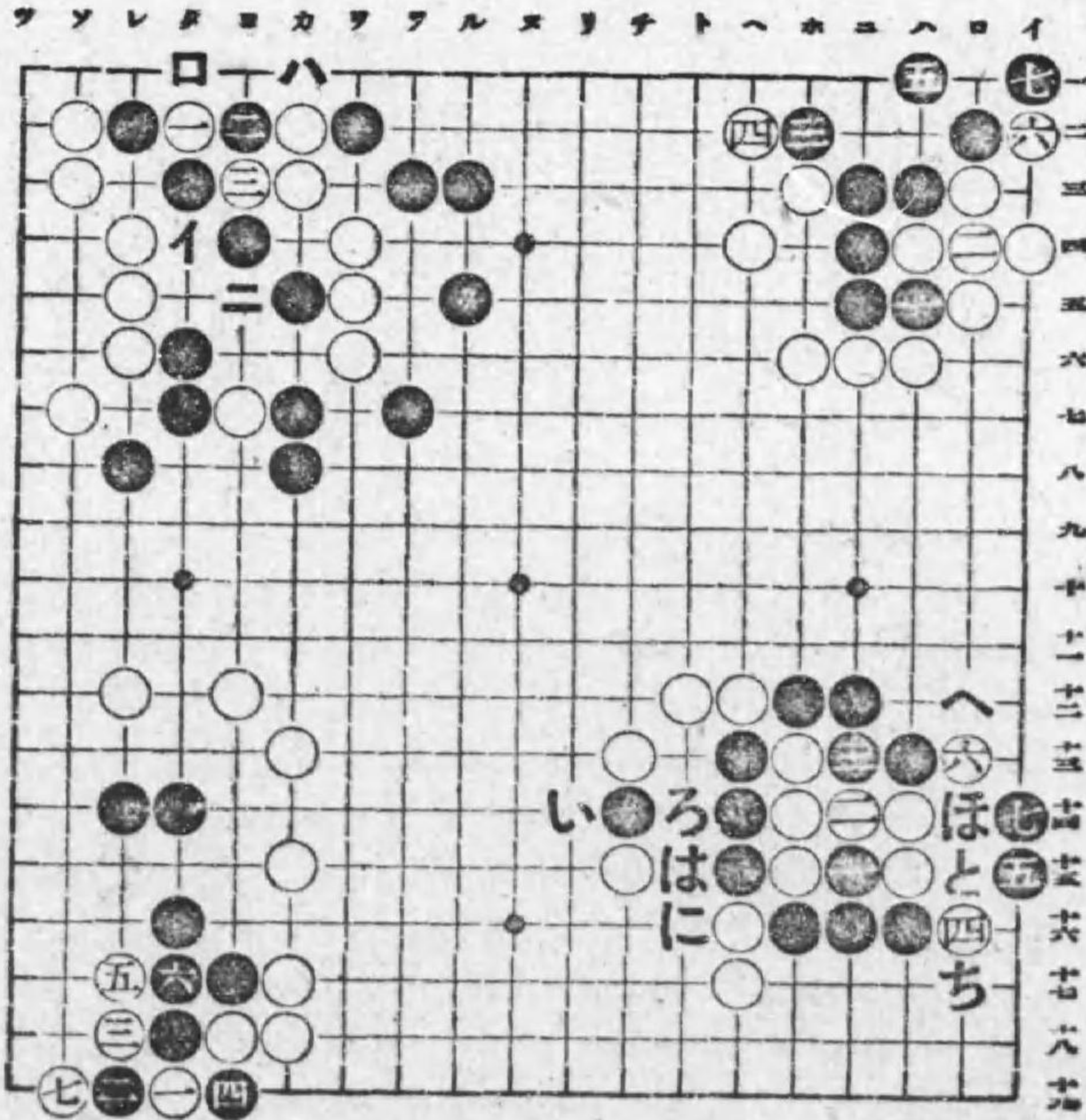
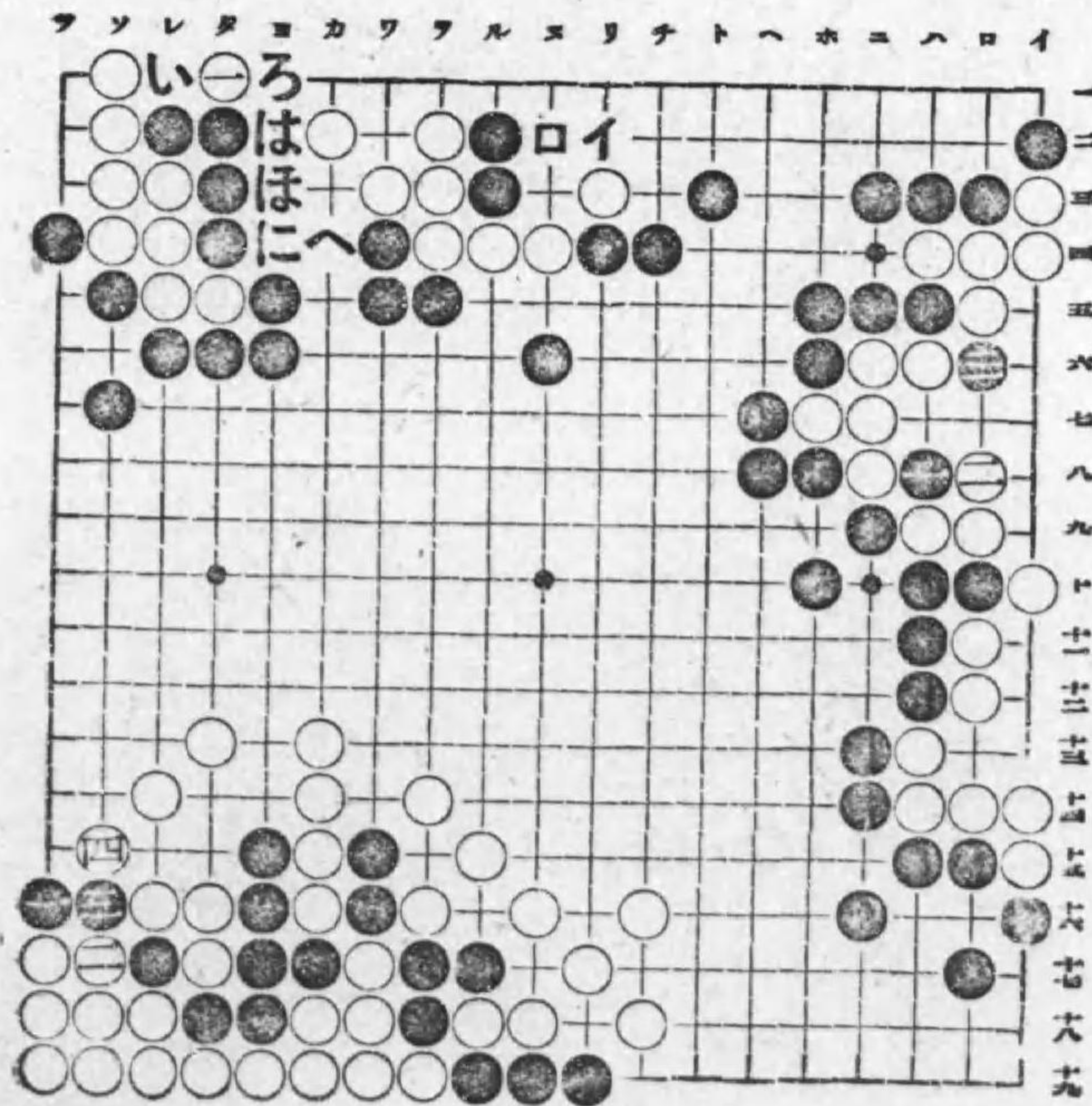
左下隅 白四の次に、黒は「レの十七」と白の十六子を打抜いて後、白に「レの十八」へ切られ、黒は全部取られてしまふ。即ち、十六子も打上げて面かも活がないといふ興味だけ。澤山金は儲けたが、儲けた後に缺陷があつて潰れたといふやうなことに當るので、實際の打碁には滅多に現はれない問題。

右上隅 黒五で「ニの二」だと、白は五。また、五で「エの一」だと、白六、黒「ハの二」、白「ロの一」で、黒は問題なく取られる。黒は五子を活きるには、七と斯う劫手段よりの外はない。

右下隅 黒いだと、白ろ、黒は、白にで、黒は取られる。それで黒は一より七までと、白の五子を取つた。即ち、七となつて、白ほは、黒はへ。また、白とは、黒はち。白六をとだと、黒ち。この外にも、白は一寸した手順はあるが、いづれも白がいけない。即ち、黒五と七が、白に息も吐かせぬ早取りの妙。

左上隅 白五子を連絡するには、一が妙。白一を三、黒イ、そして白一だと、黒はロ。三となつて、黒ロは、白イ、黒ハ、白ニ。

左下隅 黒二は三がよいので、これは實際に現はれる所だから、注意を要する。七となつて、黒一に粘ぐと、白は「ッの十八」で。



右上隅 白一が妙。黒二を三だと、白「イの四」、黒「イの三」、白二で、これまた劫。白五でいなら、黒は落とさざるがよい。

右下隅 黒六と打込み、そして八がよいので、八のとき、白「イの十五」は、黒は六に劫を先に提る。黒六で八、白「イの十五」、そして黒六だと、白に七と先に劫を提られる。白一は、白が「トの十八」にあればかう一で隅の黒は完全に取れる。黒イは白ロ、黒ハ、白ニ、黒ホ、白ヘ、黒ト、白チ。

左上隅 黒は、黒六子を連絡するには、一が妙。一を八または二でも、白は一。九となつては、白は「ワの六」の外はない。すると、黒「ツの七」、白「カの七」、黒「ツの三」で、黒は完全に連絡。

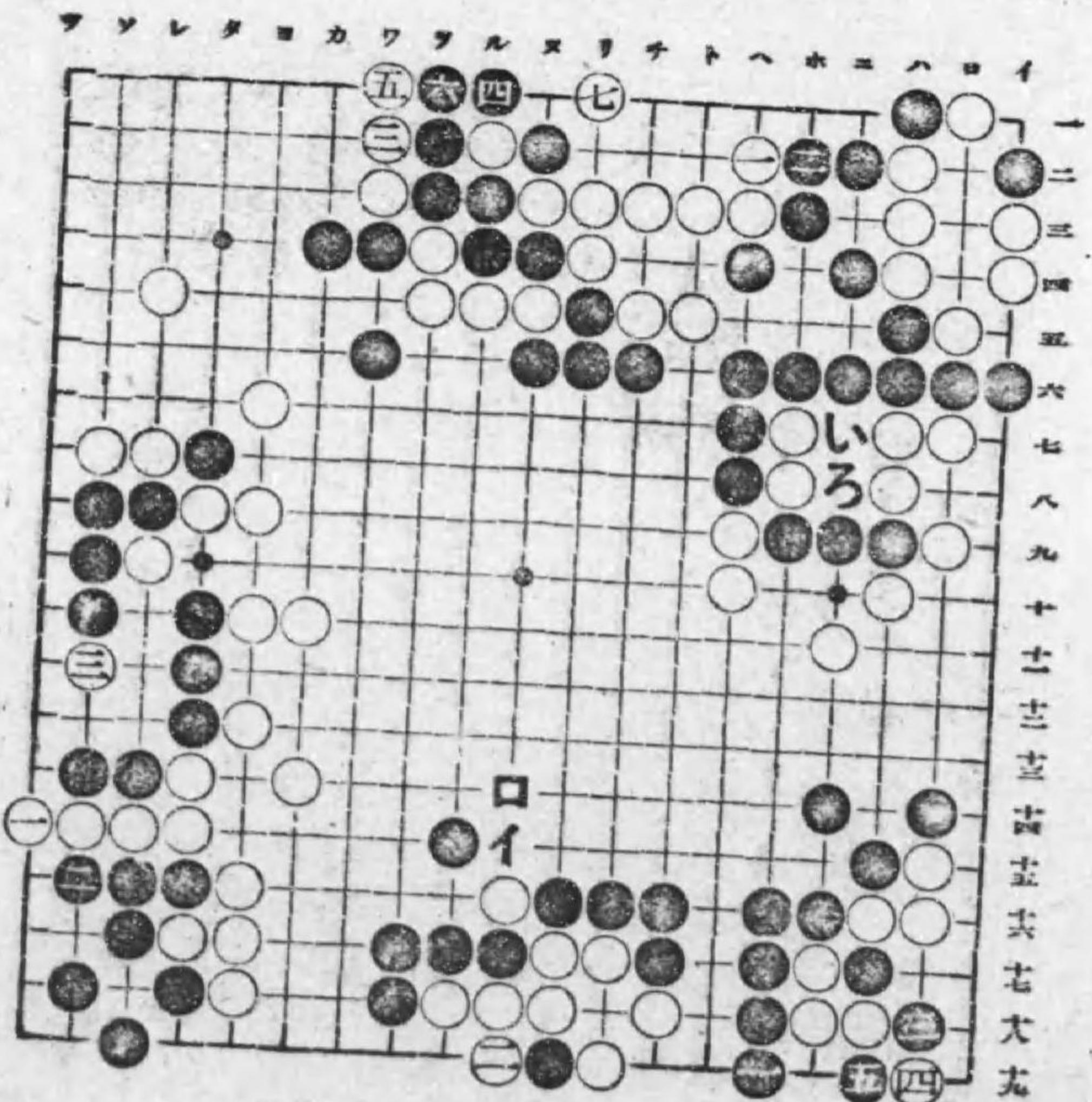
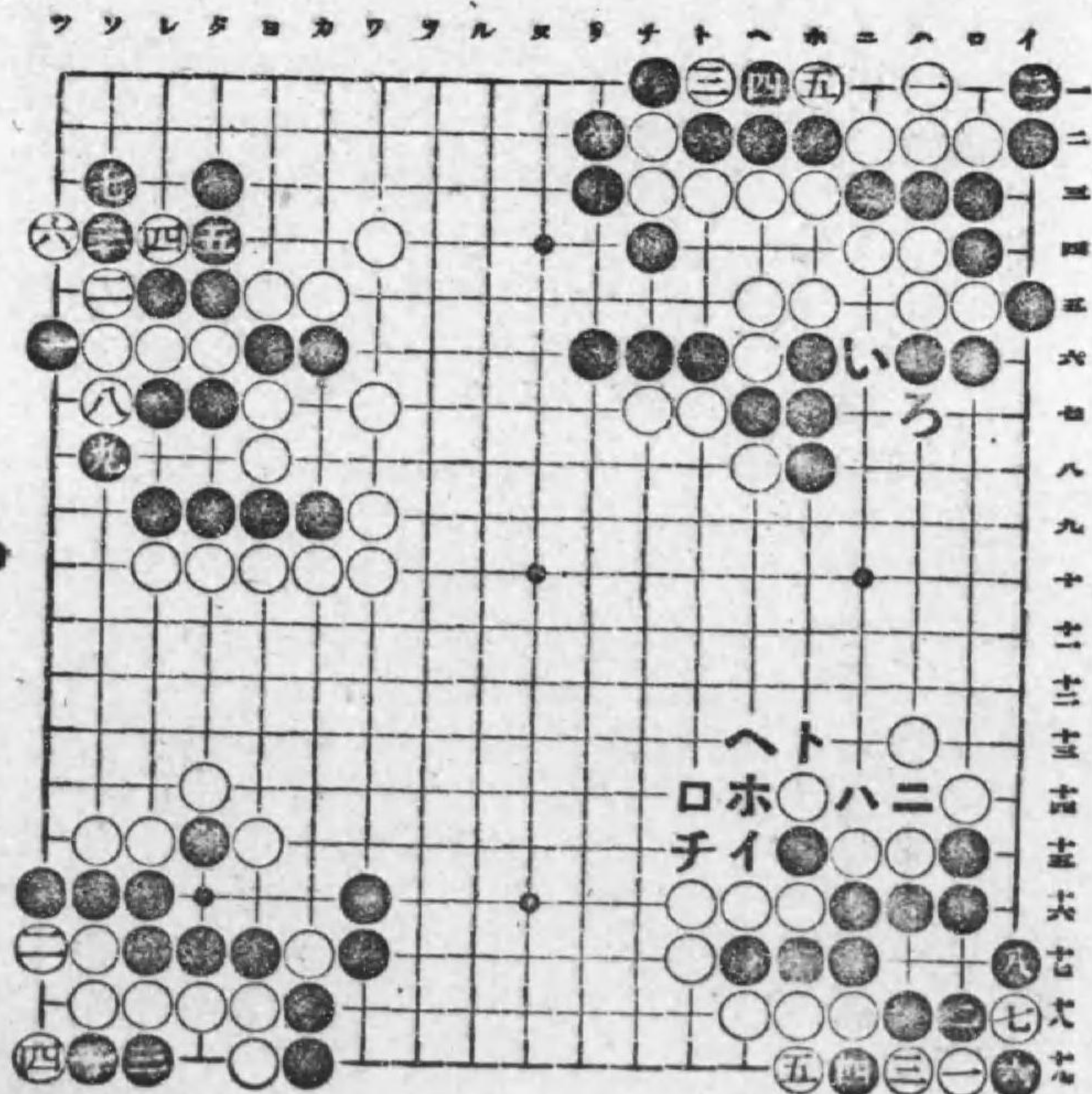
左下隅 黒一が妙。白二を三だと、黒「ツの十八」で白は取られる。白「カの十六」だと、黒は「カの十五」。

一石二鳥

右上隅 黒二を「リ」の二だと、白は二。すると、白「ロの二」なら、黒「ロの四」、またその白「ロの二」を「イの五」なら黒は「ロの三」と、黒が取つてゐる白と、連絡される。七となつて、黒「リの二」、白「チの一」、黒「チの二」は、白は「トの一」。白一が妙。

右下隅 白二を三だと、黒「トの十九」、白「への十九」、黒「への十八」で劫。五となつて、白「ロの十七」は、黒は「イの十九」。黒一が妙。白イは黒はロ。

左下隅 黒二を「ツ」の十四だと、白「ツの十七」で、黒は取られる。白三に黒「ツの十四」は、白は「レの十三」。また、その黒「ツの十四」を「ソの十三」は、白は「ツの十三」。またその黒「ソの十三」を「ツの十三」は、白は「ソの十三」。三となつては、黒の九子は取られた。黒いに、白は落とす粘けない。また、白イだと、黒はロで、白は逃がられない。各一は、一つ投じた石で、二羽の鳥に利かせ、一羽を必ず落とすといふ、一石二鳥の目的を達した。



右上隅 黒二三は、征と同じ意味。といふことは、黒二三に對し、白いは、黒ろ、白は、黒に、白は、のとき、黒は更にへ。何處まで行つても同じ。白四が無理。

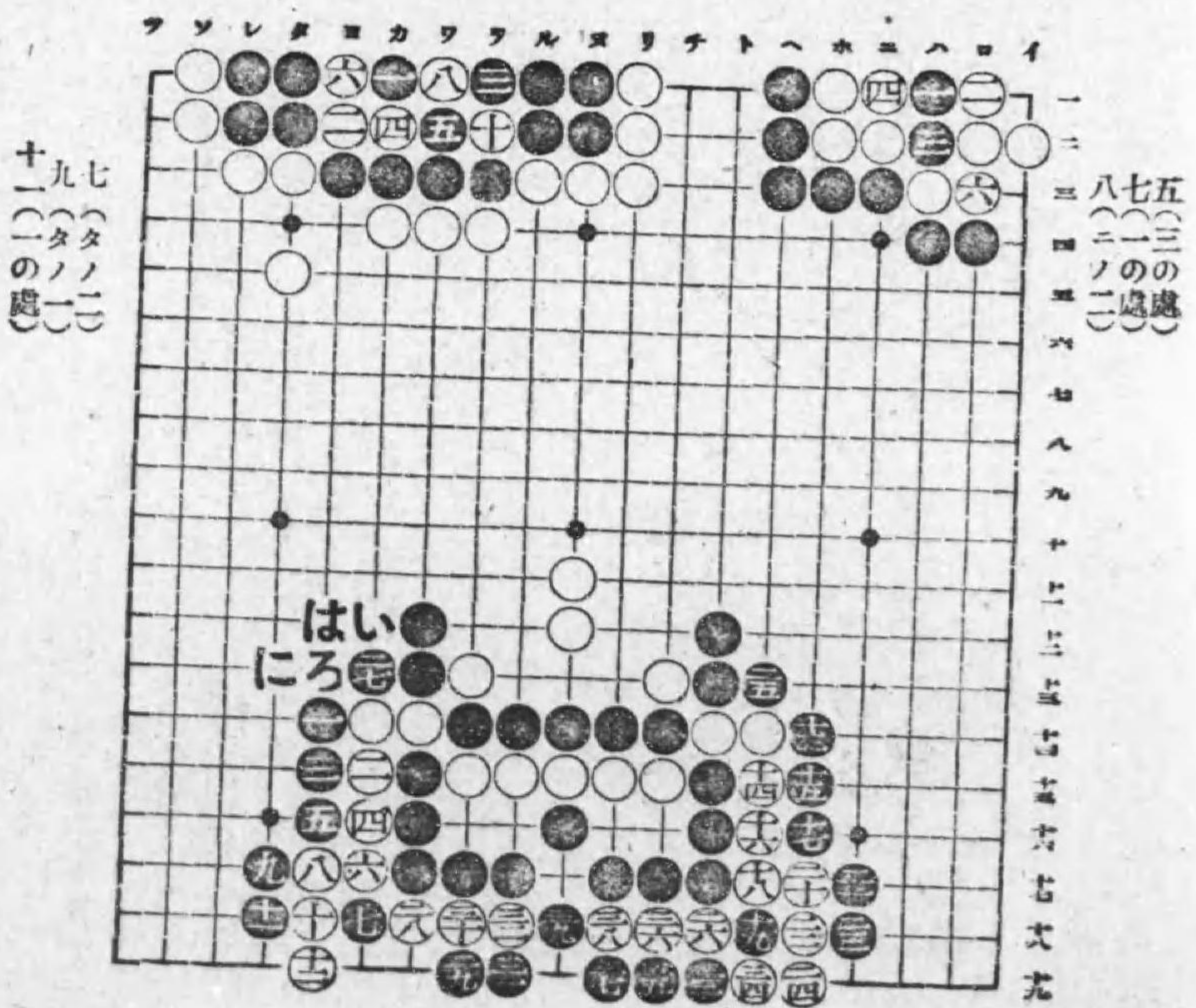
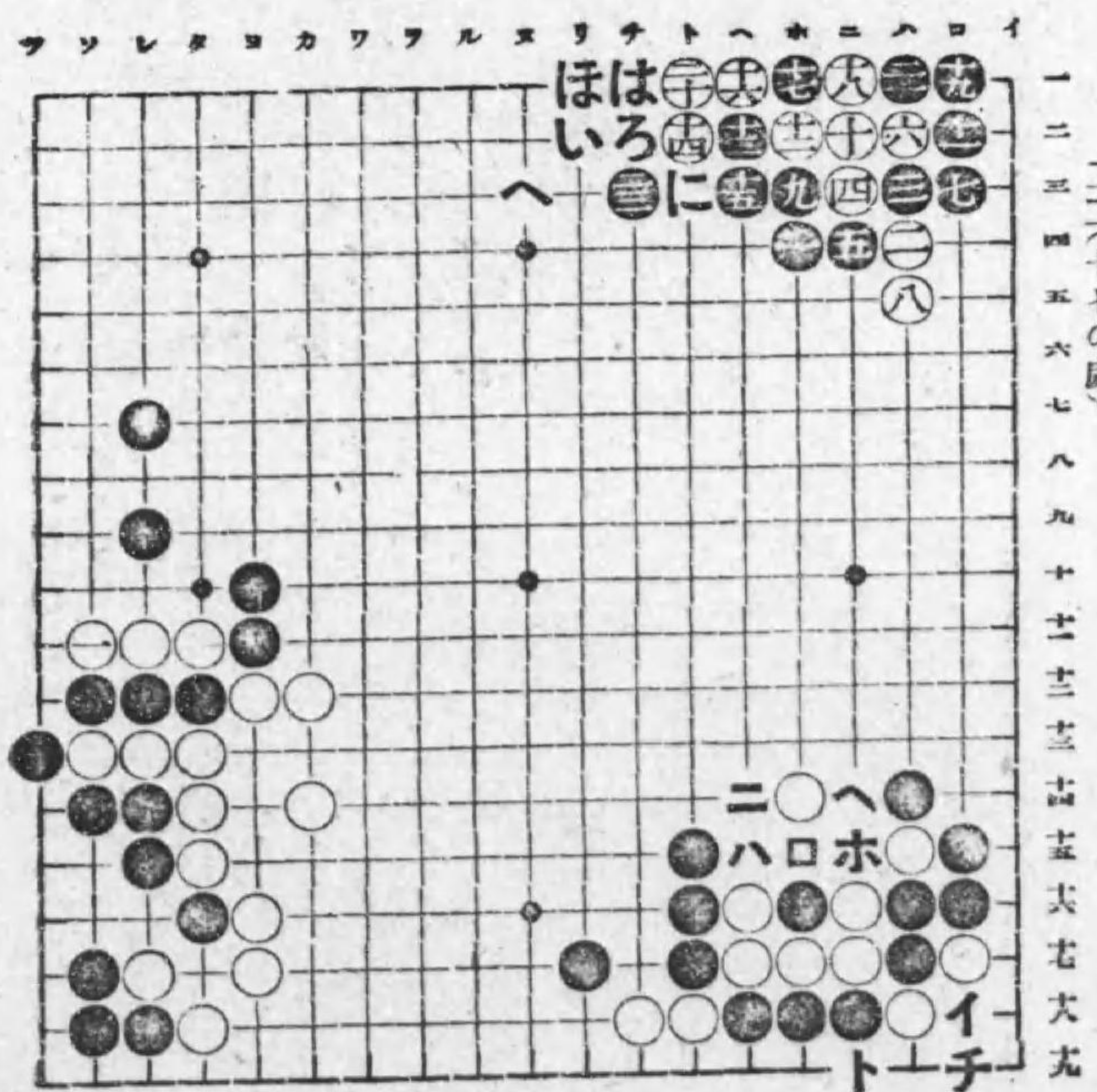
右下隅 この隅の問題に、白イと粘いであると、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホ、黒ヘで、白は取られる。それで、白は黒の「ニ」の十八以下の三子を早く取るのに、白ト、黒イ、白チと、白は劫手段の外はない。

左邊 白一に黒「ツ」の十二に粘くと、白は「ツ」の十五に、黒「ツ」の十四は、白「ソ」の十六、黒「レ」の十六、白「タ」の十七となつて、黒が取られる。更に、白一に黒「ツ」の十二、白「ツ」の十五のとき、黒「ソ」の十五だと、白「ツ」の十一、黒「ツ」の十四、白「ソ」の十六となつて、これもまた、黒は取られる。

右上隅 白二を三だと、黒二で、白が取られるから、白はかう八まで活きる。俗に「石の下」といふこの圖は、實戦に現はれないことはないが、

左上隅 黒十一で一と、白の三子を取り、そのとき白二なら黒は「ル」の二で活きるといふこの「石の下」の問題は、實戦には、絶対に現はれない。が、この問題は力を強めるといふ點に効がある。黒三を四だと、白十で、黒は全部取られる。白四を六だと、黒は四で、五の所の眼持ちと、「タ」の二の切りで活。

下邊の問題は、白「チ」の十五より「テ」の十五までの五子と、黒「チ」の十四より「テ」の十四までの五子との攻合が、かう三九までとなつて、黒の勝。白二を二七、黒い、白ろ、黒は、白にだと、黒は「ル」の十三より押出し、白が「ル」の十に止めれば、黒は「テ」の十に切つて白の三子を征に取らうといふ。それは、十三の方も同じことで、これまた實際には起る問題ではないが、力を強める上には大なる効がある。



左上隅 黒は七と劫にする外はない。七々「タの一」だと、白「ヨの二」、黒「カの二」、白「ハで」、黒は取られる。白四々六と、黒は四。白四は、黒に厭でも九と來させる善い手。

右上隅 黒一で、左上隅の如き九と打込む危険な劫問題にしないのは。一よりかう七までと受けて、白「ホの一」に黒の四子を取れば、黒はいで白の七子を取つてしまふ關係があるからである。白「ホの一」でると活されば、黒はは。白ろと活きたとき、黒に、白い、黒ほは、白へで、黒のにある一子は逃げられない。

右下隅 白一が妙。一をイだと、黒は二で完全な活。白一に黒ロは、白はハで、黒は活きない。白三に黒ロは、白はハ。故に白三には黒は二と劫に應ずる外はない。

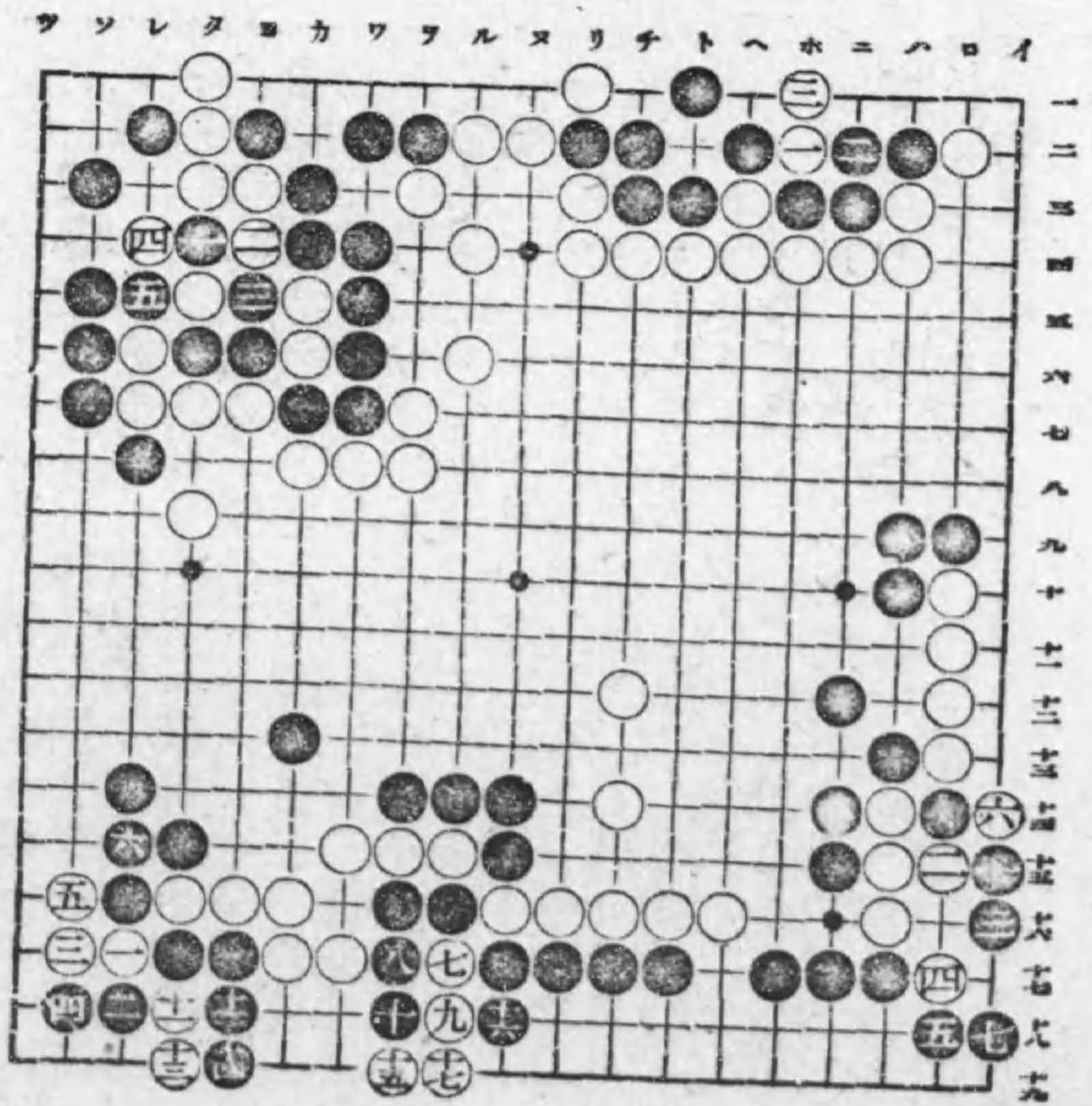
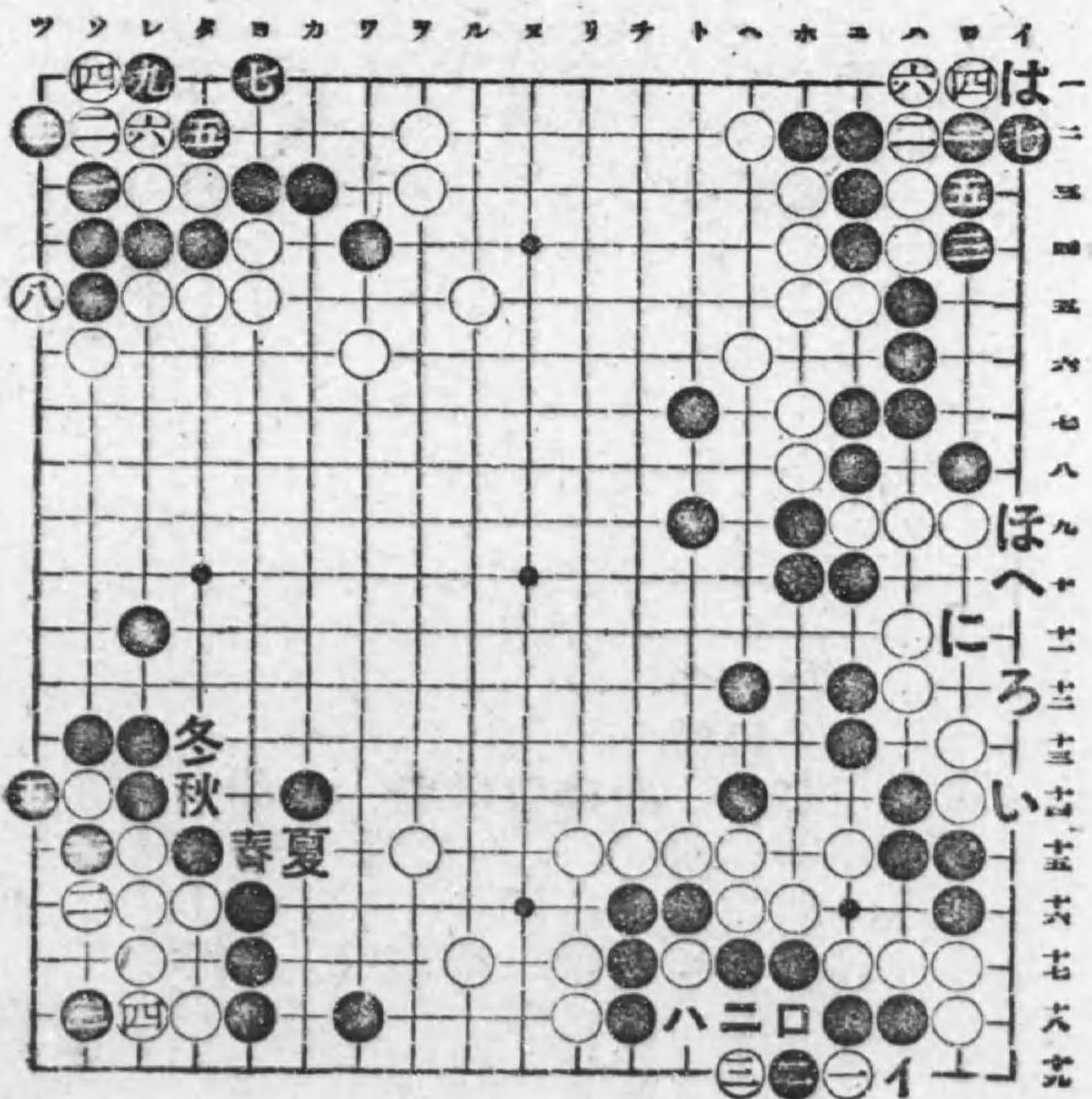
左下隅 黒一、三の手順が妙。黒一を三、白四、そして黒一だと、白は「ツの十六」に、黒五は、白は「ソの十九」で活き。五となり白「ソの十九」は、黒「ツの十八」。白春、黒夏、白秋黒は冬が、黒はよい。

右上隅 一、三と白に取られないやう、黒が用心するには二。

右下隅 黒一は妙着。白二を「ロの十六」、黒四、白三だと、黒は「ニの十六」で白が取られる。その白三を二は、黒は三、黒七を「イの十七」だと、白七、黒「イの十九」、白「ロの十六」で、白は活。

左上隅 黒一が妙。一を三、白五、黒「ヨの一」だと、白「ヲの一」、黒「ワの一」、白「カの二」で、黒は全部取られる。白二を四、黒二、白「レの三」だと、黒は五。

左下隅 白「タの十六」以下八子を助けるには、白はかう十七までの外はない。十七となつて、黒「ワの十八」は白は「カの十八」。またその黒「ワの十八」を「ツの十九」は、白「カの十九」、黒「カの十八」、白「ワの十八」で、黒はどつすることも出来ない。

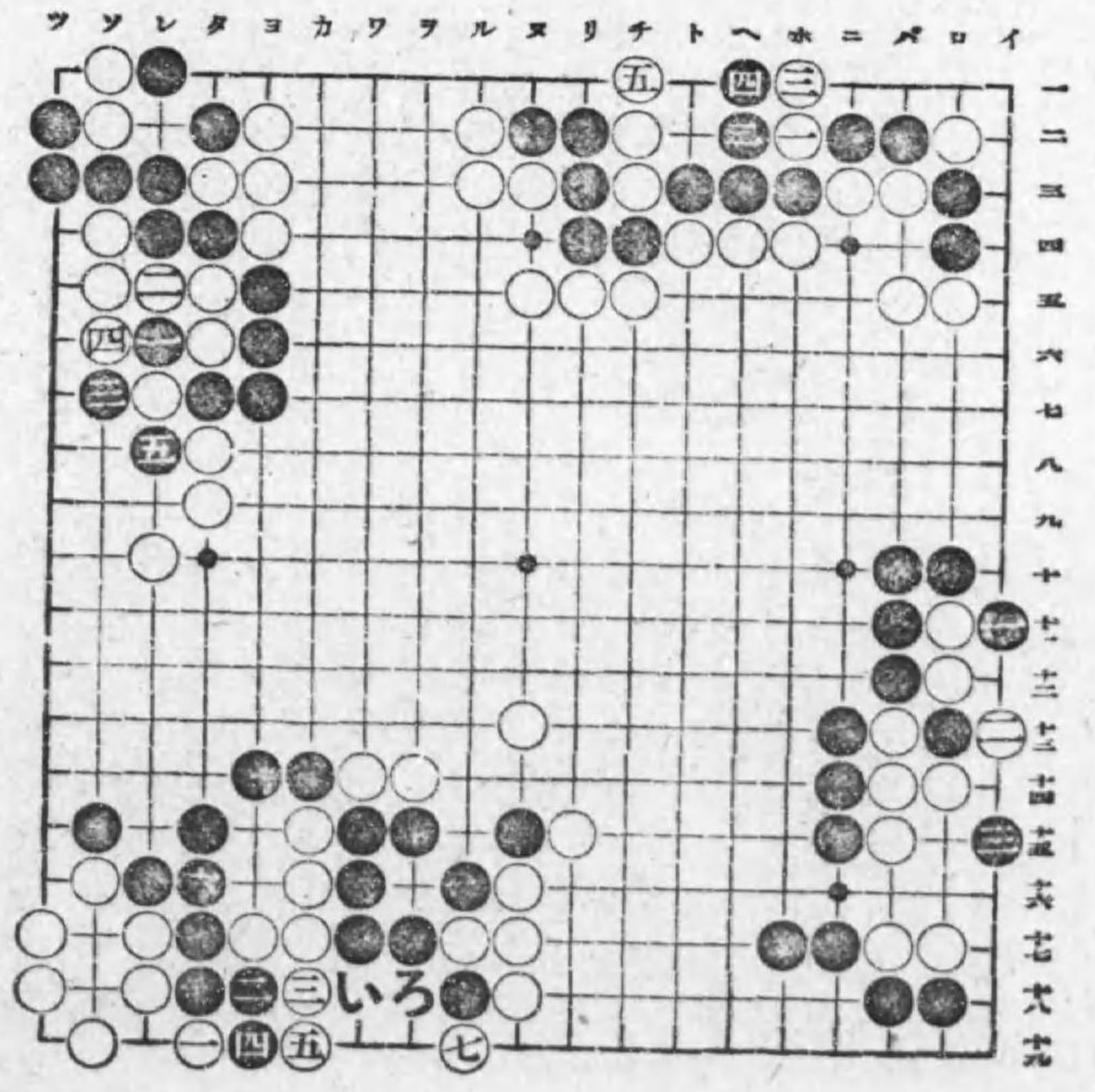


右上隅 かう五となつては、「ヌの二」以下の黒五子は白に取られた。かういふ所は、實戦によく現はれる形だから、黒は白に一と來れないうち「ロの一」に用心してゐるがよい。それは、白一で「イの二」だと、黒「ロの一」、白「ハの四」となり白に取られる防ぎをも兼ねてゐる。

右下隅 三となつては、白は取られた。黒三に白「イの十六」は、黒は「ロの十六」。また白「イの十六」を「ロの十六」は、黒は「イの十」。この形も、よく實戦に現はれ、ウツカリ出來ない。

左上隅 白は黒に一を二に來られる位に思つてたのであらう。かう五となつては、白は「ソの八」と劫にする外はない。

左下隅 黒は、白一でいと、黒ろ、白三、黒二で、攻合は黒がよいと思つてると、白に七まで取られた。白七の妙用は、不斷に念としなくてはならない。

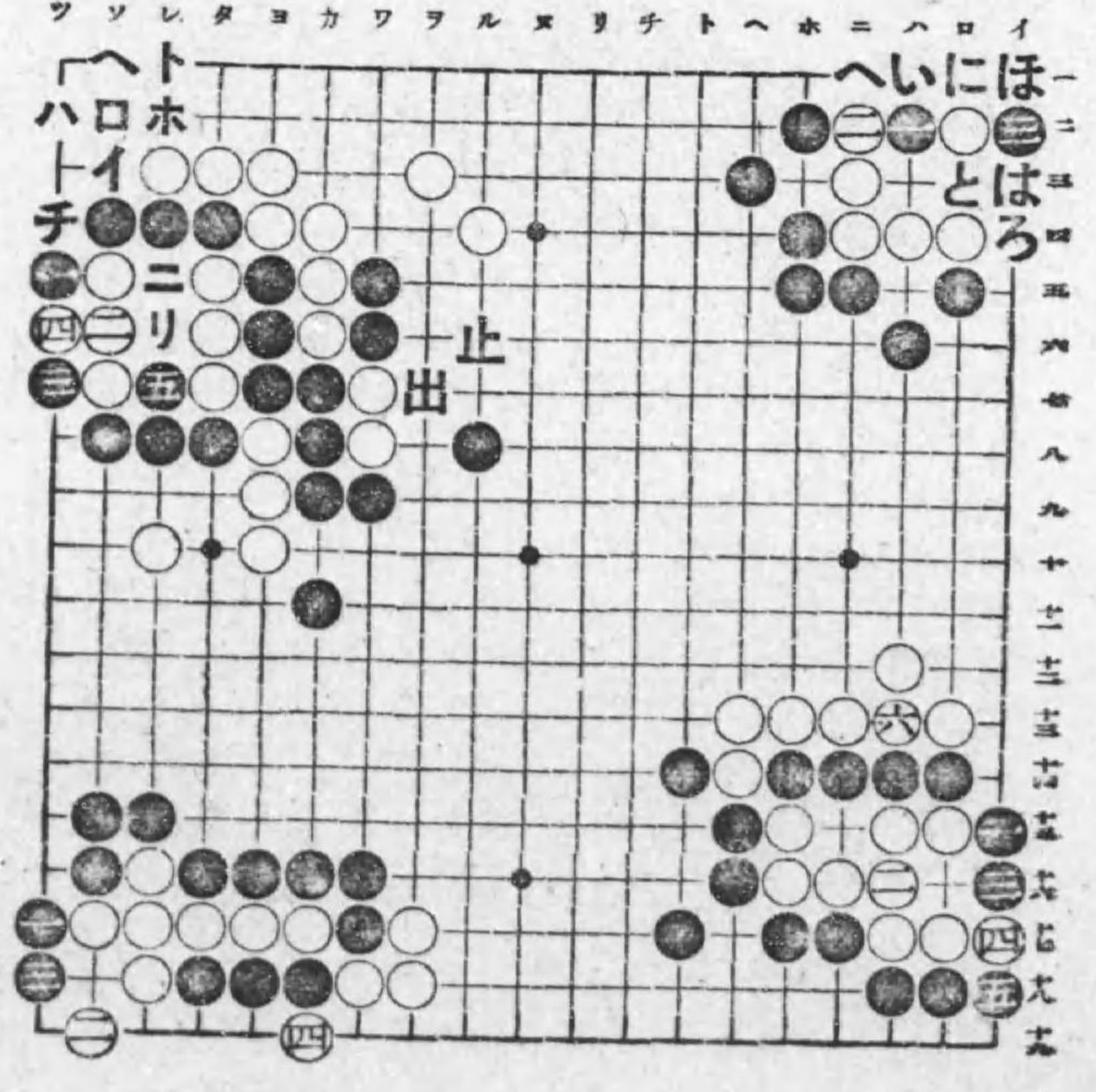


右上隅 白は、黒一で二に來れば一と受け、完全に活きてると思つてると、黒にかう一、三と來られ、劫の外はない。即ち、黒三に白いと、黒はろだから、白はいはに受け、黒に、白ほの外はない。白ほをへだと、黒とで、その黒が中手となり、白は取られる。

右下隅 黒は「ホの十四」から「ロの十四」までの四子と白の七子との攻合には、一が妙。白二で三は、黒は一。黒三を四だと、白三で劫。かう六となつては持。

左上隅 黒一でイ、白ロ、黒ハだと、白はニ。そして黒ホ、白へ、黒ト、白チとなつて白のよいことは前圖に述べた。黒一、三が妙。白一を四、黒二、白リだと、黒は五。白「ソの八」の「ソの八」の二子を出なら、黒は止。その白二子を取つた「ルの八」の黒が善い手。

左下隅 白二を三だと、黒「レの十九」、白「ツの十六」、黒「ニ、白「ソの十八」、黒「ツの十五」で劫となる。白二、四は、無事でよい。



右上隅 は、實際によく現はれる形。五までとなつては、白は全部取られた。黒一を三だと、白一、黒五、白「ホの一」で劫となる。黒に一と來られないうち、白は五の所へ用心してなくてはならない。白イだと、黒はロでその白三子は取れる。

右下隅 白三の一着より引つた三三までは、實際に多く現はれる。俗、黒劫立てにいと、白ろ、黒は、白に、黒は、白ろ、黒はとなつて、白はへで、黒は全部取られる。だから、黒はとに切り、白ち、そして黒は二六に劫を取るのがよい。これまたウツカリ出來ない所。

左上隅 黒九子を生きるには、一より五までと劫にする外はない。

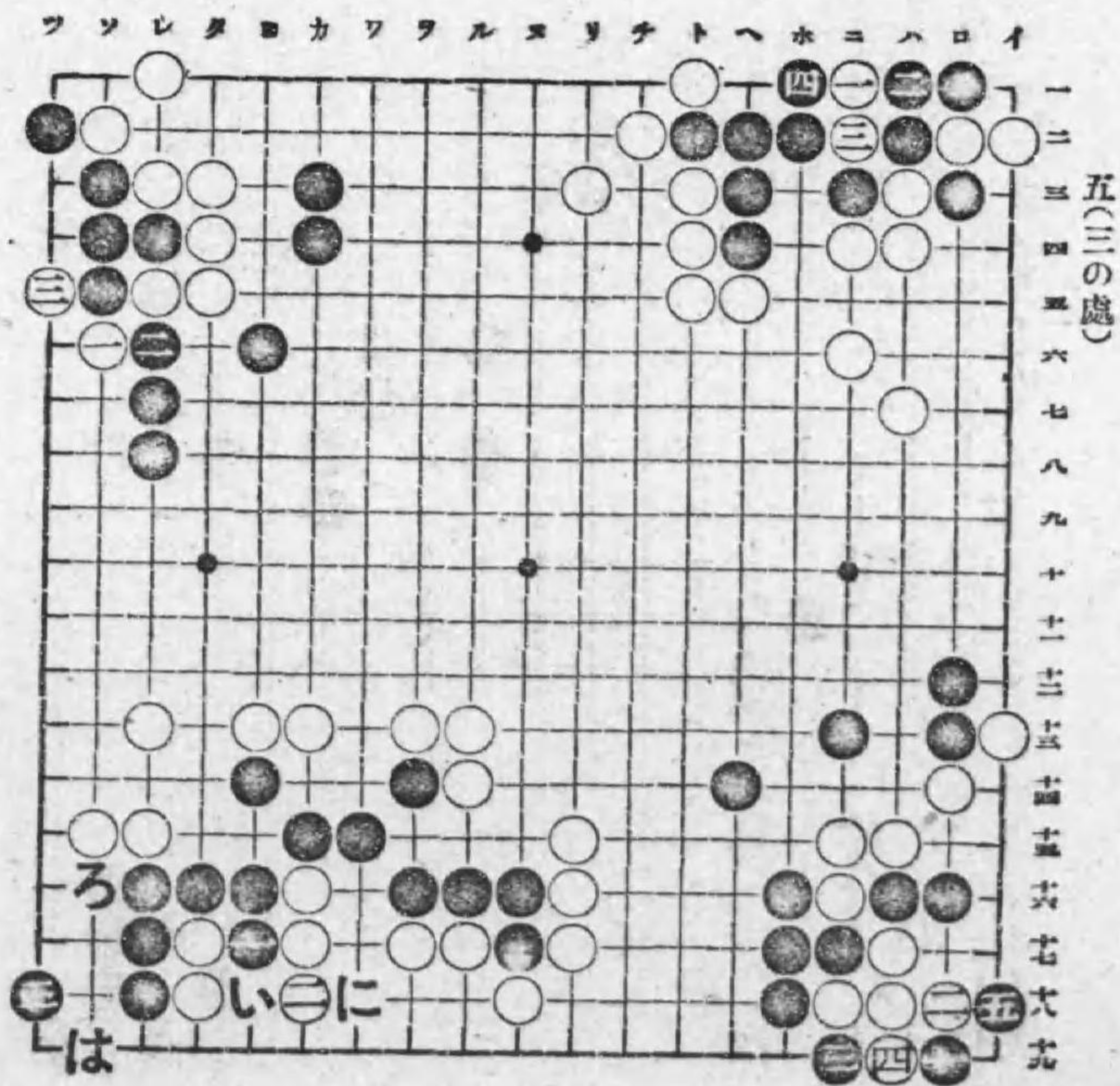
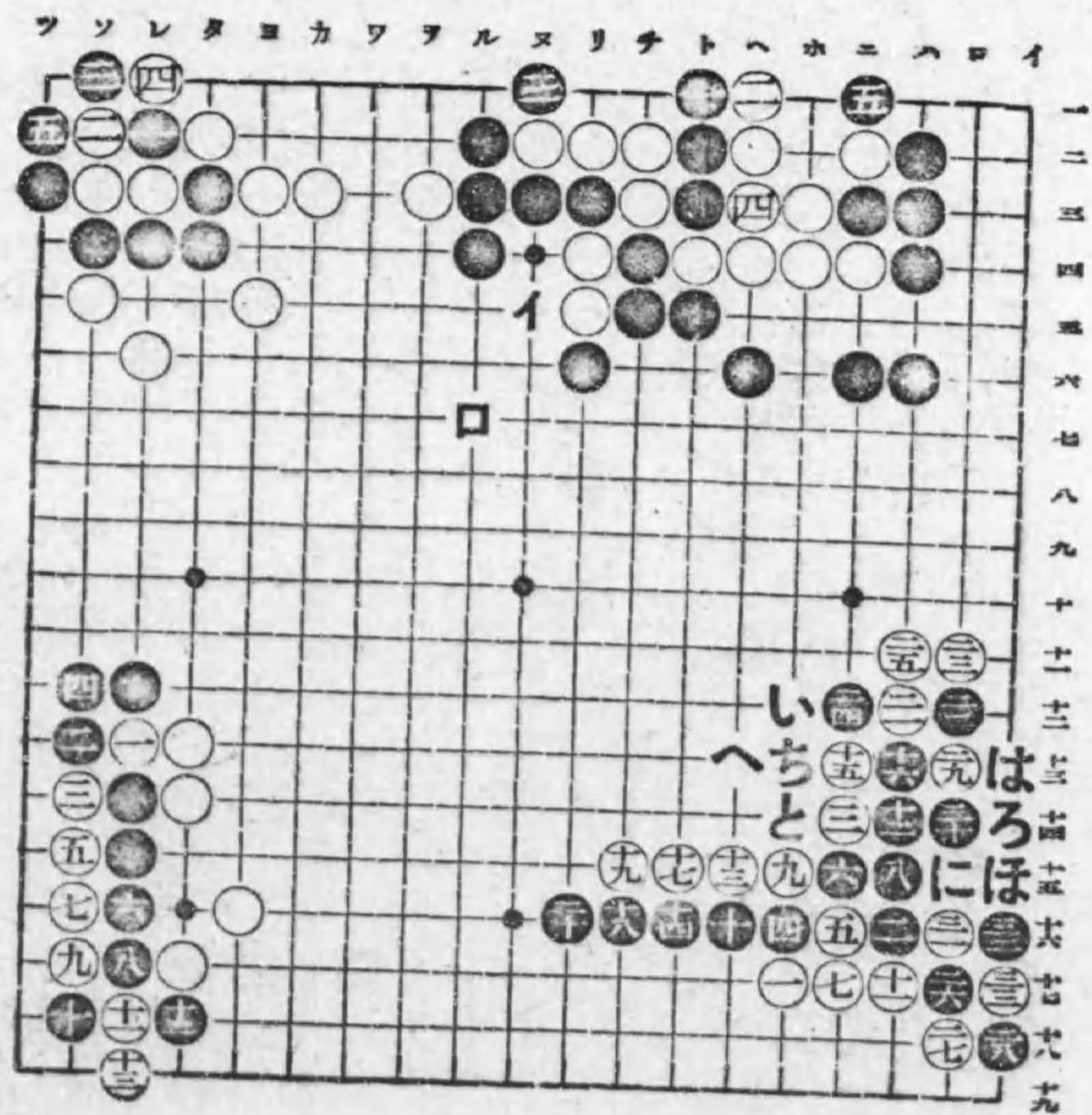
左下隅 十三となつて、黒「タの十九」だと、白「ヨの十八」、黒「ソの十九」のとき、白は十一に打込むのがよい。

右上隅 黒は、白が「ロの四」に來れば、「ホの四」で活き位に思つてゐると、白に一、三、五と妙用された。白三の所へ打込むだ五を、黒一に取れば、白「ホの四」で黒は全部取られるから、その取りで「ホの四」と劫にする外はない。

右下隅 黒一が妙。黒一を三は、白は一。そして黒「ロの十七」、白二、黒五だと、白は「ロの十五」。白二を「ロの十七」でも、黒は三。白はかう四と劫の外はない。

左上隅 白三で「ツの三」「黒ツの四」、白「ツの一」と劫で活を求めるのは、白が悪い。白三に、黒は「ツの三」、白「ツの一」と劫にすることは、黒もためらふ所。

左下隅 黒三が、この一圍の黒の活を求めるに妙。黒三でいと、白は三。また黒三と五だと、白はい。で、共に黒は活無し。黒三に白は、黒はは。白二をいと、黒はにで、白が大いに悪い。



左上隅 黒一で九だと、白三で活き活き。黒一、三は白の十二子を取らうといふのである。白四で九だと、黒七で、黒一、三の目的は達せられる。黒五で「ソの三」、白九だと、黒は逆は無条件で白に取られる。それで、十まで此處に劫となつた。黒七を九、白七、黒「ソの三」、白八。のとき、黒強めて十と白を取りに行くと、

右上隅 の如く五となつて、黒「イの四」、白「ロの六」で石の下となり、黒は取られる。白一が妙。

右下隅 黒一で此隅を自己に有利に解決したことは、實際の局面に多く現はれる所。黒一に、白「ロの十七」は黒は「ハの十九」、黒一が妙。

左下隅 黒六を「タの十九」だと、白は六と五目手で黒を取る。黒六に白「タの十九」、黒四に提り、そして白五、また黒六。で、黒はそれを繰返してゐて取られない。六までを即ち長生といふ。黒六が妙。

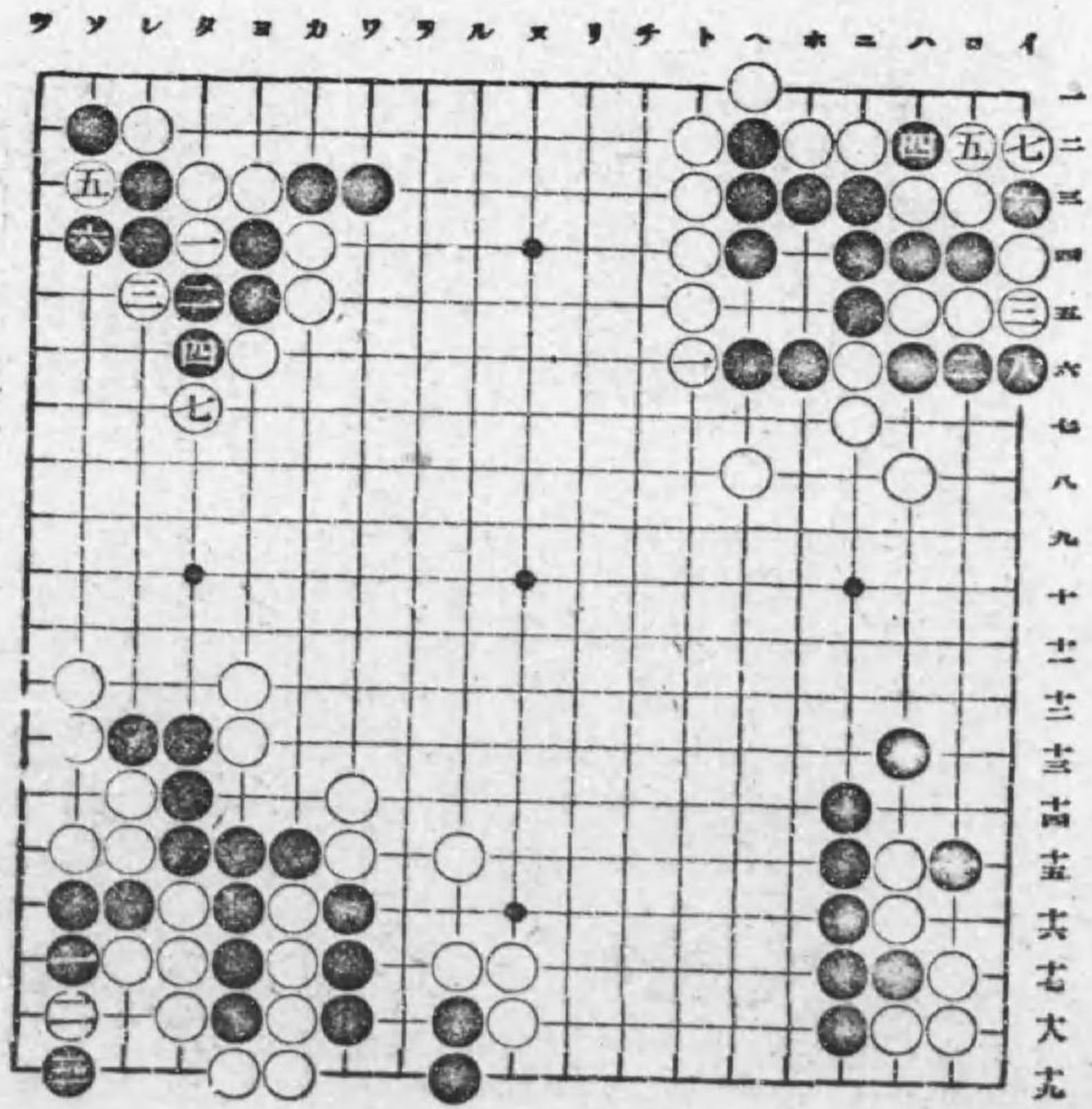
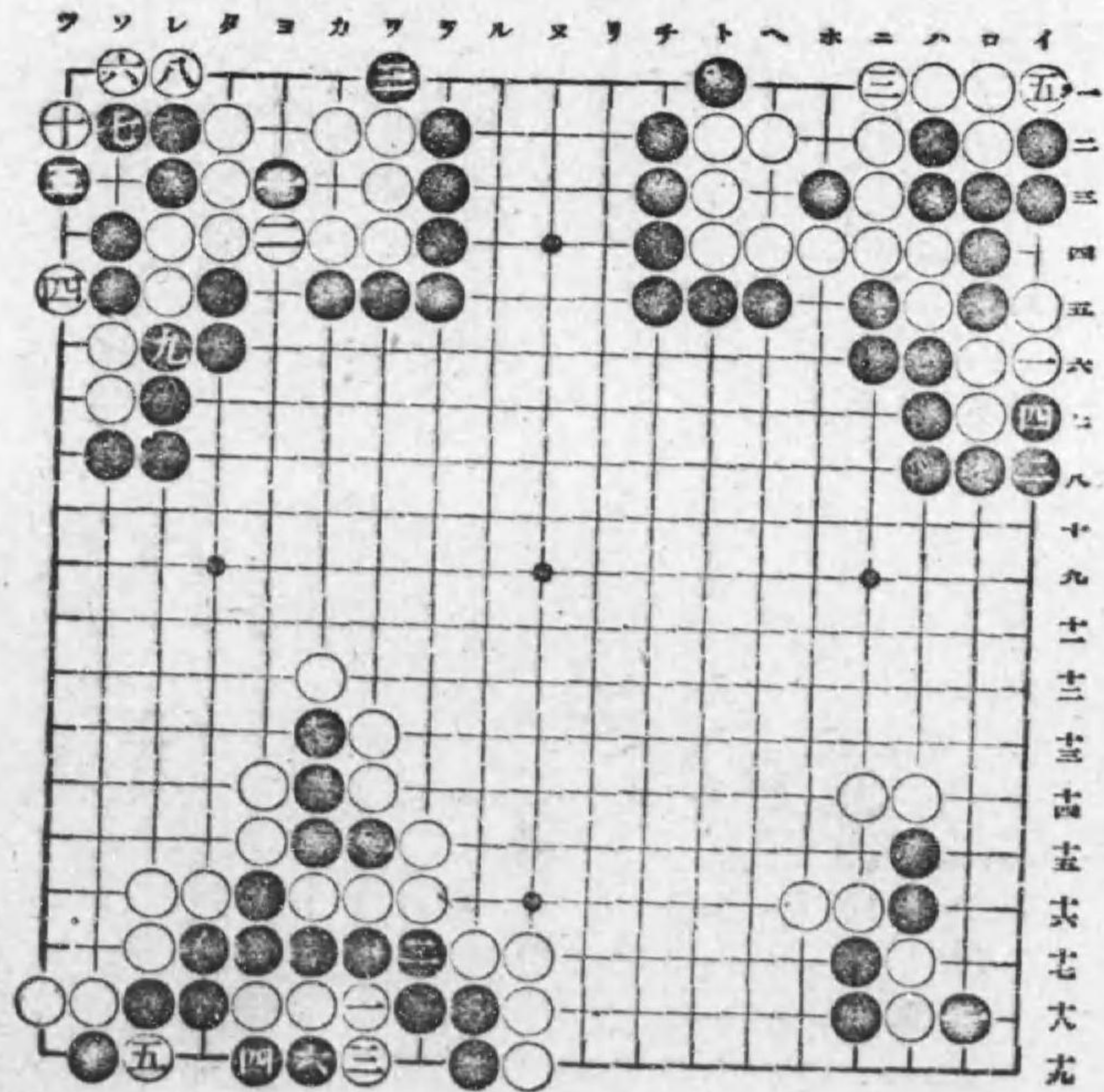
黒「ヨの十三」に出れば、白は「タの十三」で征に取る。

右上隅 白一と、黒の十一子を取つた心算。處が黒に四、六の好手で八と當てられた。黒八に、白六の所へ粘れば、黒は「ハの一」。黒四と六が妙。

右下隅 黒一で「ロの十四」、白一、黒「イの十五」、白「イの十六」、黒「イの十四」だと、白は「イの十八」で活きる。白の五子を取るには黒一の外はない。

左上隅 白五で七だと、黒「レの六」、白「ソの五」、黒「ヨの一」で、白が取られる。白五が善い手。

左下隅 黒十四子を助けるには、一、三が妙。黒三に白「ツの十六」は、黒「タの十九」、白「レの十九」、黒「ツの十九」。また、黒三に、白「タの十九」は、黒「ツの十八」、白「レの十九」、黒「レの十八」で劫。黒三が妙。



右上隅 黒一を「ハの四」だと、白「ロの二」、黒「ロの
一」、白「ロの三」、黒一、白「イの三」、黒「イの五」とな
つて、此隅は、黒は將來劫の關係で白に大いに利され
る、黒一に、白「イの五」、黒「イの四」、白「ロの四」だと、
黒は「ハの四」でよい。黒一は完全な活。

右下隅 白は三と打込み、そして五がよいので、白三
を五だと、黒「ロの十九」、白三、黒四と、黒に先に劫を
取つて來られる。白五に黒「ロの十九」は、白は先に三と
劫を提う。即ち、三は先後の要領。

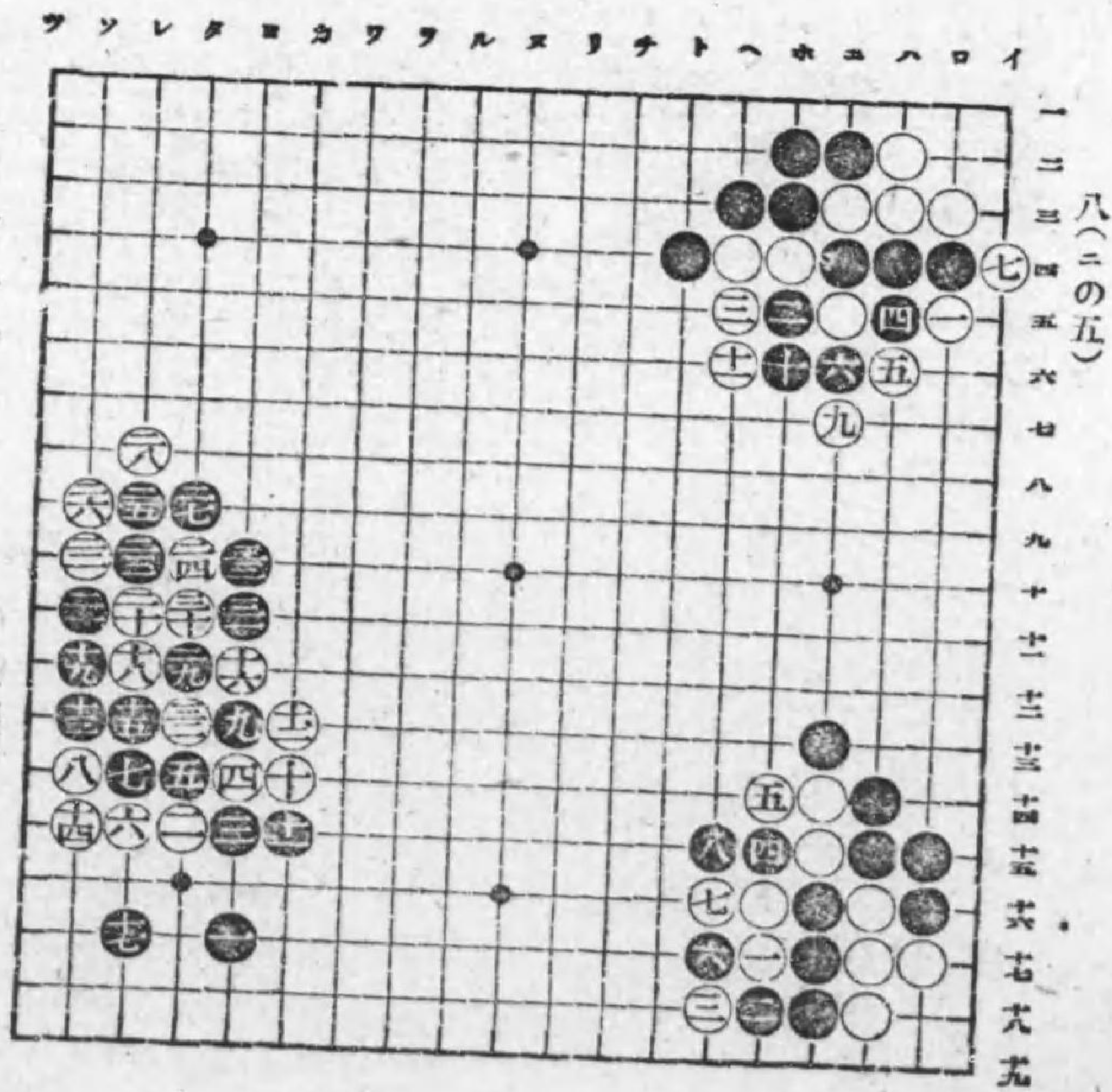
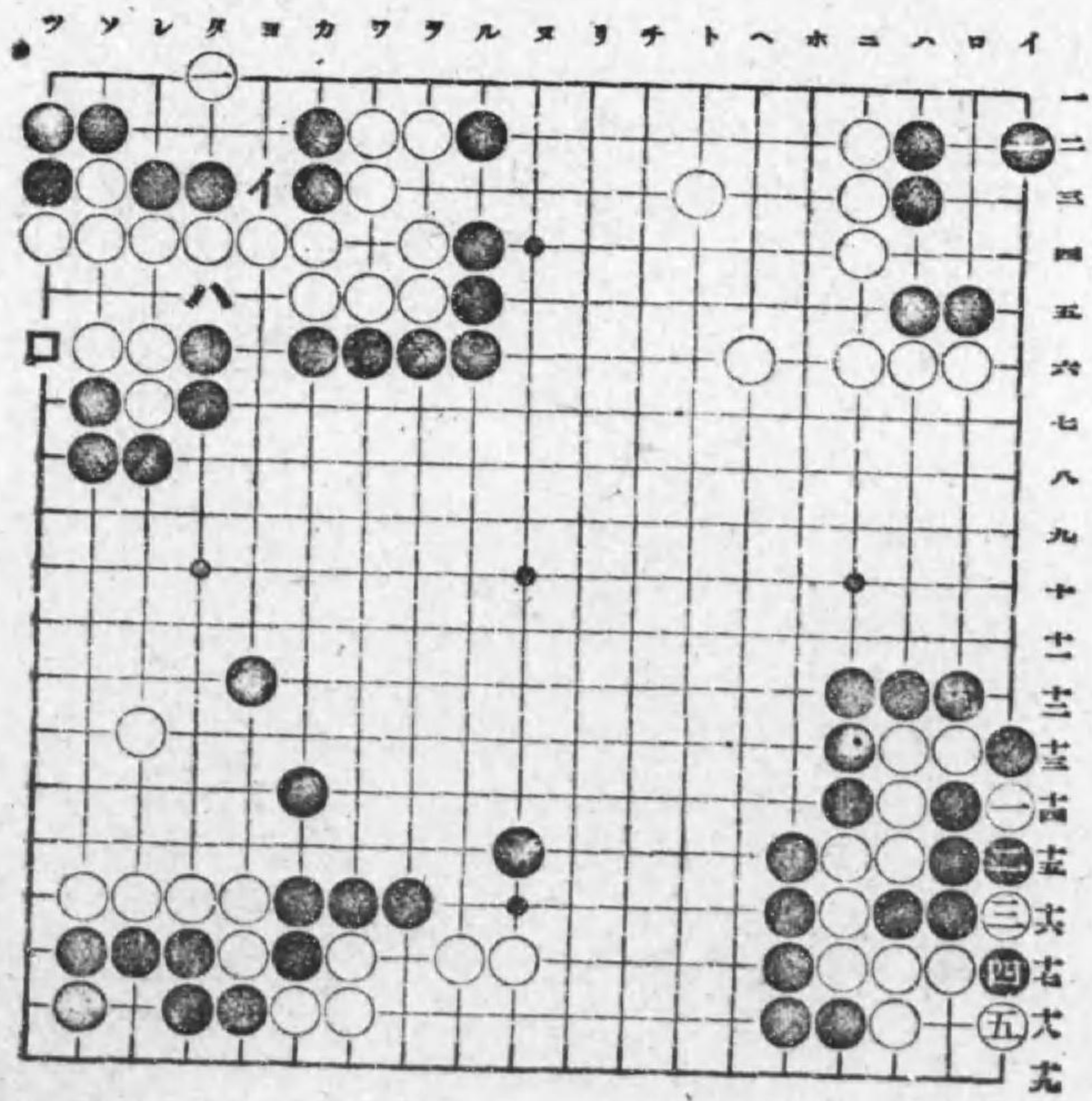
左上隅 白に一と取られないうち、黒イに備へ、後黒
ロと行つても、白ハで、白は取られない。それで、黒は
左上隅の所と

左下隅 の所と、二者いづれか取られる場合は、假令
左上隅の方が少し位大きくとも、左上隅を棄て左下隅を
活きる方が、周囲の關係から見てよいのである。

右下隅 八までとなつては、白は七の方を棄てるかま
たは、五の方を黒に「への十四」と征に取られるかの外は
ない。これは、黒六がよい手であるから。處が白一を
右上隅 の如くだと、十一までと黒を征に取れる。黒
六で七は、白「イの五」で、結果はかう十一までとなる。

左邊 白二を三、黒二一、白二六だと、黒は「ソ
の十六」で、二以下白の四子は取れる。それで白は二一。
黒二三を「ソの十六」だと、白は「ツの十一」で、黒を取れ
る。三三となつて、白は二九には粘けない。但し、白が
「ヌの十七」邊に一子あれば、白は二九に粘いで征にかゝ
らない。

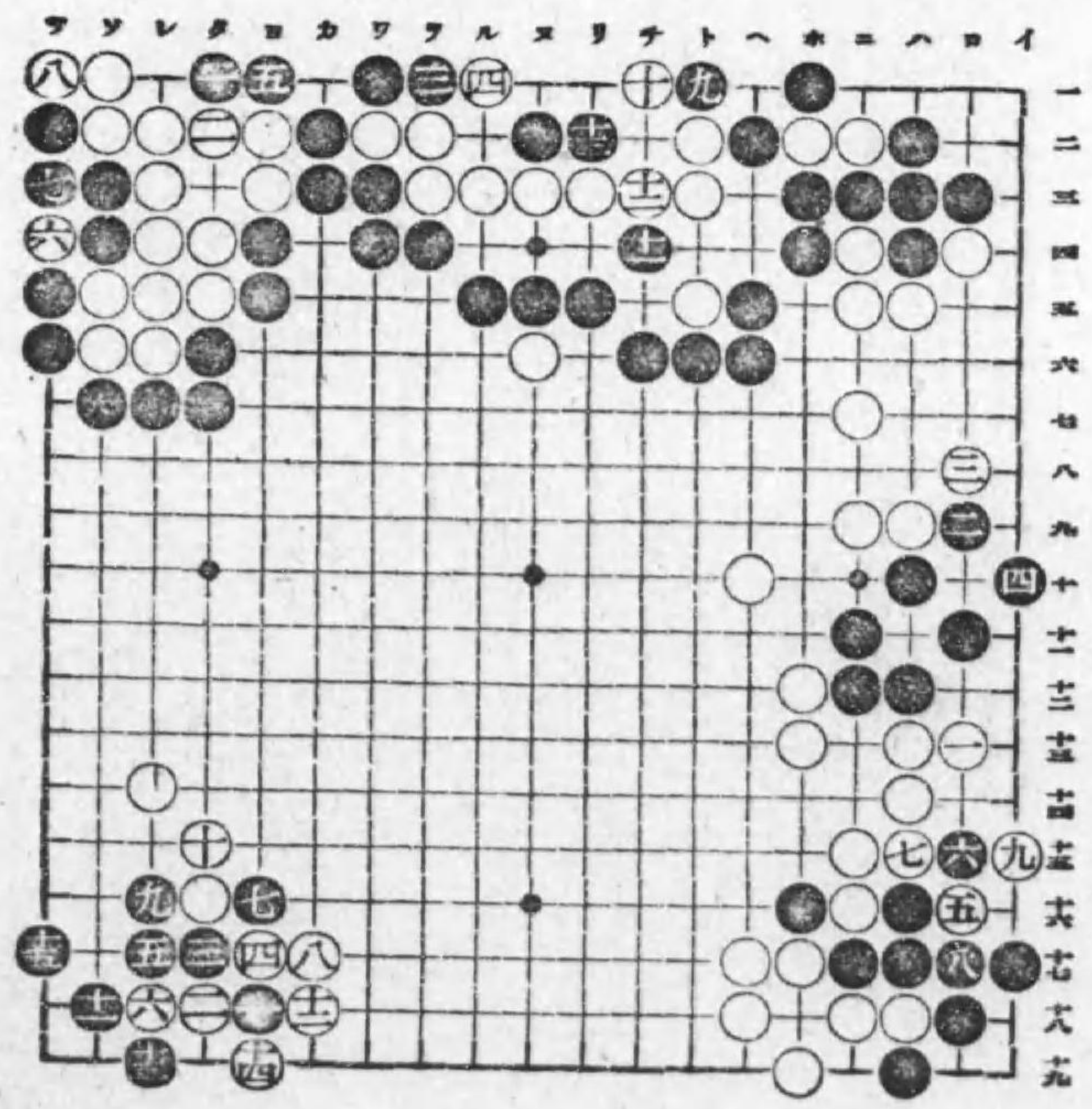
従つて、白が「ヌの十七」邊にあれば、黒十七は三十の
所か、二三の所に備へ、白「タの十八」、黒「タの十七」、
白十七、黒「ヨの十八」、白「レの十八」、黒「ヲの十五」の現
はれとなる。



上邊 (名局、丈和と秀) 「イの七」から「ツの七」までの
 上が、本問題。黒一が妙。白二を五だと、黒「カの一」。
 白十三、黒二となつて、白六、黒七、白八、黒「ツの七」、
 白六の所へ黒の四子を取り、黒七で、其處は劫になる。
 黒三と五が妙。白六で十三だと、黒は「ツの七」。それ
 で白は八と活きたが、十三までの方は、即ち五目手で
 取られた。

左下隅 黒十五までと活きる要領は、實際の局面に現
 はれる所。これが

右下隅 の如き、白一より黒四までとなる關係があれ
 ば、白は五より九までと黒を取つてしまふ。



右上隅 黒がいなら白となつてゐる兩劫のある場合、
 白は二と受け、九までと劫としたのは、無謀。即ち、白
 はに劫を取れば黒い、白ろ、黒三で、白が劫に勝てない
 ことは、餘りにも明らか。但し、黒三に劫を取つたとき、
 白ろなら、黒はで劫を勝ち、白ににと取らせ損はないの
 である。

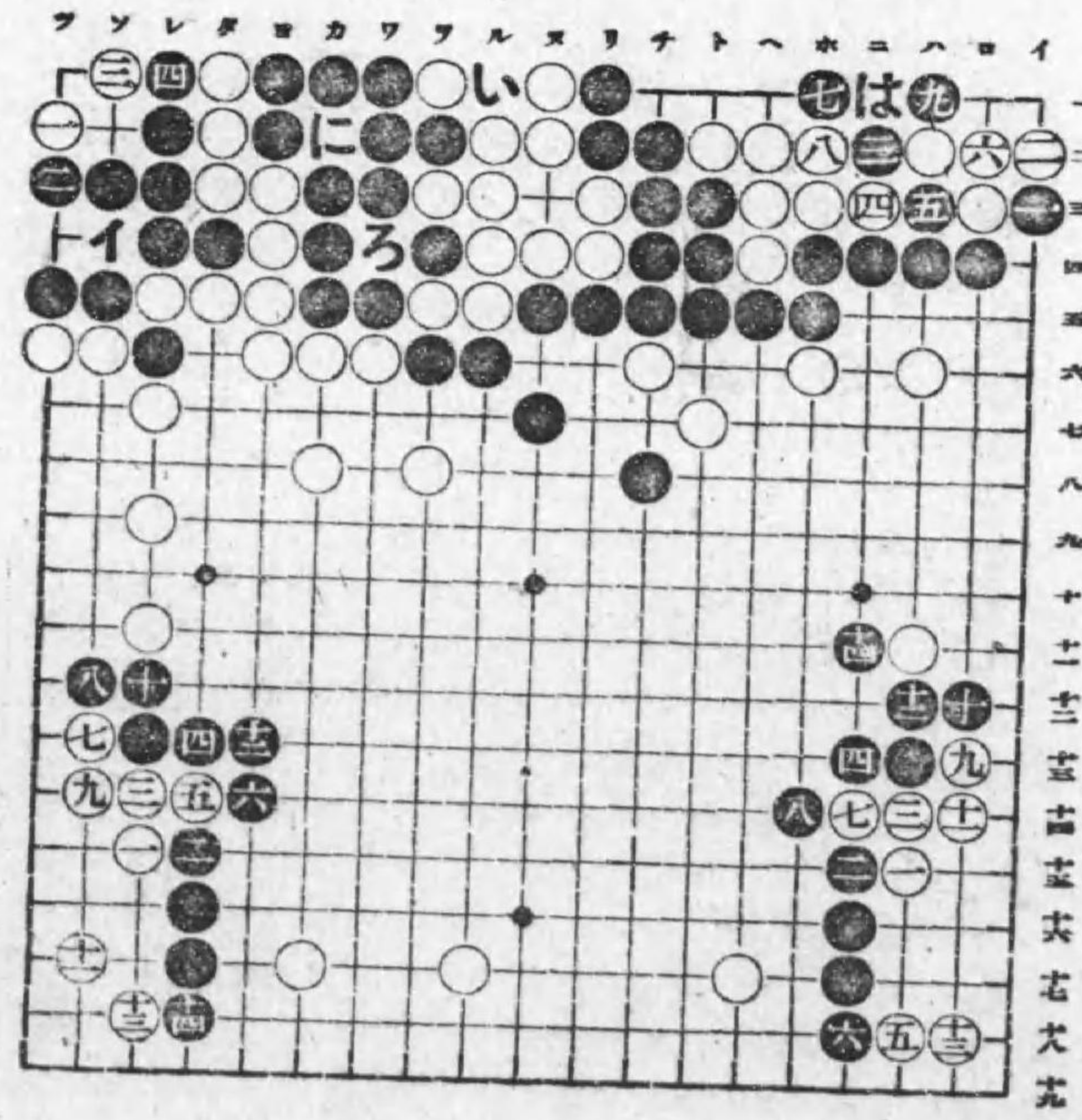
それで、白二は三、黒六、白七と活きる外はない。さ
 う七までと白を活かす黒一は、い、ろ、の兩劫のない場
 合でも、一の目的が達し得るとき行くのである。

その右上隅の白の形は、

左下隅 白一より十三までとなつたもの。黒十二を
 「タの十一」だと、白は十二。黒かう十二は、左上隅の白
 が堅い故。白には黒より右上隅の如く一と來られる缺陷
 あれば、白は、

右下隅 一より十三までの手順がよい。即ち、黒「ハの
 十九」なら白「ロの十六」、黒「ロの十九」、白「イの十八」
 で、白は完全な活。黒十四は、「ハの六」から「トの七」ま
 での白の四子が攻められる故。

左上隅 四までの持に白イと打込むのは、一目の損。



名局篇

右上隅 黒二は悪い。二を三だと此處に問題は無い。

即ち、黒二を三のとき、白い、黒ろ、白二、黒はで、黒は活。また、白いをはは、黒は二。この二と受ける善い手を、見損じることが屢々ある。だが、かう二となつて白に、黒ほ、白へ、黒ろ、白とで、白は後手で持には出来る。

□

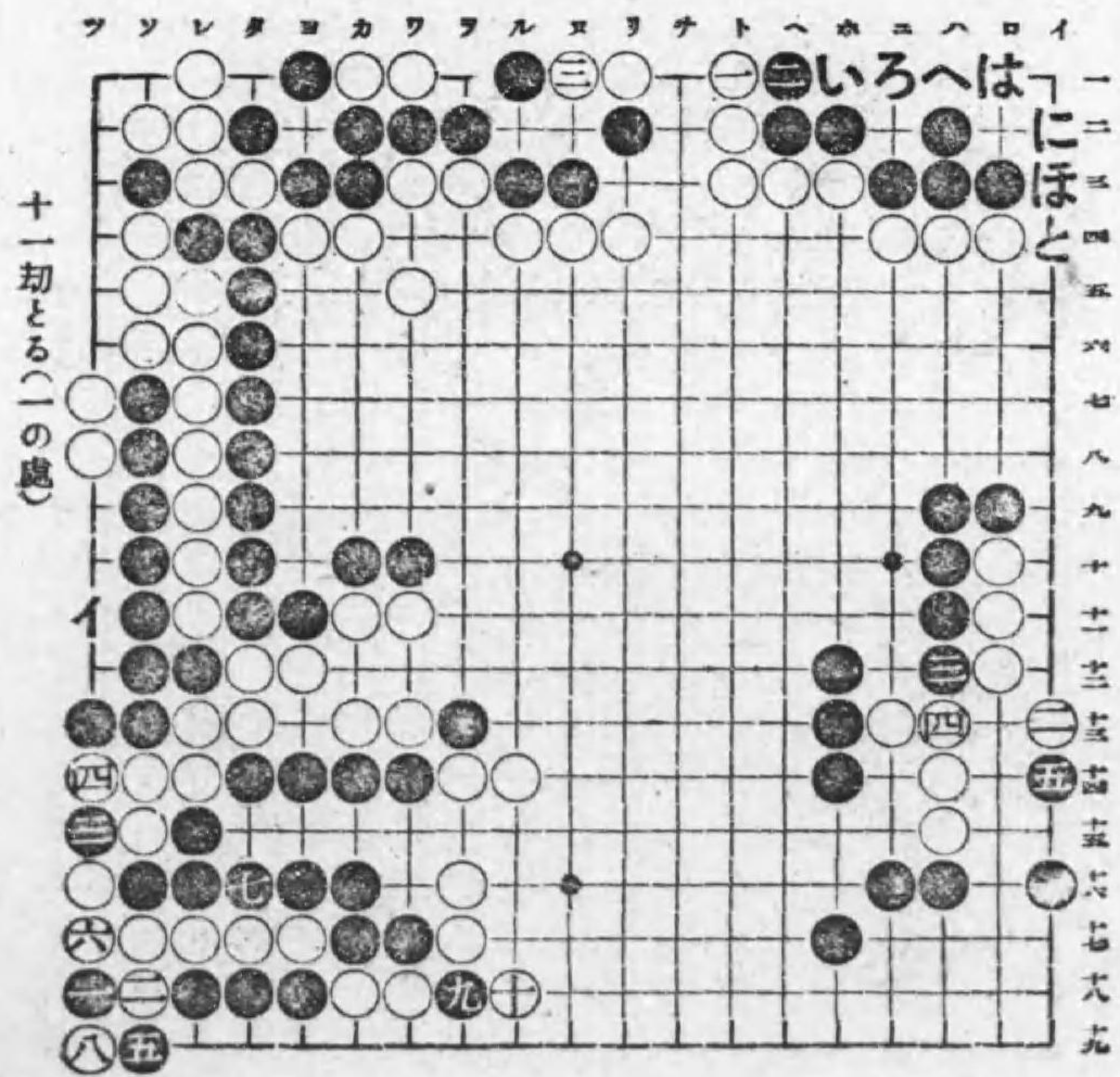
左下隅 白は、黒十一の劫提りまでとしたのは大變。

黒十一に、白三に粘ぐと、黒「カ」の十二で、一層劫が大きくなつて、白が悪い。されば、白二は六、黒二、白「テ」の十一、黒「ヨ」の十九」と黒を活かす外はない。さうなつて、

左邊の黒を活きるには、黒はイ。

□

右下隅 五までとなつては、白は取られる。白二を「イ」の十五、黒「ロ」の十五、白「ロ」の十四、黒五、白二、黒三、白「イ」の十五、黒「ロ」の十六、白四だと、劫になる。



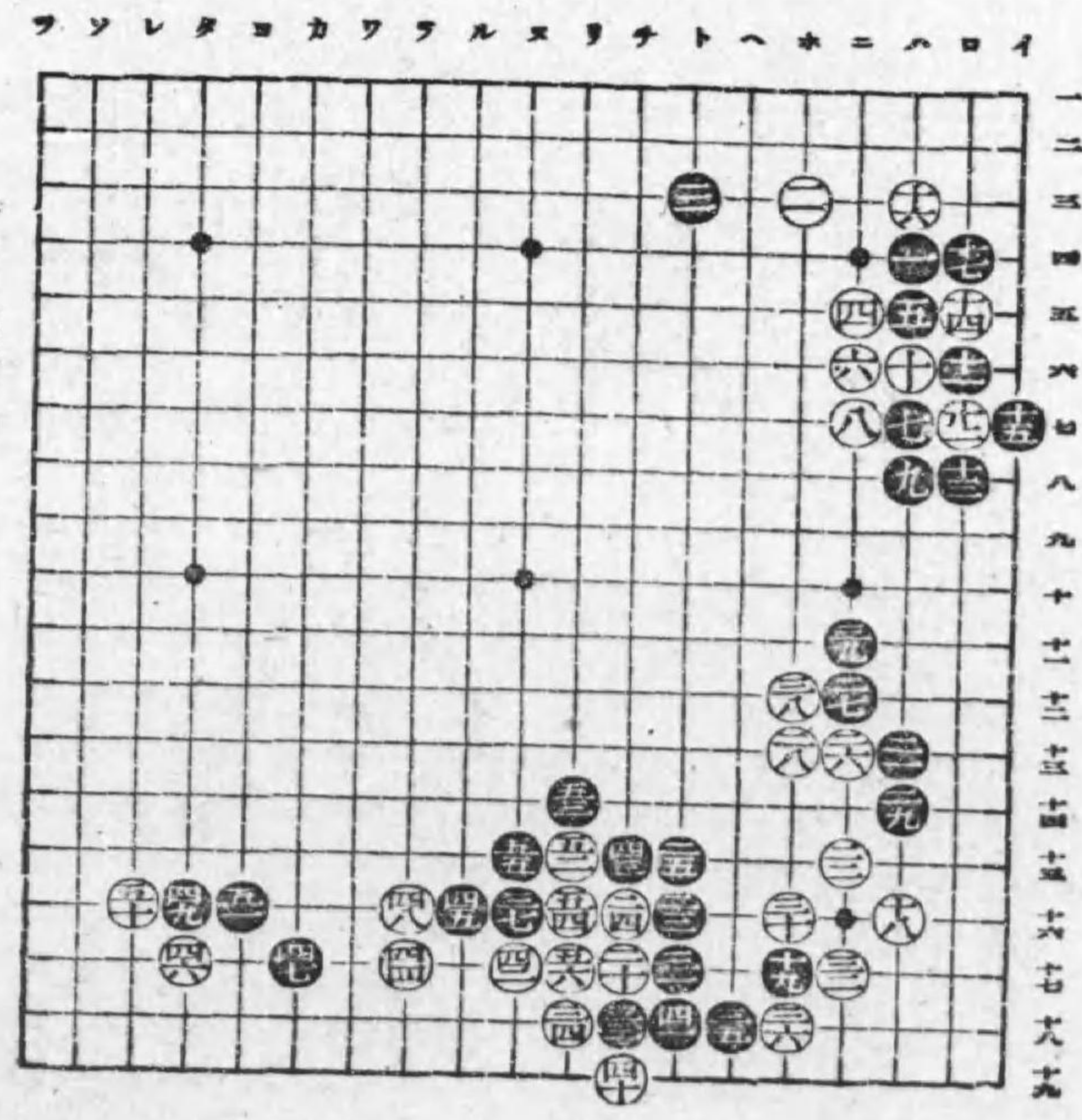
十一劫とる(一の處)

名局篇

勝名人 中村道碩
先 鹿鹽利玄

白三六は、黒「ニの十八」、白「ハの十八」、黒「ロの十七」となつて白が悪いための備。

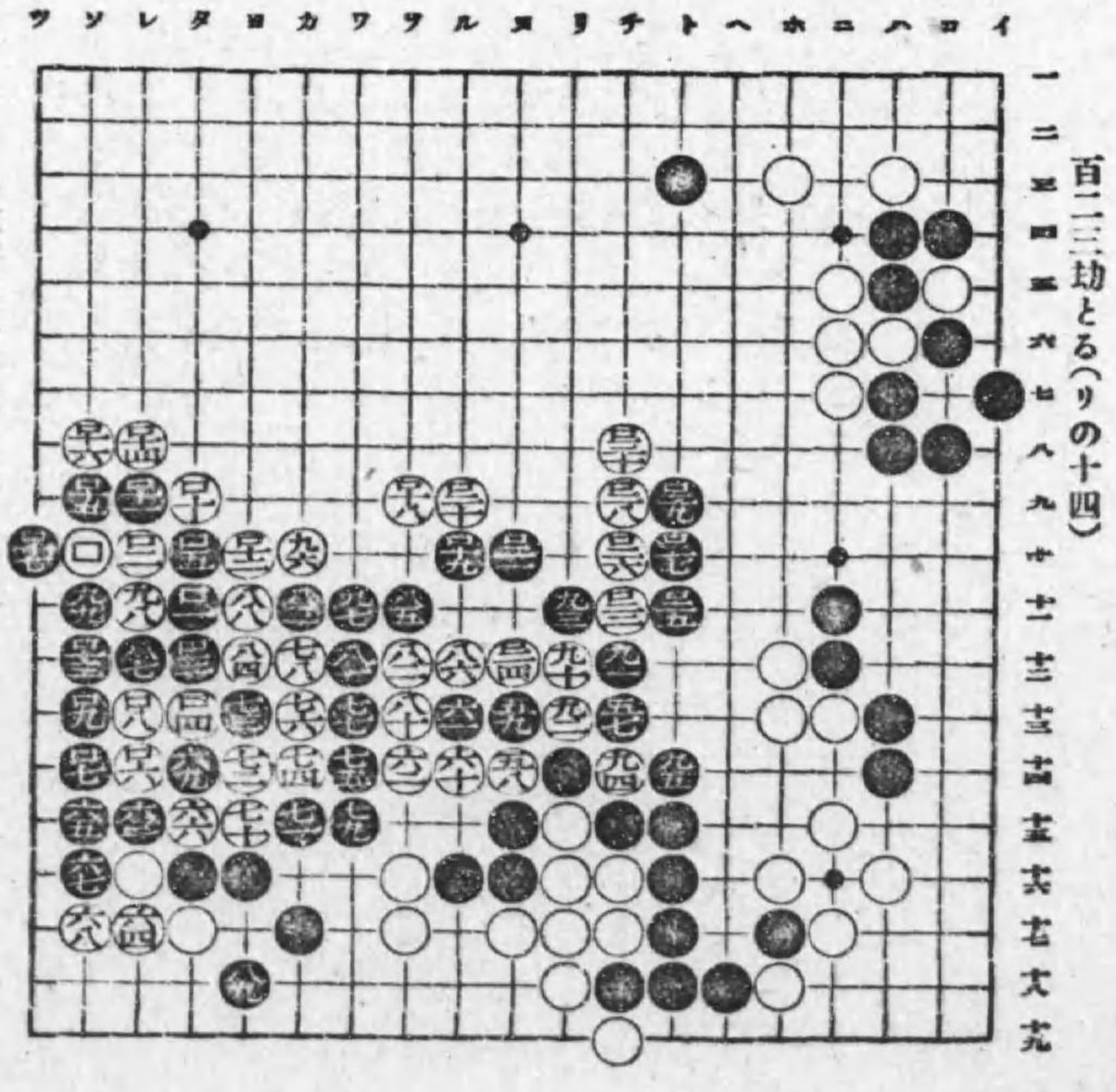
黒三七を五六に截ると、白四十、黒四一、白四二、黒五四、白「ルの十八」、黒四三、白五五となつて、白は善い形に引替へ、黒は單に白の二子を取つたのみにて、面白くない。さうなつて、黒三七、白四五、黒「ルの十五」は、白は四八と受け五五にある白を棄てて善い、のである。



黒五九と三子を棄てたのは、三子を助けると、五七の方と據み、その二者が急忙を告げ困難を見るからである。

白六六で八九、黒「カの十八」、白「ソの十八」と活きると、白は黒に七七と出を止められるばかりでなく、尙ほ黒「ツの十七」、白「ツの十八」、黒「ヨの十九」、白「タの十九」、黒「カの十九」、白「タの十八」、黒「ルの十八」となる意味もあり、白は前途の發展が出来ないと見て、六六と截り、六四以下三子を棄てる手段に出たが、甚だ高見である。これより白は精妙の手段に入る。

黒八一を「テの十五」だと、白八二、黒「ルの十五」、白八一となつて黒は悪いと見たのである。
百三十となつて黒の投げたのは、白「タの十八」、黒「カの十八」、白「ソの十八」、黒「レの十九」、白「タの十九」、黒「ツの十七」、白「ツの十八」、黒「ソの十九」、白「ツの十六」となることが遣り、黒は上邊へ先手が得られないからである。

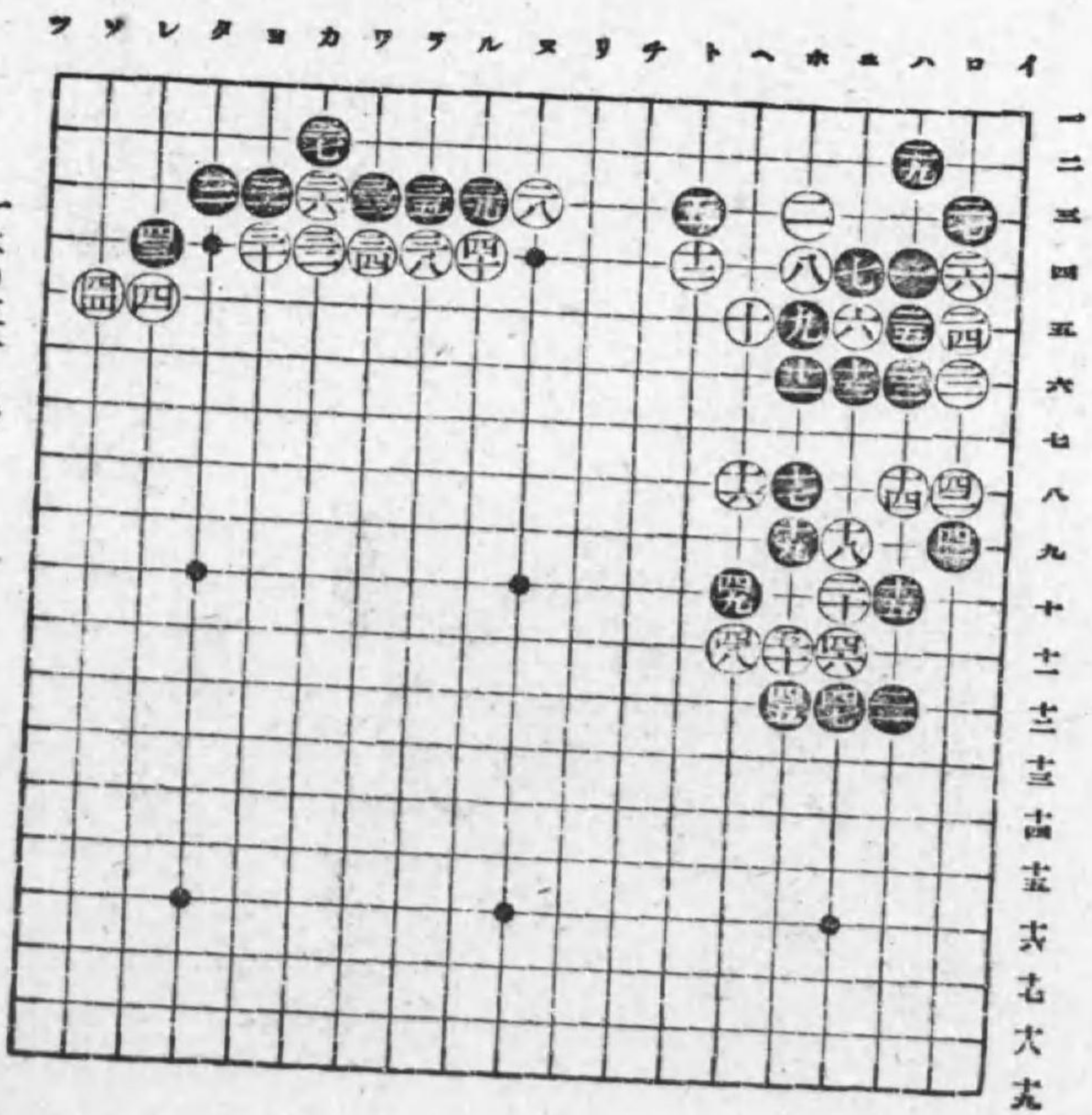


名人 中村道碩
勝先 鹿鹽利玄

黒七より十三までは、今日に於ても定石として行はれてゐるが、約三百年の昔既にかう打つてゐたのには、驚歎する。黒十三がないと、白に二四と來られて困る。その理は、追ひ／＼判る。

白十四は、黒に先に十五へ行かれると、其處に大きな黒地が出来るため。

白三十より四十までは、黒を左上隅に小さく活かし、白は外部へ大きく地を取らうといふ目的。



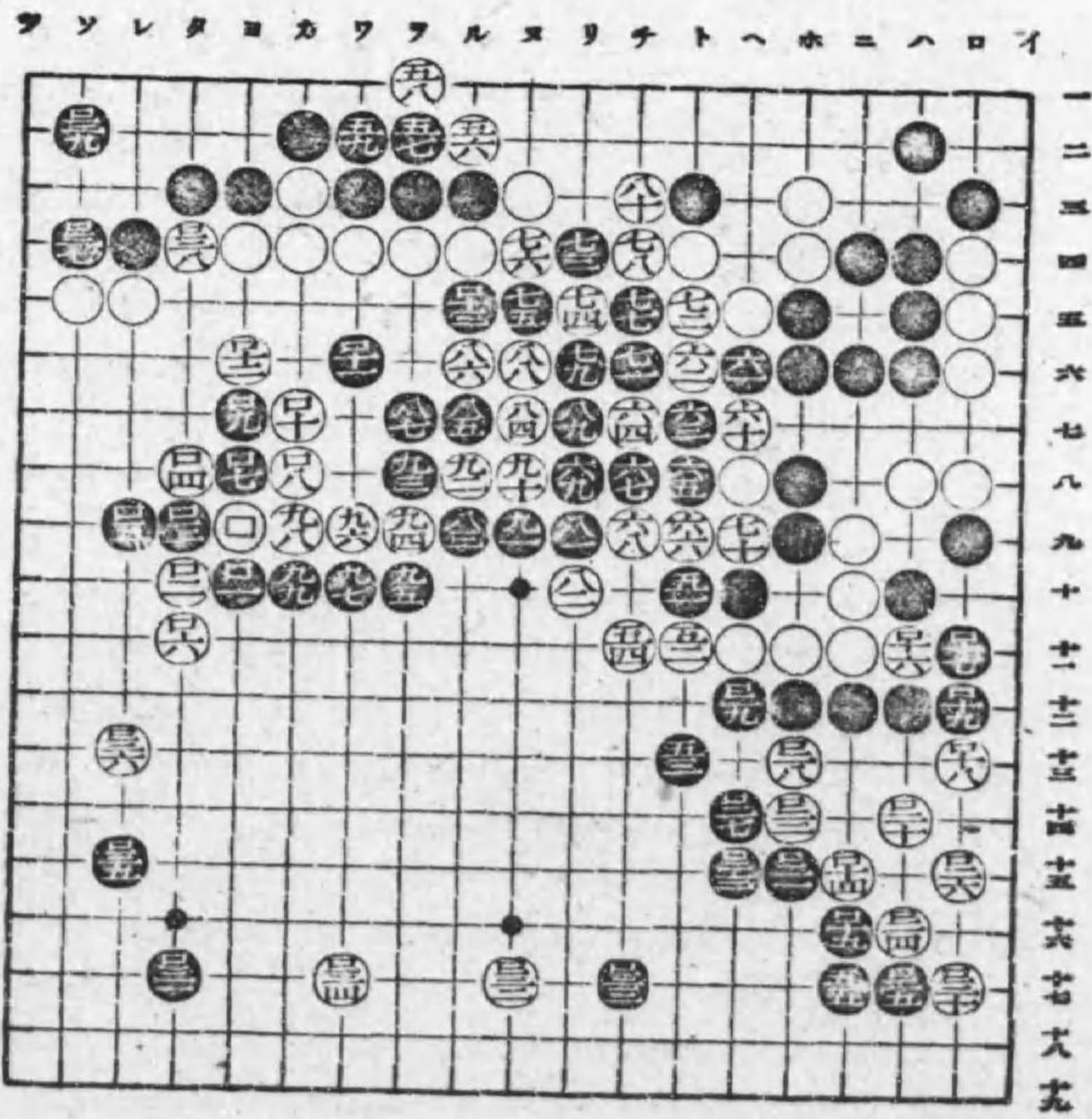
一より五十まで

黒五三、五五は、その方へ大きな地を取らうといふのである。それを、白に先に百二四へ來られ黒ホの十七一だと、白五五、ホの十六、白百二十となつて、白に地が出来る。

六三で「ホの七」と受けて、後黒六三だと、白六四、黒六五、白六七、黒六六、白七一となつて、白は整備するに反し、黒は白に二子を棄てられ詰らない。

黒百二五を百二六だと、白は「ロの十六」と受ける外はない。が、黒が強めてその白を取りに行つても、黒は百二九に截られがあつて取ることは出来ない。

百三九で白が投げたのは、地域が黒に及ばぬから。百三九の次に白が「ルの十」へ截ると、黒「ヌの十」、白「ルの十一」、黒「ヌの十一」、白「ルの十二」、黒「ホの十」となつて、八二以下の白が活きるに大困難。



五一より百三九まで

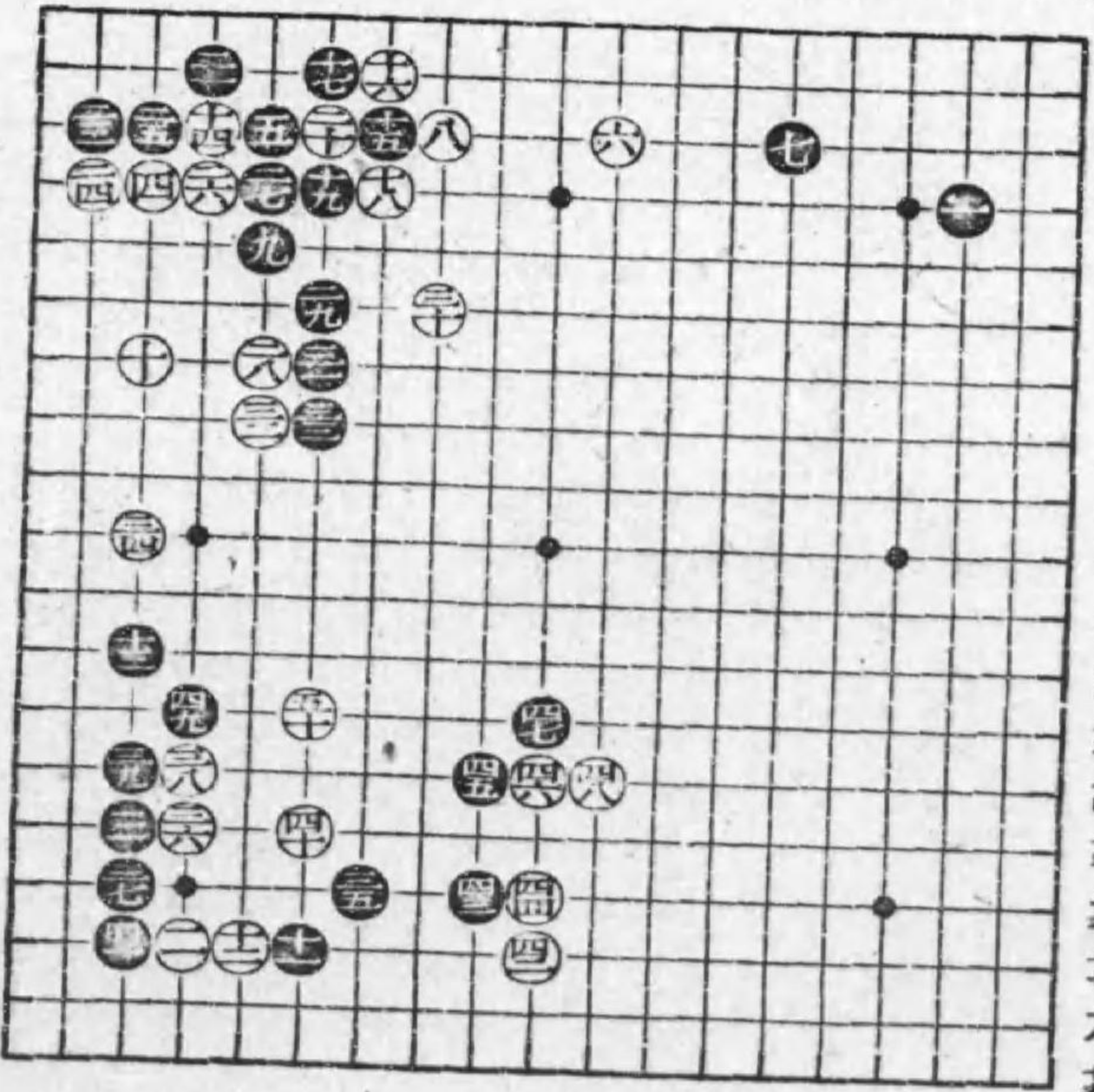
勝光名人 中村道碩
鹿鹽利玄

黒七を八だと、白は「ホの三」。黒七を八よりは、七の方が、右上隅に地が出来て大きい。白六は、今日は八の方を擇ぶ。その理は、追ひく判る。

黒四一は、見らるゝ通り、その一手で地が出来、四十以下五子の白を攻めてる。

黒四三は、白に「ルの十五」へ攻められると、十一と三五が危いから。

ア ツ レ タ ヲ カ ワ フ ル ヌ リ ナ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ



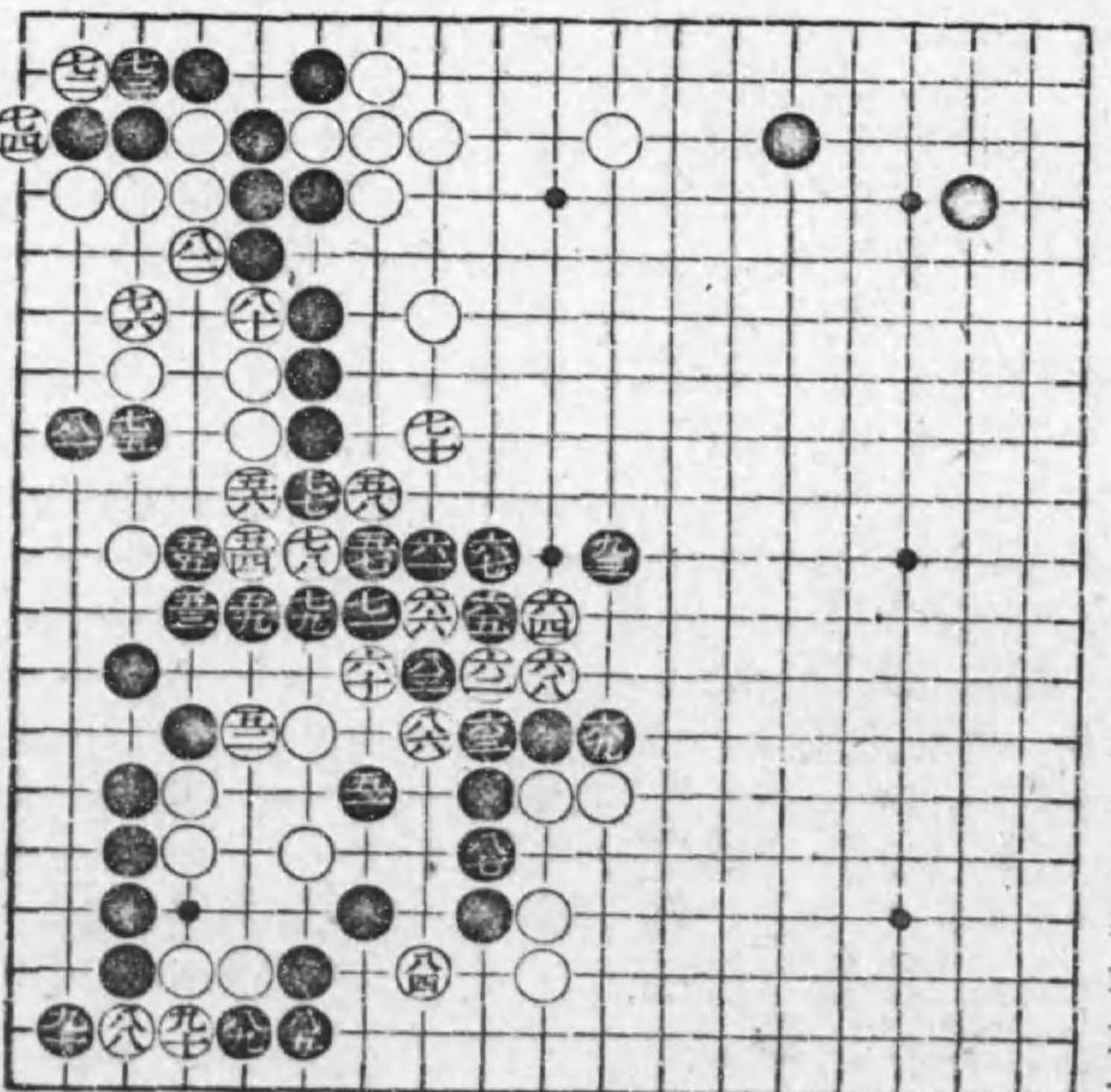
黒五三を六二だと、白は五九と、「レの十」の白の方へ連絡してしまふ。

白五四を六三だと、黒六二、白八六、そして黒は「ツの十三」、白八三、黒六十。さうなつては、白は悪い。

白七六を八一だと、黒は七六。そのとき白「タの六」は黒「ソの七」、白「タの七」、黒八二、白「ソの六」、黒「レの五」、白「ソの五」となつて、黒「ツの二」、白「ツの一」、黒「ツの四」、白「ツの五」、黒「レの一」。

九三までとなつて白の抛けたのは、七四と取られた方の白地の総計は、約六十目位しかなく、黒の八一となつた左邊は約二十目、それに右上隅の黒地を十五目と見れば、計三十五目。その外第一黒には、八三に取る劫がある。といつて白八三なら、黒は「チの十二」で、白に活がない。それで、白八三の粘ぎを「チの十二」と出れば、黒「チの十三」、白「チの十一」、の次に、黒に八三と劫を取られるのみならず、黒に「チの十六」と攻められることもあつて、白は到底前途の見込がない。

ア ツ レ タ ヲ カ ワ フ ル ヌ リ ナ ト ヘ ホ ニ ハ ロ イ



勝名人 中村道碩
先林 朴入

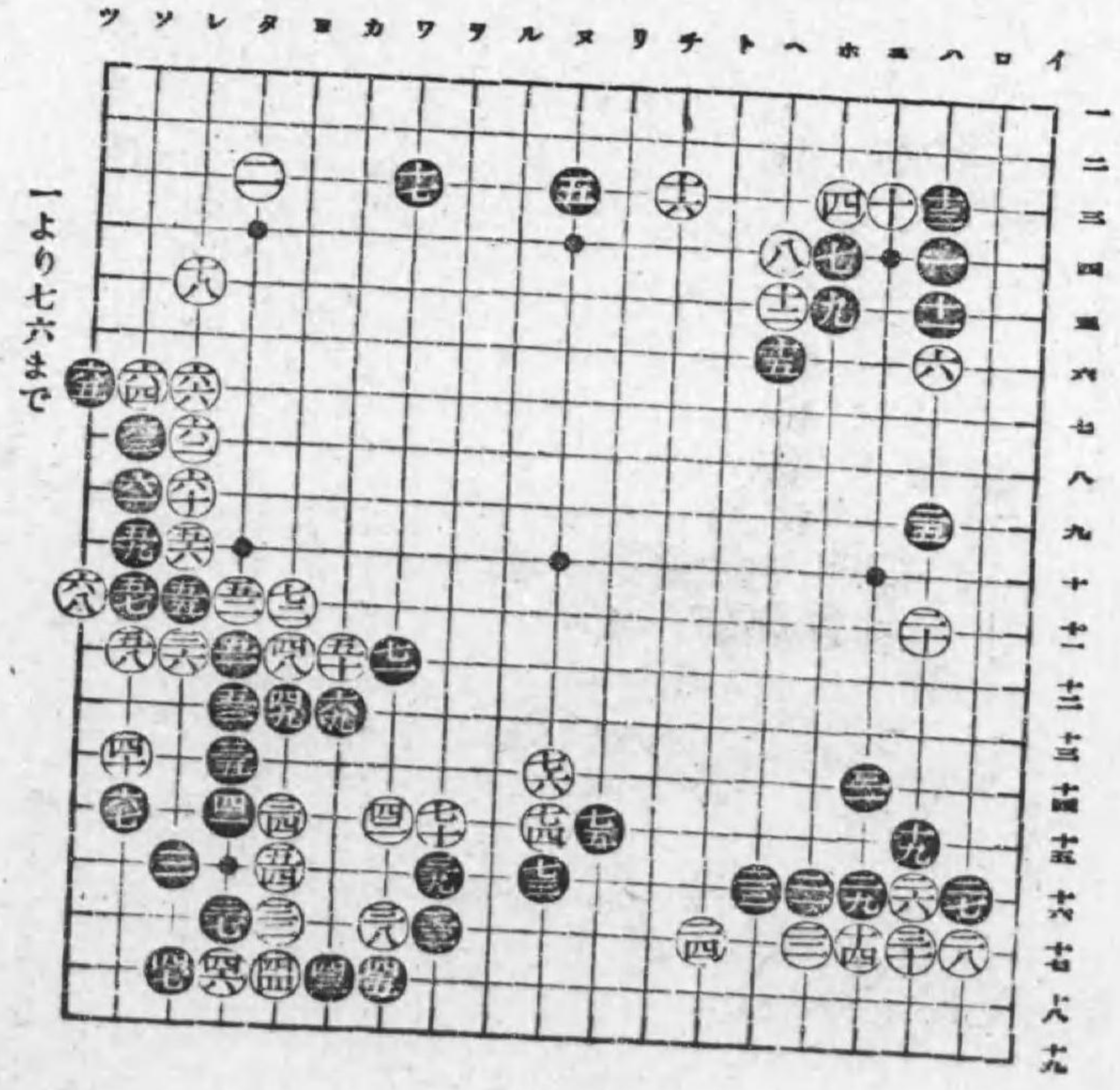
黒五と行ったのは、五を「リ」の三だと、白に「ル」の三に來られて、黒が面白くないと見たからである。が、今日では五を「リ」の三に白が「ル」の三と來れば、黒は「ニ」の五「または「ニ」の六」と備へ居て善いといふことになつた。

白十二を十三と行き、そのとき黒は二五が、今日行はるゝ定石。

黒三三は「チ」の十五と打ち、次に「チ」の十七と行く含みを見て、白の二十を大規模に攻めてることが、善いと思ふ。

黒五一、五三は、次に「カ」の十六と行き、三三以下三子の白を取らうといふ。それで白は五四。

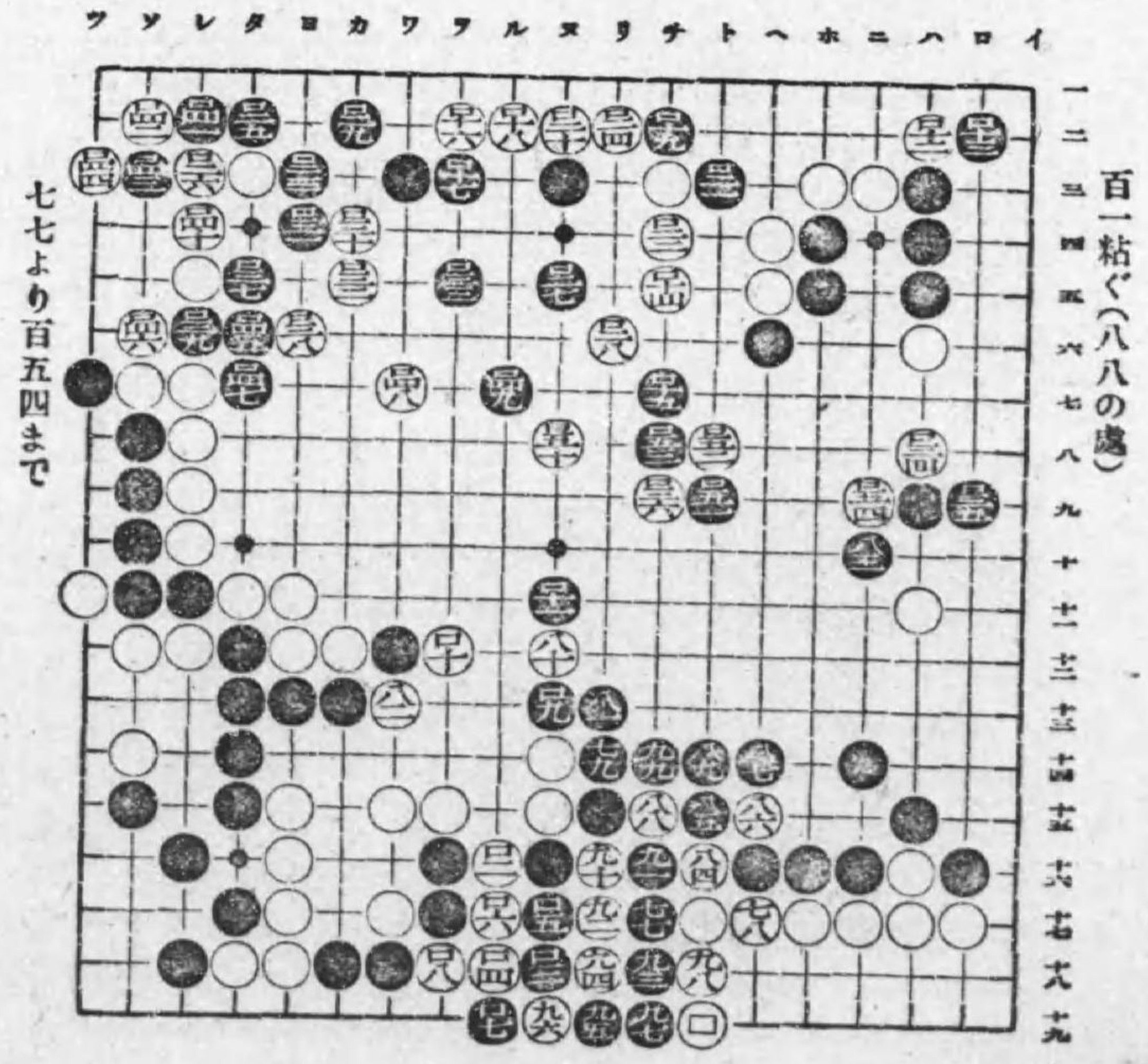
白に六八と取られたまでの、六五以下六子の方は黒の損ではあるが、白に「ソ」の十七に來られることを先手で防ぎかう六九と、白の四二以下を攻めてるから、その損は償はれる、といふ黒の意であらう。



黒七七を、九十、九一または九二だと、白は、七九で八二の截りを窺ひ、「ハ」の十一にある白の一子をも助け出さんとする意。それで、黒が七七、七八の交換を経て、七九と其處を押しつけ、「ハ」の十一の方に影響を與へたのは、巧い。願ふに、白七八は七九と先に押し、そのとき黒七八なら、白は八二に截つてゐることも善いであらう。

黒八三は、「チ」の十一と大規模に圍ふことも善い。蓋し、白に九七と渡られるのを防いで黒九五より百七までと堅固無比になつた黒の姿を見るに、八三が「チ」の十一にあれば、黒は百九を「ト」の六と行くことによつて、「ハ」の六、「ハ」の十一にある白の二子を、併呑出來ると思ふ。

黒百十五は「ヨ」の二と行き、「ヌ」の三、「ツ」の三にある黒の備とするがよい、と思ふ。
白に百五四と打たれ、黒の投げたのは、百五一の一子を種々に利用せられることにより、百四九以下の一團の黒は到底助からない、と見た黒の卓見にあらう。



勝名人 中村道碩
先林 朴入

黒の五によつて八までとなる。今日行ふ基礎的定石もこの時代の創定とすれば、大したものである。

黒十九は、白に「ホの三」と來られると、十との間に大きな地が出来る。といつて、白に「ホの三」に來られ、そして黒が「トの三」と行くことは、十の方が堅固無比で、黒の大不利。といふことを、即ち、黒十九「避けた意味で、甚だよい。

黒一九は、白に「カの六」に出られることを遺して悪い。一九は「カの六」が善い。

黒三七で三九だと、白四十、黒三八、白三七。また、黒三七で三八だと、白三七、黒三九、白四十。さうなることが、面白くないと見て黒は四五までの運びを取つた。

黒四九は五十に據つて、白「ハの十五」なら、黒は「ハの十一」がよい。

白六二は、黒に「への十七」と來させないため、と、「カの十一」と出る征の當り。それで黒は六三、六五で、その方の白を攻め、白が「カの十一」に出れば、黒「カの十二」、白「ワの十一」、黒「ナの十」と應じる腹を決め、兼ねて前譜四一以下の黒にも備へた。が、六三で「ニの八」と形勢を張るのも、無いではない。

白六六と打込んだのは、黒に「ニの八」へ圍はれると、白の不利が甚しいからであつた。

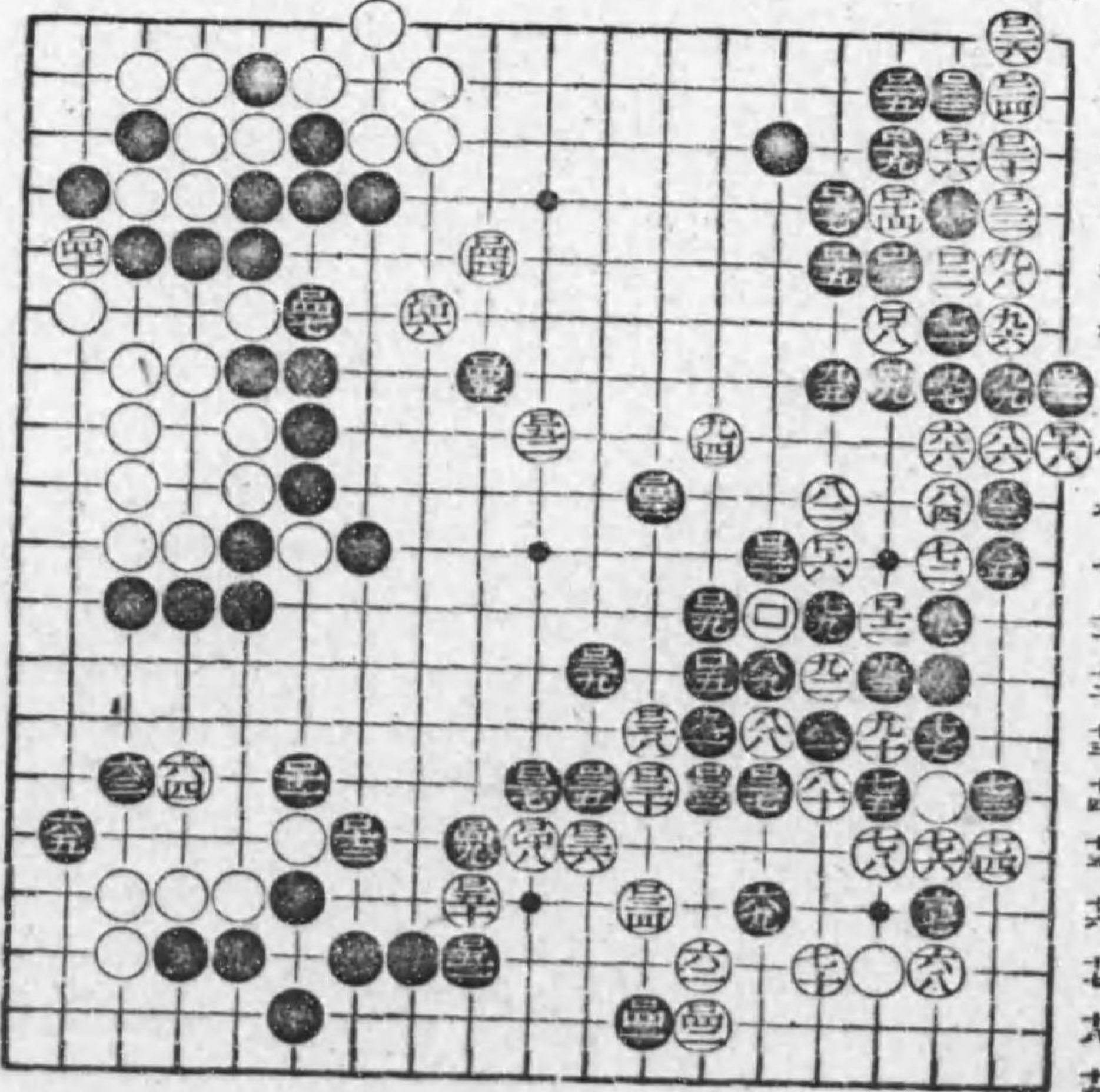
黒九七を九八だと、白は百八。

白百で百二だと、黒はその方には一手ごと白に應じなくてはならないのに乗じて、白は先づ百と截り、劫手段に出た。それで百十三までの變化となつた。

黒百十七を百十八だと、白百十七、黒「への四」、白「への五」、黒「ホの六」、白「トの五」となつて、白には「イの十二」と黒を取りに行く妙手が遺つてゐる。

黒百五で「テの十五」だと、白には百五と行く得が遺る。白の百五と入つたことは、白「ルの十四」、黒「テの十五」、白「リの十三」の手段があるからである。それで黒は投けた。

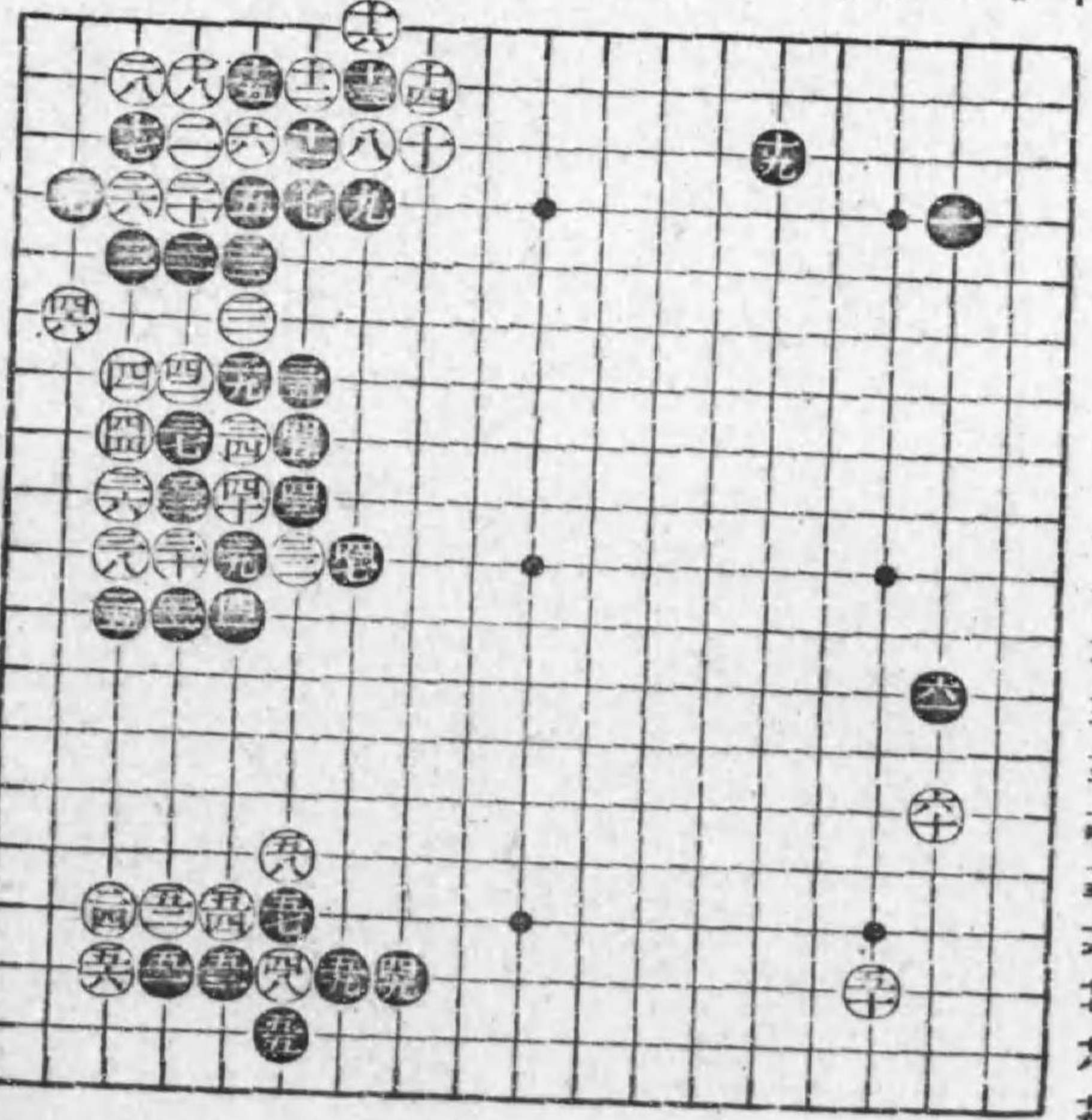
フソレタヨカワフルヌリナトヘホニハロイ



百一劫とる(八の處)
百七劫とる(八の處)
百二八粘ぐ(八の處)
百四劫とる(九二の處)
百十劫とる(九二の處)
百三二粘ぐ(七九の處)

六二より百五二まで

フソレタヨカワフルヌリナトヘホニハロイ



一より六一まで

名人 中村道碩
勝先 林 朴 八

白十を「ニの十六」、黒「ハの十五」、そして白は三四と白六を固め、そのとき黒十七なら、白は「ヌの十七」。その黒十七を「ヌの十七」なら、白は十七。その意味で、白十は今日は多く「ニの十六」。

黒四五を四六だと、白は五三。そのとき黒五二は、白は「ワの十七」。それが黒は悪いので四五。といふことはその白「ワの十七」に、黒五八は、白は五一で善い。からその黒五八を五一、白四五、黒「カの十七」、白「ワの十八」のとき、黒五八は、白「カの十六」、黒「ワの十五」、白五七、黒「ヨの十七」のとき、白は「ヨの十六」で、黒の何れかの二子は取れる。

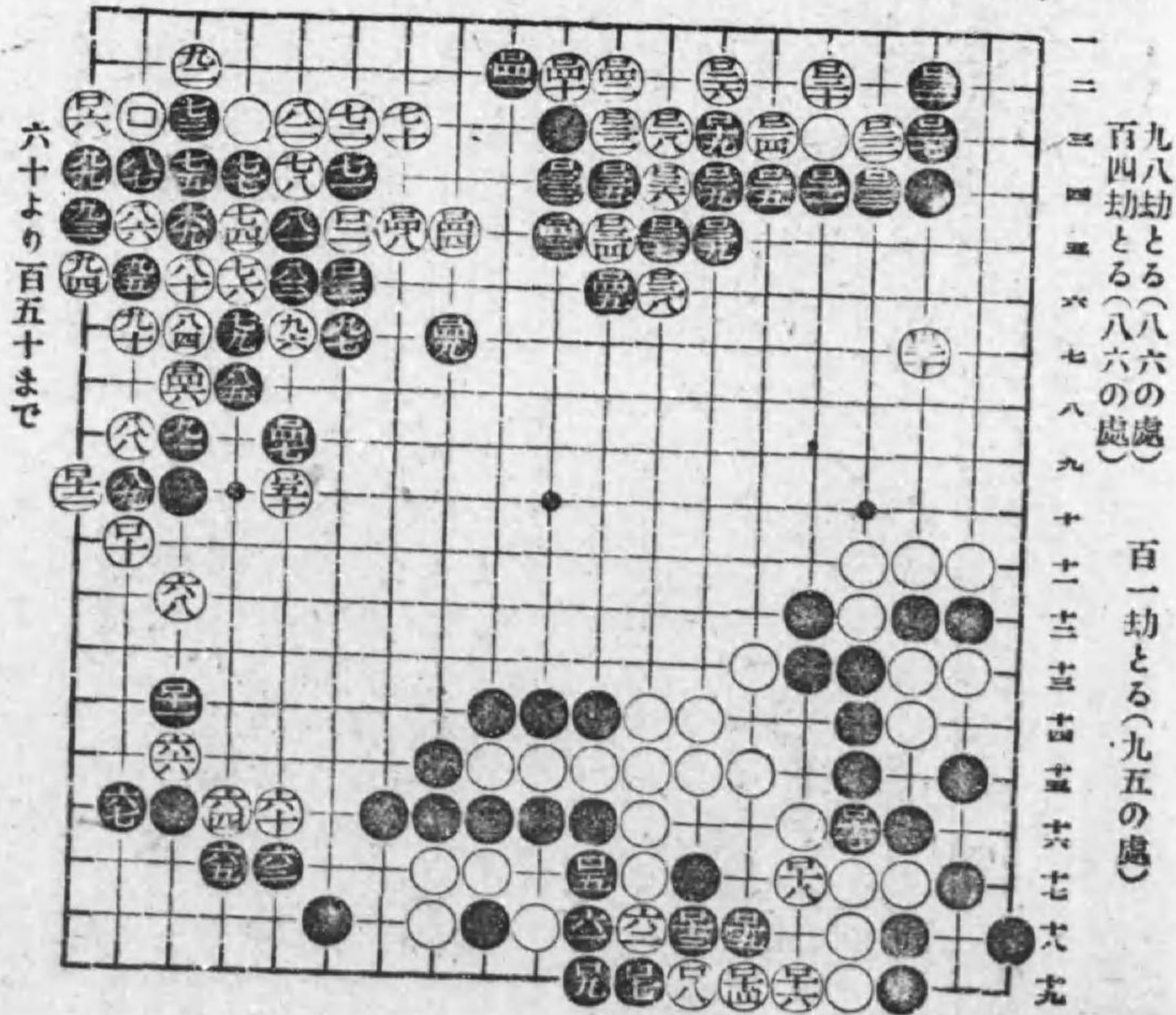
黒五五を「ワの十七」だと、白は五九の方へ行く。五五五六の交換をして五七で先手を取り、五九の大場を占めたのは、黒は巧い。

白六十より六八までは、黒に百五十と飛ばれ、大きく黒地を圍はれないため。

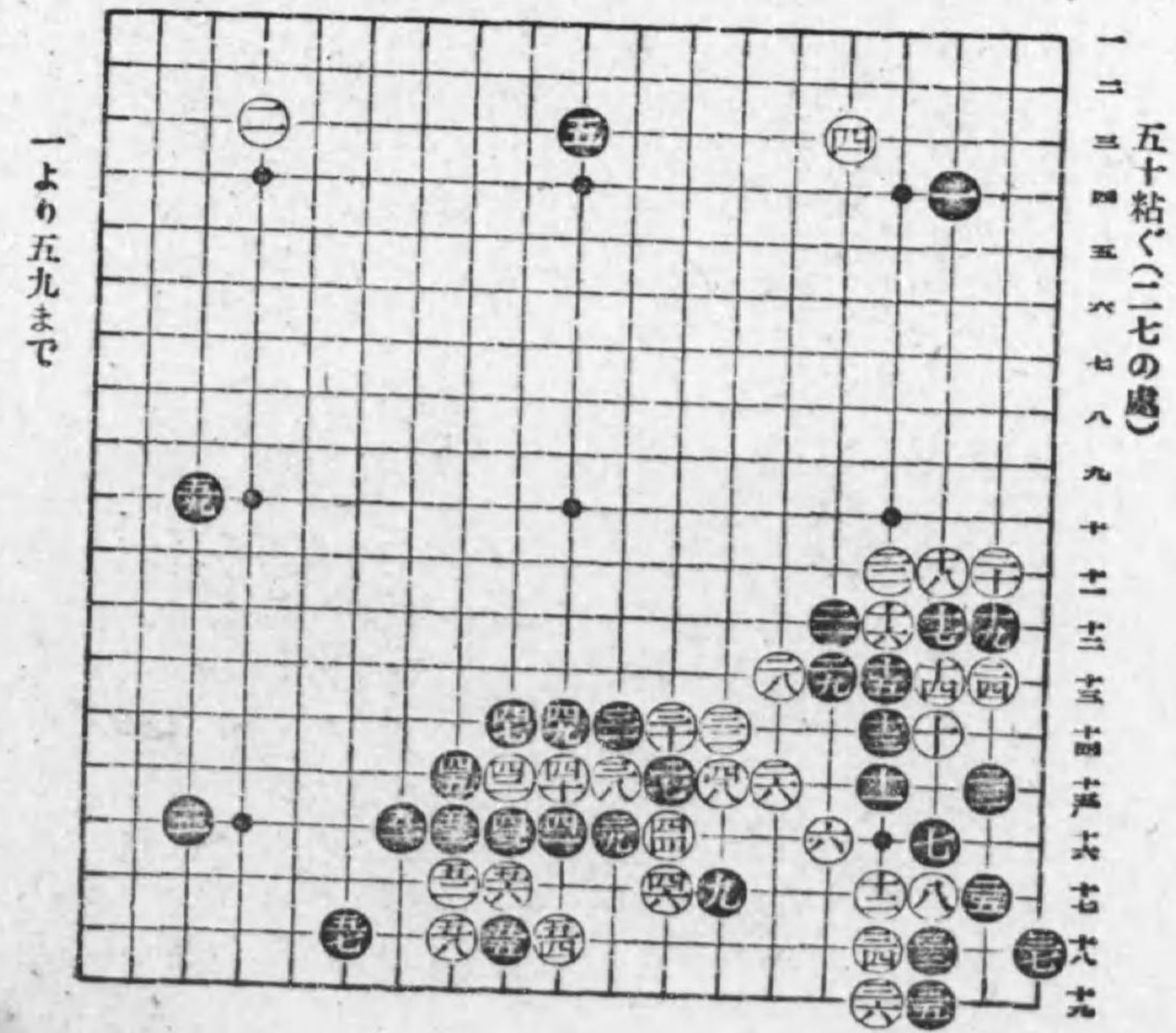
白七四を九二に受け、黒七七、白八二、黒百までとなることは、今も變らない定石。それを白が七四と受け黒の七五を俟つてかう七六は、黒に八十、白七九、黒八四、白八五、黒百四六と、白が黒に應じさせやうといふのである。さう黒が應じるとは、白の八五までとなる一圍は旺んになるのに反し、黒百四六までと受けた左邊には、地が少ない。それで黒は七九。

黒九三を「ソの二」だと、白に九九に來られ黒が悪い。白九四を九五だと、この次ぎ黒に「ソの二」に來られて白が悪い。それで劫が始まり百九までの變化となつた。黒百十九で「ソの八」、白百四六、黒「ツの九」だと、白「タの九」、黒「ヨの八」、白「タの十」となつて、黒が悪い。白百二四を百二七だと、黒は百二四で、その白の生きる結果が面白くない。

フソレタヨカワラルヌヲチトヘホニハロイ



フソレタヨカワラルヌヲチトヘホニハロイ



勝名人 中村道碩
先 林 朴 入

黒三は、黒一を「ヌの十」とかのやうに打始めた古來の遺風が此時代にも、尙ほ認められる。が今は、白二に對するかう三の如き着手は、悪きことが究められた。

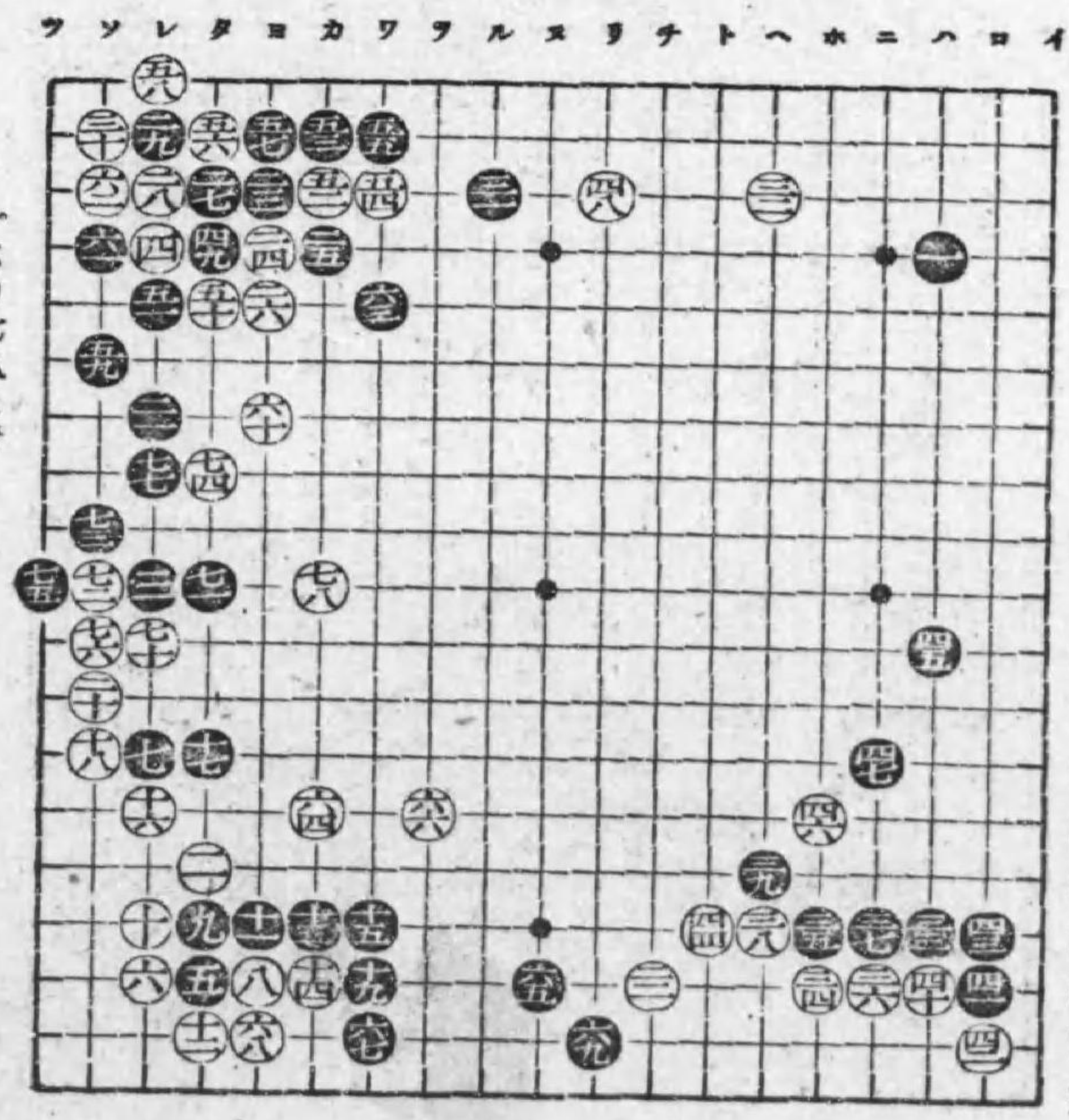
白八を九だと、黒八、白「ソの十六」、黒「チの十七」となつて、白は三の方も「チの十七」の方も攻められない。それで白は八。この八の意味は、現在よきことのひとつとして行はれてゐる。

黒十三を六八、白十四、黒「レの十八」と、白に「カの十五」と、十一の出を止められ、結果黒が悪い。

白二二は、黒にその邊に來られ、十九との間に大きく地を取らせないため。

白六十を「チの三」と、黒に「カの五」と來られる。

白六四、六六と、黒の十九以下を攻めたのは、かう七八までと運ぶ前提。



黒七九を「ヨの九」と、白は「ワの六」と行くことがよい。また、黒七九を八十だと、白は七九。

白八十を「カの十二」と、黒は八十。

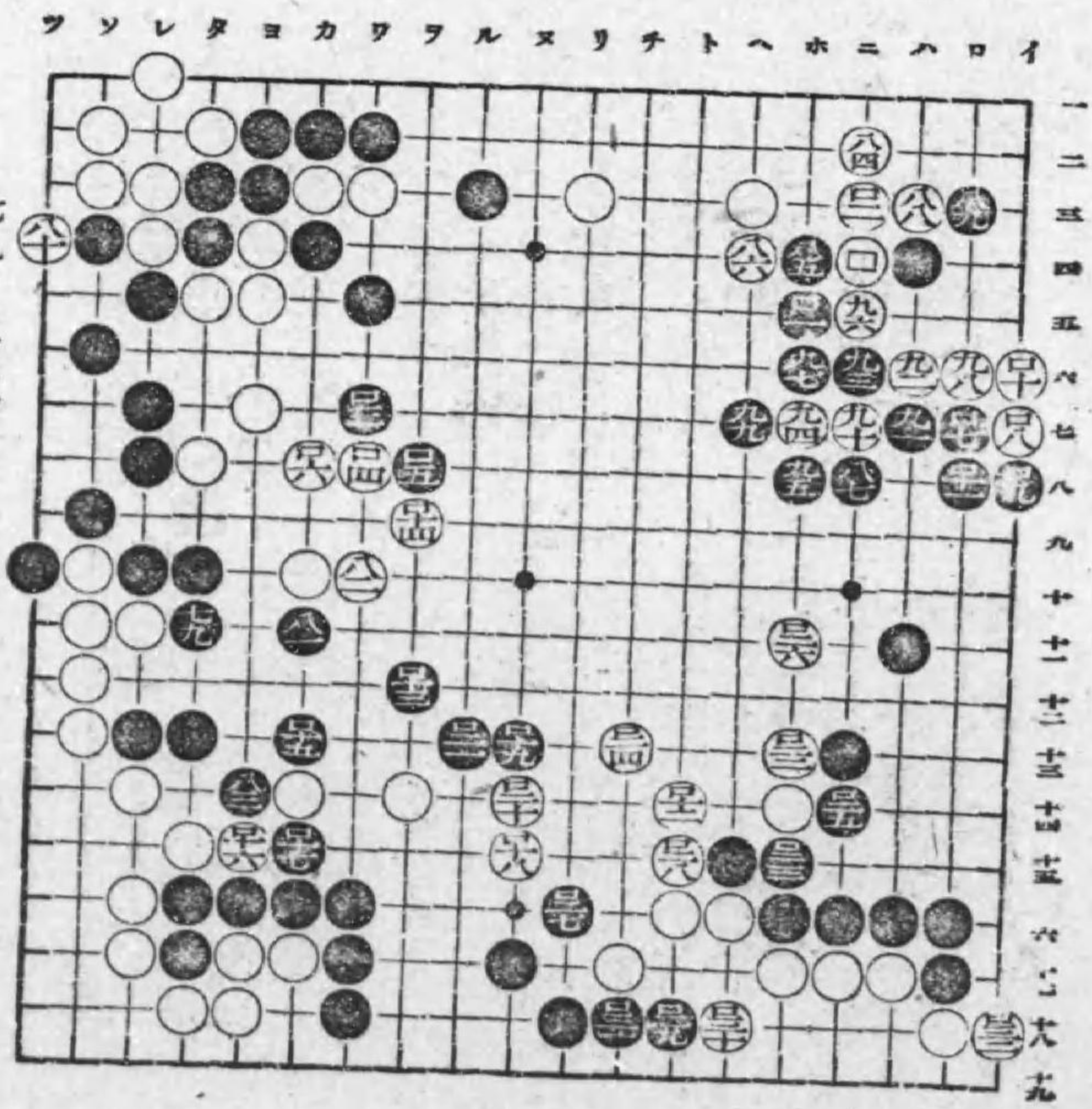
白八四で百十六だと、黒に百十五と活きられ、白は後が面白くない。それで白はその方に固執せず、黒に「ホの二」と來られないうち斯う八四。

白九十とその方の黒地を減らしに行つたのは、黒に百一と來られると、黒地が大きいから。

黒九五で九八、白「ハの八」、黒「ハの五」のときには、白は必ず百七と當て、黒に九二の所へ應じさせ、白は「ニの九」と、八七の一子を征に取る。それは黒が悪いので九五。

白九八で九九だと、黒は百一。そして白九八、黒百七、白「ロの四」は、黒百二、白「ハの二」、黒「ロの五」で、白が悪い。

黒は九九と白の二子を打抜いたのも大きい。白に百十一と飛込まれないうち、黒が百七と受け百十までとなつた右上隅の白地も大きくして、この折衝で黒は敗けた。白百三十を百三二だと、黒は「チの十六」。



勝名人 中村道碩
先 林 朴 入

黒十七で「ワの五」に飛ぶと、白は五一の所。十七と一城を築いて、五の方を白に委し、白が「チの四」と来れば黒は「レの十二」に備へ、五の方は機會を待つて動くが善いと黒の見解。

黒二九を「ホの十七」だと、白は「トの十七」または「チの十七」とその黒を攻め、二十との間に廣く地を拓さうといふ。

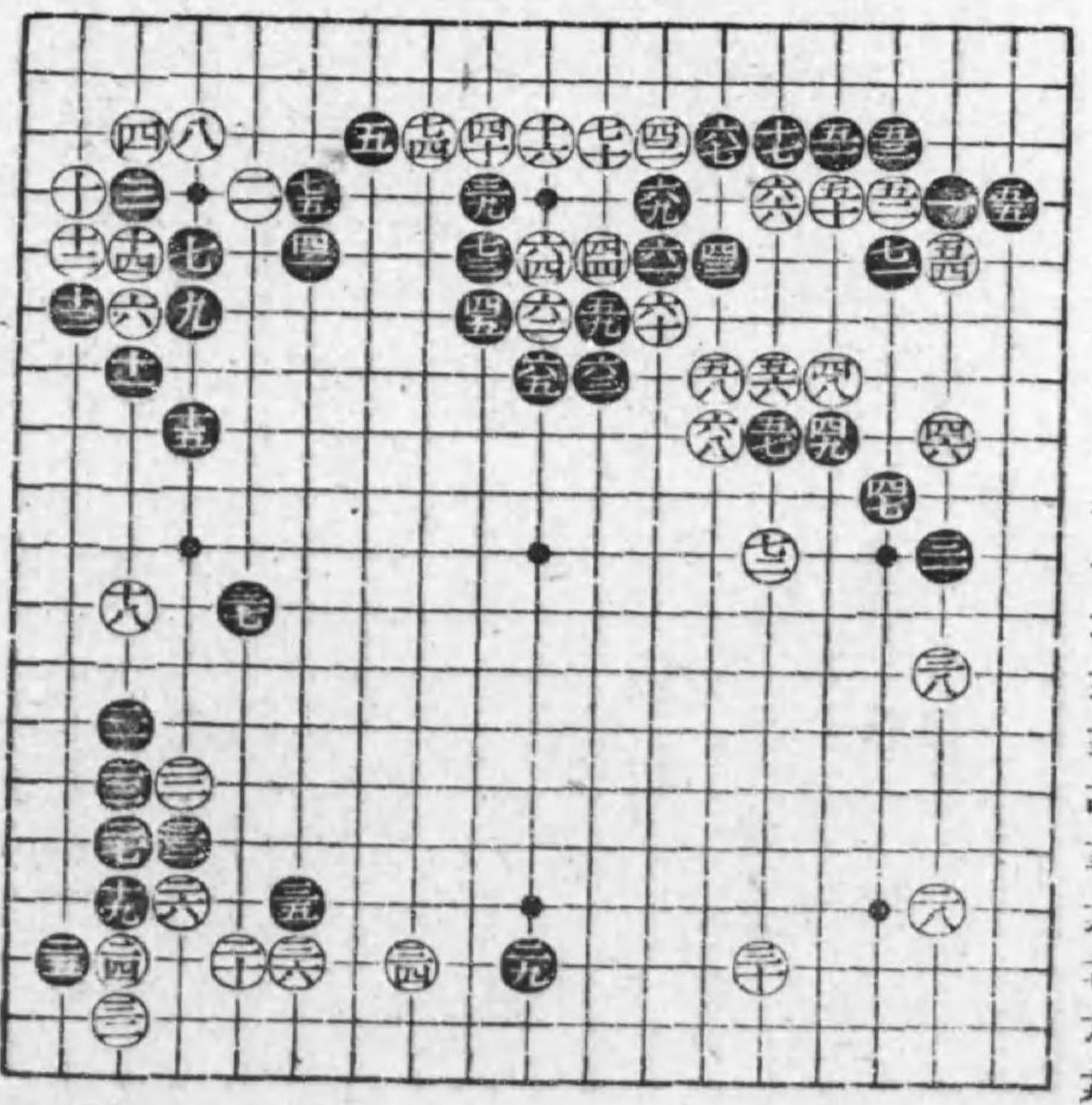
黒の行つた三一の點は、黒白必争の大所。

白三四を「ヨの十五」だと黒三五、白「ヨの十六」、黒三六で白が面白くない。

白の四二と治り四六と打込んだのは、大勢調理の一着で、勝收此一手に係る。この點を靜思せられよ。想へに黒四三は「ホの十」が善くはないか。

黒六三を「リの四」、白六三、黒「ヌの四」だと、白は「ニの八」でもよいがまた七四に突き當つて活きてもよし。

アソレタヨカワアルヌリチトヘホニハロイ



一より七五まで

黒九九で百と白を取りに行けば、白は百二六。そのとき黒「チの九」は、白は「カの六」と截つて黒が悪い。その黒「チの九」を「ヌの八」は、白は「ルの九」で、「カの六」の截りとまた一方は白「ヌの十」、黒「リの十」、白「リの九」とで、その執れも、結果は白が善いといふのであらう。

黒百十三を百十四だと、白は百十三で右下隅の地を豊富に取る。

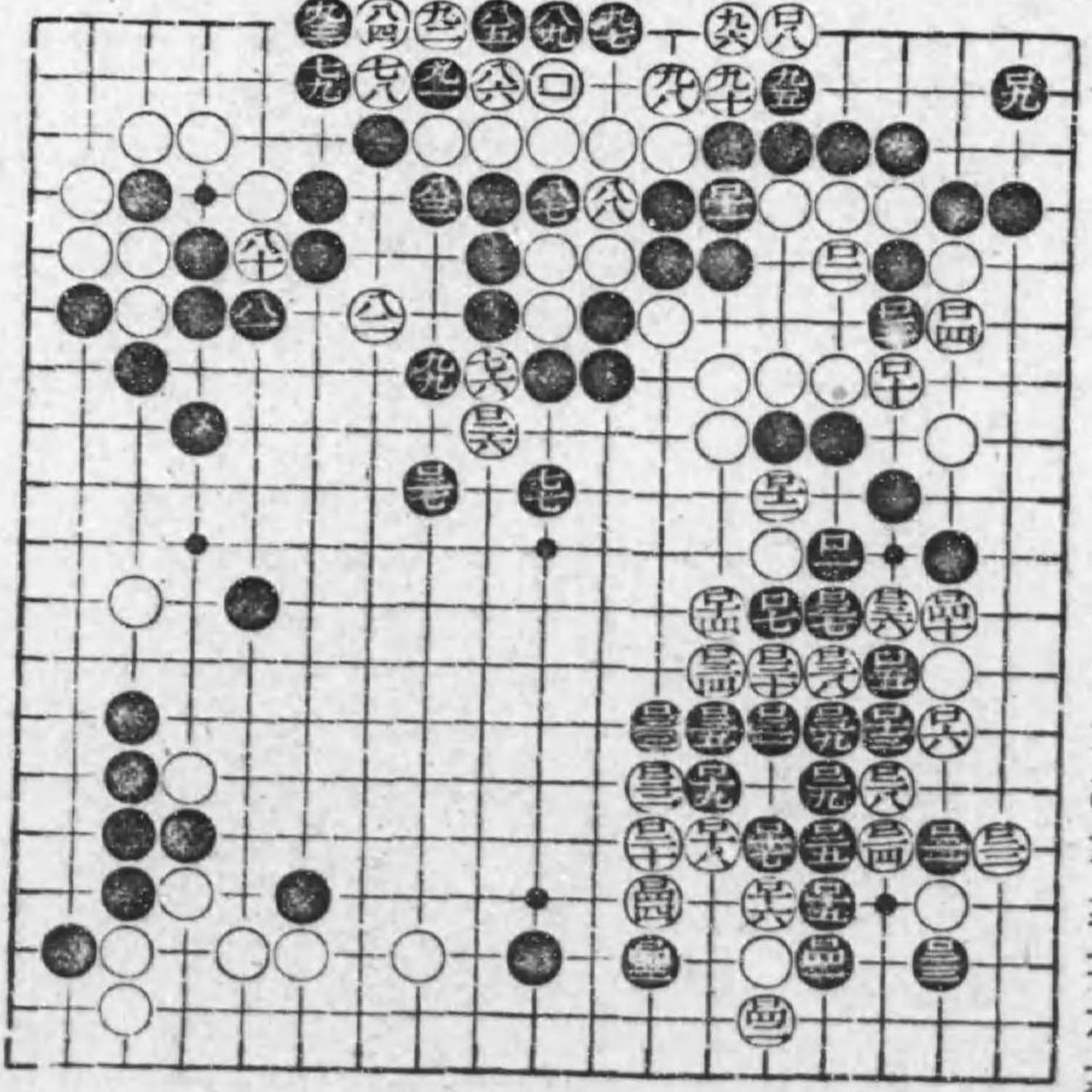
白百十六を百四一だと、黒は「ニの十六」。

白百二六と出たのは、黒の様子を見たので、黒に百二七と打たれ損のやうであるが、白には百十九の方と「ヌの十七」にある黒を攻める便に、「ヌの十」または「ルの十一」が恵まれてゐる。

白百二八を「チの八」は、黒「ワの八」、白「ワの七」、黒「ルの九」となつて、白が悪い。

黒は百十五の一着のため、白に百十六と乗じられた。即ち、百二三となつた方は黒の得だが、百四十となつた方の黒の損は、その得よりも大で、結果は黒が悪かつ

アソレタヨカワアルヌリチトヘホニハロイ



七六より百四四まで

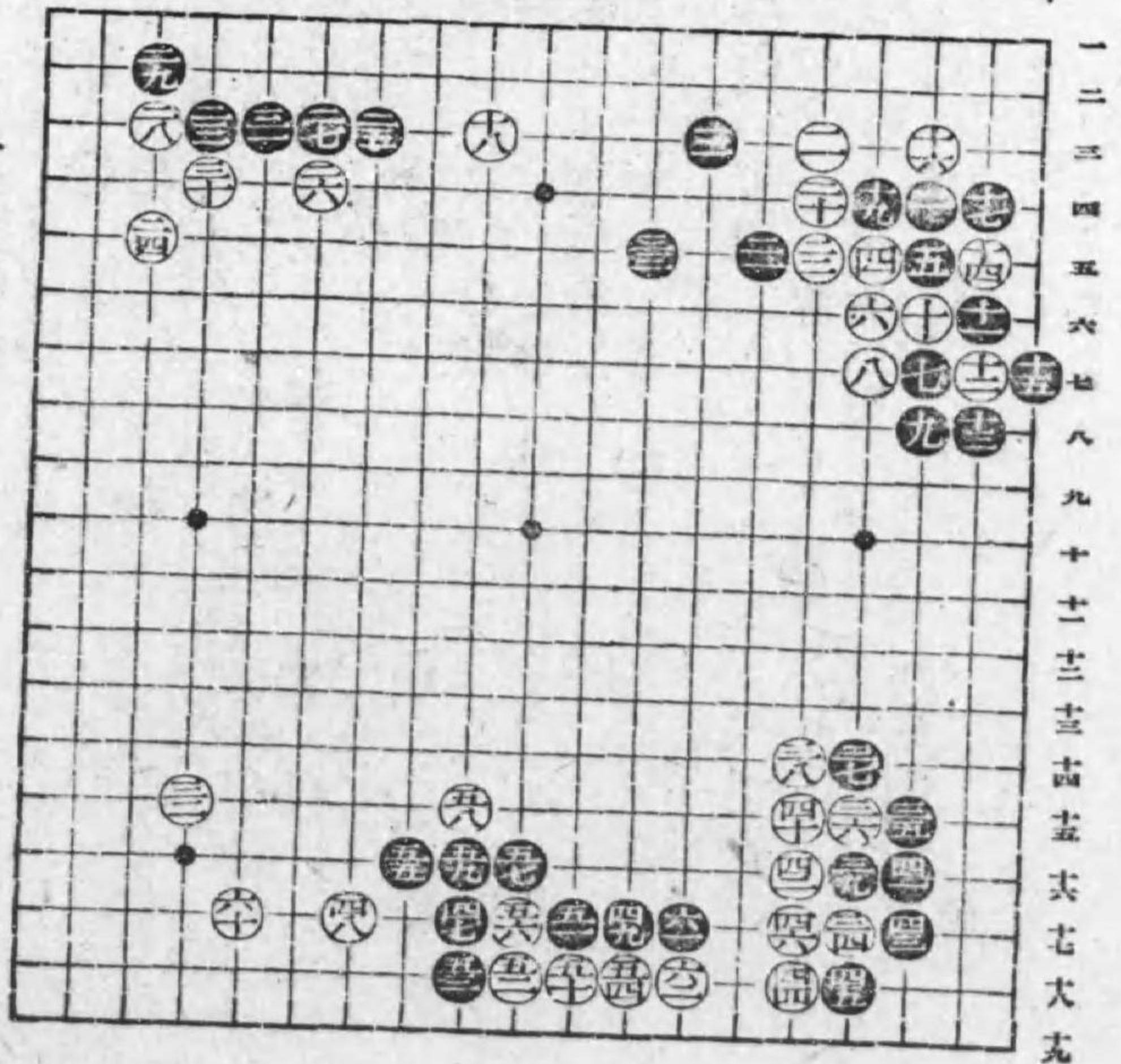
名人 中村道碩
先 林 朴 入

白の二六より三十までは、三二で直ちに「ソの三」と其處を整へてゐるときには善いが、でないときには、今日では白はさう運んで三二までと黒を堅くはさせない。

白三六、三八の意は、九と十三の堅固無比の而即ち、「ロの十三」、「ハの十三」までは無論黒の圍内と見て、その方へ黒の勢力を凝集させやうといふ理にして、さう凝集させられた方が負けることとなる。今日専門家の重視するこの棋理が、既に此時代道碩に依つて定められてゐるのである。その理を會得しない間はどうしても上達は出来ない。

白四八を「タの十七」は常時の手。四八は黒を四九と、三八より四四までの白の固い方へ寄せ付け、直ちにかう五十より五四と黒を攻めんとする、即ち終局に處しての機宜の手段である。

ツソレタヨカワタルヌリチトヘホニハロイ



一より六二まで

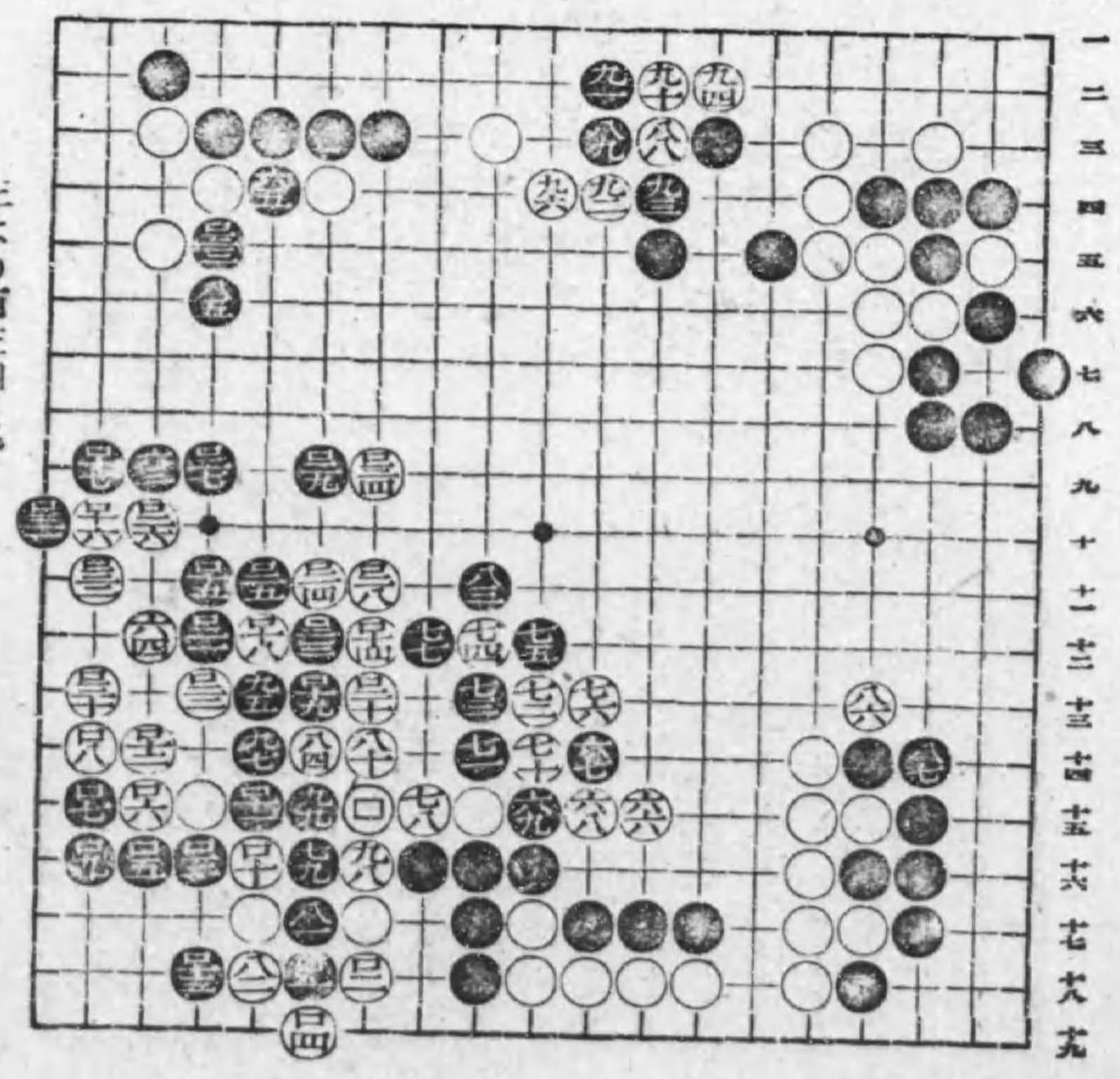
黒六三と轉じたのは、白に先へ百二六を占據させないため。それは、前譜五九以下の方へは白が先に來てもさう危険でないとい見極めをつけたことにある。

黒六七を六八だと、白は六七。そのとき黒「チの十四」は、白六九、黒「リの十六」、白七十、黒「トの十五」、白「チの十三」、黒「トの十四」、白「トの十三」で、黒が活きるには多大の犠牲を拂はなくてはならない。

黒七七を百二十だと、白は七七。黒八三で八四だと、白に九八と來られて困る。が、黒八五となつても、白には「ソの二」、黒「ソの三」、白「ソの四」の劫手段があつて、大勢は白に有利に導かれた。

黒九五は、九二の白を征取る當り。黒百二七を百二八だと、白「カの十」、黒「ヨの九」、白「ワの十」、黒「チの十一」、白百二七、黒「タの八」、白「タの十」、黒「ヨの十」、白「レの八」となつて、黒が面白くない。だが、白に百三四と出られる結果になつても、八三と「チの五」の方が連絡出來ず、黒の敗勢。

ツソレタヨカワタルヌリチトヘホニハロイ



一三より百三四まで

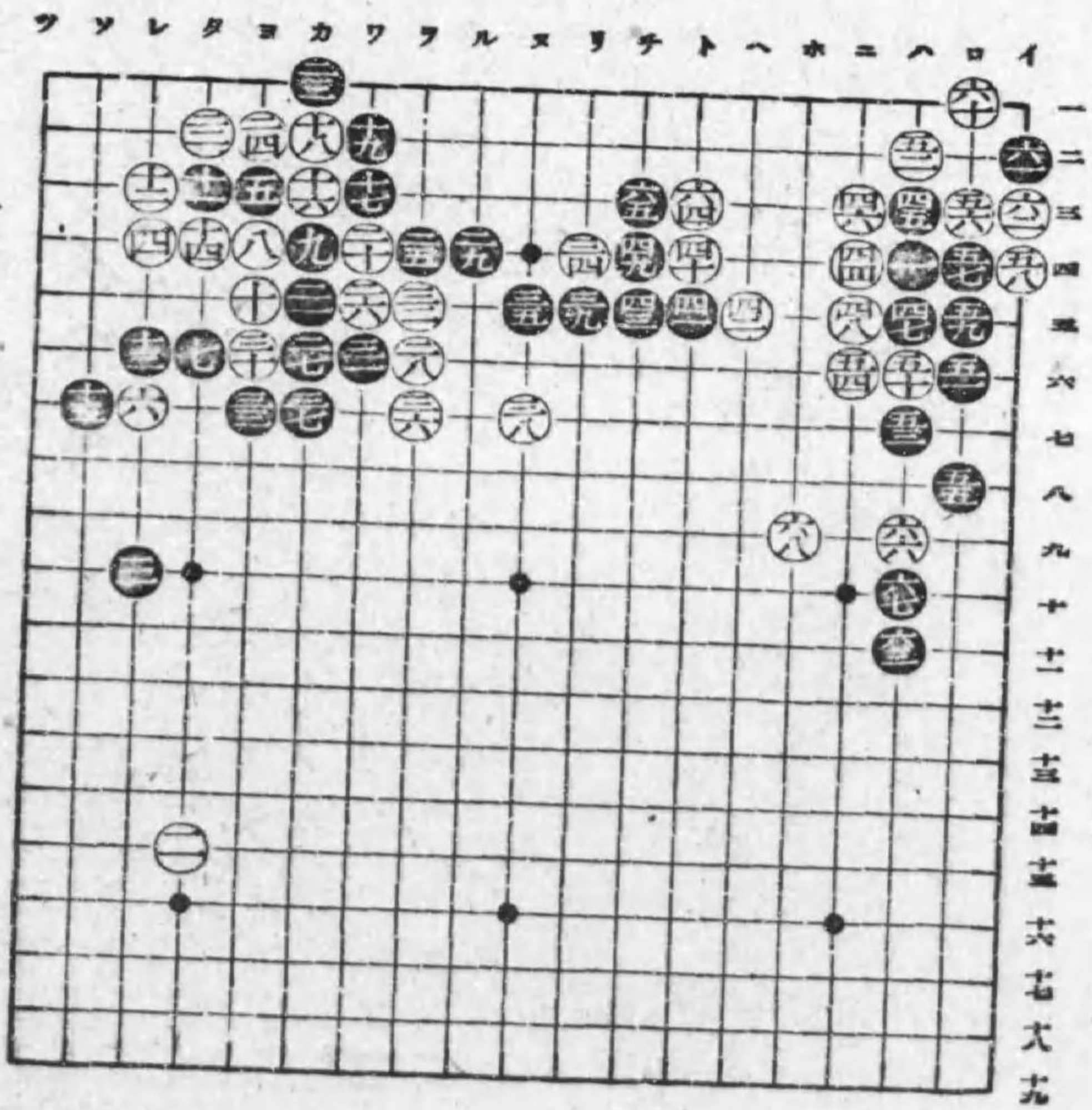
勝名人 中村道碩
先 林 朴 入

白八を十三に受けてることも白は悪くはない。
黒十五は、白に「ソの六」と来られ、黒「ソの五」、白「ソの八」のとき、黒「レの五」と粘れば、白に三三と出を止められ、黒は取られるから。

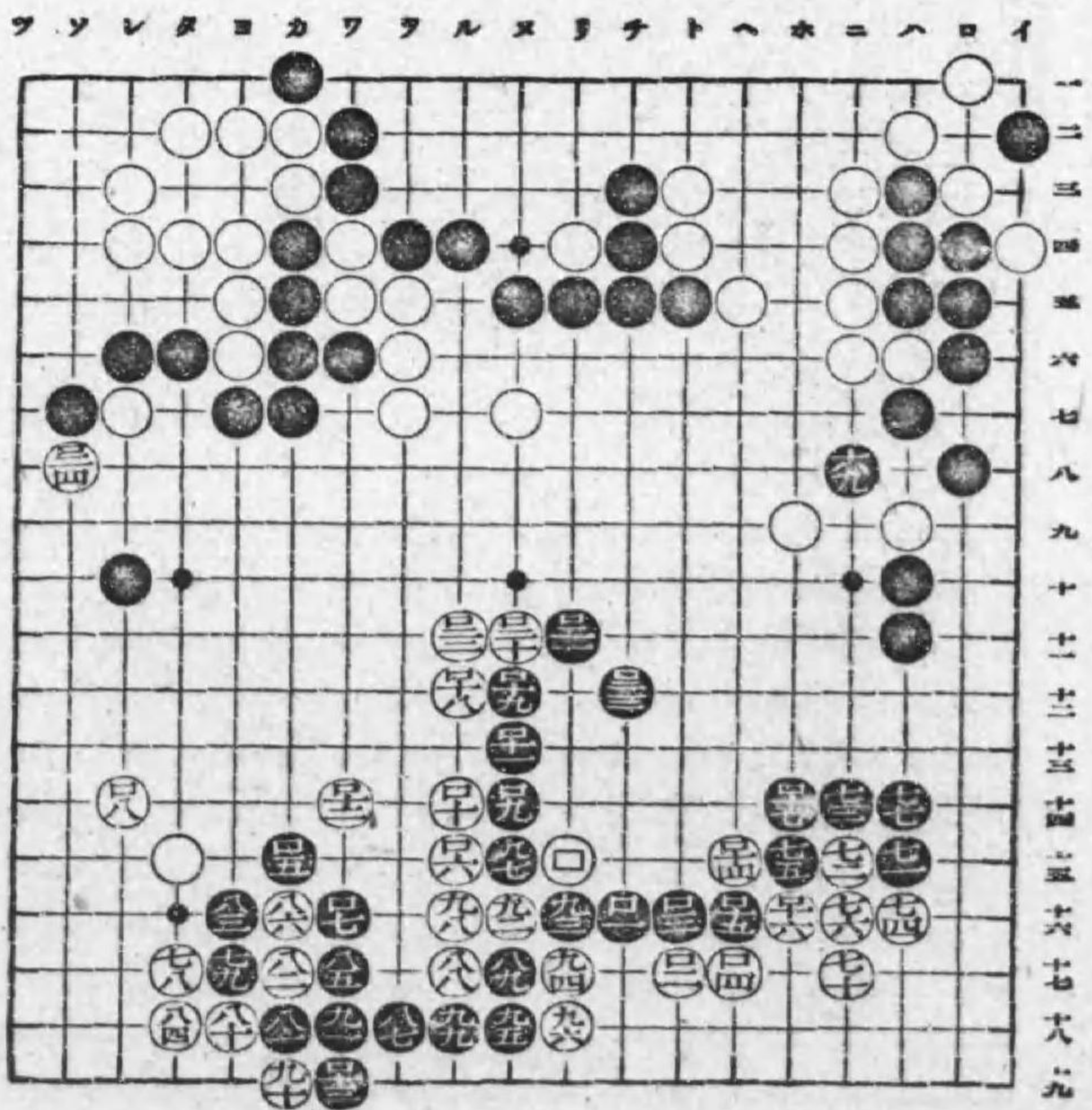
白二十を二二だと、黒三三、白二四、黒「リの三」となる。そのとき白二十は、黒は二五で、二一を棄てる。二十と截つたのは、此處に局面を展開せんとする要領の一手で、延いて四三までとなつた。

白三八を三九だと、黒は「ヌの六」で、白は三六の方が悪くなる。また、白三八で「ホの三」だと、黒は、三八で白の二八と三六の利き目をその一手で消す。

白四四を「ホの四」だと、黒は四九。四四と非常手段を取つたのは、白は四九に粘りたいため。
黒六三を六四だと、白は六六。



黒六九は白に「ニの九」に粘がせ、「ロの九」と受けてるると、その白の三子が重くして、黒によいといふ意。
白七二、七四は、黒に七七と粘がせ、「ハの十一」の黒と七七の間に狭い地を作らせやうといふ、即ち、これまた黒の固い方へ凝集させる意。その意味でなくば七二、七四は、多くは白が悪い。
七九と黒の行つた意は、白八十を八三、黒八二、白八四、黒八六と運ぶ、今日基礎的に行はれる意と違はない。
白の八十と應じて、八二と截つたのは、八二の一子が征に取られないからである。
白八八は、黒に百七と押させ白は百五で、黒の八三以下二子を確實に取らうといふ善い要領。
白九十、黒九一の交換は、八二、八六を棄てる準備。
白の百二四で黒の投げたのは、百二四に對し黒「レの八」、白「レの九」、黒「タの八」は、白は「ソの十」と得をして尙ほ白には「ソの六」と截る得で黒の眼形を取ることもある。などで、地に於て黒が及ばない。



勝名人 中村道碩
先林 朴入

黒二九は、白に三六に來られては九を先頭とする一團の黒が治るまでの不利は多大だから。白二六で三六だと黒は一八、三六、三七となつて見ると、白「ルの七」、黒「ヌの五」、白「リの七」と白に攻められ、黒は危く十九の方へ連絡を圖らなければならぬ。されば黒二九は三六が善い。

黒六一で「レの十八」、白「ソの十八」、黒「タの十八」、白「ツの十七」、黒「ソの十九」と、假りに黒が取りに行くと、白「ソの十二」、黒「レの十三」、白「ソの十一」と白に得をせられて、黒「レの十二」、白「六二」となつて、黒は六十以下の一團の白を取るには劫手段を要し、劫立てに白より「ヌの六」から攻められることになつて黒が悪い。

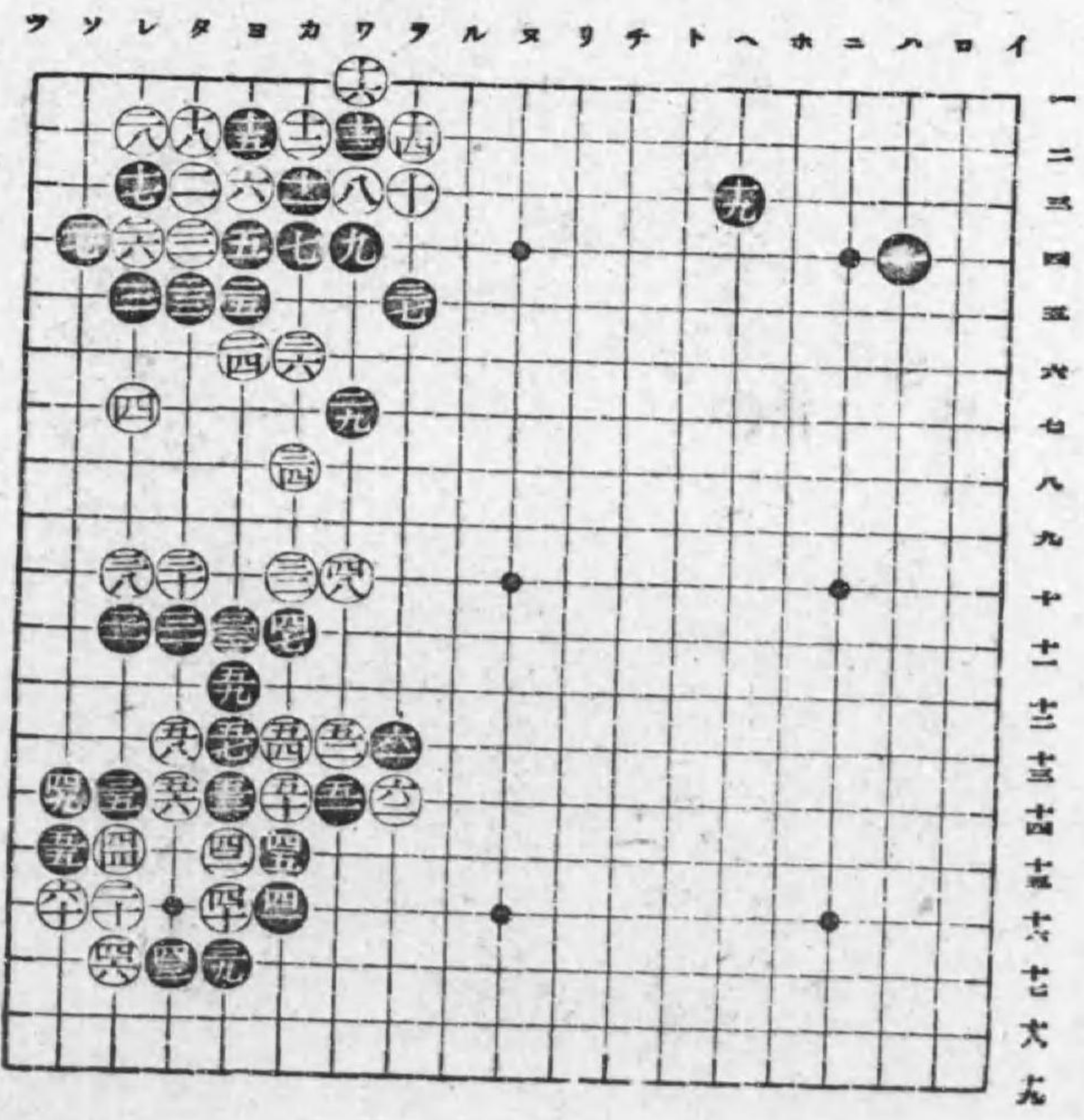
八三までは、一手も忽せに出來ない應接で、就中白の八十は最も出色の一手。黒八一は、白に八三に來られては堪らないから。

黒九五は、其處へ白に來られ、黒「レの十三」、白「ソの十一」となつては、黒は全く眼形を失ふから。

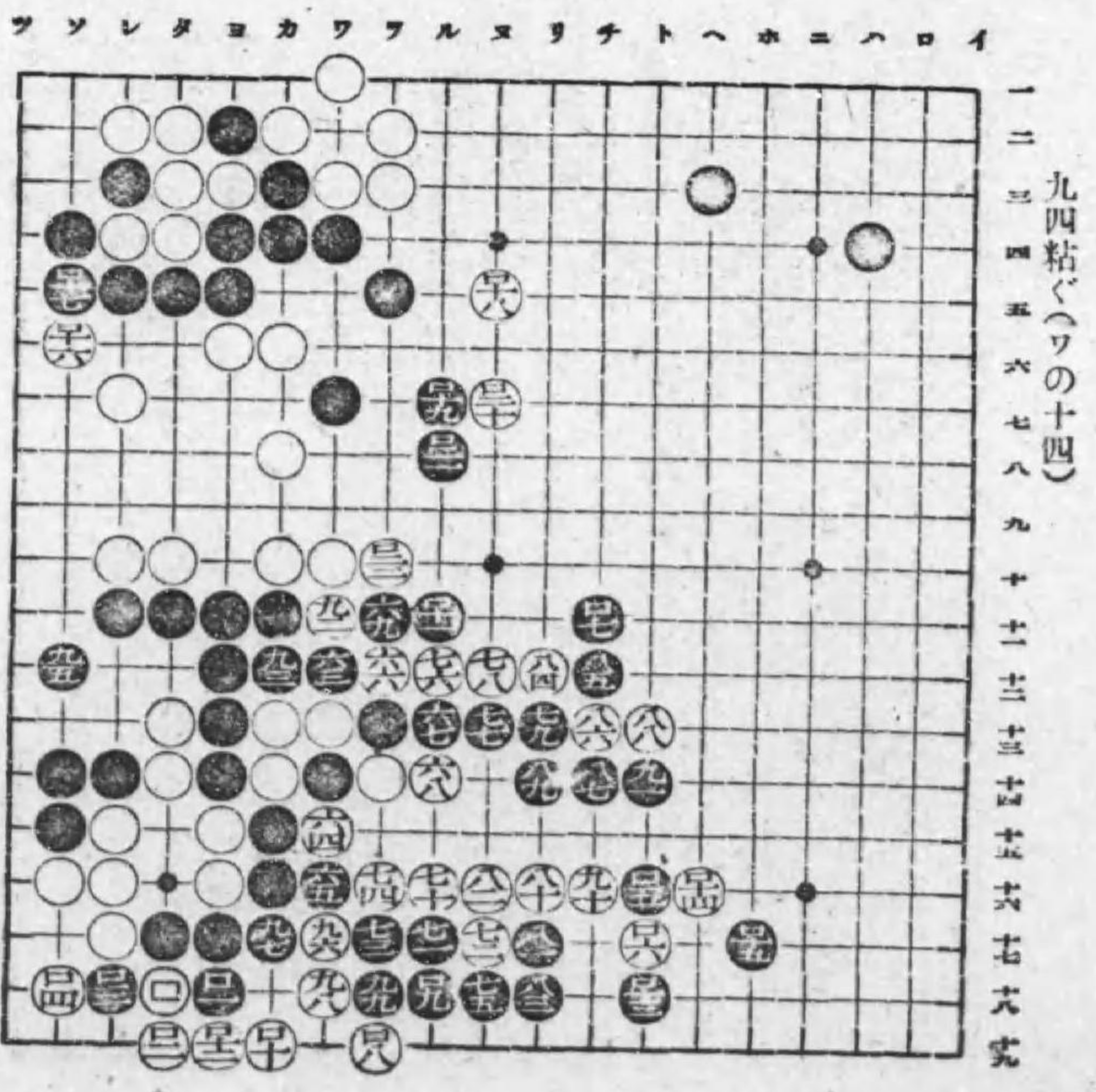
白に百十に來られることを取敢へず防いだ黒百三と百四との交換は、白を活かして黒は甚だ辛い。だとして百三で「ツの十九」、白「レの十三」、黒「ソの十三」、白「ソの十」、黒百四、白百三、黒「ソの十九」、白「ソの十六」のとき、黒「ソの十七」は、白は「ツの十八」。それで、その黒「ソの十七」を「ツの十八」は、白は「ソの十一」で、黒が攻合敗け。

黒百十一で「カの十八」は、白は「チの十七」で次には百十二で、それを防いで黒「ワの十九」なら、白「ルの十」となつて、黒は九五の方の活きと白に「への十三」と出られる方とは急を要して、黒は歴然たる敗勢。

白百二となつて黒の投げたのは、八四以下を逃げられるか、百二の出を止められるかと防げないため。



一より六二まで



九四粘ぐ(ワの十四)

六三より百二まで

名人 中村道碩
先 林 朴 入

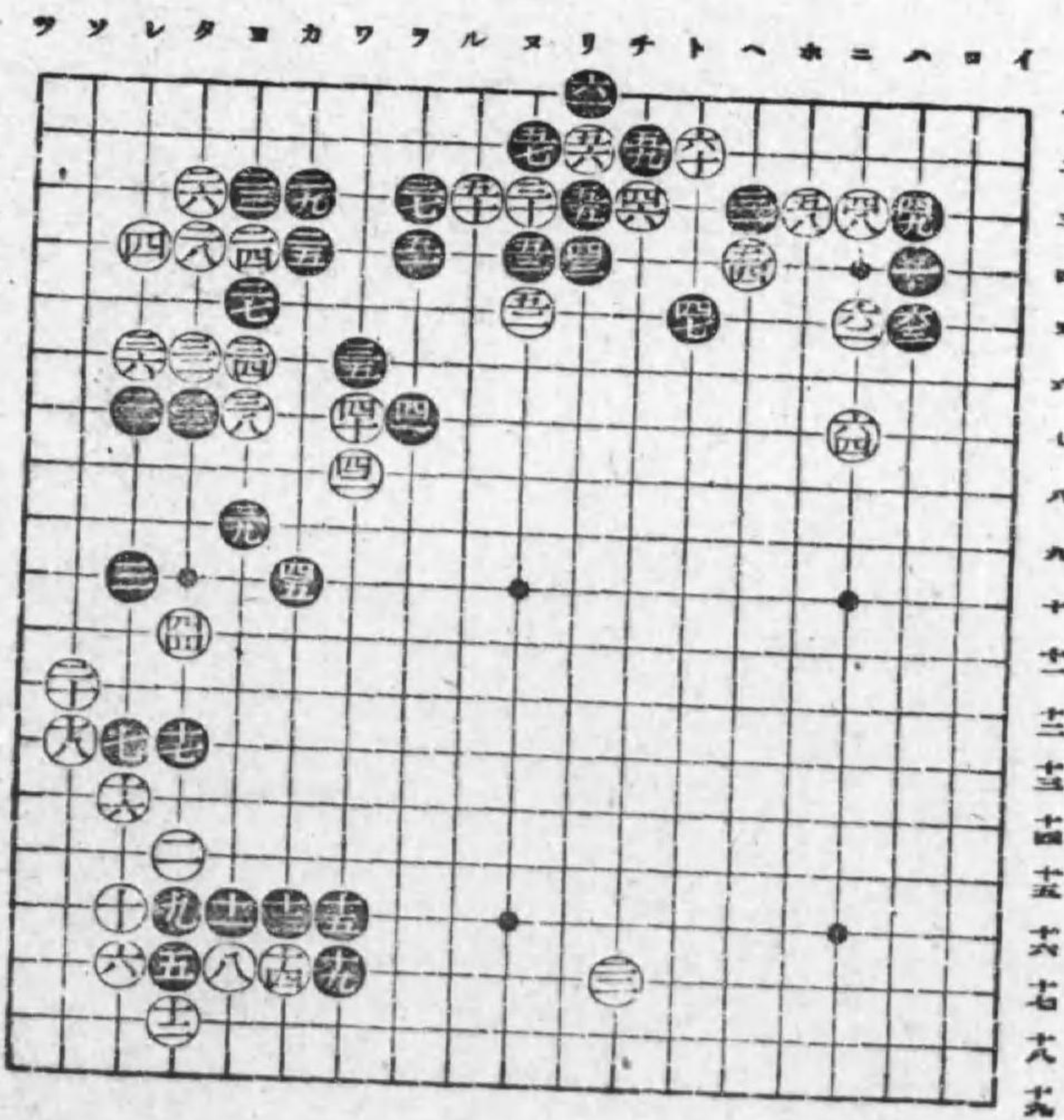
黒三は、白にその方へ来られない爲だが、悪い手の部である。三は今日では「レの五」。

白十八は、黒「ソの十四」、白「ソの十五」、黒「タの十四」と極められる防ぎに、黒に二十と受けさせ白は十九と行かうといふ意。それで黒もかう十九だが、二十と白に出られては、實に實質が大きいのみならず、十七、七及び三の三千が浮いて悪い。黒十九は二十。

白三十を五八だと、黒は五五。

白四十を四六だと、黒は四二で中央に勢力を張る。

白五八で「ルの二」、黒五九、白「ヌの一」は、黒は「チの四」。これは白が悪い。



一より六四まで

白六八で六九だと、黒六八、白七十、黒八七となつて黒に地が出来、白は悪いと見て六八と應じた。
黒九一は百六、そして假りに白九一、黒百二十、白「ハの十一」となつて、黒は「リの八」が善い。白に九四と来させたのは、面白くない。

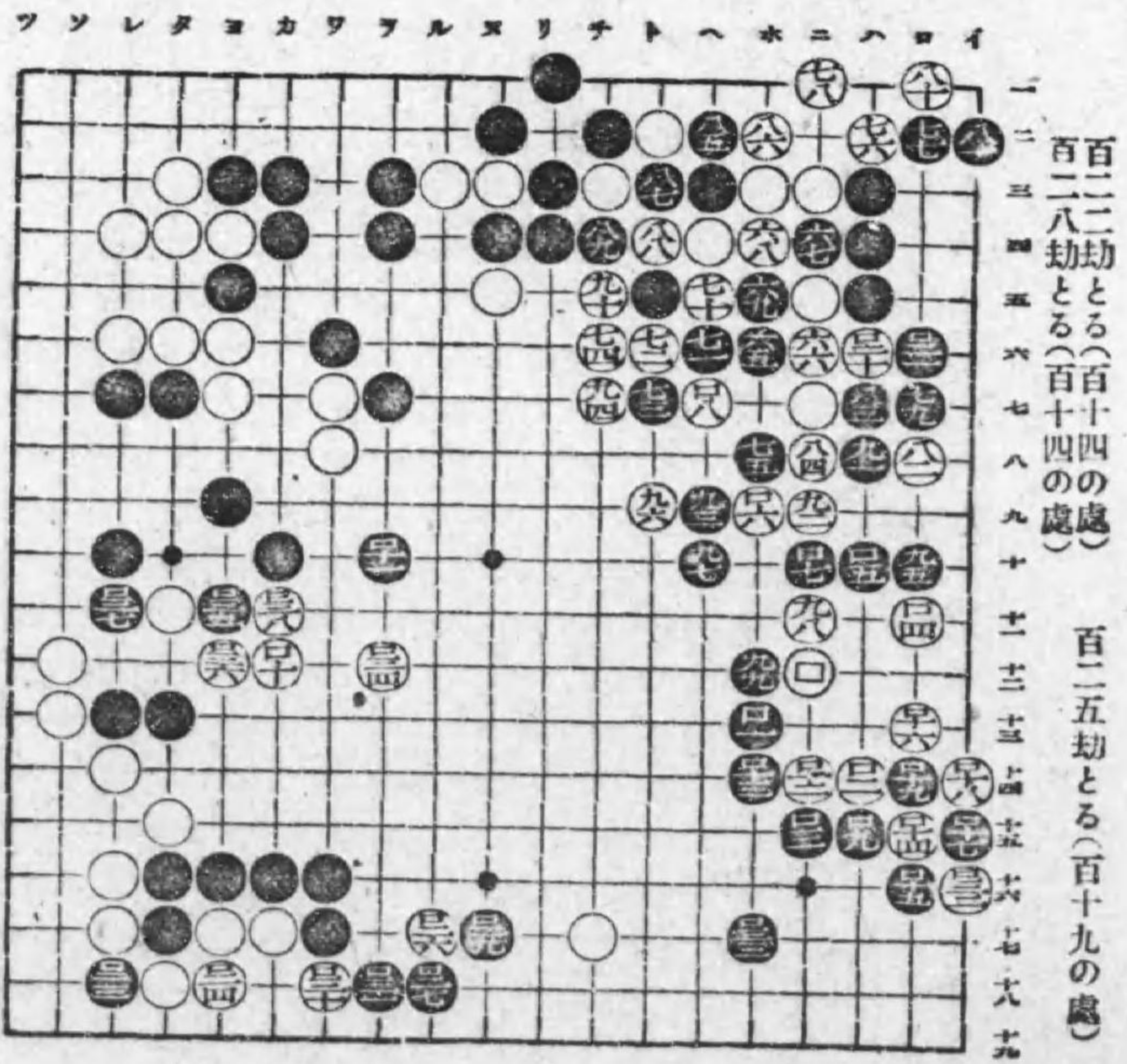
白九六で九八に飛んでもとも悪くない。

白百四で百六、黒「への八」、そして白百四、黒百五、

白「ホの十一」、黒「への十一」、白百九と行くと、黒に「リの八」と攻められることが避る。

白百三十で百三二だと、黒「ソの十八」、白百三十、黒「カの十九」で、白が悪い。

此碁は百三八までとなつてゐるが、昔の碁の意しには、黒の勝碁でも白の手止りのがある。白百三八の次には、黒は「レの十二」、そして白「ヨの十」は、黒は「カの九」となる。而して形勢を按ずるに、白「ロの十七」は、黒は「リの十五」で善し。その白「ロの十七」を假りに「チの十五」なら、黒は「ロの十七」は、黒が善し。尙ほ黒には、黒「ワの十九」、白「ソの十八」となることより推して、黒の勝と判断する。



六五より百三八まで

勝名人 中村道碩
先林 朴入

白四より十二までとなることは、今日でも基礎的に行はれる定石。

白二六を「ハの七」だと、黒「ニの六」、白「ホの六」、そして黒に「ホの七」と截られて、結果は白が悪い。

黒三五で「レの十四」、白「ヨの十六」、黒「カの十六」、白三五、黒「タの十七」だと、白は「レの十五」。

黒四五は四六、白「ホの十八」、黒四五と行く意味があるので、四五は悪い。

白五八を五九だと、黒は七五。のとき、白七六は、黒は「タの九」。

黒五九は、黒七五、白七六と交換して後が善し。

黒六九で「ルの二」、白「ワの三」、黒「リの二」、白七十、黒「ヌの一」、白七一、黒「カの九」も、黒は悪くはない。

白八四と飛んだのは、黒「タの九」、白百二二、黒百四と黒が来れば、白百二十、黒「ヨの八」、白百九と、白は應じて、「タの七」と黒が劫に来るなら来いといふ意。

黒八九を九十だと、白は「チの八」。これが白は巧い。

黒九七を百六、白九七、黒百七は、白は百一。のとき

黒「ルの八」は、白は百十八で、黒が百八に劫に来たら、

白は「ルの九」と取つて、黒の何處の劫立てにも應ぜず、

白は百十九。

黒百九で百十四だと、白百十九、黒百十八、白「ルの八」、黒百二一となる外はない。さすが、黒は外部が厚

くして、かう百二八となるより黒は善い。

白百三十は、黒百三十、白百三二、黒「イの十六」と

黒に侵せられる時機に達したからである。

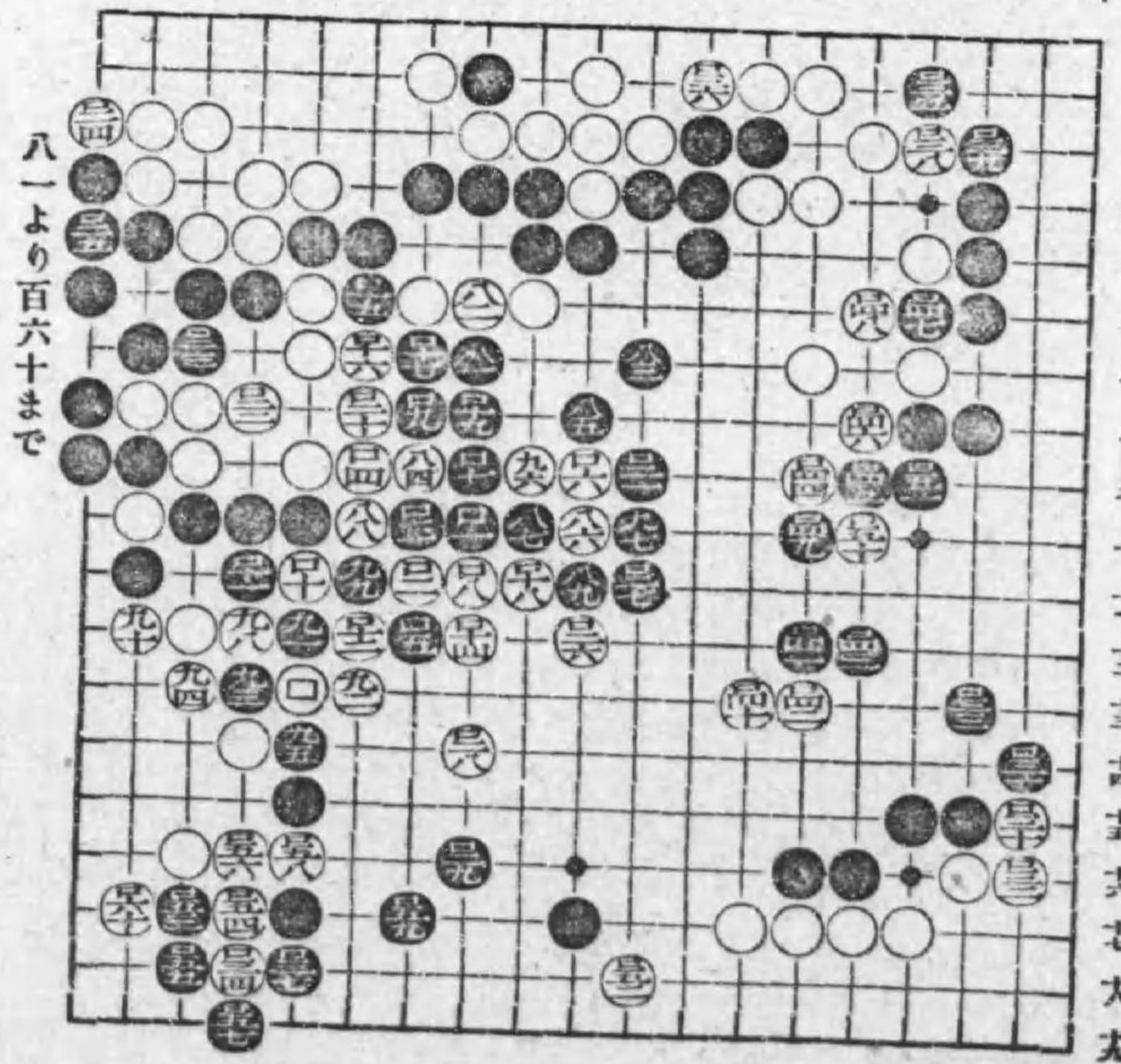
黒百五三を「リの十七」、白「ヌの十八」、黒「ルの十八」、

白「チの十七」、そして黒は百五五の方が、かう百五八、

百五九となるより善く、従つて細碁の終局であらう。

百五九となるより善く、従つて細碁の終局であらう。

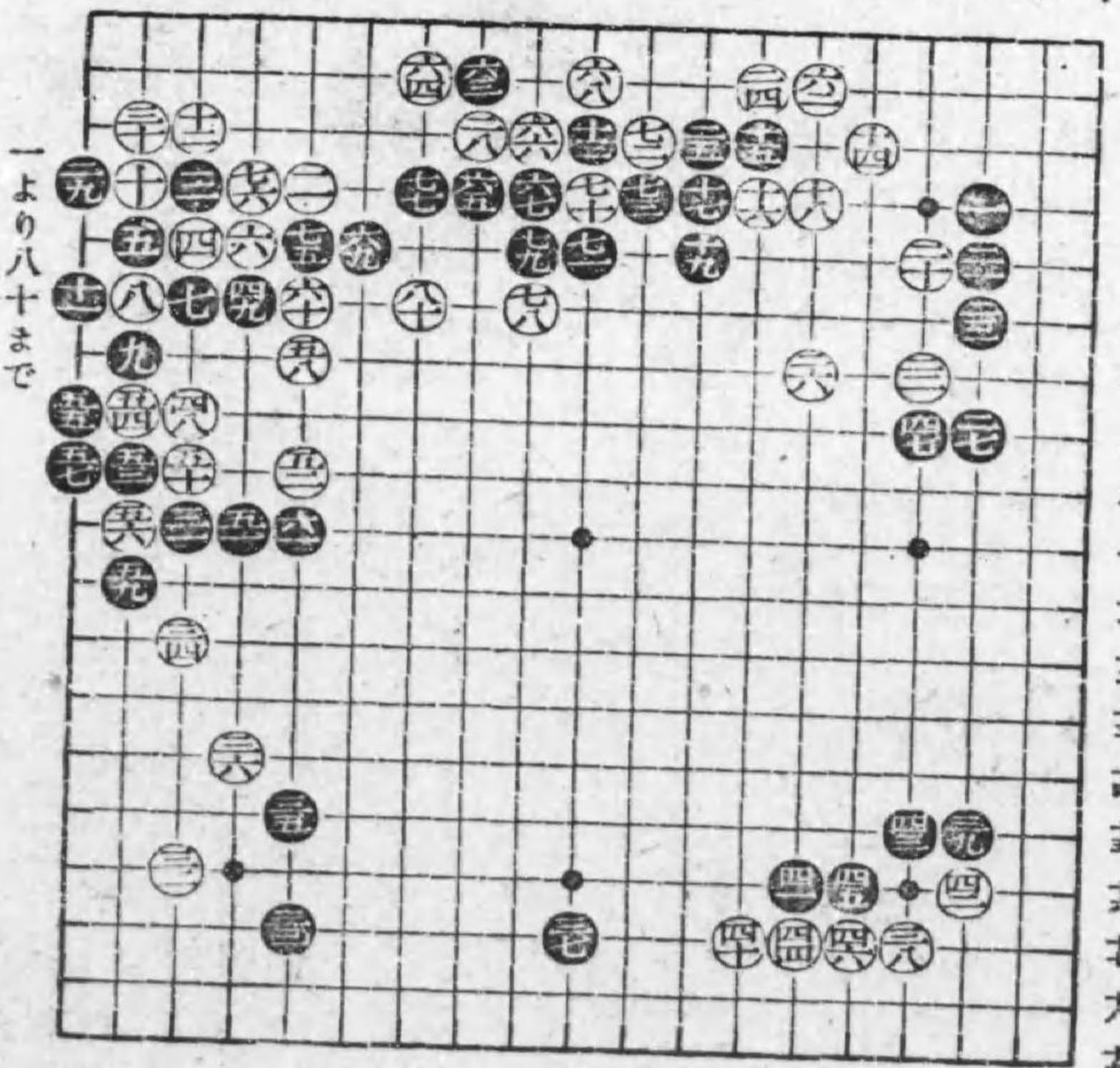
アツレタヨカワフルヌリナトヘホニハロイ



百十三粘ぐ(百十の處)

八一より百六十まで

アツレタヨカワフルヌリナトヘホニハロイ



七四粘ぐ(十三の處)

一より八十まで

勝名人 中村道碩
先林 朴入

かう二、三、四となつてゐる如き場合には、白に「レの九」と三を攻められる故に、黒五は善いのである。

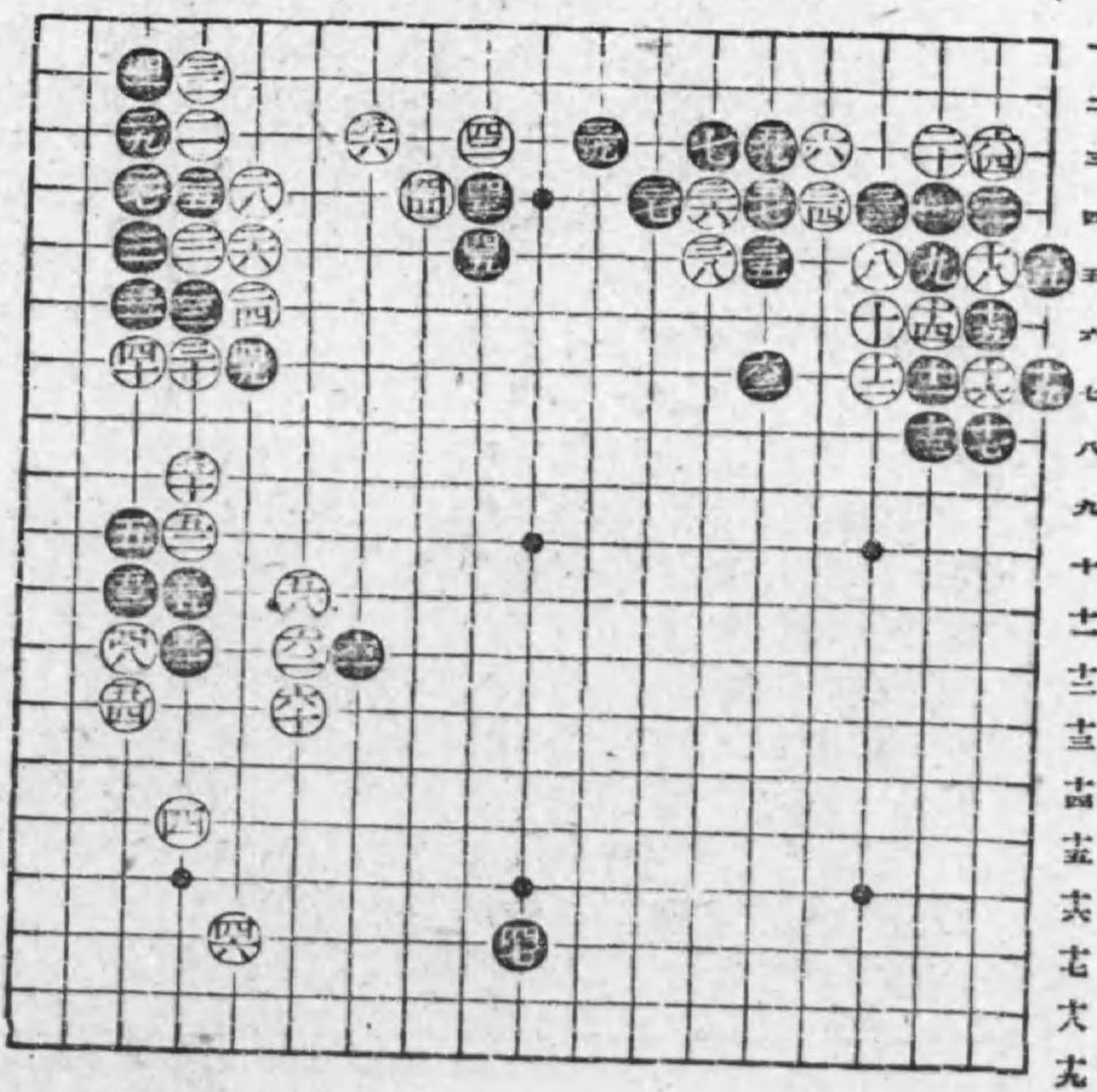
白三六は、黒三七で五七、白五九のとき、黒が三七と征にかけても白は取れないからである。

黒四三で五四だと、五の備にもなり、また、次には黒は五七。黒四七に於ても五四が善い。されば、白四六は四八に。

白五六は、黒が五七に來れば、五八に行くことを考へてゐる。といふことは黒五九で六二、白六一、黒六十は白は五九と被つて黒が大いに悪いからである。

黒六五で「ホの二」、白「ニの二」、黒「への二」は、白「イの三」、黒六五、白「ロの二」の活が、白に遺る。

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



白六六で六七だと、黒は七三に應ずる外はない。その黒七三を手抜きは、白「ツの五」、黒「ソの四」、白「ッの六」、黒「ツの二」、白「ソの二」で黒は取られる。その黒「ッの二」を「ソの五」、白「ソの三」、黒「ソの二」は、白「レの二」で、これまた、黒が取られる。

白八十までとなるのを嫌ひ黒七七を八十だと、白百四一、黒「への二」、白「ロの二」で、白は活きる。そ、黒「への二」は、白に「チの二」と連絡されるからである。

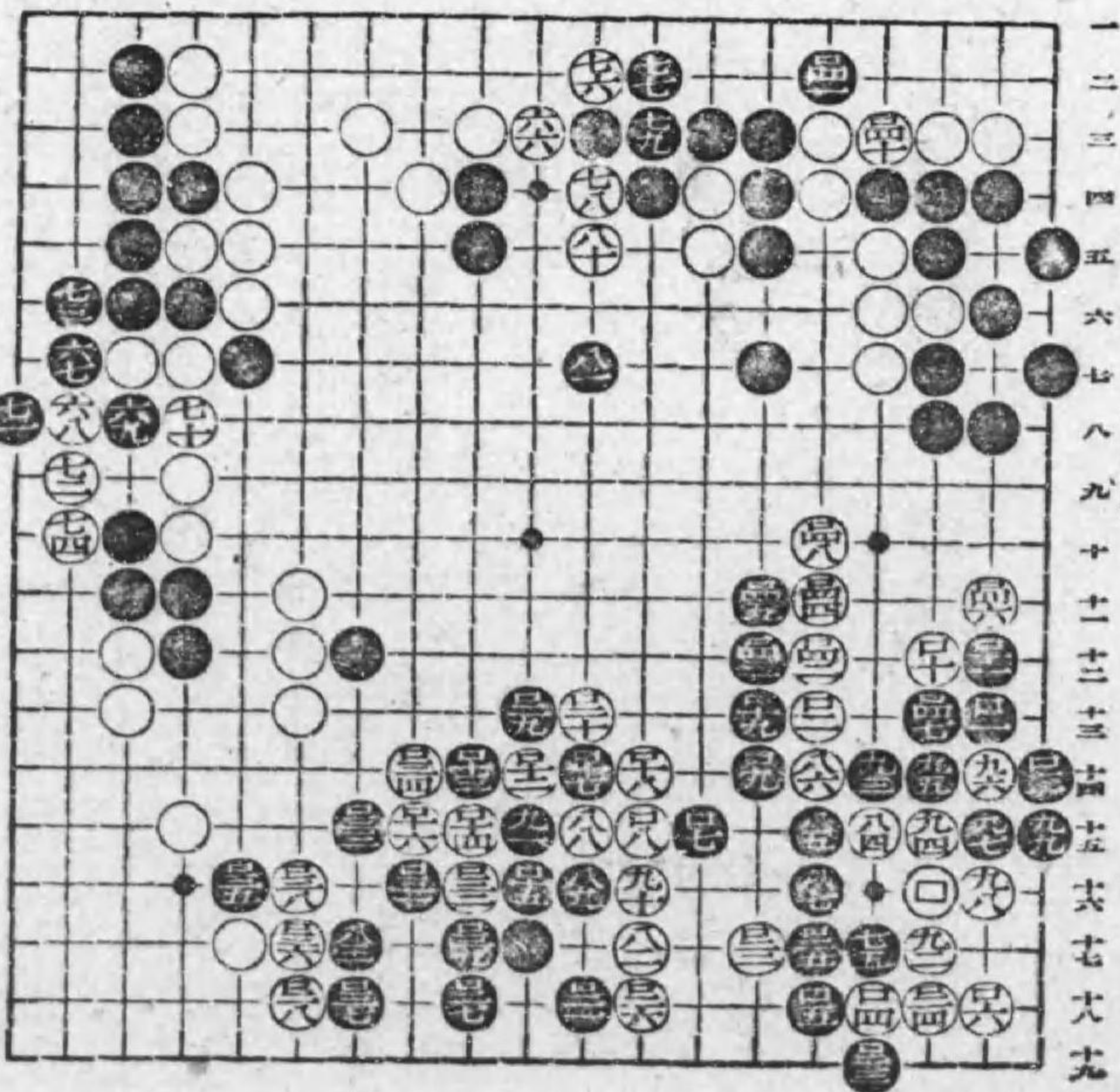
白百で百三だと、黒百、白「イの十六」、黒九七に打込み、白九九に提り、黒「ニの十六」、白九七に粘ぎとなつて、黒百一、白百九、そして黒は「ロの十七」。これが悪いので白は百。

黒百十三は、百十四がよい。

黒百十九を百一九だと、白は百十九で黒が悪い。

白百四十で「ソの十六」は、黒に「ヌの十九」と活きられる。白がさう行かないのは、黒「イの十七」、白「イの十六」、黒「イの十八」、白「ハの十九」、黒「イの十九」、白「ホの十九」のとき、黒「への十八」は、白は「チの十九」で、「への十九」の渡りと「ヌの十九」と黒を取りに行くことゝを失ふ。

ツソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



六六より百四八まで

名人 中村道碩
先林 朴入

十五までとなることは、黒の五が、白の二以下の堅い方へ寄り過ぎて黒が面白くないと聞かれよ。それで、今日では五は「レの十一」。

黒二七で「レの二」だと、白は二七、そして黒「タの三」、白「ソの四」、黒二四に粘ぎ、白「ソの六」、黒「ヨの四」、白「タの五」、黒「カの三」となる外はない。黒二七を「レの二」に、白「タの三」と粘ぐことは、黒二七となつて、白が大いに悪い。

黒五九を六五だと、白に「リ」の八」と攻められて来る。白六四を「ハの十三」だと、黒は「ヨの十三」。

黒六七は、次に七五、白七十、黒七三といふ意味をも含む。その白七十を「ニの七」は、黒は「ホの六」。

白七二を七三だと、黒「への六」、白「トの六」、黒「トの五」、白「ホの六」、の時、黒は「ニの十六」。に、白「ニの十七」は黒は「への六」と劫を取り、白が何處へ來ても黒は七二。

黒七七を「ロの十」だと、白は七九。

黒八五で假りに九八だと、白は百十五が善い。

白八六で百十二だと、黒に八六と取られて、取つた方の黒は堅くなり、白が面白くない。黒が八五と截つたことは、其處に期する所があり、白が八六と出たことにも期する所がある。

黒九九で「ロの十」、白「イの十」となれば、黒百三のとき、白は百四を百十一の所へは容易に粘けない。

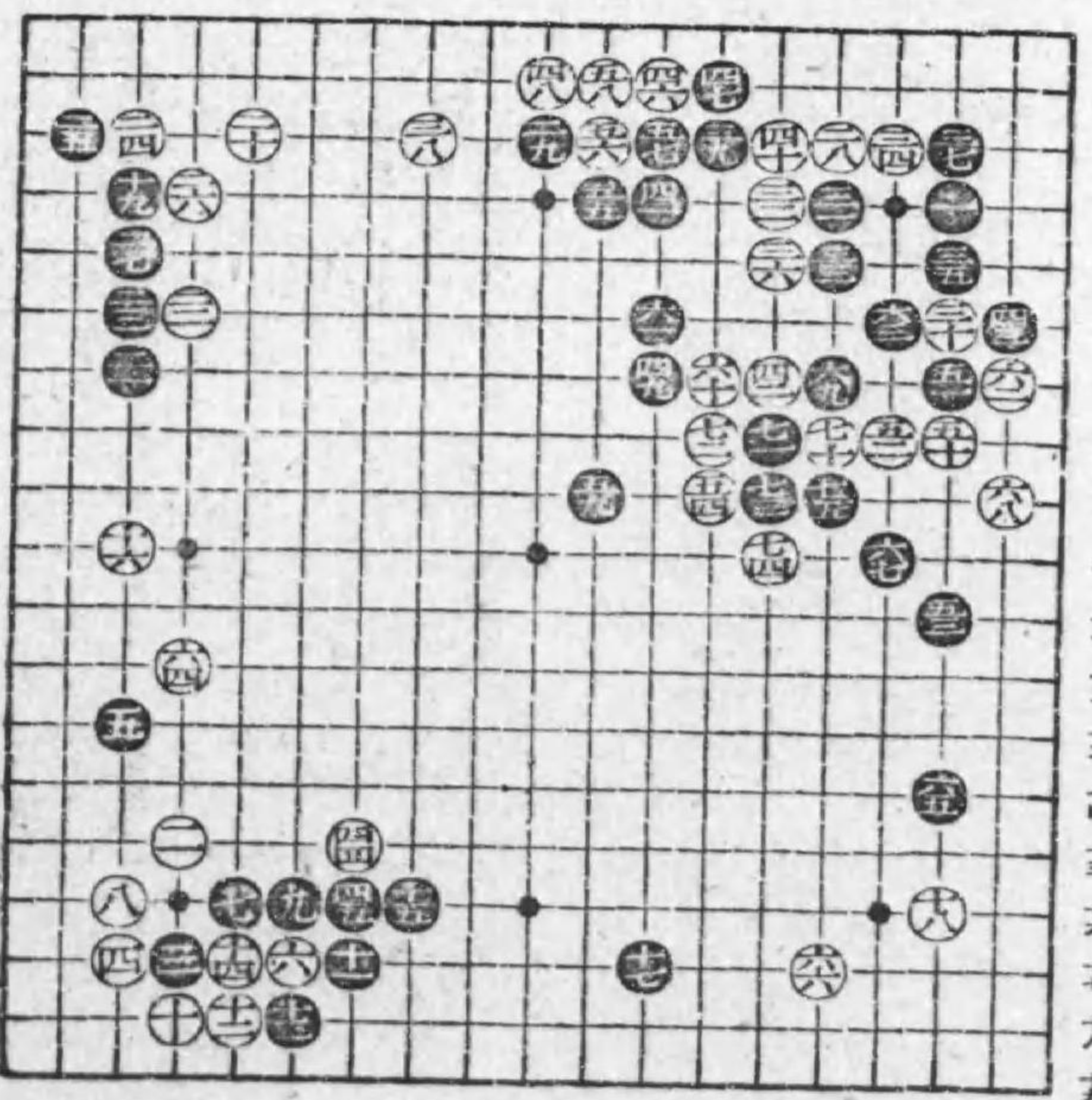
白百六を「イの三」だと、黒は「ニの一」。

百十一となつては、黒の形勢がよい。黒百十三で百十九と截ると、白は九九に粘ぐ。すると、百十の方の白の助けとなり、また白に百二十と出られても黒のため悪い。

黒百十九を百二七、白百十九だと、白に「リ」の十二の截りと、百二一と出て行く手段とが出来る。

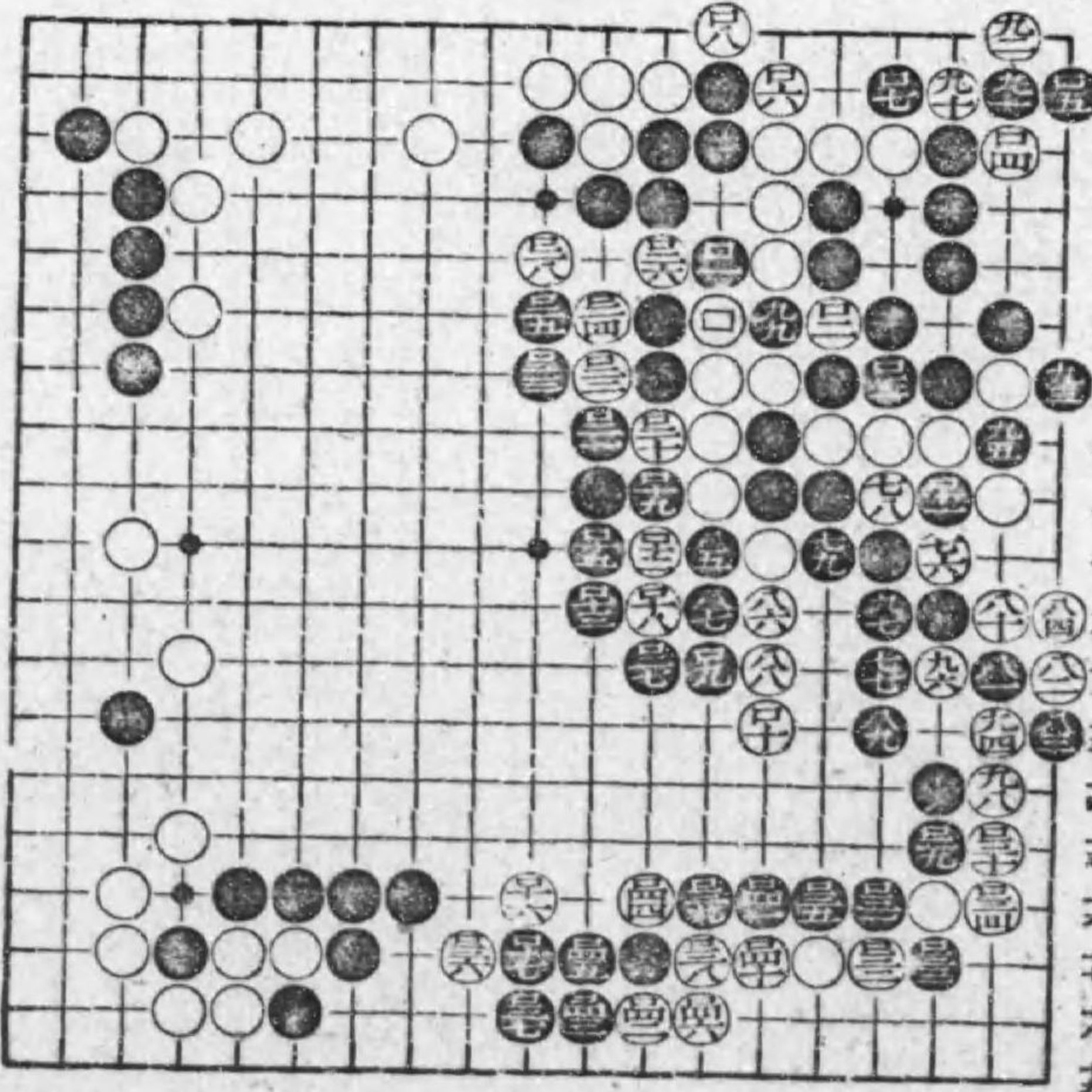
本局もまた、百四六で白の手止りになつてゐるが、黒は次に「カ」の十三位に行くことによつて、黒の勝と判定する。

イロハニホヘトチセリヌルヲカヨレツ



一より七五まで

イロハニホヘトチセリヌルヲカヨレツ

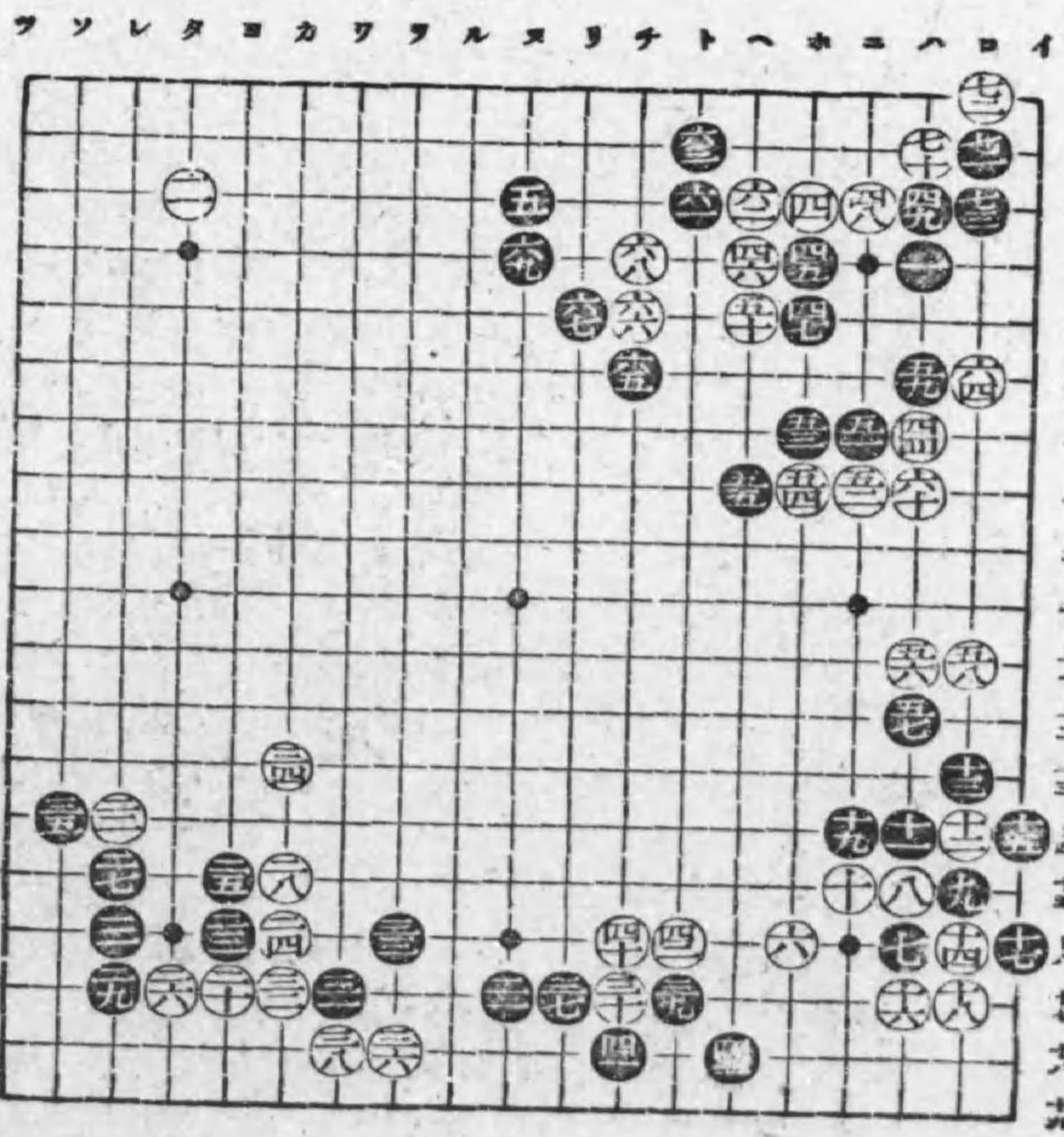


七六より百四六まで

勝名人 中村道碩
先林 朴入

黒五を「リの三」だと、白に「ルの三」と來られて面白くないといふので、此時代には黒は五と行つたが、特別の場合の外、今日かう五と中央を占めることの、殆ど廢されたのは、白六で假りに「アの三」、黒六一、白四四、黒「ニの五」、白「ハの十」、黒四六となつたとすれば、五と白の「アの三」との交換が、黒のために面白くないといふこと等、等に因る。

黒七より十九までは、今日行はれる基礎的の定石(但し、十七、十八の交換なしで)。その交換の黒にとつて無い方が善いといふのは、黒十七で十八のとき白十七なら、黒は「ニの十七」の手段を失ふからである。黒十九は白に「ニの十三」と來られると、自己が薄くなり、白の形容が善くなる故。白十八は「ニの十六」が善い。六四の所は、白黒共に必争の要點。



白七四が、この白を生きる妙着といつてよい。即ち黒八一で「への二」、白八八、黒八二、白「ホの一」、黒八三と、黒が白を取りに來れば、白は「リの四」。

黒八七でそれ以上きびしい劫立てを擇ばないのは、白に「リの四」、「リの三」と行く劫立てが多いから。

黒九五は、白に「ヌの六」と來られると、黒の中央の厚味が消え、八五以下の黒は眼形全からぬため。と、尙ほ黒七五以下三子の用心にもなつた。

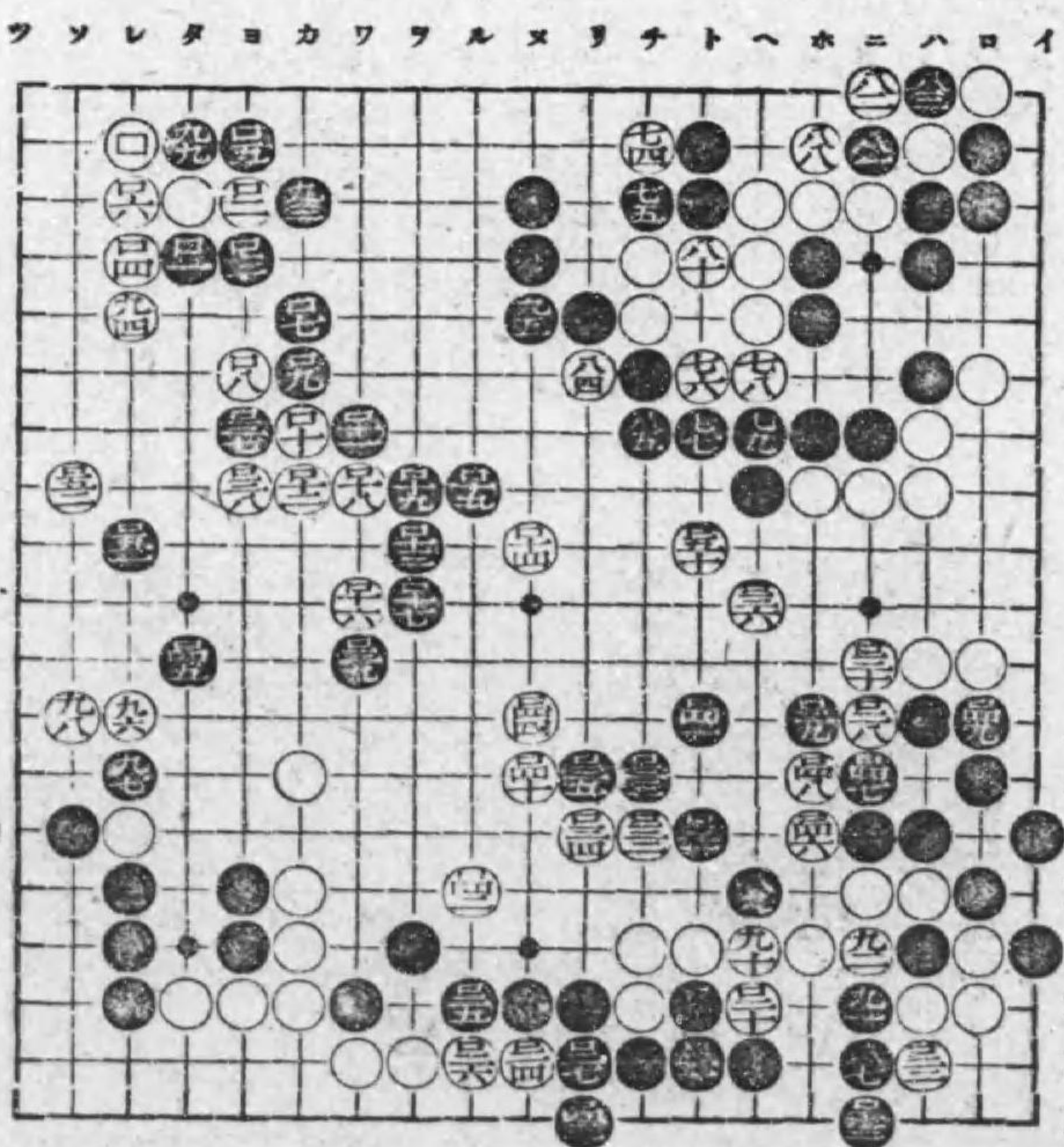
黒九九、百一と、白を小さくして「ヌの三」と九三との間を整へる要領は、現在も行はれる基礎的手所。

白百二を百四だと、黒百二、白百六となつて、白が悪く、尙ほ黒は次に百八の所。

白百三六と好點に出たのは、百四六と行く手があつて百三四以下は黒に攻められないから。

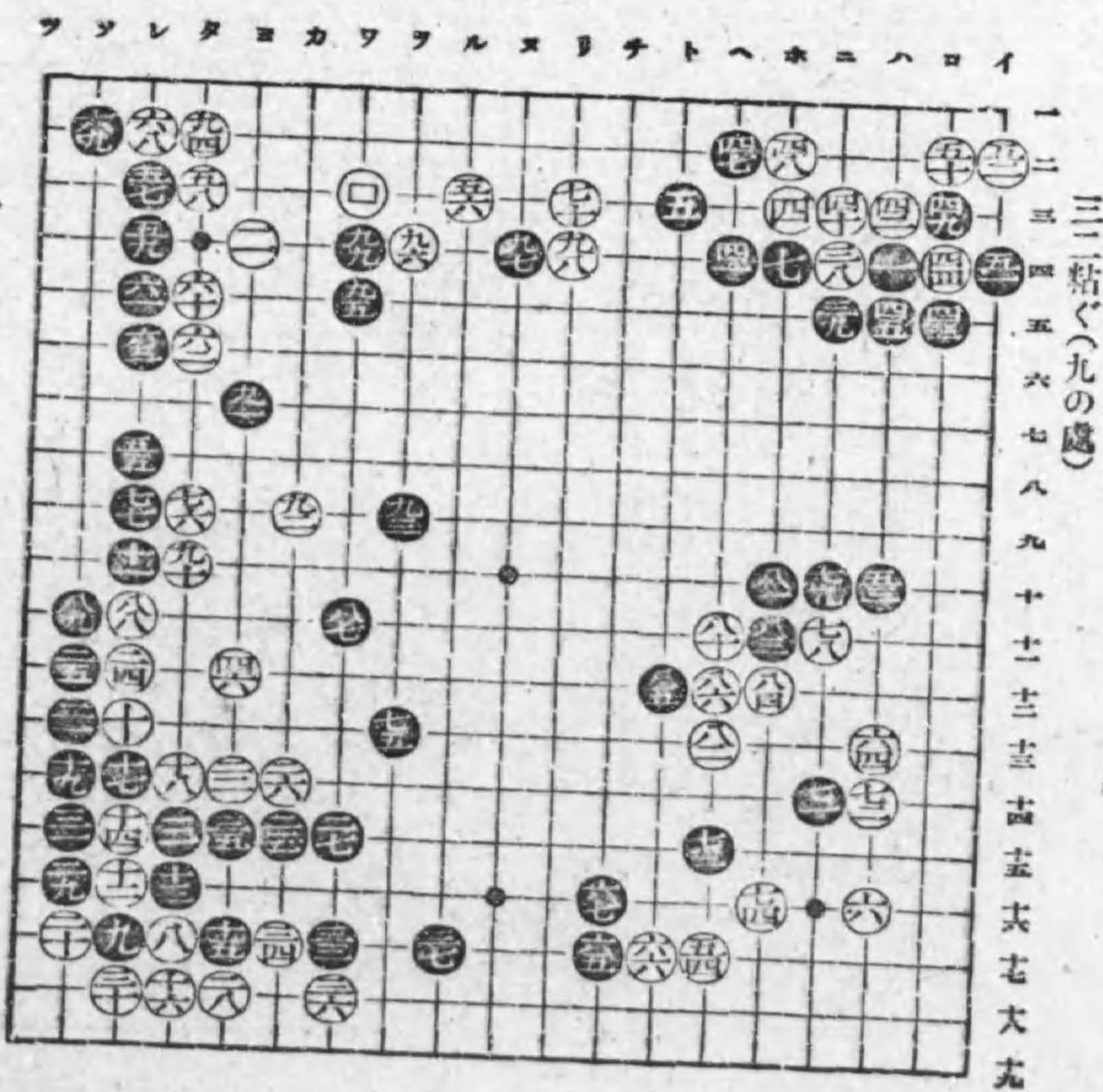
黒百四五で百四七に備へてゐると、白は「カの十」で、黒の敗。即ち黒百四五は大勢上已むを得ない挑戦。

黒百四七で百四八は、白百四七、黒「ホの十五」、白「ハの十三」、黒「への十四」、白「アの十一」で、黒が活きられない。



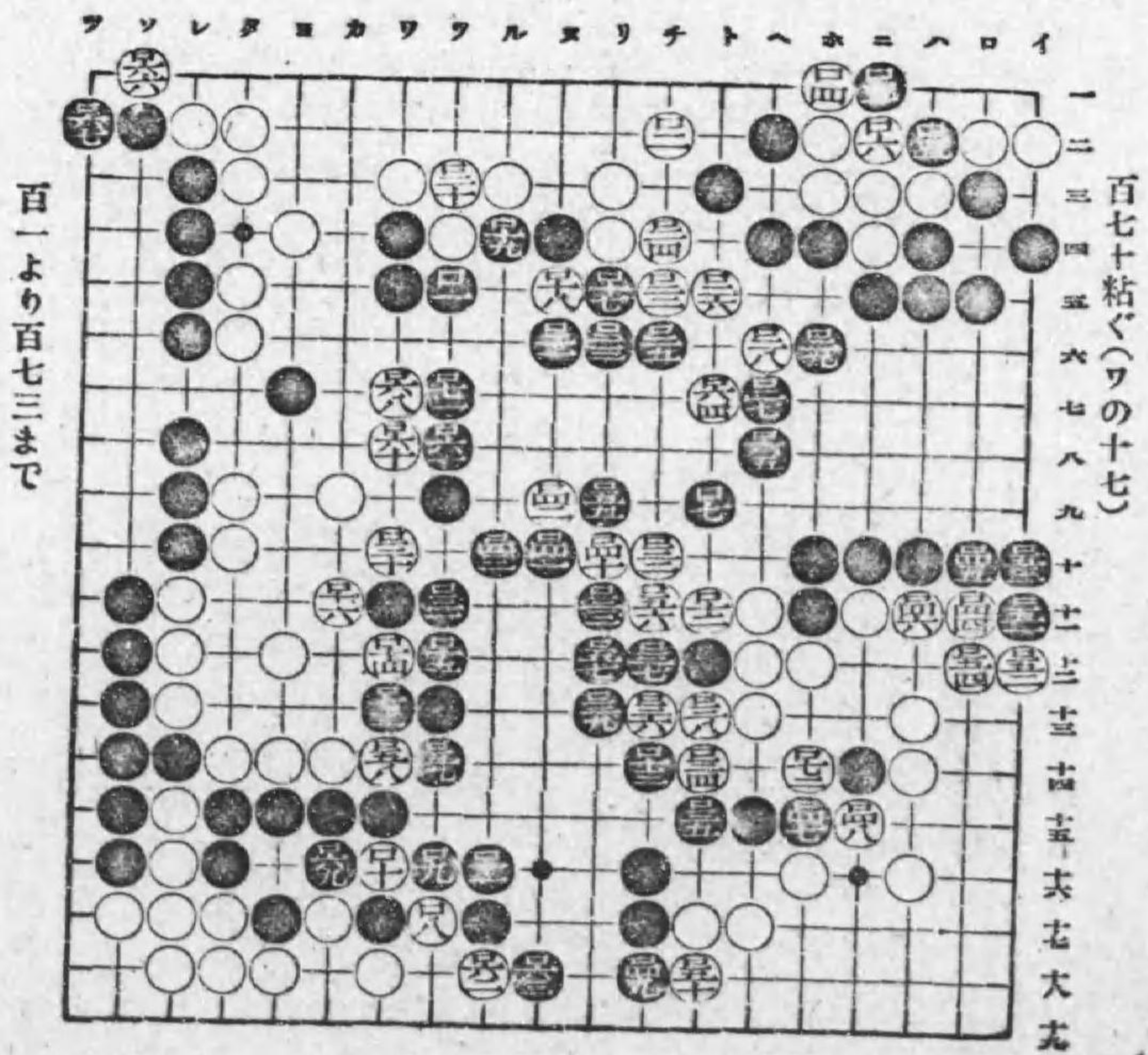
名人 中村道碩
一目勝 先二世 井上因碩

白三八より四四までは現在基礎的に行はれる定石。
白四六は、黒に其處へ來られては白が堪らないから。
黒五三は「ホの十七」がよい。七五は双方必争の所だが
黒が五三で七五へ行かないのは、四六の方を白に手抜き
されるを恐れ、また白五四で七五へ行かないのは黒に「ホ
の十七」へ來られることを恐れた爲である。
黒五五は、七七と白に來られる備。
黒五七を五九、白五七、黒ソの三三、白五八、黒ソ
の五」となるのは、左邊の黒が甚だ位低くして悪い。そ
れで黒が五七と入つたことは、白五六及び二とある場合、
今日も基礎的に行はれる。
白七十は、黒に「カの三」と打込まれる備。
白七八を「チの六」だと、次に白は「ホの五」の截りを見
て、「への七」と黒地削減の好着が伴ふ。



白百十二は、百六四邊までにも侵入する意味を含み、
また遙に、黒が「カの十」と九二以下の白を攻めて來る備
をも、兼ねてると看る。だとすれば、百十二には無限の
味がある。

黒百四九は百五一がよい。
白百五十で百五三、黒「イの九」、白百五一のとき、黒
手抜きは、白百五六、黒百五七、白「ロの九」、黒「イの
八」、白「ハの九」となつて、白は「ロの七」と「ホの九」。以
上を思ふに、實際は黒百四九で直ちに百五一と行つたの
であらう。古碁保存の譜には、屢寫し損ひがある。
白百六四で「チの九」、黒「リの八」、そして白は「への
九」と行く候せもある。
黒百七一は、「ルの十九」がよい。
白百七十二で「ヌの十九」、黒「リの十九」、白「ルの十九」。
のとき、黒百七十二に白百七三だと、白には恐らく敗はあ
るまい。



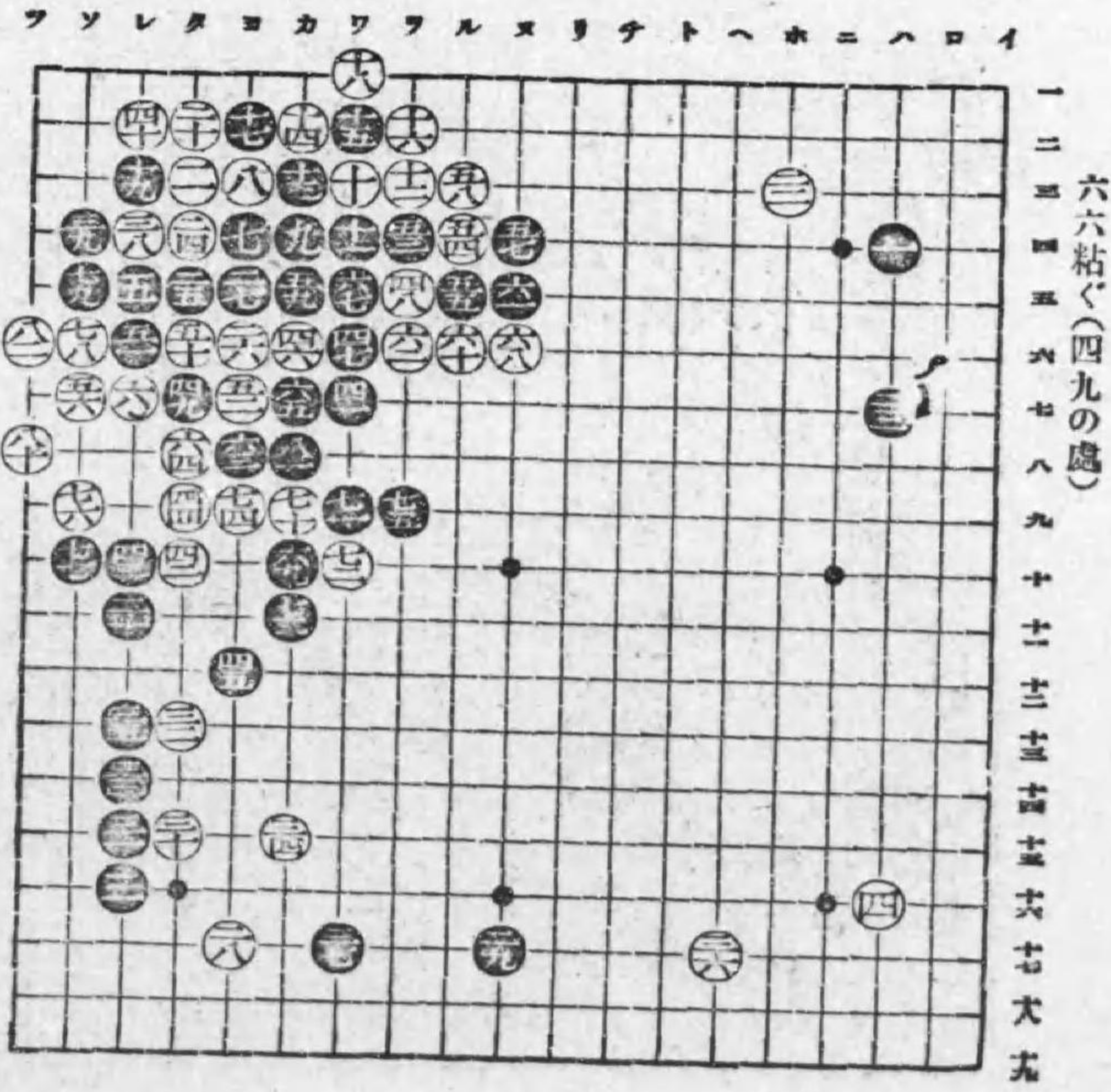
名人 中村道碩
先 安井算哲

黒二三で「ニの五」に受けるがよい。併しこの應手は、この時代には無かつた。

白三二で「タの十四」だと、黒三三、白三二、黒三五となる。それを、かう三五までとなれば白三四は「タの十四」にあるよりも働いてゐる。これ、即ち白三二と飛んだ工夫にある。

黒五九を六一だと、白七九、黒六一、白七八となる。さうなる黒六一を七八は、白六七で、黒が悪い。また黒五九で六一は、白六一、黒六十、白「リの五」となる。そのいづれも、白の五二の頭には影響が無い。五九は、白の五二に影響を與へたのである。

白六十で八一は、黒六一で、黒が大いによい。
白八十で八一だと、黒は「リの六」。そのとき白「リの七」は、黒は「ツの九」。



一より八二まで

白八八で百四二に截ると、黒百四一、白百三四、黒「リ」の八、白百十六、黒百一となつて、更に白九六、黒八八、白百三五となる。黒はさう四子を棄て、轉じて百十九と白を攻める。

黒八九は、百四二に截られる防ぎ。

黒九七は、「カの十五」以下の白の活きる結果が、八六の白の方へ影響すれば、百三四に應じやうといふ意で、先づこの方の白の應答を訊いた。

黒百一は、白の「ツの十」にある一子の活動を殺ぎ、「カの十五」以下の白を大きく取らうといふ意。

白百六を「ソの十七」だと、黒は百四七。

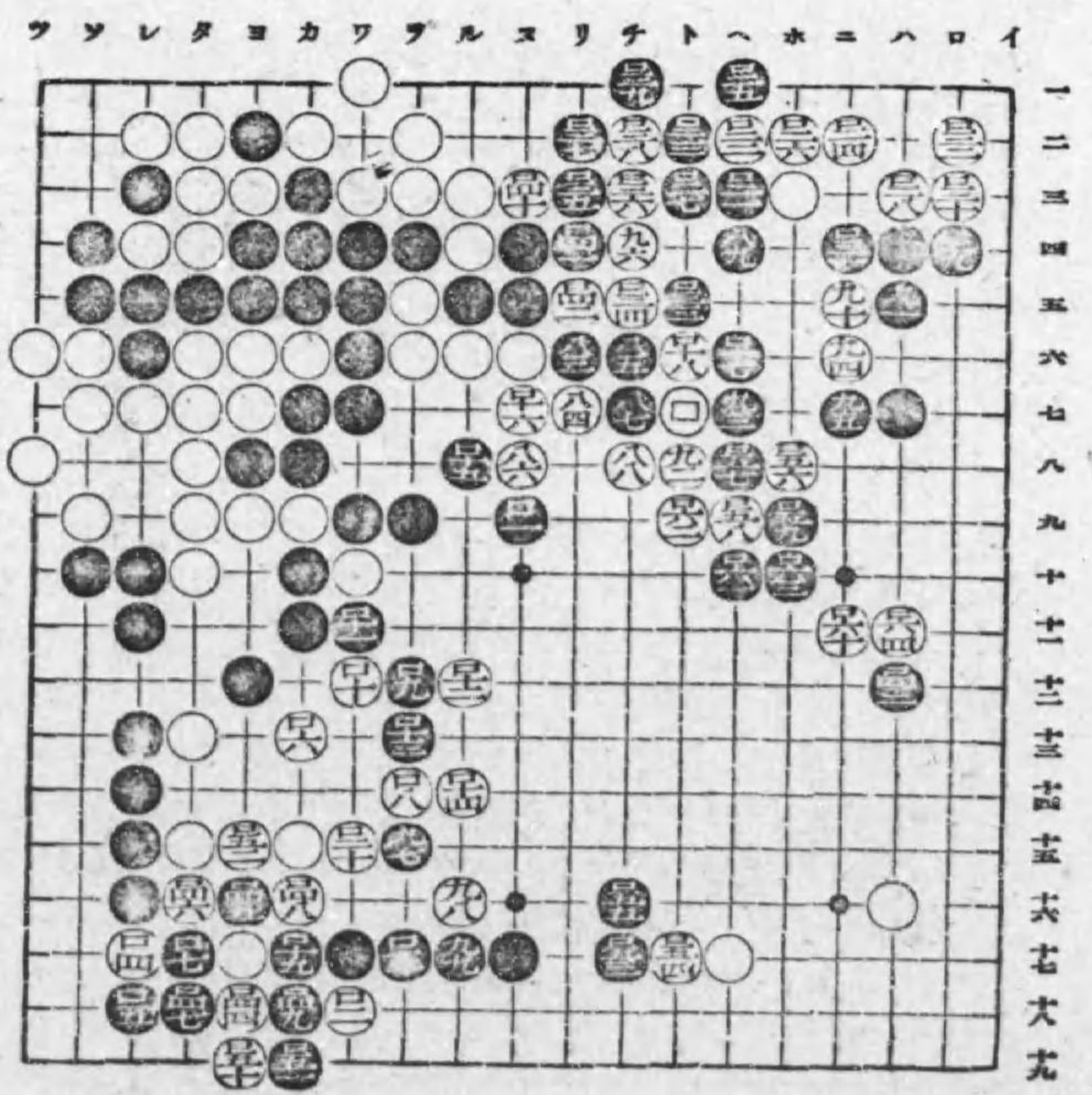
黒百十五で「リの九」、白「リの八」、黒百二十、白「ツの十四」、黒「リの十四」は、その白は取れまい。

黒百十七を百十八だと、白は百十七。

黒百五三で、白に「ソの十八」と來られる防ぎに「タの十九」だと、白は百五三。

黒百五七で「ホの七」に受けると、白は「ハの十」。

白百五六、百六十は、巧妙を極む。



八三より百六四まで
名人因碩評曰 勝敗不明是迄の趣向甚だ面白し。

名人 中村道碩
先安井算哲

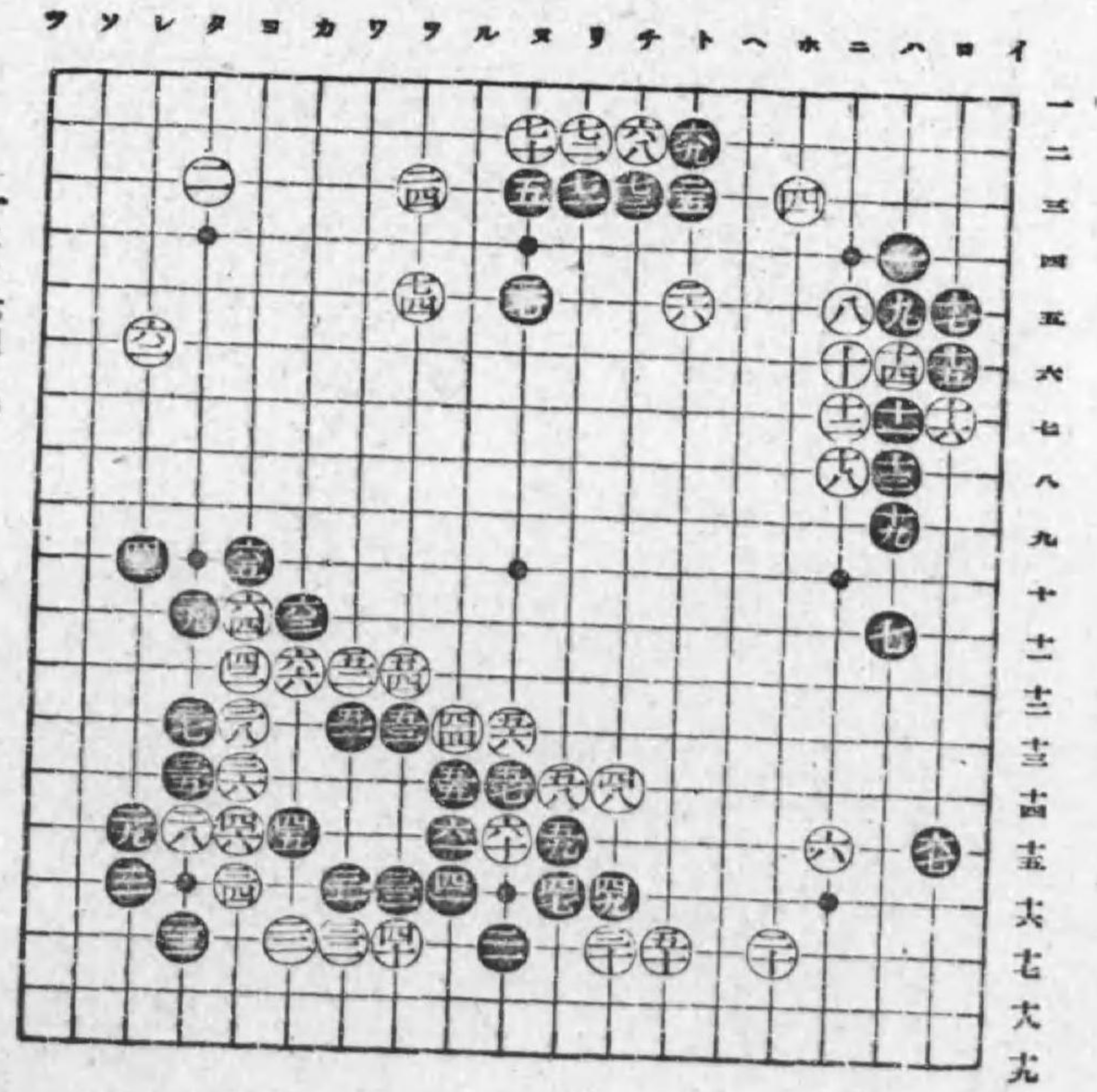
黒七は悪い。黒十七で「ロの八」だと、屢々現はれた如く、白十七、黒イの七、白「ハの三」、黒「ロの四」の所へ、黒七と行つた結果になつた。さう七と行くことは、その七によつて自己の十三、「ロの八」の堅固無比な面の効を大半失ふ。この理が當初布石の基礎になつてゐる。流石、黒もその不利を見て、十七と應じたが、かう十九となつても、黒は手数の割に地が少い。

白二六は、黒「への五」、白「ニの四」、黒「への七」と來られると、十八までの白の厚味が消え、白が悪いから。

黒四七は、白に六十と來られる備。

黒六七で「チの六」と行くこともよいが、すると、白に「ハの十四」と固はれ、右下隅はその一手で、白に大きな地が出来る。

白六八では「ロの十七」と受けてはゐられない状態。



黒七五は、白「リの六」、黒「ヌの六」、白七七と白に攻められると、白九九、黒百一となる先手が白にあつて、白は中に大きく地が出来るから。

黒七七を七九は、白は「リの六」と出て戦ふ。

黒八三を八五だと、白は八九。

黒九一は、白に「ソの十一」と來られる備。九十、九一の交換は、白は左上隅の固めに大いに利した。

白九四で百九だと、黒は「ハの十三」。

黒九五で「ロの十二」、白「ロの十三」、黒「ハの十三」と、白は「ニの十二」。

黒九七で百七だと、白は百八。

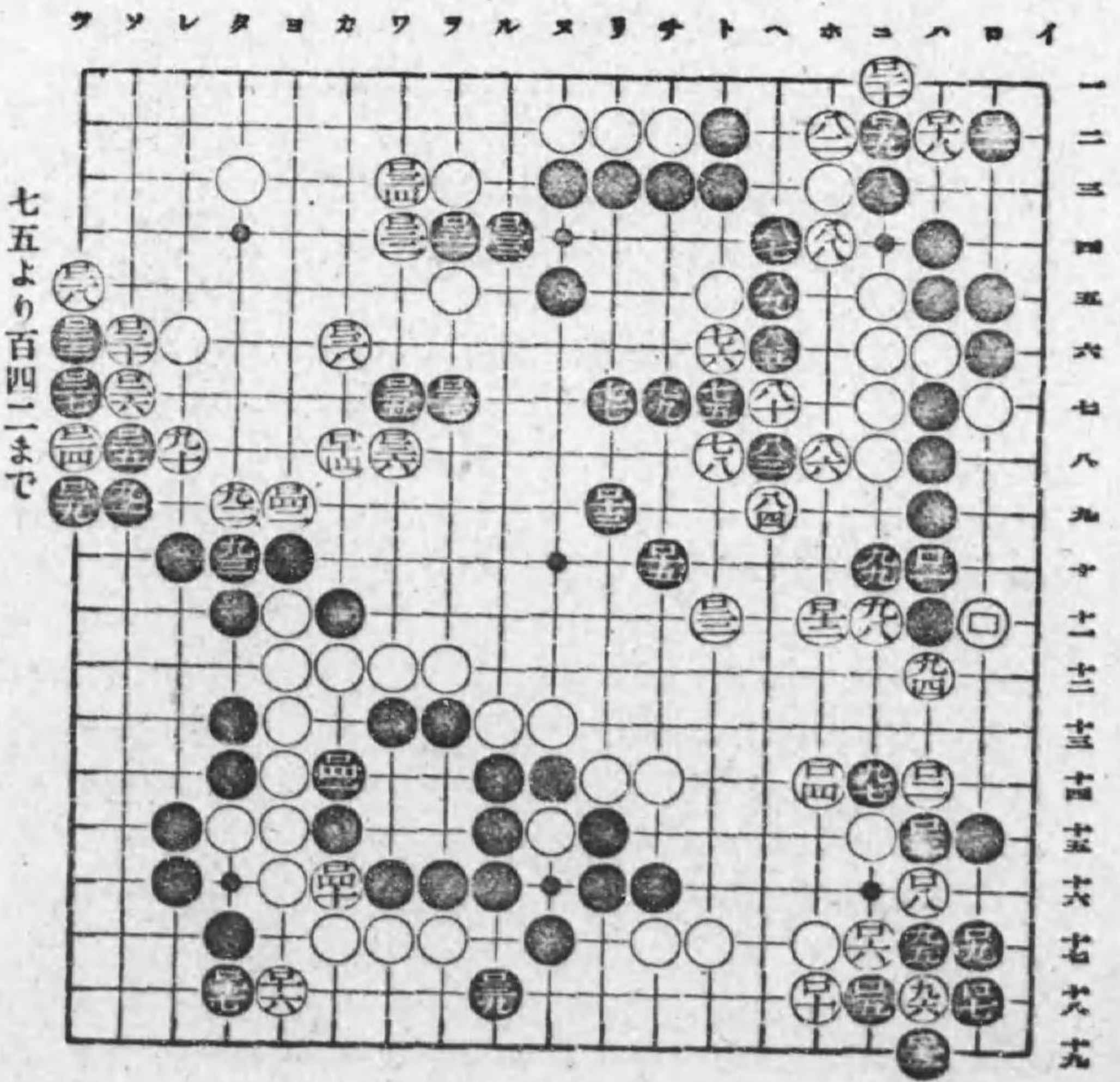
黒百十三で「カの七」邊に入つてもよい。

黒百二で「ニの四」、白「ホの五」、黒百二と行つてもよい。そのとき、白「ロの三」は、黒は「ロの一」。

「三二」を百三三だと、黒は「ルの三」。

「一四二」に黒「ツの十」は、白は「リの十二」でよし。

白の左上隅は四十近くも地があつて、細碁ながら黒が敗である。



名人 中村道碩
先 安井算哲

黒直ちに三と、白二を攻めたことは、悪くはない。
黒五は、四に對する應手として、今日も行はれてゐる。白四は、黒に「木の四」と來られるためではあるが、特殊の場合には善いが、單に黒に「木の四」に來られる防ぎとしては今日では用ひられない。

黒三三で「への三」は、白は「への二」。
白四十で「ニの八」と應じてゐると、黒に四十と、三七の扶けとなることが遺る。

白五二で五九だと、黒五八、白「ロの十二」、黒六五、白「ロの十」、黒六九、白「ロの十一」、黒「ニの十四」、白六十、黒「トの十五」となつて、白が悪い。

黒六一は、白に其處へ來られる備。
黒七五は、白七六で「タの十四」、黒「レの十四」のとき、白七六と征には取られないから。

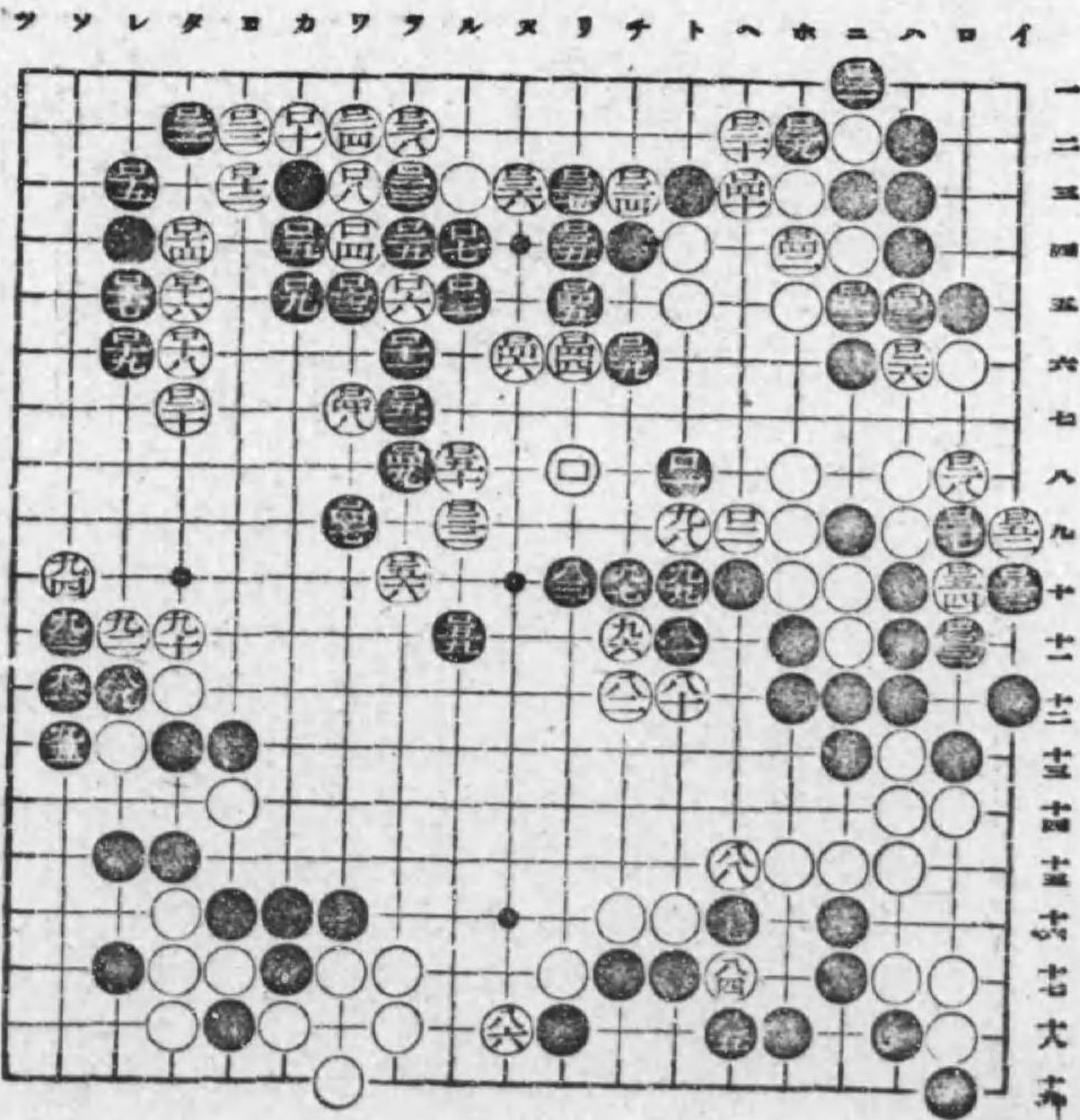
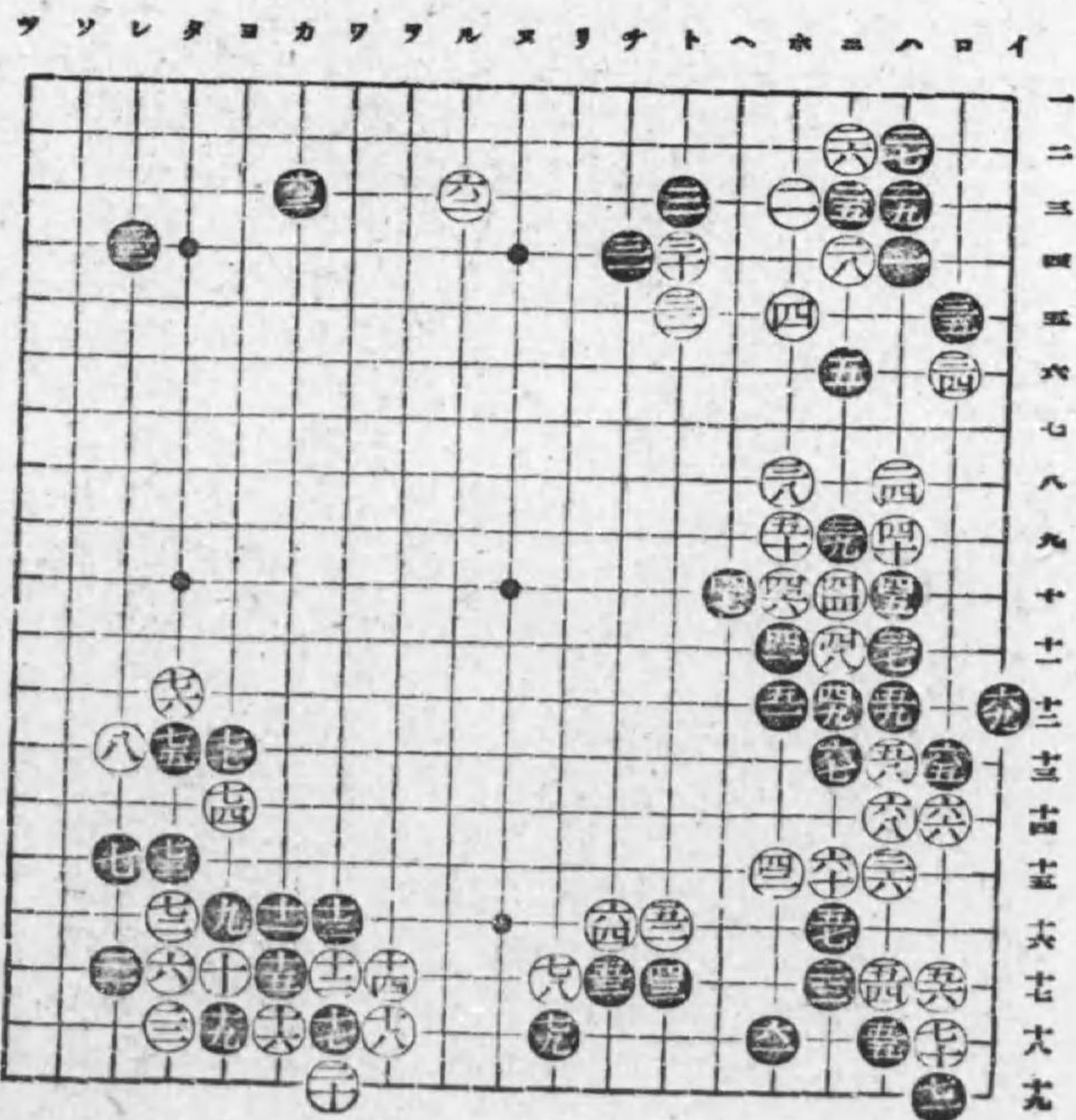
白八十で八一に、黒「への十一」、白八十となれば、白はかう八一となるより善い。白がさう行かないのは、白八十を八一には、黒八十、白八二、黒「トの十三」、そして白「チの十三」は、黒は「トの十四」となつて、黒に八八と截られることを白が防げば、黒に「チの十四」と出られて、白が悪いから。

黒八三は、白に九七に飛ばれる備。
白百は、八三を先頭とする黒の一團を攻めつゝ、「チの四」以下の黒を大きく併呑しやうといふのである。

白百六を百十三だと、黒は百八。白百六の要領は、今日行はるゝ所と變りはない。
白百十を百十一は、黒百二五、白百十三、黒百二三、白百三八、黒「ルの二」、白百十のとき、黒は百三六と活き、左下隅への損は顧みない。

黒百十一を百十二は、白は百十一。そのため百二五までの變化となつた。

百五六となつては、黒は百四七と百五五の方が、愈忙を告げ、黒に面白からぬ形勢を來してゐる。



名人 中村道碩
先安井算哲

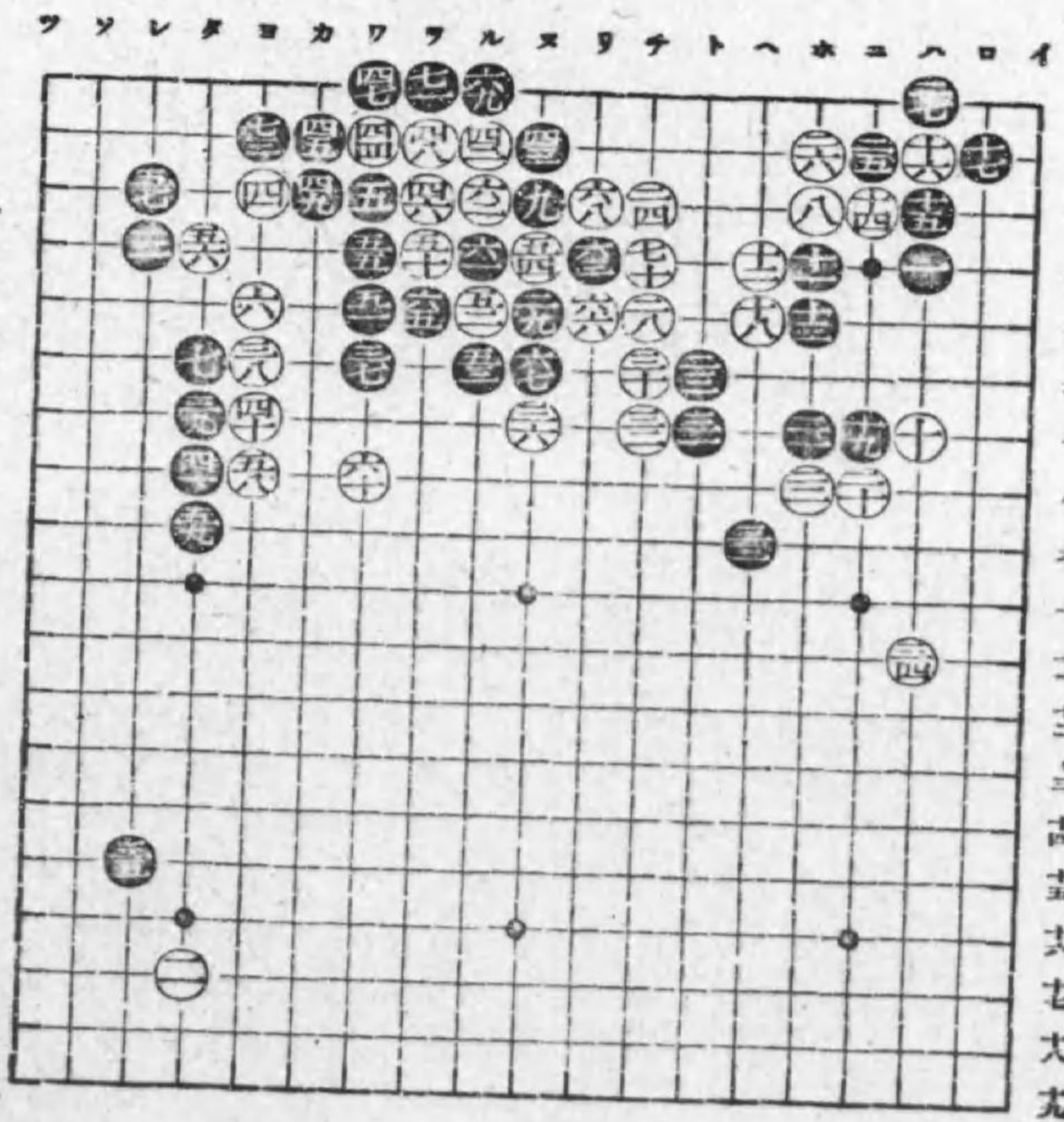
黒十一で「ニの五」と應じる型の無かつた此時代には、白の十にはかう十五までとなつた。今日では、黒十五までは、特殊の場合の外、十一は「ニの五」。

黒十九の要領は、今日と變りはない。

黒二三で「ハの六」、白「への七」、黒「ハの八」、白「ハの九」、黒「ロの七」だと、白は「ロの八」で、白は外部へ勢力を張り黒は一隅に窒息する。

黒三五で三六だと、三二、三十の「リの面」の白の二子の効力を、その一手で消して、黒が善い。その意味で、白は三六及び後に見る如く六十の所へ急いで行く。

黒四五を四六、白四八だと、黒は地が無くなり、白は四十以下が強くなつて、黒が面白くない。ので、かう七三までの現はれとなつたのは、黒は左側に地が出来、結果甚だ善い。



六四粘ぐ(六一の處) 七二粘ぐ(六三の處)
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

一より七三まで

白七四、七六は、「タの九」と突出した尖端により、少くとも「レの十一」邊までも黒の右に屬してゐるのであるから、その黒の勢力内へ黒を追つて凝集させやうといふ、確固不拔の基礎的棋理。七四で、百一または百と打込むことは、黒に「ヨの十六」と來られ、打込んだ白は、大困難に陥る。

黒七九で八二だと、白に七九と粘がれて、黒が悪い。

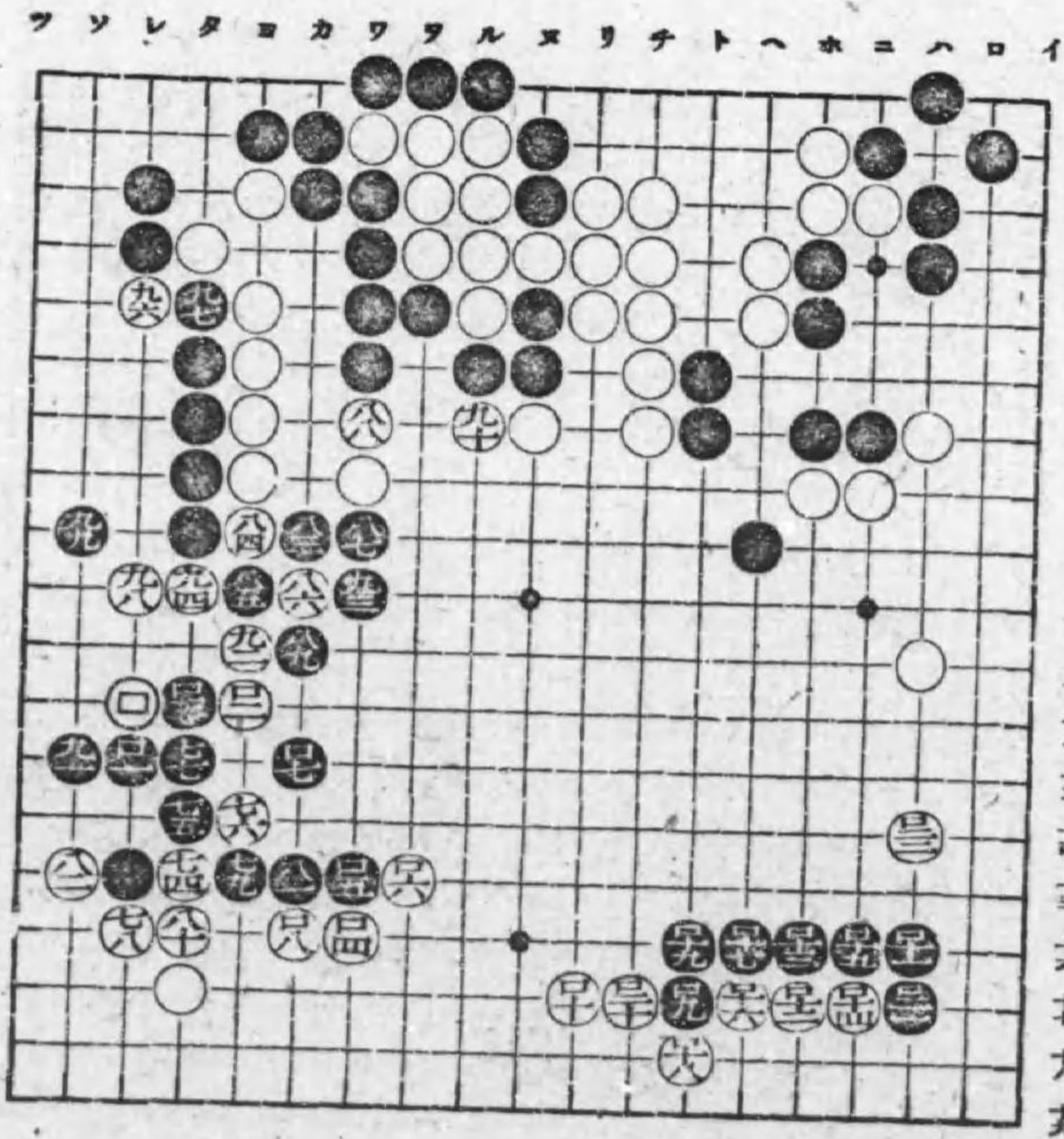
七九は、七八と白の來た場合必要の一手。

白八二は大きい所。八二を「カの十四」、黒百五、白「カの十二」は、黒は八二。又白八二を「ヨの十三」、黒百三、白「ワの十三」は、黒「ワの十四」、白百二は、黒は「チの十三」。その白百二を「チの十三」は、黒は八九。

白九四より百二までは、かう百四から百八まで「下邊」に勢力を張る棄石。

黒百九を百二十だと、白百十六、黒「ルの十七」となり、黒は左下隅の白の堅固へ寄り過ぎる。

黒百十一を百十四は、白は「ハの十五」。
倍、百二まで「判するに、黒の勝局と看る。」



九五粘ぐ(八六の處)
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

七四より百二まで

名人 中村道碩
先 安井算哲

黒二七を二八、白二七、黒レの十五、白レの十四、黒レの十六といふことも黒は悪くはない（黒が二五の一子も征に取られない現局に於ては）。

黒四七で「チの三」だと、白は「レの三」のとき、黒四七は、白は「タの四」と截つて如何に變化するも白は悪くはない。その黒四七を「ソの三」、白四七、黒「ソの二」は白は「タの五」。それで、白四六は「ヨの三」に行けば黒に「チの三」に攻られるから、四六といふ工夫に出たのであつて、この四六の工夫は今日も基礎的に行はれてゐる。

黒五一と下邊を厚くした手を假に五五だと、白は五一で、左下隅の白が厚くなる。その五一の所は中央へも勢力を張る双方とも必争の好點。

白六四は、假令棄てるにしても、五六、五二を、一手で六四と打抜かれることは、何の意味も遺らぬから。

黒七七を七八だと、白九九、黒七七、白七九、黒八十八、黒「ワの十三」、白八十、黒八一といふことになつて黒に「ワの十三」と一子を打抜かれたことが白は悪い。

九二、九四と、白が取られた四子を巧く利用して、九六と整へたのは、「チの十三」と二子を一手で取らせなかつたため。

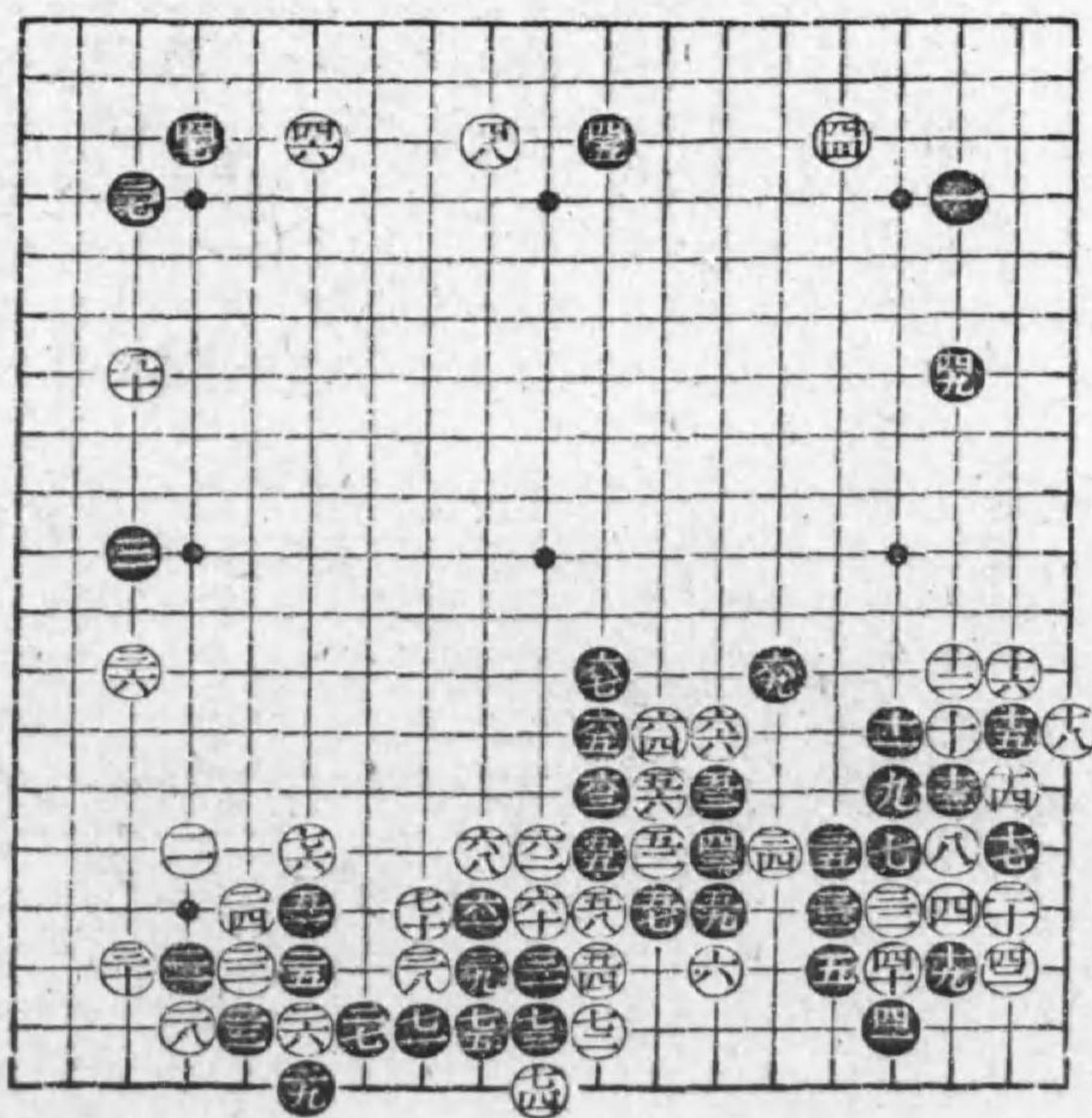
白九六を百二四だと、黒は「ヌの九」で、白の九四以下の大石を苦境に陥れる。

黒百十一を百十二、白百十一、黒百十三だと、白は百十九で、黒が悪い。

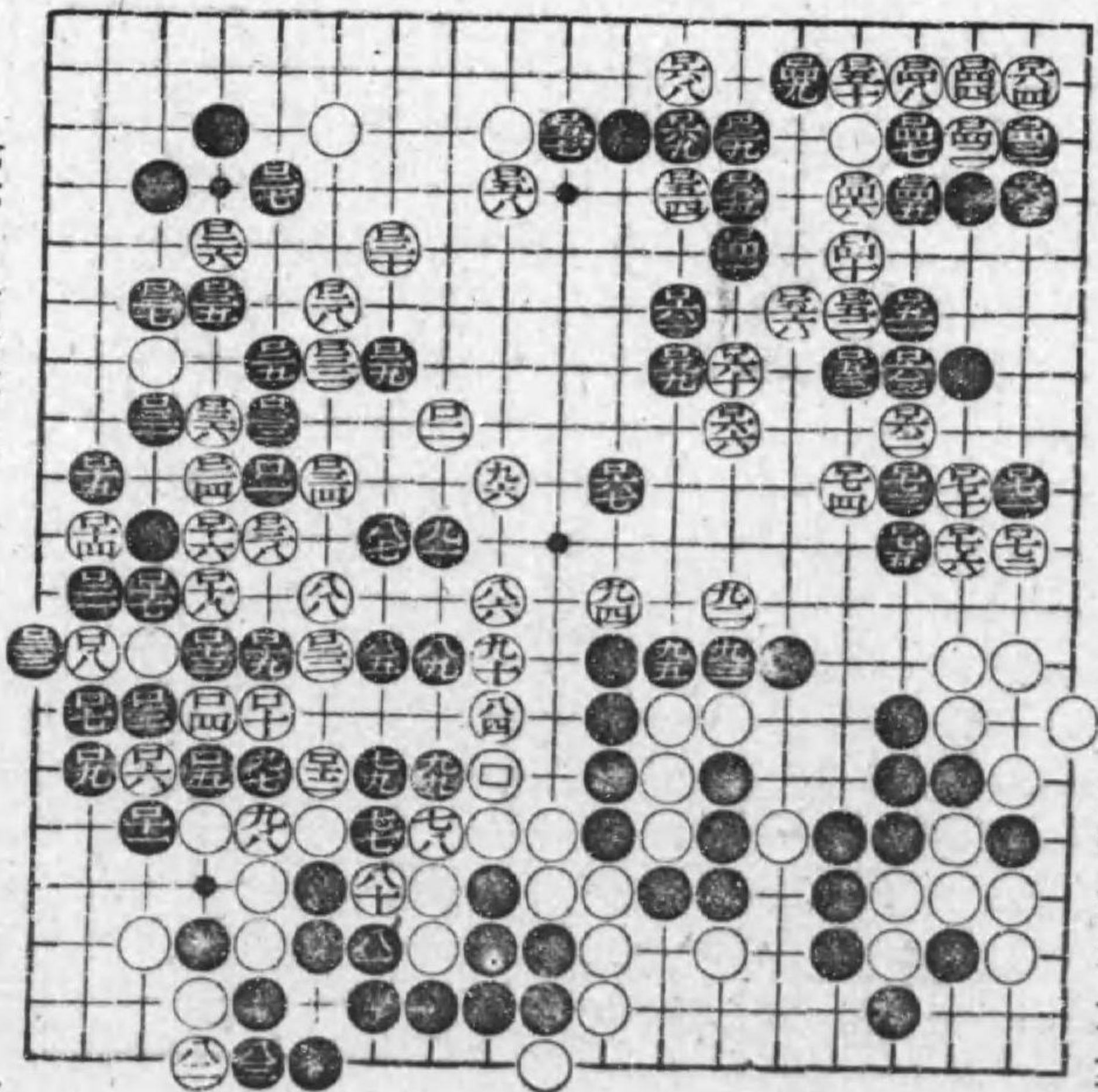
百二四までとなつては、八七を先頭とする黒の一圍が悪くなつた。これは、黒百三を百二五に行かなかつたためであつて、實に本局勝敗の岐れる所。

百七六となつて判するに、白には「ソの八」、黒「レの九」、白「タの七」などがあつて、地は白の方が多く、百六六以下の白の一圍は取られない。故に白の勝。

フソレタヨカワフルヌラチトヘホニハロイ



フソレタヨカワフルヌラチトヘホニハロイ



七七より百七六まで

名人 中村道碩
先 安井算哲

白八を「タの三」だと、黒は「ヌの四」。
黒九で三三は、白「タの三」、黒三三、白「レの二」、黒「ソの三」、白「ヨの四」、黒「タの五」、白三三、黒「ソの二」となつて双方悪くはない。が、黒九の意味は、白「レの二」なら、黒「タの三」、白三三、黒三三と、七を安全にし、そのとき、白十なら黒は四十。その白十を「チの四」なら、黒は「レの六」。

今日基礎的に行はるゝ黒十七の高締りは既に此時代に現はれてゐる。

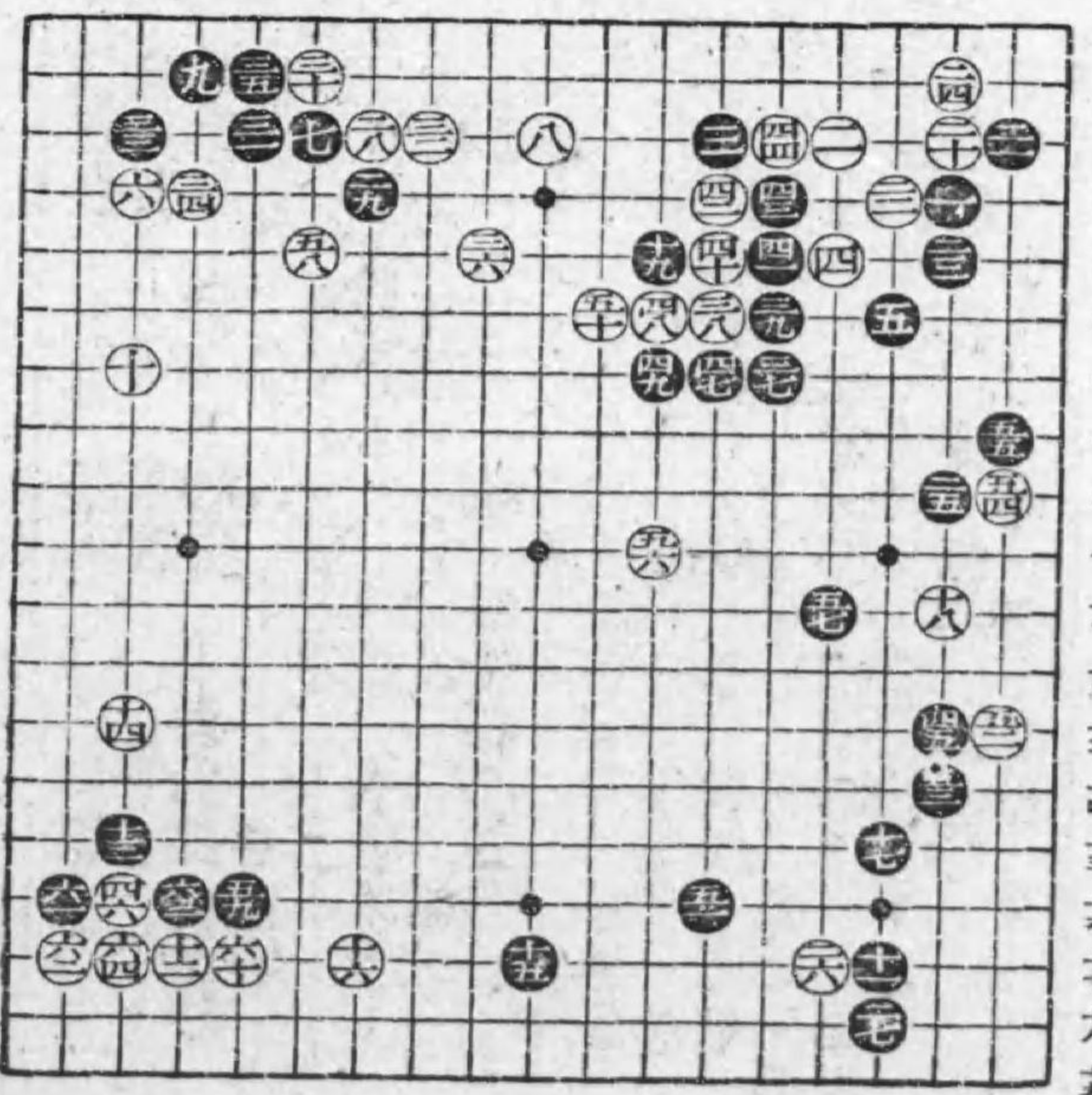
黒二七は、今日は「ホの十六」と應じる。

白二八の意味は、これまた今日基礎的に行はれる。

黒二九を「ワの二」は、白は「カの四」。

白五六を五七は、黒は「トの十一」。白が五六、五七と換つたのは、大勢上よりの打算に因る。

フソレタヨカワラルヌリテトヘホニハロイ

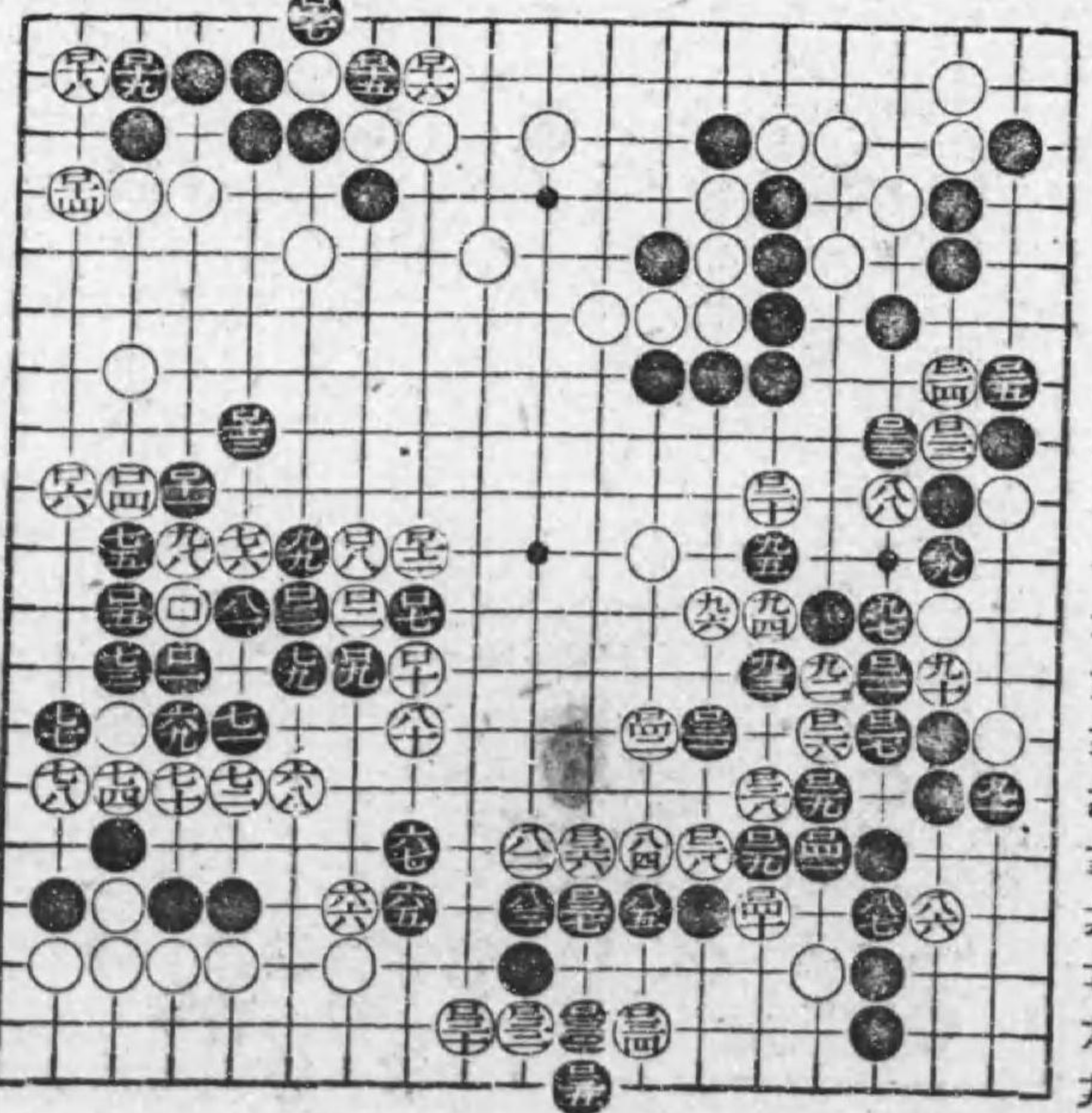


一より六四まで

黒六五で「カ」の十六」とその方の黒を助ければ、白に六六と来られ、延いては左邊の白には地が出来、黒は「ヌの十七」と「ト」の十六の間は薄くなつて自然白に打込まれる動機を作る。それで、黒六五、六七は、無論六三以下を棄て、「ヌ」の十七の方には豊富な地を取り、また遙に「チ」の十にある白を包圍しやうといふ中央縦断の計。
白七十で七三に受け、黒六三以下を棄てさせないのも白は善い方法の一つ。
八一となつては、黒は六九以下の目的を達しその方は先づ一段落。
白八二より、九六までと黒地削減に出たのは、黒に左側を蹂躪されたため。
黒百十一を「カ」の九だと、白は百十三で、百八の方をも取れない。百十一は巧い切り。即ち、白百十二で「ヨの九」、黒百十三、白「タの八」、黒「カの九」、のとき、白百十一に四子を粘れば、黒百十二、白「ワの九」、黒「チの八」、白「ワの八」、黒「ワの七」。

此碁は、百十三と黒に取られたことによつて、細碁ながら黒の勝と判じる。

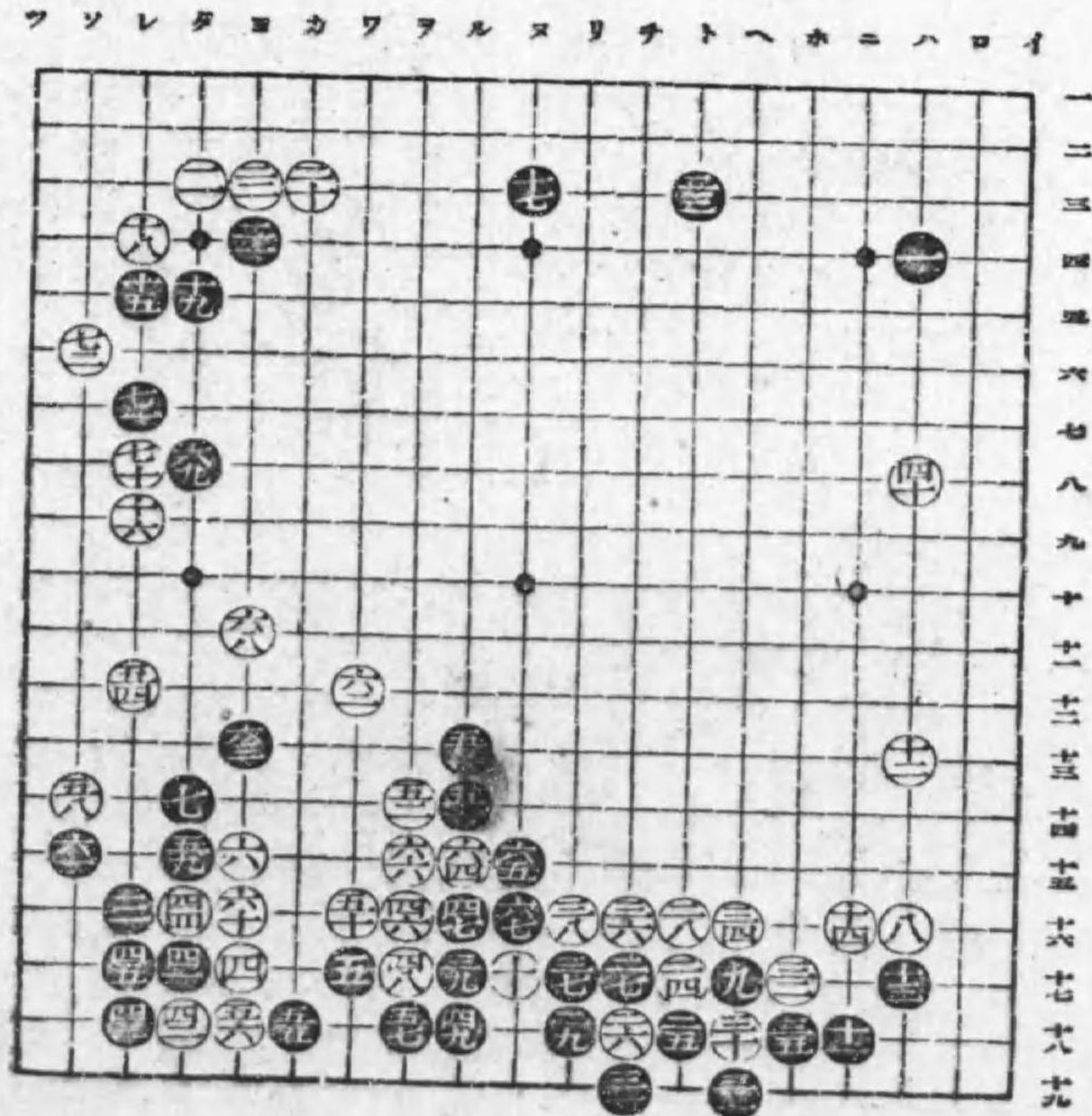
フソレタヨカワラルヌリテトヘホニハロイ



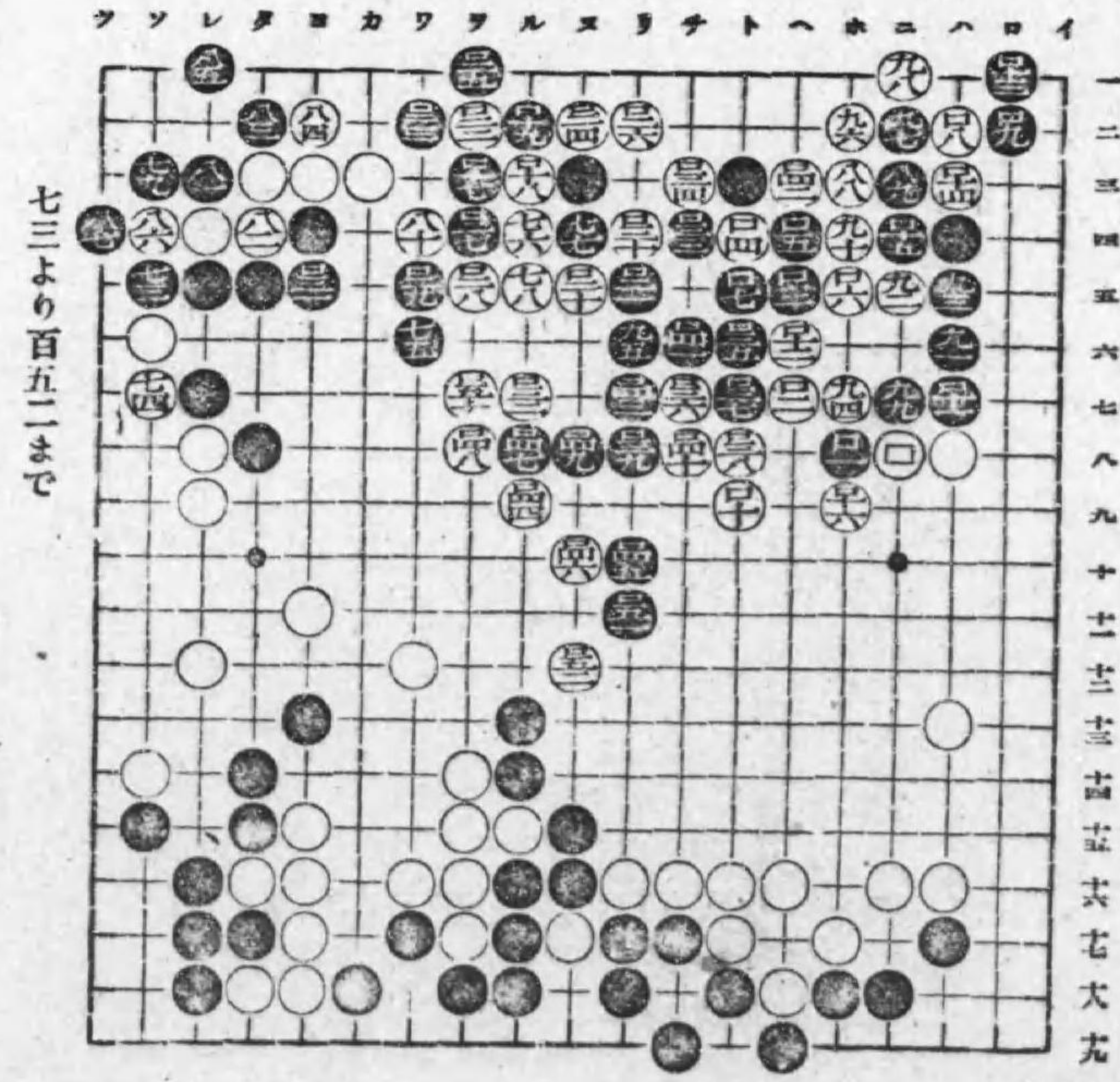
六五より百四二まで

名人 中村道碩
先 安井算哲

黒二一は、十五、十九が白に攻められた場合、「カ
四」と行く筋を失ふ。二一は、無いが善い。
白二六で三十に截り、黒三五、白三四、黒三三、白二
七の方が、白は善い。その黒三三の取りを三二、白二六
黒「ホ」の十六なら、白は「ト」の十九の打抜き。
黒三三で三六、白三四、黒「チ」の十四も、黒は尙ほ十
三の方に活きが遺つて悪くはない。三九までとなつたの
は黒は地が薄くして面白くない。
黒五三で「レ」の十一も、黒は悪くはない。
黒六九で「カ」の十二、白「カ」の十一、黒「ワ」の十三、
白「ヲ」の十三、黒「チ」の十二、白「ワ」の十一、黒「ル」
の十二は、白「ワ」の十四で、白は活きてる。
白七二と、黒の根據を取り黒を其處へ治らせないと
は、向後の消長に關するからである。



白八十と百十八だと、黒に八十に來られて、黒は七五
との間が整ふ。
八七となつて黒を急に攻めることが出来ないとすれば
前譜白七二で八八に入つてゐることも、白は左上隅の地を
失はなく、徐々に局面を進める良法であつた。
黒八九で九十だと、白百十五、黒九二、白八九、黒百
五、白百十四、黒「ロ」の五、白「ロ」の三となつて、黒は
地を失ひ、のみならず、白に百六に切られることが遺つ
て黒は悪き形勢を招く。
白百四で百六に受け後百四だと、黒は百三三。
白百十で百十四だと、黒は「ロ」の三で二子は棄てる。
黒百十三は、白「ロ」の三、黒百十四、白百十三と、白
に劫に來られるから。
倍、百五二となつて、黒が「リ」の十二、白「リ」の十三、
黒「ヌ」の十一、白「ル」の十一、黒「チ」の十三、白「リ」の
十四」となつても、白の百十六の所が頗る固く黒の大石
は活きられはしない。その原因は黒百十七を百二二と行
かなかつたのに因る。



名人 中村道碩
先 安井算哲

黒十五を十六に行き、十一と十六との間に、白に十五と打込ませたことは、前二局に現はれた。それを、本局でかう十五と改めたのは、黒が前局に於てその結果が面白くなかつたと見た爲であらう。

黒二七は、白「リ」の五、「黒」二七、白「ヌ」の六、「黒」ルの五、「白」ルの六」と屢せられて黒が悪き故。

黒二九は、白二九、黒「リ」の六、「白」チの八と、白に廻られて悪き故。

黒三九となつて見ると、三九と七と白の六とを取去つて見れば、一と九との二手で事足りる所へ、六と七との交換は白が悪いが、三九とこの匆忙の際に無用の一着を重ねたことになつて、先着の効力は半ば失はれた。されば、黒三九は「ニ」の三、「白」ホの四」のとき、黒三九ならその白を攻める意味もあつて、三九は意義が立つ。

黒六一は、白が六二で「チ」の四」と粘りければ、黒も百二九に粘ぎ、後黒は「へ」の二」。その黒「へ」の二」に白「ホ」の二」は、黒は百三四。

黒六七で百一九は、白六八、黒六九、白「チ」の八」と、白は黒の「ヌ」の七」以下を攻めて来る。六七は、七六と切る意味もある善い押しだ。それで、白は黒に九四に來られないうら七と「カ」の七」の一子に勢力を加へ、黒に切られても獨立で活動。のに、尙ほ黒は七三より七九まで白を切り放したのは、白地が多い故。

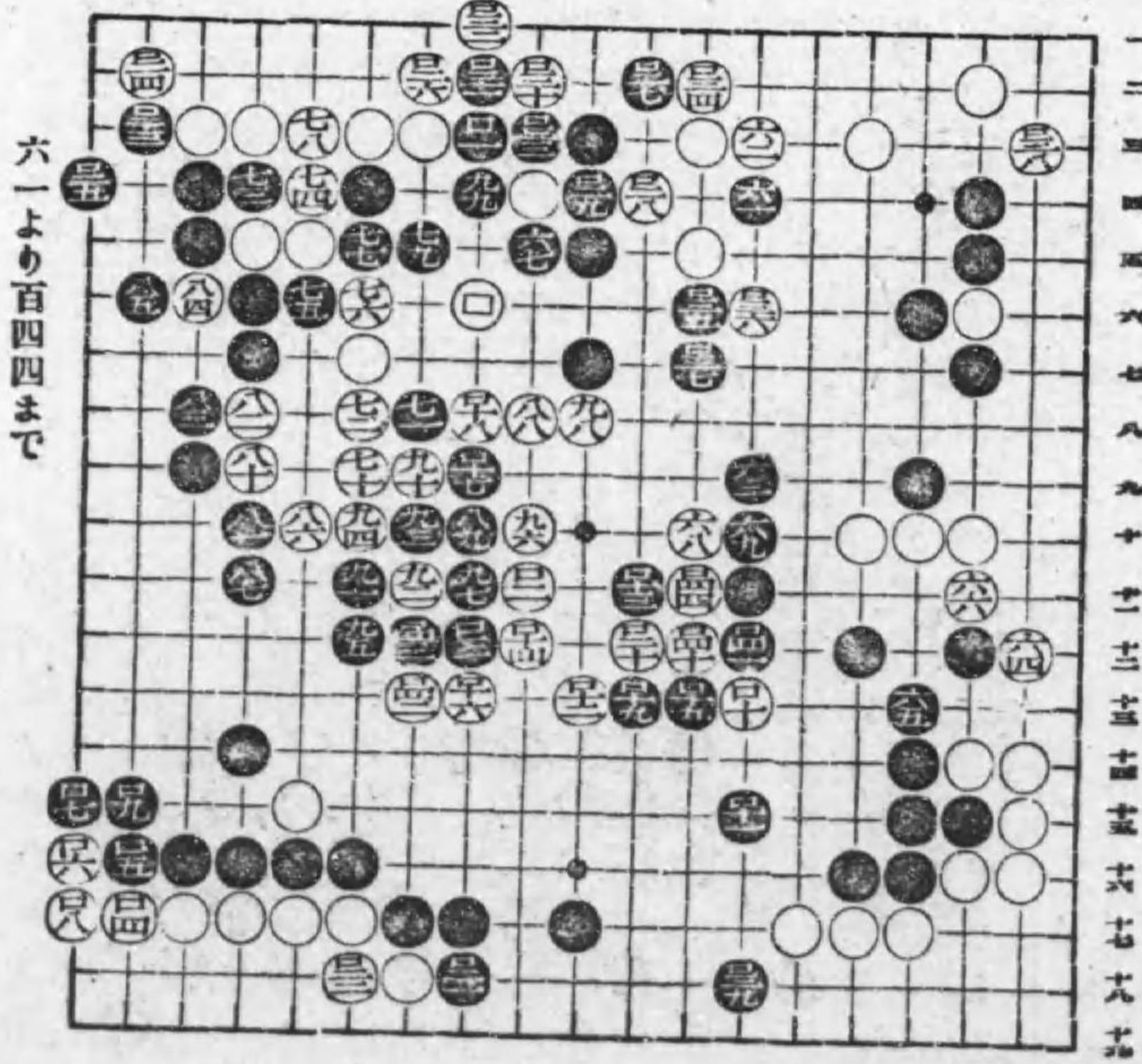
白百は、黒百十七、白百十八、黒「ワ」の七」となつて白が兩断せらるゝ備。

黒百十三で「チ」の十六」も悪くはない。百十六となつては、その方の黒は可成りの侵入を受けた。

黒百二五で百四十に受けると、白百二十の目的は達せられる。即ち、次に、白百四二、黒百四三となつて、黒「ル」の九」、白「ヌ」の九」のとき、黒は「ヌ」の十」とは切れない。だが、黒百二五は、「ロ」の二」の方が大きくもあり、また意義もある。

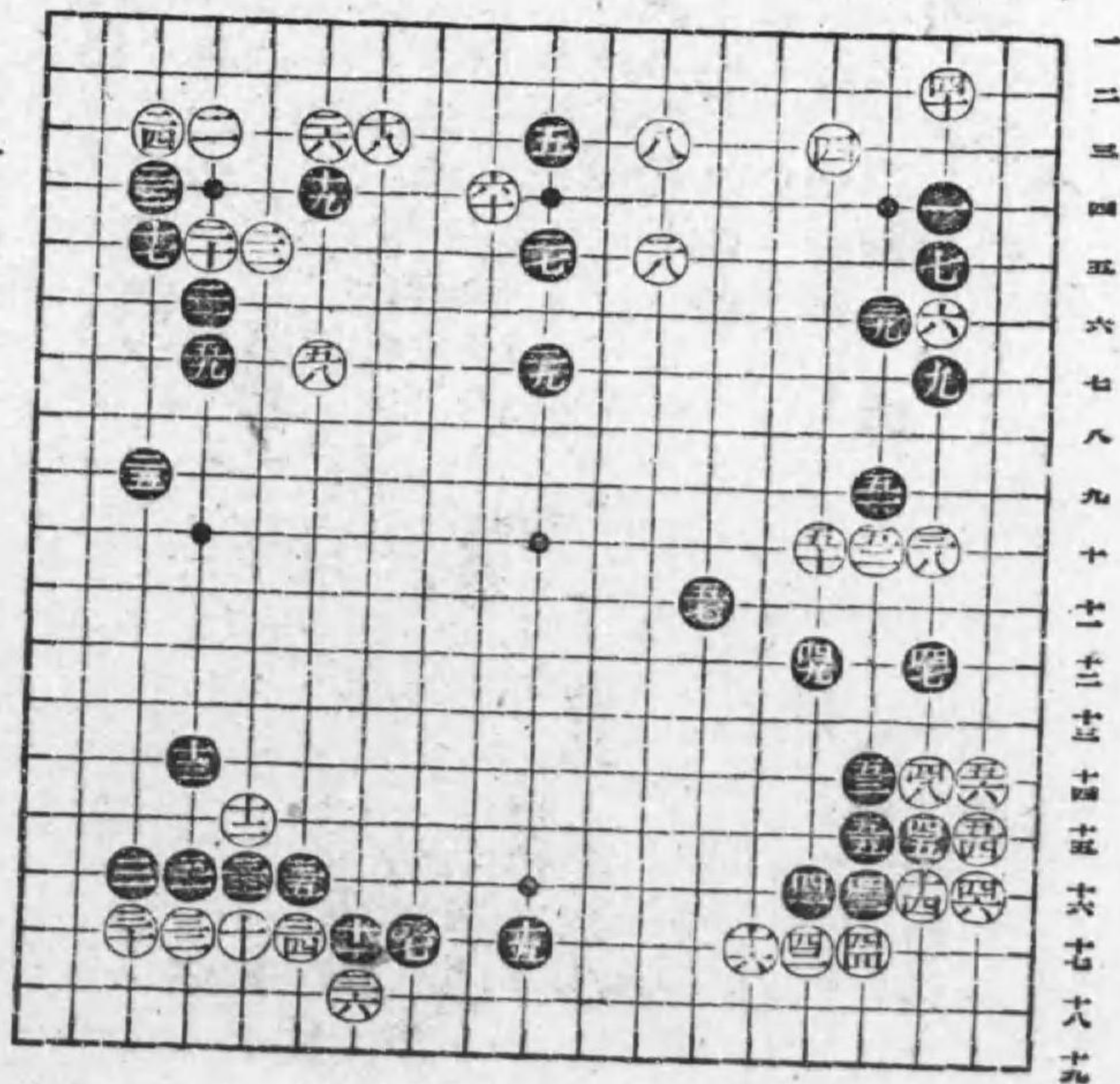
此碁は細碁ながら黒の敗と看る。

フソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



六一より百四四まで

フソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



一より六十まで

名人 中村道碩
先 安井算哲

白三十で「レ」の十四、「黒」の十五は、白が悪い。即ち、白が「ヨ」の十三」と黒の出を止めて後、黒「タ」の十三「白」の十二、「黒」の十二、「白」の十四」と假りになつたとすれば、白は「レ」の十三で利かすがよいから、また黒が「ソ」の十三と取ることは今は小さい。また、白は將來劫が始つたとき、「レ」の十四は劫立てにもなる。

白三二は、今日基礎的に行はれるといふことは、前に云つたが、果然此時代に於ても現はれてゐる。

但し、白四十は、今日では四四の善いことは、その時黒四十、白「ニ」の十四は、白善いからである。が、白が四十、四二と行つたことは、五二までの變化が此際悪くないと見たからであらう。

黒六七を六八は、白は六七。
七十となつて黒は頗る危急を告げてゐる。

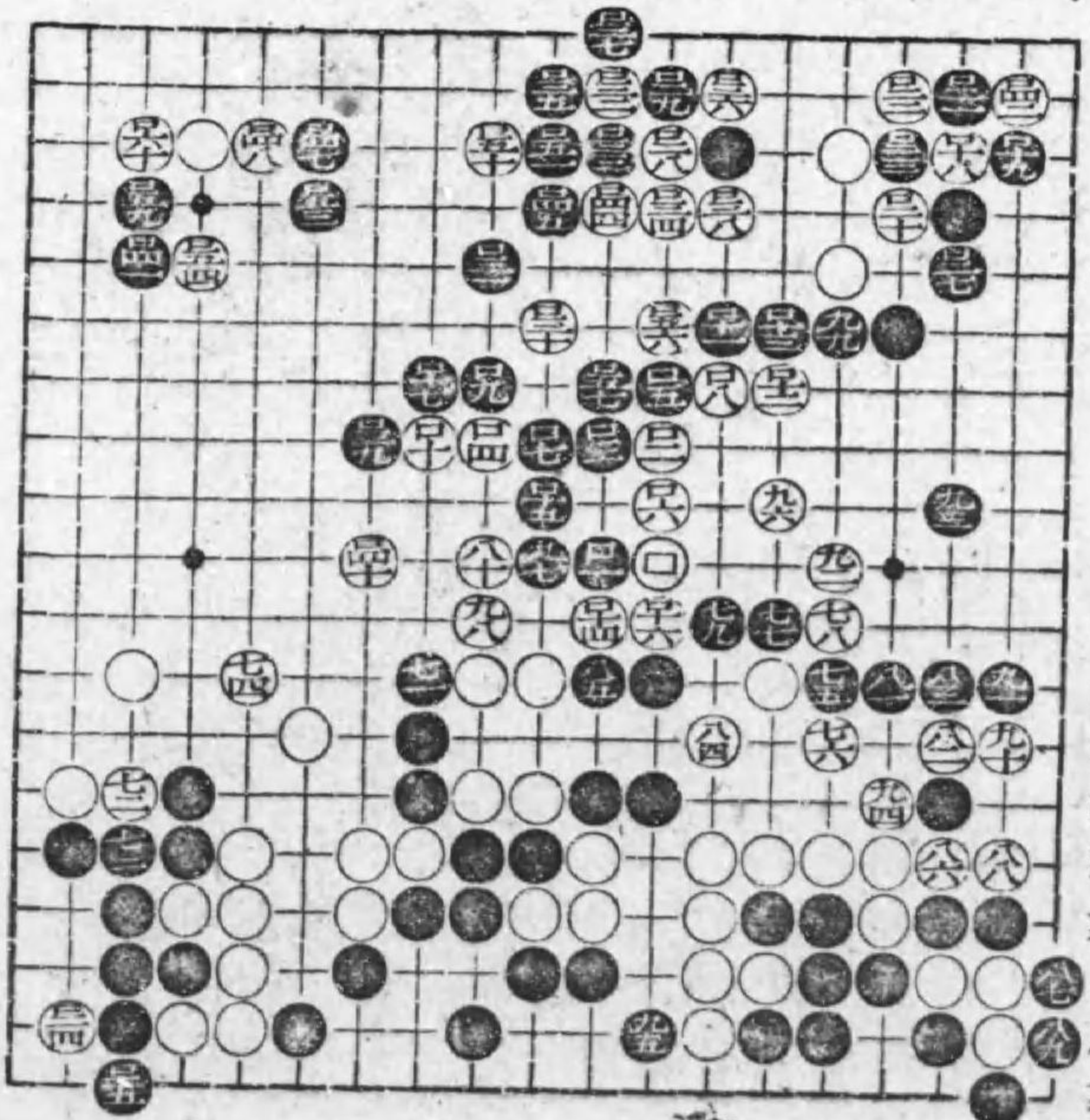
黒が七一と出たのは、白「テ」の十七、「黒」の十七、「白」の十八、「黒」の十九、「白」の十九と取られることに對して、黒九五に備へれば、譜の如く七四となつて黒は七一と出られなく、従つて中央から左邊一帶の白は厚大を極めるからである。

白八十で八一に打抜くと、黒九八、白「ヌ」の十一、「黒」九七、そのとき白百一は、黒は「ヌ」の十三。白は前譜五四、五八の二子を取られては悪い。だとして、その白百一を八十、黒「テ」の十一、白百一、黒百十五、白百十四は黒に「リ」の九で、前譜五四、五八の二子は助からない。
黒九一で九二は、白は九一。

黒は七一のために、八九までの運びを得たので、白「テ」の十七、「黒」の十七、「白」の十八には、黒は九五。その白「テ」の十七を「ヌ」の十九は、黒は「テ」の十八。その意味に於て、黒九五は百十二邊が善い。

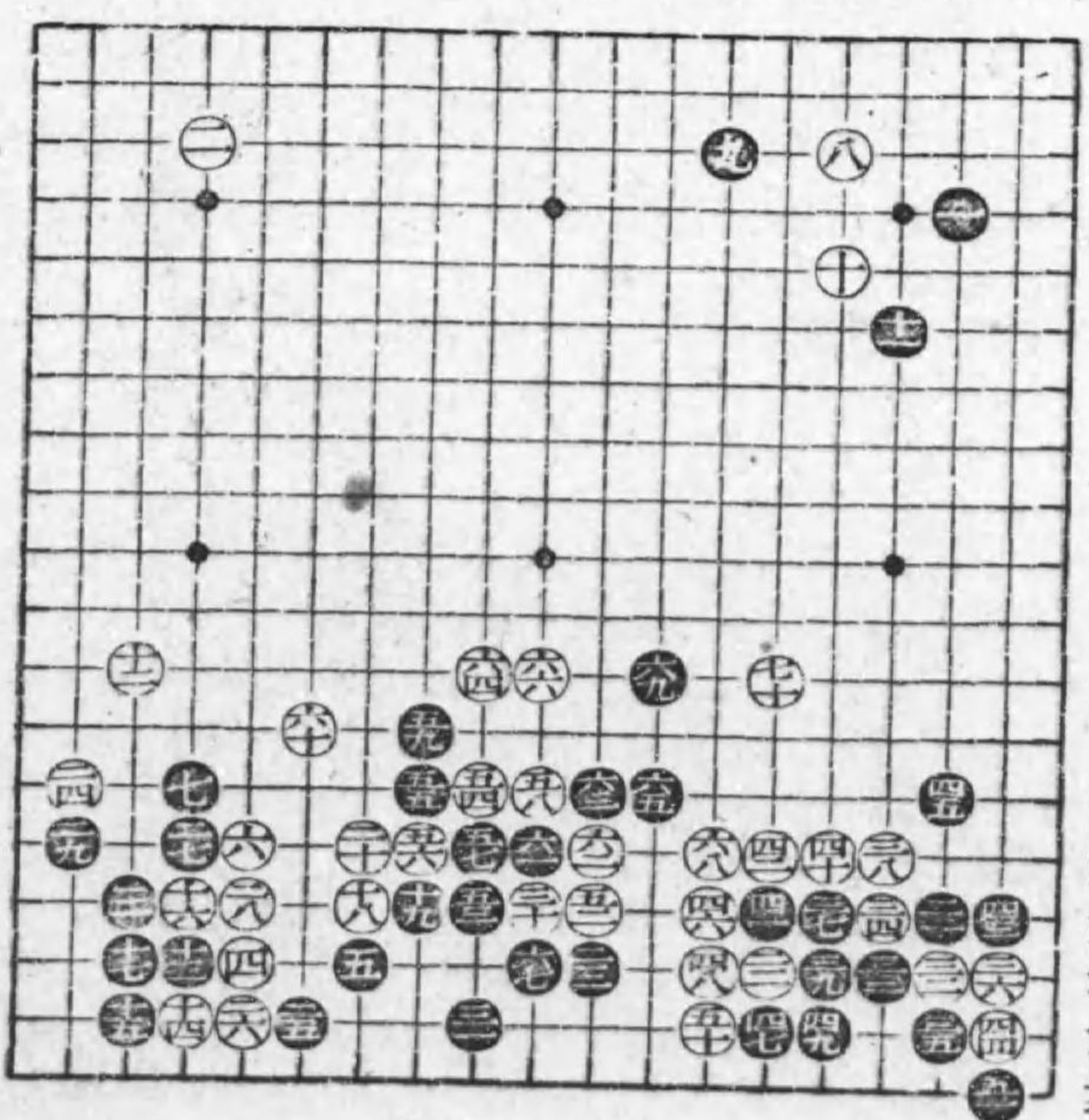
白百四二と劫に出たのは、劫立ての凡ての手はその運びとなる所故、それを劫立てに利用したのである。
本局は、明かに黒の敗である。

イロハニホトヘチリヌルヲカヨレソ



七一より百六十まで

イロハニホトヘチリヌルヲカヨレソ

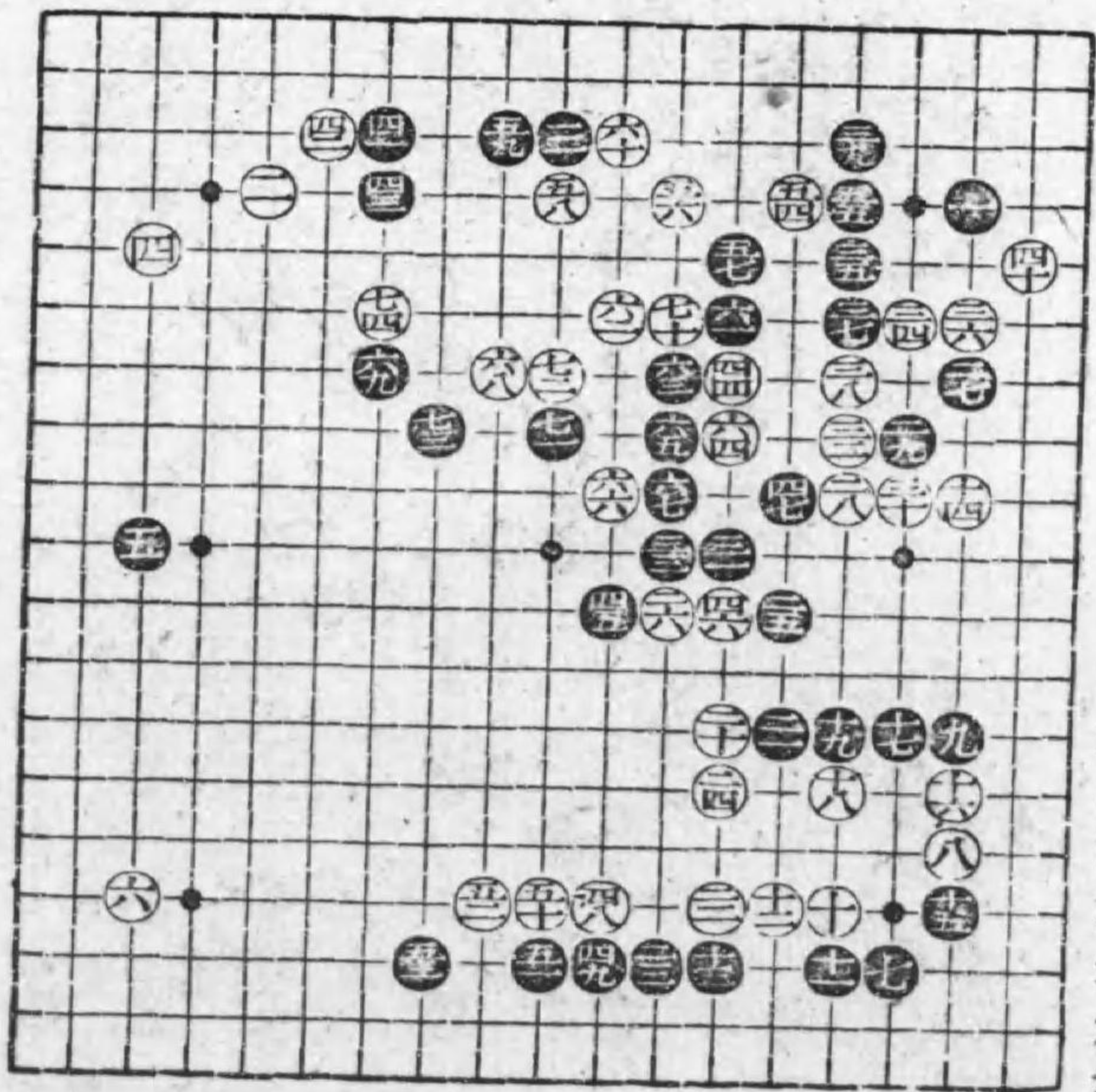


一より七十まで

名人 中村道碩
先 安井算哲

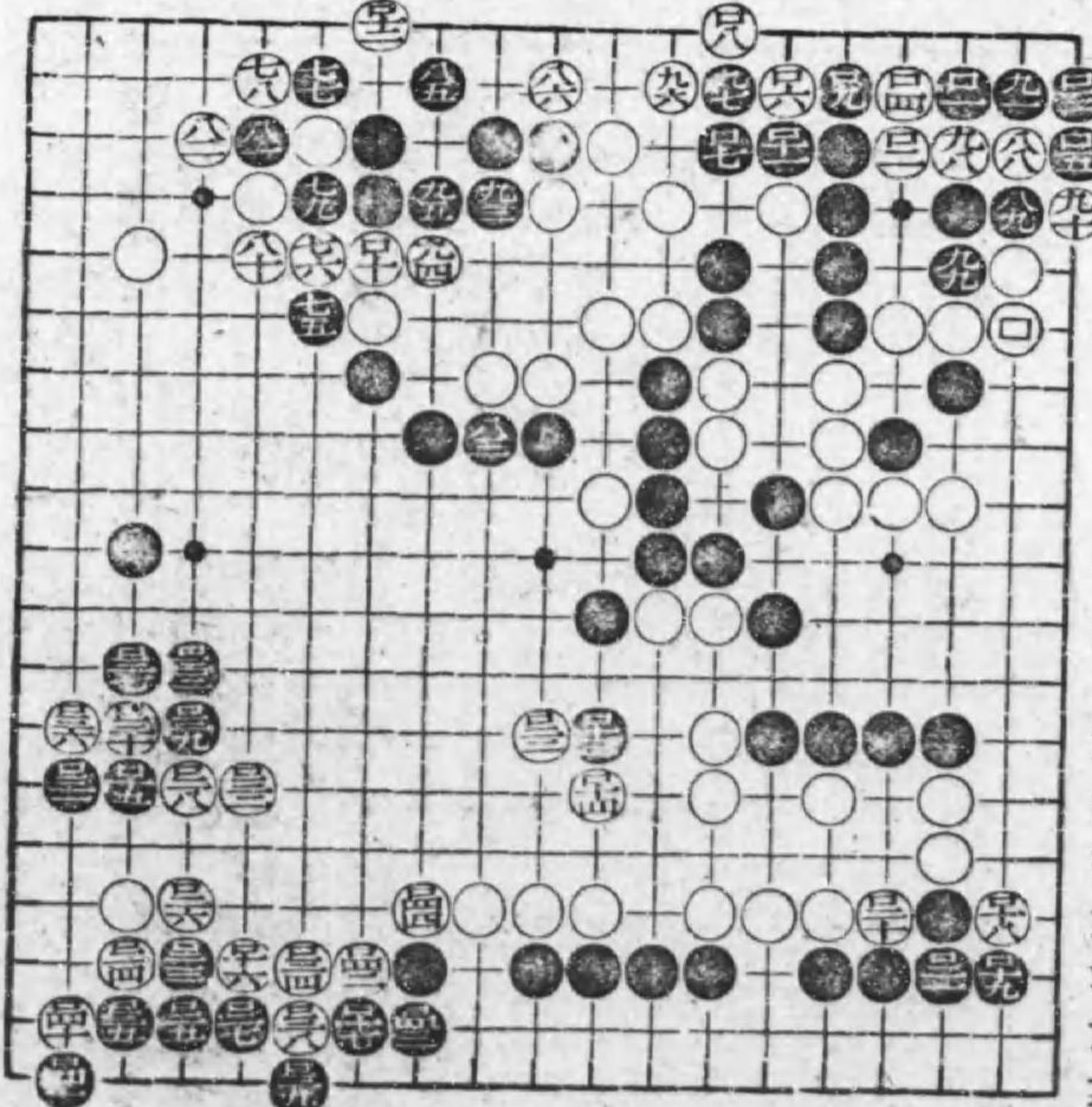
黒三は、白二に對すなら、今日では必ず「レの四」。
白十四で二二、黒二三、白「への十七」、黒「への十八」、
白「トの十八」、黒「チの十八」、白「ホの十八」、黒「トの
十九」、白「ハの十七」、黒「ニの十八」と、行かないのは、
黒を固めて面白くないと見たことに因らう。それは、今
日の見方と同じであつて、其處に進歩が顯れた。
白二六を三六だと、黒は「トの十二」。
黒三五で三六だと白に「ニの五」と來られ黒が重いと見
て、二七、二九を棄て黒が四一の好點に就いたのは善い
運び。
白四十は、黒に「ロの六」と來られる備。
黒五七は、「ヌの五」がよい。
白五八に對し五九と應ずるのは、黒は如何にも辛い。
白に六十、六二、六八と輕妙に形を整へさせたのは、
方針を誤つた五七の一着に因る。

フソレタヨカワアルヌリチトヘホニハロイ



黒七五を七六、白七五、黒八十、白「タの五」、黒「ヨの
六」だと、白「カの七」となつて、黒は「ヨの六」に出た一
團は尙ほ治らず、中央黒十五子の一團は白に「ルの十一」
邊に衝かれる脅威を受けてゐる。
借、八二までとなつて、黒が「タの二」と劫に行けない
のは、白は八三に突出すとかその他に劫立て多く、黒は
結果が悪いからであつた。
白九六に對する黒九七は、白百十二、黒「カの一」、白
「チの一」と白が取りに來れば、百十に殺つて攻め合はう
といふのと、右上隅の黒に對する備とを兼ねた。
黒百七を百九だと、白百七、黒「ホの一」のとき、白は
百十二、が、結果は遂に、黒は百十二と白に取られ、大
敗に歸した。
白百二四を百二六、黒百二四、白百二七だと、黒「ソ
の十六」、白「ソの十五」、黒「ソの十七」、白「レの十五」、
黒「ヨの十六」で、白が悪い。
白百四十、黒百四一の交換は、黒が「ソの十七」と截れ
ば、白は「ッの十六」。

フソレタヨカワアルヌリチトヘホニハロイ



名人 中村道碩
先 安井算哲

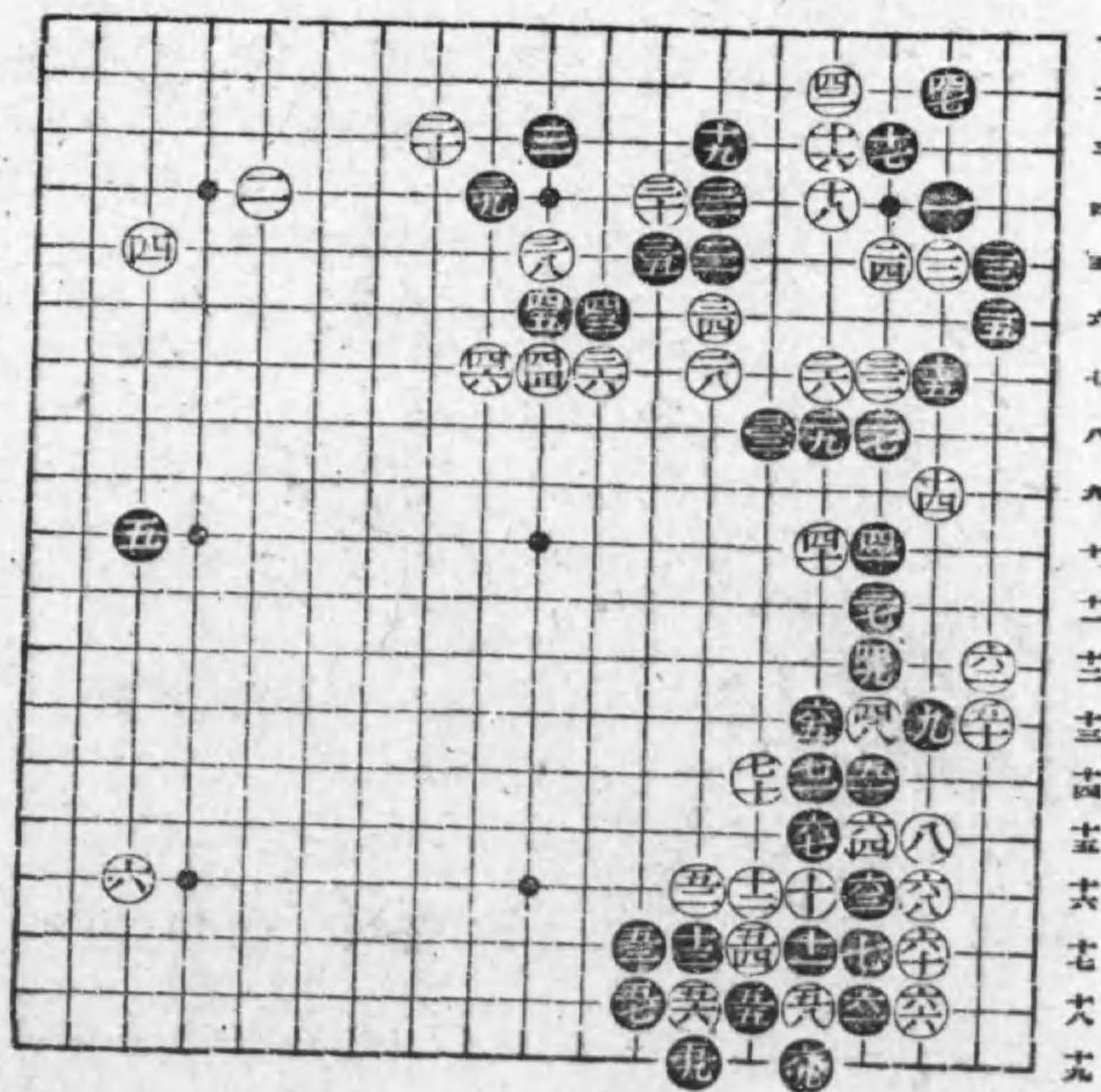
白は十四までと前譜と同じ運びを採つたのは、前局に於て大勝を博した故、黒は必ず敗跡を究めたであらう。さすれば白は、それに對策を講じやうといふ考。即ち本局では、前譜黒十五より變化してゐる。

黒十九で白に二二と來られ薄くならぬやう、黒は「ニの六」に備へてゐるがよい。それは、黒に四一に白の十四を攻めることを兼ねてゐる。亦黒二一でも、「ニの六」がよい。

白三六で四九だと、黒は三六。そのとき白「トの八」、黒「トの九」、白「リの八」は、黒は「チの八」。白「これに困つて」「トの八」を「チの八」は、黒は四一。そのとき白假りに「ハの十」は、黒は「チの十」などを、白は考慮に入れかう三六。

黒五一を「ハの十二」は、白に利される。が、七一となつては、白に實質を收められた。

アツレタヨカワアルヌリチトヘホニハロイ



一より七一まで

白七六を假りに「チの十四」などに逸出を圖ると、黒に「ヌの十四」と攻められ、延いて「ルの七」を先頭とする白の一團に影響を受け、それが敗因となる。

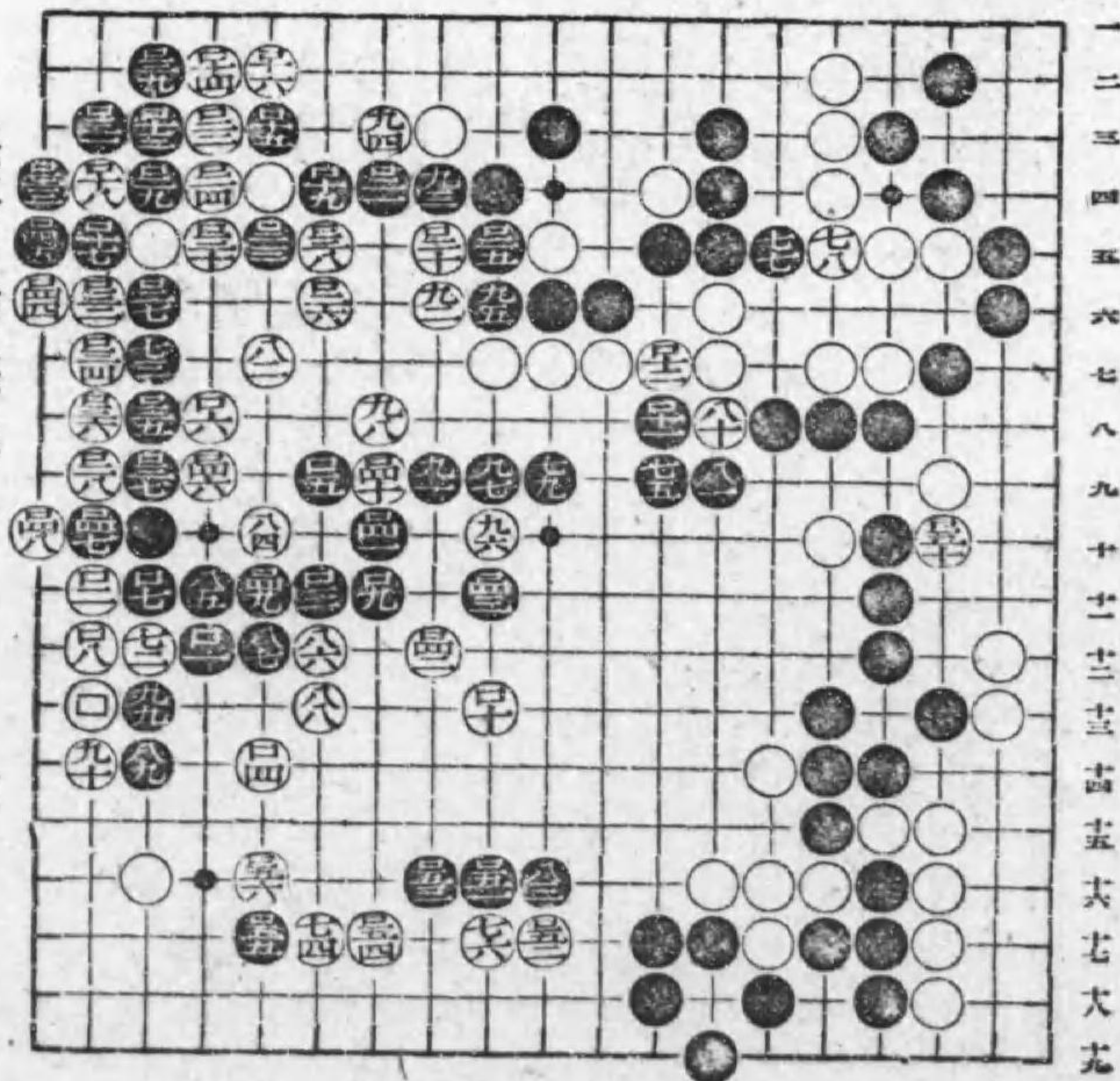
黒七九で假りに「リの十五」は、白は「ヌの十」で、黒「リの十一」、白「ヌの十一」、黒「リの十二」と黒に圍はせて、白がよい。黒七九、八三と、大規模にやつて來たのに、白がその方に構はず八二、八四と、五と七三の黒を攻めてるのは、その黒の凌ぎにより自然に白は「ヌの線」に侵入が出来るからである。

黒八九は、流石に善い。白九十を「タの十三」は、黒「ヨの十三」、白「タの十四」、黒百四と出るのが、即ち、黒八九の意味。

白百十六を百二二だと、黒は百一九。

以下の白を、手毎に味つて見られよ。實に妙趣を極む。が、百五六となつて、次に黒「カの三」、白「カの二」、黒「チの二」、白「ワの二」、黒「ルの二」、白「カの八」と、白は活きる外なく、そして黒は「リの十三」で、黒の勝局と判じる。

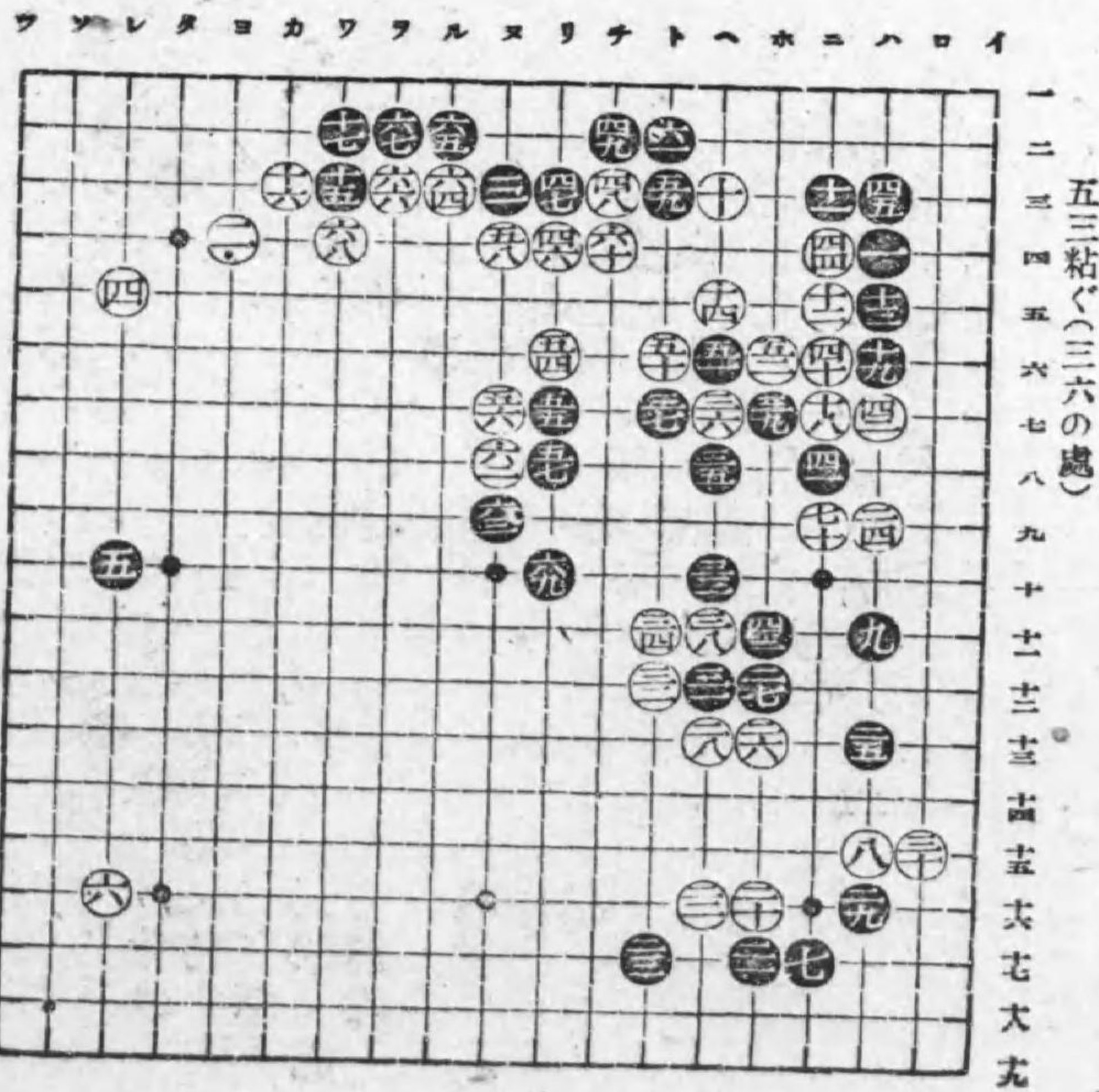
アツレタヨカワアルヌリチトヘホニハロイ



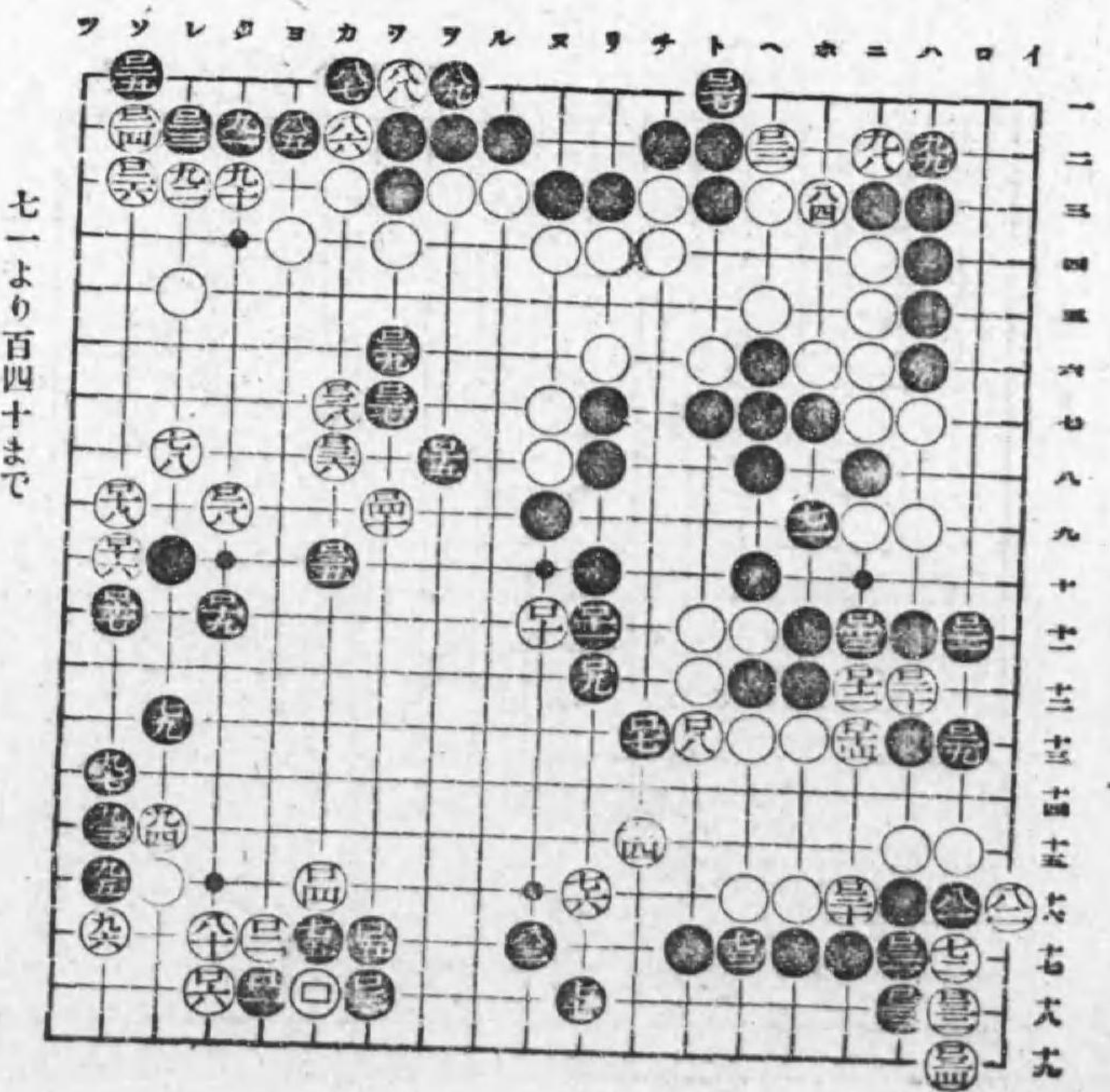
七二より百五六まで

名人 中村道碩
先 安井算哲

本局では、黒は現今行はれる所と同じく九と行つた。
 黒十三を「ホの四」だと、白は十三。
 黒十五を四十だと、白は六六。
 黒十七は、位が低い。十七を六八だと位が高い。
 白二八を三一、黒四三だと、二八に截れが遺る。二八の手法は、現在も基礎的に行はれる。
 黒四五を「ホの三」だと、白四五、黒「ロの三」、白「ハの二」、黒「ロの二」、白「ロの六」、黒「ロの五」、白「イの五」、黒「ロの四」、そして白「ホの四」、黒「ニの二」、白「ホの二」、黒「ハの二」となつて、白の姿勢が整ふ。
 白六四を「リの九」だと、黒は「チの六」。
 六八となつては、黒は位低くして悪い。これ黒十七を六八に行びなかつたため。
 黒六九を「ルの九」だと、白に「トの十」と押される。

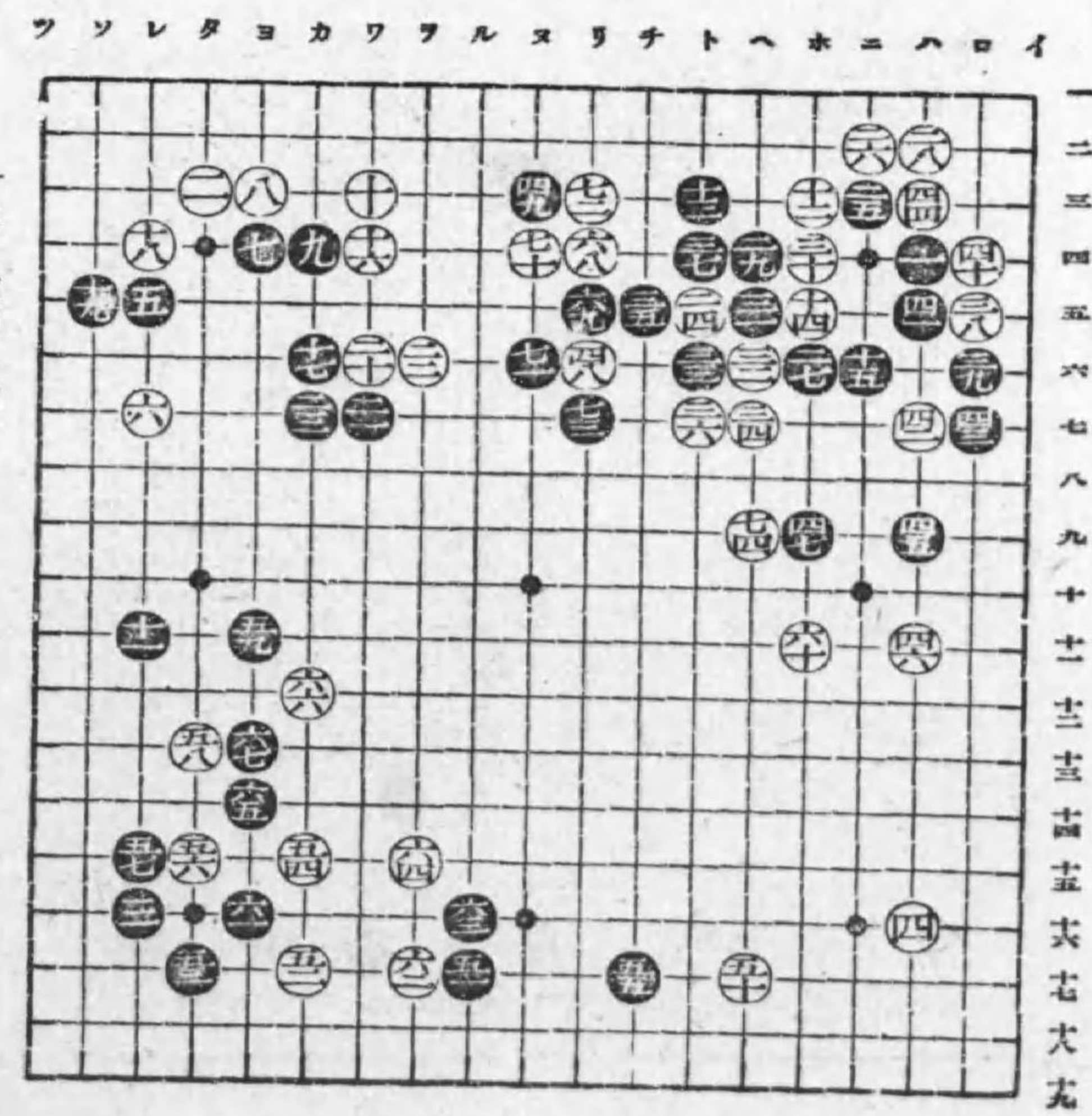


白七六を「リの十七」だと、黒七六、白「チの十六」、黒「チの十七」、白八三、黒「リの十五」と黒は戦つて來やう。
 白八四で百十五と飛んでゐるのも大きい。
 黒九三より九七までと、七九の方を強くしたのは、例へば黒は「ヨの八」などへ打込み白地を消し行く準備と、尙ほ黒は「ソの十八」。それがため百六までとなつて白に「テの十七」に打込まれることを消した。
 白百十二、百十四は、黒「トの十六」、白「トの十五」、黒「ニの十四」、白「ニの十五」、黒「ホの十四」と黒に入り込まれ、白「への十五」に粘ぐと、黒百十四となつて、この白の大石は眼形を失ふから。その白「への十五」を百十四、黒「ハの十四」、白百十二、黒百二十、白百十三は、黒は「への十五」で、右下隅の白との攻合は黒が勝。
 黒百十七を百十八は、白「レの十一」、黒百十七、白「ソの十二」と、白は應戦する。
 倍、百四十となつて、假に黒「テの九」、白「ワの十」のとき、黒は「カの十九」で、黒に敗はない。そのとき白「チの九」は、黒は「チの六」。

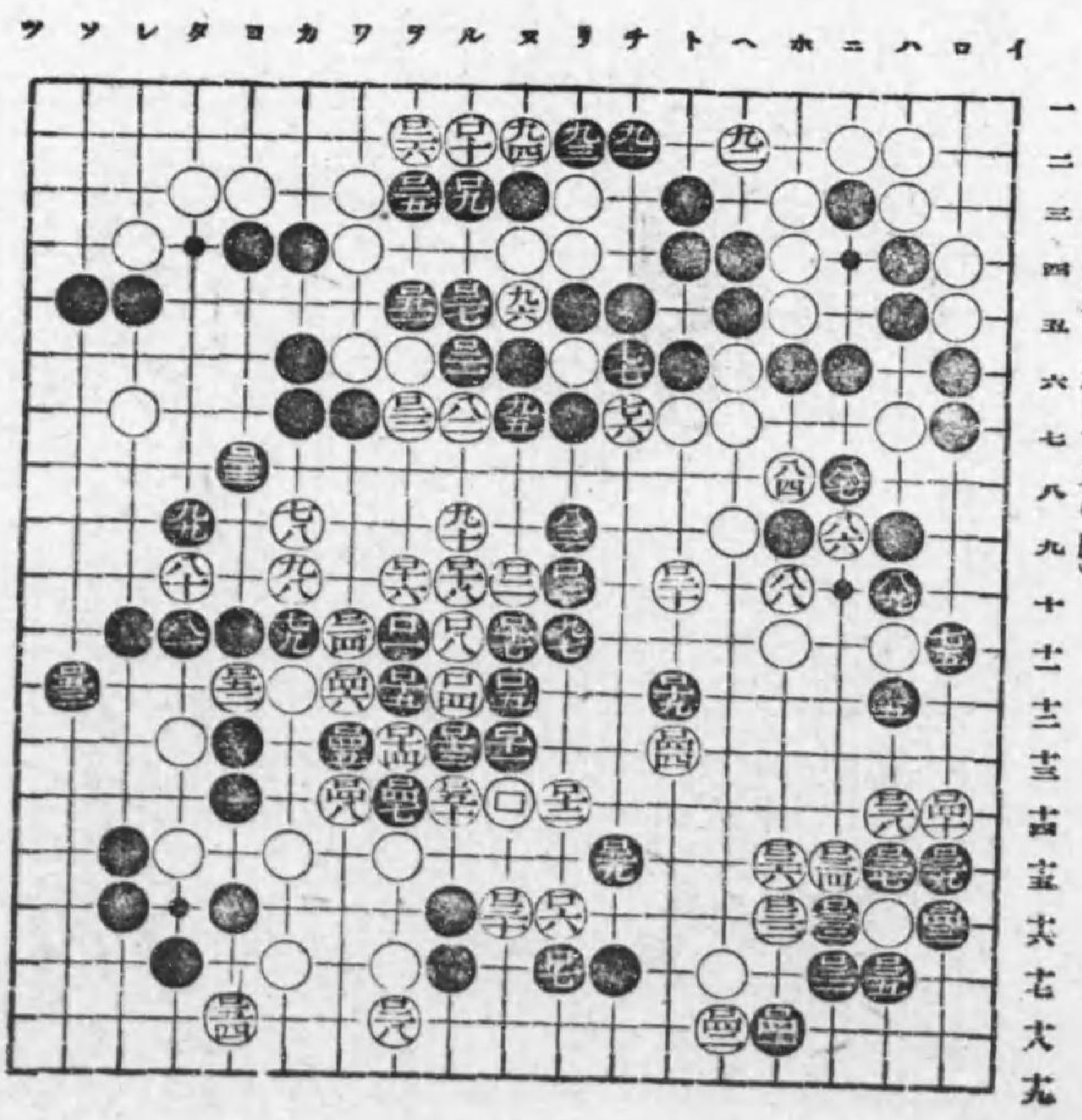


名人 中村道碩
先 安井算哲

白二十で七二だと、黒は「ワの五」。
白二四と、黒十三を攻めたのは、黒十三が活る結果は一方へ大なる影響を及ぼすからである。白二四を七二だと、黒は二五で十三の一手を棄てる方針を取る。
黒二五は、十三を活る結果の悪いことを見て、十三は棄てる方針に出た。
黒二七を二八だと、白「ニの四」、黒四四、そして白は二七。白二八を三二だと、黒は二八。すると、黒に二九と来られることが遺る。この経緯で、三七までの現はれとなつた。
黒三九を四十だと、白は「ニの五」。
黒四三を「ロの三」は、白は「ハの六」。
白五十で、六の一手を「タの十」などへ出ない所に、白の大勢打算の力が現はれてゐる。

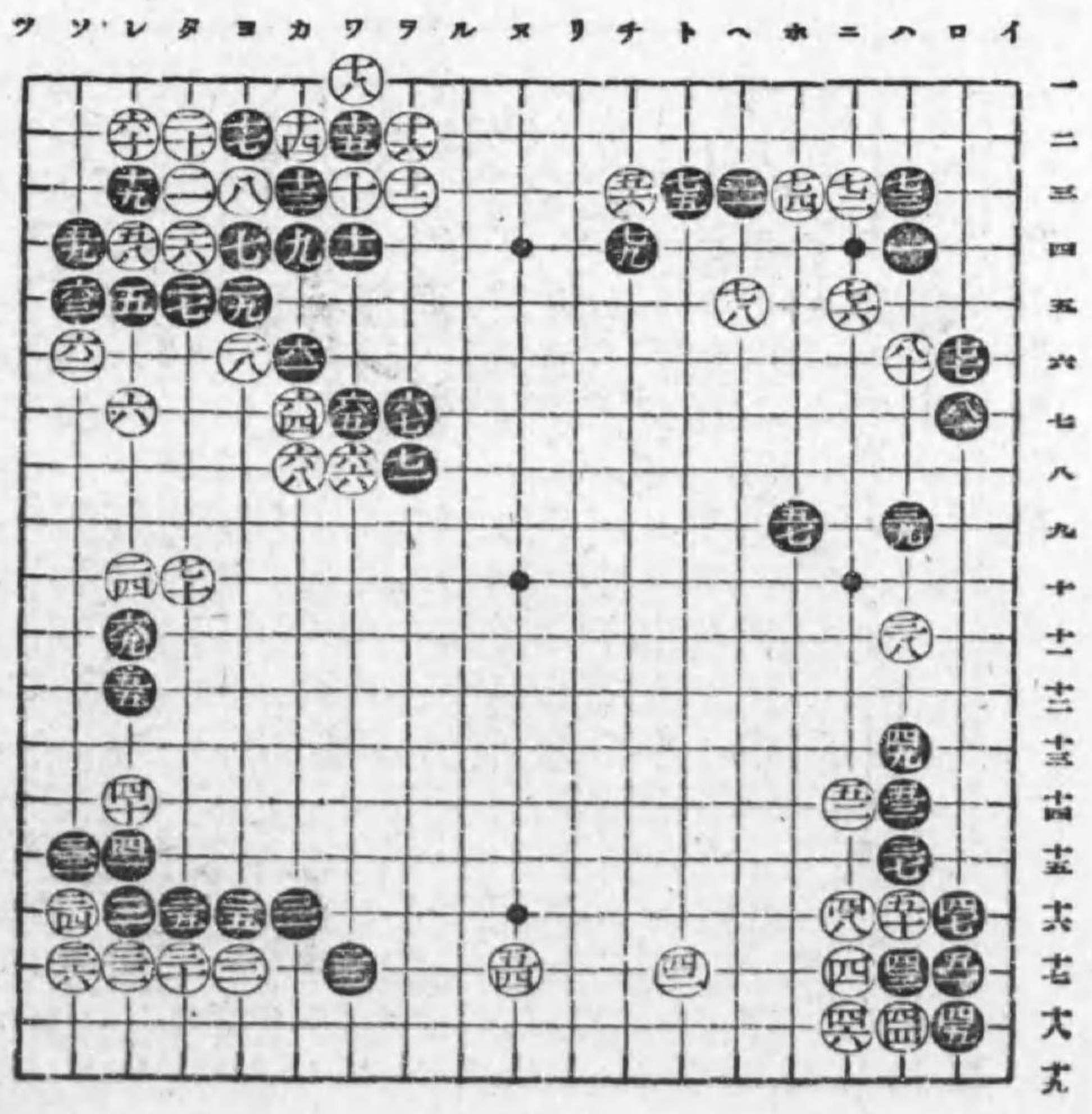


黒七五は白に「ロの十」と来られるから。白七六を「ロの十二」と、黒八九、白「ニの十二」となつて、黒に先手を取られる。
黒七九を「ヨの九」だと、白百五二、黒「タの十二」、白七九、黒「ヨの十」、白「ヨの十五」、黒「タの十四」と白に其處を整へられる。
黒に八五と打たせたことは、白の損だが、白は八八までが堅固になり、八三以下の黒を九十と攻めることによつて、七八の一手の方へ大いに利した。
白百十二を百五十だと、黒は百十二。
黒百二二は、百七、百九の方を活るのに没頭してゐる。白に百二三に入られ、「カの六」以下の三子を取られることになる。
黒百三一を「への十六」、白「ホの十七」、黒「トの十七」は、白に百四四と来られ、この黒は八五の方へ辛くも連絡。また一方は、白「ルの四」、黒百五一、白「テの四」、黒「ツの五」と、黒は連絡。が、黒は悪いと見てかう百三二だが、黒は容易に勝てない。

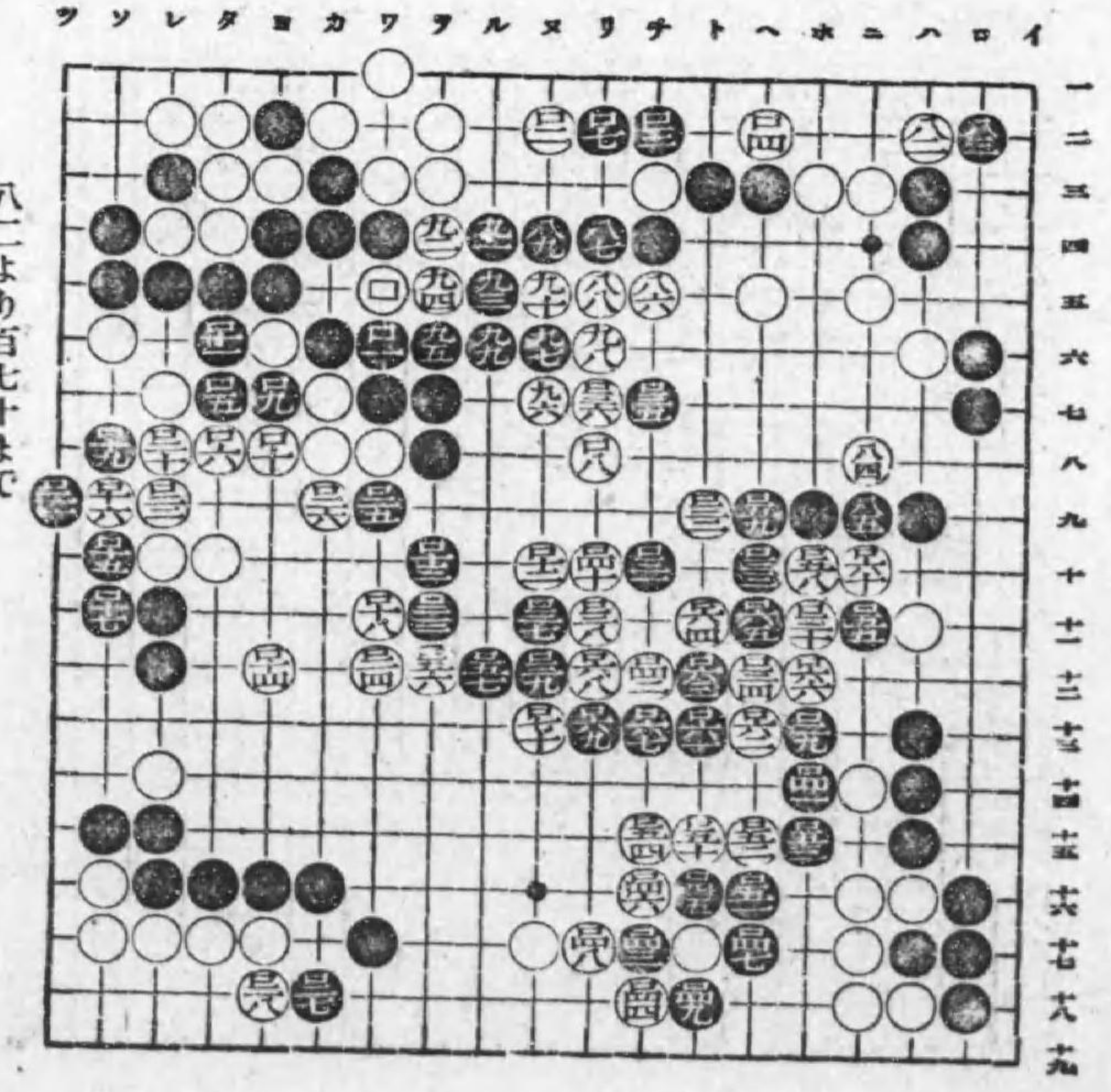


名人 中村道碩
先 安井算哲

黒三一は、三五がよい。是は今日基礎的に行はれる。
 黒四三で「への十六」、白「への十七」、黒四三、白四四、
 黒四八、白「ホの十七」、黒五一となるのが、今日の通形、
 五三までとなることは、黒は位低くして面白くない。
 白五六は、五八より六六迄と、其黒を攻める準備。
 白六六を「ワの六」は、黒は「テの六」。そして白「カの
 五」、黒「ワの五」、白六一に粘ぎ、黒「ルの五」は、白は粘
 いだ所が重くして悪い。
 黒七五は、「への四」がよい。そのとき、白「への二」は
 黒は「ホの五」。その白「への二」を七六は、黒「ニの四」、
 白「ホの四」、黒「ホの五」、白七八、黒「ホの六」、白「へ
 の二」、黒「トの五」となつて、黒がよい。
 八一までとなつては、黒は右邊が位低く、面白くな
 った。これを黒の敗兆と見る。



黒九一を百二は、白は百三。また黒九一を百三は、白
 は百二。百一までとなつた結果の、黒の大きい悪いの
 は、前譜黒七五のためであつた。黒百一に至つては百三
 六に切り、決戦する機會。されば白百は、百八で充分。
 また白百二、百四も、百八が善い。
 黒百三二を百三三、白百六五、黒百六四、だと、白は
 百六二。黒百三一、百三三と、戦ひに出たが、百三三以
 下の黒が治らないので、黒は、思ふやうには働けなかつ
 た。
 黒百四三と其處に手段を盡してゐるのは、黒は百六三
 に入つて白を兩断しやうといふことにある。
 黒百五五のときには、白「ソの十四」、黒「ソの十四」、
 白「ツの十三」、黒「ツの十五」、白「タの十四」、黒「ソの
 十三」、白「テの十四」となつて、左上隅左下隅の黒の大
 石は眼形全からず、また、白に「ホの十六」に切られるこ
 とがあつて、黒は既に敗勢を露はしてゐる。黒百五五で
 「ホの十八」は、白「ホの十六」で、白に劫立て多く、黒は
 結果が悪い。



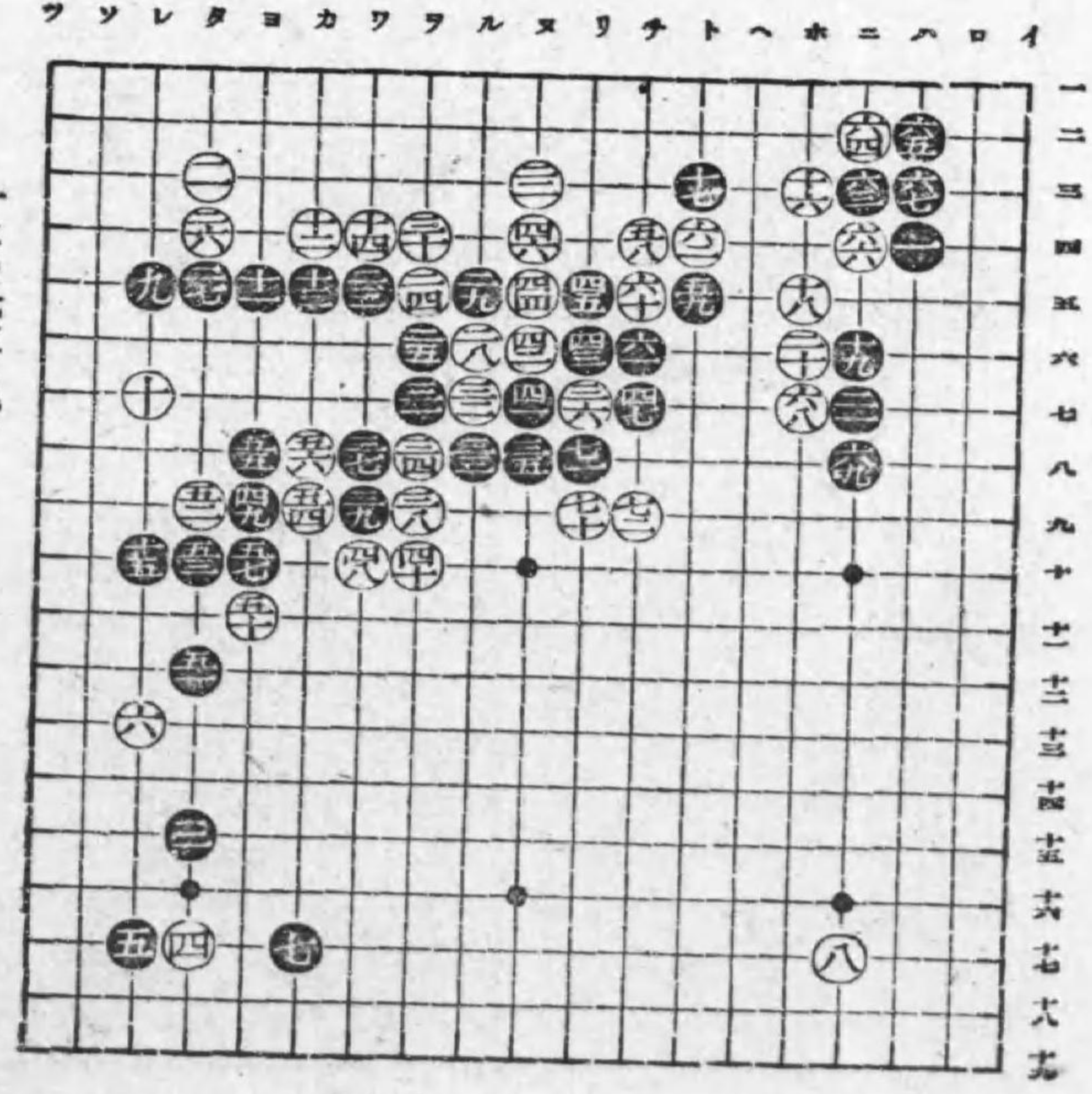
名人 中村道碩
先 安井算哲

黒十五の打込みに對して、白構はず十六と轉じたのは
黒十七で五七なら、白「レ」の十六、黒「タ」の十六、白「ソ」
の十七、黒「レ」の十八、白「レ」の十五」と、白は六の方を
治る。そのとき、黒假りに「ヲ」の六なら、白「レ」の四」と
十の一子を棄て、善いといふことにある。

白二六で二八だと、黒は「ヨ」の三。二六は即ち二八と
行く前提。

黒四一で「カ」の十一は、白は七一。黒は四七と征にか
けたことは善いが、白も亦、絶大の好點である四八を占
めた。

五五を五六、白「ツ」の七、黒「ワ」の六は、白は五五。
六三で六八も、黒は悪くない。七二となつては、黒は
七一以下の逸出を圖る外はなく、次譜八二までとなつて
六九の方へ打撃を受けた。



白八十を八二だと、黒は「ル」の十。

黒八三で「リ」の四、白「リ」の三、黒「ヘ」の四、白「チ」の
三、黒「ヘ」の五、白「ヘ」の三、そして黒「ホ」の四、白
「ニ」の五、黒「ト」の六は、白「ハ」の五、黒「ト」の二」まで
の變化とならう。これは八三以前に、さう行つても右の
手順を辿ることとなる。

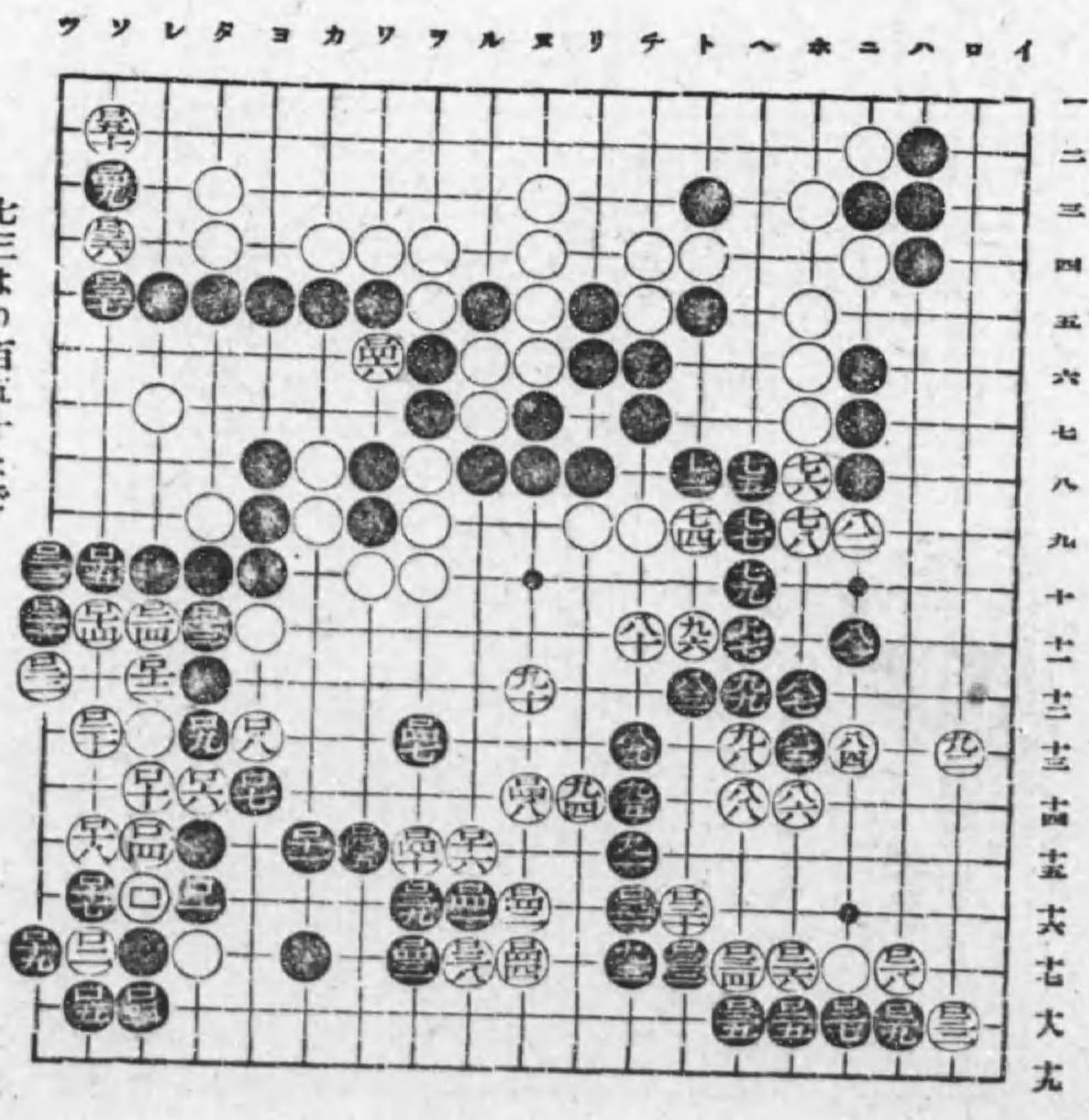
黒八五、八七で、白に八八と、右下隅へ大きな地を取
らせたのは黒は面白くない。されば黒八五は「リ」の四」に
出て前述の變化を圖り、八三以下を治まるのがよい。

九二となつて、右下隅の白は十分に整つた。問題は左
下隅に轉じて其處に百五までとなつたのは、當然の推移
である。

黒百五を百六は、白百五、黒「タ」の十八、白「ソ」の十
二」となつて、黒は實質を失ふ。

白百十六は、黒に「ル」の十四」と圍はれるから。
黒百二五を百三八だと、白は百三四。

此局は、白黒互に六十目以上になり、微細な争であつ
て、勝敗は俄に判じ難い。



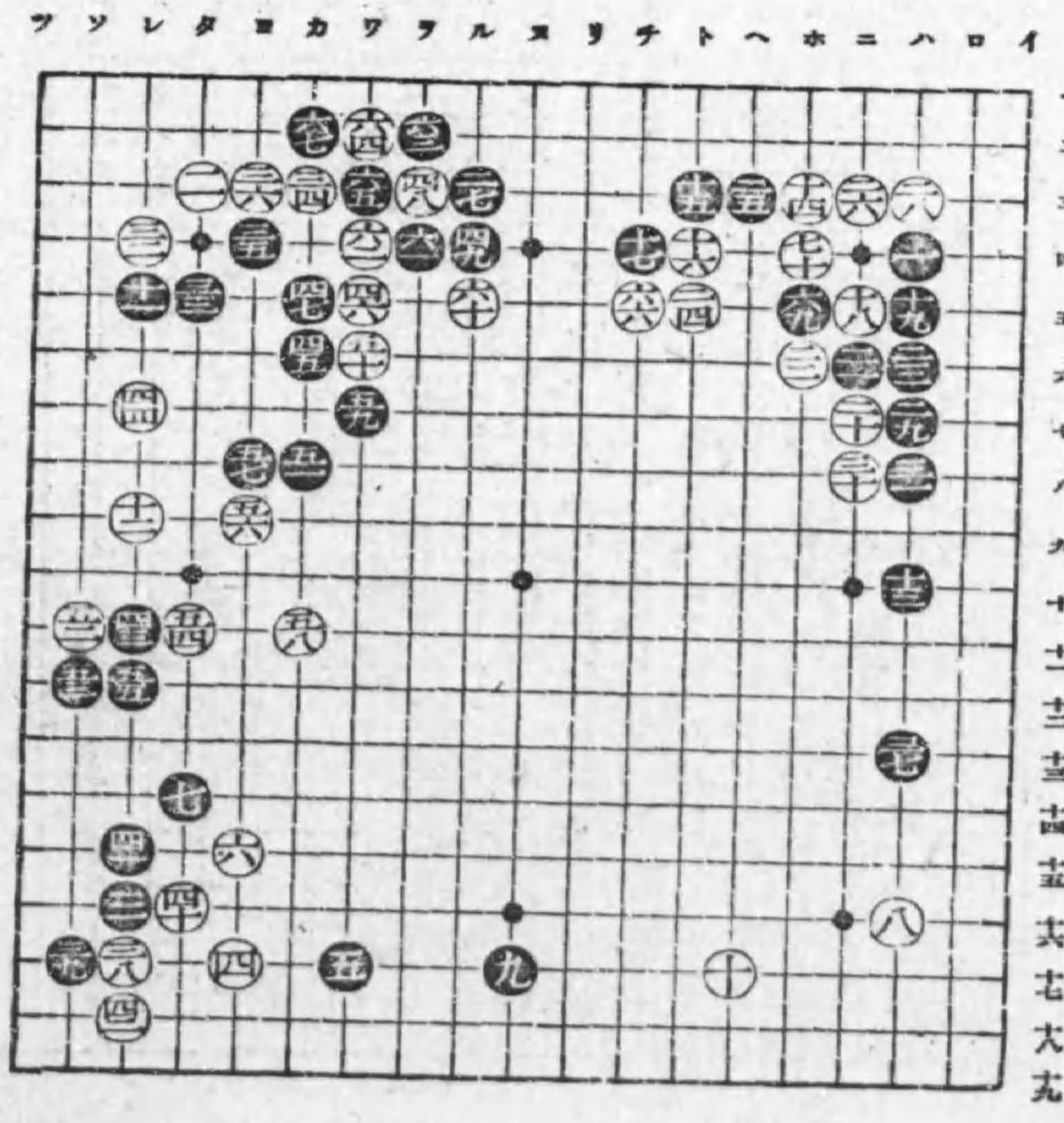
名人 中村道碩
先 安井算哲

白十六を十八だと、黒「ニの四」、白七十、黒六九、白「への五」、黒二二、白十六、黒二一、そして白「チの三」は、黒に三五と来られ、白が面白くない。ので、白は先づかう十六。

黒十九で「ニの四」、白七十のとき、黒六九と殺ること、十六、十七の交換があつて、その目的は達し難い。其處に、白十六の工夫がある。

黒三七は、三一の所が堅い故、四三がよい。
白四二で五五、黒四二、白「タの十八」といふことも、白は局面を展開させる手段として悪くない。

黒四七は、白は其處へ来られるから。
白七十で六五に粘ると、黒は「への四」。そして、白右上隅を手抜きは、黒「ホの二」、白「ニの二」、黒「ロの二」、白「ロの三」、黒「への二」で、白は取られる。

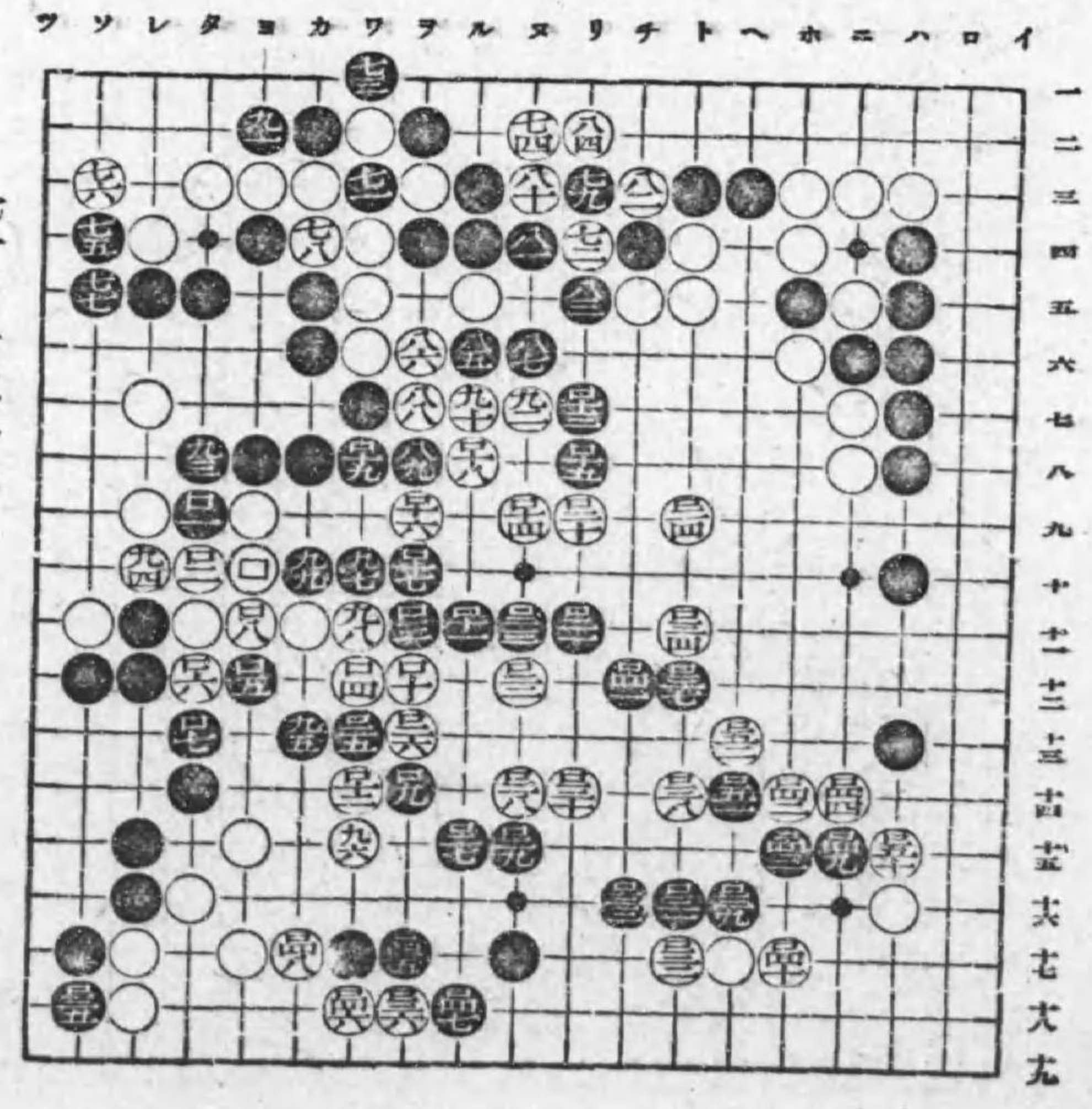


白七四は、巧い手。それは、黒に八四に來られる故ばかりではない。即ち、黒八七か九十と、八六以下の白を取りに來れば、白「ヌの五」、黒「チの五」、白「リの六」、黒「ルの二」、白八八、黒八九、白百十八となつて、黒は八五と九十にある二子は、白に取られる。といふことは、そのとき黒九二は、白百十六、黒百十九、白「ヌの八」、黒百十三、白「チの八」、黒「チの七」、白「トの八」。さうなる黒九二を「ヌの八」、白「ルの九」、黒九二は、白百十六、黒百十九のとき、白は百二十。

白九六で「ワの九」、黒百十九、白百三だと、かう白は百四と苦しい出とはならない。

黒百四五を百四六だと、白百四五、黒「チの十六」、白「ワの十六」、黒「ルの十四」、白「リの十二」となつて、黒「ヨの十八」と白を取りに行けば、白は「カの十八」。のとき、黒百四八は、白は「ワの十九」。

白百五二で手止りになつてゐるが、黒百五三は「チの十四」、白「チの十五」、黒「チの十三」、白「リの十五」、黒「トの十五」となることによつて、黒の勝と判定する。



名人 中村道碩
先 安井算哲

白十四、十六によつて、かう二四までの型は、二五までと黒地が出来るから、今日では白の不利と見てる。即ち、白二六を四六は、黒は四七。されば黒二七は四六が善い。

黒四三は、白「チの十八」と取りに来て、黒「チの十九」、白「ルの十九」、黒「ワの十九」、白「ルの十八」とき、黒は「ワの十五」で活きるから。

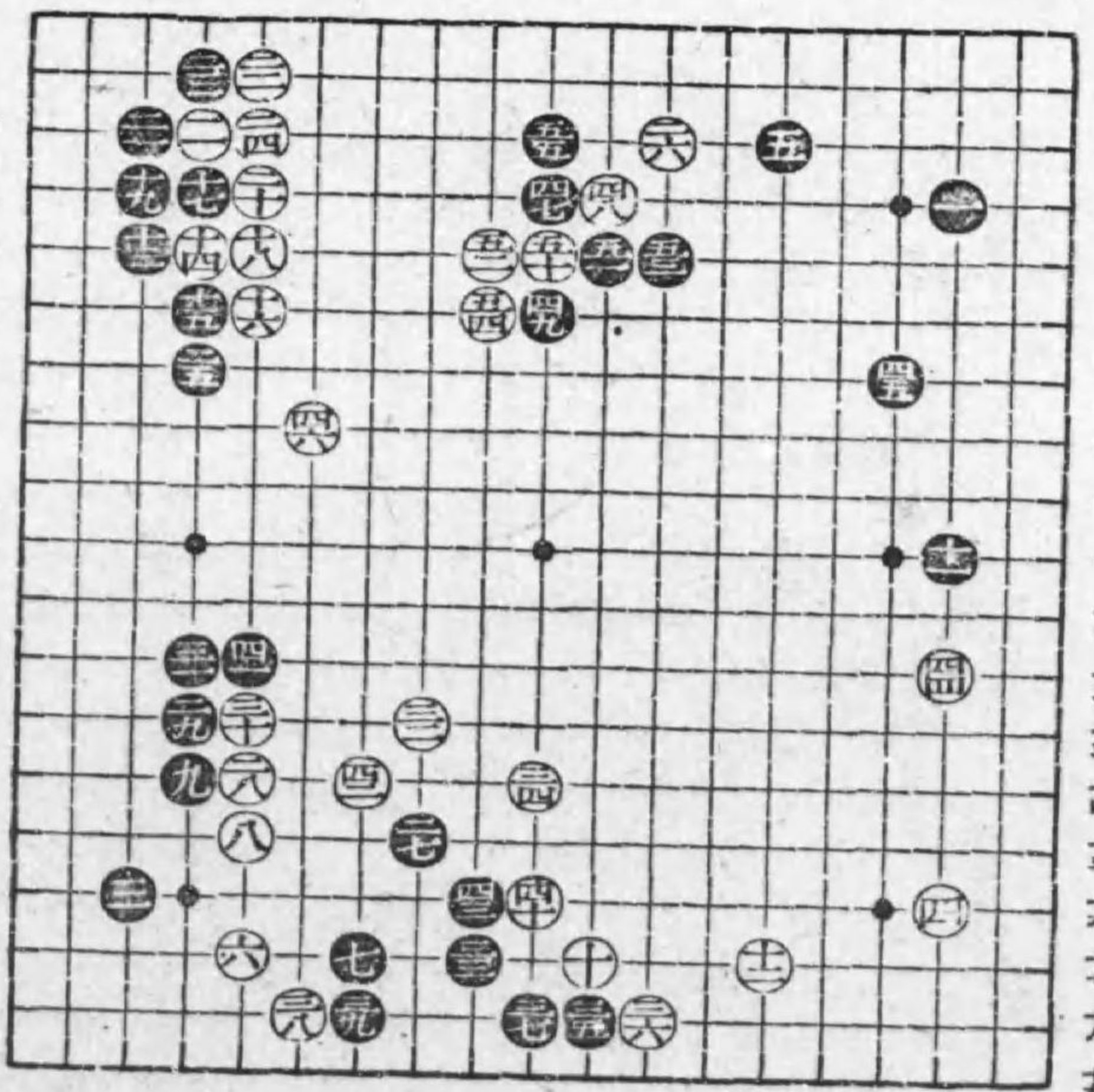
白四六で五三だと、黒は四六。

黒四七は、大勢を定めに行つた一着。

白五十を五一だと、黒は五十で自己の三子は堅實。

黒五一で五二だと、白五一、黒五四、白「チの七」となつて、四七の一子は味が悪い。それで黒は、五三までと四七を棄て右上隅を固める方針を採つた。
白五四を五五だと、黒は五四。

フソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



一より五五まで

黒五七で五八だと、白「トの三」、黒「リの三」、白六十と、白は「リの四」の一子を棄て、戦ふであらう。

六五以下の四子は黒は當初より棄てる覺悟であつて、六六となつたことは黒の失敗ではない。

白七六を百五だと、黒は他に轉じる。白七六は、黒を百五に渡らせず先手を取る善い要領。

白八四で「チの十一」だと、黒「ニの十」で、白は敗と見たのであらう。

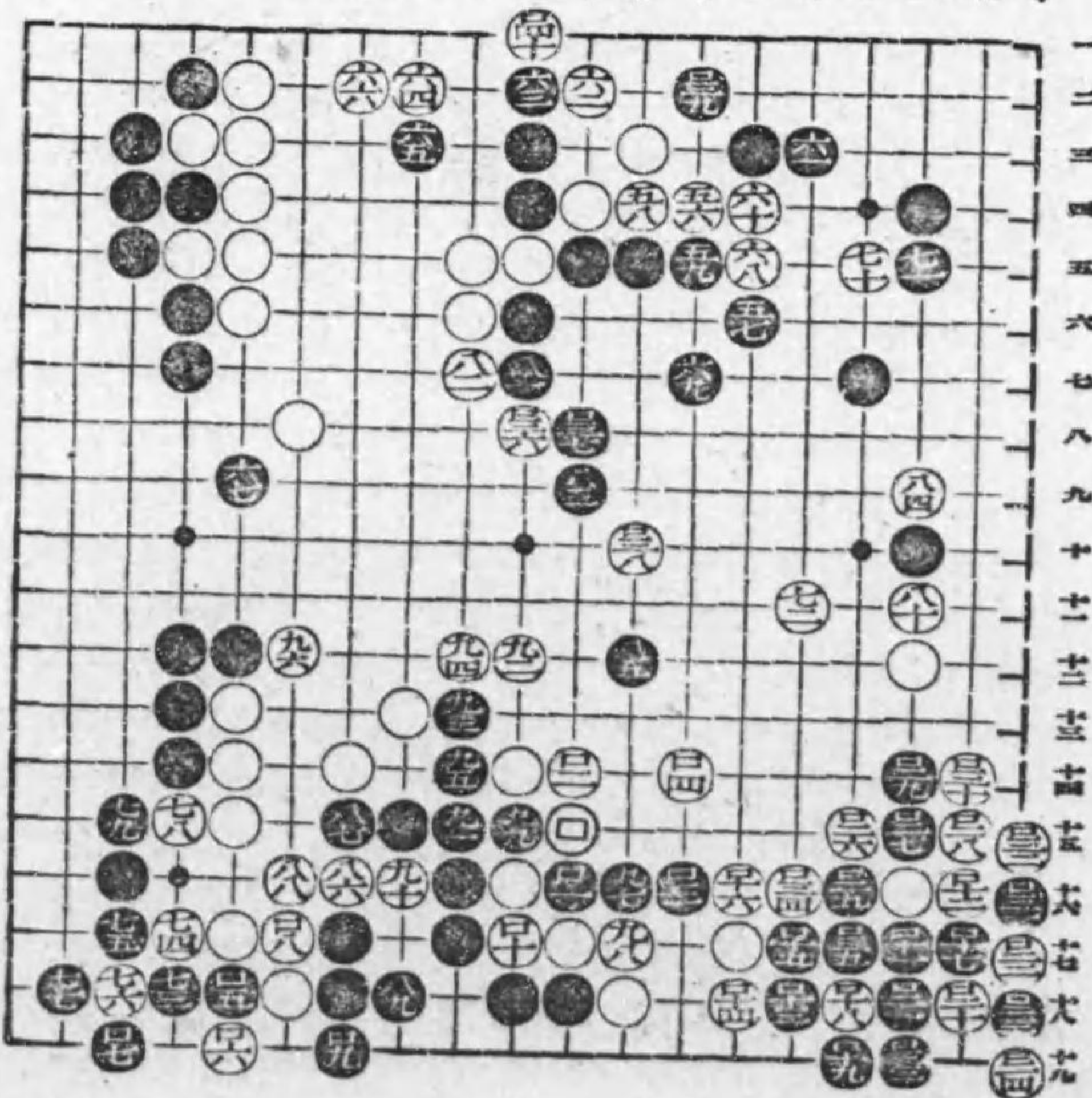
白九二で、百九に黒を取りに行くと、黒九三、白九五、黒「チの十四」、白「ワの十三」、黒九九、白百、黒百二、白「ヌの十三」、黒「チの十五」、白百一、黒は九八。

黒は、百三となつては、百十一其他の手段が生じた。
白百十二で百三五だと、黒は百十八。

黒百十九を百三五だと、白百二三、黒百二二、白「ホの十九」。

黒百二二を百二三だと、白百二二、黒百三五、白「ロの十九」の五目中手で、黒は取られる。
百四十で手止りだが、黒の勝。

フソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



五六より百四十まで

名人 中村道碩
先 安井算哲

白八で十一だと、黒八、白「ロの四」、黒「ロの五」、白「ロの三」、黒「ハの六」となる。これは、今日も白が面白くないと見られてゐる。白十二までは、そのためであらう。それで、今日では白六は七。

黒三九、四一の要領は、今日と變りはない。

白五十は、餘程見極めなくば、さうは飛べない。即ち黒六七で七二だと、白「チの十四」、黒七六のとき、白が「ハの十一」と右下隅へ連絡し四六以下の四子を棄てるのと、かう七九となるのは、共に六三以下の黒の損は甚しいからである。

黒七七で「チの十二」だと、白「への十四」、黒「ホの十五」、白「チの十三」、黒七八、白七七。

黒七九は、白「ロの十四」、黒「ハの十三」、白「ロの十八」となつて、黒が悪いため。

黒八三を百五九だと、白は百六十。そして黒「トの九」は、白「トの八」、黒「チの八」、白百五六と、白は黒の其處の出を極力止める。即ち黒八三は、白にさう出を止められないためであつた。

八四となつては、黒が面白くない形勢。

白九六を九九だと、黒百三、白百四、黒百七、白百、

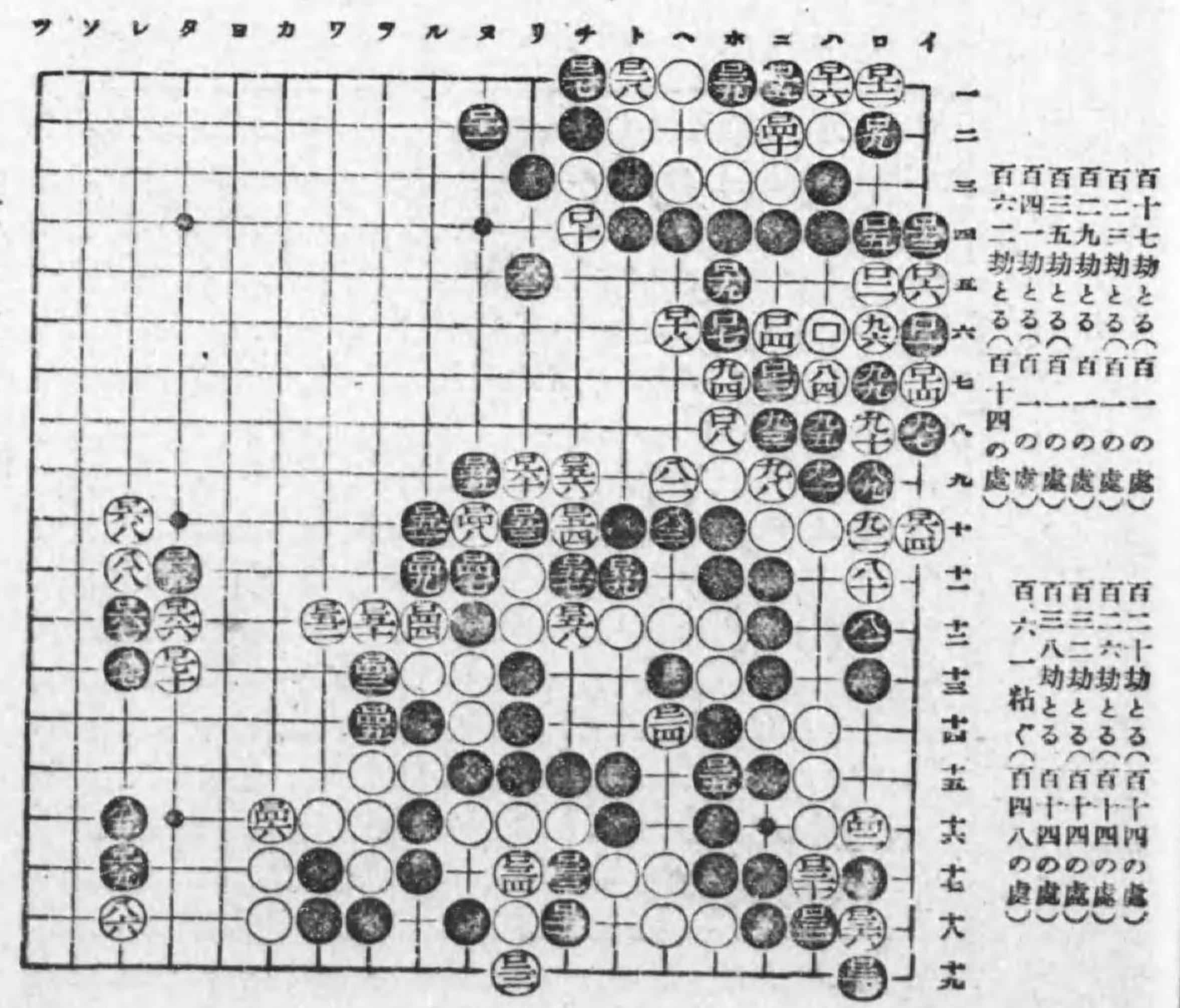
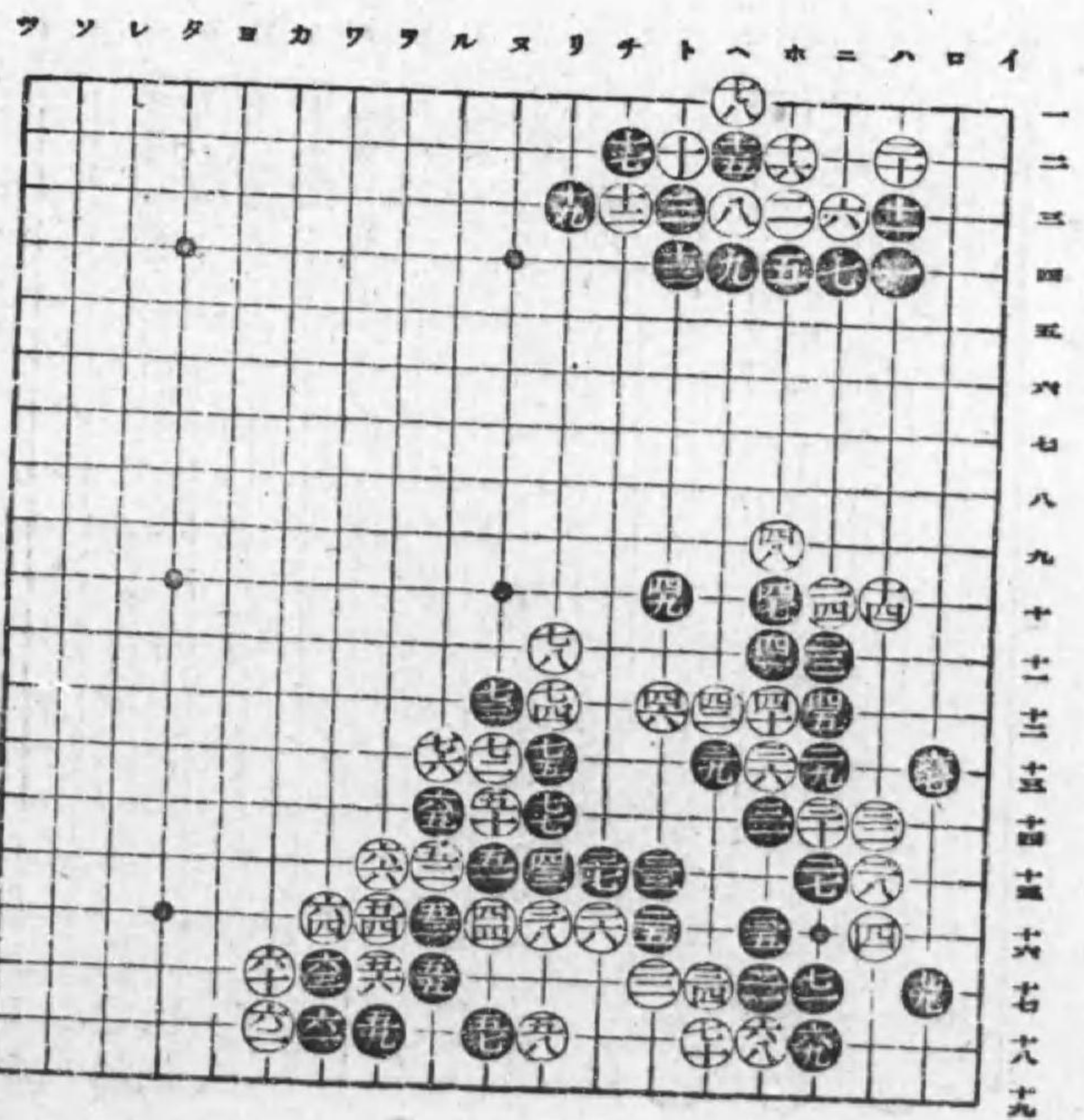
黒百八、白「への七」、黒「への八」となつて、白が悪い。

白九八を九九だと、黒は「イの十一」。そのとき白百六

四は、黒は九八。

黒百四三と來れば、白は勢ひ百四四と出る一手で、白百四四を百四五、黒百四四となることは、白は到底忍び得ない。

黒百四三と運動を起したのは、百五九までの結果を期待したためであつて、黒は、白百四二の一着を無駄にさせ、この機會に頽勢を挽回のため、が、尙ほ局面廣くして黒の勝を収めることは容易の業ではない。これ、前譜白五十といふ道碩先生が最も得意とする敵誘引の一手によつて、六二までの黒の結果の悪かつたに因る。

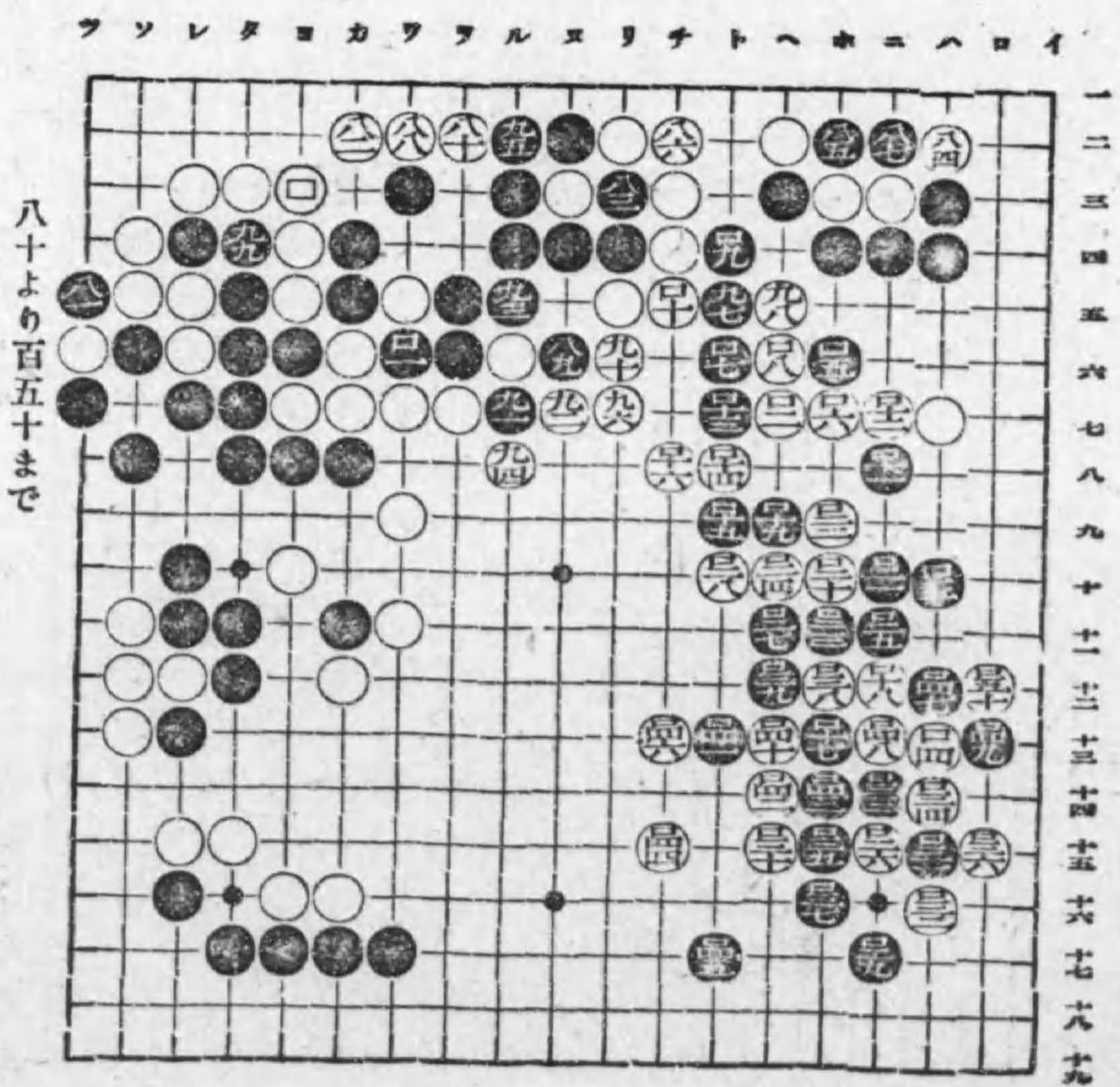
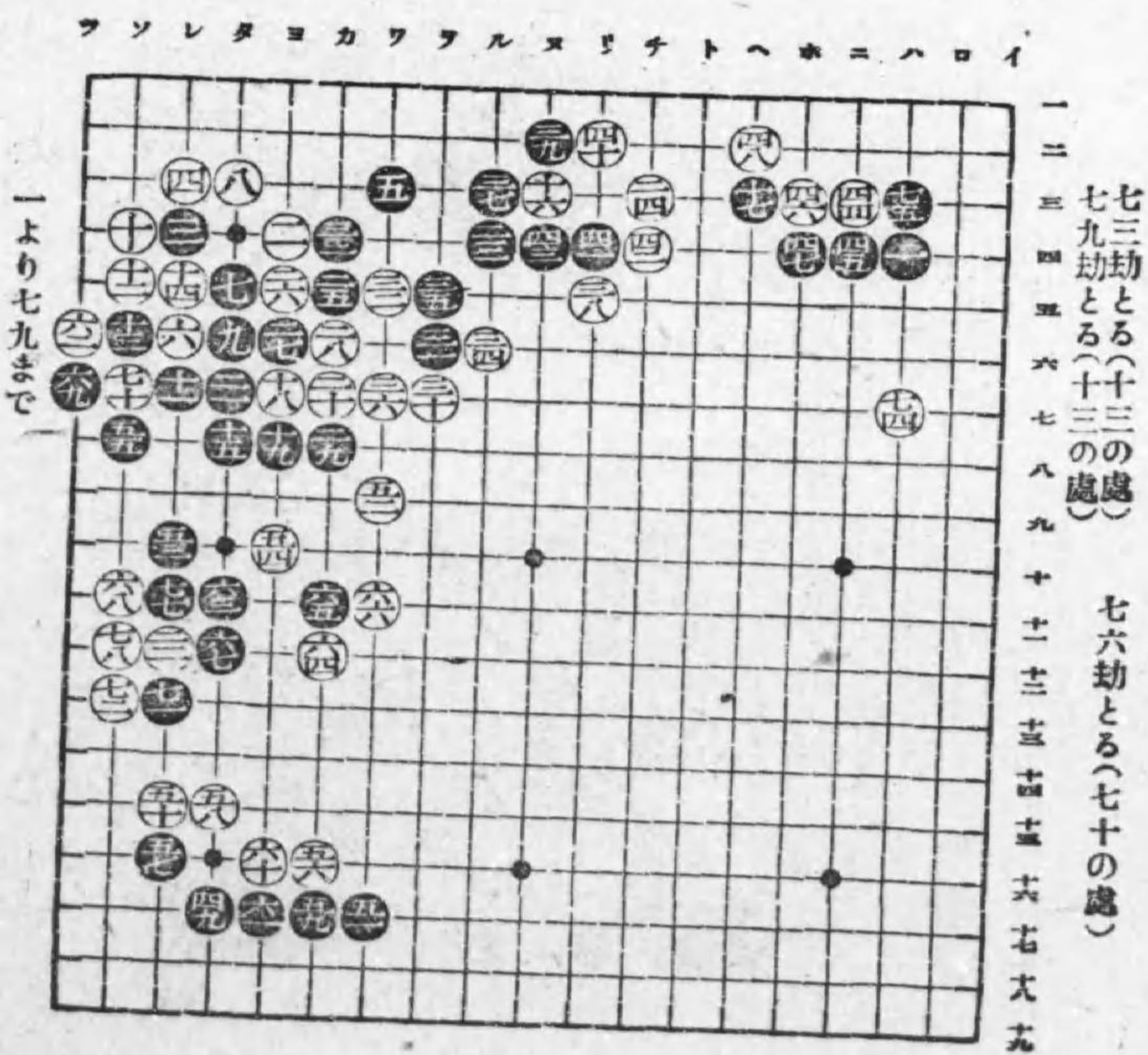


八十より百七十まで

名人 中村道碩
先 安井算哲

白二十で七十は、黒五五、白二一、黒六九、白三六となつて黒は三子を取られ、五の一子が重圍に陥る。で、その白七十には黒は三六、白五五、黒三二。
黒三七で「ルの七」だと、白「ルの八」、黒「ヌの七」、白五二となつて、白に五四と二九以下の出を止められぬやう黒六三なら、白は「ワの四」、黒「カの三」、白「チの四」で、黒は三一、三五を棄てる外はなくなる。
白四四を「リの三」だと、黒は「ワの六」。すると、白は黒に「ルの七」に截られることに用心をせねばならぬ。
黒四九で五七に、白六一なら、黒四九、白六十、黒「レの十四」も、白の二二に斯う五十と根據を與へなくて、黒はよい。即ち、五十、五一となつたため、延いてかう七十までと黒が止むを得ず劫で活きを圖ることとなつたのは、黒四九を五七に行かなかつた爲にもあつた。

黒八五で八六だと、白「トの二」、黒「リの一」、白「ロの二」となつて、右上隅の黒は根據を失ふ。
白八六で八七は、黒「トの二」、白「ホの二」、黒八六となつて、白が悪い。
黒八九で百十だと、白は九十。そして、黒百九は、白は「リの一」、黒九五、白「トの三」。その黒百九を九七は白「ヌの二」、黒「ルの二」、白九五、黒「リの二」、白「チの二」で、攻合は白が善い。
黒九五で「ヌの八」に切る劫争は、黒は劫立てが白に及ばない。
白九六で「ワの四」だと、黒百十、白「ルの六」、黒九七となつて、白は八六以下を取られる。さうなる白「ルの六」の劫提りを九七は、黒は九六。これは、白の大敗。
百一と黒は活きる結果となつたが、白に百二と大模様を張られては、黒は専心白の模様を消すことに多大の努力を費さねばならぬことになつた。
白百五十の手止りとなつてゐるが、黒より劫を仕懸けるべき状態より見て、黒の勝局とは見られない。



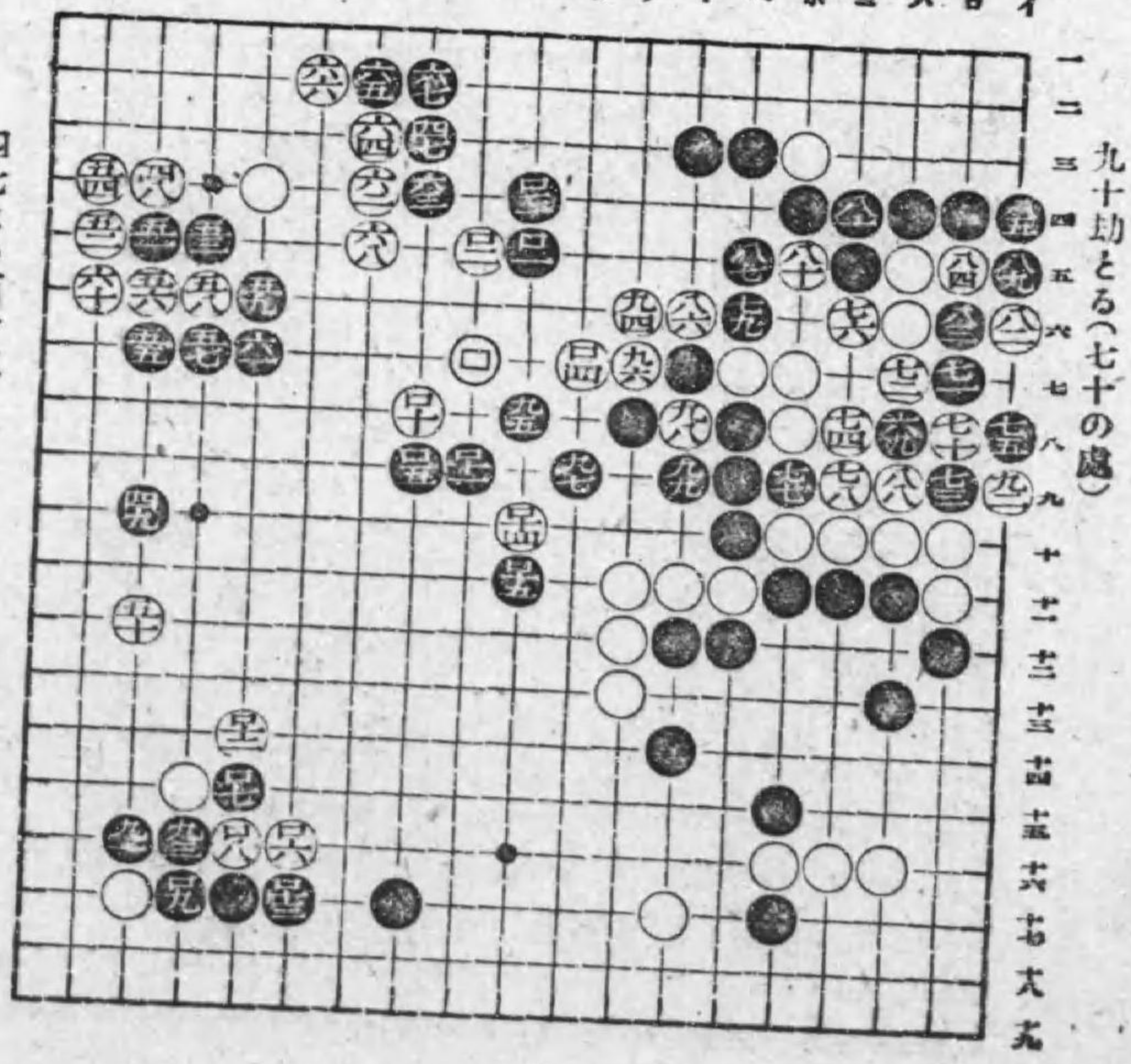
名人 中村道碩
先安井算哲

白八を「ヨの三」だと、黒と同形。白は八より變化。
白十で「ニの三」と活きる結果は、黒の外部が厚装となり面白くないと見て、かう十で黒に「レの十六」と受けさせ、白は「ニの四」。それで、十三までとなつた跡を見ると、一、九とある所へ黒三は悪いが、二と十一との交換の白の悪いのは、黒三の悪きこと以上。それで十一までとなることは、今日は白が悪いと断定。だが一方、白十のある所へ黒七で「タの十七」に入るべきを、七、十二と換つたのは黒が悪い。ので、白は、互角と見たのであらう。

白四二、四四の二手で、黒に四五と打たせ四六と換つて黒五の能動を奪つたのは、白の働きである。
黒四五を四六、白「ニの十五」、黒「ニの十七」と、黒が五を活きることは、黒四三以下を危険にする。

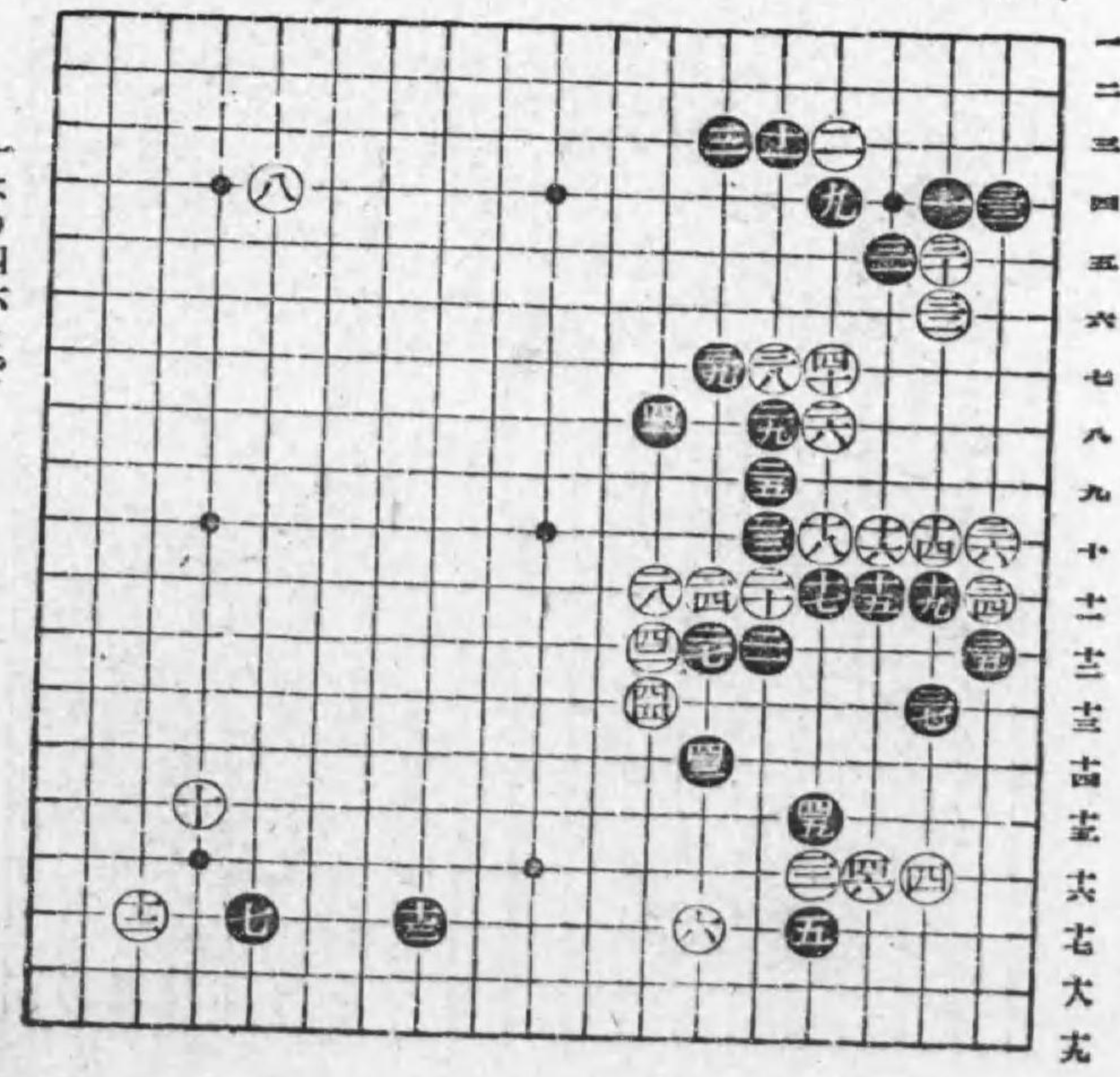
黒四七を四八だと、白に「ルの三」と來られ、黒は悪いと見たのであらうが、さうなつて黒「ヨの三」、白「カの三」、黒「タの三」、白「カの四」の時黒五三が定石だが、此際は其五三で五五と黒は地を取る事も悪くはない。
黒六三を六六は白六三で、黒は上邊を薄くされる。
白七十を七二だと、黒七十、白七一、黒八二、白「イの七」、黒七七、白七八、黒七六となつて白は悪い。
白七六を八二だと、黒七六で白は取られる。
白八八を八九だと、黒は「ホの六」、白八八、黒「イの七」と劫になる。のと、斯う九十と劫争をするのとは、黒に「ホの六」に來られないだけ白は優る。
黒九七を九八だと、白「リ」の八、黒九七、白百四、黒「チの九」、白「ヌの九」となつて、黒は四九の方へ悪い影響を受けることになる。
黒百十五は巧い手だ。尋で、白「リ」の十は、黒は「ヌの九」。即ち、黒百十五を「ヌの九」と受け、後、黒百十五に行つても、白は「リ」の十とは受けはしない。
此碁は黒に地が多くして、無事に治らば黒の勝。

フソレタヨカワアルヌリナトヘホニハロイ



四七より百十五まで

フソレタヨカワアルヌリナトヘホニハロイ



一より四六まで

名人 中村道碩

先 安井算哲

白十で前局では「タの十五」と行つたが、この碁では白は、かう黒十一、白十二と同形に出で、一方は、黒七に白は八の異形によつて、変化を見せてゐる。

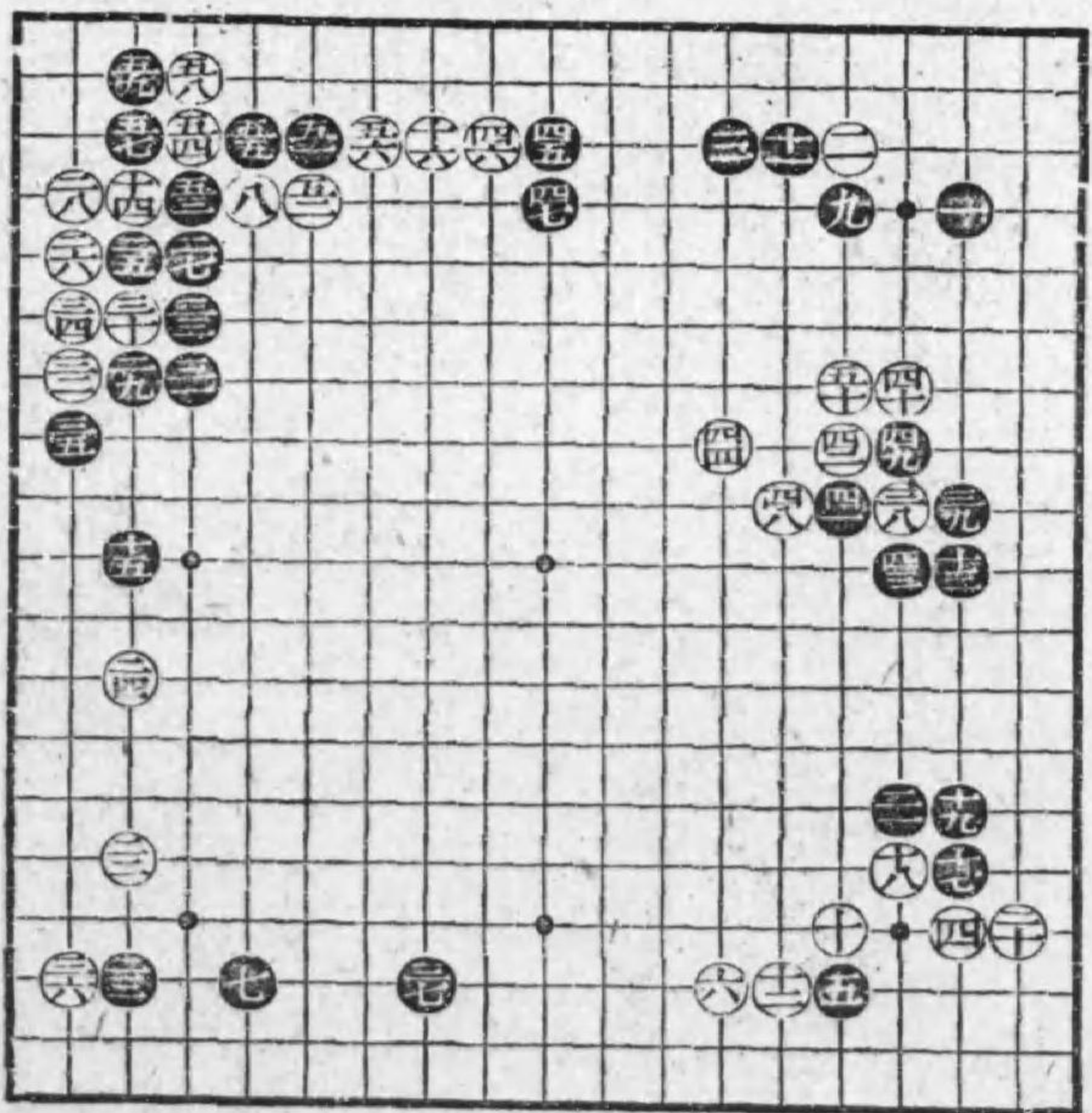
黒十五を「レの十六」だと白十六は十五と見て、黒はかう先に十五。だが、黒十五を「レの十六」、白十五に、黒五六と其處に先着の効を現はしてゐるのも、黒は善い。されば、白十六も、黒十七も、「レの十六」がよし。

黒三七を「ソの十八」に受けると、白「レの十六」、黒「タの十七」となつて、黒が「ソの十四」と白の根據を取ることを、白に先手で防がれ「ワの十七」に來られる。

白三八と衝いたその方面の黒地削減の運動は、時機も善く、今日見る所と變りはない。

また黒四一も、白四十に對することゝして、今日と變りはない。

ツソレタヨカワアルヌリナトヘホニハロイ



一より五九まで

白六十を六一だと、黒六十、白「ヨの二」、黒七二。のとき白「ソの二」は、黒「ツの四」で、白は攻合敗。

白六二で七四だと、黒は「ヨの二」。黒七三で七九と、白の三子を取つたとき、白七四、黒七五、白八三は、黒は「ヲの一」で攻合勝。だが、黒七三を七九だと、白に七六と來られ黒が面白くない。

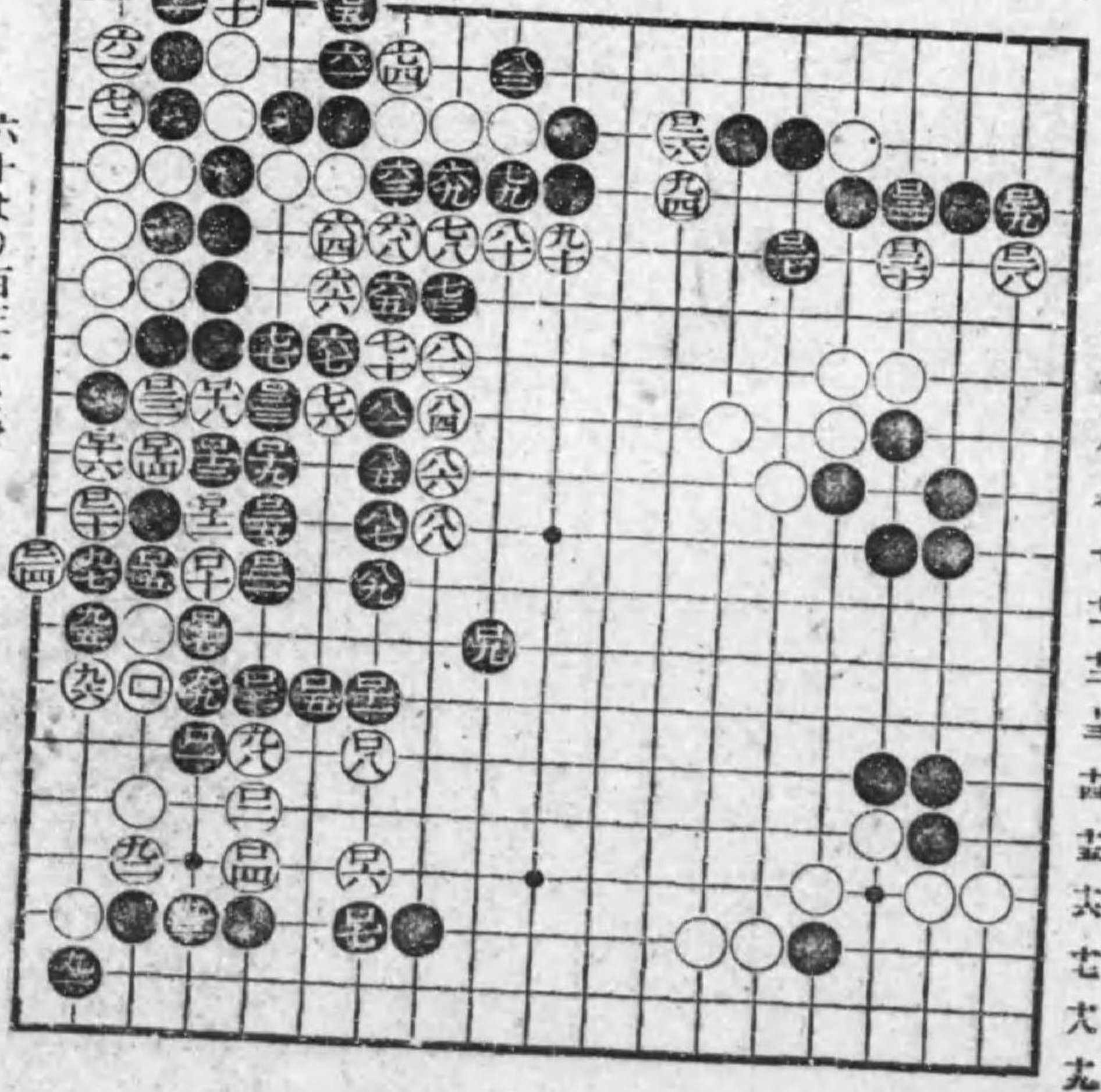
黒八三は白八十がある故、白八三、黒「ヲの一」、白「ヌの二」、黒「リの二」、白「リの一」、黒「チの二」、白「ワの一」となつて黒が攻合敗けのため。従つて黒八三で「ルの六」と二子は出られない。

白九六で九七だと、黒百、白九六、黒「ソの十四」。黒百十一は、白百十一、黒「ワの十二」、白百二五となつて黒が悪いから。

黒百十五を百十六だと、白は百十九。即ち、黒百十五は、白を百十七に受けさせ、黒は百十八。

百三二となつて白「トの六」、黒「リの十七」となれば、黒地は七十目近くあり、尙ほ黒には「ツの十三」と白を攻めることもあつて、斯局は白が敗。

アソレタヨカワアルヌリナトヘホニハロイ



六十より百三二まで

白十二より十九までとなることは、黒の外部が無限に厚く、十九となつた黒の外部は一手多いにせよ十八となつた白の一隅の倍位の實質が含まれてゐると見てよい。それで、白十二は今日では「レの十四」。

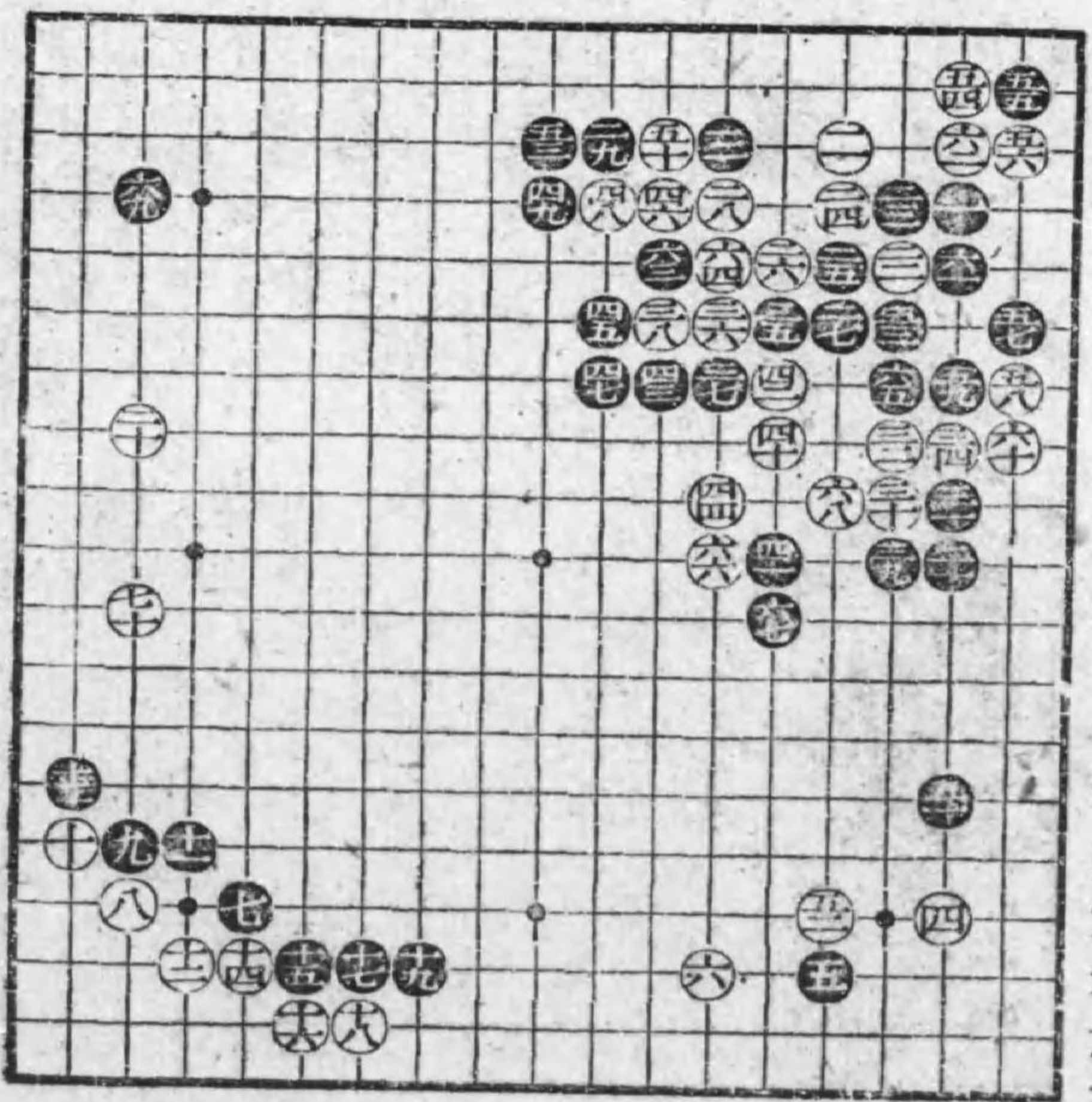
黒一九で三三、白五十のとき、黒は「タの三」もよい。延いて五十までとなつては、混沌として、黒は白に乘じられる機会が多くなつた。

黒五七で「ヨの二」、白「ニの三」、黒六二は白は六一。また、黒五七で六二は、白「ロの四」、黒六二、白「イの二」。要するに、黒は三五以下四子を取られては、白に四四の方と連絡されて黒が悪い。黒六五までの黒の結果の悪いのは、黒一九を三三に備へないためであつた。

白六六で六八も善い。

黒六九を「レの十」と、白「タの四」位が恰好。

フソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



一より七十まで

黒七一で百三五だと、白は「トの十一」とその一團の白を凌ぎつゝ、右邊の黒を攻め、そして白八三と行く順になると、白地は黒地に劣らなくなる。それで黒は七一一と、白を攻撃に出た。

黒七三を七四だと、白七三、黒「ヌの十」、白「トの十一」で、白は稍形に就く。

何時でも、黒「リ」の五だと、白は「チ」の二。また、黒「チ」の二だと、白は「リ」の五。

八十となつては、黒は、白を容易に攻められない。といふのは、白「イ」の七、黒「ロ」の四、白「ロ」の九といふ所に、白は一眼ある。その黒「ロ」の四を「ロ」の九だと、白は「ロ」の五。

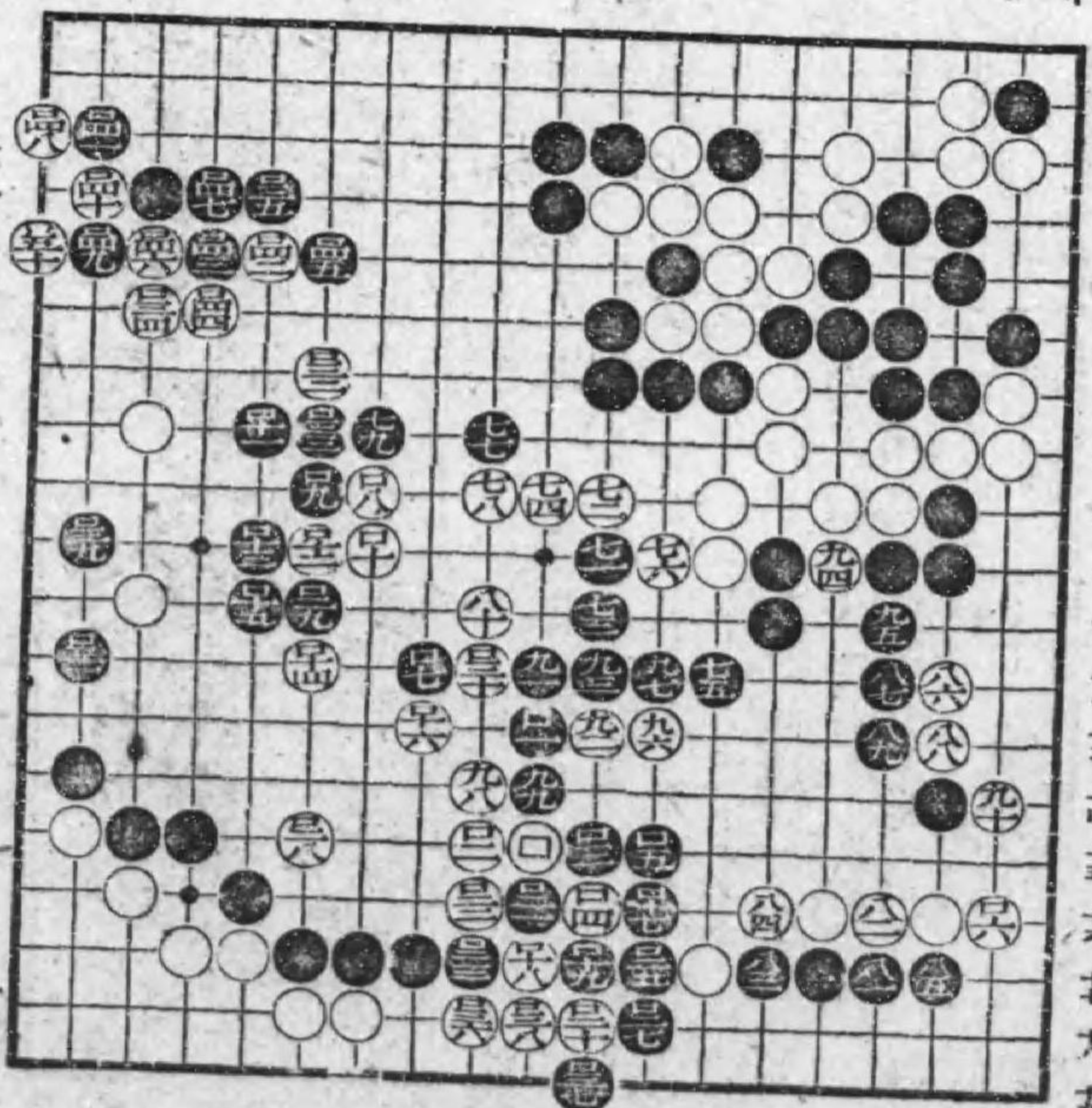
黒は九一と備へて白を攻めに行つたが、却つて九八まで、白に攻められてゐるやうな關係になつてゐる。

黒百十九を百二五だと、白は「トの十八」。

白百二十を百一一だと、黒は「トの十六」。

百五十となつて次に黒は無論「ツの四」に劫取りであるが、此碁は黒が劫立て多くして、白が敗である。

フソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



七十一より百五十まで

百二四劫とる(百四の處) 百二六粘ぐ(百二一の處)

名人 中村道碩

先安井算哲

黒十一で「への三」だと、白二の一子は取り切れる。即ち、白に十四より二一までと先手と活きられはしない。黒二三は一九がよい。その黒に白三二は、黒は三四。されば白二二は二九がよす。

黒二一を三七に飛び、白に四四と受けさせ、そして黒は「ヌの十七」もよす。

黒四七を四八だと、白は譜の如く五二より五六まで。黒四七を「ヌの十七」だと、白は四八。

黒五三を「ニの十八」、白「ハの十八」、黒「ニの十六」、白「ハの十七」、そして黒「ヌの十七」だと、白五三、黒「ホの十八」、白「への十五」、黒「ホの十六」、白「リの十五」に、黒「ルの十六」は、白は「への十三」。その黒「ルの十六」を「への十三」は、白は「ルの十五」。黒五九を「レの八」は、白は「ルの三」。

白七十、黒七一と換つたのは、黒七三を「タの五」、白七四、黒「ヨの五」だと、白は「カの五」で、七十が大いに働いてゐる。

七八まで、黒は六七、六九の二子を取られたが、七十、七一の交換は白に悪く、黒は上邊より中央にかけて大模様を得たから、黒の損ではない。

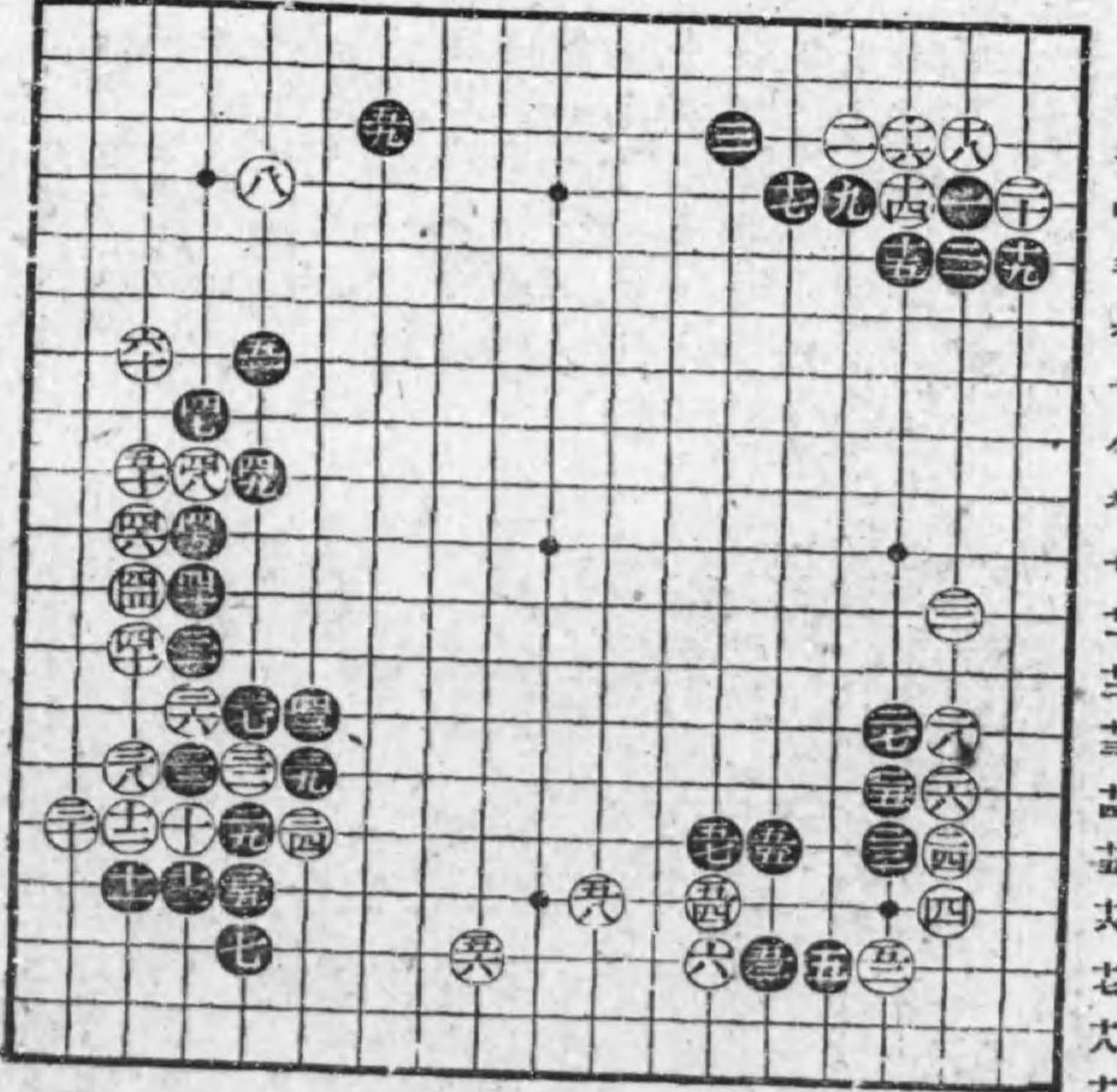
黒八一を「ルの十三」、白百十二、黒百五だと、白は八一。すると黒百六、白「ソの十七」となつて、黒は左下隅を小さく活きる外はない。

黒八三は、白九八、黒九九、白百、黒八三のとき、白に八八と切られることを先に防いだ。黒八三を八四、白「ソの八」、黒八三だと、白「タの七」で、黒が悪い。

黒が八五、九七と、大規模に中央経路に來たのは、左右に白に大きな地があるため、この一舉によつて勝敗を決しやうといふのである。

さて百十九となつて、白「トの十二」で活きるが、すると、黒は「への九」で勝局。その黒「への九」を「ヌの十三」だと、白「ヌの八」、黒「ワの十二」、白「リの七」。

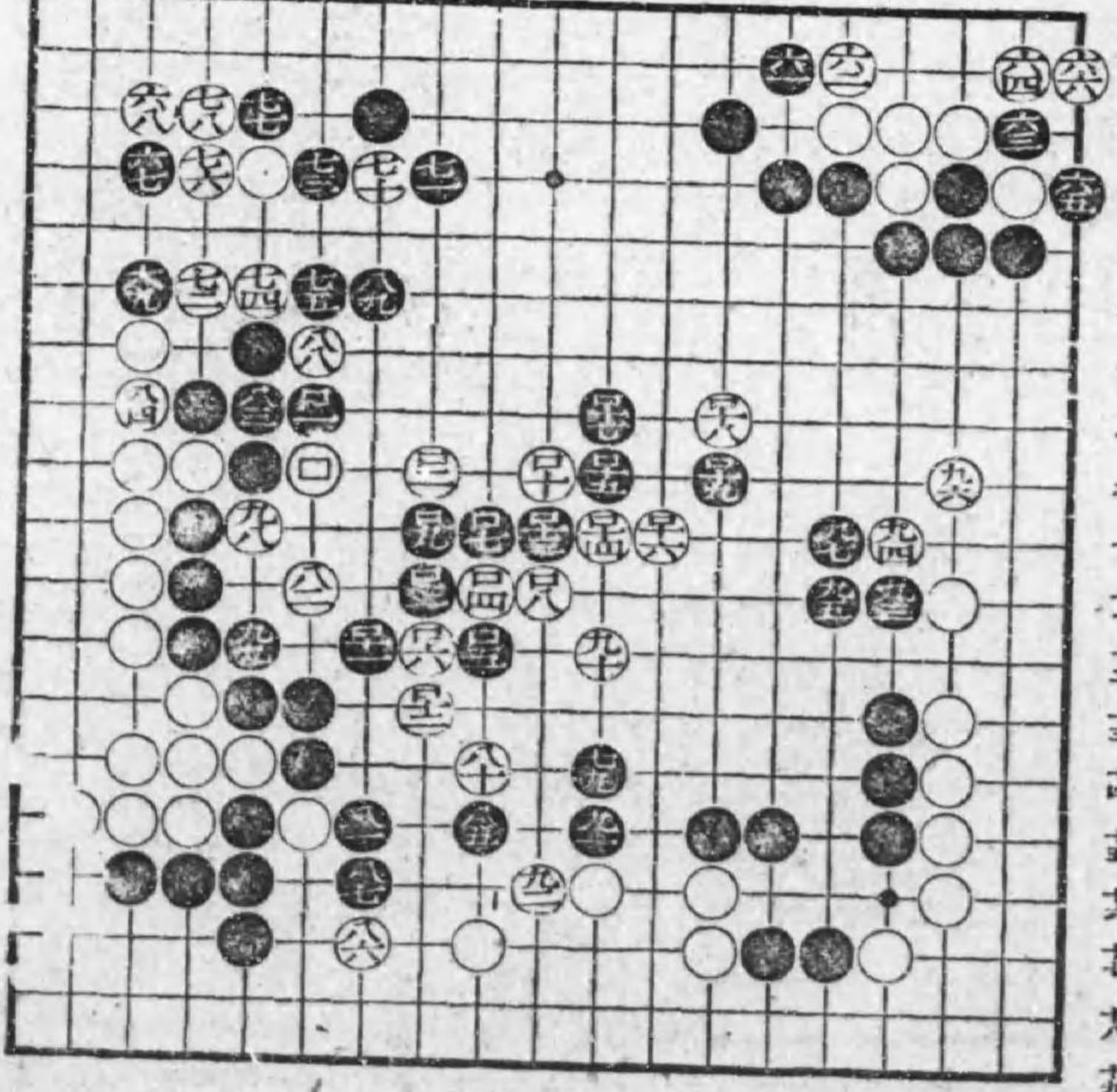
フソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



四二粘々(三三の處)

一より六十まで

フソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



六一より百十九まで

名人 中村道碩
先 安井算哲

黒十三を三九だと、白「ニの四」、黒「二六」、白十五となつて、白がよい。

白十六を二二だと、黒三九、白二六、黒三五となつて黒がよい。その黒三五に白十八は、黒は三六。さうなる白二六を二一だと、黒に二三と捲られて白が悪い。即ち白十六は、黒に十九に受けさせ、白二二、黒三九、白二六と行かうといふ意。

黒二一はかう三六まで、隅を棄て、外部に大なる勢力を張つてよいといふ意。想ふに一子打抜かれた白十六までを入れてその一隅の白は十五手、右上隅一帯の黒は十七手。すると、黒は二手多いが二手多いだけの成績は十二分に收めた。

黒三七は、「路廣く」ハの十二」でもよい。
黒五七を、五八だと、白は「ヲの十六」。

黒八七を八八だと、白九九、黒「ソの十四」、白九八となつて黒が悪い。

黒九七で百六だと、白は「トの十七」。そして黒「トの十六」、白百八、黒「ヘの十七」は、白は「チの十五」。

白百四を「トの十七」だと、黒は百十六、
黒百十五は次に「レの六」の目的。

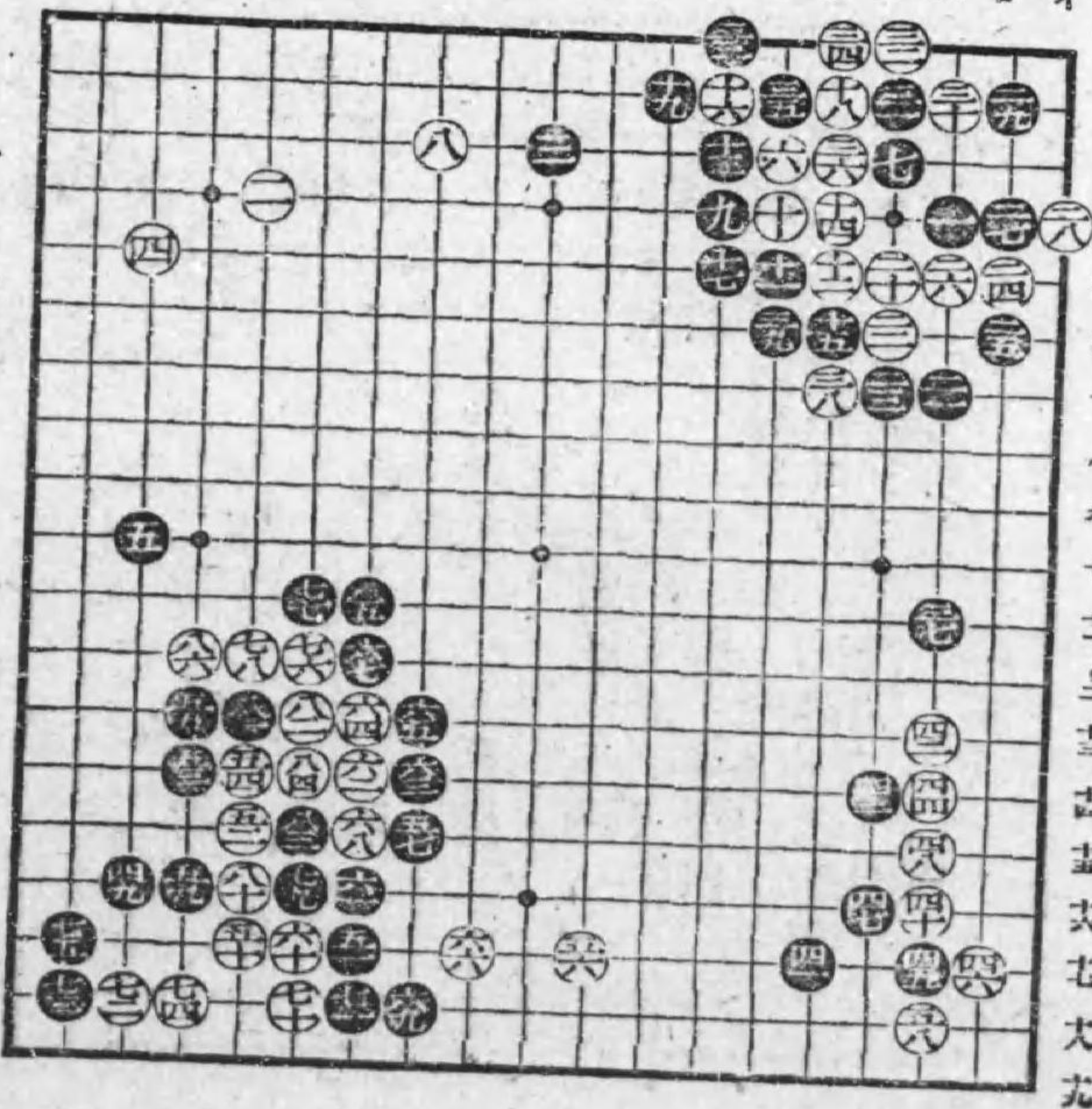
黒百二二は中央経路の一手であつて衆目の聚る所だが、百二二は「ワの五」もよい。その黒「ワの五」は、「タの八」の切りをも窺つてゐる。

白百三十を「カの一」だと、黒百三十、白「ヨの八」、黒「タの六」、白「レの六」、黒「カの五」となつて、白「カの七」は、黒「カの十」、白百三六、黒「カの六」となり、白が大敗。さうなる白「レの六」を「カの七」は、黒は「レの六」で、これまた白の大敗。それで、白は止むを得ず、黒に百三一と尖み込ませ、百三四と中央へ出るまでの變化を探つたのである。

白百三四を「ヨの三」、黒「ヨの二」、白百三七だと、黒は百三四。

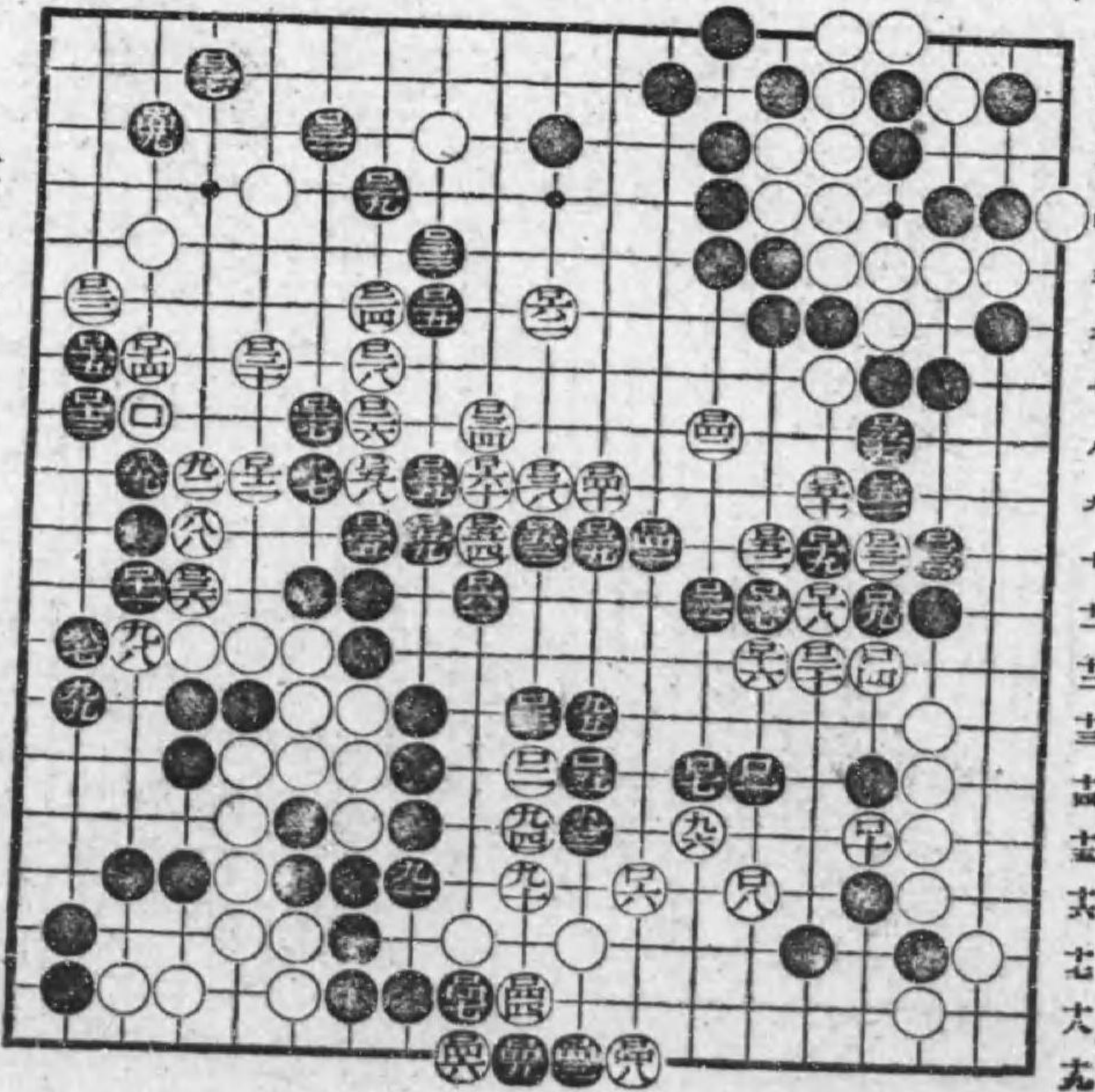
倍、百六二となつて細碁だが、黒は容易に敗けない。

フソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



一より八六まで

フソレタヨカワラルヌリチトヘホニハロイ



八七より百六二まで

百五六劫とる(百三二の處)

名人 中村道碩

先 安井算哲

白二四を三六だと、黒は「レの九」。

黒四一を四七だと、白は「ソの十五」。

黒四五で「ルの十七」へ行くことも悪くはない。

黒五一は、一と三三が堅固だから「への十一」がよ。

五一を「への十一」は、白五十に強く當る。

白五八は、黒五九で八二だと白「ニの十三」、黒八三、

白「ホの十三」、黒「ホの十六」、白七六までとなつて白が

よとの意。

白六二で六三だと、黒「トの四」、白「チの四」、そして

黒は「トの七」。

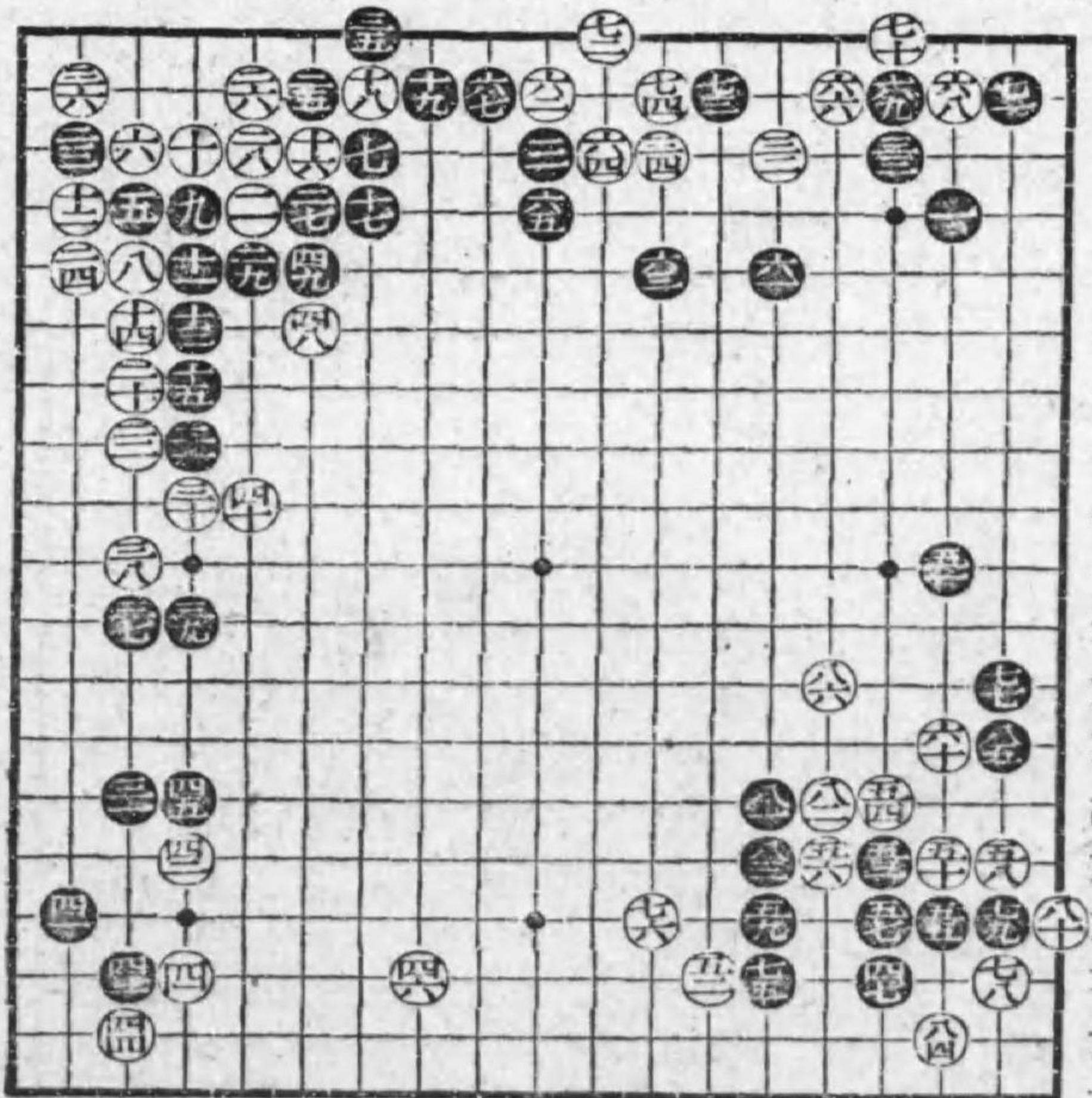
黒七五で「トの一」だと、白は「チの一」。その白「チの

一」を「トの三」だと、黒は「ルの一」。また、黒七五を「ホ

の十」だと、白「ホの十六」、黒「ホの十七」、白七五とな

つて黒が面白くな。

フツレタヨカワサルヌリチトヘホニハロイ



一より八六まで

黒八七は、九二に飛ぶがよ。

黒九九、百一、の要領は、今日と變りはない。

白百八は、黒「ヨの十五」、白「ヨの十六」、黒「カの十

五」、白「ワの十六」、黒「ワの十五」、白「チの十五」、黒

「ヲの十四」と、黒に來られると、下邊の白地は制限さ

れ、百七以下の黒は連絡、また、黒は「カの十」と中央に

地に拓することなども出来るため。

黒百十三で「ホの三」、白「への二」、黒「への四」だと、

白「への三」、黒「への四」、白「ロの三」となる黒の損が大

き。

黒百十九は、「への八」も悪くはない。

黒百二一を「ヌの九」だと、白は「リの十一」。

白百三六を「チの十」、黒百三七だと、白は收束が澁滯

し手間取る。百三六、百三八の軽い收束に、道碩先生の

妙諦が偲ばれる。

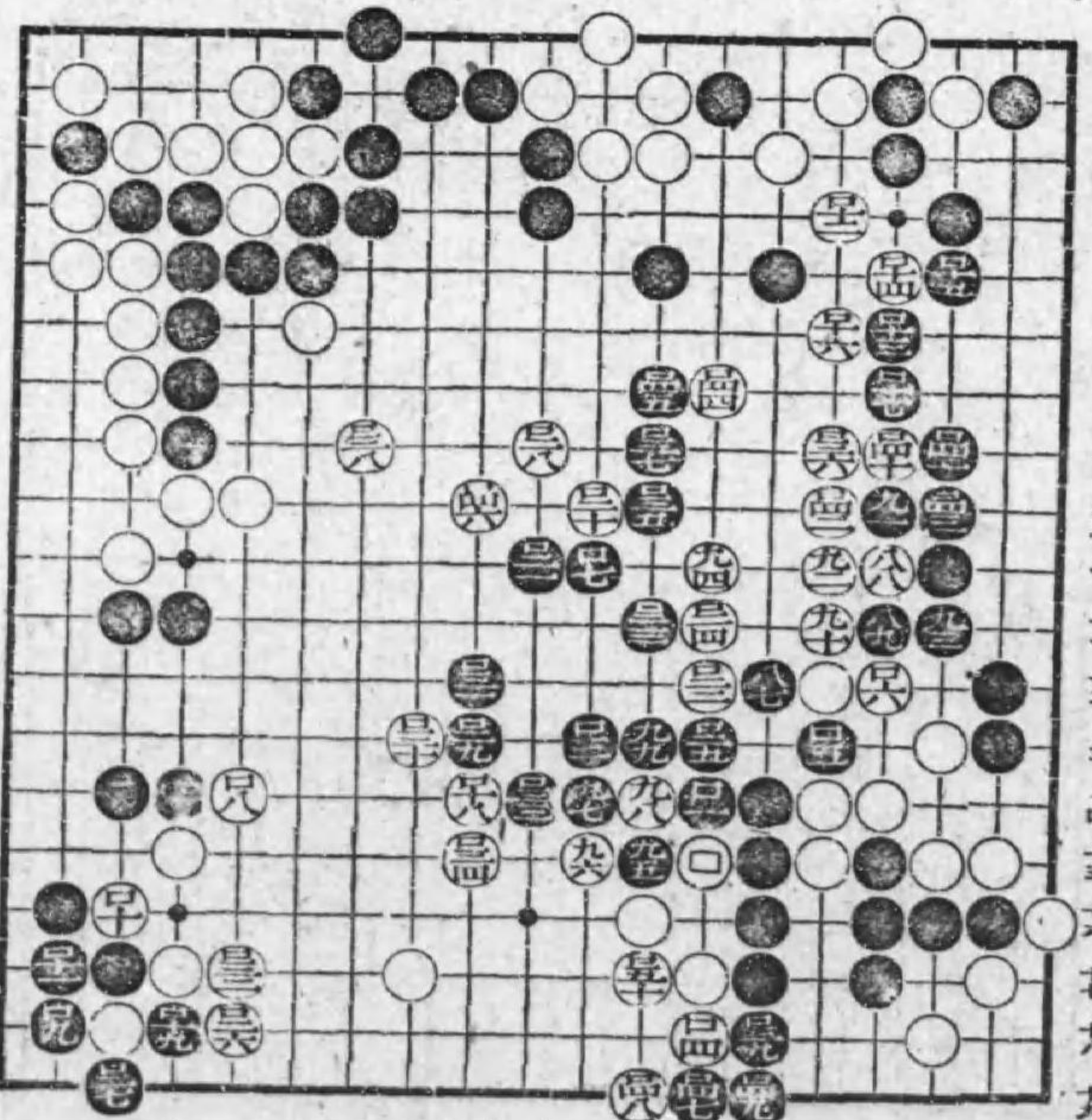
白百五十となつて、黒には「ワの十三」、または、「ヨの

十九」と行つて白が「カの十九」に強硬に來るか或は「カ

の十八」と弛めるかといふ所に勝敗はあるが、本局は黒が

勝つのは容易ではない。

フツレタヨカワサルヌリチトヘホニハロイ



八七より百五十まで